

八尾市

八 尾 南 遺 跡

—大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第1分冊（遺構編）

2008年3月

財団法人 大阪府文化財センター

八尾市

八 尾 南 遺 跡

一大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

第1分冊（遺構編）

財團法人 大阪府文化財センター



弥生時代後期造構面（第3面 東から）



第3面 堅穴建物 6 検出状況（北西から）



第3面 竪穴建物9・10検出状況（北西から）



竪穴建物9・10断面（東から）

巻頭図版 4



堅穴建物 9 壁材検出状況（北から）



堅穴建物 9 壁溝内横木検出状況（西から）



堅穴建物 9 梯子検出状況（北から）



堅穴建物 9 中央土坑検出状況（東から）



流路 1 出土土器集合



堅穴建物 3 排水溝内出土 絵画土器（竜）



谷 2 出土絵画土器（意匠不明）

卷頭図版 8



大和川右岸堤防 断面上部（三箇用水樋撤去に伴う）（東から）



大和川右岸堤防 断面下部（三箇用水樋撤去に伴う）（北東から）

序 文

本書で報告いたします発掘調査は、大和川高規格堤防建設に先立って行われたものです。

八尾南遺跡は旧石器時代から中世にかけての複合集落で、大阪府八尾市に所在し、奈良盆地から大阪平野に流れる現大和川と北流する石川との合流地点の下流に位置し、現大和川以北に広がっています。

大阪市営地下鉄谷町線八尾南駅駅舎の建設に伴って発見された純縁を持つ本遺跡は、西接する大阪市長原遺跡との関係が注目される遺跡でもあり、沖積作用によって幾重にも重なった地層によって各時代の造構・遺物が良好に検出できる中河内の標式的な遺跡としても知られています。

発掘調査地点は、羽曳野丘陵から北へ派生する台地北東の沖積低地に位置しており、東側は生駒山系の扇状地、北は旧大和川水系によって形成された沖積平野、南と西には丘陵ないしは台地が展開するなど複雑な地形環境の下に立地しております。こうした地形環境は、時代によっては洪水による頻繁な土砂の供給を促す要因ともなっており、その様子は発掘調査の結果からも追認されています。

今回の調査では、主に弥生時代前期～中期初頭の生産域、弥生時代後期の居住域と生産域、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての竪穴建物や方形周溝墓、古代末から中世前期にかけての掘立柱建物や井戸・土坑など、様々な遺構が検出され、また、それらに伴う土器・石器・木器・鉄器などの遺物が多数出土しました。

中でも弥生時代後期の居住域と生産域からなる集落は、その上部を覆っていた厚い洪积堆植物によつて保存されていたことを受け、タイムカプセルさながら、類を見ない良好な資料を提示してくれました。この内、居住域を構成する竪穴建物は、周囲に堤状の高まりを有しており、建物内部の構造物も良く遺存していたことから、当時の住まいの在り方を考える上で基準の一つとなるべき資料足り得るものと言えうことができるでしょう。さらに、竈をモチーフとしたと考えられる絵画土器の存在は、躍動感あふれる筆の運びによって当時の人々の精神世界を私たちの眼前に活き活きと示してくれています。

このほかにも、それぞれの時代の土地利用の変遷は、地域の歴史を解明するに当たって極めて重要な成果を数多く含んでいます。

最後に、調査に際して、国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所ならびに大阪府教育委員会、八尾市若林自治会をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

2008年3月

財團法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市若林三丁目に所在する八尾南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大和川河川改修（高規格堤防）事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査・遺物整理に関わる受託契約期間、および調査体制については以下のとおりである。調査・遺物整理に当たっては、隨時当財團職員の助言・協力を得た。

[発掘調査]

八尾南遺跡発掘調査（02－1工区）

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その3）

受託契約期間 平成14年3月21日～平成15年3月25日

調査体制 調査部長 玉井 功 調整課長 赤木克視

南部調査事務所長 渡邊昌宏

調査第二係長 寺川史郎 技師 岡本茂史 専門調査員 濱口洋美

八尾南遺跡（その2）発掘調査（02－2工区）

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その4）

受託契約期間 平成15年3月26日～平成16年3月25日

調査体制 調査部長 玉井 功 調整課長 赤木克視

南部調査事務所長 藤田憲司

調査第二係長 森屋美佐子 班長 岡本茂史 技師 島崎久恵

八尾南遺跡（その3）発掘調査（03－1工区）

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う船橋遺跡発掘調査（その5）

受託契約期間 平成16年2月27日～平成17年3月10日

調査体制 調査部長 玉井 功 調整課長 赤木克視

南部調査事務所長 藤田憲司

調査第三係長 森屋美佐子 班長 岡本茂史 嘴託 正岡大実

専門調査員 進藤智美（8月まで） 木村（旧姓 鶴山）まり（10月から）

[遺物整理]

八尾南遺跡遺物整理

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う八尾南遺跡遺物整理業務

受託契約期間 平成17年5月1日～平成18年3月10日

調査体制 調査部長 赤木克視 調整課長 田中和弘

南部調査事務所長 藤田憲司

調査第三係長 岡本茂史 技師 正岡大実 専門調査員 木村まり

八尾南遺跡 2 遺物整理

受託契約名 大和川改修（高規格堤防）事業に伴う八尾南遺跡 2 遺物整理業務

受託契約期間 平成18年6月1日～平成19年3月9日

調査体制 調査部長 赤木克祝 調整課長 田中和弘

南部調査事務所長 大野 煉

調査第三係長 岡本茂史 技師 正岡大実 専門調査員 木村まり

4. 03-1 工区の調査では微化石分析、その後の遺物整理では過去3年に及ぶ調査時に出土した種災・土壤資料についての分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

また、03-1 工区検出の中世土坑墓埋葬人骨についての分析・鑑定を大阪市立大学医学部解剖学第2教室の安部みき子氏に取り上げ後の洗浄・保存処理も含めて依頼したほか、02-2 工区出土木材の一部について徳島大学埋蔵文化財調査室の中原計氏、それ以外の樹種同定を財団法人 元興寺文化財研究所の木沢直子氏に依頼して実施した。

さらに、第3面出土土器の一部について、良好な炭化物の付着が認められたものについては、国立歴史民俗博物館炭素14年代測定グループに土器付着物の年代測定を実施頂いた。

それぞれの分析・測定結果については、本文中に記載している。

5. 本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所調査主任 立花正治が担当した。なお、本書巻頭図版8の写真は、堺市遠里小野橋南東の千両曲がりとも呼ばれる大和川砂洲上にて撮影したものである。本写真の撮影に当たっては、国土交通省大和川河川事務所ならびに同省堺出張所にご協力を頂いた。

6. 調査にあたっては、以下の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。

（敬称略・順不同）

国土交通省大和川河川事務所・同省堺出張所・八尾市若林自治会・八尾市教育委員会・財団法人 八尾市文化財調査研究会・財団法人 大阪市文化財協会・大阪府教育委員会

赤澤徳明・飯島義雄・石野博信・一瀬和夫・伊藤健司・太田国男・岡本淳一郎・岡本敏行・岡村 渉・小倉徹也・小黒智久・及川直彦・金闇 憲・河村恵理・桑野一幸・坂井秀弥・坂口 一・阪田育功・桜井美枝・白石太一郎・杉山拓己・杉山秀宏・高志こころ・高田恭一郎・高田健一・高萩千秋・田中清美・田村隆太郎・都出比呂志・寺井 誠・土井孝之・中島直樹・西井 亨・根鈴智津子・橋本高明・原田昌則・春成秀爾・久田正弘・藤田徹也・松井一明・松岡良憲・松尾 実・丸山真史・沼 嶋・物部茂樹・森岡秀人・森下哲也・森屋直樹・矢口裕之・山上 弘・山田隆一・山田幸弘・若狭 徹

7. 本書の執筆は、岡本茂史・森屋美佐子・桑野一幸・正岡大実・木村まりが担当し、文責は各文末に記している。なお、本書の編集は、森屋・正岡が行った。

8. 本調査に関わる出土遺物・実測図・写真・カラースライド・デジタルデータ等は財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　　例

1. 現地調査にあたっては、当初、国土地標軸（使用測地系「日本測地系〔改正前〕」）第VI座標系を基準に、「(財)大阪文化財センター 発掘調査マニュアル」（1988）に定めた地区割法に準拠していくが、調査途中で『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003）が導入されたため、その内容に準拠した。その詳細については第Ⅲ章第1節に記述している。
2. 本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土地標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はN 6° 27' Wに、真北はN 0° 13' Eに偏位する。また、遺構図に記載した座標値はmで表示し、単位は省略して数値のみ示している。
3. 標高については、すべて東京湾平均海面（T.P.）+値を使用しているが、本文の記述および遺構図では、特に断りのない限り「T.P.+」の記載を省略している。
4. 本書で用いる遺構番号は、遺構の種類とは関係なく、調査時において検出順に付与した1からの連番号であり、遺構の種類の前にアラビア数字の番号を付して「10井戸」などと表記した。また、掘立柱建物やピット列など、すでに番号が付与された複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物1」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表し、調査時における各遺構の番号については、遺構図中に個別に表示している。また、整理作業の過程において、遺構番号を新たに付与した遺構もあり、発掘調査時の遺構番号とは必ずしも一致しない。遺構の対照表は第2分冊の巻末に示している。
5. 遺構挿図のうち、平面図に示した断面位置については、断面ラインと断面の向きを示す矢印が交差する箇所を断面の始点としている。
6. 各種遺構・遺物の記述に当たっては、規模等の数値について、遺構がm単位、遺物がcm単位を基準としている。なお、それぞれの数値にあたっては最小で小数点第2位としている。
7. 遺構実測図は、必要に応じて出土遺物を傍線にて引き出して表現している。それぞれの縮尺は土器・石器を15分の1、木器を20分の1を基準としている。これ以外の縮尺を用いた場合は各挿図内において縮尺を明示した。
8. 遺物番号は、挿図・写真ともに一致する通し番号である。
9. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、基本的に土器類を4分の1とし、大型の土器類や石器・木器等その他の遺物については、各遺物の寸法に応じて適宜縮尺を変更した。
10. 遺物実測図に用いたトーンは2種類あり、赤色が赤色顔料の塗布を、灰色が異種胎土及び被籠土器

の編籠状圧痕の存在をそれぞれ示している。

11. 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版 標準土色帖』2003年版を基準としている。

12. 本書に掲載した図面の大部分はデジタルデータによる出稿を行っている。データの作成にあたっては、遺構図に関しては航空測量の成果品であるDXF形式のファイルデータをIllustrator ver. 10及びCS2を用いてEPS形式に変換し、調整を加えた上で、AI形式で保存している。最終的な編集は、写真図版及び挿図の一部を除き、すべてInDesign CS2を用いて行い出稿した。

遺構・遺物の観察・記述に当たっては、下記の文献を参照した。編年観等についてもこれに準拠している。

松井 章編 2003『環境考古学マニュアル』同成社

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

寺沢 薫・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社

(財)大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』

若林邦彦 1999『河内平野南遺跡群における弥生後期～古墳前期土器の変遷』

『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
奈良国立文化財研究所編 1993『木器集成図録 近畿原始編』

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

本文目次

巻頭図版 1 ~ 8

序 文
例 言
凡 例
目 次

第1分冊（遺構編）

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査・整理作業の経過	2
第Ⅱ章 位置と環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3節 岐往の調査成果	10
第Ⅲ章 調査の方法	
第1節 現地調査	20
第2節 整理作業	22
第Ⅳ章 調査の概要と層序	
第1節 調査の概要	23
第2節 基本層序と遺構面の認識	24
第Ⅴ章 検出遺構の記録	
第1節 第1面	34
1. 遺構面の概要	2. 遺構
第2節 第2面	63
1. 遺構面の概要	2. 古代の遺構
3. 古墳時代中・後期の遺構	4. 弥生時代末から古墳時代初頭の遺構
第3節 3層中検出遺構	162
1. 遺構面の概要	2. 遺構
第4節 第3面	174
1. 遺構面の概要	2. 遺構
第5節 第3 b面	272
1. 遺構面の概要	2. 遺構
第6節 第4面	311
1. 遺構面の概要	2. 遺構

第7節 第4b～6面	312
1. 基本層序と遺構面の認識	
2. 遺構面の概要	
第8節 下層確認調査	317
1. 下層確認調査の概要	
2. 基本層序と遺物	

第2分冊（遺物・分析・総括編）

第VI章 出土遺物の記録

第1節 土器

1. 第1面〔古代～中世〕
2. 第2面〔古代～古墳時代中期・弥生時代後期末～古墳時代初頭〕
3. 3層中検出遺構〔弥生時代後期末〕
4. 第3面〔弥生時代後期〕
5. 第3b面〔弥生時代後期〕
6. 第4面以下〔弥生時代前期～中期・繩紋時代〕

第2節 石器

第3節 木製品

第4節 土製品・鉄製品・石製品

第VII章 自然科学分析

第1節 分析の目的と概要

第2節 繩紋～弥生時代の形成地層の微化石分析

第3節 第3面堅穴建物9の堆積地層分析

第4節 弥生～古墳時代遺構出土種実の同定

第5節 中世土坑墓出土人骨の分析

第6節 八尾南遺跡出土木製品の樹種

第7節 大阪府八尾南遺跡出土試料の¹⁴C年代測定

第VIII章 総括

第1節 遺跡の構造変遷

第2節 弥生時代後期の堅穴建物について

引用・参考文献

付編 大和川右岸堤防の調査－若林地区三箇用水樋門撤去に伴う－

報告書抄録

第3分冊（写真図版編）

目次

写真図版

挿図目次

- 図1 地形分類図
図2 地形区分図
図3 八木酒造会社の地形分類図
図4 地形区分図
図5 施工用地図
図6 地区別の方法
図7 (02-1・02-2・03-1) 工区 地区別図
図8 基本地図(南北) 横式図
図9 基本地図(東西) 横式図
図10 第1号 全体図
図11 縦立地図22 ピット12-20 平・断面図
図12 縦立地図22 平・断面図
図13 ピット7-11 平・断面図
図14 井戸1・2 平・断・立面図
図15 井戸3・4 平・断・立面図
図16 井戸5・6 平・断面図
図17 第1号断面図
図18 断面図
図19 壁面1-14 平・断面図
図20 壁面1-5・8 平・断面図
図21 壁面12-13 上段 7-10 平・断面図
図22 1坑14 平・断面図
図23 7坑13-15・16-18 平・断面図
図24 土坑19-22 平・断面図
図25 土坑23-26 平・断面図
図26 3坑29-31 平・断面図
図27 1坑20-24 平・断面図
図28 7坑25-36 ピット4 以降1 平・断面図
図29 土堀壁地主坑1-2 平・断面図
図30 2段 5 平・断面図
図31 第2号 全体図
図32 井戸1・7 平・断面図
図33 井戸4-8 平・断面図
図34 井戸9-10 通称土坑状況図
図35 古井1 平・断面図
図36 古井2 平・断面図
図37 古井3 平・断面図
図38 古井3 断面図
図39 7坑27-29 平・断面図
図40 7坑27-29 31 平・断面図
図41 土堀壁29-30 土壌性的土坑3-5 平・断面図
図42 4号水槽壁11-13 平・断面図
図43 振立地図23 平・断面図
図44 井戸5 平・断面図
図45 施工基準1 平・断面図
図46 施工基準2 平・断面図
図47 施工基準3 平・断面図
図48 施工基準4 平・断面図
図49 (八段式5号機) 半、断面図
図50 周辺地図 5・6 平・断面図
図51 周辺地図7 (八段式6号機) 平面図
図52 地図第5号 平・断面図
図53 施工基準10 断面図
図54 施工基準10 通称土上状況図
図55 周辺地図10 平面図
図56 周辺地図11-12-14-16 平面図
図57 合成1号1-2 平・断面図
図58 初年度高さ 平・断面図
図59 施工基準1 通称土上状況図
図60 周辺地図5-17-18 半・断面図
図61 周辺地図5-17-18 土坑46 断面図
図62 土堀壁19 平・断面図
図63 土堀壁20 平面図
図64 土堀壁21 平面図
図65 土堀壁22 平面図
図66 土堀壁23 平面図
図67 土堀壁24 平・断面図
図68 土堀壁25 平・断面図
図69 土堀壁26 地主坑1 平・断面図
図70 土堀壁27-29 平・断面図
図71 土堀壁29-30 3号機 断面図
図72 土堀壁29-30 4号機 断面図
図73 土堀壁29-30 5号機 断面図
図74 土堀壁27-29 平面図
図75 周辺地図29 断面図
図76 周辺地図29 通称土状況図
図77 土堀壁30-31 3号機 断面図
図78 土堀壁30-31 4号機 断面図
図79 土堀壁30-31 5号機 断面図
図80 土堀壁31-32 断面図
図81 土堀壁31-32 断面図
図82 土堀壁32-33 断面図
図83 土堀壁32-33 3号機 断面図
図84 土堀壁32-33 4号機 断面図
図85 土堀壁32-33 5号機 断面図
図86 土堀壁34-35 断面図
図87 土堀壁34-35 3号機 断面図
図88 土堀壁34-35 4号機 断面図
図89 土堀壁34-35 5号機 断面図
図90 土堀壁34-35 6号機 断面図
図91 土堀壁34-35 7号機 断面図
図92 土堀壁34-35 8号機 断面図
図93 土堀壁34-35 9号機 断面図
図94 土堀壁34-35 10号機 断面図
図95 土堀壁34-35 11号機 断面図 (1)
図96 土堀壁34-35 12号機 断面図 (2)
図97 土堀壁34-35 13号機 断面図 (3)
図98 土堀壁34-35 14号機 断面図 (4)
図99 土堀壁34-35 15号機 断面図 (5)
図100 土堀壁34-35 16号機 断面図 (6)
図101 土堀壁34-35 17号機 断面図
図102 土堀壁34-35 18号機 断面図
図103 土堀壁34-35 19号機 断面図
図104 土堀壁34-35 20号機 断面図
図105 土堀壁34-35 21号機 断面図
図106 土堀壁34-35 22号機 断面図
図107 土堀壁34-35 23号機 断面図
図108 土堀壁34-35 24号機 断面図
図109 土堀壁34-35 25号機 断面図
図110 土堀壁34-35 26号機 断面図
図111 3層中核地盤構造分部
図112 3層柱脚構造 分部 断面図
図113 地下柱脚構造 分部 断面図
図114 振立柱地盤 分部 断面図
図115 ピット30-43 土坑底 分部 断面図
図116 高路1 通称出土状況 (1)
図117 高路1 通称出土状況 (2)
図118 高路1 通称出土状況 (3)
図119 高路1 通称出土状況 (4)
図120 土坑底 分部 断面図
図121 3号機 断面図
図122 4号機壁1 保険池 平・断面図
図123 4号機壁2 土上部 平面図
図124 5号機壁1 脱落壁等機械取出状況
図125 5号機壁2 土柱穴 土坑 平・断面図
図126 5号機壁3 土柱 断面図
図127 6号機壁1 排水溝 平・断・立面図
図128 6号機壁2 平面図
図129 6号機壁3 断面図
図130 6号機壁4 脱落壁等機械取出状況
図131 7号機壁1 土柱穴 土坑 平・断面図
図132 7号機壁2 土柱 平・断面図
図133 7号機壁3 土柱 平・断面図
図134 7号機壁4 土柱 平面図
図135 8号機壁1 断面図
図136 8号機壁2 土柱穴 土坑 平・断面図
図137 8号機壁3 8号機壁4 断面図
図138 8号機壁5 通称土上状況図
図139 8号機壁6 断面図
図140 8号機壁7 断面図
図141 8号機壁8 脱落壁等機械取出状況
図142 8号機壁9 土柱 通称出土状況図
図143 8号機壁10 土柱 平面図
図144 8号機壁11 断面図
図145 8号機壁12 土柱穴 土坑 平・断面図
図146 8号機壁13 排水溝 平面図
図147 8号機壁14 通称土上状況図
図148 8号機壁15 平面図
図149 8号機壁16 通称土上状況図
図150 8号機壁17 土柱 平面図
図151 8号機壁18 外壁土坑2・3 通称出土状況図
図152 8号機壁19 外壁土坑1-3 平・断面図
図153 8号機壁20 外壁土坑4-5・6 通称出土状況図
図154 8号機壁21 外壁土坑4-6 平・断面図
図155 8号機壁22 土柱 平面図
図156 8号機壁23 土柱穴 土坑 平・断面図
図157 8号機壁24 脱落壁等 平面図
図158 8号機壁25 平面図
図159 8号機壁26 断面図
図160 8号機壁27 斜面図
図161 8号機壁28 土柱穴 土坑 平・断面図
図162 8号機壁29 土柱穴 土坑 平面図
図163 8号機壁30 土柱穴 土坑 平面図
図164 8号機壁31 中央穴柱 穴水溝 平・断・立面図
図165 8号機壁32 各柱穴 穴水溝 平面図
図166 8号機壁33 各柱穴 穴水溝 平面図
図167 8号機壁34 各柱穴 穴水溝 断面図

図169	堅穴埴物9~10奥尻見、鹿山田
図170	堅穴埴物10 各施文 疎底型
図171	堅穴埴物10 席蓋スッップ 平・削・直乳頭
図172	堅穴埴物9 南寄り a枚・堅穴埴物10堅口 a枚 墓物山口状況図
図173	井戸9 塗付9~49 平・堅面陶
図174	井戸10 平・堅面陶
図175	井戸12 平・堅面陶
図176	堅穴埴物1 割付 墓物山口状況図
図177	井戸29~31 割付3層 平・堅面陶
図178	土器35~36 割付3層 平・堅面陶
図179	堅5~46 平・堅面陶
図180	塗付坚面陶
図181	塗54 平・堅面陶
図182	斧2 平・堅面陶
図183	斧3 割付 墓物山口状況図
図184	斧5 左岸 墓物山口状況図
図185	斧5 右岸 内面附住城跡 墓物山口状況図
図186	堅3 3層付 墓物山口状況図
図187	堅3 3層付 墓物山口状況図
図188	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図189	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図190	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図191	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図192	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図193	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図194	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図195	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図196	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図197	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図198	堅3 3層付 c~f層 墓物山口状況図
図199	第3号廻 今井伝
図200	平均埴物1~2 平面陶
図201	掘立柱埴物1 平・堅面陶
図202	掘立柱埴物2 平・堅面陶
図203	掘立柱埴物3 平・堅面陶
図204	堅立柱埴物4 平・堅面陶
図205	堆立柱埴物5 平・堅面陶
図206	堅立柱埴物6 平・堅面陶
図207	堅立柱埴物7 平・堅面陶
図208	堅立柱埴物8 平・堅面陶
図209	堅立柱埴物9 平・堅面陶
図210	堅立柱埴物10 平・堅面陶
図211	堅立柱埴物11 平・堅面陶
図212	堅立柱埴物12 平・堅面陶
図213	堅立柱埴物13 平・堅面陶
図214	堅立柱埴物14 平・堅面陶
図215	堅立柱埴物15 下・堅面陶
図216	堅立柱埴物16 平・堅面陶
図217	堅立柱埴物17 平・堅面陶
図218	堅立柱埴物18 平・堅面陶
図219	堅立柱埴物19 平・堅面陶
図220	堅立柱埴物20 平・堅面陶
図221	堅立柱埴物21 平・堅面陶
図222	堅立柱埴物22 平・堅面陶
図223	堅立柱埴物23 平・堅面陶
図224	堅立柱埴物24 平・堅面陶
図225	堅立柱埴物25 平・堅面陶
図226	堅立柱埴物26 平・堅面陶
図227	堅立柱埴物27 平・堅面陶
図228	堅立柱埴物28 平・堅面陶
図229	堅立柱埴物29 平・堅面陶
図230	門戸12 平・堅面陶
図231	溝65 平・堅面陶
図232	上挖付1~86~88 平・堅面陶
図233	第4面 全体図
図234	第4~5面 全体図
図235	第5面 全体図
図236	第5~6面 全体図
図237	第6面 全体図
図238	下層床泥壁 基本序構造図

表 目 次

表1 鹿の堅立床室(1)
表2 既往の堅立床室(2)
表3 既往の海窓床室(3)

表4 既往の調査実績(4)
表5 既往の高窓実績(5)

挿 図 目 次 (第2分冊)

図1	井戸2~4出土土器
図2	壺1~4・5~11・15出土土器
図3	壺14~15出土器(1)
図4	塗14~15出土器(2)
図5	セラミック1~4 叠
図6	土器9~12・16~19出土土器
図7	土器9(1)出土土器(1)
図8	土器9(1)出土土器(2)
図9	土器19~21出土土器
図10	土器堅30~32・36~37出土
図11	土器堅41~43・47~49出土
図12	ピッタ1~3・5~6 白土器
図13	1~2 剥離土器
図14	池子1 号分類器(1)
図15	出土土器分類器(2)
図16	鑿25出土土器
図17	井戸6~7出土土器
図18	井戸8~10出土土器(1)
図19	井戸8~10出土土器(2)
図20	古窯1~2 出土土器
図21	古窯3 山土土器
図22	既往28出土土器
図23	既往31出土土器
図24	既往32出土土器
図25	既往33出土土器
図26	既往34出土土器
図27	既往35~36出土土器
図28	既往37~38出土土器
図29	既往39~40出土土器
図30	既往41~42出土土器
図31	既往43~44出土土器
図32	既往45~46出土土器
図33	既往47~48出土土器
図34	既往49~50出土土器
図35	既往51~52出土土器
図36	既往53~54出土土器
図37	既往55~56出土土器
図38	既往57~58出土土器(1)
図39	既往59~61出土土器(2)
図40	既往62~28出土土器(3)
図41	既往63~64出土土器(4)
図42	既往65~66出土土器(5)
図43	既往67~29出土土器(3)
図44	既往68~29出土土器(4)
図45	既往69~30~32出土土器(5)
図46	既往70~33~35出土土器
図47	土器堅33~34出土土器
図48	土器37~38出土土器
図49	土器17~18~20既往上土器
図50	土器19~22~26~29既往上土器
図51	既往1~32既往出土土器
図52	既往33既往出土土器
図53	既往34既往出土土器
図54	既往35既往出土土器(2)
図55	既往36既往出土土器(3)
図56	既往37既往出土土器(4)
図57	既往38既往出土土器(5)
図58	既往39既往出土土器(6)
図59	既往40既往出土土器(7)
図60	既往41既往出土土器(8)
図61	既往42既往出土土器(9)
図62	既往43既往出土土器(10)
図63	既往44既往出土土器(11)
図64	既往45既往出土土器(12)
図65	既往46既往出土土器(13)
図66	既往47既往出土土器(14)
図67	既往48既往出土土器(15)
図68	既往49既往出土土器(16)
図69	既往50既往出土土器(17)
図70	土器37~38~43~44~47~48~53~54既往土器
図71	土器49既往出土土器
図72	土器50既往出土土器(1)
図73	土器51既往出土土器(2)
図74	土器52既往出土土器(3)

- 国 255 太村の基本方向と基準断面
 国 256 整地植物 9 (改修地盤断面) 畜牧地部施設の倒壊と水取り
 国 257 里地植物 9 (改修地盤断面) 施設内畜舍施設の倒壊と水取り
 国 258 小土堤 9 (改修地盤断面) の復旧、分段法、注意
 国 259 大和田右岸堤防地盤断面
 国 260 人間の活動による地盤変動
 国 261 その時代を反映した地盤変動 (上)
 特別時代後期小糸造構造発見 (下)
 国 262 弥生時代後期小糸造構造発見 (上)、記号依存跡川上付近

- 国 263 佐佐時代後期木から古墳時代初期地盤構造図、深澤図
 国 264 佐佐時代後期木一古墳時代中期須須頭大不法墓西丘グラフ
 国 265 中世西院、空塗・近世須須頭古墳、深澤図
 国 266 里堤、山溝 (外山土坑) を有する遺物 (1)
 国 267 里堤、山溝 (外山土坑) を有する遺物 (2)
 国 268 里堤、山溝 (外山土坑) を有する遺物 (3)
 国 269 里堤、山溝 (外山土坑) を有する遺物 (4)
 国 270 収集の調査地点との比較
 国 271 大和田右岸堤防断面

写 真 図 版 目 次

- 図版1 通稿
 1 02-1 開墾区 基本事業 (1~5層)
 2 02-1 開墾区 基本事業 (1~5層)
 図版2 通稿
 1 02-2 開墾区西了 第1回全景
 2 02-2 開墾区西了 第1回全景
 図版3 通稿
 1 02-2 開墾区北半開 基本事業
 2 02-2 開墾区北半開 基本事業
 図版4 通稿
 1 02-1 開墾区北半開 第1回全景
 2 02-1 開墾区北半開 第1回全景
 国版5 通稿
 1 振立柱地盤22
 2 ピット柱列 (ピット7~11)
 図版6 通稿
 1 月戸3 離都状況
 2 月戸3 戸戸顕
 3 月戸3 断面
 国版7 通稿
 1 月戸1 遺物
 2 月戸1 葉物出土状況
 3 月戸2 断面
 国版8 通稿
 1 土塁1
 2 土塁1 入戸後出状況
 3 土塁2
 国版9 通稿
 1 02-2 河畔区 降低作業 (度6~10)
 2 漢
 国版10 通稿
 1 漢1 葉物出土状況
 2 漢1 狂候株状況
 3 漢2 断面
 国版11 通稿
 1 漢14 通稿
 2 漢14 沢、画面
 国版12 通稿
 1 土地15
 2 土地22
 3 土地16
 国版13 通稿
 1 土地29
 2 土地31
 3 土地31 葉物出土状況
 国版14 通稿
 1 上忍野(上)坑2 通路部出土状況
 2 下坑2 通路部出土状況
 国版15 通稿
 1 02-2 河畔区東半 第2回全景
 2 02-1 河畔区北半 第2回全景
 国版16 通稿
 1 02-1 河畔区北半 第2回全景
 2 02-2 河畔区西半 第2回全景
 国版17 通稿
 1 02-2 河畔区東半 第2回全景
 2 02-1 河畔区北半 第2回全景
 国版18 通稿
 1 土壁1
 2 土壁2
 3 土壁3
 国版19 通稿
 1 月戸6 通路部出土状況
 2 月戸7 通路部出土状況
 国版20 通稿
 1 月戸8 断面
 2 月戸8 葉物出土状況
 国版21 通稿
 1 古墳1
 2 古墳1 東側周縁葉物出土状況
 国版22 通稿
 1 古墳2
 2 古墳2 西側周縁葉物出土状況
 国版23 通稿
 1 古墳3 断面
- 2 古墳3 北半
 国版24 通稿
 1 古墳3 南面周縁断面
 2 土坑4 65
 国版25 通稿
 1 北側前土坑5
 2 土部前土坑4
 3 土坑3
 国版26 通稿
 1 暫次建物1
 2 暫次建物1 断面
 3 暫次建物1~3
 4 暫次建物1~3
 5 暫次建物34~桂穴4
 国版27 通稿
 1 暫次建物11
 2 暫次建物11 断面
 3 暫次建物11~桂穴1
 4 暫次建物11~桂穴2
 5 暫次建物11~桂穴3
 国版28 通稿
 1 暫次建物11~桂穴3
 2 暫次建物11~桂穴4
 3 暫次建物11~桂穴5
 4 暫次建物11~桂穴6
 5 暫次建物11~桂穴7
 国版29 通稿
 1 02-1 河畔区北半 第3回全景
 2 暫次建物1~3
 3 暫次建物1~3
 国版30 通稿
 1 暫次建物1~3
 2 暫次建物1~3 断面
 3 暫次建物1~3
 国版31 通稿
 1 月戸5 葉物出土状況
 2 月戸5 断面
 国版32 通稿
 1 月戸6 葉物出土状況
 2 月戸6 断面
 3 月戸6 断面
 国版33 通稿
 1 月戸7 断面
 2 月戸7 断面
 3 月戸7 断面
 国版34 通稿
 1 月戸8 断面
 2 月戸8 断面
 3 月戸8 断面
 国版35 通稿
 1 月戸9~10
 2 月戸9~10 断面
 3 月戸9~10 断面
 国版36 通稿
 1 初築段27
 2 初築段27 北側周縁葉物出土状況
 3 初築段27 西側周縁葉物出土状況
 4 草壁1 訓記状況
 5 磁器1
 国版37 通稿
 1 月戸9~10
 2 月戸9~10 断面
 3 月戸9~10 断面
 国版38 通稿
 1 月戸10~11
 2 月戸10~11 断面
 3 月戸10~11 断面
 国版39 通稿
 1 土器1
 2 土器1~2 断面
 3 土器1~2 断面
 国版40 通稿
 1 土器1~2 断面
 2 土器1~2 断面
 3 土器1~2 断面
 国版41 通稿
 1 土器1~2 断面
 2 土器1~2 断面
 3 土器1~2 断面
 国版42 通稿
 1 土器1~2 断面
 2 土器1~2 断面
 3 土器1~2 断面
 国版43 通稿
 1 土器1~2 断面
 2 土器1~2 断面
 3 土器1~2 断面
 国版44 通稿
 1 暫次建物1 西側周縁
 2 暫次建物1 断面
 3 暫次建物1~3
 国版45 通稿
 1 暫次建物1~3
 2 暫次建物1~3 断面
 3 暫次建物1~3
 国版46 通稿
 1 02-2 河畔区東半
 2 暫次建物2 断面
 3 暫次建物2~3
 国版47 通稿
 1 暫次建物2~3
 2 暫次建物2~3 断面
 3 暫次建物2~3
 国版48 通稿
 1 暫次建物3~4
 2 暫次建物3~4 断面
 3 暫次建物3~4
 国版49 通稿
 1 暫次建物3~4
 2 暫次建物3~4 断面
 3 暫次建物3~4
 国版50 通稿
 1 暫次建物4~5
 2 暫次建物4~5 断面
 3 暫次建物4~5
 国版51 通稿
 1 暫次建物4~5
 2 暫次建物4~5 断面
 3 暫次建物4~5
 国版52 通稿
 1 暫次建物5~6
 2 暫次建物5~6 断面
 3 暫次建物5~6
 国版53 通稿
 1 02-2 河畔区東半 第3回全景
 2 暫次建物5~6 断面
 3 暫次建物5~6
 国版54 通稿
 1 暫次建物6~7
 2 暫次建物6~7 断面
 3 暫次建物6~7
 国版55 通稿
 1 暫次建物6~7
 2 暫次建物6~7 断面
 3 暫次建物6~7
 国版56 通稿
 1 暫次建物6~7
 2 暫次建物6~7 断面
 3 暫次建物6~7
 国版57 通稿
 1 暫次建物6~7
 2 暫次建物6~7 断面
 3 暫次建物6~7
 国版58 通稿
 1 暫次建物6~7
 2 暫次建物6~7 断面
 3 暫次建物6~7

四段88 遺物	1 井戸9 遺物出土状況	1 立柱立柱物1
1 02 -2両面瓦片 板 3面全張	2 井戸9 亂泥	2 立柱立柱物17
2 欠火物7 - 遺品	3 井戸9 断面	3 立柱立柱物26
3 四段59 遺物	国版82 遺物	国版104 遺品
1 欠火物7	1 腹火未施工 施瓦	1 立柱立柱物30
2 欠火物7	2 腹火未施工 上層遺物出土状況	2 立柱立柱物31
3 欠火物7	3 腹火未施工 下層遺物出土状況	3 立柱立柱物29
4 欠火物7	国版83 亂泥	国版105 亂泥
5 欠火物7	1 02 -1 施瓦区西下 第3面全張	1 立柱立柱物27
6 欠火物7	2 03 -1 -2 滅溝区 第3面全張	2 亂泥27 - 斧穴1 斷面
7 欠火物7	国版84 遺物	3 亂泥27 - 斧穴2 斷面
8 欠火物7	1 木田耕 亂泥状況	4 亂泥27 - 斧穴3 斷面
9 欠火物7	2 02 -1 1面区 水田柱脚	5 亂泥27 - 斧穴4 斷面
10 欠火物7	3 03 -1 2面区 水田柱脚	国版85 遺物
国版86 遺物	4 井戸9 遺物	1 井戸12 亂泥
1 欠火物7 - 中央土坑 断面	2 亂泥9 斷面	2 井戸12 斧脚
2 欠火物7 - 土1土2 断面	3 亂泥10 斷面	3 土29 亂泥
3 欠火物7 - 外土坑土1 - 6 断面	国版86 遺物	国版107 遺品
4 乱成8 遺物	1 漢54 - 施瓦	1 02 -1 施瓦区南半 板 3面全張
5 乱成8 遺物	2 漢55 施瓦	2 02 -1 亂泥区 水田柱脚
6 乱成8 遺物	3 亂泥56 施物山土状況	国版108 遺品
7 乱成8 遺物	国版86 遺物	1 02 -2 施瓦区東半 水田柱脚
8 乱成8 遺物	1 漢57 遺物出土状況	2 02 -2 施瓦区 水田柱脚
9 乱成8 遺物	2 漢47 施瓦遺物出土状況	国版109 遺品
10 乱成8 遺物	3 亂泥58 施物山土状況	1 03 -1 施瓦区 第3面全張
11 乱成8 遺物	国版86 遺物	2 亂泥69
12 乱成8 遺物	1 漢55 - 施瓦	國版110 遺品
13 乱成8 遺物	2 漢56 施瓦	1 02 -2 施瓦区 水田柱脚
14 乱成8 遺物	3 亂泥57 施物山土状況	2 亂泥69 施物山土状況
15 乱成8 遺物	国版86 遺物	3 亂泥70 施物山土状況
16 乱成8 遺物	1 漢57 施瓦区上层1 墓 遺物出土状況	4 亂泥71 遺品
17 乱成8 遺物	2 漢47 施瓦遺物出土状況	1 02 -1 施瓦区 第5面全張
18 乱成8 遺物	3 亂泥58 施物山土状況	2 02 -1 施瓦区 第5面全張
19 乱成8 遺物	国版86 遺物	国版112 遺品
20 乱成8 遺物	1 沖路2 施瓦d - e施 畜物出土状況	1 02 -1 施瓦区 第8面 (下巣隣隣向) 全張
21 乱成8 遺物	2 沖路2 左岸c - d施 畜物出土状況	2 02 -1 施瓦区 施物序 (7~12面)
22 乱成8 遺物	3 沖路2 右岸d 施瓦c 畜物出土状況	国版113 遺品
23 乱成8 遺物	国版91 遺品	1 02 -1 施瓦区 国江時代背唇測量状況
24 乱成8 遺物	1 谷2 施瓦	2 02 -1 施瓦区 第1層中施物出土状況
25 乱成8 遺物	2 漢2 施瓦出土状況	3 02 -2 施瓦区 第1層中施物出土状況
26 乱成8 遺物	3 亂泥2 施瓦 畜物出土状況	国版115 遺物
27 乱成8 遺物	国版92 遺品	1 施瓦区中層1 畜物 (第14面)
28 乱成8 遺物	1 沖路2 施瓦d - e施 畜物出土状況	2 施瓦区中層1 畜物 (土坑15 - 19 - 21)
29 乱成8 遺物	2 沖路2 左岸c - d施 畜物出土状況	国版116 遺品
30 乱成8 遺物	3 亂泥2 施瓦 畜物出土状況	1 1面の施物 (土器埋納土坑1 - 2)
31 乱成8 遺物	国版93 遺品	2 2面の施物 (土器埋納土坑3 - 4)
32 乱成8 遺物	1 施瓦区中層1 施物	国版117 遺品
33 乱成8 遺物	2 施瓦区中層1 施物	第1面出土施物 (井戸2 - 4 土坑11 - 13)
34 乱成8 遺物	3 施瓦区中層1 施物	国版119 遺品
35 乱成8 遺物	国版94 遺品	第1面出土施物 (土坑30 - 32 - 36)
36 乱成8 遺物	1 施瓦区中層1 施物	国版120 遺品
37 乱成8 遺物	2 施瓦区中層1 施物	1 亂泥2 施物
38 乱成8 遺物	3 施瓦区中層1 施物	2 2面の施物
39 乱成8 遺物	国版95 遺品	国版121 遺品
40 乱成8 遺物	1 施瓦区中層1 施物	第2面の施物 (井戸6 - 7)
41 乱成8 遺物	2 施瓦区中層1 施物	国版122 遺物
42 乱成8 遺物	3 施瓦区中層1 施物	第2面出土施物 (井戸8)
43 乱成8 遺物	国版96 遺品	国版123 遺品
44 乱成8 遺物	1 施瓦区中層1 施物	第3面の施物 (古墳1 - 3)
45 乱成8 遺物	2 施瓦区中層1 施物	国版124 遺品
46 乱成8 遺物	3 施瓦区中層1 施物	第4面出土施物 (古墳2 - 2)
47 乱成8 遺物	国版97 遺品	国版125 遺品
48 乱成8 遺物	1 施瓦区中層1 施物	第5面出土施物 (古墳1 - 3)
49 乱成8 遺物	2 施瓦区中層1 施物	国版126 遺品
50 乱成8 遺物	3 施瓦区中層1 施物	第6面出土施物 (古墳3)
51 乱成8 遺物	国版98 遺品	国版127 遺品
52 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第7面出土施物 (古墳2 - 2)
53 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版128 遺品
54 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第8面出土施物 (古墳3 - 3)
55 乱成8 遺物	国版99 遺品	国版129 遺品
56 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第9面出土施物 (古墳4 - 5号塚 蘆原基1 - 8 - 11 - 12)
57 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版130 遺品
58 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第10面出土施物 (4号塚10 - 14)
59 乱成8 遺物	国版100 遺品	国版131 遺品
60 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第11面出土施物 (西高森36)
61 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版132 遺品
62 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第12面出土施物 (近藤基13 - 17 - 18)
63 乱成8 遺物	国版101 遺品	国版133 遺品
64 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第13面出土施物 (西高森22)
65 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版134 遺品
66 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第14面出土施物 (西高森26)
67 乱成8 遺物	国版102 遺品	国版135 遺品
68 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第15面出土施物 (西高森29)
69 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版136 遺品
70 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第16面出土施物 (西高森39)
71 乱成8 遺物	国版103 遺品	国版137 遺品
72 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第17面出土施物 (西高森40)
73 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版138 遺品
74 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第18面出土施物 (西高森44)
75 乱成8 遺物	国版104 遺品	国版139 遺品
76 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第19面出土施物 (西高森45)
77 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版140 遺品
78 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第20面出土施物 (西高森46)
79 乱成8 遺物	国版105 遺品	国版141 遺品
80 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第21面出土施物 (西高森47)
81 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版142 遺品
82 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第22面出土施物 (西高森48)
83 乱成8 遺物	国版106 遺品	国版143 遺品
84 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第23面出土施物 (西高森49)
85 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版144 遺品
86 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第24面出土施物 (西高森50)
87 乱成8 遺物	国版107 遺品	国版145 遺品
88 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第25面出土施物 (西高森51)
89 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版146 遺品
90 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第26面出土施物 (西高森52)
91 乱成8 遺物	国版108 遺品	国版147 遺品
92 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第27面出土施物 (西高森53)
93 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版148 遺品
94 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第28面出土施物 (西高森54)
95 乱成8 遺物	国版109 遺品	国版149 遺品
96 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第29面出土施物 (西高森55)
97 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版150 遺品
98 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第30面出土施物 (西高森56)
99 乱成8 遺物	国版110 遺品	国版151 遺品
100 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第31面出土施物 (西高森57)
101 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版152 遺品
102 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第32面出土施物 (西高森58)
103 乱成8 遺物	国版113 遺品	国版153 遺品
104 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第33面出土施物 (西高森59)
105 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版154 遺品
106 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第34面出土施物 (西高森60)
107 乱成8 遺物	国版115 遺品	国版155 遺品
108 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第35面出土施物 (西高森61)
109 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版156 遺品
110 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第36面出土施物 (西高森62)
111 乱成8 遺物	国版116 遺品	国版157 遺品
112 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第37面出土施物 (西高森63)
113 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版158 遺品
114 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第38面出土施物 (西高森64)
115 乱成8 遺物	国版117 遺品	国版159 遺品
116 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第39面出土施物 (西高森65)
117 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版160 遺品
118 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第40面出土施物 (西高森66)
119 乱成8 遺物	国版118 遺品	国版161 遺品
120 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第41面出土施物 (西高森67)
121 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版162 遺品
122 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第42面出土施物 (西高森68)
123 乱成8 遺物	国版119 遺品	国版163 遺品
124 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第43面出土施物 (西高森69)
125 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版164 遺品
126 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第44面出土施物 (西高森70)
127 乱成8 遺物	国版120 遺品	国版165 遺品
128 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第45面出土施物 (西高森71)
129 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版166 遺品
130 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第46面出土施物 (西高森72)
131 乱成8 遺物	国版121 遺品	国版167 遺品
132 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第47面出土施物 (西高森73)
133 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版168 遺品
134 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第48面出土施物 (西高森74)
135 乱成8 遺物	国版122 遺品	国版169 遺品
136 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第49面出土施物 (西高森75)
137 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版170 遺品
138 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第50面出土施物 (西高森76)
139 乱成8 遺物	国版123 遺品	国版171 遺品
140 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第51面出土施物 (西高森77)
141 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版172 遺品
142 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第52面出土施物 (西高森78)
143 乱成8 遺物	国版124 遺品	国版173 遺品
144 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第53面出土施物 (西高森79)
145 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版174 遺品
146 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第54面出土施物 (西高森80)
147 乱成8 遺物	国版125 遺品	国版175 遺品
148 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第55面出土施物 (西高森81)
149 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版176 遺品
150 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第56面出土施物 (西高森82)
151 乱成8 遺物	国版126 遺品	国版177 遺品
152 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第57面出土施物 (西高森83)
153 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版178 遺品
154 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第58面出土施物 (西高森84)
155 乱成8 遺物	国版127 遺品	国版179 遺品
156 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第59面出土施物 (西高森85)
157 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版180 遺品
158 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第60面出土施物 (西高森86)
159 乱成8 遺物	国版128 遺品	国版181 遺品
160 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第61面出土施物 (西高森87)
161 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版182 遺品
162 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第62面出土施物 (西高森88)
163 乱成8 遺物	国版129 遺品	国版183 遺品
164 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第63面出土施物 (西高森89)
165 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版184 遺品
166 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第64面出土施物 (西高森90)
167 乱成8 遺物	国版130 遺品	国版185 遺品
168 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第65面出土施物 (西高森91)
169 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版186 遺品
170 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第66面出土施物 (西高森92)
171 乱成8 遺物	国版131 遺品	国版187 遺品
172 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第67面出土施物 (西高森93)
173 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版188 遺品
174 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第68面出土施物 (西高森94)
175 乱成8 遺物	国版132 遺品	国版189 遺品
176 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第69面出土施物 (西高森95)
177 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版190 遺品
178 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第70面出土施物 (西高森96)
179 乱成8 遺物	国版133 遺品	国版191 遺品
180 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第71面出土施物 (西高森97)
181 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版192 遺品
182 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第72面出土施物 (西高森98)
183 乱成8 遺物	国版134 遺品	国版193 遺品
184 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第73面出土施物 (西高森99)
185 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版194 遺品
186 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第74面出土施物 (西高森100)
187 乱成8 遺物	国版135 遺品	国版195 遺品
188 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第75面出土施物 (西高森101)
189 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版196 遺品
190 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第76面出土施物 (西高森102)
191 乱成8 遺物	国版136 遺品	国版197 遺品
192 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第77面出土施物 (西高森103)
193 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版198 遺品
194 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第78面出土施物 (西高森104)
195 乱成8 遺物	国版137 遺品	国版199 遺品
196 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第79面出土施物 (西高森105)
197 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版200 遺品
198 乱成8 遺物	3 施瓦区11 - 12 - 21 施物	第80面出土施物 (西高森106)
199 乱成8 遺物	国版138 遺品	国版201 遺品
200 乱成8 遺物	1 施瓦区中層9 - 10 - 11 - 21	第81面出土施物 (西高森107)
201 乱成8 遺物	2 施瓦区11 - 12 - 21 施物	国版202 遺品
202 乱成8 遺物	3 施瓦区	

第2面下土造物 (周廣昌29)	圆版180 遗物	圆版222 遗物
圆版137 遗物	第3面下土造物 (竖穴建筑物 3 穴穴3 - 排水渠)	第3面下土造物 (流路3主岸j - k域)
第2面下土造物 (周廣昌29 - 30)	圆版181 遗物	圆版223 遗物
圆版138 遗物	第3面下土造物 (穴室建筑 4)	第3面下土造物 (流路3左岸k域)
第2面下土造物 (周廣昌31 - 33 隆28)	圆版182 遗物	圆版224 遗物
圆版129 遗物	第3面下土造物 (竖穴4 - 外周土坡1, 2)	第3面下土造物 (流路3右岸a - e域)
第2面下土造物 (上层堆段道床1 - 2, 4)	圆版183 遗物	圆版225 遗物
圆版140 遗物	第3面下土造物 (竖穴5 黄泥 - a域)	第3面下土造物 (流路3右岸d域)
第2面下土造物 (漆17 - 26)	圆版184 遗物	圆版226 遗物
圆版141 遗物	第3面下土造物 (竖穴建筑 6 穴穴6 - 外周土坡3 - 4)	第3面下土造物 (流路3右岸d - f域)
圆版142 遗物	圆版185 遗物	圆版227 遗物
第2面下土造物 (漆31 - 33)	第3面下土造物 (竖穴建筑 6 穴穴7 - 外周土坡4)	第3面下土造物 (流路3右岸g - h - i域)
圆版143 遗物	圆版186 遗物	圆版228 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - b - d域)	第3面下土造物 (登2 a - 4域)
圆版144 遗物	圆版187 遗物	圆版229 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡1, 2)	第3面下土造物 (登2 a - b - e域)
圆版145 遗物	圆版188 遗物	圆版230 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡1, 3)	第3面下土造物 (登2 e域)
圆版146 遗物	圆版189 遗物	圆版231 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡3)	第3面下土造物 (登2 c域)
圆版147 遗物	圆版190 遗物	圆版232 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡3)	第3面下土造物 (兼制店住城c域)
圆版148 遗物	圆版191 遗物	圆版233 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡3)	第3面下土造物 (登2 d域)
圆版149 遗物	圆版192 遗物	圆版234 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡5)	第3面下土造物 (兼制店住城d域)
圆版150 遗物	圆版193 遗物	圆版235 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡5)	第3面下土造物 (兼制店住城e - g, h - i域)
圆版151 遗物	圆版194 遗物	圆版236 遗物
第2面下土造物 (漆40)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡6)	第3面下土造物 (兼制店住城f域)
圆版152 遗物	圆版195 遗物	圆版237 遗物
第2面下土造物 (井戸5 上坑47 - 53 - 57 - 60)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡6)	第3面下土造物 (流路3上层)
圆版153 遗物	圆版196 遗物	圆版238 遗物
第2面下土造物 (土坑49)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡6)	第3面下土造物 (流路3上层)
圆版154 遗物	圆版197 遗物	圆版239 遗物
第2面下土造物 (土坑52)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡6)	第3面下土造物 (流路3上层)
圆版155 遗物	圆版198 遗物	圆版240 遗物
第2面下土造物 (1 - 坑52)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡6)	第3面下土造物 (流路3上层)
圆版156 遗物	圆版199 遗物	圆版241 遗物
第2面下土造物 (土坑55)	第3面下土造物 (竖穴8 - 外周土坡8)	第3面下土造物 (流路3上层)
圆版157 遗物	圆版200 遗物	圆版242 遗物
第3面下土造物而山土造物 (流路1上 - 下层 - 小土层)	第3面下土造物 (竖穴建筑 9)	第3面下土造物 (流路3下层右岸)
圆版158 遗物	圆版201 遗物	圆版243 遗物
第3面下土造物而山土造物 (土坑56)	第3面下土造物 (竖穴9 潜道 - a域 竖穴10周延 - a域)	第3面下土造物 (流路3下层右岸, 方坪)
圆版159 遗物	圆版202 遗物	圆版244 遗物
第3面下土造物而山土造物 (流路1下层 - 小土层)	第3面下土造物 (竖穴10 周延 - a域)	第3面下土造物 (流路3下层左岸)
圆版160 遗物	圆版203 遗物	圆版245 遗物
第3面下土造物而山土造物 (流路1下层 - 小土层)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3面下土造物 (流路3下层左岸)
圆版161 遗物	圆版204 遗物	圆版246 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3面下土造物 (井戸12 掘立7 - 2 掘立14 - 2 垂立6 - 5)
圆版162 遗物	圆版205 遗物	圆版247 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3面下土造物 (井戸12 掘立7 - 2 掘立14 - 2 垂立6 - 5)
圆版163 遗物	圆版206 遗物	圆版248 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3面下土造物 (井戸12 掘立7 - 2 掘立14 - 2 垂立6 - 5)
圆版164 遗物	圆版207 遗物	圆版249 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3 - 3 b - 1直 - 3 - 5层出 - 1遗物
圆版165 遗物	圆版208 遗物	圆版250 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第1 - 3层中层横面出土遗物 (石器)
圆版166 遗物	圆版209 遗物	圆版251 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第1 - 3层中层横面出土遗物 (石器)
圆版167 遗物	圆版210 遗物	圆版252 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第1 - 2层出 - 1遗物 (石器)
圆版168 遗物	圆版211 遗物	圆版253 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3 - 4层出土遗物 (石器)
圆版169 遗物	圆版212 遗物	圆版254 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第4层以上 - 1 ~ 6 - 11层出 - 1遗物 (石器)
圆版170 遗物	圆版213 遗物	圆版255 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	1. 1 ~ 3 b - 3面下土造物 (石器品)
圆版171 遗物	圆版214 遗物	2. 2 ~ 5层出土遗物 (石器)
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	3. 5 ~ 10层出土遗物 (灰陶品)
圆版172 遗物	圆版215 遗物	圆版256 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第1 - 2层出 - 1遗物 (木製品)
圆版173 遗物	圆版216 遗物	圆版257 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3 - 3 b面出土遗物 (木製品)
圆版174 遗物	圆版217 遗物	圆版258 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	1. 25 ~ 30层出土遗物 (灰陶品)
圆版175 遗物	圆版218 遗物	2. 第3面出 - 1遗物 (流路3 木製品)
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	3. 30 ~ 35层出土遗物 (石器)
圆版176 遗物	圆版219 遗物	圆版259 遗物
第3面下土造物而山土造物 (井戸10 - 11)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	第3 - 4层出土遗物 (石器)
圆版177 遗物	圆版220 遗物	圆版260 遗物
第3面下土造物而山土造物 (1)	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	1. 大和川右岸堤防 - 新面
2. 2 ~ 5层出土遗物 (2)	圆版221 遗物	2. 3 ~ 5层出土遗物 - 近景
圆版178 遗物	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	1. 埋设下部 - 浅面
第3面下土造物 (2)	圆版222 遗物	2. 埋设下部 - 浅面
圆版179 遗物	第3面下土造物 (竖穴10 - 外周土坡2)	
第3面下土造物 (2)	圆版223 遗物	

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

国土交通省では、1987年度より東京・大阪の二大都市周辺を流れる6河川を対象に高規格堤防（スーパー堤防）整備事業を進めている。高規格堤防とは、堤防の決壊による壊滅的な洪水被害から市街地を守るために、堤防外の市街地側に盛土を行って堤防の幅を高さの30倍程度に拡張していくもので、同時に新たに河川区域に含まれることとなった堤防裏法部を「高規格堤防特別区域」として有効に活用し、環境と調和した安全で快適な都市整備を図っていくという目的も兼ねている。

大阪では淀川と大和川が整備対象となり、1988年度より国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所・大和川河川事務所によって事業が進められている。都市整備と一体のため、各事業は土地区画整理や市街地再開発事業、公共施設の建設・建替え、大規模工場・倉庫の移転・再開発など一定のまとまった土地が確保できた場合に行われ、大和川については「大和川改修（高規格堤防）事業」として両岸14地区

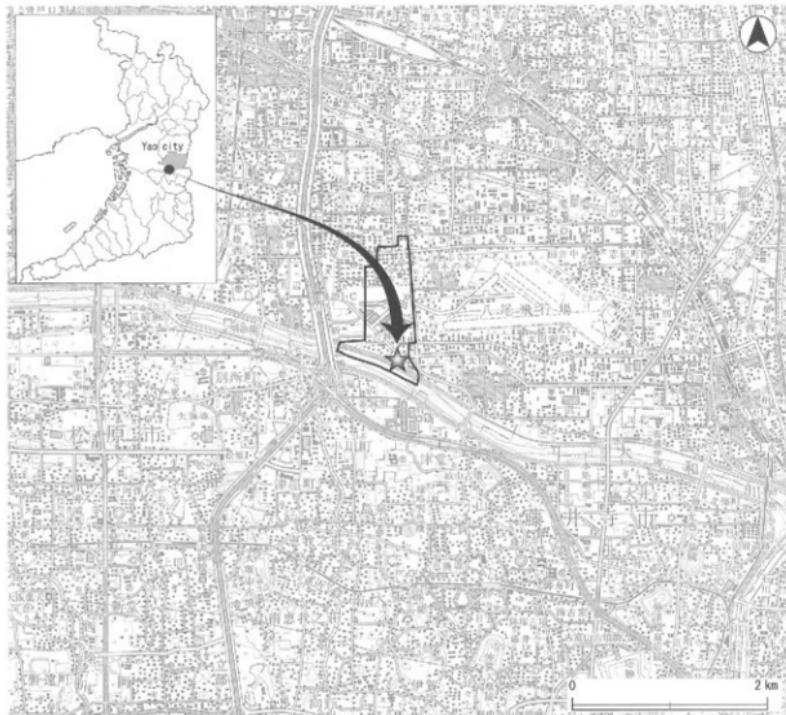


図1 調査地位置図

の整備が計画・実施されている。このうちの1つに八尾市若林地区があり、同市若林町三丁目に所在する株式会社コクヨ物流関西八尾南配達センターの跡地約12,000m²が、防災拠点の整備と合わせて事業化の対象となった。

ところが、この事業の対象区域は、周知の遺跡である八尾南遺跡の範囲の南端にあたり（図1）、実際、1983年度には、配達センターの倉庫建設に伴って財團法人八尾市文化財研究会（以下、「研究会」と略）による第1次の発掘調査が実施されている。倉庫建設予定地約2,600 m²について行われたこの調査では、15基の方形周溝墓・古墳や中世の掘立柱建物・井戸・焼土坑などが確認され、範囲確認調査の所見や現人和川の中州における採集遺物の存在から遺跡の南限が松原市域まで及ぶとした、八尾市教育委員会による推定を裏付けることとなった。ただし、遺構面の検出は倉庫基礎の深度の関係もあって弥生時代後期末までにとどまっており、その後周辺で行われた研究会17次調査区の調査所見から、さらに下位に遺構面が存在することが予測されていた。

そこで、2001年には、若林地区の大和川改修事業区域内における埋蔵文化財発掘調査に関する協議が大阪府教育委員会と事業者である大和川河川事務所の間で交わされ、現地調査については、1999年度より同事業に伴って船橋遺跡（藤井寺市・柏原市）の調査を実施していた財團法人大阪府文化財センターが、府教育委員会の指導の下、国土交通省の委託を受けて担当することとなった。

第2節 発掘調査・整理作業の経過

事業対象区域が約12,000m²に及び、周辺域での既往の調査所見から複数の遺構面の存在が予測されたため、発掘調査は3か年の予定で実施されることとなった。調査委託契約は前述した船橋遺跡の発掘調査・遺物整理事業と合わせて締結され、契約期間はいずれも年度をまたがって設定された。2001・2002年度は改修事業予定地内の西側3分の1の部分（02-1工区）、2002・2003年度は東側に残る事業予定期約8,000 m²のうちの北側3分の2（02-2工区）、2003・2004年度は南東部の残り2,990 m²と若林第二公園との換地により新たに事業区域に追加された02-1工区西側の560 m²（03-1工区）を対象にそれぞれ調査を行った（図2）。

調査着手前の配達センター跡地には、倉庫が存在していた中央部にコンクリート、その周囲にはアスファルトの舗装版が施されていた。02-1工区の調査は、2002年7月22日にこの舗装版の撤去から開始し、続いて倉庫の地中梁や地下埋設管などのコンクリートの既設構造物の取壊しを、重機による盛土や研究会調査区の埋戻土・現代水田作土の掘削と並行して行った。ただし、初年度調査ということもあって調査対象遺構面の深度が未確定であったことに加え、倉庫の基礎構造や規模を十分に把握できていなかったために使用機械を含めた取壊し方法の検討が不十分であったこと、さらに倉庫と研究会1次調査区との間に20mほどの位置ズレが存在していたことから、撤去作業に徹底さを欠いてしまった。そのため、8月2日に人力掘削作業に移行した後も、地中梁の側面や研究会調査の遺構内など機械で除去し切れなかつた部分の搅乱土の除去に日数を費やさざるを得ず、遺構面の検出作業を開始したのは益休賀明けの8月19日からであった。このように遺跡の遺存状況は不良であったが、研究会と同一の遺構面（第2面）で弥生時代後期末から古墳時代初頭の周溝墓群や500個体以上の土器が投棄された自然流路を検出したほか、第3・3b面では竪穴・平地・掘立柱の各建物遺構と小区画水田から構成される弥生時代後期中葉の聚落、第4面では弥生時代前期頃と推定される小区画水田をそれぞれ確認し、本遺跡の動態

・消長を考究するうえで重要なデータを加えることができた。縄紋時代後～晩期の旧地表面である第6面の調査を終えた2003年1月28日からは、旧石器時代包含層の有無を明らかにするため下層確認のトレチ調査に移り、2月10日にすべての現地調査を終了した。最終遺構面における調査面積は3,180 m²である。

3か年の中で最大規模となった02-2工区は、調査区全体がレッカによる航空測量の撮影範囲に収まらないために分割を余儀なくされ、北東部分の約900 m²を1トレチ、それ以外を2トレチとして調査を行うこととなった。

1トレチの調査は、2003年7月5日に機械掘削を開始し、同月15日からは、2トレチの既設構造物取壊しと並行して人力掘削による遺構面の調査に着手した。倉庫の庇を支えたコンクリートの基礎ブロックや地下埋設管によって部分的に攪乱を被っていたものの、倉庫本体の基礎が2トレチ内に納まっていたために各遺構面の遺存状況は比較的良好で、第1面で平安時代末の据立柱建物や井戸・土坑墓などを検出したほか、第2面では4基の周溝墓と古墳時代初頭の土器を多量に伴った溝状遺構、第3面では調査区の東端で周堤を有する堅穴建物1棟をそれぞれ確認し、9月11日に実施した第3b面の航空測量をもってすべての調査を終了した。

2トレチの調査は、既設構造物の取壊しに引き続き8月4日から機械掘削を開始し、9月8日から



図2 調査区配置図

は人力掘削作業に移行した。ただし、1トレンチに接した北半の幅20m前後は、同トレンチの調査のために構造物を收塊し・機械掘削が未着手となっており、機械掘削がすべて終了したのは10月25日であった。調査では、第2面において前方後方形周溝墓2基を含む周溝墓群と古墳時代中～後期の古墳・井戸・土坑、第3面において自然流路と堅穴建物3棟などが検出され、前者は11月6日に文化財調査関係者を対象とした現地公開、後者は2004年1月24日に現地説明会を開催し、それぞれ22・667名の方に調査現場を見学していただいた。その後は堅穴建物の補足調査と並行して下層遺構面の調査に移り、2月13日に第3b面で弥生時代後期中葉の掘立柱建物群、3月9日に第4面で弥生時代前期の小区画水田を検出し、同月12日にすべての現地調査を終了した。最終遺構面における調査面積は、1・2トレンチ合わせて4,763m²である。

最終年度の03-1工区は、前述のように事業予定地南東部と旧若林第二公園南半の東西2か所に分かれ、それぞれ1・2トレンチとして調査を行うことになった。当初は2004年11月30日までの工期を勘案して2か所同時に調査を進める計画であったが、2トレンチに存在した樹木の取扱いに関する方針の決定に時間を要したため、調査は1トレンチから順次実施することとなり、調査期間は2005年2月28日まで延長された。

1トレンチの調査は、5月19日から機械掘削を開始し、6月1日から人力掘削による遺構面の調査に着手した。調査区の大半が倉庫の基礎とそれより南側にずれた研究会1次調査区と重複したために遺存状況は著しく不良であったが、厚い水成堆積物に被覆された第3面では、流路の東岸で周堤を有する堅穴建物2棟が検出され、建物内からは梯子や壁溝・排水溝の蓋、周壁の貼壁など、全国的にも例を見ない有機質の構造物が非常に良好な状態で確認された。そこで、9月12日には、晩夏の時期で脆弱な資料であることを考慮しての2時間限定ではあったが、文化財調査関係者を対象に緊急の現地公開を行い、近畿地方2府3県から来訪された93名の方に見学していただいた。その後は前年度と同様に堅穴建物の補足調査と第3b・4面の調査に移り、11月26日をもってすべての調査を終了した。なお、この調査では、各遺構面の古環境を復元するデータを得るために花粉・珪藻・植物珪酸体の3項目について微化石分析を行っており、分析の結果は第VII章に記している。

2トレンチの調査は、公園遊具や樹木の撤去作業終了後の12月13日から機械掘削を開始し、同月21日から人力掘削に移った。砂場の掘り込みや地下埋設管によって大きく擾乱を被っていたものの、第2面では2基の古墳とともに古墳時代初頭の堅穴建物1棟が確認され、当該期の土地利用のあり方に新たなデータを加えることができた。また、第3面では02-1工区西端で見つかっていた小区画水田の縦きが検出され、東側の居住域に伴う生産域の広がりを把握することができた。2005年2月11日に第4面の写真撮影をもって現地作業を終了し、大和川改修事業に伴う今回の八尾南遺跡の発掘調査をすべて完了した。なお、03-1工区の最終遺構面の調査面積は、1・2トレンチを合わせて3,550m²である。

3か年にわたった以上の調査では、コンテナパッドに換算して約600箱に及ぶ遺物が出土し、2005年度からは、南部調査事務所古市分室において、報告書作成に向けた出土遺物の整理作業を2年計画で行うこととなった。事業者との委託契約はいずれも単年度で締結され、2005年度は主として現地で作成した遺構面の整理とトレース、特徴的な遺物の抽出と接合・復元並びに実測、各種台帳類の作成・整備、2006年度は報告書に掲載する遺構・遺物挿図のトレース・版下作成、遺物の写真撮影と遺構・遺物写真図版の作成、遺物の収納、報告書本文原稿の執筆をそれぞれ実施し、2007年度に本報告書の刊行をもってすべてを終了した。

(岡本)

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

八尾南遺跡は、八尾市域の南西部に位置する八尾市西木の本一～四丁目、木本、若林町一～三丁目に所在する旧石器時代から中世にかけての複合遺跡である。その範囲は南北 1.5 km、東西 0.5 km に及び。今回の調査地は、すぐ南側を大和川が西流する遺跡範囲の南東隅に位置している。遺跡は、北と西側は長原遺跡、東側に太田遺跡・木の本遺跡、南側は大和川を挟んで若林遺跡と隣接している。本章では、八尾南遺跡が位置する河内平野南部周辺の地形環境の変遷を通じて、今回の調査地の立地環境を明確にし、加えて周辺遺跡の概観を行うことで、調査地点の歴史的位置付けを行っておきたい。

本遺跡周辺の地形環境は、大きくは沖積平野に分類される。巨視的に見ると、調査地の東側には生駒山西麓の扇状地が展開し、南側には羽曳野丘陵・河内台地が広がっている。さらに、北側には石川と合流したのち、北西に向かって流れている旧大和川水系の中河川によって形成された沖積低地が展開している。今回の調査地は、河内平野南部、羽曳野丘陵・台地の北方約 1.4 km の沖積低地上に立地し、現状では後に形成された沖積層に覆われている。

調査地の標高は、現地表面で 12.3～12.8 m を測り、大きくは南から北へ緩やかに傾斜している。

なお、調査終了時の最終遺構面（弥生時代前中期から中期初頭）の標高は、11.2 m 前後であることか



図3 八尾南遺跡周辺の地形分類図 (江野所2022) をもとに一部改変)

ら、1.0～1.5mの沖積層がその間に存在していることとなる。さらに、下層確認調査を行った際に検出した沖積層下部から低位段丘構成層最上部（長原遺跡の標準層序N G13層AないしB層）は10m前後であり、約2.8mの地層が堆積している。

ところで、本遺跡が立地する河内平野は、旧大和川水系と淀川水系の大きく2つの河川によって形成され、海水準の変動によって当該平野の様相もめまぐるしい変化を遂げてきた。その変容の様子は、市原実・梶山彦太郎両氏によって明らかにされ【梶山・市原1986】、加えて近年、考古学的調査所見とともに周辺地域の詳細な地形環境の復元も行われている【趙1995ほか、松田1999ほか、別所2002】。ここでは、そうした既往の成果も併せて、河内平野の動向を今回の報告に関連する部分について概観し、河内平野の中での本遺跡の立地環境を明らかにしておくこととする。

最終氷期の河内平野一帯には、古大阪平野と呼ばれる陸地が広がっていた。海水準は、現在よりも低く、汀線もさらに沖合にあった。本遺跡の位置する地点も、南方から延びてくる洪積段丘の縁辺に位置しており、人間活動の痕跡を留める陥生化した土地であった。

縄紋時代前期頃、いわゆる縄紋海進を迎える町台地の北端が開口すると、汀線は河内平野に及んだ。海水面は現在より約2m高くなったと言われており、生駒山西麓の扇状地まで汀線が来ていたことが、鬼虎川遺跡の海食崖の検出事例【松田ほか1999】など、いくつかの調査によって明らかにされている。

縄紋時代中期頃の海退によって海水準の低下が起こると、旧大和川水系の諸河川の氾濫が活性化し、これらの河川が運んできた土砂によって難波累層上部の砂層堆積が始まる。また、上町台地の先端部には砂嘴が、淀川や旧大和川の河口には三角州が形成され始める。こうした地形発達の結果として、河内湾は河内潟へと変貌を遂げる。本遺跡の所在する羽曳野丘陵・河内台地の先端部分では、旧大和川水系に属する古平野川や石川の支流である大乗川などによって形成されたとみられる大規模な洪水砂がしばしば認められ、その後の地形環境に大きな影響を与えていている。

その後、淀川の三角州と上町台地先端の砂嘴のさらなる発達によって、大阪湾と河内湾（潟）の境はさらに狭くなり、河内平野部分の水域は、海水と河川の淡水とが混在する汽水域に変容し、その後、淡水化することによって、河内湖となった。

縄紋時代晩期になると湖水準は再度低下し始める。この湖水準の低下によって、低地部に位置する河川は湿地を掘り込むようにして流れ、河川周囲への土砂の堆積は減少した。一方、河川の上流域では、砂礫が頻繁に運ばれて堆積が進んだ。縄紋時代晩期末頃には湖水準が上昇し、流れる場所を失った流路も頻繁に氾濫を繰り返したとみられている。こうした湖水準の昇降は、弥生時代後期頃まで幾度か起きたものとみられており、今回の調査でも認められたような大規模な洪水堆積物は、こうした時期の所産であると考えることができる。このように大阪湾との境が閉ざされたことによって排水が悪化すると、河内湖に注ぎ込む河川はしばしば氾濫を起こし、河内湖はさらに埋積されていった。古墳時代中期頃には、河内湖の排水を良くするために、砂嘴を東西に横切る水路（難波堀江）を掘削したとする記事が『日本書紀』に記載されている。

古代末から中世にかけて、旧大和川水系は、いくつかの人工的な堤の築堤や上流域の開発行為などによって次第に天井川化し始め、頻繁に大規模な氾濫を起こすようになる。特に生駒山西麓域の扇状地付近では度重なる洪水によって壊滅的な被害を被っており、中世後期から近世にかけての頻発する水害の惨状はいくつかの文献にも記載されている。こうした事態を収束する解決策として、18世紀初頭に大和川の付替え工事が行われ、現在の河内平野の姿が形成された。

（正岡）

第2節 歴史的環境

本遺跡が立地する河内平野南部には多数の遺跡が存在し、かつそれらの考古学的な調査成果については重要なものが数多く蓄積されている。本節では、八尾南遺跡を中心とした近隣所在遺跡の各時期における動向を概観しておく。

なお、本遺跡の周辺には、同時期の重要な遺跡として、北と西側に南北約2.5km、東西約2.0kmの広がりを擁する大阪市長原遺跡（旧石器時代から中世）、北東側の八尾市南木の本・木の本地区には木の本遺跡（弥生時代から中世）が、それぞれ隣接している。このうち、縄紋時代晚期「長原式土器」の標式遺跡としても知られる長原遺跡は、本遺跡と同一の遺跡と認識されており、今回の調査成果についても、これまでの調査を通じて明らかにされてきた両遺跡全体の動態の中で、位置付けていく必要がある。これについては、次節において本遺跡発見の経緯や既往の調査と絡めて詳細に見ることとし、本節では概観するのみにとどめる。

〔旧石器時代〕 河内平野周辺で人の営為が確認できるのは、後期旧石器時代からである。当該期の遺跡としては、国府型ナイフ形石器の名前として名高い国府遺跡のほかに、八尾南遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡・山之内遺跡・はざみ山遺跡がある。いずれも段丘上、あるいは台地上から見つかっている。

〔縄紋時代〕 海水準の変動に伴って、河内平野の様相がめまぐるしく変化することは、前節においてみたとおりである。縄紋時代前期には、生活の場が河内湾周辺にまで及んでいる。生駒山西麓の扇状地上には、恩智遺跡・馬場川遺跡・縄手遺跡・上町台地の東側縁部には、森之宮遺跡で貝塚が形成されている。石川と大和川の合流地点付近では、縄紋時代晚期末の標式資料が出上した船橋遺跡があり、その北側には国府遺跡がある。また、長原遺跡は、前述したように縄紋時代晚期の「長原式土器」標式資料が確認される遺跡として極めて重要である。また、河内平野上には、縄紋時代晚期の土器と弥生時代前期の土器の共伴例が知られる若江遺跡・美園遺跡が知られている。

〔弥生時代〕 弥生時代には、遺跡数は急激に増加する傾向にある。生活の場は、前時代までの生駒山西麓の扇状地上や羽曳野丘陵や河内台地周辺にとどまらず、河内平野上に及ぶようになる。弥生時代前期には、水稻耕作の導入に伴い、低地に進出した集落が旧大和川の諸流路の形成した微高地や自然堤防上に立地するようになる。弥生時代前期の古段階には、若江北遺跡・山賀遺跡・八尾南遺跡があり、中段階から新段階にかけては、美園遺跡・亀井遺跡・長原遺跡・瓜破遺跡・跡部遺跡・中田遺跡・田井中遺跡・久宝寺遺跡がある。

弥生時代中期には、湖水準の上昇に伴って、新たに瓜生堂遺跡・巨摩遺跡・加美遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・東弓削遺跡・弓削遺跡が認められる。また、前代より継続する遺跡である亀井遺跡では、集落の拡大化が認められる。

弥生時代後期には、自然環境が不安定となり、河川の氾濫が多く認められるようになる。周辺の遺跡では、弥生時代中期の造構面を厚い洪水砂が被覆している事例が散見され、自然環境が不安定な状態にあったことが想定されている。こうした背景のもとに、各遺跡のあり様も環濠集落の解体に連動して、均質な小集落が点在する集落形態へと変容していくようである。

当該期に属する周辺遺跡の特徴すべき遺物としては、跡部遺跡より扁平紐式流水文銅鐸が出土している。また、亀井遺跡より扁平紐式と突線紐式の銅鐸片が出上しているほか、貨泉が出土している。さらに八尾南遺跡では、遺跡範囲北側で連弧文銘帯鏡が出土している。

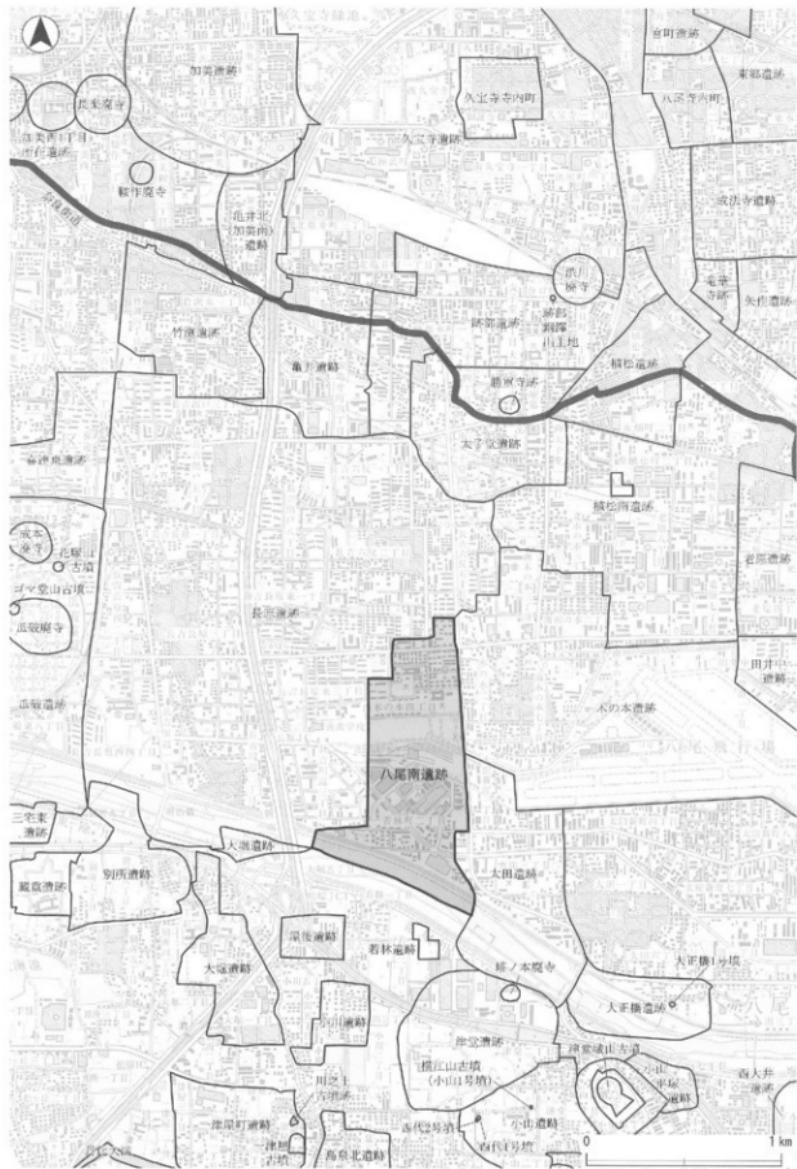


図4 周辺遺跡分布図

〔古墳時代〕 古墳時代前期には、河川が形成した微高地上に、集落が拡大・拡散して存在するようになる。前期の遺跡としては、久宝寺遺跡・西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・亀井遺跡・加美遺跡・萱振遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・船橋遺跡・八尾南遺跡・瓜破遺跡などがある。八尾南遺跡では、後述する調査会調査において古墳時代初頭から前期にかけてのまとまった資料が得られており、重要である。また、本遺跡の北側に位置する久宝寺遺跡では、近畿自動車道建設に伴う調査において準構造船が検出されており、当時の地形環境と水運の関係を知るうえで、重要な資料を提示している。集落数の急増する古墳時代初頭から古墳時代前期にかけては、出土土器にも吉備・山陰・播磨・阿波・播磨・揖津・東海・北陸・南関東など諸地域の搬入土器が比較的多く認められ、当該期の集落のあり方を考えるうえで非常に重要な情報を探している。

一方、前期古墳には、生駒山西麓の西ノ山古墳・花岡山古墳・向山古墳で形成される樂音寺・大竹古墳群・河内平野東南部で形成される玉手山古墳群などがある。

古墳時代中期には、南方の羽曳野丘陵を中心に古市古墳群が展開し、生駒山西麓では全長約160mの心音寺山古墳が造営される。平野部ではこうした大規模墳が営まれることはなく、加美遺跡・亀井遺跡・久宝寺遺跡・山賀遺跡・美園遺跡・長原遺跡など、弥生時代からの方形周溝墓に引き続い小規模な方墳を主体とする古墳群が造成されている。一方、八尾南遺跡の南東には古市古墳群の大型古墳である津堂城山古墳があり、その北側の大正橋遺跡でも埴輪円筒棺が出土している。

後期には、萱振遺跡・矢作遺跡・竹淵遺跡などで集落跡が見つかっているものの、全体の傾向としては減少する傾向にある。後期から終末期にかけては、生駒山西麓に山畑古墳群・高安古墳群などの群集墳が造営されている。

〔飛鳥・奈良時代〕 飛鳥・奈良時代の集落としては、萱振遺跡・成法寺遺跡・東郷遺跡・久宝寺遺跡・太子堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・弓削遺跡・東弓削遺跡・長原遺跡が認められる。大和と難波津を結ぶ交通の要衝という側面も併せ持つ当地域では、仏教文化の受容も早く多くの氏寺が建立された。

総体的に遺構の密度は低い。

〔平安時代〕 小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡などで生産域の拡大が行われ、農地の開発が活性化したことが、周辺域の調査で判明している。近年までその姿を留めていた条里制地割の施行時期も平安時代前期頃に遡るものと考えることができる。なお、八尾南遺跡周辺では、こうした条里地割に基づく開発行為はやや遅れ、次の平安時代末から中世にかけて行われているようである。

〔中世〕 中世前期の集落としては、萱振遺跡・佐堂遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・矢作遺跡・長原遺跡・久宝寺遺跡・津川遺跡・八尾南遺跡がある。当該期の集落は、条里区画に基づくものや奈良街道・長尾街などの主要街道・寺社の周辺で成立するものが多い。

中世後期にかけては、当該地域が南北朝期の動乱以後、戦国時代末期の織田氏による近畿統一までの間、戦乱の渦中にあったことを示すように、集落の減少が顕著に認められる。当該期の遺跡としては、若江・萱振・東郷・亀井遺跡などがあり、いずれも防衛機能を目的として形成されたと考えられる集村形態をとっている。

〔近世〕 農地の拡大とそれに伴う連続堤の築堤を要因として、旧大和川水系の諸河川は天井川化し、しばしば大規模な氾濫を起こして、河内平野の諸集落に甚大な被害を与えていた。これを解消するため、今米村の庄屋中甚兵衛らの尽力によって、宝永元年（1704）に大和川の付替え工事が行われ、現在に至っている。

（正岡）

第3節 既往の調査成果

1. 遺跡発見の経緯

八尾南遺跡の存在が初めて明らかとなったのは、1976年に大阪市高速電気軌道2号線（現大阪市営地下鉄谷町線）の延伸工事に先立って行われた八尾市教育委員会（以下、市教委と略）による試掘調査においてであった。大阪市交通局によって大王寺から現在の八尾南駅を結ぶ10.4kmで計画・開始されたこの工事では、すでに大阪市東住吉区（現平野区）長吉長原で行われた1973年の試掘調査によって長原遺跡が発見され、1974～75年に大阪市教育委員会が中心となって組織した長原遺跡調査会による本調査の結果、塚ノ本古墳や多数の小規模方墳、古代の水田、中世の掘立柱建物・井戸などが検出された。その後は調査会の後を引き継いだ財團法人大阪市文化財協会（以下、市文協と略）によって発掘調査が続けられており、東西2.0km、南北2.3kmに及ぶ旧石器時代から近世の複合遺跡であることが判明している。

前述した試掘調査は、長原遺跡の調査成果を踏まえ、隣接する八尾市域においても遺構面が連続して存在することが予測されたことから実施されたものである。調査の結果、縄紋から弥生・古墳・鎌倉時代の3層の遺物包含層が確認され、長原遺跡との連続性が証明されるとともに、八尾南駅駅舎と検車予定地への本調査の必要性が示された。調査は市教委が組織した八尾南遺跡調査会（以下、調査会と略）によって1978～79年に行われ、弥生時代後期の井戸、古墳時代の居住関連遺構や方墳・水田、中世の流路・溝などが検出された。翌年に市教委が実施した遺跡範囲確認調査では、駅北側の西木の本四丁目や南側の若林町三丁目においても遺構・遺物が確認され、遺跡の範囲は駅周辺に留まらず南北1kmの広範囲に及ぶことが予測された。

本遺跡で古墳時代の集落や水田が発見されたことは、この地域の古墳時代の実態をそれまでのようにな長原古墳群のみでなく、新たに集落と墓域という観点から描き直す必要性があることを示すこととなった〔山本1981〕。その後、本遺跡は区画整理事業が行われた駅南部を中心に関発が進められ、これまでに40地点を超える調査が研究会（以下、調査についてはYS□-□と示す）をはじめ、大阪府教育委員会（以下、府教委と略）や市教委によって行われている（図5）。以下、これら既往調査の成果を説明していくが、その際、八尾南駅より北側の西木の本一から四丁目を「北部」、駅周辺の木本と若林町一丁目及び二丁目北半を「中央部」、同町二丁目南半と三丁目を「南部」、とそれぞれ呼称することとする。また、長原遺跡においても、遺跡内は便宜的に西南・南・西・中央・北・東北・東・東南の8地区に分けられ、近年は東北地区を中心に各地区で新たな調査成果が報告されているが、今回は八尾南遺跡に接する東・東南地区での調査成果（以下、調査についてはNG□-□と示す）について主に触れた。加えて、かつて財團法人大阪文化財センターが調査し、現在は長原遺跡として扱われている城山遺跡についても、調査当時の地区名称で取り上げたいと思う。

2. 既往の調査成果

旧石器時代 1978年度に長原遺跡で実施されたNG14次調査（39：図および表番号、以下同様）において、それまで「長原地山」と称されていた地層から後期旧石器時代に位置付けられる石器が出土して以来、本遺跡でも当該期の遺物や遺物包含層の存在が予想されていた。それを裏付けるように、同調査区に東接する調査会調査区（1）で剥片2点が出土し、その周辺のYS83-2・87-8・88-13（5・12・18）や府教委平成元～2年度（21）では、石器が狭い範囲に集中的に出土するブロックが検出されて



図5 既往の調査地点

いる。特に21では、2909点に及ぶナイフ形石器・剥片などから構成されるブロックなどが10か所確認され、石器製作址を含む居住域と考えられている〔山田1993〕。また、本遺跡の東側に位置する太田遺跡で実施された府教委87-1(15)においても、約5mの調査地から417点もの石器が出土し、旧石器時代の遺物や遺物包含層が、遺跡の中央部に留まらずに広範囲に存在していることが確認されている。

一方、長原遺跡では、39の他にNG82-20・82-41・88-4・86-3(64)・88-69・89-19(44・47・82・56・93・95)などでブロックが検出され、82では4~6mの範囲内に石核・石器・剥片が集中するブロックが3か所確認されている。以上のように八尾南遺跡の南部や長原遺跡東南地区付近で旧石器時代の遺構・遺物の確認例が多いのは、周辺で数多くの自然流路が存在し、狩猟に適した生物の棲息する自然環境に恵まれていたことや、付近の沖積作用が緩慢で旧石器時代の基盤層である沖積層下部層が比較的浅い位置に存在していたためと考えられている〔原田1995〕。なお、近年、長原遺跡東地区的NG00-11(233)、東北地区のNG97-12・97-52(269・273)においても後期旧石器時代の石器製作址などが発見されており、旧石器時代の人々の活動範囲がさらに広がっていることが判明している。

縄紋時代 草創期から中期の遺構については、両遺跡を通じて長原遺跡東北地区のNG99-41(278)で押型紋・燃糸紋土器の集中地とともに検出された早期中葉の落込み状遺構が唯一であるため、人間活動の詳しい状況は明らかではないが、草創期の遺物としては、中央部のYS83-2・87-8(5・12)や長原遺跡NG14(39)の各調査において、旧石器が出土する地層の直上から単独で出土したサヌカイト製の有舌尖頭器がある。また、前期から中期にかけての遺物としては、府教委87-1(15)で北白川下層IIb式に属する前期の爪形紋土器、長原遺跡東南地区のNG88-15(83)で前期から中期の爪形紋土器、NG88-69(93)で中期末の北白川C式土器などが出土している。

後期から晩期に関しては、詳細不明ながら中央部のYS89-15(22)で後期とみられる竪穴建物1棟が検出されているほか、府教委平成元~2年度(21)に晩期後半から末の溝状造構が検出されており、わずかながら人々の生活の様子が窺われるようになる。

長原遺跡においても、東南地区のNG14(39)で晩期とみられる竪穴建物1棟・溝状造構、NG8(37)で同時期の建物遺構2棟・土坑などが検出されている。37で確認された建物遺構は、竪穴建物と平地建物の可能性があるもので、後者の床面の疊みや建物周辺からは多数の剥片や石核とともに石錐や石錐などが出土し、石器製作を兼ねた住居とされている。遺物としては、NG88-42(89)で滋賀型IV式の深鉢が旧地表面に投棄された状態で出土しているほか、NG87-28・87-50・87-90(65・70・80)などで確認された開析谷から後晩期の土器や石器などが出土しており、人々の足跡が窺われる。

弥生時代 長原遺跡は、近畿地方における最後の縄紋土器とされる「長原式土器」の標式遺跡として著名であり、同時に前期の弥生土器である「遠賀川系土器」の中でも古相に位置付けられる土器が出土する遺跡として注目してきた。八尾南遺跡においても同様の状況であり、河内潟南縁地域における縄紋時代から弥生時代への移行過程を探るうえで重要な遺跡と考えられている。

前期では、中央部から南部にかけて遺構や遺物が確認されている。YS89-15(22)では検出された自然流路の中から前葉から中葉にかけての遠賀川系土器が多量に出土し、調査会(1)でも自然流路から遠賀川系土器が少量の長原式土器とともに出土している。近接するYS87-5(9)では、詳細不明ながら掘立柱建物・土器棺墓?・溝・自然流路などが検出されたと報告されている。後葉ではYS90-17・99-25(24・32)で土坑・溝などが確認され、当該期の居住域と推定されている。これらは、今回の調査で第4回において検出された水田域に対応する居住域である可能性が考えられる。

墓域については本遺跡では確認されていないが、長原遺跡においては東南地区のN G81-10（41）で土器棺墓11基・土坑墓18基からなる墓地が検出されている。長原式土器を主体とする土器棺墓の中で1基のみ遠賀川系土器の壺を用いたものが確認され、土器の特徴から他地域からの搬入品と見られる同時に最古相の弥生土器と捉えられており、この地域への弥生文化の伝播を窺ううえで重要な資料とされている〔田中1992〕。長原式土器と遠賀川系土器が共存する状況が近畿各地で確認されていることから、両土器は共存していた可能性が高いと考えられているが〔秋山1999〕、長原・八尾南両遺跡では41のような長原式土器を用いる純紋系集団が営んだ集落と、1・9・22のような遠賀川系土器を用いる弥生系集団の居住域が近接して検出されていることから、集団間には相互に交流があったとみられる。

中期に入っても、遺構の確認例は遺跡南部を中心としている。Y S90-17（24）では前葉から中葉の土坑・溝などが多数検出され、前期から引き続きこの付近が居住域であったと考えられる。生産域については、長原遺跡東南地区的N G82-20・82-41（44・47）において前葉の水田が検出され、Y S18-13（18）で広範囲に確認された水田も、周辺調査区の所見から当該期に属するものと推定されている。墓域に關しては、長原遺跡東南地区的N G88-59（91）で後葉の方形周溝墓が検出されているが、本遺跡ではこれまでのところ確認されていない。

長原遺跡では、東・東北地区的N G83-63・87-67・92-39（218・224・228）で前葉の堅穴建物、N G97-52（273）で前葉の水田、N G95-36（230）で後葉の方形周溝墓群が検出され（224・273以外は未報告）、居住域・生産域・墓域が明確になると指摘されている〔杉本2003〕。また、東北地区に含まれる城山遺跡においては、C地区（240）で前葉の方形周溝墓群、D地区（176）で後葉の掘立柱建物・井戸・溝などが確認されており、複数の村落の存在が想定される。

後期には本遺跡においても遺構・遺物が増加し、分布範囲も遺跡全域に広がるようになる。北部ではY S84-4（8）で土坑・溝などの遺構が検出され、95-22（29）で末頃の土器が出土している。中央部では調査会（1）で井戸・土坑、Y S83-2（5）で土坑・溝・土器集積、Y S87-8（12）で井戸・溝・土坑などが検出されているほか、近接するY S87-5・88-13（9・18）では水田が確認されており、居住域・生産域の関係を有する可能性が高い。また、特筆すべき遺物として、5の包含層から出土した小型彷彿鏡（連弧文銘帶鏡）片が挙げられる。南部ではY S94-21・95-23・99-25（28・30・32）で土坑・溝・井戸などが見つかっており、複数の居住域が存在する可能性がある。墓域は12で方形周溝墓が単独で1基、Y S82-1（4）では後期末から庄内式期の方形周溝墓が10基検出されている。

長原遺跡では、N G82-20・82-41（44・47）で後葉から末の方形周溝墓、92-51（126）で水田が検出されており、位置的な関係から近接する本遺跡南部の地点との関係が強いとみられる。北部においては堅穴建物からなる居住域が複数確認され、また、東北地区的城山D地区（176）で検出された焼失住居内に残されていた多数の土器は、当該期における土器研究の基準的な資料として扱われている。

古墳時代 これまでの調査で中期を中心に全時期を通じて多くの遺構・遺物が検出され、本遺跡の盛期と考えられている。北部ではY S84-3・92-18（6・25）で掘立柱建物が検出され、渡来系集団の存在が窺える韓式系土器が出土している。中央部では調査会（1）で堅穴建物・掘立柱建物、Y S87-8（12）で掘立柱建物が検出され、複数の居住域の存在が想定できるほか、後者では検出された遺構の配置や5世紀中頃の井戸から出土した木製の鞍の存在から、馬の飼育を示唆する場所ではないかと推定されている〔原田1995〕。また、報告書で不明埴輪と紹介されている土製品は、窓の付属品と捉えられている「U字形板状土製品」〔宮崎2002〕の可能性があり、興味深い。これらの居住域に伴う生産域と

しては、北部では6やYS87-10・87-7(14・11)、中央部では1で水田が確認されている。なお、大和川中州(図5中△付近)においても、5世紀後半から末に比定される須恵器壺・土師器壺の完形品が各1点採集されており、当該期の集落の存在を示唆する遺物として注目される。

一方、長原遺跡では中期に入ると「長原東ムラ」が東北・東地区で形成され、東地区的NG95-36・99-15・02-8・03-6(230・232・235・236)などでは建物遺構や墓域などが確認されている。232で竪穴建物・掘立柱建物、235でコの字形の区画溝を持つ工房址と考えられる遺構などが初期須恵器や韓式系土器を作つて検出されており、八尾南遺跡で確認された居住域とともに渡来系集団が阿遠跡付近に移入している状況が窺える。5世紀中葉に東ムラが衰退し、代わって西・南・中央地区に「長原西ムラ」がつくられる。この集落の移動の背景としては、遺跡北部において確認されている砂層から、5世紀中期以降の大和川水域の氾濫による土砂の堆積などが関係すると考えられている〔京嶋2001〕。

長原遺跡の一帯では、4世紀末から6世紀中頃にかけて長原古墳群と呼ばれる方墳を中心とした数百基の古墳が築造されており、中でも5世紀後半に数多くの古墳が造られた。これらの古墳は後世の開発で削丘を削平された結果、埋没古墳となっており、2006年10月までの発掘調査で213基が確認されている〔寺井2006〕。これらは、最初に古墳群最大規模である塚ノ本古墳(円墳、36・58・84他)と一ヶ塚古墳(帆立貝形、図5範囲外)が築造された後、一辺10m未満の規模を中心とする方墳が周辺部に造られた。また、2基の古墳と同時に造られた高廻り1号墳(方墳、201)・2号墳(円墳、201)からは船形埴輪をはじめ多数の形象埴輪が出土している。なお、5世紀後半以降に築造された古墳では、馬形埴輪の出土が14点確認されており〔櫻井1993〕、馬と係わりの深い集団が居住していたことが示唆されるとみられている〔京嶋2001〕。本遺跡においても、墓域は中央部の調査会・市教委昭和55年度・YS87-8(1・2・12)から南部のYS88-12(17)にかけて、これまでに14基の方墳が確認されている。中でも1で検出された八尾南1号墳は、埴輪の形態や供獻された土器から4世紀末から5世紀初頭に築造されたと推定され、塚ノ本古墳や高廻り1・2号墳と比較するうえで貴重な資料と目されている。また、5世紀後葉から6世紀前葉にかけて築造されたと考えられる12基に関しても、形状や出土遺物などから長原古墳群との関連性が考えられている〔原田1995〕。

両遺跡で営まれていた古墳時代の集落は後期前半を境に衰退し、長原古墳群でも6世紀前半以降新たな古墳はほとんど築かれなくなる。このように集落・墓域を巡る動向はほぼ軌を一にしており、社会情勢の大きな変化がその理由として挙げられている〔櫻井1993b〕。

古代から中世 飛鳥から奈良時代については、中央部のYS83-2(5)で奈良時代の小穴が確認されているのみで、土地利用の実態を推定するのは困難である。一方、長原遺跡では西地区で当該期の集落が営まれ、東南地区や東地区では水田が広がっていたことが推定されている〔佐藤1992〕。

平安時代以降には、北部の市教委昭和56年度(3)、YS84-3・87-7・87-10(6・11・14)などで平安時代後半から鎌倉時代初頭の条里水田が検出されており、当該期に条里施工に基づく土地開発が本格化したものと推定できる。11世紀頃に本道跡周辺が属していた河内国丹北郡の条里については、服部昌之〔服部1975〕・足利健亮〔足利1972〕氏らによって復元されており、その研究を基にすれば、今回の調査地は丹北郡九条三里十六・二十一・二十二ノ坪に相当する。

一方、同時期の居住域については、掘立柱建物・井戸や多量の瓦器碗・小皿を伴う焼土坑などが検出された南部のYS82-1(4)一帯が想定されていたが、今回の調査で12世紀代の土器類を伴う非戸・土坑や掘立柱建物・土坑墓などが新たに確認され、その想定が追認されることとなった。(木村)

表1 既往の調査成果（1）

番号	調査名	所在地	主な調査成果	文献名・発行年
1	調査会	西の木・若林町	鶴枝・源内南側道路、民生後開戸門、古墳方墳（八幡南1・2号）、掘立柱造、中井	八幡市考古調査委員会1981
2	南骨壙S56	西木の東四丁目	志賀方墳（八幡南3号）	研究会1981
3	南牧委S56	西木の木四丁目111	小堀小削土坑、酒、平安水田	研究会1983
4	YS82-1	若林町二丁目27	民生後開戸門方墳周囲、古墳中南側（八幡南4～6号）、中井穴、井戸、撫子坑、片熱湯跡	研究会1984
5	YS83-2	春林町一丁目49	紅瓦器・ソック、焼石器、弦生施用土坑、酒、上部無積、小型陶瓶類、古墳中南側方 壁、中井旁	研究会1985 a
6	YS84-3	西木の木四丁目4	古墳群初期墓水田、小盾腹立柱施物、土坑、酒、平安水田	研究会1985 b
7	西牧委S59	若林町二丁目117～119	志賀・吉須ガット、セラミック	八幡市考古委1985
8	YS85-4	西木の木一丁目165	古墳後期～4世紀・小穴、跡、片熱湯跡、八幡南自然流路	研究会1985 c
9	YS87-5	若林町一丁目76	民生前開戸門立柱施物、土器種類？、酒、自然流路、跡、古墳後期水田、自然流路、古墳前開 戸、酒、小穴、小削、小穴	研究会1988 a
10	YS87-6	西木の木三・四丁目	古墳時代・平安時代前段落	研究会1987
11	YS87-7	木の木10	内環前庭水田・中・後開戸門、後開戸門、平安～饗食水田	研究会1988 d
12	YS87-8	若林町一丁目87	古墳後期戸門・土坑、酒、片熱湯跡、古墳中南側井戸（本製糞廐1）、土坑・酒、塗瓦	研究会1995 a
13	YS87-9	若林町一丁目23	佐佐役窯・後期前半井戸（八幡南1～14号）、土器集積、酒	研究会1988 b
14	YS87-10	西木の木四丁目4・1	大字南の古墳水田・中井第、小穴、平安水田	研究会1988 c
15	南牧委S62	若林町・太田	1世紀前後草鞋形（總数417点）	研究会1989
16	YS88-11	西木の木一丁目48・49	先史後期～古墳初期施物類	研究会1989 a
17	YS88-12	若林町二丁目147	古墳后期・後期前半井戸（八幡南8～10号）、土器集積、酒	研究会1995 b
18	YS88-13	若林町一丁目26.3	民生中期・後開戸門、古墳前期・中期土坑、中井第	研究会1989 b
19	KG88-1	無吉川源三丁目	御衣冠・漆器、漆物半出土	研究会1989 c
20	YS89-14	春林町二丁目116	八幡中期小井、墓葬	研究会1990 a
21	南牧委H1～2	春林町一丁目	中井斜溝・後期前半井戸（八幡南1～14号）、土器集積、酒	研究会1991 - 1993
22	YS89-15	若林町一丁目76	中井斜溝・後開戸門、古墳前期・中期土坑、中井第	研究会1990 b
23	YS89-16	木の木一丁目	中井斜溝・後開戸門、後開戸門	研究会1990 c
24	YS89-17	若林町二丁目50地	中井斜溝・後期前半井戸（八幡南1～14号）、土器集積、酒	研究会1995 c
25	YS89-18	西木の木二・三丁目122	八幡中期窓、古墳中南側戸門・土坑、施立柱施物、（轉丸土器多量）、平安水田	研究会1993
26	YS89-19	西木の木四丁目4・4	酒、酒器、土器集積・井戸、酒、古墳後期土坑・酒、古墳後期土坑・酒、小穴	研究会1994
27	YS91-20	若林町一～二丁目	若林町一～二丁目・後開戸門・施立柱・施物類・後期前半井戸（八幡南1～14号）、古墳中 南側土坑・酒、小穴	研究会1996 a
28	YS94-21	若林町二丁目13・15	後開戸門・土坑・酒	研究会1998
29	YS95-22	西木の木一丁目1	中井斜溝・古墳中南側遺物	研究会1996 b
30	YS95-23	春林町二丁目300-1地	後開戸門・小穴、酒、小穴～近世小穴、酒	研究会1999
31	YS95-24	若林町二丁目地内	古井斜溝・酒器、中井斜溝・施立柱	研究会1996 c
32	YS99-25	春林町二丁目	中井斜溝・酒器、中井斜溝・施立柱	八幡市教委、研究会2000
33	市教委95-268	春林町二丁目10・12・ 13・14・15・16	中井斜溝・古墳中南側遺物、八幡市教委2000	八幡市教委1996 b
34	市教委2001-358	若林町二丁目5	通透卡模造（民生後開戸門・古墳中南側の遺物少量出土）	八幡市教委2003 a
35	市教委2001-491	若林町二丁目10・12・ 13・15	民生中期・土坑、先史後期～古墳中期の遺物	八幡市教委2003 b

※調査会：八幡南遺跡調査会、YS一二口：財（財）八幡市文化財調査研究会（研究会）、八幡市教委委員会；市教委（文献では八幡市教委と表記）、人阪市教育委員会；市教委（名称は人阪12番6表による）。

表2 既往の調査成果（2）

東南地区	調査名	所在地	主な調査成果	文献名・発行年
36 N G 1 - 32丁目	美古川辺三丁目	共立古墳群（埋／本古墳、28～32号）、埴輪窓、平安塗、丰世大塗	市文録1976・1982	
37 N G 8	美古川辺四丁目	吉積保水田、平安塗立柱建物	市文録1982	
38 N G 11	美古川辺五丁目	馬頭古墳群（38・34号）、平安塗立柱建物	市文録1982	
39 N G 14	美古川辺六丁目	埴塗・淡灰陶器、筒穴柱坛、稻谷釜～晚唐土器、古墳後廻塗立柱建物、土坑、漆	市文録1982	
40 N G 80 - 3	美古川辺二丁目	鶴波跡跡（弥生土器陶器、火坑基、凸壇）、魚鳥水田、平安塗痕地	市文録1983	
41 N G 81 - 10	美古川辺二丁目	鶴波跡跡（弥生土器陶器、火坑基、凸壇）、魚鳥水田	市文録1983	
42 N G 81 - 12	美古川辺二丁目	魚鳥水田、平安塗立柱建物、火葬塗	市文録2000 b	
43 N G 82 - 6	美古川辺二丁目	古墳・残水田（3面以上）、平安塗立柱建物	市文録1983	
44 N G 82 - 20	美古川辺二丁目	K2-41灰陶丸埴輪（鉢形）（3号物）	市文録1959 e	
45 N G 82 - 26	美古川辺二丁目	御所谷、石耕跡跡遺物、中型水田	市文録1990	
46 N G 82 - 31	美古川辺二丁目	埴塗残石器等製品、平安塗	市文録1990	
47 N G 82 - 41	美古川辺二丁目	旧石器群（集落中部）、弥生中期南糞穴式、弥生後期段下式方形容陶器、灰土器群、古墳中期柱坛建物、芦井、土壠、残石古墳群（106・107・108号）、灰土器群等製品	市文録1999 c	
48 N G 83 - 8	美古川辺二丁目	埴塗古墳群（埋／本古墳群后）	市文録2000 b	
49 N G 83 - 9	美古川辺二丁目	馬頭古墳群	市文録1992 a	
50 N G 84 - 17	美古川辺二丁目	馬頭古墳群	市文録	
51 N G 85 - 70	美古川辺二丁目	長原古墳群（埋／本古墳群后）	市文録1992 b	
52 N G 85 - 13	美古川辺二丁目	弥生前中期水田、長原古墳群（106号）、荒鳥古墳群等塗	市文録1993 a	
53 N G 85 - 18	美古川辺二丁目	長原古墳群（29号周溝、129号）、飛鳥塗	市文録2000 b	
54 N G 85 - 35	美古川辺二丁目	長原古墳群（埋／本古墳群）、古代水田	大阪市教委・市文録1987 b	
55 N G 85 - 64	美古川辺二丁目	長原古墳群	市文録	
56 N G 85 - 63, 86 - 3	美古川辺二丁目	旧石器石器ブロカ、埴塗後段・弥生前期自然焼泥	市文録2000 b	
57 N G 86 - 23	美古川辺二丁目	奈良水田	市文録2000 b	
58 N G 86 - 24	美古川辺二丁目	奈良古墳群（埋／本古川北清流）、埴輪柱、古代塗（奈良川水路？）	大阪市教委・市文録1988 b	
59 N G 86 - 54	美古川辺二丁目	坂原古墳群（147・159号）、古代水田、平安・鎌倉朝立柱建物、井戸・漆	市文録1993 b	
60 N G 86 - 58	美古川辺二丁目	長原古墳群（150・152号）、古代水田、平安・鎌倉朝立柱建物、井戸・漆	市文録1993 b	
61 N G 86 - 70	美古川辺二丁目	長原古墳群（160・164号）	市文録1993 b	
62 N G 87 - 16	美古川辺二丁目	坂原古墳群（埋／本古墳群）、古代水田	市文録1994	
63 N G 87 - 26	美古川辺二丁目	古代以前自然流路、古代水田	大阪市教委・市文録1980	
64 N G 87 - 27	美古川辺二丁目	坂原古墳群（17号）、古代水田	市文録1994	
65 N G 87 - 28	美古川辺二丁目	御所谷、奈良朝立柱建物、塗、平安・鎌倉朝立柱建物、塗、土坑	市文録1994	
66 N G 87 - 32	美古川辺二丁目	長原古墳群（171号）	市文録1994	
67 N G 87 - 36	美古川辺二丁目	古墳橈輪（弥生前中期）、古墳中期ノ彫透	市文録2000 b	
68 N G 87 - 39	美古川辺二丁目	古墳中期自然流路、古代水田	市文録1994	
69 N G 87 - 40	美古川辺二丁目	古代水田、中型古窓	市文録1994	
70 N G 87 - 50	美古川辺二丁目	御所谷（埋／本古川北清流）、奈良水田	市文録1994	
71 N G 87 - 51	美古川辺二丁目	長原古墳群（175号）、古墳中・飛鳥塗	市文録1994	
72 N G 87 - 56	美古川辺二丁目	飛鳥塗・ビット、古代水田	市文録2000 b	
73 N G 87 - 60	美古川辺二丁目	美古川辺二丁目	市文録1994	
74 N G 87 - 62	美古川辺二丁目	古道	市文録1994	
75 N G 87 - 69	美古川辺二丁目	古代水田、平安塗	市文録1991	
76 N G 87 - 72	美古川辺二丁目	坂原古墳群（サマクトフライケ出上）	市文録2000 b	
77 N G 87 - 76	美古川辺二丁目	長原古墳群（176号）	市文録1994	
78 N G 88 - 81	美古川辺二丁目	長原古墳群（151号周溝、178号）、古墳坂原水田・中期前御流路、岐島塗	市文録2000 b	
79 N G 88 - 85	美古川辺二丁目	飛鳥・奈良塗	市文録2000 b	
80 N G 89 - 90	美古川辺二丁目	御所谷、奈良塗	市文録1994	
81 N G 88 - 1	美古川辺二丁目	西川辺川、弥生中期方形圓底窓、飛鳥十忍納土坑	市文録1995	
82 N G 88 - 4	美古川辺二丁目	計石器・鋸齿器中部、弥生中期前奈良水田、飛鳥・忍納窓塗	市文録1999 e	
83 N G 88 - 15	美古川辺二丁目	御所谷・中忍納土坑、古墳少痕塗	市文録1993	
84 N G 88 - 18	美古川辺二丁目	長原古墳群（埋／本古墳群）、延縄、平安区溝	大阪市教委・市文録1990 a	
85 N G 88 - 22	美古川辺二丁目	御所谷・中忍納土坑、中世坪塗	市文録1995	
86 N G 88 - 29	美古川辺二丁目	純成石器	市文録1995	
87 N G 88 - 36	美古川辺二丁目	埴塗焼・弥生前中期自然流路、忍納土坑、飛鳥十忍納土坑	市文録1996	
88 N G 88 - 37	美古川辺二丁目	御所谷石器等集落、西川辺川	市文録1995	
89 N G 88 - 42	美古川辺二丁目	純成陶器・忍納土坑、西川辺川、古道後却塗、中世坪塗	市文録1995	
90 N G 88 - 57	美古川辺二丁目	御所谷・中忍納土坑	市文録1995	
91 N G 88 - 59	美古川辺二丁目	弥生・小野形形圓底窓、飛鳥塗	市文録1995	
92 N G 88 - 66	美古川辺二丁目	中・丘陵耕作上	市文録1995	
93 N G 88 - 69	美古川辺二丁目	H石器石器等集落、弥生中期方形圓底窓、中世坪塗	市文録1995	
94 N G 88 - 84	美古川辺二丁目	飛被燒跡・弥生前耕作自然流路	市文録1999 e	
95 N G 89 - 19	美古川辺二丁目	御所谷石器等集落、中世落	市文録1992 a	
96 N G 89 - 22	美古川辺二丁目	御所谷石器等集落、中世中期以前水田	市文録1997 a	
97 N G 89 - 23	美古川辺二丁目	弥生・中世坪塗、御所谷石器等集落	市文録1997 a	
98 N G 89 - 26	美古川辺二丁目	御所谷石器等集落	市文録1997 a	
99 N G 89 - 37	美古川辺二丁目	旧石器石器等集落	市文録1997 a	

表3 既往の調査成果（3）

番号	調査名	所在地	主な調査成果	文献名・発行年	
100	N G89-47	長吉川道二丁目	平安・室町掘立柱建物・井戸	市文編2006b	
101	N G89-48	長吉川道三丁目	油石器・ブロック、狹小横断面水田、古墳周辺残構物、生火、礫、礫	市文編2006b	
102	N G89-60	長吉川道二丁目	飛鳥・奈良瓦	市文編2006b	
103	N G89-63	長吉川道二丁目	櫛孔のため灰瓦なし	市文編1997a	
104	N G89-72	長吉川道二丁目	古代水田	市文編1997a	
105	N G89-80	長吉川道二丁目	弥生・初期土器類・古代水田	市文編1997a	
106	N G90-5	長吉川道二丁目	古墳時代後期舟形器、西河川川、玄空室・中堅溝、古墳井戸	市文編1997b	
107	N G90-26	長吉川道二丁目	六角形水溝・井戸	市文編1997b	
108	N G90-45	長吉川道二丁目	櫛孔瓦（長吉川土器・石器井戸）	市文編1997b	
109	N G90-62	長吉川道二丁目	山石泥水堀・泥水堀・生火・無灰瓦	太版斎藤委・市文編1991b	
110	N G91-1	長吉川道二丁目	ナクソンゾク無灰化石、弥生阶段水槽、長吉古墳群（J83 - 186号）、飛鳥溝	市文編2006b	
111	N G91-12	長吉川道二丁目	井戸口・古墳群・中期自然流沟	市文編1997c	
112	N G91-13	長吉川道二丁目	古墳後期窓・ビット・柱穴	人阪山教委・市文編1992c	
113	N G91-20	長吉川道二丁目	井戸口・古墳窓・圓柱形窓跡部壁面・古墳後期窓	市文編1997c	
114	N G91-21	長吉川道二丁目	弥生窓・中期自然流沟、平安・鍬合水田	市文編1997c	
115	N G91-29	長吉川道二丁目	唐物・植物と木根植用	市文編1997c	
116	N G91-49	長吉川道二丁目	遺構・植物と木根植用	市文編1997c	
117	N G91-63	長吉川道二丁目	平安・鍬合院地	未掲載	
118	N G91-67	長吉川道二丁目	古墳・飛鳥溝	市文編1997c	
119	N G92-5	長吉川道二丁目	ナクソンゾク無灰化石、中央水路・長吉山廻路（198号）・世総廻	市文編2006b	
120	N G92-9	長吉川道二丁目	井戸跡・作井跡・西河川川、飛鳥窓・石器植物、平安掘立柱建物	市文編1999b	
121	N G92-10	長吉川道二丁目	御手前廻路・井戸・飛鳥溝（飛鳥渓水路）、平安・鍬合水田	市文編1999b	
122	N G92-24	長吉川道二丁目	古墳休憩場・土器	市文編1999b	
123	N G92-27	長吉川道二丁目	御手前・鍬合相馬等	市文編2006b	
124	N G93-34	長吉川道二丁目	鐵製武器・古墳中期掘立柱建物・守田水田	市文編1999b	
125	N G93-47	長吉川道二丁目	平安槽・土坑	市文編1999b	
126	N G93-51	長吉川道二丁目	砂丘・緩斜面水田・古墳中期掘立柱建物	市文編1999b	
127	N G92-53	長吉川道二丁目	古代・坑・ぬみみ似	市文編2006b	
128	N G92-62	長吉川道二丁目	中井・井戸・井	市文編1999b	
129	N G92-63	長吉川道二丁目	中井・井戸	市文編2006b	
130	N G92-81	長吉川道二丁目	弥生窓・中期自然流沟	市文編1999b	
131	N G93-1	長吉川道二丁目	井戸跡・ブロック・古墳中期掘立柱建物・井戸・井	市文編2006b	
132	N G93-4	長吉川道二丁目	飛鳥廻路・平安掘立柱建物・井戸	市文編1999c	
133	N G93-5	長吉川道二丁目	長吉川道二丁目	井戸跡・古墳窓・中井跡・作井	市文編1999c
134	N G93-8	長吉川道二丁目	長吉山廻路（城・古舌・繩環理）	市文編1999c	
135	N G93-26	長吉川道二丁目	陶款・弘生白石鉢跡・古墳中期掘立柱建物・井戸・土器・飛鳥ビット	市文編2006b	
136	N G94-4	長吉川道二丁目	鐵製鍬・古墳中期水路跡・猿島田水田・平安掘立柱建物・井戸・井	市文編1999d	
137	N G94-83	長吉川道二丁目	井戸跡・古器井戸（石器器作青磚）・古墳中期水路・飛鳥溝	市文編2006e	
138	N G95-72	長吉川道二丁目	人亥山古墳・市文編1996b	人亥山古墳・市文編1996b	
南地区					
139	N G19	長吉長原東三丁目	長吉古墳群（36 - 37号）、古代水田	市文編1976・1982	
140	N G21	長吉長原二丁目	奈良水田	市文編2006b	
141	N G24	長吉長原二丁目	長吉山廻路（39号）、奈良水田・平安櫛立柱建物	市文編2006b	
142	N G81-2	長吉川道二丁目	長吉古墳群（44 - 58号）、古代水田、平安・雁雄の遺跡、大寺跡	市文編1989	
143	N G82-12	長吉川道二丁目	長吉山廻路（59号）、古代水田	大阪府教委・市文編1984b	
144	N G82-19	長吉長原四丁目	長吉古墳群（60 - 70号）、古代水田	市文編1990	
145	N G83-11	長吉長原二丁目	断層を示す構造	市文編2006b	
146	N G83-17	長吉川道二丁目	貝塚・小塚群（44号）	市文編2006b	
147	N G83-31	長吉長原四丁目	平安以前水田・平安櫛立柱建物・難削・夷・土丸	大阪府教委・市文編1985a	
148	N G83-46	長吉川道二丁目	長吉古墳群（90 - 91号）、古代水田	市文編1992a	
149	N G83-66	長吉川道二丁目	奈良水田・平安櫛立柱建物	市文編2006b	
150	N G84-28	長吉川道二丁目	遺構・遺物と木根植用	市文編2006b	
151	N G84-46	長吉川道二丁目	長吉古墳群（120号）	市文編2006b	
152	N G84-48	長吉長原四丁目	長吉山廻路（121 - 125号）、古代水田・平安櫛立柱建物	市文編1992b	
153	N G85-34	長吉長原四丁目・長吉川道二丁目	長吉古墳群（131 - 137号）、古代水田	市文編1993a	
164	N G85-53	長吉長原二丁目	長吉15号墳群	市文編1993a	
155	N G85-67	長吉川道二丁目	平安中前期（飛鳥・鍬合水路？）	市文編1993a	
156	N G85-70	長吉長原四丁目	長吉古墳群（140 - 142号）、古代水田・平安櫛立柱建物	市文編1993a	
157	N G85-77	長吉長原二丁目	六角形砂利穴・深	市文編1993a	
158	N G86-28	長吉川道二丁目	長吉古墳群（143号）、中井水田	市文編1993b	
159	N G86-30	長吉長原四丁目	長吉古墳群（144号）	市文編1993b	
160	N G86-43	長吉長原四丁目	長吉古墳群（123、145、146号）、平安櫛立柱水田・中井水田	市文編1993a	
161	N G86-66	長吉長原三・四丁目・長吉川道二丁目	長吉古墳群（105 - 109号）	市文編2006b	
162	N G87-70	長吉長原四丁目	飛鳥・奈良水田	市文編2006b	
163	N G88-19	長吉川道二丁目	古墳・古代水田・平安櫛立柱建物・土坑・窓・「塔頭跡」	大阪府教委・市文編1990b	
164	N G89-69	長吉長原四丁目	長吉古墳群（182号）	市文編2006b	
165	N G90-36	長吉川道二丁目	長吉古墳群（143号）、古代水田	市文編1993b	

表4 既往の調査成果（4）

番号	調査名	所在地	主な調査成果	文献名・発行年
166	K G91-55	長吉川源流二丁目	長吉古墳群（195号）	市文協1997c
167	G G91-61	長吉川源流二丁目	遺構・遺物とも未検出	市文協1997c
168	K G92-18	長吉川源流二丁目	近世土坑	市文協1999c
169	K G92-45	長吉川源流四丁目	古井水田	市文協2006c
170	K G92-73	長吉川源流四丁目	飛鳥・奈良水田	市文協2006c
171	K G92-92	長吉川源流四丁目	貴霜人塚群（200号）、古井水田、平安建立式建築、堀・井戸	市文協2006b
172	K G94-56	長吉川源流一丁目	飛鳥高まり、古代水田、牛糞層	市文協1999d
173	K G94-61	長吉川源流一丁目	貴霜人塚群（57号）、古代水田	大阪府教委・市文協1996a
174	K G94-67	長吉川源流四丁目	平安井戸・堀穴	市文協2006b
175	K G94-55	長吉川源流二丁目	古代水田、平安・李唐建立式建築、塚	大阪府教委・市文協2002
中央地区				
176	城山D・E・F・D区	長吉川源流一・二丁目	池小手・後藤馬住跡、古墳中括水田・土坑、飛鳥・平安水田、塚	大文七1986b
177	城山C区	長吉川源流一・二・三丁目	飛鳥・奈良水田・穴群、飛鳥・中括水田	大文七1986c
178	K G1-31工区	長吉川源流八丁目	飛生牛耕跡・土墳群、古墳と疑跡、飛鳥大塚	市文協1978・1982
179	K G20	長吉川源流三丁目	貴霜人塚群（38号）、古代水田	市文協2006b
180	N G81-3～6	長吉川源流一・二丁目	野G81-3で弥生遺跡・塚	市文協2006
181	N G82-4	長吉川源流二丁目	飛鳥古墳（古墳疑跡）、飛鳥井戸・古代水田	大阪府教委・市文協1994a
182	N G83-10	長吉川源流二丁目	飛庭5～7層跡	市文協2006b
183	N G83-12	長吉川源流二丁目	飛庭5～7層跡	市文協2006b
184	N G83-27	長吉川源流一丁目	飛庭5～7層跡	市文協2006b
185	N G83-41	長吉川源流三丁目	貴霜古墳群（58号、89号）、古代水田	大阪府教委・市文協1993b
186	N G83-20	長吉川源流二丁目	飛鳥古墳	未報告
187	N G84-23	長吉川源流東三丁目	内宮後一飛塚原・立柱建跡、飛霜古墳群（七ノ井古墳）、古代水田、平安建立式建築、連	大阪府教委・市文協1987a
188	N G85-36	長吉川源流二丁目	古代水田	未報告
189	N G85-46	長吉川源流二丁目	古代水田	未報告
190	N G85-59	長吉川源流二丁目	長忍13層跡	市文協1998a
191	N G86-16	長吉川源流三丁目	貴霜古墳（七ノ井古墳跡・推定）	大阪府小牧委・市文協1988a
192	N G86-36	長吉川源流三丁目	古墳・小束塗・古代水田	市文協1993b
193	N G86-44	長吉川源流一・二・三丁目	遺跡・遺物・赤燒瓦・東京均区内にも調査区域あり	市文協2006b
194	N G86-56	長吉川源流二丁目	飛鳥水田跡	市文協2006
195	N G86-60	長吉川源流三丁目	桃山後期土石群（砂利採掘場）、貴霜古墳群（153・154号）、古代水田、平安土器	市文協1993b
196	N G86-67	長吉川源流三丁目	古代水田	市文協1993b
197	N G86-79	長吉川源流一・二・三丁目	古代水田	市文協2006b
198	N G86-90	長吉川源流二丁目	鐵岐跡・駕車馬向自然流跡、古墳中期魚塚、古代水田、平安墓葬地	市文協1993b
199	N G86-109	長吉川源流一丁目	古代水田	市文協1991・1992c
200	N G87-2	長吉川源流一・二・三丁目	古代水田	市文協2006b
201	N G87-35	長吉川源流二丁目	桃山・古墳時期斜坡土坑、延迹り1・2号塚（長屋169・170号坑）、古代水田、奈良・中間層跡	市文協1991・1992c
202	N G87-54	長吉川源流三丁目	西沼中耕跡立柱建跡、古代水田	市文協1994
203	N G88-20	長吉川源流一・二・三丁目	古墳中耕立柱・溝・土坑、古代水田	市文協1995
204	N G88-27	長吉川源流一丁目	飛鳥水田	市文協1995
205	N G88-41	長吉川源流二丁目	飛鳥水田、平安・王坑（井戸？）	大阪府教委・市文協1990c
206	N G89-5	長吉川源流三丁目	古墳・飛鳥水田（鉄製矢張子？）	市文協2006b
207	N G89-25	長吉川源流二丁目	六堆・小束塗穴立柱・立柱建跡・井戸・樋・樋、古代水田	市文協2006b
208	N G89-36	長吉川源流一丁目	古墳中期築造立柱・酒・土坑・羽衣織風多頭飾・古代鏡・王坑・井戸・水田	大阪府教委・市文協1991a
209	N G90-13	長吉川源流一丁目	古井水田・難倉水田	市文協2006b
210	N G90-37	長吉川源流二・三丁目	長原古墳群（中期）、古代水田	市文協1997b
211	N G92-79	長吉川源流二丁目	古代水田跡・溝	市文協2006b
212	N G93-76	長吉川源流二丁目	飛生後醍醐・古墳後醍醐・王坑・平安築柱立柱建跡・樋・井戸	市文協1999b
213	N G94-19	長吉川源流三丁目	飛鳥水田、奈良・平安白石造跡	市文協1999b
214	N G94-20	長吉川源流三丁目	鰐吹坂・飛鳥水田・溝・古代瓦然破風・岸壁廻	市文協1999b
215	N G95-29	長吉川源流二丁目	平安・井戸	市文協2006b
東地区				
216	N G22	長吉川源流一丁目		未報告
217	N G24-54	長吉川源流第一・二丁目	+ 8.1 mで砂礫（N G5層）	大阪府教委・市文協1985c
218	N G33-63	長吉川源流一・二丁目	飛生古墳群・王坑・弥生中期堅穴坐式井戸・井戸・桃山後期土壠積羣	大阪府教委・市文協1985d
219	N G33-71	長吉川源流一丁目	長忍3・4層	未報告
220	N G44-6	長吉川源流一・二丁目	桃山後期劉備・内宮前引割溝、内宮中耕跡・土替層多き	市文協2006b
221	N G86-20	長吉川源流二・三丁目	古代水田・溝	市文協2006b
222	N G86-55	長吉川源流一・二丁目	遺構・遺物未検出	市文協2006b
223	N G87-8	長吉川源流一・二丁目	荒原3・4層から布筋式溝	市文協2006b
224	N G87-67	長吉川源流一・二丁目	飛生中・後期穴引傾溝、飛生後開井戸・溝・古墳中筋王坑・溝	市文協2006b
225	N G89-85	長吉川源流一・二丁目	陳跡物語・碑記・弥生泥跡・古代水田	未報告
226	N G89-86	長吉川源流一・二丁目	飛生中筋穴引傾溝、飛鳥・古代水田	未報告
227	N G91-13	長吉川源流一・二丁目	飛生中筋穴引傾溝、飛鳥・古代水田	未報告
228	N G92-39	長吉川源流一・二丁目	桃山中筋仔垣・大溝・跡・後醍醐跡・古墳中筋川原・柱穴・古代水田	未報告
229	N G92-97	長吉川源流一・二丁目	遺物文書・飛生後醍醐・穴生早期溝・土器層多き・古墳中筋1・2層・石製瓦層多き	未報告
230	N G95-36	長吉川源流一・二丁目	埴跡放流跡・飛生中筋方形棚溝羣・上層埴跡・王坑・桃山後期穴引傾溝・大溝・古墳中筋多き・荒原	未報告

表5 既往の調査成果（5）

番号	調査名	所在地	主な調査成果	文献名・施行年
231	N G96-103	長谷長吉原一丁目	越成古跡集中区。弥生後期～古墳中期。古代水田	未報告
232	N G99-15	長谷長吉原一丁目	網跡石器集中地。弥生後期～古墳中期。古代水田	未報告
233	E G00-11	長谷六反三丁目	印石器石器集中地。弥生後期～古墳中期。飛鳥時代。土坑、古墳形状地盤。獨立柱遺物。井戸、土塁	市文協2002c
234	E G01-32	長谷六反二丁目	鐵製武器自然遺跡。弥生中期然流跡。中世足跡	市文協2003a
235	E G02-8	長谷六反原一丁目	鶴居山形跡多段階。方馬形窓墓。土坑、後期竪立柱建物、井戸、土塁、井戸内式方形井、井戸内式窓墓。古墳古墳群（213号）。古墳群上層部。独立柱遺物。井戸、土塁	市文協2005b
236	N G03-8	長谷長吉原一丁目	弥生前半至盛期。中世後半住居跡。土坑、高床二段、三層墓、床内式竪立柱建物、独立柱遺物。近縄織、古代水田	市文協2005b
237	武藏森遺跡	長谷長坂、呂古川辺	長坂古墳群（埋立芋遺跡、2~27号）、牛糞丘遺跡	大文セ1978
東北地区				
238	城山 m h 2	呂古出戸七丁目	弘久南～中期後漢末期須情、古墳	大文セ1980
239	城山 m h 3	呂古出戸八丁目	後漢後期須情。古代水田、土塁遺物	大文セ1980
240	城山 m - C区	呂古出戸七、八丁目	弥生中期須情。古墳、飛鳥然流跡	未報告
241	E G12	長谷六反一丁目	飛鳥時代。泥瓦、土器遺物。平井十埴	未報告
242	E G16	長谷六反二丁目	弥生～古墳中期須情、瓦窓、古墳窓、古墳窓、独立柱遺物。井戸	未報告
243	E G17	長谷六反二丁目	竹纹瓦窓、兔窓、瓦張後期須情	未報告
244	N G80-1	長谷六反二丁目	奈良房、土坑	市文協2006b
245	N G80-2	長谷六反二丁目	弥生、土壇遺物	市文協2006b
246	N G23	長谷六反二丁目	弘久南～中期後漢末期。長坂古墳群（300号周溝）	市文協2006b
247	N G25	長谷六反二丁目	鐵製武器～弥生小形須情	市文協2006b
248	N G62-48	長谷六反二丁目	古墳中期須情	未報告
249	N G83-1	長谷六反二丁目	弥生中期住居。古坂小形須情	未報告
250	N G83-5	長谷六反二丁目	1.8mで砂層	未報告
251	N G83-22	長谷六反二丁目	+ 7.0mで奈良古墳群	未報告
252	N G83-43	長谷六反二丁目	+ 7.8mで砂層	未報告
253	N G83-65	長谷六反二丁目	弥生中期土坑、ビット、飛鳥土坑	市文協2006b
254	N G84-4	長谷六反五丁目	古墳中期須情、土坑、古代水田	市文協2006b
255	N G84-5	長谷六反四丁目	豪傑、須情と土手移転	市文協2006b
256	N G84-17	長谷六反三丁目	古代水田	人阪山教委・市文協1986
257	N G84-18	長谷六反二丁目	平安後期。土安・難倉水田、道路	市文協2006b
258	N G84-49	長谷六反二丁目	鐵製、須情柱頭柱、+ 7.7mで砂層	市文協2006b
259	N G84-86	長谷六反二丁目	古墳後半～中期後漢末期。ビット、井戸、土坑、轟ち込み	市文協2006b
260	N G85-17	長谷六反二丁目	鐵製後期須情	市文協2006b
261	N G86-6	長谷六反一丁目	飛鳥～空氣層	市文協2006b
262	N G86-77	長谷六反五丁目	弥生中期須情。土坑	市文協2006b
263	N G86-37	長谷六反一丁目	+ 8.2mで鉄鋤、古墳後期然流跡、しがらみ、平安後期柱頭	山文道1998
264	N G86-77	長谷六反一丁目	弥生中期須情。古墳後期土袋式埴輪	市文協2006b
265	N G86-9	長谷六反一丁目	飛鳥～平安後期。土安・難倉土手移転須情	市文協1999a
266	N G86-96	長谷六反一丁目	飛鳥～平安後期。土安・難倉土手移転須情	市文協1999a
267	N G86-66	長谷六反二丁目	古墳後期。奈良獨立柱須情。	市文協1999a
268	N G86-79	長谷六反一丁目	旧石器時代。+ 7.5mで砂層、古坂芦井・櫻井	未報告
269	N G87-12	長谷六反一丁目	若宮野耕作所、赤字中野清。古坂中野木製品、飛鳥窓穴式須情、獨立柱遺物	市文協2000
270	N G97-13	長谷六反二丁目	古坂竹林跡、平安後期	未報告
271	N G97-31	長谷六反一丁目	鐵製後期須情。古坂前半～中野水田、宇治安物	未報告
272	N G98-43	長谷六反二丁目	奈良後期。若古真須田跡、古代遺	市文協2000
273	N G98-52	長谷六反一丁目	則石谷・春駒駅跡。佐佐木中野水田、佐佐木朝期土坑、ビット、古坂中野木製品、古坂後期土手式須情、竹林跡、桃井、鐵製柱頭須情	市文協2000
274	N G97-56	長谷六反二丁目	弥生中期須情。平安後期須情	市文協2000
275	N G98-19	長谷六反四丁目	古坂小形窓穴遺跡（5年前半、前半、後半、井戸、美化糞）	市文協2000
276	N G98-20	長谷六反二丁目	鶴居山形跡集中地。古坂中期須情。土坑、火道跡、自然遺跡、中野流跡	市文協2001
277	N G99-19	長谷六反四丁目	鐵紋銅鏡。後期然流跡。跡、古坂中野水田	市文協2002a
278	N G99-41	長谷六反二丁目	則石谷・春駒駅跡。西伏山・中野水田、宇治安物	市文協2002a
279	N G99-6	長谷六反四丁目	古坂中野土壇須情。土坑、鐵製須情、古坂後期	山文道2003
280	N G99-30	長谷六反四丁目	奈良房、平安ビット、落	市文協2004b
281	N G61-14	長谷六反四丁目	古坂前須情。中野水田、溝跡。飛鳥～奈良初期然流跡、平安水田	市文協2004b
282	N G61-25	長谷六反四丁目	中野水田	市文協2001c
283	N G61-1	長谷六反二丁目	佐佐木中野須情。佐佐木朝期土坑、ビット、古坂中野木製品、古坂後期土手式須情	市文協2005a
284	N G61-4	長谷六反二丁目	佐佐木中野須情。土坑、古坂後期土坑、土塁、古墳	市文協2001c
285	N G61-5	長谷六反一丁目	佐佐木中野須情。土坑、古坂後期土坑、土塁、古墳	市文協2005a
286	N G61-5	長谷六反二丁目	佐佐木中野須情。土坑、古坂後期土坑、土塁、古墳	市文協2001c
287	N G61-5	長谷六反一丁目	佐佐木中野須情。土坑、古坂後期土坑、土塁、古墳	市文協2005a
288	N G61-9	長谷六反二丁目	古墳・平安流跡、平安井戸・井戸、土塁	市文協2006a
289	N G84-74	長谷出戸二丁目	造構、須情木被田	山文道2006b
290	N G85-76	長谷出戸二丁目	奈良後期。長谷二疊上部で火山ガリス	山文道2006b
車N G1-□	(財)大阪文化財協会（市文協）、大阪市教育委員会（人阪山教委、大文セ・井戸）大阪文化財センター			
車既往の会合上、奈良飛跡東北・北、中央・東海地区は一部分のみ調査。西・西南地区は未調査である。				※実作成データは2007年1月時点のものである。

第Ⅲ章 調査の方法

第1節 現地調査

発掘調査の実施に当たっては、基本的に2003年刊行の『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』にしたがって行った。しかしながら、実際の調査は、同マニュアルの刊行以前の2002年7月より開始しているため、初年度の調査に関しては、当センターが從前に定めた1988年刊行の『(財)大阪文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』に基づいて実施している。新旧マニュアル間ににおいては、調査区の呼称方法や地区割りなど、いくつかの相違部分で違いがあることから、本報告書の刊行に伴う整理事業の過程において、新マニュアルの記載にしたがう形で統一を図っている。

まず、調査箇所の呼称については、第Ⅰ章で詳述したように、受託年度（西暦の下2桁）-発注番号（発注順）を組合せて表記する原則に基づき、02-1工区（2001・2002年度）・02-2工区（2002・2003年度）・03-1工区（2003・2004年度）と呼称し、さらに必要に応じて調査番号（トレンチ名）を付した。このうち、2002年度の受託契約が2作存在しているかに見えるのは、新マニュアル刊行以前に行われた初年度の調査に関してのみ、それまで当センターの諸遺跡で採られていた現地調査開始年度に調査着手順を枝番号として組み合わせる呼称法にしたがったためである。

次に、調査地の地区割については、国土座標を利用し、第VI座標系に基づく地区割によっている（図6・7）。

なお、調査を開始した年である2002年の4月に、旧国土座標系から世界測地系（測地成果2000）への変換があった。したがって国土座標は、すべて世界測地系の座標を用いており、これに準じると今回の調査地の第Ⅰ・Ⅱ区画上の位置はF 6-13となる。ちなみに、この第Ⅰ・Ⅱ区画は調査地内では変化しないため、以後の報告文中で用いる際には省略している。また、遺物の取り上げについてもこの世界測地系に即した取り上げを行っており、実際の取り上げ区画には、最小単位を10mとする第Ⅳ区画までを用いている。さらに、これに限らず、細部の取り上げ位置が必要と判断されたものについては、個別に出土地点の座標を測量し、取り上げを行った。

水準は、全国的に共通の基準となっている東京湾平均海水位（T.P.: TOKYO PEIL）を用いている。遺構面及び遺構・遺物の実測に関しては、必要に応じて個別に手書きによる平・断・立面図を作成したが、遺構面全体については、基本的に縮尺100分の1の平板測量を行い、遺構分布が密である場合や微細な地形復元が必要と判断された遺構面については、レッカによる空中写真測量で50分の1の平面図を作成した。なお、この空中写真測量は、02-1工区及び03-1工区2トレンチでは第2・3面の2面、02-2工区では第2・3・3b面の3面、03-1工区1トレンチでは第2・3・3b・4面の4面について実施している。また、これとは別に調査を通じてもっとも遺存状況が良好であった弥生時代後期中期の堅穴建物9については、特別にHIEI SE-IIとハッセルブラッドMKW-Eを用いた個別空中写真測量を実施し、10分の1縮尺の平・立面図の作成を行った。

ところで、遺跡は複数の地層の累重によって形成されていることが、周辺の調査によって判明していた。そこで、調査地の堆積を把握し、調査の迅速化と正確さを期すべく、調査地全体を縦横に通る筋掘を設定し、地層の観察に努めた。設定にあたっては、02-1工区と02-2工区2トレンチの擾乱及び03

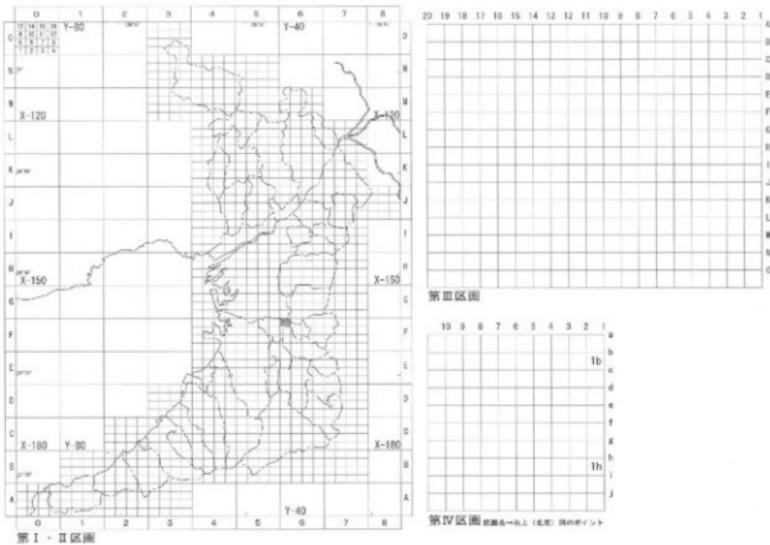


図6 地区割の方法

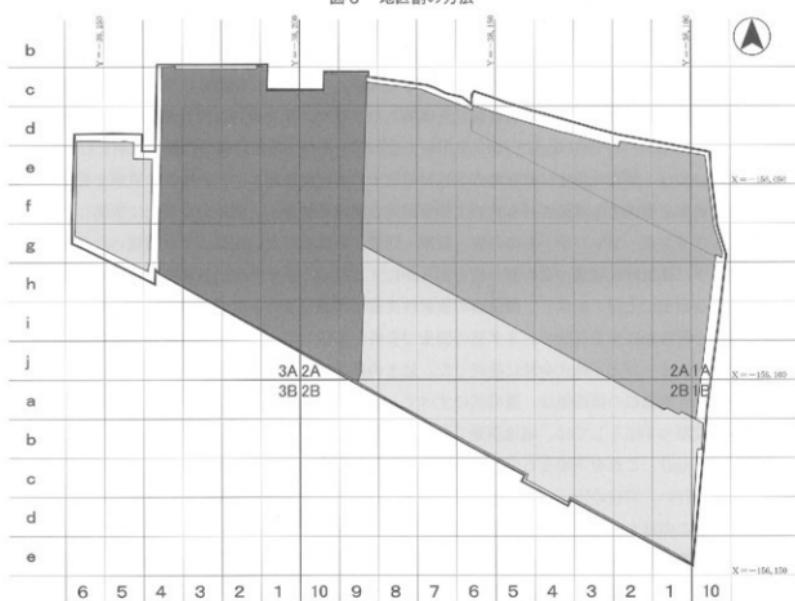


図7 02-1・02-2・03-1工区 地区割図

- 1 工区 2 トレンチの北側側溝壁面を利用し、併せて20分の1縮尺の断面図を作成した。

なお、初年度の調査では、この断面観察によって遺構・遺物の存在が予想された土壤層を基準に、第1～3b面までの4面を全域調査している。また、第4～6面の5面については、大阪府教育委員会の指導により第3面で検出した堅穴建物の保存措置を講じつつ面積を限定して平面調査を行い、顯著な遺構・遺物の有無を確認した。さらに、周辺域での調査成果も加味し、工区の南北部に北西～南東方向の33.5m×1.5mのトレンチを設定し、沖積層下部層から低位段丘構成層最上部と考えられる層準までの下層確認調査を行った。なお、この調査成果を受け、次年度以降は1～4面までの5造構面に限定して平面調査を実施した。

以上が調査の基本方針であるが、調査の状況に応じて適宜協力・指導を仰いだものもある。そのうちの一つに、03-1工区1トレンチ第1面の土坑墓に埋葬されていた人骨がある。この人骨については、大阪市立大学大学院医学研究科 器官構築形態学（第2解剖）の安部みき子氏に調査指導を仰ぐとともに、取り上げ後のクリーニング・鑑定・保存処理までの一連の作業実施をお願いした。また、堅穴建物内より出土した構築材や流路跡より見つかった立木などの樹種同定を、大阪大学大学院（当時）の中原計氏に指導を仰ぎ、現地でのサンプリング・プレバラートの作成・観察・同定までの一連の作業をお願いした。そのほか、弥生時代の自然環境を推定する材料を得ることを目的として、微化石分析用の土壤サンプルを現地にて採取し、鑑定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。併せて、堅穴建物9の地層観察用アゼについても、同社に軟X線写真の撮影・観察と土壤剥片資料の作成・観察を委託している。

第2節 整理作業

現地の調査で得た遺物は、土器・石器・木器・鉄器などすべて合わせるとコンテナパッドに換算して約600箱を数えた。この中から重要と判断されるものについて2961点を抽出し、うち約2500点について接合を行い、900点の遺物について石膏復元を実施した。また、報告書刊行後の遺物管理を効率的に行うため、FileMaker社のFileMakerPro 6.0を用いて遺物データベースを作成した上で収納を行った。

本器については、整理作業中に財元興寺文化財研究所の本沢直子氏より資料提供の依頼を受けた。そこで、堅穴建物を構成する構築部材も含めて樹種同定の実施を依頼し、前述の中原氏に依頼したものも含めてサンプリング・プレバラートの作成・観察・同定・顕微鏡写真の撮影までを実施いただいた。また、このほかに弥生時代後期中葉の曆年代を明らかにするため、国立歴史民俗博物館の炭素年代測定グループに第3面出土土器を提供し、付着物の放射性炭素年代測定を行っていただいた。さらに、当時の食性や植生を明らかにする目的で、3年間の調査で資料が蓄積していた種実等の大形植物遺存体の同定作業をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。以上の結果は第Ⅴ章において報告している。

なお、本報告書掲載の挿図類は、遺構図のすべてと遺物図の一部についてデジタルデータとして作成している。実際の手法としては、現地調査で作成した図面をフラットスキャナーで取り込んでデータ化した後（300 dpi）、これを下絵としてAdobe社のWindows版Photoshop 7.0及びC S 2を用いて図面の合成・調整を行い、同社のIllustrator10及びC S 2を用いてトレース作業を行うという手順によって作成している。このほか、地形の微起伏を表現するための等高線などについては、現地調査の段階で作成した空中写真測量の成果であるデータ図面（DXF形式）を、AutoDesk社のAutoCAD LT2007を用いて簡単な加工を施した後、Illustrator上において必要な加工を施して最終的な図面として用いている。

（正岡）

第Ⅳ章 調査の概要と層序

第1節 調査の概要

第1章でも触れたように、大和川改修事業が計画される以前までの調査地は、株式会社コクヨ物流関西八尾南配達センターとして利用されており、調査地の中央にはかつて配達センター倉庫が存在していたことを示す $136 \times 30.5m$ のコンクリート舗装版、また、商品配達のための車両が周回していたその周囲にはアスファルトの舗装版がそれぞれ施されていた。各年度の作業は、まず、この構造物の撤去から開始したが、コンクリート舗装版の下には倉庫基礎の地中梁が縦横10m間隔で存在しており、これらを撤去し終えた調査地はさながら板チョコレートのような状態を呈していた。また、アスファルト舗装下についても、運搬する紙製商品の荷重に耐え得るよう薬剤による地盤改良が行われており、硬化した土砂をすべて除去する必要が生じた。

このようなことから機械撤削終了後の遺跡の状況、特に中世から近世の作上層と考えられる1層の遺存状況は著しく不良であり、遺構面の検出はこれを除去した2層の上面から開始した。第1面と呼称するこの遺構面では、02-1工区の中央や東寄りと03-1工区1トレーナー南東部で条里界と推定される溝状遺構が検出されたほか、調査地東半の02-2工区・03-1工区1トレーナーにおいては、掘立柱建物・井戸・土坑墓・土器廃棄土坑などから構成される平安時代末の集落が確認され、当該期の遺構が検出されていた研究会1次調査の成果を補強することができた。

その研究会調査で遺構確認が行われた第2面では、3基の古墳を含む弥生時代後期から古墳時代の墳墓が、痕跡として確認された研究会検出分を合わせて41基検出され、調査地一帯が当該期の一大墓域であったことが明らかとなった。特に弥生時代末から古墳時代初頭の周溝墓群の中には、長方形の短辺側の一辺に陸橋部を設け、両側の周溝を拡張あるいは屈曲させてこの部分を強調した前方後方形を呈するものが存在しており、当地域における前方後方形周溝墓・前方後方墳の出現と変遷を明らかにしていくうえで注目すべき資料となろう。

第2面の諸遺構が検出される3層は、弥生時代後期後半に堆積した水成堆積物である。平均50cmの層厚を有するこの地層に覆われた第3面は、上層の各遺構面と比較すると遺存状況が著しく良好で、弥生時代後期中葉の旧地表面がほぼ当時に近い状態で残されていた。この遺構面では、堅穴建物10棟のほか井戸・土坑・溝状遺構・貯木遺構・自然流路などから構成される居住域と小区画水田・水路からなる生産域が確認され、当時の集落規模や集落構成遺構の配置、土地利用の実態を検討するうえで、非常に重要な調査所見が得られた。中でも9棟に周堤が備わっていた堅穴建物は、堅穴内部にも有機質の構造物が比較的良好的な状態で残されていたことから、建物本来の構造を復元していくうえで一般資料になるものと思われる。また、旧地表のベースである第3b面では、堅穴建物間や03-1工区1トレーナーの流路左岸域など、上の面で空白となっていた箇所を埋めるように29棟もの掘立柱建物や平地建物2棟が確認され、堅穴建物との併存関係や各建物の機能・性格の検討が課題となった。

続く第4面では、調査地の東側3分の2にわたる広い範囲で小区画水田が検出された。わずかに出土した遺物と水田形態から弥生時代前期から中期初頭に営まれたものと推定しており、水田選地や造成方法、灌漑のあり方など、当該期の水田開発の状況を捉えていくうえで好資料と言えるであろう。(岡本)

第2節 基本層序と造構面の認識

第Ⅱ章第1節でも述べたように、八尾南遺跡は、羽曳野丘陵・台地の北方に広がる沖積低地に立地している。既往の調査所見や今回の調査成果からも窺われるよう、沖積低地に展開する遺跡では、活発な河川活動によって水成堆積物が頻繁に供給され、多様な地層が重層して堆積している。遺跡全体における地形環境の変遷とそこで繰り広げられた人間活動との関係を捉えていくためには、まず調査地ごとの各層序と時期を的確に把握したうえで、近接する他の調査地点の層序との比較を通じて空間的にその広がりや変化を追い、それぞれの微地形や堆積環境の差異を明らかにすることが不可欠であろう。

以上の観点から、調査に当たっては、まず02-1工区において東西・南北両方向に地層観察ラインを設定して基本となる層序を把握し、2年日以降は前者のラインを東西に延長させて、層序の検証と側方への各地層の変化の状況を観察することとした。

今回の調査地の基本層序については、図8の右下に示した2ラインの断面を代表させて図8・9に模式的に示した。地層観察ラインが座標方位と一致せず、部分的に屈曲しているのは、既設構造物による攪乱を免れた部分の調査を少しでも多く行えるよう、倉庫基礎の地中梁を撤去した後の断面を利用したためである。それぞれの地層の詳細な層相については、断面図注記を参照していただくこととして、以下では図に表現できなかった点、特に造構面の認識や各地層の年代に関わる点を中心に概略を記しておきたい。なお、ここでの記述は調査地全体で層序の連続性が把握し得た5層までに止め、部分的な調査となった6層以下の各地層については、第V章の第7・8節で別途触ることとした。

1層 オリーブ灰色極細砂からなる現代水田作土層と次の2層との間に存在した層を、一括して1層と捉えた。やや明るいオリーブ灰もしくは灰色を基調とした粗粒シルトから細砂層で、全般的に粗砂から中砂（細粒）を多く含み、斑駁・マンガン斑が顕著に見られる。層厚は遺存状態の良いところで0.3m前後を測り、色調や粒度、包含する砂礫の量や粒径によって最高で4層に細分されるが、機械掘削終了時は各層が不揃いに露出し、地層自体が消失していた箇所も多く認められたことから、上面での造構精査は行っていない。下部の地層から13世紀後半から14世紀の瓦器小片が出土していることから、中世から近世にかけて形成された作土層と考えられ、このうち02-1工区のみに認められる最下部の緑灰色シルトは、北西へ50mほど離れたYS90-17次調査区〔原田1995〕において第2層aとされた明緑灰色極細砂と同一層の可能性がある。

2層 1層と洪水堆積物である3層との間に存在する層厚0.1m前後の地層である。攪乱の影響により1層と同様に遺存状態は不良であったが、1層を除去して検出される本層の上面を第1面と認識した。極粗砂から細粒主体の砂礫を多く含んだ灰色シルト層であるが、西へ向かうにしたがって粗粒となり、03-1工区2トレンチでは極細砂から細砂へと変化している。上部を中心にマンガン斑が非常に多く見られ、上下の地層の年代や検出遺構の時期から、平安時代後期に形成された地層と想定される。

3層 弥生時代後期に相次いで形成された流路を埋積する洪水流によってもたらされた堆積物で、2層を除去して検出される本層の上面を第2面として認識した。粘土質シルトから中砂といった比較的細粒の堆積物を主体とし、最下部には第3面を覆う灰オリーブもしくは明オリーブ色のシルトからシルト質極細砂層が堆積している。ただし、流路内は礫を含んだ中砂から極粗砂を主体とする砂礫層で充填され、その外側も上部を中心に粗粒の砂層が挟在している。層厚は、03-1工区1トレンチから02-1工区の中央を北流する流路の両岸で0.8m強、02-1工区西端の流路際で0.5m前後を有するものの、流

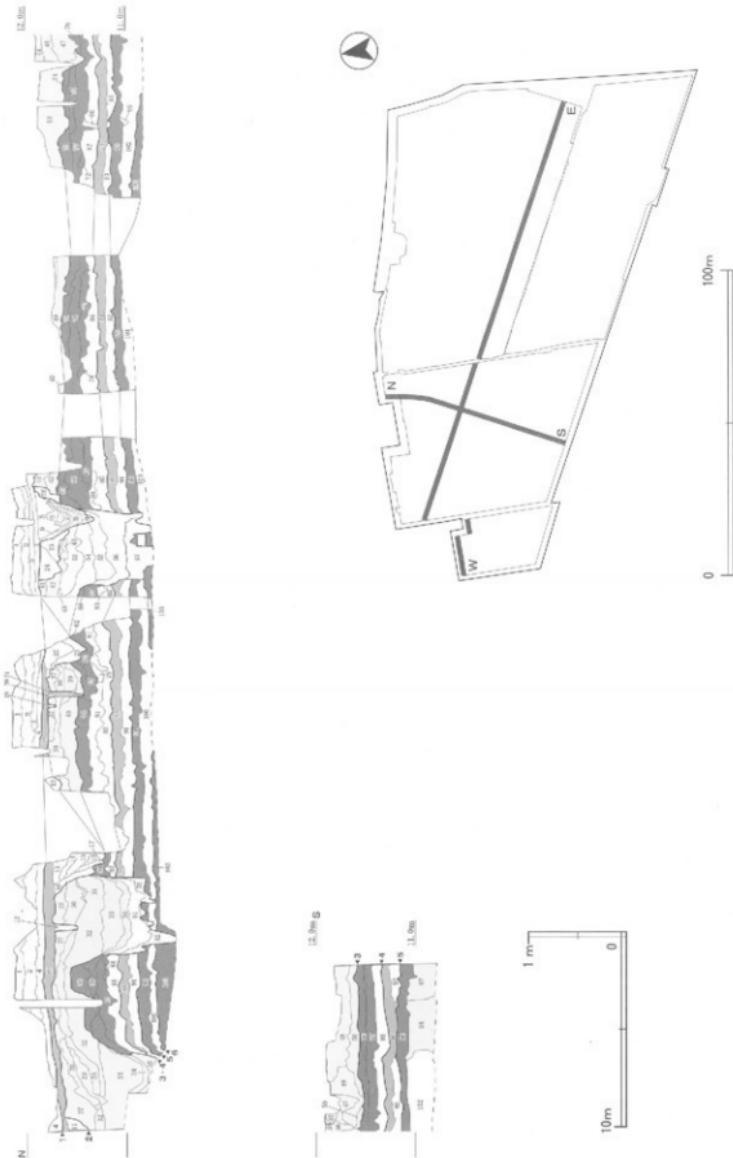


図8 基本層序（南北）模式図

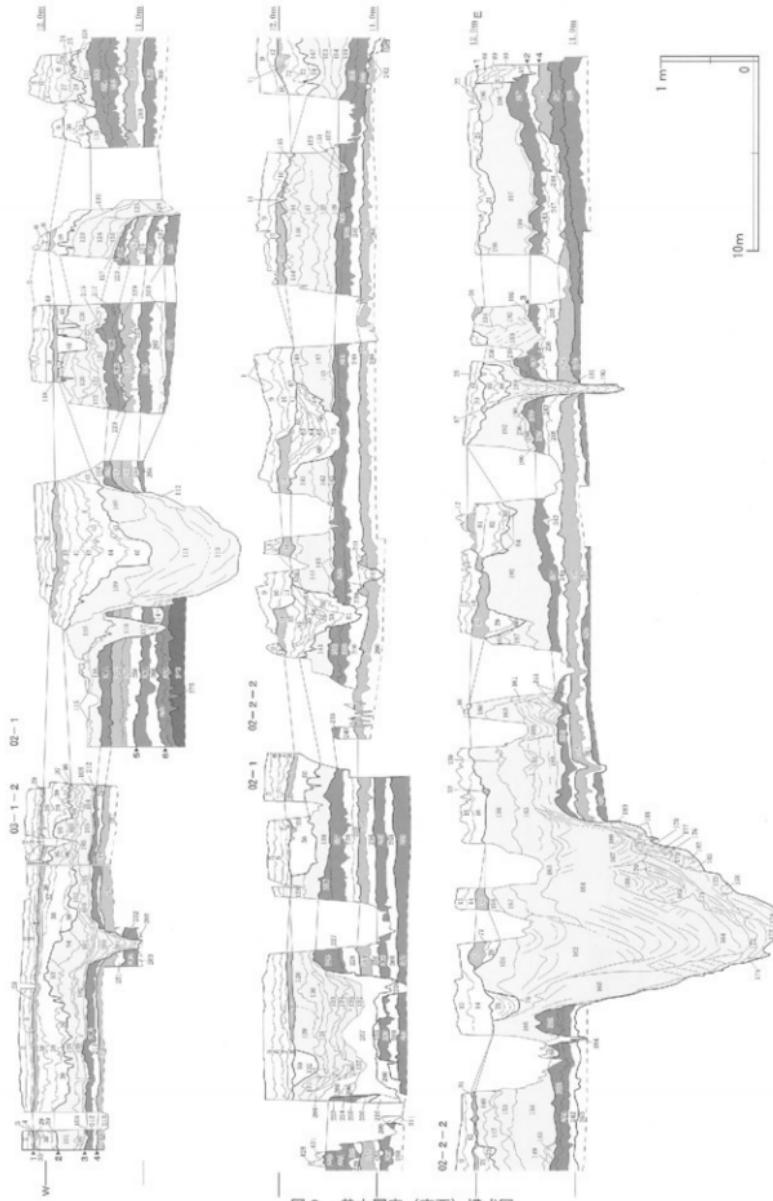


図9 基本層序(東西) 模式図

南北方向 断面注記

番号	色	層	粒度	特 徴
1 オリーブ灰	SGY6/1	模様砂	模様砂→個離（網見）を多く含むが、粗粒のものは少ない。底熱が多く見られる（1層）	
2 灰	7SY6/1	他離砂	底離砂→離離を多く含むが、より量は少ない。灰斑・マンガン斑が離離で、離化により褐色を帯びる（1層）	
3 灰	SY6/1	シルト頁岩離砂	柱状→離離を多少含み、マンガン斑が多く見られ、離化により褐色を帯びる（1層）	
4 緑灰	10GY6/1	シルト	離離の一種を離離を多少含み、下部では灰白（SY6/2）葉離砂の小ブロックが入る。マンガン斑が多く見られる（1層）	
5 黄灰	25YI6/1	粉離シルト	柱状→褐色を多く含み、灰斑（SY6/1）他離砂の小ブロックが入る。上部を中心にマンガン斑が多く見られる（1層）	
6 濃灰	10YR6/1	シルト	有機物を多く含み、同離砂（10YR6/1）葉離砂の小ブロックが入る（清1層+）	
7 淡灰一灰白	7SYR6/1~SYI7/1	移離砂→離離（下部）・移（上部）	柱状→離離を多少含み、薄葉離（SYI7/1）葉離砂の小ブロックが入る（清1層+）	
8 灰白	25YI7/1~SYI8/1	他離砂→離離	上方に向って離離となる。離離砂→離離の上部を中心にウミカが見られる（清1層+）	
9 灰	5Y5/1	シルト	柱状→離離を多少含み、灰斑（SYI8/1）他離砂の小ブロックが入る（清1層+）	
10 灰	10Y5/1	シルト	離離砂→離離を中心に粗離→離離を多く含む（2層）	
11 黄灰	5SY5/1	移離砂	離離砂→一層（網見）を非常に多く含む（網離基10層基底上）	
12 黄灰	25Y5/2	他離砂→中離（網離）	葉離砂を多く含み、灰斑（25Y5/6）シルトの小ブロックが入る（第2層離基10層底）	
13 黄灰	23YI5/1	シルト→葉離離砂	離離砂→中離（網離）を含む（第2層離基10層底上）	
14 黄灰	23YI4/1	シルト→葉離離砂	葉離砂→中離（網離）を多く含むが、13-12段少、離離の炭化物粒を含む（10層底10層離上中基）	
15 黄灰	25YI3/1	シルト→葉離離砂	葉離砂を中心に葉離→中離（網離）を多く含む（10層底10層離上中基）	
16 灰	N4	褐土質シルト	云々物性を云々多く含む、同離離砂（N4）	
17 黄灰	25Y5/1	シルト（離離）	葉離砂→一層（網離）を非常に多く含み、炭化物粒を多く含む（同離離砂10層離上中基）	
18 灰	5Y5/1	シルト（離離）	葉離砂→離離を多く含み、灰斑（25Y7/2）葉離砂のブロックが入る（同離離砂10層離上中底）	
19 灰	3Y5/1	シルト→葉離離砂	葉離砂→離離を多く含み、薄葉離（3Y5/1）	
20 灰	3Y3/1	移離シルト	移（3Y3/1）を少量含み、微離の炭化物粒を含む。下部を中心に40-60のブロックが入る（株2層離基上）	
21 灰	7SY3/1	シルト→葉離離砂	下部を中心に葉離砂→中離（網離）を多く含む（第2層離基上）	
22 灰	7SYR2/1	シルト→葉離離砂	葉離砂→一層（網離）を多く含み、微離物粒を多く含む（同成層4-同成層上半）	
23 黄灰	25Y1/1	シルト→葉離離砂	離離の半離（半離、1-13段）を非常に多く含み、炭化物粒を含む（同成層4-同成層上半）	
24 黄灰	25Y1/4	シルト→葉離離砂	葉離砂→中離（網離）を全く多く含み、離離の炭化物粒を含む（八尾層+1号層離上中基）	
25 灰	6SY1/1	泥質シルト	葉離砂→小層（離離）を多く含む、八尾層+1号層離上中基	
26 黄灰一灰	25Y1/1~SY3/1	シルト→葉離離砂	葉離砂→一段（離離）を多く含むが、下部で離離が見深い（八尾層+1号層離上中基）	
27 他一灰白	7SYR6/8~10YR6/2	葉離砂→離離	葉離砂→離離を受ける（7SYR6/2）を含むする離離もある（3層）	
28 オリーブ灰	25GY6/1	移離砂	葉離砂→離離を含むが、炭化により全層に離離を含む（3層）	
29 灰白	10Y7/1	移離砂	葉離砂→離離を多く含み、離離が全層となる箇所もある（3層）	
30 灰	10Y6/1	シルト（蛭塗）→シルト質	シルト質（蛭塗）を少量含み、マンガン斑が離離に見られる（3層）	
31 黄灰	25Y7/2	移離砂→離離	30-40離離で、絶対も離離。マンガン斑が離離に見られる（3層）	
32 灰	10Y6/1	シルト	葉離砂の葉離を含み、上部では葉離により褐色を帯びる（3層）	
33 冠リード・ブ灰	5GY7/1	シルト	葉離砂の葉離を含む（3層）	
34 褐灰	10E6/1	移質シルト	葉離砂の葉離を含む（3層）	
35 灰灰	10G6/1	移離砂	葉離砂の葉離を含む（3層）	
36 灰灰	10E5/1	砂質シルト	葉離砂の葉離を含む（3層）	
37 オリーブ灰	25GY6/1	移離砂	葉離砂→中離（網離）を含む。マンガン斑が多く見られ、離離により褐色を帯びる（3層）	
38 黄灰一褐	10YR6/6~7SYR6/2	紅灰→中離（網離）	葉離砂→中離（網離）をするが、一方では炭化は離離か、土壤化の影響を受けにくんだ色調を示すところも多い（3層）	
39 灰	SY7/2	移質シルト	葉離の中離（網離）を含む。マンガン斑が網離に見られる（3層）	
40 露オリーブ灰	5GY7/1	シルト	有機物の離離を含む。上部では離離により褐色を帯びる（3層）	
41 オリーブ灰	25GY6/1	他離砂	葉離砂→一層（網離）を多く含み、部分的にシルトのブロック状に集中するところもある（3層）	
42 灰	7SY6/1	移質シルト	部分的に葉離砂ワッフル状に入る。灰・マンガン斑を含む。離離は弱い（3層）	
43 黄灰	25Y6/1	離離→離離	葉離砂を多く含む。やや干し土の風味を含む。土壤化の影響を受けている可能性が高い（3層）	
44 冠リード・ブ灰	5GY7/1	他離砂	葉離砂を多く含む。離離により褐色を帯びる（3層）	
45 灰白	7SY7/1	葉離砂→離離	上部を中心に葉離→離離となり。灰斑・マンガン斑が離離に見られる（3層）	
46 冠リード・ブ灰	25GY7/1	シルト→シルト質	シルト質に向かって葉離→離離となる。中層には葉離→中離のブロックが入る。上部では葉離が離離に見られる（3層）	
47 灰白	10YR7/1	葉離砂→離離	3層離離頂上の洗滌内離離層。熟心付光を重心に小離（~1mm）を少量含む（3層）	
48 露オリーブ灰	5GY7/1	シルト葉離離砂→離離	シルト葉離離砂→離離を含む。離離層には葉離→中離のブロックが入る（3層）	
49 露オリーブ灰	25GY7/1	シルト葉離離砂→葉離砂	上部に向かって葉離となる。マンガン斑の離離に見られる（3層）	
50 冠リード・ブ灰	5GY7/1	シルト（網離）→シルト質	シルト（網離）→シルト質（葉離）と見受けられる。上部では葉離が多い。第3面水田面を覆うところでは葉離は離離により褐色を帯びる（3層）	
51 磬モリーブ灰	25GY4/1	シルト	葉離砂→葉離を多く含む。炭化物粒も多く含む。灰モリーブ（25GY4/1）シルトのゾックが多く入る（磐4層3粒合）	
52 灰（7SY5/1）シルト・明礬灰→綠灰（7SY5/1-6/1）シルト・灰（7SY5/1-6/2）			シルト・明礬灰→綠灰（7SY5/1-6/1）シルト・灰（7SY5/1-6/2）	
53 灰	5Y5/1	シルト（網離）	葉離砂→中離（網離）を多く含み、炭化物粒を少額含む。マンガン斑が多く見られ、褐色を帯びる（磐6層2粒上）	
54 灰	5Y9/1	シルト	葉離砂→中離（網離）を多く含むが、53と比較して離離となる。灰灰（5Y9/1）・明礬灰（7SY5/1）シルトのゾックが多く入る（磐6層1粒上）	
55 オリーブ灰	25GY6/1	移土質シルト	灰灰（5Y9/1）シルト（網離）を多く含み、炭化物粒が多く含む。明礬灰（7SY5/1）シルトのゾックが多く入る（磐6層1粒上）	
56 灰	5Y5/1	シルト	葉離砂→中離（網離）を多く含み、炭化物粒が多く含む。明礬灰（7SY5/1）シルトのゾックが多く入る（磐6層1粒上）	
57 灰灰（25Y5/1）シルト・オリーブ灰（25GY5/1）土質質シルト・灰（7SY5/1-6/1）土質質シルト（磐6層1粒上）			シルト→離離を多く含み、炭化物粒を少額含む。灰灰（5Y5/1）シルトのゾックが入る（4a層）	
58 黄灰	25Y5/1	シルト	葉離砂→離離を多く含み、炭化物粒を少額含む。灰灰（5Y5/1）シルトのゾックが入る（4a層）	

番号	色	類	粒 度	特 製
59 黄灰	2SY6/1	シルト		55より色濃く、細粒～粗粒を中心に粒度も混在する。細粒の粒化物を含む[4 a 級]
60 黄灰	2SY4/1	シルト		粗粒～細粒を中心に粒度も混在する。細粒の粒化物を含む[4 a 級]
61 灰	7SY5/1	粗砂～細砂		シルトが多く含む。粒化物が少ない[4 a 級]
62 灰	5Y5/1	シルト		細砂～細粒を多く含む。明瞭な(15GY7/1)シルトのブロックが入る。マンガン鉱が多く見られ、褐色を帯びる[灰火成岩物・初期風化]
63 灰	5Y6/1	砂質シルト		泥砂～細粒を多く含み、炭化物鉱を少含む。マンガン鉱が多く見られ、褐色を帯びる[灰火成岩物・初期風化]
64 黄灰	2SY3/1	シルト(泥灰)		泥砂～細粒を多く含む。64よりは浅灰。明瞭な(15GY7/1)シルト・砂のブロックが少々入る。マンガン鉱多く見られ、褐色を帯びる[灰火成岩物・中期風化]
65 灰	5Y5/1	シルト		粗粒～細粒を多く含む。炭化物鉱を少含む[4 a 級]
66 黄灰	2SY4/1	(砂質)シルト		粗砂～細粒を多く含む。炭化物鉱を少含む[4 a 級]
67 黄灰	2SY3/1	褐鐵鉄		粗砂～細粒を多く含む。63と同様して黄色は減少する[4 a 級]
68 黄灰	2SY3/1	シルト		粗砂を多く含む。土壌の成岩度は低め[4 a 級]
69 灰	7SY5/1	シルト(黄鐵鉄砂～鐵砂)		粗砂～細粒を多く含む。有機物を少含む[4 a 級]
70 黄灰	2SY4/1	シルト		70より下には黒褐色の鉄砂層。中砂～細粒を多く含む。有機物を多く含む[4 a 級]
71 苜蓿	2SY3/1	シルト		粗砂～細粒を多く含む。中砂化の成岩度は高い[4 a 級]
72 灰	10Y6/1	シルト(粗粒)		中砂～細粒を多く含む。明瞭な(15GY7/1)シルトのブロックが少々入る[灰火成岩物]
73 灰	5Y5/1	シルト		粗粒～細粒を多く含む。炭化物鉱を含む。マンガン鉱が多く見られ、褐色を帯びる[4 a 級]
74 オリーブ灰	2GY6/1	シルト(粗粒)		炭化物鉱を多く含む。炭化物鉱を含む。マンガン鉱が多く見られ、褐色を帯びる[4 a 級]
75 オリーブ灰	2GY6/1	シルト		炭化物鉱を多く含む[4 a 級]
76 灰	7GY5/1	軽土質シルト		地盤の細粒物を多く含む[4 a 級]
77 オリーブ灰	5GY5/1	シルト		泥砂～細粒を多く含み、炭化物鉱を多く含む[4 a 級]
78 鋼鉄	7SGY6/1	シルト		中砂～粗粒を多く含む。上炭化度の度合いは低い[4 a 級]
79 淡	7SY5/1	シルト(鈍鉛)		粗砂～中粗粒を多く含む。81のシルトが多くの入る[淡 3 b 地質接続100張土]
80 灰	7SY5/1	シルト		消火オリーブ灰(15GY7/1)シルトのブロックが多く見れる[淡火成土]
81 灰	10Y6/1	シルト(透紅)		粗粒～中粗粒の透紅を含む。有機物を多く含む[4 a 級]
82 黃鐵鉄	7SGY7/1	褐土質シルト		酸化により褐色を帯びる[4 a 級]
83 にぶい黄	2SY6/1	細粒砂		粗砂～細粒を多く含む。強化により橙色を帯びる[4 a 級]
84 灰	5Y6/1	シルト(黄鐵鉄砂)		粗粒～細粒を多く含む。強化により褐色を帯びる[4 b 級]
85 黃鐵鉄	5GY7/1	褐土質シルト(シルト)		酸化が進むと、上部を多くして強化を促進する[4 b 級]
86 鐵礫鉄	7SGY7/1	シルト(透紅)		中砂～粗粒を少々含み、微細の鉄酸化物を含む[4 b 級]
87 オリーブ灰	2GY6/1	シルト(透紅)		粗砂～細粒を多く含み、コロナ状を示す風化層もある[4 c 層]
88 灰	7SY5/1	シルト		有機物を多く含む。やや茶色を帯びる[5 a 級]
89 灰	10Y5/1	粘土質シルト		有機物を多く含む[5 a 級]
90 灰	5Y5/1	シルト		発達の細粒物～細粒を含み、有機物を多く含む[5 a 級]
91 明礬K(～鐵鉄)	7SGY7/1-6/6	シルト		[5 b 層]
92 鋼鉄	5HG6/1	歯土質シルト		[5 b 層]
93 銀灰	5G5/1	シルト		有機物を少々含む。南端では灰(7SY5/1)を留める[5 b 級]
94 灰	7SY5/1	褐土質シルト		西側で多く含み、盆地の多い下部は褐色を呈する[6 c 級]
95 灰	10Y4/1	歯土質シルト		有機物を多く含む[6 b 級]
96 灰	NB	シルト		粗粒～細粒を多く含み、部分的には砂層が主となる風化もある。有機物を多く含み。IC(7ZJ6/1)シルトのブロックが入る[6 a 級]
97 灰	10Y6/1	粗砂		中砂～粗粒を多く含む[6 a 級]
98 北白	5Y7/2	粗砂～細砂		中炭(15GY)を少含む。風化4月上]
99 オリーブ灰	7SY5/2	粗砂～中粗粒		シルトと多く含む[6 b 級]
100 鋼鉄	5HG6/1	粘土質シルト		有機物を多く含む。やや褐色を呈する[6 b 級]
101 細灰	10GY6/1	シルト(粗粒)		微量の炭化物鉱を含む[6 b 級]
102 黃白	7SY8/2-10Y7/1	粗粒シルト		[6 c 級]
103 灰	7SY4/1	粘土質シルト		有機物を多く含む[6 c 級]
東西南向 断面注記	色	類	粒 度	特 製
1 オリーブ灰	2SGY5/1	褐鐵砂		風化～細粒を多く含む[消耕作土]
2 灰	7SY6/1	粗砂		粗粒含む。上半部化石化しく、明瞭な(10Y6/6)を呈する[1層]
3 白	5Y7/3	砂		細粒を多く含む。上半部化石化し、明瞭な(10Y6/6)を呈する[1層]
4 オリーブ灰	7SY5/2	粗砂		粗粒を多く含む。無化石化し、可溶性(10Y6/6)を呈する[1層]
5 オリーブ灰	5GY6/1	褐鐵砂		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
6 灰	7SY5/1	粗砂		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
7 灰	5Y6/1	シルト(黄鐵鉄砂)		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
8 鐵鉄	10GY6/1	シルト		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
9 オリーブ灰	2GY6/1	シルト(粗粒)		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
10 オリーブ灰	2GY6/1	粗質シルト		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
11 オリーブ灰	2GY6/1	砂質シルト		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
12 オリーブ灰	2GY6/1	砂質シルト		粗粒～中粗粒を多く含む。2.7m
13 灰	7SY5/1	砂質シルト		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。マンガン鉱が多く見られる[1層]
14 灰	10Y6/1	シルト(粗粒)		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む[1層]
15 灰	7SY5/1	シルト(黃鐵鉄砂)		マンガン鉱が多く見られ、粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。強化(5 a 級)
16 灰	10Y6/1	シルト(黃鐵鉄砂)		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。マンガン鉱が多く見られ、強化により褐色を帯びる[1層]
17 灰	7SY5/1	シルト(後退砂)		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m
18 灰	10Y6/1	シルト(後退砂)		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m
19 灰	7SY6/1	シルト(黃鐵鉄砂)		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m
20 オリーブ灰	2GY6/1	砂質シルト		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m
21 灰	7SY6/1	シルト(透紅)		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m
22 オリーブ灰	2GY6/1	砂質シルト		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m
23 オリーブ灰	2GY6/1	砂質シルト		粗粒～中粗粒(透紅)を多く含む。2.7m

番号	色	國	粒度	特 徴
21	灰	75YR1/1	極細粉	極細粉～粗粉を多く含む[清1深土]
22	黄灰	75YR1/1	シルト	[黄1浅土]
23	褐紫一黃紫	25YR3/3~20YR7/6	礫砂一粗砂	極細粉～粗砂を少含む[清1浅土]
27	黑白	M7/2	粗砂一細砂	上部には灰(10Y6/1)シルト質細砂層・黄灰(25Y6/1)・母質シルトのブロック入る[清1浅土]
28	灰青	25Y7/2	粗砂一過砂	極細粉～粗砂(粗粉)を多く含む[清1浅土]
29	灰	25Y6/2	極細粉～粗粉	極細粉を多く含む・マングン斑が多く見られる。底平により粗粒となる[2層]
30	灰	10Y5/1	シルト	極細粉～粗粉を多く含む・粗砂を中心にマングン斑が多く見られる。底上部は顕化により少し褐色を帯び、既述のように表面の土はどの時代を保つする間隔がある[2層]
31	灰	10Y5/1	シルト	極細粉～粗粉(中粒)・15cm)を少含む。酸化によりやや褐色を帯びる[2層]
32	灰	75Y6/1	シルト質粗砂	中粒～細粒を多く含む。マングン斑が多く見られる[2層]
33	オリーブ灰	25G6Y6/1	砂質シルト	粗砂～中粒(中砂)・~12mm)を多く含む。マングン斑が多く見られる[2層]
34	オリーブ灰	25GY7/1	砂質シルト	粗砂を多く含む[古1薄土]～[薄1]
35	オリーブ灰	25GY5/1	砂質シルト	粗砂を多く含む[古1薄土]～[薄1]
36	褐灰紫	25Y5/2	中砂	粗砂を多く含む[古1薄土]～[薄1]
37	黄灰	25Y4/1	中砂～粗砂	粗砂を多く含む[古1薄土]～[薄1]
38	黄灰	25Y4/1	粗砂粉～粗粉	中砂を少含む。上半部に黒鐵(10YR3/1)・シルト(過砂を多く含む)のブロックが多く入る[古1薄土]～[薄1]
39	褐灰	10YR5/1	砂質シルト	粗砂を少含む。最下部に3層である灰白(25Y7/1)・シルトのブロックが非常に多く入る[古1層・土下部]
40	灰	5Y5/1	シルト(粗粒)	極細粉～中粒(粗粒)を多く含み、酸化物を含む。マングン斑が多くの見られ、顕化により褐色を帯び[古1薄土上層]
41	黄灰	25Y5/1	シルト(過砂)	過砂～中粒(粗粒)を多く含み、酸化物を含む。既述により粗粒となる[古1薄土]
42	褐灰	10YR4/1	シルト(粗粒)	過砂～中粒(粗粒)を多く含み、上層より含水量が増加する。酸化物粒を少含み、既述のブロック入る。底砂・マングン斑が多くの見られる[清1薄土・上層]
43	褐灰	10YR5/1	シルト	灰・粗砂を多く含む[古1薄土上層]
44	黄灰	25Y4/1	砂質シルト	粗砂～中粒(粗粒)を少含む。酸化物を含む[清1薄土上層]
45	褐灰	10YR5/1	砂(中砂)	粗砂～中粒(粗粒)を少含む[古1薄土上層]
46	褐紫	25Y3/1	褐土質シルト	酸化物の鉱物を多く含む[清1薄土上層]
47	黄灰	25Y4/1	シルト質粗砂	粗砂～細砂を非常に多く含む[清1薄土上層]
48	黄灰	25Y5/1	シルト質粗砂	粗砂を少含む。既述の酸化物を含む。マングン斑が多く見られる[古1薄土2回汚泥土]
49	黄灰	25Y5/1	粗砂粉～粗粉	粗砂を少含む。マングン斑が多くの見られる。色調の異常はあるが、土粒の度合いは弱い[第2層没後裸地上]
50	黑	73YR2/1	シルト質粗砂	粗砂粉～中粒(粗粒)を多く含む。酸化物粒を少含む[第2層老鷹礁生]
51	褐灰	25Y4/1	シルト質粗砂	過砂～中粒(粗粒)・~12mm)を多く含む。酸化物粒を少含む[古1薄土上層]
52	灰	10Y5/1	シルト	極細粉～粗粉(粗粒)を多く含む。マングン斑が多くの見られ。既述により上部を中心には褐色を帯びる[河床蓋21層地盤上層]
53	オリーブ灰	10Y3/1	シルト	粗砂～中粒(粗粒)を非常に多く含む[河床蓋21層地盤上層]
54	オリーブ灰	25GY4/1	シルト	灰粗砂を少含む[河床蓋21層地盤上層]
55	灰	25Y4/1	シルト	下部を非常に細砂を主体とする鉱物を比較的多く含む[河床蓋21層地盤上層]
56	オリーブ灰	5Y3/1	シルト	既述の鉱物を多く含む[清1薄土上層]
57	褐紫	25Y3/1	シルト	粗砂～細砂を非常に多く含む[清1薄土上層]
58	褐紫一灰	25GY3/1~5Y4/1	粘土質シルト～シルト	中粒付近に鉱物を多く含む。既述の酸化物を少含む[河床蓋21層地盤上層]
59	灰	5Y5/1	シルト(粗粒)	過砂～中粒(粗粒)を多く含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
60	灰	10Y4/1	シルト	過砂～細砂を非常に多く含むが、酸化物粒を少含む。既述の酸化物を少含む[河床蓋21層地盤上層]
61	灰(35Y)	粘土質シルト・明オリーブ・灰	(5GY7/1)・粘土質シルト	既述の酸化物を少含む[河床蓋21層地盤上層]
62	灰	(25GY6/1)	シルトのブロック入粗砂土	既述の酸化物を少含む[河床蓋21層地盤上層]
63	オリーブ灰	5T3/1	シルト(世紀)	中砂～中粒(粗粒)を多く含む。酸化物粒を少含む[河床蓋21層地盤上層]
64	黄灰	25Y4/1	シルト	極細粉～小粒(細粒)を多く含む。既述により褐色を帯びる[河床蓋21層地盤上層]
65	オリーブ灰	5Y3/1	シルト(粗粒)	粗砂～中粒(粗粒)を多く含む[河床蓋21層地盤上層]
66	褐褐	25GY3/1	褐土質シルト	酸化物を少含む[河床蓋21層地盤上層]
67	黄灰	25Y4/1	シルト	粗砂～細砂を少含む。既述の酸化物を少含む[河床蓋21層地盤上層]
68	灰	10Y5/1	シルト質粗砂	中砂～細砂を多く含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
69	灰	10Y5/1	シルト	中砂～細砂を多く含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
70	褐灰	75GY6/1	シルト	既述の一部(5GY7/1)を少含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
71	灰	10Y5/1	シルト	既述の一部(5GY7/1)を少含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
72	黄灰	25T3/1	粗砂粉～粗粉	既述の一部(5GY7/1)を少含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
73	灰	5Y5/1	極細粉～粗粉	既述の一部(5GY7/1)を少含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
74	オリーブ灰	25GY5/1	砂粉～中砂	既述の一部(5GY7/1)を少含む。既述により粗粒となる[河床蓋21層地盤上層]
75	黄灰	(25Y6/1)	シルト質粗砂・灰(5Y5/1)	中砂～粗砂を少含む[河床蓋21層地盤上層]
76	褐褐	25GY4/2	極細粉～粗粉	粗砂～中粒(中砂・~25mm)を多く含む[河床蓋21層地盤上層]

番号	色	調	粒 度	特 徵	備 考
27	灰	25Y7/2	細緻～粗砂	粗砂～中粒（中粒、~15mm）を多く含む [山地3带土上層]	
28	灰	5V4/3	砂粒～粗砂	砂粒～粗砂を多く含む。全体的に形状が古く、無化物粒を多く含む [山地2带土下層]	
29	オリーブ灰	25GY5/1	砂質シルト	中粒～細緻砂を多く含む。全体的に形状が古く、無化物粒を多く含む [山地4带土下層]	
30	灰	10Y6/1	シルト	中粒～細緻砂を多く含む。無化物粒を多く含む [山地4带土下層]	
31	薄オリーブ灰	25G14/1	シルト	粗砂～中粒（無機）を多く含む。無機～マンガン斑が多く見られ、酸化によりやや褐色を帯びる [山地3带土上層]	
32	灰	5V4/1	シルト質粗砂	粗砂～中粒（中粒、~12mm）を多く含む。下部では灰 (10Y6/1) シルト質粗砂や中粒～粗砂の小プロックが入る [山地3带土上層]	
33	灰	5V4/1	シルト	中粒～粗粒の土壌を含み、下部では無化物粒を多く含む [山地3带土上層]	
34	灰 (5V5/1)	シルト（中粒～無機砂を多く含む）・ 「朝オリーブ灰」 (SGY7/1) 細緻沙～粗砂のブロック混合土	シルト	粗砂～中粒（無機）を多く含む。無機～マンガン斑が多く見られ、酸化によりやや褐色を帯びる [山地3带土上層]	
35	灰	5V6/1	シルト質粗砂	粗砂～中粒（無機）を多く含む。無機～土壌ではやや褐色となる [古場3带土上層]	
36	黄灰	25Y5/1	シルト	全体的に均質であるが、界面ではやや輕度となる [古場3带土上層]	
37	オリーブ灰	25GY5/1	砂質シルト	粗砂～無機を多く含む。下部では朝オリーブ灰 (SGY7/1) シルト質粗砂の小プロックが入る [古場3带土上層]	
38	灰	10Y5/1	シルト	粗砂～無機を多く含む。無機～マンガン斑が多く見られ、全体的に赤褐色を帯びる [古場3带土上層]	
39	黄灰	25Y5/1	シルト	粗砂～中粒（中粒、~10mm）を多く含む。無機～マンガン斑が多く見られ、全体的に赤褐色を帯びる [古場3带土上層]	
40	灰	5V5/1	シルト	無機～中粒（無機）を多く含む。下部では朝オリーブ灰 (SGY7/1) シルトの小ブロックが入る [古場3带土上層]	
41	黄灰	25Y4/1	シルト	粗砂～中粒（無機）を多く含む。無機～土壌では無機～マンガン斑が多く見られ、酸化により褐色を帯びる [古場3带土上層]	
92	灰 (GY4/1)・粘土質シルト (5a帶)・朝オリーブ灰 (SGY7/1)・シ ルト (3b層) のブロック混合土				
42	灰	25Y5/2	粗砂～極粗砂	粗粒状の砂既多く見られる [3層]	
43	灰白	25T5/1	沙質シルト	上半中にマンガン斑多く見られる [3層]	
44	灰白	25Y5/1	沙質シルト	上半中にマンガン斑多く見られる [3層]	
45	灰白	25Y7/1	沙質シルト	中粒～細緻砂を多く含む。無機～無機を多く見られる [3層]	
46	灰白	25Y8/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
47	灰白	25Y8/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
48	灰白	25Y8/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
49	灰白	25T8/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
50	灰白	25Y8/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
51	灰白	5Y7/1	粗砂	無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
52	灰白	5V8/1	沙質シルト	無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
53	灰白	5V8/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
54	河床	10Y7/1	中粒～粗砂	粗砂～中粒～粗砂を多く含む。下部には10cmの小ブロックが入る [3層]	
55	灰白	25T7/1	沙質シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
56	灰白	25Y6/2	シルト	無機～無機を多く含む。無機～無機を多く見れる [3層]	
57	朝オリーブ灰 (1-2) 朝オリーブ灰 (2)	25GY7/1-2	粗質シルト～粗砂	上方に向かって軽度となる [泥炭1带土上層]	
58	灰	75Y6/2	シルト (無機)	マンガニ斑が多く見られる [泥炭1带土上層]	
59	朝オリーブ灰	25GY7/1	砂質シルト～粗砂	「泥炭」・粗砂土上層	
60	朝オリーブ灰	72N3-2-6/2	粗砂～中粒 (中粒)	粗砂～粗砂～中粒 (中粒) [泥炭1带土中層]	
61	灰黄	25T7/2	粗砂～中粒 (粗粒)	上方に向かって軽度となる [泥炭1带土下層]	
62	灰白	5V7/1	粗砂～中粒	粗砂～中粒 [泥炭1带土上層]	
63	灰黄～褐灰岩	25V6-2-5/2	後粗砂～中粒 (颗粒)	粗砂～中粒までの砂を含む [泥炭1带土下層]	
64	灰黄	25V6-2	中粒～粗砂	粗砂～中粒までの砂を含む [泥炭1带土下層]	
65	灰白	5V7/1	粗砂	粗砂～中粒 [泥炭1带土上層]	
66	明礬灰	10GY7/1	粘土質シルト	有機物の浮遊物を含む。上部を中心に明礬が多く見られる [3層]	
67	褐灰	10G5/1	粘土質シルト	泥炭～無機～無機 (明礬～粘土質シルト) が混在。無機化物質を多く含む [泥炭4带土下層]	
68	灰	75Y6/1	シルト～粗粒粗砂	無機化物質を含む。土化灰の影響受ける [3層]	
69	朝オリーブ灰	5V7/1	沙質シルト～シルト質粗砂	無機の細胞を含む [3層]	
70	灰	10Y6/1	シルト	粗砂～中粒を多く含む。上方に向かって軽度となる [泥炭1带土上層]	
120	灰黃	25Y6/2	中粒～中粒 (中粒)	粗砂～中粒～粗砂。上部は粗粒～中粒細砂。中粒は粗粒を中心とするが、10cm後の層も含む [3層]	
121	朝オリーブ灰	5CY7/1	シルト	粗砂～中粒を多く含む。粗砂～中粒 (粗粒) も少含む。場所により細粒～中粒が主体となるところもある [3層]	
122	灰黄	25Y6/1	粗粒砂～粗砂	[3層]	
123	灰	10Y6/1	シルト	マンガニ斑が多く見られる [3層]	
124	朝オリーブ灰	5CY7/1	シルト	黒墨～無機砂～粗砂を含む。マンガニ斑が多く見られる [3層]	
125	朝オリーブ灰	6CY7/1	シルト	粗砂～粗粒のブロック [3層]	
126	弱黃褐色～灰白	25Y7/6-10Y7/1	シルト質粗粒粗砂～粗砂	粗粒的にラミナが認められる [5層]	
127	朝オリーブ灰	6CY7/1	粘土質シルト	[5層]	
128	黃褐色～灰褐色	10Y7/6-6-7.5Y16/2	砂質～中粒 (颗粒)	粗砂～中粒を主とし、上方に向かって細粒となる。上部化の影響を受けやや褐色を呈するところも多い [5層]	
129	灰	5V3/1	粗粒砂	粗砂～中粒 (粗粒) を多く含む。粗粒から多く見られる。土壤化的影響受ける [3層]	
130	灰	75Y6/1	シルト～粗粒粗砂	粗粒の細胞を含む。近鉄が多く見られる [3層]	
131	灰	75Y6/1	シルト	土壤化的影響受ける [3層]	
132	灰黄	25Y6/1	粗粒砂～粗砂	粗粒砂を多く含む。土壤化的影響受ける [3層]	
133	オリーブ灰	25GY6/1	シルト	粗粒な砂～細粒を含む。無機化物質が多く見られ、全体に褐色を呈する。51の小プロックがある [3層]	
134	灰	10Y3/1	シルト	粗砂～中粒を多く含む。無機化物質を含む [3層]	
135	灰	10Y6/1	粘土質シルト	粗砂～中粒～粗砂を含む。無機化物質を含む [3層]	
136	灰	5V5/1	シルト	粗砂～中粒～粗砂を含む。無機化物質を少量含む [3層]	
137	弱黃灰	75GY7/1	粘土質シルト	105よりわずかに巨粒で、粗粒を含む。無機化物質を含む [3層]	
138	灰	75Y6/1	砂質シルト～シルト質粗砂	無機化物質が多く見られ、全体的に鐵化が著しい。上方に向かって粗粒となる [3層]	

番号	色	固	粒	度	特	徴
129 鮎原	75GY6/1	シルト	粘～透水性多く含む。マンガン斑が多く見られ、酸化によりやや褐色を帯びる。炭化物粒を少々含む。粘性干あり。	〔3層〕		
140 オリーブ灰	5GY6/1	砂質シルト	粘～透水性多く含む。全体的にマンガン斑が多く見られ、下部を中心に細胞多く含む。粘性弱い。	〔3層〕		
141 無オーラーブ灰	5GY7/1	砂質シルト～シルト質細胞	表土はシルト質細胞。上部はシルト質細胞を主体とするが、層の中ほどには灰 (5GY6/1) 中砂～細胞が挟在する。	〔3層〕		
142 第オーラーブ灰	5GY7/1	シルト質細胞砂～細胞砂	表土部は細胞砂。裏上部はシルト質細胞を主体とするが、層の中ほどには灰 (5GY6/1) 中砂～細胞が挟在する。	〔3層〕		
143 第オーラーブ灰	5GY7/1	シルト	地盤で岩盤比較的強い。マンガン斑が多く見られる。	〔3層〕		
144 オーラーブ灰	25GY3/1	シルト (細粒)	粘～透水性多く含む。底質～マンガン斑が多く見られる。	〔3層〕		
145 オーラーブ灰	25GY5/1	シルト	地盤沙を多く含み、底質～少量含む。	〔3層〕		
146 灰	10GY1/1	シルト質細胞砂	細胞～中砂 (細粒) を少々含み、炭化物粒を少々含む。第オーラーブ灰 (5GY7/1) 地盤沙のブロックが少量入る。	〔3層〕		
147 第オーラーブ灰	5GY7/1	シルト質細胞砂	中砂～細胞砂を多少含み、根糸の炭化物粒を含む。	〔3層〕		
148 風灰～灰	5GY7/1～10GY1/1	透水～透水	「1」は風灰、下部は透水～透水を主体とする。後部では中砂 (細粒) を含む。	〔3層〕		
149 第オーラーブ灰	5GY7/1	粘土質シルト～透水細胞	地盤で岩盤比較的強い。中砂 (細粒) で、根糸がよく、上部を中心に根糸を帯びる。上方に少々かって粗粒となる。	〔3層〕		
150 黒灰	25GY1/1	粘土質シルト	粗粒を多く含む。二洗泥移動少。	〔3層〕		
151 第オーラーブ灰	25GY7/1	粘土質シルト	「1」は風灰。	〔3層〕		
152 黒灰	75GY5/1	粘土質シルト	二洗泥移動少。	〔3層〕		
153 灰白	5Y7/1	砂～透水	「1」は風灰～中砂～細粒で、上方に向かって透水となる。	〔3層〕		
154 にぶい黒削～黒	5TY5/4～10YR7/8	透水細胞～透水	底分の透水により根～部は強いのみを告げる。	〔3層〕		
155 灰	5GY4/1	シルト質細胞砂	細胞砂～中砂 (細粒) ～10mm) を多く含む。炭化によりやや褐色を帯びる。	〔3層〕		
156 にぶい黒削	5TY5/3	透水～中砂 (細粒)	底分の光亮により全体的に赤みを帯びる。根糸 (25GY6/1) の中砂も比較的多く含む。	〔3層〕		
157 風灰～灰	5TY7/2～75GY6/1	透水細胞～中砂	上部は土状粗粒 (根糸細～根糸土柱) で、わずかに粘性を呈する。根糸砂を少々含む。	〔3層〕		
158 第オーラーブ灰	25GY7/1	透水細胞～中砂	上部は土壤化の影響を受け、やや褐色を呈する。	〔3層〕		
159 第オーラーブ灰	25GY7/1	中砂～細胞砂	中砂～中砂 (細粒) ～10mm) を多く含む。	〔3層〕		
160 灰	75GY1/1	砂～透水	「1」は中砂 (細粒) を多く含み、炭化の炭化物粒を含む。	〔3層〕		
161 黒削～灰白	75GY2/8～25GY8/1	シルト質細胞～中砂	上部に内凹で中砂となら、下部では底質～中砂 (中砂) ～少量含む。下部は底分の沈炭が顯著であるが、一部ラメラが認められる。	〔3層〕		
162 にぶい黒削	10YR7/2～2/4	中砂～中砂 (細粒)	粗粒～透水細胞を主体とし、後進路の中 (～35m) も少量含む (後路3堆土)。	〔3層〕		
163 黒削～リーフ	75GY2/4	シルト～透水細胞～細胞	上部では下方からの赤鉄の鉻鉬が多く見られる (流路3堆土)。	〔3層〕		
164 風灰～浅黄	5TY7/2～2/3	中砂～透水細	上部では底質～透水細胞を多く含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
165 風灰～浅黄	5TY7/2～2/3	中砂～中砂 (細粒)	会社側にて中砂～透水細胞を作成するが、「1」では中砂 (粗粒) ～30m) を多く含む。164との間に底分の沈炭が認められる。	〔3層〕		
166 オーラーブ灰～黒	5GY5/1～5TY7/1	シルト～細砂	中砂に細胞を挟み、上下にシルト～根糸砂が層積する。上部では透水細胞を多く含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
167 灰	5Y7/1	中砂～中砂 (細粒)	(流路3堆土)			
168 風灰～浅黄	10YR5/1～23GY7/4	シルト～透水細胞～細砂	「1」は底質～透水細胞を含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
169 風灰～灰白	10YR5/1～75GY7/4	シルト～透水細胞～細砂	(流路3堆土)			
170 黒削～白	10YR7/8～5TY7/1	中砂～中砂	(流路3堆土)			
171 風灰～灰	5Y7/1～10GY5/1	透水シルト～中砂	下部は細砂～中砂、上部は砂質シルト～透水細胞を主体とする。上部には透水細胞を多く含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
172 灰	10Y5/1	シルト	細胞を多く含む。部分的に小粒 (25GY7/1) ～細砂～中砂の薄層を挟む (流路3堆土)。	〔3層〕		
173 風灰	5Y7/1	砂～透水細胞 (粗粒)	下部は細胞砂～中砂 (粗粒)、1層は中砂～透水細胞を主体とし (流路3堆土)。	〔3層〕		
174 灰白	NB	粗砂～細胞	段丘部で中砂の中砂 (10GY4/1) を含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
175 灰	72Y4/1	粘土質シルト	細砂を少々含む。透水細胞を少々含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
176 深灰	10GY5/1	粘土質シルト	透水細胞を少々含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
177 オーラーブ灰	25GY5/1	粘土質シルト	透水細胞を少々含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
178 深灰	10GY6/1	粘土質シルト	透水細胞を少々含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
179 第オーラーブ灰	25GY4/1	粘土質シルト	透水細胞を少々含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
180 細灰	72GY6/1	粘土質シルト	(流路3堆土)			
181 透水～リーフ	25GY4/1	シルト	細砂～透水細胞を多く含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
182 深灰	72GY5/1	粘土質シルト	透水細胞を少々含む。炭化物粒を少々含む (流路3堆土)。	〔3層〕		
183 第オーラーブ灰	5GY4/1	粘土質シルト	中砂～透水細胞を多く含む。炭化物粒を多く含む。灰 (5YV4/1) シルト～オーラーブ灰 (25GY5/1) シルト (含中砂～透水細)。	〔3層〕		
184 灰	10Y5/1	粘土質シルト	下部は粗粒を主として (10m後) も少量含むものに対し、上部は中砂～細砂を主体とする (3層)。	〔3層〕		
185 暗灰	72Y8/6/1	中砂～透水	中砂～透水細胞。	〔3層〕		
186 灰白 (N7) シルト～透水細胞	5TY7/1～オーラーブ灰 (25GY7/1)	透水細胞の下では有機物の豊富を挟む (3層)				
187 透水						
188 透水～灰削	5TYR5/8～10YR6/2	中砂～中砂 (細粒)	下部は中砂～粗粒～細砂～透水細胞を主体とし、後者では粗粒の中砂も少量含む。下部は粗粒の透水細胞を主体とする。	〔3層〕		
189 深灰～羽根灰	25Y7/4～7.5GY7/1	シルト～透水細胞～透水	中砂～透水細胞を多く含む。炭化物粒を多く含む。灰 (5YV4/1) シルト～中砂～中砂 (細粒) を少々含む (深25堆土上層)。	〔3層〕		
190 灰白	5Y7/1	シルト～透水細砂	中砂～透水細胞の厚層を挟む (深54堆土上層)。	〔3層〕		
191 灰白 (25Y7/1) ～灰削 (25Y7/2) ～透水、灰削 (25Y6/2) 中砂～	（深54堆土上層）					
192 灰～羽根灰	10YR5/1～75GY7/1	砂質シルト～透水	下部は186と同様に砂質シルト～シルト～透水細胞の互層、上部はシルト～透水細胞～細砂を主体とする。部分的に中砂～透水細胞の薄層を挟む (3層)。	〔3層〕		
193 細灰 (10GY6/1) シルト～透水細砂～羽根灰 (10GY7/1) ～透水細砂の下では有機物の豊富を挟む (3層)						
194 第オーラーブ灰	25GY7/1	シルト～透水	上方からの水浸侵の跡跡が顯著で、マンガン斑も少見られる (3層)。	〔3層〕		
195 灰削～にぶい灰	25Y7/6/1～25Y7/6/4	中砂～中砂 (中砂、～10m)	底分の透水性が悪い (3層)。	〔3層〕		
196 第オーラーブ灰	25GY7/1	砂質シルト	中砂～中砂 (中砂、10mm) のブロック入る (3層)。	〔3層〕		

番号	色	國	粒度	特徴	
197	灰~明オリーブ	75GY6/1 - 10TY6/1	シルト質細砂粉砂(下)・砂〔3号〕		
	灰	25GY7/1	粗粒砂を多く含む〔3号〕		
198	灰	75GY6/1	砂粒~粗砂	細粒砂を多く含む〔3号〕	
199	灰オリーブ	75GY6/2	シルト質細砂粉砂	中に風化が進むと褐色を帯びる〔3号〕	
200	灰オリーブ灰	50GY7/1	シルト	石炭的に風化一粗砂を含む。マンガン斑が見られる〔浮石層上・下部〕	
201	明オリーブ灰	25GY7/1	シルト	砂粒を中心に有機物の汚穢を含む。マンガン斑が見られる〔浮石層上・下部〕	
202	灰	N6'	シルト	泥炭〔10TY8/1〕シルトの薄層を含み、下部に石灰物の汚穢を含む〔浮石層上・下部〕	
203	灰	N5'	シルト	有機物を少々含む。灰〔N6'〕泥炭の薄層が入る〔漂砾層下部〕	
204	灰	55Y5/1	シルト(粗粒)	粗粒砂を少々含む。少々の風化物粘土を含む。マンガン斑が多く見られる〔懸穴堆積上層〕	
205	灰	55Y5/1	シルト	細粒~中粒(粗粒)を多く含む。204より細粒で、灰〔55Y6/1〕シルトのブロックが多く入る〔懸穴堆積上層〕	
206	灰	55Y6/1	シルト	灰〔55Y6/1〕シルト(漂石層上・中層)のブロックが多く入る〔懸穴堆積上・下部〕	
207	黄灰	25GY5/1	シルト	粗粒砂~細砂を多く含む。有機物を多く含む。明緑灰〔75GY7/1〕シルトのブロックが多く入る〔懸穴堆積上層〕	
208	明緑灰	(75GY7/1)	シルト・灰	(75GY4/1) 粘土質シルト・灰〔漂石堆積上層〕	
		(55GY6/1)	粘土質シルトのブロック混合土		
209	青灰	55GY6/1	粘土質シルト	灰〔10TY5/1〕粘土質シルトのブロックが多く入る〔懸穴堆積上・下部〕	
210	灰	10Y5/1	粘土質シルト	風化の進む風化粘土層。明緑灰〔75GY7/1〕シルト・黒褐〔25Y3/1〕シルト(懸鈍底層を多く含む)のブロックが多く入る〔漂石堆積上・下部〕	
211	灰	75GY6/1	シルト	粗粒砂~細砂を多く含む。青灰〔55GY6/1〕シルトのブロックが多く入る〔懸穴堆積・持水消溝上〕	
212	灰	N6'	シルト	東部には灰アリ〔55Y5/2〕を呈し、色調がやや暗い〔4号層〕	
213	明オリーブ灰	25GY7/1	シルト	マンガン斑が見られる〔4号層〕	
214	灰	10GY6/1-11GY6/1	粘土質シルト	有機物を含み、有機物の多い下部の方がより褐色を呈する〔4号層〕	
215	灰	75GY5/1	シルト	細粒砂~細砂を少々含み、無機物の有機物を含む。マンガン斑が漂石に見られ、漂石上にはやや褐色を帯びる〔第3段の漂石堆積上〕	
216	灰	55Y6/1	粘土質シルト	有機物を多く含む〔4号層〕	
217	灰	55Y6/1	小砂~粗砂	細粒の砂を含む〔4号層〕	
218	灰	N6'	粘土質シルト	小砂~粗砂を多く含む。面上に有機物の薄層が堆積し、辺にも有機物を多く含む〔4号層〕	
219	モリーブ灰	25GY5/1	シルト	細粒砂~細砂を多く含み、有機化程度を示す含む〔4号層〕	
220	黄灰	25GY5/1	シルト	細粒砂~細砂を多く含む。220ZI) 細砂を呈するが、全体に砂質が強い〔4号層〕	
221	青灰	25Y5/1	砂質シルト	風化物粘土を少し含み、下部を中心とする206の小ブロックが入る〔4号層〕	
222	浅灰	25GY6/1	シルト(粗粒)	細粒砂~細砂を多く含む。マンガン斑が見られる〔4号層〕	
223	青灰	25Y5/1	シルト質細砂粉砂	細粒砂~細砂を多く含む。マンガン斑が見られる〔4号層〕	
224	青灰	25Y5/1	砂質	223より漂石の量が増す。漂石層~中粒(細粒)を多く含む。マンガン斑が多く見られる〔4号層〕	
225	黄灰	25GY5/1	砂質シルト	粗粒砂~細砂を多く含む。無機化が強く、下部は漂石を帯びる〔4号層〕	
226	青灰	25GY5/1	シルト	粗粒砂~細砂を多く含む。漂石層が見られ、やや褐色を呈する〔4号層〕	
227	灰	75GY6/1	シルト(漂石)	粗粒砂を多く含む。マンガン斑が多く見られる〔4号層〕	
228	灰	10Y5/1	シルト(漂石)	漂石層~中粒(細粒)を多く含む。上面は土壌化的影響を受ける〔4号層〕	
229	モリーブ灰	55GY7/1	粘土質シルト	細粒含水質粘土〔4号層〕	
230	モリーブ	75GY6/2	シルト	細粒砂を多く含む。漂石層を少々含む。漂石上では風化砂を少々含む。西に向かうほど漂石は増加する〔4号層〕	
231	黄灰	25GY5/1	粘土質シルト	漂石層~漂石を少々含む。漂石〔55Y6/1〕シルト・モリーブ灰〔5GY7/1〕粘土質シルトの小ブロックが入る〔4号層〕	
232	モリーブ灰	25GY4/1	シルト	漂石を少々含む。風化物粘土を多く含む。成灰〔5Y7/3〕砂質シルトの小ブロックが入る〔4号層〕	
233	黄灰	55Y5/1	シルト	漂石層を多く含む。漂石上では風化砂を少々含む。西に向かうほど漂石は増加する〔4号層〕	
234	灰	55Y4/1	粘土質シルト	〔1号層〕	
235	黄灰~灰~黒(25GY1/1-6/3)	粘土質シルト・灰(N4)・シルト(含)〔漂石層上層〕	漂石の漂石層のブロック混合土		
236	灰	75Y3/1	粘土質シルト	中粒~粗粒砂を少々含み、風化物粘土を多く含む。成灰〔5Y7/3〕砂質シルトの小ブロックが入る〔漂石層上層〕	
237	モリーブ灰	55Y3/1	粘土質シルト	中粒~粗粒砂を多く含み、成灰物粘土を少々含む。漂石〔55Y5/1〕粘土質シルトの小ブロックが入る〔4号層〕	
238	綠灰	(75GY6/1)	シルト・明オリーブ灰〔5GY7/1〕	漂石の漂石層の薄層	
239	灰	55Y6/1	シルト	上部を中心して中粒~中種(中粒、-10mm)を多く含む〔4号層〕	
240	灰	10GY6/1	シルト(漂石)	漂石を少々含む〔4号層〕	
241	モリーブ灰	25GY6/1	粘土質シルト	灰〔25GY4/1〕シルトや漂石の小ブロックが多く入る〔漂石の漂石上〕	
242	灰	75GY5/1	シルト	中粒~粗粒砂を少々含む。漂石層を多く含む。西に内かうほど漂石は増加し、漂石が半島となる箇所もあり〔4号層〕	
243	にがい黄	55GY6/4	中砂~漂石混在	シルトを多く含む〔4号層〕	
244	緑灰	10GY6/1	粘土質シルト	細粒の漂石を含む。234の小ブロックが入る〔4号層〕	
245	緑灰	10GY6/1	シルト	〔4号層〕	
246	青灰	55GY6/1	粘土質シルト	漂石を少々含む。成灰物粘土を少々含む〔4号層〕	
247	緑灰	10GY6/1	粘土質シルト	下部を中心して中粒~粗粒砂を少々含み。有機物も含む〔4号層〕	
248	灰	10Y5/1	シルト(漂石)	中砂~中粒(漂石)を少々含み。有機物を多く含む〔4号層〕	
249	灰	N5'	シルト	〔5号層〕	
250	灰	65Y5/1	砂質シルト	中砂を含む〔5号層〕	
251	灰白	55Y5/1	砂質シルト	細粒の漂石を含む。上部は5号層の剖面によって凹凸が大きい〔5号層〕	
252	灰	10Y5/1-75Y5/1	粘土質シルト	中粒~粗粒砂を少々含み。漂石を多く含む。西に内かうほど漂石は多い〔5号層〕	
253	灰	10Y5/1	シルト	252と比較して漂石が減少して成灰状態。漂石となる〔5号層〕	
254	灰	75GY5/1	シルト	有機物を多く含み。やや褐色を帯びる〔5号層〕	
255	明オリーブ灰~	55GY7/1-75GY7/1	シルト	〔5号層〕	
明緑灰					
256	明緑灰~緑灰	75GY7/1-6/1	シルト	〔5号層〕	
257	オモリーブ灰	25GY5/1	粘土質シルト	中粒~粗粒砂を少々含み。有機物を多く含む。魚鱗状は淡く、土壤化の度合いは弱い〔5号層〕	
258	灰	N5'	粘土質シルト	漂石を少々含み。有機物を多く含む。漂石層を多く含む。上部の方より褐色を呈する〔5号層〕	
259	灰	N5'	粘土質シルト	漂石~細砂を少々含み。有機物を多く含む〔5号層〕	

番号	名	層	粒度	特徴
260	粘土	10GY6/1	粘土質シルト	【5 b層】
261	オリーブ灰	10Y6/2	輕々質シルト	同じに向かうにはどの層となるが、本層では粘土質灰の影響で層厚が限られている【5 b層】
262	灰	8A/	砂質シルト	無機物を少量含む【6 a層】
263	灰	26/	粘土	【6 b層】
264	灰	7.5Y6/1	シルト	有機物を含み、下部には20cmの小ブロックが入る【6 a層】
265	灰	7.5Y6/1	粘土質シルト	有機物を多く含み、古代動物が多い場合はより暗色を呈する【6 a層】
266	明褐色～オリーブ灰	7.5GY7/1～2SGY6/1	粘土質シルト～濃灰色	風成の化成熱歴を含み、同じに向かうほどシルト質が強くなる。斑状が多く見られる【6 b層】
267	灰	7.5GY6/1	粘土質～濃色	【6 c層】
268	青灰	5B6/1	粘土質シルト～糞質シルト	糞上より豊富な膠質が硬い。有機物を多く含み、やや暗色を呈する【6 b層】
269	青灰	5BG6/1	粘土質シルト	有機物を多く含み、J-2の層厚と比較して地表を含む【6 a層】
270	灰～暗オリーブ灰	7.5GY3/1	糞質シルト	堆積物を多少含み、有機物を多く含む。色斑状や糞塊を含む【6 a層】
271	灰	5Y4/1	シルト	中層～中疊（底足）を多く含む【6 a層】
272	暗オリーブ灰	5GY4/1	シルト	中疊～中疊（底足）を多く含み、糞質灰主体の箇所も存在する【7 層】
273	灰	7.5Y4/1	粘土質シルト	堆積物を少し含む。有機物を含んで多少を帶びる【7 層】
274	暗オリーブ灰	2.5GY4/1	粘土質シルト	堆積物～軽疊を多く含む。堆積物を中心(22cm)にして粘れ物を多く含むが、有機物は少ない【7 層】
275	暗オリーブ灰	2.5GY4/1	シルト（粗粒）	堆積物～軽疊を多く含む。上部には20cmの小ブロックが入る【7 層】
276	灰	3Y4/1	シルト	中疊～細緻を多く含み、跡がちで黒い。有機物を多く含む【8 層】

路から離れるにしたがって厚みを減じ、03-1工区1トレンチの東端で0.2m、02-1工区東端と03-1工区2トレンチの西端でそれぞれ0.3mを測る。なお、本層の最上部は、ラミナが見られず、くすんだ色調を呈している箇所が多く認められることから、土壤化の影響を受けている可能性が高い。

4層 古土壤である4a層とその母材となった4b層に区分され、3層を除去して検出される4a層の上面を第3面、4b層の上面を第3b面として調査を実施した。各面で検出した造構の時期や上の地層の年代から、弥生時代中期に形成された地層と想定され、4a層は長原遺跡標準層序のN G 8 B層に対比されたY S 90-17次調査区第4層に相当する可能性が高い。

上面で弥生時代後期中葉の集落跡を構成する各種造構が検出された4a層は、灰や黄灰色を基調とした暗色の粘土質シルトからシルト質極細砂層で、集落の居住域が営まれた微高地では、色調や粒度、包含する砂礫の量や粒径によって2～3層に細分される箇所も存在する。層内には有機物粒や炭化物粒が多く認められ、全般的に粗砂から細礫を中心とした砂礫を多く含むが、小区画水田の水田作土となつた02-1工区西半から03-1工区1トレンチにかけては、母材である4b層の層相を反映して砂礫をほとんど含まず、色調もやや淡くなっている。一方、4b層は土壤化層が連続していた02-1工区西端を除く調査地全域で確認され、粗砂から中疊（細粒）を多く含んだ02-1工区東端以外は、明オリーブ色もしくは緑灰色を呈する均質なシルト層が主体となる。ただし、第3面で最も標高が高い調査地の東端では、4a層と緑灰色粘土質シルト層の間に中砂から極粗砂を主体とする黄色の砂層を挟んでいる。

5層 古土壤である5a層とその母材となった5b層に区分され、4b層を除去して検出される5a層の上面を第4面と認識し、02-2・03-1工区ではこの面を最終調査造構面とした。また、5a層以下の造構・遺物の有無を確認するために下層の調査を実施した02-1工区においては、5b層の上面を第4b面と呼称した。いずれの地層からも遺物の出土が認められなかったため、年代を特定しづらいが、第4面で検出された造構の時期と上下の地層の年代から、縄紋時代晩期末から弥生時代前期に形成された地層と想定される。

5a層は有機質に富んだ灰もしくはオリーブ灰色の粘土質シルトからシルト層で、02-1工区西端のみ粒度と有機物の多寡によって2層に細分される。02-1工区東端より以東では、本層の上面で弥生時代前期に比定される小区画水田が営まれていた。5b層は緑灰色を基調とした粘土質シルトから砂質シルト層で、第4面で水田が営まれていた箇所では、植物によると考えられる擾乱が多く認められた。

(岡本)

第V章 検出遺構の記録

第1節 第1面

1. 遺構面の概要

1層とした中世前期後半から近世の作土層を除去して検出される遺構面である。本来的にはその下の2層上面を本面として捉えるべきであるが、耕作によると考えられる後世の人為的な擾乱や配達センターの建設・撤去に伴う削平・攪乱によって、遺構面の遺存状況は著しく不良であり、02-2工区1トレンチや03-1工区1トレンチのように、2層自体が存在しない工区も認められた。そのため、第2面と同様に3層の上面で検出せざるを得なかった遺構も数多く存在する。2層上面が検出し得た部分の標高は、調査地の南端で12.1~12.15m、02-2工区1トレンチの北東隅で11.85~11.9m、02-1工区北端の中央で11.75mをそれぞれ測り、南から北へ向かって緩やかに傾斜している。

この面では、掘立柱建物や柱穴と推定される小穴（ピット）のほか、土坑墓・土坑・井戸・溝状遺構といった居住・生産の両領域に関係する多様な遺構を検出した（図10、図版2~4）。これらは埋土の差異によって、①砂礫層を埋土の主体とするもの、②やや色調が暗いオリーブ灰色や灰黄色、もしくは黄灰色のシルトを埋土の主体とするもの、③1層を埋土とするか、埋土内に1層のブロック上を含むものの3つに大きく分けられ、それぞれ時期を異にしている。次項では検出した各遺構について説明を行っていくが、その前に1層下面遺構である③の遺構のうち、1層形成中のある段階の土地利用を示す遺構群について触れておきたい。

02-2工区の2トレンチでは、N1°W方向へ南北に延びる8条の溝状遺構（溝3~10）を検出した（図版3-2・4-1・9-1）。各溝は溝6・7の間を除き5~7mほどの間隔を置いて確認され、幅は2~10m、検出面からの深さは0.1~0.2mを測る。埋土となるのは、1層に似た砂礫を多く含むオリーブ灰色の砂質シルトで、いずれも1層を上下2層に細分したうちの下層の上面から掘り込まれていた。底面に南北方向の浅い小溝が多数残されていたことから、耕作の痕跡を示す遺構である可能性が高く、その場合、溝部分が水田、その間の高い部分が鳥居といった具合に、異なる土地利用が行われていた可能性を考慮しなければならないであろう。

また、2層が比較的良好に遺存していた03-1工区2トレンチでは、東西に延びる畦畔状の高まりを3条確認した。ただし、高さは3cm程度と低く、幅も0.7~2.7mと太いことから、本面に帰属する畦畔ではなく、1層形成中のある段階の耕作に伴う擬似畦畔であると考えられる。

2. 遺構

〔掘立柱建物22〕（図11、図版3-1・5-1）

検出状況 2A-1e・1f区において検出した東西棟の建物で、柱穴1~5・7で構成される桁行2間、梁間1間の柱配置が想定できる。ただし、柱穴7は、重複して残存していた南北方向の耕作痕跡を消去するため2層を削り込んでいる際に確認した遺構で、検出した当初は柱穴1~6で構成される台形を呈した遺物を想定していた。建物はN88°E方向に長軸を置き、桁行の長さは約4.8m、柱芯間隔は2.25~2.55m、梁間の長さは約1.8mをそれぞれ測る。柱穴はいずれも1層が上部に落ち込んだ状態

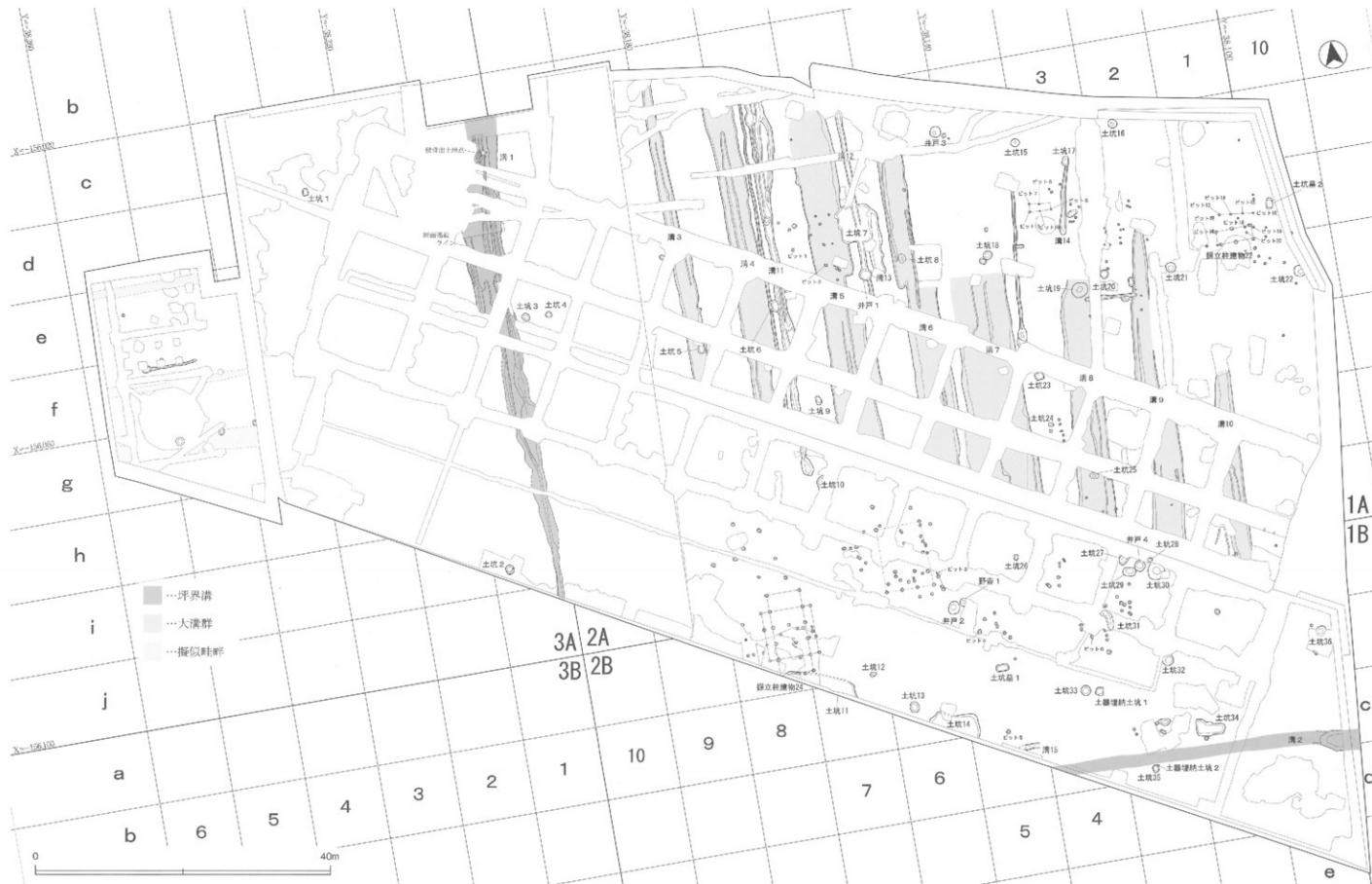


図10 第1面 全体図

で確認され、深さは検出面から0.25~0.45mと全般的に浅い。

また、建物の北側では、柱穴7と同様に計7基のピットが追加確認された。このうち、ピット13~16は直線上にはば等間隔で並んでおり、全長4.5m、柱芯間隔1.5mを測る。堀もしくは柵といった施設であった可能性が考えられるが、ピット列の方向はN85°Wであり、建物とは軸を異にしている。

出土遺物と時期 柱穴・ピットからの出土遺物はなく、建物・ピット列の詳細な時期は不明である。

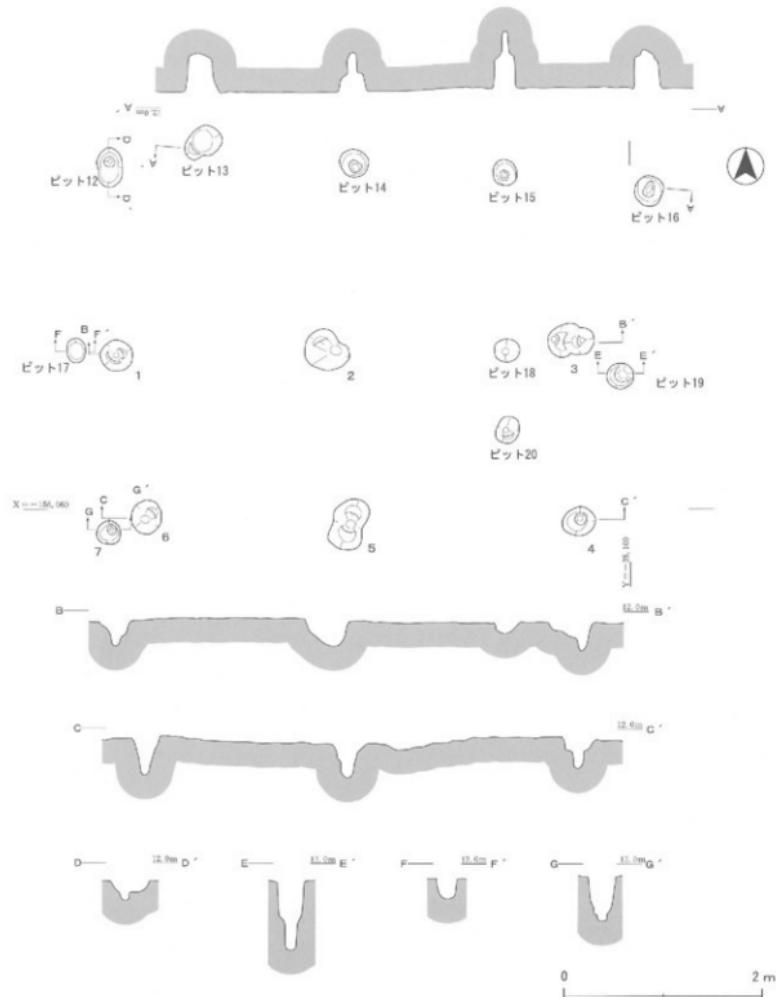


図11 摂立柱建物22 ピット12~20 平・断面図

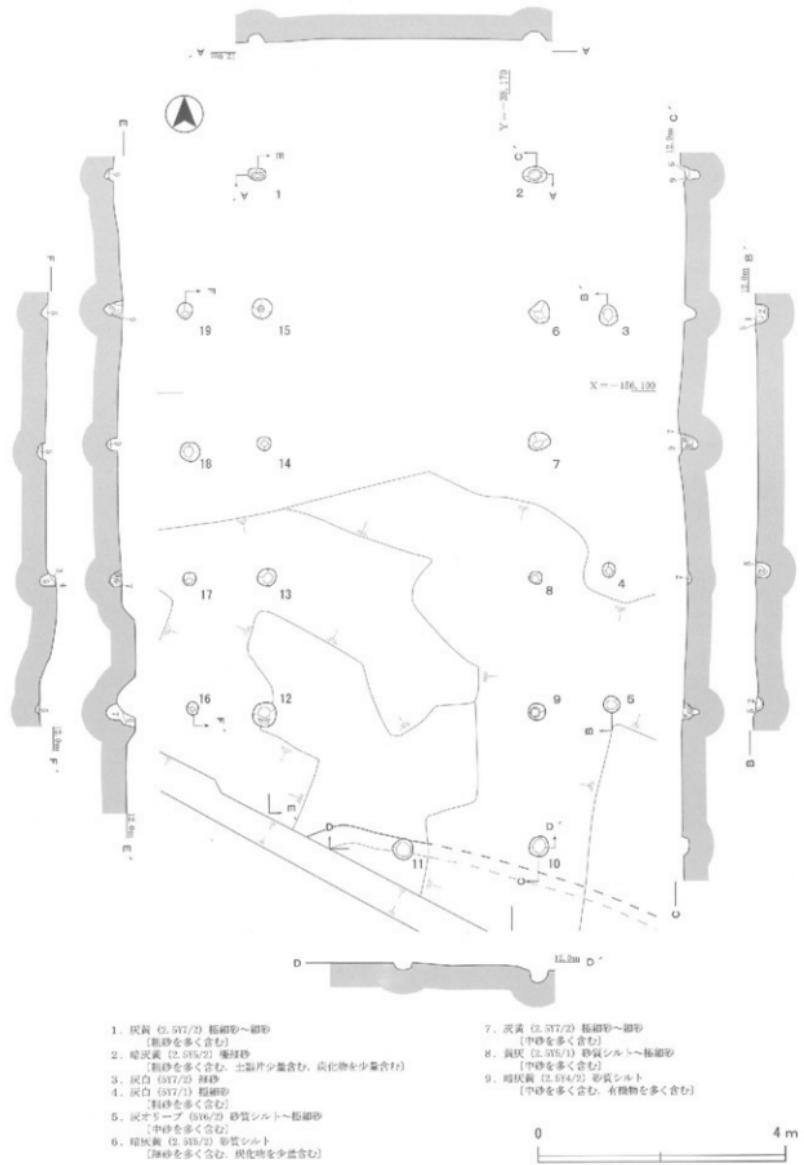


図12 挖立柱建物24 平・断面図

〔掘立柱建物24〕 (図12)

検出状況 2B-7a・8a区を中心に検出した建物である。ただし、研究会調査区と重複していたことから3層上部まで削平されている部分が多く、すべての柱穴を確認し得たわけではない。長軸をN1°W方向に置いた桁行3間、梁間2間の四面庇付き南北棟建物と推定され、庇を含めた全体では桁行5間、梁間4間となる。建物の規模は、桁行の長さ約6.6m、柱芯間隔2.2m、梁間の長さ4.5mで、庇の柱芯間隔も2.2mで揃えられているが、庇の出は南北が2.2mであるのに対し、東西は1.2mと狭くなっている。柱穴は残りの良いものでも径0.2mと小規模で、灰黄もしくは暗灰黄色の砂質シルトから細砂を埋土の主体としていた。

なお、この建物から東北東15mあたりにおいても、柱穴と考えられるピットが多数認められたが(図10破線部分)、建物を復元するには至らなかった。

出土遺物と時期 柱穴の埋土内からは上器の小片が数点出土したのみであり、建物の詳細な時期は不明である。

〔ピット7~11〕 (図13、図版5-2)

検出状況 2A-3f区において検出した建物を構成する可能性の高いピット群である。検出し得たのは5基であるが、北東隅は02-2工区1・2トレチの調査区境に当たっており、本来はここにもピットが存在していたものと考えられる。この推定が正しければ、これらのピットは掘立柱建物22とほぼ同一のN87°E方向に軸を置く桁行2間、梁間1間の東西棟建物に復元され、規模は桁行の長さ約3m、柱芯間隔1.35~1.55m、梁間の長さ1.05mをそれぞれ測る。

出土遺物と時期 各ピットとも1層を主体とした埋土からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

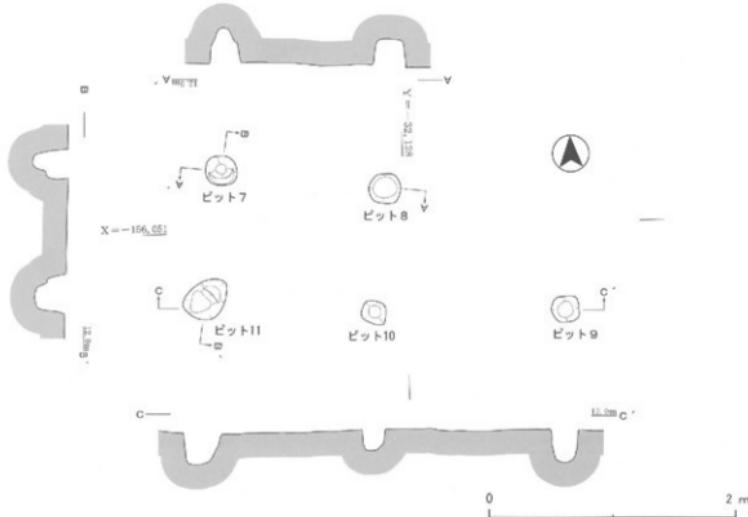


図13 ピット7~11 平・断面図

[井戸 1] (図14、図版 7-1)

検出状況 2 A - 6 f 区において検出した井戸である。溝12を掘削している際に確認した遺構で、埋土の上部が溝の埋土と同じオリーブ灰色シルト質極細砂であったため、先後関係を明らかにすることはできなかったが、本遺構を境に溝の接続位置が南北ですれ、幅も異なっていることから、同時に機能していた可能性も考えられる。

掘り方の平面形は、東西がやや長い楕円形を呈し、長径は 1.5 m、短径は推定で 1.3 m を測る。検出面から底面までの深さは 1.05m で、0.6 m の深さまでを椀状に掘削した後、中央部をさらに筒状に掘り下げていた。底面付近に層厚 0.1 ~ 0.2 m ほどの砂層が見られるものの、掘り方の下部は基本的にシルトや砂のブロックが混じった土砂で人為的に埋められており、埋め戻し土の上部からはその際に廃棄さ

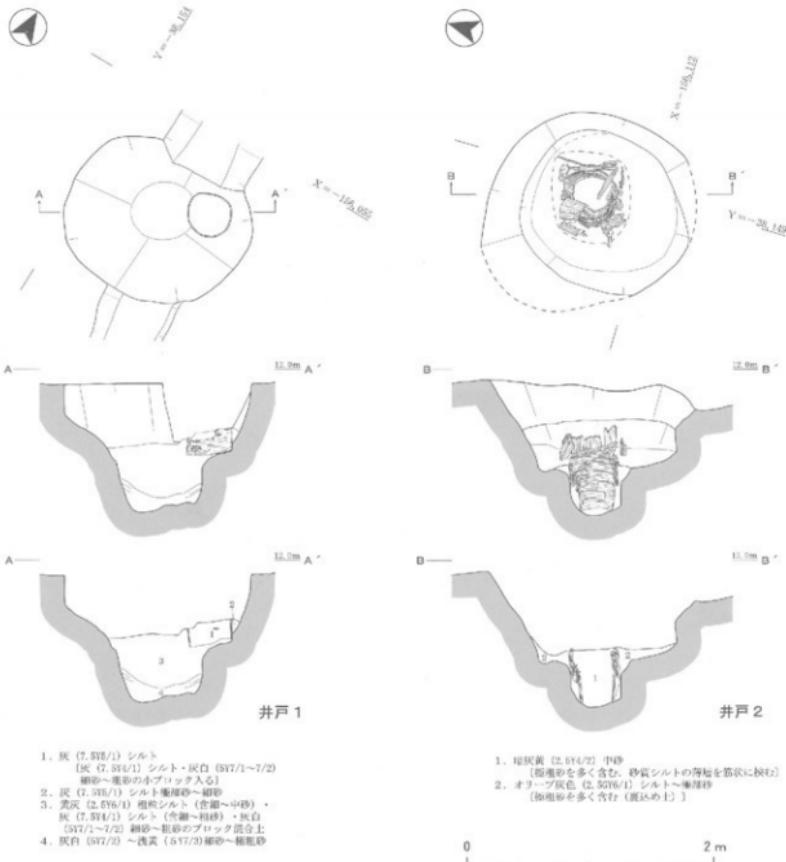


図14 井戸 1・2 平・断・立面図

れたと考えられる曲物の側板が確認された。曲物は直径35cmを測り、井戸側もしくは水溜めに用いていたものと推定される。

出土遺物と時期 挖り方埋土からの出土遺物なく、井戸が機能もしくは廃絶した時期を明らかにすることはできないが、1層下面遺構である溝12と同時に機能していたとするならば、中世前期後半以降の耕作に関わる灌漑用の井戸であった可能性が高いと考えられる。

〔井戸2〕（図14、図版7-3）

検出状況 2B-5a区において検出した井戸である。研究会調査区と重なっていたために上部が失われていたが、後述する第3面の流路（流路3）内に掘り込まれた掘り方は、長径1.8m、短径1.6mの楕円形を呈し、検出面から底面までの深さは1.1mを測る。比較的残りが良い西側で掘り方の断面形を窺うと、検出面から深さ約0.7mまでは60°ほどの角度で斜めに掘り下げ、一旦平坦面を設けたうえで北寄りを筒状に掘り込んでおり、平坦面から上には一辺に縱方向の板材を3枚使用した方形の井戸側が設けられ、内側の掘り込み内には、水溜めとして曲物の側板が2段以上重ねて据えられていた。曲物ならびに板材の下端は、極粗砂を多く含んだオリーブ灰色の泥土で裏込めされ、曲物内には暗灰黄色の砂層が落ち込んでいた。

出土遺物と時期 曲物内からは10点ほどの土器片が出土しており、このうち瓦器碗は12世紀前葉の所産と考えられる。

〔井戸3〕（図15、図版6）

検出状況 2A-5d区において検出。第2面溝25の南側肩部と周溝墓26北周溝の外側肩部に跨るようにして確認された井戸であるが、擾乱の影響で上部が大きく失われており、掘り方の下半を検出し得たのみである。

流路3の砂層内に掘り込まれた掘り方は、北東-南西方向にやや長い不整楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.4m、検出面から底面までの深さは0.6mをそれぞれ測る。掘り方全体を35°前後の緩い傾斜で掘り下げた後、南西側に寄った位置をさらに0.35mほど楕円形に掘り込み、その中に水溜めとして直径約40cmの曲物の側板を1段据えていた。曲物はオリーブ灰色砂質シルトと灰黄色の砂礫層で裏込めされていたが、南側ではさらに数cmから5cm前後の礫が詰められていた。

出土遺物と時期 曲物内からは数点の土器片が出土したのみであったが、埋土上部からは完形に近い12世紀前葉の和泉型瓦器碗が出土している。

〔井戸4〕（図15、図版7-2）

検出状況 2B-3a区において検出した井戸である。掘り方の平面形はやや南北が長い楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.4m、検出面からの深さは1.1mをそれぞれ測る。側壁は底面から75°前後の傾斜で立ち上がり、北東の壁に接するように曲物の側板が3段重ねて据えられていた。曲物の周囲および底にはシルトブロックを混ぜ合わせた土砂、もしくはブロックを多く含んだシルトが充填され、曲物内の上・中段も粘土質シルトのブロックを多く含む黄灰色シルトで埋まっていた。ただし、下段の曲物の中には下部に腐植物を多く含んだ泥土が堆積しており、その最下部からは底面に置かれたような状態で完形品を含む数個体分の土器がまとめて出土した。

出土遺物と時期 総量は多くはないが、曲物内の最下層から瓦器碗・皿や土師器皿が出土したほか、端部に面取り加工を施した板状の木製品も出土している。瓦器を基にすれば、土器類の時期は12世紀前葉に位置付けられる。

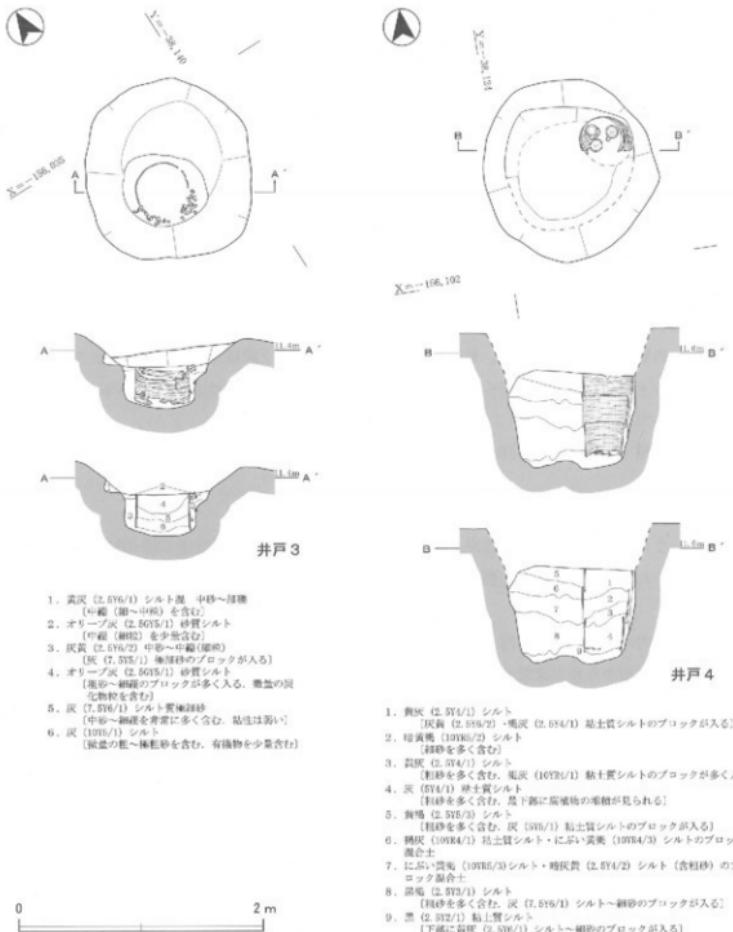


図15 井戸3・4 平・断・立面図

[土坑墓1] (図16、図版8-1-2)

検出状況 2B-5b区において検出した土坑で、坑内に人骨が遺存していたことから土坑墓と捉えた。土坑は、N89°W方向に長軸を置いた隅丸長方形を呈し、規模は検出面で長さ1.6m、幅約0.9m、底面で長さ1.2m、幅0.5m、検出面からの深さ0.25~0.3mをそれぞれ測る。埋土は上下2層に分かれ、埋葬人骨は下層であるブロックを多く含んだ灰黄色の細砂から中砂層内に遺存していた。

人骨は頭頸部と胸部を欠くものの、残っていた下位の骨格から仰臥に埋葬されたと考えられ、頭部は椎骨の向きから土坑長軸とはほぼ同じN1°W方向に向けられていたと推定される。腕は肩から真っ直ぐ

伸ばされていたが、脚部については右足が 59° 、左足が 43° の角度で膝を折り曲げられ、ちょうど胡坐をかいたような状態で葬られていた。性別に関しては、今回分析を依頼した大阪市立大学 安部みきこ氏より男性であるとの所見をいただいているが、形質人類学的な詳細な分析結果については、第Ⅶ章第5節に掲載した同氏の報告を参照していただきたい。なお、胸部以上の骨格の大半が消失していた理由としては、土坑墓自体が第2面の溝40の中に掘り込まれていたことから、保存状態の良否を左右する地中条件が溝内埋土の差異によって大きく異なるためと推定される。

出土遺物と時期 重複関係を反映して弥生時代末から古墳時代初頭を中心とした土器片が70点ほど出土しているものの、本遺構の時期を特定する遺物は得られなかった。ただし、第1面で検出した他の遺構の時期を勘案すれば、12世紀前半に位置付けられる蓋然性が高いと考えられる。

〔土坑墓2〕（図16、図版8-3）

検出状況 1A-10f区において検出した土坑で、坑底の南端にヒトの四肢骨と考えられる骨片が遺存していたことから土坑墓と捉えた。掘立柱建物22の北東隅の柱穴から北東3mに位置し、土坑墓1とは70m以上の距離を置いている。土坑は西辺がわずかに膨らみを持った隅丸長方形を呈し、長軸はN 10° E方向を指す。規模は検出面で長さ約1.4m、幅0.75m、底面で長さ約1.1m、幅約0.6m、検出面からの深さ約0.3mをそれぞれ測る。埋土はオリーブ灰色沙質シルトの単層で、中疊や3層のプロックを多量に含んでいた。

出土遺物と時期 10点余りの土器片と砥石が出土したのみで、本遺構の時期を特定する遺物は得られ

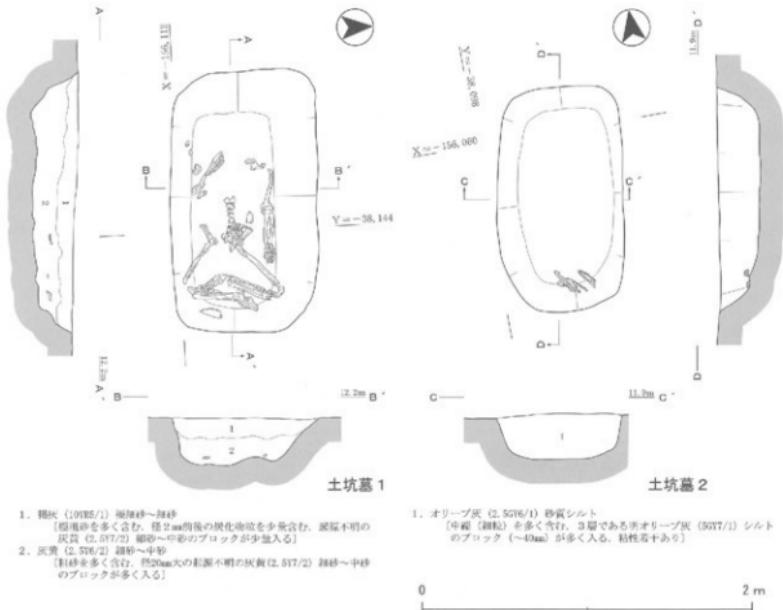


図16 土坑墓1・2 平・断面図

なかったが、土坑墓 1 と同じく12世紀前半に位置付けておきたい。

〔溝 1〕 (図17、図版 2-1・9-2・10)

検出状況 研究会 1 次調査の概要報告において、「調査区西部を南から北へ流れる」・「自然河道」 [研究会1984] とされた遺構に該当すると推定される南北方向の溝状遺構で、Y = -38,200 ラインに沿うように60m以上にわたって検出された。研究会調査区と重なる部分も含めて大半が搅乱の影響を大きく被っていたため、本来の規模は不明であるが、幅は最も広いところで5m、検出面からの深さは0.55mを測り、溝 3~10 と同じく N 1° W 方向に走行していた。埋土はシルト質細砂から粗砂までの砂層を主体としているが、断面観察によれば砂層には切り合いが認められ、最低でも 3 時期の溝が重複しているようである。

それでは、この溝の性格はどのように捉えたら良いのであろうか。そこで、現在の都市計画図上に、調査地が所在する八尾市若林町三丁目や大和川を挟んで対岸に位置する松原市若林一丁目・大堀五丁目にわずかに残存している条里型地割と、1948年に撮影された空中写真から判読できる条里型地割を落としてみた(図18)。今回の調査地が河内国丹波郡九条三里に当たることは第Ⅱ章第3節でも述べたが、図を一見して分かるように、溝 1 の走行するラインは条里坪界の復元線と一致し、遺構面に残されてきた上面段階の耕作痕跡も、この溝を境として東側が南北、西側が東西という具合に方向を違えていたことから、同里内の二十一ノ坪と二十二ノ坪の坪界に当たると推定される。そして、各段階の溝とも下部を中心ラミナの見られる砂層で埋没していること、北端に近い 3 A-1 d 区において溝内から農耕機札と関連性が強いウマの下顎骨と臼歯が出土していることから、溝 1 は坪界に設定された灌漑水路であった可能性が高いと考えられる。そして、2 B-1 c から 4 c 区にかけて痕跡ながら確認された東西方向の溝状遺構(溝 2)についても、二十一ノ坪と十六ノ坪を画す坪界であったと考えられる。

なお、溝 1 の性格に関しては、前述の研究会報告でも検討され、条里に規制されて選定されていた可能性が示されている。

出土遺物と時期 前述した獸骨以外に、溝内からは瓦器・土師器・輸入陶磁器といった土器類がコンテナ 1 箱分ほど出土した。細片が主体であるため、溝が機能もしくは廃絶した時期を明確に知り得る資料に恵まれないが、唯一 70%ほど残存していた土師器皿は、10世紀末から11世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

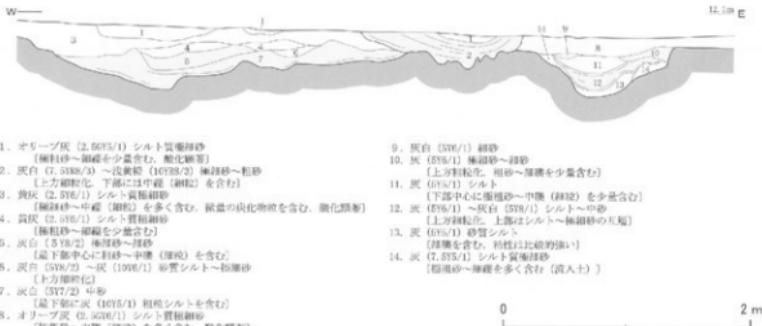


図17 溝 1 断面図

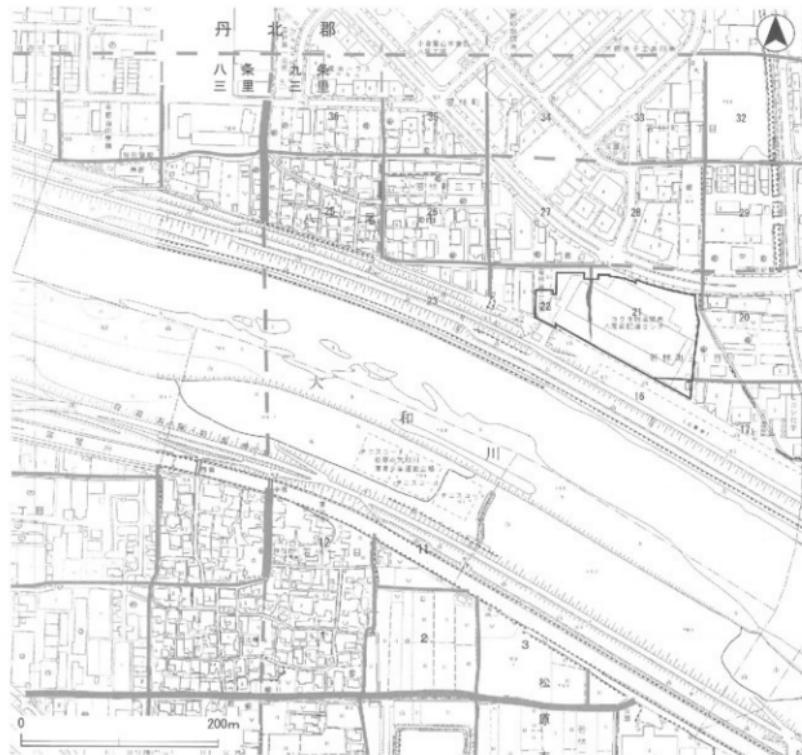


図18 周辺の条里復元図

[溝11] (図19、図版3-2)

検出状況 溝4から東に1.3~2mほど間を置いて南北方向に延びる溝である。南端から15mほどは1条であるが、以北は部分的に2条に分岐しており、断面観察から東側の溝が西の溝を切っていることが明らかとなった。また、2A-7f区では土坑6と重複し、これを切っている。

今回の調査で検出し得た長さは51mで、北側はさらに調査地外へと続いている。溝幅は1.5mとやや幅広となった南端部を除けば0.6~1.0mで、検出面から溝底までの深さは0.3~0.4mを測る。東西の両溝とも埋土は2~4層に細分されるが、東側の溝が1層と同じオリーブ灰色の砂質シルトからシルト質極細砂で埋没しているのに対し、西側の溝の埋土は、ブロックを多く含んだ灰色シルトからシルト質極細砂を主体としている。

出土遺物と時期 溝内からは、瓦器・中世土師器や弥生時代末から古墳時代初頭の土器などの土器類がコンテナ1箱分ほど出土した。明らかに下層から混入したと考えられる資料を除けば、出土遺物はおむね12世紀後葉に位置付けられる。

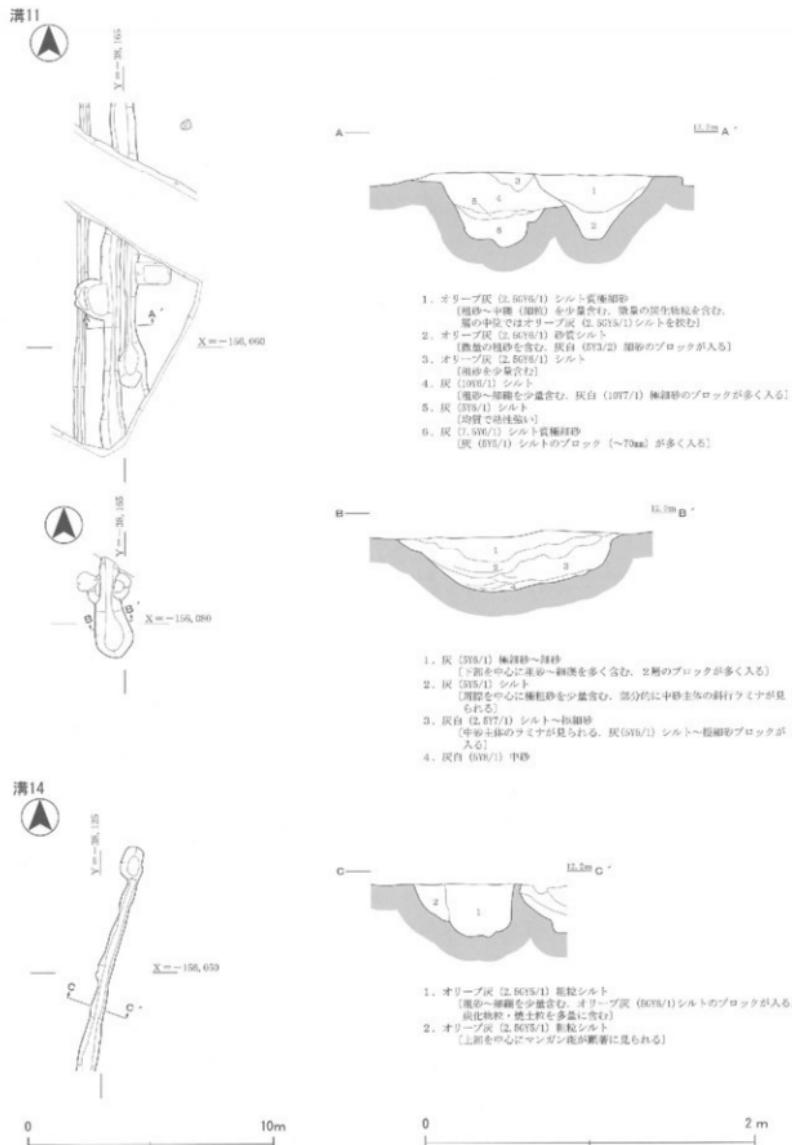


図19 満11・14 平・断面図

【溝14】（図19、図版11）

検出状況 2A-3e・3f区において検出した溝で、掘立柱建物と認識したピット9~11の東側1.4mに位置する。溝の全長は9.4mで、N14°W方向に走行し、北端は長さ1.0m、最大幅0.7mの隅丸長方形を呈する土坑17に接続している。断面形は楕円形を呈し、幅は0.3~0.8m、検出面から溝底までの深さは0.3m強を測り、炭化物粒や焼土粒を多量に含んだ1層より暗色のオリーブ灰色粗粒シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 溝内からはコンテナ5箱分に相当する多量の土器類が出土した。主体となるのは瓦器と土師器で、これに少量の輸入陶磁器が加わっている。これらの出土遺物は、12世紀中葉に位置付けられる。

【土坑1】（図20）

検出状況 3A-3d区において検出した土坑で、1層を埋土とする1層下面遺構である。平面形は北辺側が丸く張り出した不整な長方形を呈し、南北0.9m、東西0.7mを測る。断面形は逆台形状で、検出面からの深さは0.3mである。

出土遺物と時期 土坑内からは出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

【土坑2】（図20）

検出状況 3A-1i区において検出。平面形は北辺側が丸く張り出した不整な長方形を呈し、南北1.3m、東西1.1mを測る。土坑全体を検出面から0.3~0.35mほど垂直に掘り下げた後、さらに北寄りを直径1mの円筒形に0.5m掘り込んでおり、坑底はほぼ平坦に仕上げられている。埋土の最上部に1層が薄く堆積しているものの、坑内は基本的にシルトや極細砂のブロックが多く混じった土砂で人為的に埋め戻されており、井戸として利用されていた可能性も考えられる。

出土遺物と時期 土坑内からは出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

【土坑3・4】（図20）

検出状況 2A-10f区において並ぶように検出された土坑で、いずれも1層を埋土とする1層下面遺構である。

西側の土坑3は、北西-南東方向に長軸を置く梢円形土坑で、長径約1.1m、短径0.95mを測る。断面形は浅いボウル形を呈し、検出面から坑底までの深さは0.4mである。

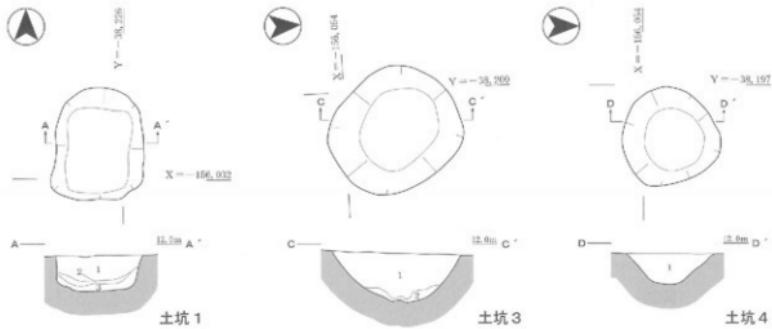
一方、土坑3から2mほど間を置いて東側に位置する土坑4は、径0.8m弱の不整円形を呈し、検出面からの深さは0.25mと浅い。

出土遺物と時期 両土坑とも埋土内からの出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

【土坑5】（図20）

検出状況 2A-8g区において検出。溝3の溝底で確認されたために上部が失われ、北端も地中梁によって破壊されていたことから、本来の規模は不明である。

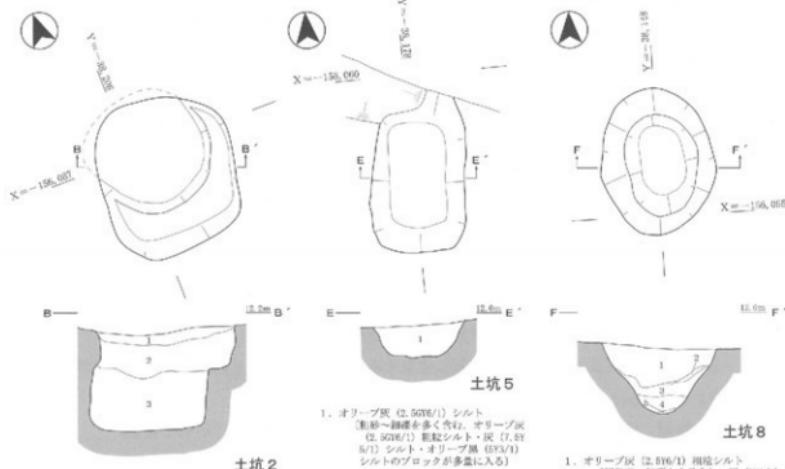
平面形はN6°E方向に長軸を置く隅丸長方形を呈し、規模は検出面で長さ1.3m以上、幅0.75m、底面で長さ0.85m、幅0.45m、検出面から坑底までの深さ約0.25mをそれぞれ測る。埋土であるオリーブ灰色シルト層には粗粒の砂やシルトのブロックが多く含まれていたことから、人為的な埋め戻し土と考えられ、比較的整った平面形を勘案すれば、土坑墓であった可能性も考えられる。その場合、男性を埋葬していた可能性が高いとされた土坑墓1が、底面で長さ1.2mの規模を有していたことを勘案すれば、本土坑には未成人を埋葬していた可能性も考えられよう。



1. 土坑オーリーブ (SY6/2) シルト質粘土砂
〔細粒～中粒（砂粒）を多く含む。灰（SY6/1）シルトのブロックが入る〕
2. 灰 (SY6/1) シルト・灰白 (SY6/2) 腐植物の瓦砾
3. 灰 (SY6/1) 塵泥砂
〔細粒砂～粗粒砂が多く含む。無量の灰化物質を含む〕

1. 灰 (SY6/1) シルト質粘土砂
〔細粒～中粒（砂粒）を多く含む。無量の灰化物質を含む。灰 (SY6/1) シルトのブロックが入る。シルト層が礫岩に見られる〕
2. 灰 (SY5/1) シルト
〔粗粗砂～粗粒砂が多く含む。無量の灰化物質を含む〕

1. 灰 (SY6/1) シルト質粘土砂
〔粗粗砂～中粒（砂粒）を多く含む。マングニル鉱が礫岩に見られる〕



1. 土坑オーリーブ (SY6/2) 塵泥砂
〔細粒～粗粒を少混合。後景の灰は無量を含む。鐵鉄・マンガニル鉱を含む〕
2. オーリーブ灰 (SY6/1) 粗粒砂
〔粗粗砂～粗粒砂を多く含む。粗灰 (SY6/1) 粗粒砂・灰 (SY6/1) シルト・オーリーブ灰 (SY3/1) シルトのブロックが多量に入れる〕
3. 灰 (SY6/1) 離散シルト
〔灰 (SY6/1) ～灰白 (SY7/1) シルト質粘土砂～細粒を少混合。シルト質粘土砂のブロックが多く入る。マングニル鉱が礫岩に見られる。鐵鉄により赤色味を帯びる〕

1. オーリーブ灰 (SY6/1) 粗粒シルト
〔粗粗砂～粗粒を少混合。灰 (SY5/1) 細土質シルトの小ブロックが少量入る。灰灰が多く見られる〕
2. オーリーブ灰 (SY6/1) 粗質シルト
〔粗粗砂～粗粒を多く含む〕
3. 灰 (SY5/1) シルト・灰 (SY7/2) 中砂～細粒・灰 (SY5/1) シルトの各ブロックの混合層
〔全般的に礫岩が多く見られる〕
4. 細灰 (SY6/1) シルト質粘土砂～細粒
〔細粒～細粒を多く含む〕
5. オーリーブ灰 (SY6/1) 基土質シルト



図20 土坑 1～5・8 平・断面図

出土遺物と時期 土坑内からは出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

[土坑7] (图21、图版4-1)

検出状況 2 A - 6 e・6 f 区において検出した遺構で、井戸 1 の北側 4 m に位置する。南北方向がわずかに長い不整隅丸方形の土坑で、中央を井戸 1 から北へ延びた溝 12 に切られ、さらに東辺にも溝 13 とした土坑状の遺構が重なり、これに切られている。

土坑の規模は、南北 5.0 m、東西 4.5 m、検出面からの深さ 0.4 ~ 0.5 m で、坑底には顕著な凹凸が認められた。溝 12・13 が 1 層もしくはこれを含むブロック土で埋まっていたのに対し、本遺構の埋土はこれよりも暗色の粗繊砂から細砂を主体としていた。

出土遺物と時期 土坑内からは出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

[土坑8] (図20)

検出状況 2A-7h区において検出。溝6の溝底で確認された南北方向に長い梢円形土坑で、長径1.2m、短径0.95mを測る。断面形は底が丸みを帯びたV字形を呈し、検出面から坑底までは0.5m強の深さを有する。5層に分かれる埋土はシルトや細粒の砂層を主体としているが、中位にはシルトや砂礫のブロックが混在した土砂が挟まれていた。

出土遺物と時期 土坑内からは出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(土坑13) (図23)

検出状況 2B-6b区において検出。南北に長い梢円形を呈する土坑で、長径約1.5m、短径1.2

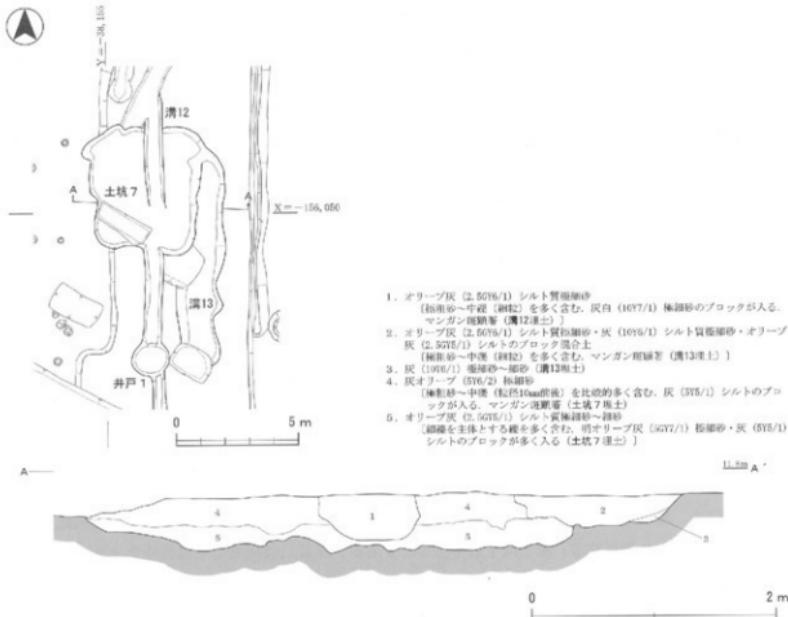


図21 溝12・13 土坑7 平・断面図

m、中央が小穴状に凹んだ坑底までの深さは検出面から0.2mを測る。埋土は肩際で灰白色粗砂を挟むものの大きさは2層に分かれ、いずれにも部分的にラミナが認められた。

出土遺物と時期 埋土の上・下層からは、器形全体を窺うことが可能な4個体分の瓦器碗片が出土した。これらの遺物は、12世紀中葉に位置付けられる。

〔土坑14〕（図22、図版14）

検出状況 2B-5b・6b区の調査地南端において検出した大型土坑で、土坑13の南東2mに位置する。南側が調査地外へ続いているため、全体の形状や規模を明らかにすることはできないが、検出しえた部分は不整形を呈し、最大長南東-北西方向で約7m、直交方向の検出長0.3mを測る。断面は1～2箇所の段を持ちつつ中央やや南東寄りに向かって下がり、検出面から坑底までの深さは最深で0.5mである。埋土は上層が極細砂から細砂、中・下層がシルトの大きく3層に分かれ、いずれも黄灰色を基調とするものの色調には濃淡が認められる。このうち、中央付近の上・中層からは、掌大から掌大あるいは碁状となった礫とともに、非常に多量の土器や瓦類が投げ棄てられたような状態で出土した。

出土遺物と時期 瓦器を中心に土師器各器種・白磁・東播系須恵器といった土器類や瓦が、コンテナに換算して5箱半ほど出土した。完形品もしくは器形全体を窺うことができる資料が多く、12世紀前葉の上器様相を知るうえで好資料になると考えられる。

〔土坑15〕（図23、図版12-1）

検出状況 2A-3e・4e区において検出した比較的大型の土坑で、確認当初は井戸の可能性も考えていた。平面形は東西にやや長い不整梢円形を呈し、断面形は全体が碗状に掘り下げられ、中央がさらに円形に凹んでいる。規模は長径が1.3m、短径が約1.1mで、検出面から坑底までの深さは、擾乱で削平を受けていた上部を加えて0.8mを測る。3層に分かれる灰色シルト主体の埋土は、いずれも比較的均質で、他地層のブロックの混入などは一切認められなかった。

出土遺物と時期 土坑内からは、1個体分の土師器羽釜となる大形の破片を中心に、瓦器・土師器片が30点足らず出土した。これらの遺物は、12世紀後葉に位置付けられる。

〔土坑16〕（図23、図版12-3）

検出状況 2A-2e区において検出した土坑で、土坑15の東側約12mに位置する。平面形は南東-北西方向にやや長い不整梢円形で、断面形は鉢鉢状を呈する。規模は長径約1.2m、短径1.05m、検出面から坑底までの深さ約0.5mをそれぞれ測る。埋土は、3層である明オリーブ灰色シルト質細砂のブロックを多量に含んだオリーブ灰色砂質シルトを主体とするが、坑底には灰白色の砂層の堆積が認められた。

出土遺物と時期 土坑内からは、2個体分の瓦器碗と土師器片数点が出土した。このうち、瓦器碗は12世紀中葉に位置付けられる。

〔土坑18〕（図23）

検出状況 2A-4f区において検出した1層下面造構である。東北東-西南西方向に長軸を置く梢円形の土坑で、断面形はボウル形を呈する。規模は長径約1.3m、短径1.1m、検出面から坑底までの深さ約0.5mをそれぞれ測る。埋土は1層を主体とするが、坑底には灰もしくは黄灰色シルトが薄く堆積していた。

出土遺物と時期 土坑内からは、下層からの混入と考えられるものも含め20点ほどの土器片が出土したが、土坑の時期を明確に示すような遺物は認められなかった。

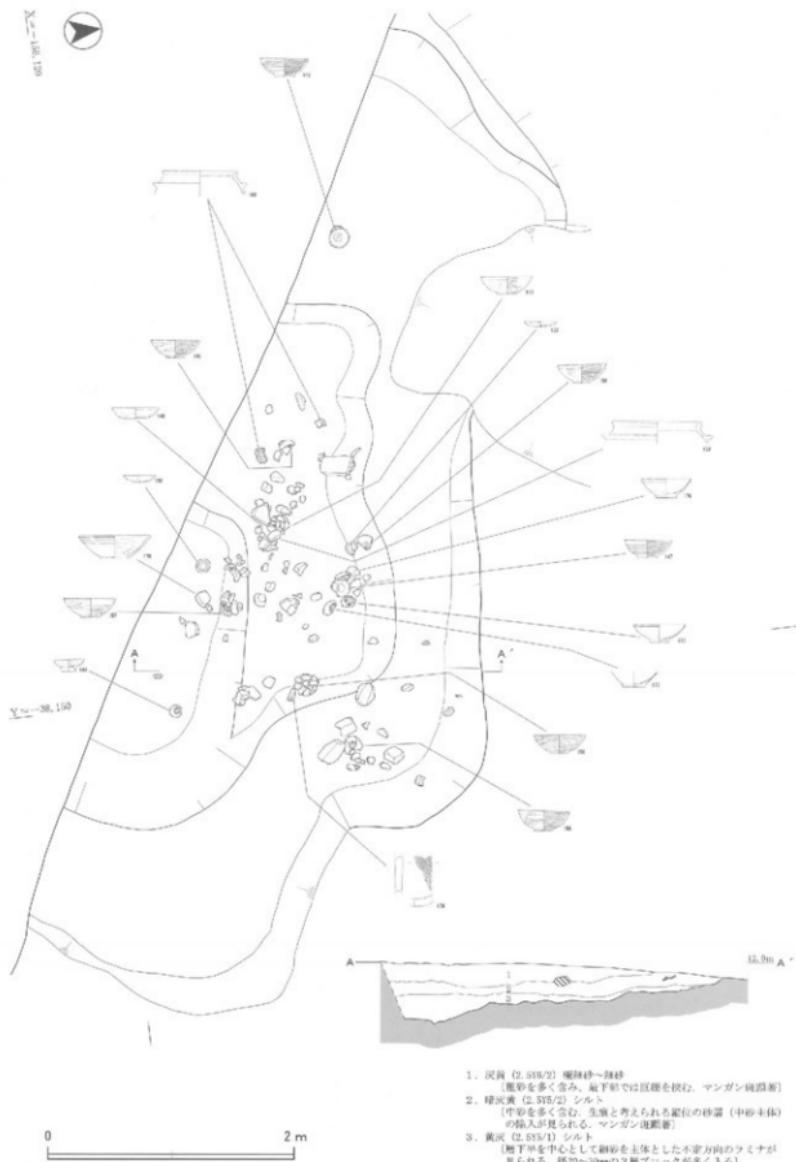


図22 土坑14 平・断面図

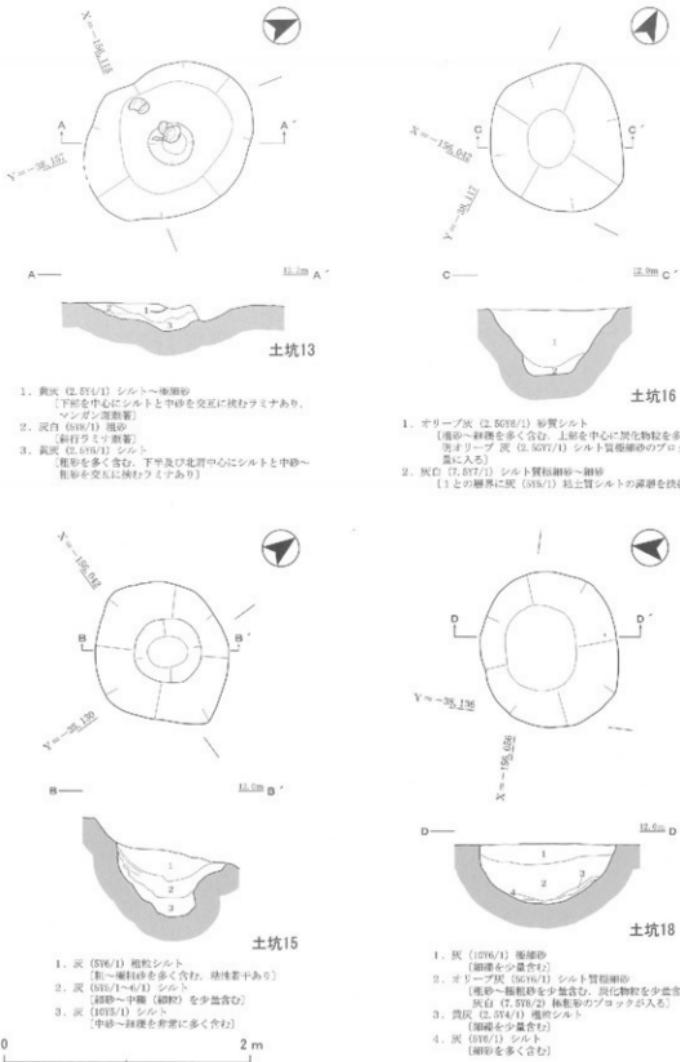


図23 土坑13・15・16・18 平・断面図

(土坑19) (図24)

検出状況 2 A - 3 g 区において検出。溝 8 の溝底で確認された大型土坑で、調査時には素掘りの井戸の可能性も考えていた。平面形は東西にやや長い不整梢円形で、長径は2.15m、短径は約1.9 mを測

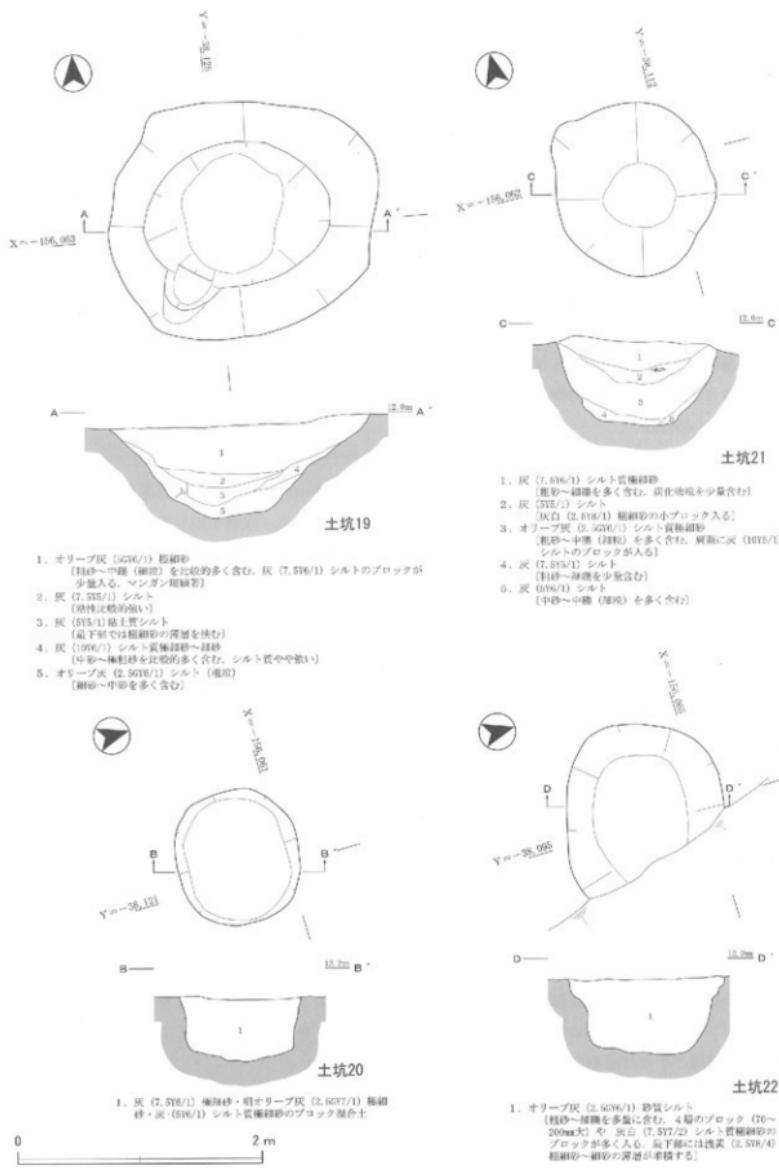


図24 土坑19～22 平・断面図

る。断面形は全体的に浅い楕円形を呈するが、南東には壁を削り込んで2段のステップが造られていた。埋土は5層に細分され、上・下層は1層に似たオリーブ灰色シルトから極細砂であるが、中位にはより暗色の灰色シルトが挟在していた。

出土遺物と時期 埋土の上層下部から中層を中心に、コンテナ半箱分程度の土器類が出土した。瓦器椀を中心に土師器羽釜・鉢や東播系須恵器鉢など残存率が高い個体が多く含まれ、12世紀前葉に位置付けられる。

〔土坑20〕（図24）

検出状況 土坑19と同じ2A-3g区において検出した1層下面遺構で、19から東北東約2mのところに位置する。平面形は東西にやや長い楕円形で、規模は長径1.1m、短径1.0mを測る。壁は底面から81°～82°の急角度で立ち上がり、検出面から中央がやや凹んだ坑底までの深さは0.5mである。1～3層の各地層のブロックが混在する土砂を埋土としており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物と時期 土坑内からは、下層からの混入と考えられるものを含め2点の土器細片が出土したのみであり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑21〕（図24）

検出状況 2A-2g区において検出。埋設管の攪乱間で確認した土坑で、調査時には井戸の可能性を考えていた。平面形は南北にやや長い楕円形で、長径は1.4m、短径は1.3mである。断面形は楕円を呈し、検出面から円形に凹んだ坑底までの深さは約0.7mである。灰色シルトを主体とした埋土は5層に細分され、最上部には1層が落ち込んでいた。

出土遺物と時期 埋土の中層を中心に、坑内からは瓦器椀や土師器羽釜などの土器類が30点ほど出土した。これらの遺物は、12世紀前葉に位置付けられる。

〔土坑22〕（図24、図版12-2）

検出状況 1A-10g区の調査地東端において検出。東端が02-2工区1トレチの東側側溝と重なってしまったため、全体の形状・規模は不明であるが、おそらくは東西に長い楕円形土坑と考えられ、長径は推定で1.6m前後、短径は約1.3m、検出面から坑底までの深さは約0.6mを測る。断面は壁が60°～70°の角度で立ち上がる逆台形を呈し、坑内は1～4層の各地層のブロックが混在した土砂で人為的に埋め戻されていた。ただし、機能時に堆積したのか、底面の直上には浅黄色の極細砂から細砂の薄層が存在していた。

出土遺物と時期 30点ほどの土器細片が土坑内から出土したが、土坑の詳細な時期を把握し得る遺物は存在しなかった。

〔土坑23〕（図25）

検出状況 2A-4h区において検出した。N80°E方向に長軸を置く、やや丸みを帯びた方形の土坑で、長辺は1.3m、短辺は約1.1mを測る。断面形は底が尖り気味の倒鐘形を呈し、検出面から底面最深部までの深さは約0.8mである。埋土は壁面からの崩落土を挟んで上下2層に大きく分かれ、下半は3層を起源とする砂層のブロック土によって埋められていた。

出土遺物と時期 土坑内からは、下層からの混入と考えられるものを中心に7点の土器細片が出土したのみであり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑24〕（図25）

検出状況 2A-4i区において検出した小型の土坑である。平面形は東西に長い楕円形を呈し、長

径 0.7 m、短径 0.5 m を測る。また、断面形は浅い倒鐘形で、検出面から坑底までの深さは約 0.5 m である。2 層に細分された埋土のうち、上層は灰色シルトと明オリーブ色シルト質極細砂のブロックが混在し、下層の黄灰色シルトにも極細砂から細砂のブロックが含まれていることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。なお、坑底の西寄りからほぼ完形の土師器壺が内面を上に向けて出土しており、意図的に埋納された可能性が高い。

出土遺物と時期 土坑内からは、坑底に埋納されたと考えられる土師器壺が 1 点のみ出土した。10世紀代の所産と考えられる。

〔土坑25〕（図25）

検出状況 2 A - 3 i 区において検出。溝 8 の溝底で確認した土坑で、平面形は東西に長い楕円形を呈し、断面形はほぼ椀形である。規模は長径 1.2 m、短径 0.9 m、検出面から坑底まで深さ約 0.5 m をそれぞれ測る。埋土は灰色の砂層を主体とするが、最下部には壁面から崩落・流入したと考えられる灰白色細砂層が堆積し、その間に層厚 5 cm ほどの炭化物層が挟在していた。

出土遺物と時期 灰色砂層の中から瓦器や土師器の細片が 20 点ほど出土した。このうち、瓦器甌は 12 世紀中葉の所産と考えられる。

〔土坑26〕（図25）

検出状況 2 A - 4 j 区において検出した小型の土坑である。南北方向に長い不整楕円形を呈し、長径約 0.7 m、短径 0.5 m、検出面から坑底までの深さは 0.45 m をそれぞれ測る。断面はほぼ逆台形で、埋土は 2 層に分かれ、下部が色調の暗い暗灰黄色極細砂、上部がそれよりもやや明るい細砂から中砂層であった。なお、坑底には、長さ 15~30 cm の細長で扁平な自然縛 3 点が根石状に入れられていた。

出土遺物と時期 瓢以外では、下層からの混入と考えられる土師器・須恵器の細片が 10 点余り出土したのみであり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑27〕（図25）

検出状況 2 A - 3 j・2 B - 3 a 区において検出した土坑で、井戸 4 から北西 1 m のところに位置する。第 3 面溝 54 の埋土である砂礫層内に掘り込まれ、埋土にシルトから極細砂のブロックを多く含んでいたことから、調査時点では素掘りの井戸の可能性を考えていた。

北側が地中梁によって失われていたうえに、砂礫層である壁面が調査途中に崩落してしまったことから、全体の形状・規模は明らかにし得ない。おそらくは北東-南西方向に長い楕円形土坑であったと考えられ、検出長は南北 1.2 m、東西 1.4 m で、検出面から坑底までの深さは約 0.7 m である。黄灰色を基調とした埋土には、前述したように大小のブロック土が非常に多く混在しており、人為的な埋め戻し土と考えられる。

出土遺物と時期 土坑内からは土師器・須恵器の細片が 80 点以上出土したが、いずれも下層からの混入と考えられる遺物であり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑28〕（図25）

検出状況 2 B - 3 a 区において検出。地中梁の攪乱内を精査していた際に確認した円形の土坑で、径 0.55~0.6 m、検出面から坑底までの深さは約 0.9 m を測る。シルト主体の埋土は 3 層に細分され、いずれの層にもシルトもしくは極細砂のブロックが多く混在している。

出土遺物と時期 土坑内からは、退化した「て」字状口縁を有する土師器小皿が 1 点のみ出土した。12 世紀前葉の所産と考えられる。

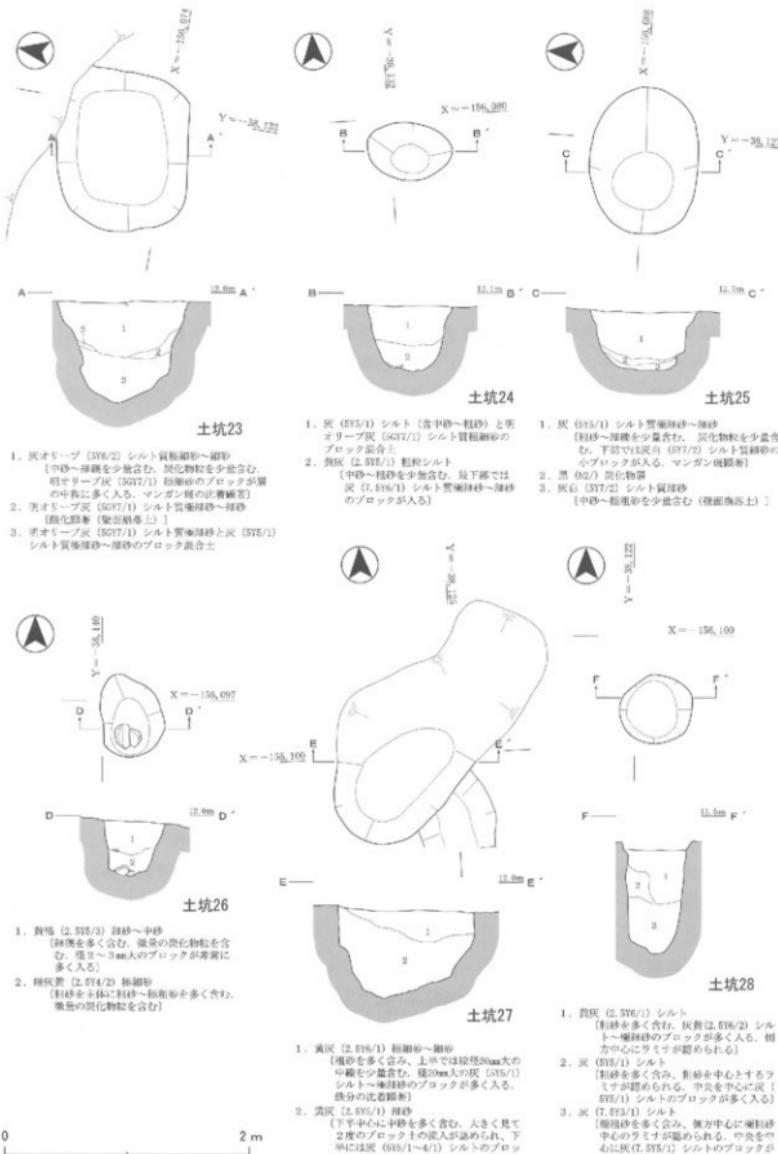


図25 土坑23~28 平・断面図

〔土坑29〕（図26、図版13-1）

検出状況 2B-3a区において検出。井戸4と接するようにその南西側に位置し、本土坑自体も調査時点では井戸の可能性を考えていた。

平面形は東西に長い楕円形を呈し、長径は約1.7m、短径は約1.1mを測る。断面は底面が尖ったV字形で、検出面から坑底までは約1.1mと比較的深い。埋土は計7層に細分されるが、下半が部分的にラミナの観察される暗色の粘土質シルトからシルト層であるのに対し、上半は各地層のブロック混合土もしくはシルトブロックが入った砂層によって埋没している。

出土遺物と時期 土坑内からは50点足らずの土器細片が出土したが、土坑の詳細な時期を把握し得る遺物は存在しなかった。

〔土坑30〕（図26）

検出状況 2B-3a区において検出。井戸4と0.4mほど間を置いてその北北東に位置する大型の土坑で、調査時に井戸の可能性が高いと考えていた遺構である。

北側が地中梁の搅乱で失われ、東側の一部にも搅乱が重なっているが、径約2.2mの円形を呈していると推定される。断面観察用アゼの下半が調査途中で崩落してしまったが、検出面から深さ0.3mほどは35~50°、その下1m余りは70~76°と比較的急な角度で掘り下げられ、ほぼ平坦な坑底までの深さは1.35m前後である。埋土は6層以上に分かれ、下部は部分的にラミナが見られるシルトから細砂、上部はそれよりもやや粗粒の砂層で埋まっていた。

出土遺物と時期 埋土の各層から、コンテナに換算して1箱程度の土器類・瓦が出土した。瓦器碗・小皿や土師器皿・羽釜が主体で、おむね12世紀前葉に位置付けられる資料である。

〔土坑31〕（図26、図版13-2・3）

検出状況 2B-3a区において検出した土坑で、第3回調査時に地中梁の搅乱内を精査していく確認された。バナナを立てたような形状を呈し、断面がV字形に近い溝状の土坑で、南北の長さ2.7m、最大幅0.9m、検出面から坑底までの深さ約0.9mをそれぞれ測る。下半のみ観察できた埋土には、いずれもブロック土が多く含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

出土遺物と時期 土坑の詳細な時期を示す土器類は得られなかったが、坑底より0.6mほど浮いた位置で、高台を除いた内外面に赤色漆を塗布した漆器碗が1点出土した。

〔土坑32〕（図27）

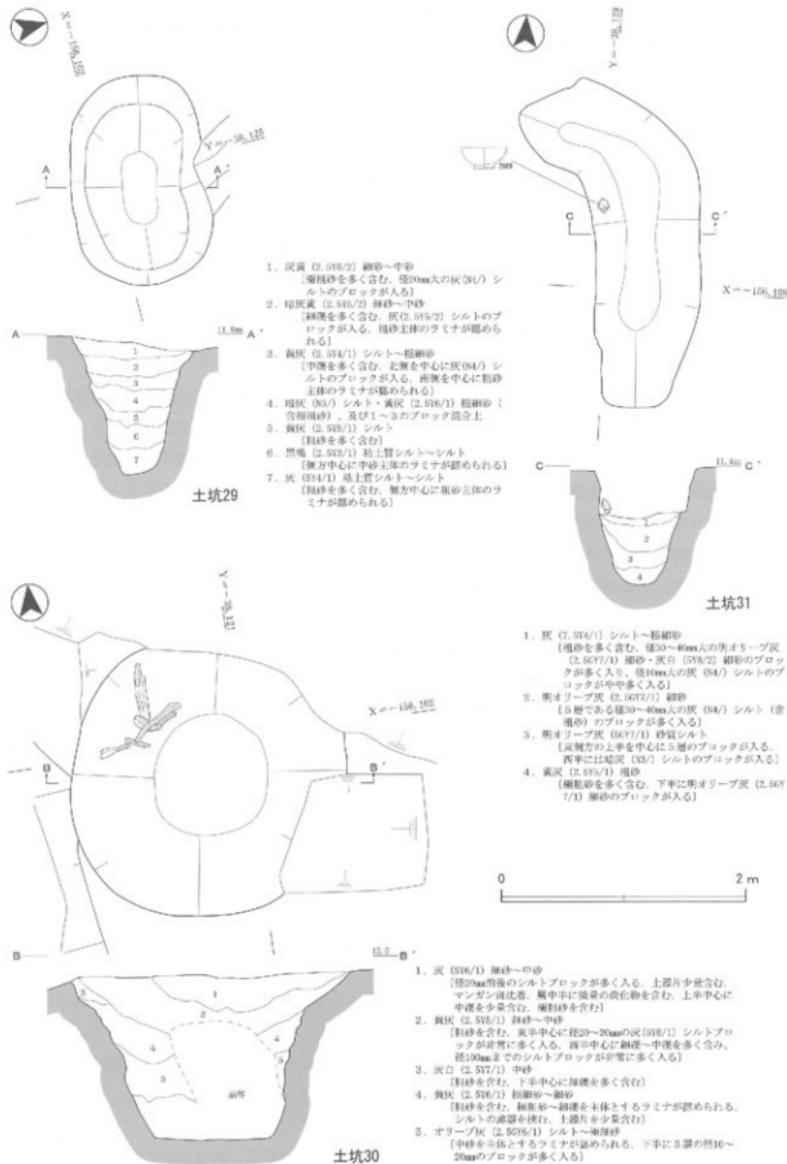
検出状況 2B-3b区において検出した土坑で、調査時に素掘りの井戸の可能性が高いと考えていた遺構である。

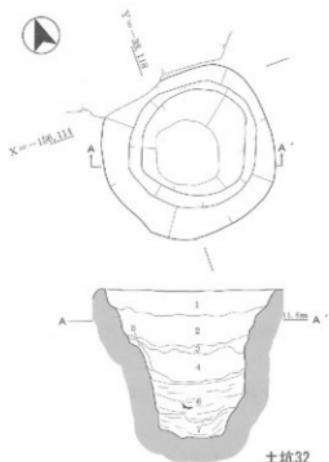
地中梁の搅乱によって北端の一部が失われているが、やや四角張った不整円形を呈し、径は南北1.3m、東西1.4m、検出面から坑底までの深さは1.2mをそれぞれ測る。断面形はラッパ状で、下部は自然堆積と考えられる粘土質シルトからシルトで埋没しているものの、上部は3層を中心とするブロック土を多量に含んだ砂質シルトおよび砂層で埋められていた。

出土遺物と時期 坑底から0.2m上の埋土下層内から瓦器の高台付皿が出土し、その他に40点ほどの瓦器・土師器の細片が出土した。高台付皿は完形で、12世紀前半に位置付けられる。

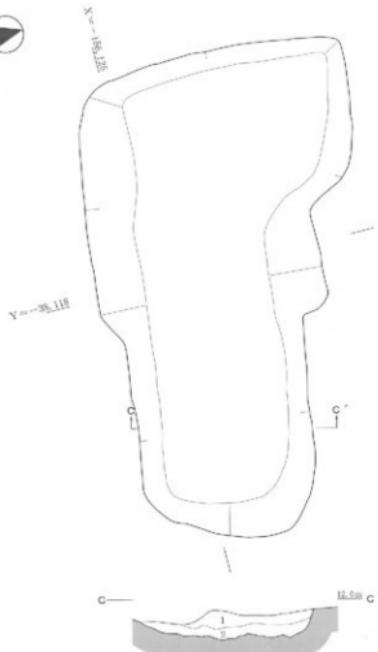
〔土坑33〕（図27）

検出状況 2B-4b区において検出した径1.25mの円形土坑である。調査途中で断面観察用のアゼが崩落してしまったため、埋土下部の情報が失われてしまったが、検出面から坑底までの深さは最深部





1. 黄粘土 (2.5V6/2) 中砂～粗砂
〔礁砂を多く含む。底 (DA/) シルトと3層である灰白 (2.5Y8/1) シルトのブロックがござく入る。裏方ほど礁砂となる〕
2. 粘状土 (2.5V5/2) 粘接砂
〔礁砂を多く含む。西半中心に多量の灰 (6A/) シルトブロックと少量の灰白 (2.5Y8/1) シルトブロックが入る〕
3. 黄灰土 (2.5V5/1) 砂質シルト
〔礁砂を多く含む。3層のブロックが少量入る〕
4. 深 (5V6/1) 砂質シルト
〔底10~40mm灰白灰 (30/) シルトブロックが非常に多く入る。中位を中心にして3層のブロックが少量入る〕
5. 深 (5Y6/1) 粗砂
〔上半を中心としたラミナあり。下半には3~4層のブロックが入る〕
6. オリーブ灰 (2.5Y6/1) シルト
〔下部で礁砂～粗砂のラミナが顯著に見られ。上半にも中位主部のラミナがあり。上方礁砂化。中位では鉛分の沈着が著しい〕
7. 灰 (2.5Y4/1) 社土質シルト
〔前方を中心としたラミナの斜傾斜が少量認め。下半を中心的に粗砂とシルトが交互に接着するラミナが認められる〕



1. 黄粘土 (2.5Y6/3) 粗砂～礁砂
〔礁砂を多く含む。径10mm大の3層のシルトブロックがごく少量入る。秋分礁層面芸〕
2. 黄灰土 (2.5Y5/1) シルト～礁砂
〔礁砂を多く含む。3層のブロックがやや多く入り。然20mm大の礁塊 (2.5Y3/2) シルトのブロックが少量入る〕

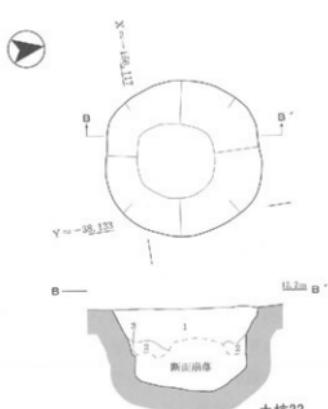


図27 土坑32~34 平・断面図

で0.65mを測り、上部は3～4層のブロック土を多く含んだ砂質シルトから極細砂で埋まっていた。

出土遺物と時期 下層からの混入と考えられる土師器・須恵器細片が10点余り出土したのみであり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑34〕（図27）

検出状況 2B-2c区において検出した不定形の大型土坑である。規模は東西約4m、南北が西端で2.2m、東端で1.4mをそれぞれ測り、検出面からの深さは約0.2mとかなり浅い。南北方向の断面形は皿形を呈し、黄灰色を基調とした上下2層の堆土で埋没していた。

出土遺物と時期 瓦器・土師器の細片が数点出土したのみであり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑35〕（図28）

検出状況 2B-3c区において検出。平面形は丸みを帯びた南北に長い六角形状を呈し、南北は約1m、東西は0.7mを測る。断面は検出面からの深さ0.15mの深い皿形で、粗砂を多く含み灰青色を基調とした上下2層のシルト層で埋没していた。

出土遺物と時期 土師器の細片が数点出土したのみであり、土坑の詳細な時期は不明である。

〔土坑36〕（図28）

検出状況 03-1工区1トレーナーの東端に当たる2B-1b区において検出した土坑で、擾乱によって北堆を除く大部分の上部が失われていた。

本米は北東-南西方向に長い楕円形を呈していたと推定され、検出長は長径1.4m、短径1.25m、検出面から坑底までの深さは0.8mをそれぞれ測る。断面形はほぼ平坦な底面から63°前後の角度で壁面が立ち上がる逆台形で、オリーブ灰色もしくは灰黄色を基調とした5層に細分されるシルト層で埋没していた。

出土遺物と時期 瓦器碗・皿や土師器皿・羽釜・輸入陶磁器といった土器類が、コンテナ半箱程度出土した。これらの遺物は、12世紀前葉から中葉に位置付けられる。

〔ピット4〕（図28）

検出状況 2B-5a区において検出した小穴である。南北にやや長い楕円形を呈し、長径0.45m、短径0.35m、検出面から底面までの深さは0.4mをそれぞれ測る。断面形は壁がほぼ垂直に立ち上がる筒形で、下部は砂質シルト、上部は粗砂から極細砂を多く含む極細砂で埋まっていた。なお、底面に近い壁際では、埋土と掘り方との間で痕跡的ながら木質の筋が認められたことから、曲物の側板が挿入されていた可能性が考えられる。

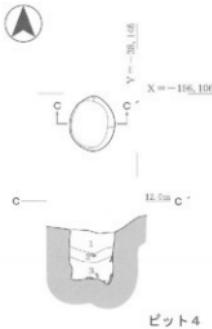
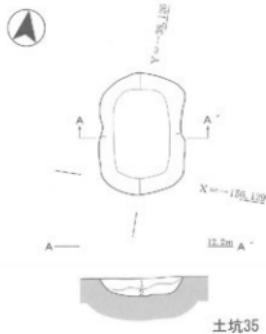
出土遺物と時期 下層からの混入と考えられる土師器・須恵器の細片が数点出土したのみであり、遺構の詳細な時期は不明である。

〔野壙1〕（図28）

検出状況 2B-5a区において検出した土坑で、遺存状態が不良のため図化し得なかったが、埋土下層と掘り方との間に底板付きの曲物の痕跡が認められたため、野壙と認識した。

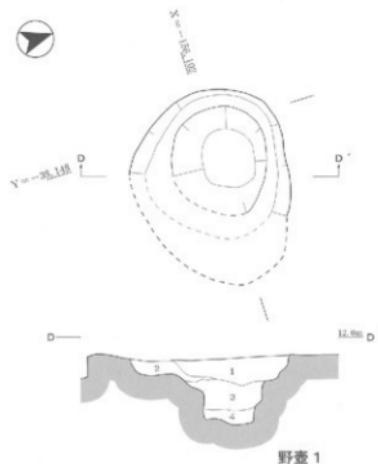
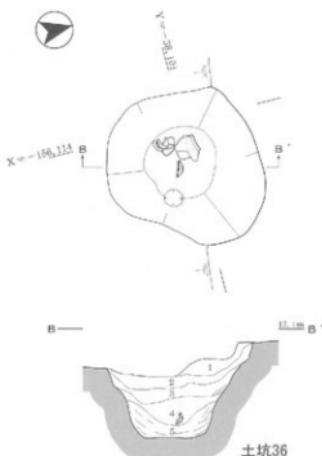
東側が擾乱によって失われているため、本来の形状・規模は不明であるが、東西に長い不整楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.25m、検出面から坑底までの深さ0.55mをそれぞれ測る。壁面には底面に至るまでに2～3箇所の段が存在し、東から南側は最上段の平坦面の幅がより広くなっている。埋土は4層に細分されるが、曲物が挿入されていた下層より上は、極粗砂までの砂層によって埋没していた。

出土遺物と時期 埋土からの出土遺物はなく、遺構の詳細な時期は不明である。



ピット 4

1. 泥質 (2.5Y6/2) シルト
〔礁砂を多く含む。炭化物粒を少量含む〕
2. 黄灰 (2.5Y6/1) シルト～粗砂
〔礁砂を多く含む。下平中心に径30mm大の3層のブロックが入る。マンガン斑沈着〕



野塹 1

1. 黄灰 (2.5Y6/1) シルト
〔礁砂を多く含む。炭化物粒を少量含む〕
2. 灰灰質 (2.5Y5/2) シルト
〔礁砂を多く含む。炭化物粒を少々含む〕
3. 黄灰 (2.5Y6/1) シルト
〔中砂を多く含み。北側方を中心にラミナが認められる〕
4. 泥質 (2.5Y6/1) シルト
〔礁砂を多く含む。750~30mmの灰白 (2.5Y7/1) シルトブロックが多く入る〕
5. オリーブH (5Y6/2) シルト
〔礁砂を多く含み、種々中心にラミナが認められる〕



図28 土坑35・36 ピット4 野塹1 平・断面図

〔土器埋納土坑1〕（図29）

検出状況 2B-4b区において検出した土坑で、土坑33の東側0.5mのところに位置する。図には十分表現されていないが、十字に設定した断面観察用アゼを撤去した際、土坑のほぼ中央に当たるアゼの交差点より10個体以上の土師器皿が集積されたような状態で出土したことから、土器埋納土坑と認識した。

土坑の平面形は丸みを帯びた台形状で、南北長1.05m、東西長1.1m、検出面から坑底までの深さは約0.2mをそれぞれ測る。埋土は2層に細分されるが、主体となるのは上層の黄灰色粗砂層で、上部には非常に多くの土師器片が含まれていた。

出土遺物と時期 土坑内からは、コンテナに換算して1箱強の土師器片が出土した。器形を窺うこと可能な個体の大部分が小皿で、12世紀後半に位置付けられる可能性が高い。

〔土器埋納土坑2〕（図29、図版14-1）

検出状況 2B-3c区において検出。土坑35のすぐ北東で確認した土坑で、やはり埋土の上部から10個体以上の土師器が集積されたような状態で出土したことから、土器埋納土坑と認識した。

土坑の平面形はおにぎり形で、東西・南北方向とも長さ0.25mを測る。断面は浅い楕円形を呈し、検出面から坑底までの深さは約0.3mである。埋土は暗灰黄色シルトの単層で、その上部で土師器の皿類が重なるように出土した。

出土遺物と時期 土坑内からの出土遺物はすべて土師器の皿類で、小皿を主体として大皿がこれに加わっている。やはり12世紀後半に位置付けられる可能性が高い。

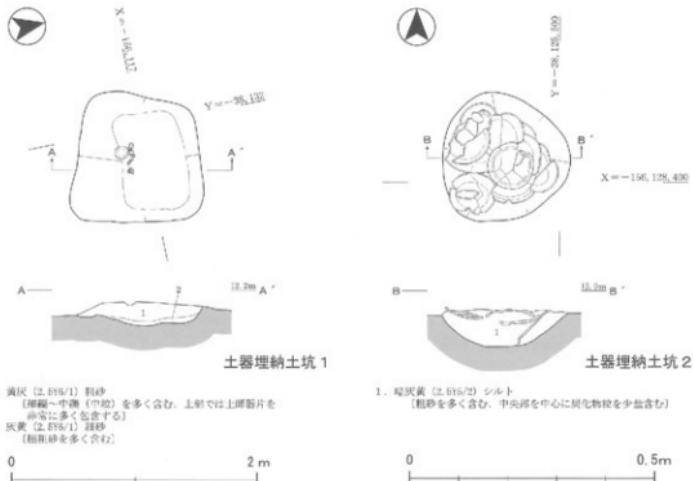


図29 土器埋納土坑1・2 平・断面図

第2節 第2面

1. 遺構面の概要

2層とした灰色を基調とするシルト層を除去して検出される遺構面で、研究会1次調査において遺構の検出が行われた面である。今回の調査で3層と呼称した、弥生時代後期中葉から後葉にもたらされた粘土質シルトから中砂主体の洪水堆積物の上面であり、本来の地表面は後世の削平によって遺存していないかった。ただし、3層の最上部には弱いながらも部分的に土壤化が認められ、一定期間地表面であったことを物語っている。

遺構面の遺存状況は、第1面と同様不良であり、特に配達センターが建っていた部分は地中梁が縦横に10m間隔で入れられ、大半の遺構が分断された状態で検出された。また、ゴミなどが大量に投棄されていた攪乱の周辺では、3層の上面が著しく変色し、遺構の確認が困難な箇所も存在した。遺構面の標高は、調査地南東端で12.15m、南西端で11.95m、北東・北西端で11.75m、北端中央で11.60m前後をそれぞれ測り、全体として南東・南西端から北端の中央部に向かって緩やかに傾斜している。

この面では、堅穴建物や掘立柱建物といった建物遺構、古墳や周濠墓・土器埋設遺構などの埋葬遺構を中心に、主として居住域・墓域に関係する多様な遺構を検出した（図31、図版15～17）。同一面で確認されたこれらの遺構は、埋土の差異によって、①2層を埋土とするもの、②砂礫を多く含んだ黄灰色を基調とするシルトを埋土の主体とするもの、③④よりも色調が淡いオリーブ灰色粗粒シルト、あるいは逆に、より暗色を呈するオリーブ黒色もしくは黒褐色のシルトから細砂を埋土の主体とするものの大さく3つに分かれ、それぞれの遺構は、出土遺物の年代から、①古代、②古墳時代中期から後期、③弥生時代末から古墳時代初頭、に位置付けられることが明らかとなった。そこで次節以降では、検出した各遺構について、時期ごとに説明を行っていきたい。

2. 古代の遺構

2層を埋土とする2層下面遺構を、当該期の遺構として捉えた。図31の全体遺構分布図に淡いアッシュで示したように、遺構の種類としては溝・小穴・落ち込みがあり、このうち溝は、次に触れる溝25を除けば、幅0.3～0.75m、深さ0.15m程度の小規模なものが多い。

ただし、3A-1c・1d区の周溝10西側周溝の埋土上面、2A-9e区から9g区、2A-10i・10j区でそれぞれ検出した南北溝や3A-3c・4c区で検出した東西溝が、いずれも走行方向を東西型地割とほぼ一致させているのに対し、3A-3c・3d区の溝17東側肩部で検出した3条の溝は、座標北から13°ほど東に振った方向に走行しており、同じ2層下面遺構でも時期差が存在している可能性が考えられる。

〔溝25〕（図30、図版18）

検出状況 02-2工区1トレンチの北端において検出した、東南東から西北西方向へ直線的に延びる溝である。今回の調査では延長87m分を確認し得たが、東西両端はそれぞれ調査地外へ続いている。

溝は幅3.0～4.5m、検出面から溝底までの深さ0.8mと規模が大きく、断面形は浅い椀形を呈する。埋土は中心部で5層ほどに細分され、下半の一部に極細砂から細砂層の堆積が認められるものの、基本的には2層と同様の灰もしくはオリーブ灰色のシルトを主体としていた。

溝の形状・規模や埋土の状況から、機能時には水路として利用されていたと推定されるが、溝の走行

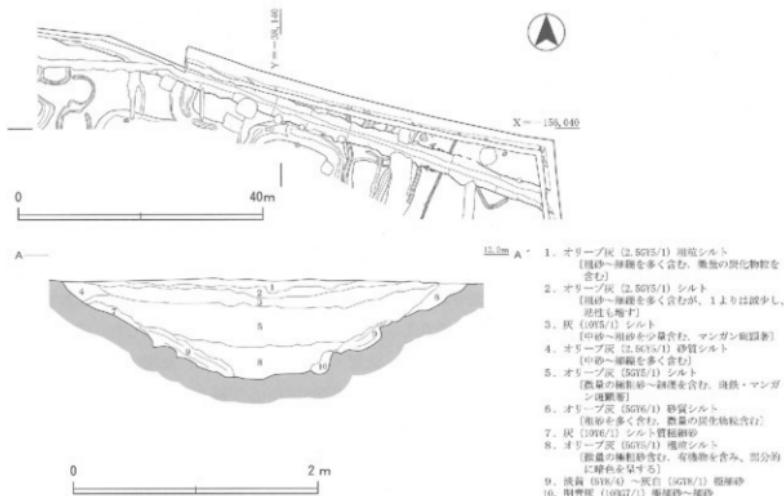


図30 溝25 平・断面図

方向は前節で述べた表層条里型地割の方向と 20° 近くずれており、仮にこの溝が地割に規制されて開削されていたとするならば、これまでに復元されている条里型地割とは異なる地割が先行して存在していた可能性が考えられる。

出土遺物と時期 周溝墓19や同26を始めとする多くの弥生・古墳時代の遺構と重複していたこともある。溝内からは、弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器といった各時期の上器類がコンテナに換算して1箱半程度出土した。このうち、時期的に最も下る遺物として、内外面に黒化処理を施した両黒の黒色土器碗が挙げられ、運くともこの土器が位置付けられる10世紀末から11世紀初頭には、溝の埋没が進行しつつあったことが判る。

3. 古墳時代中・後期の遺構

当該期の遺構には、3基の古墳のはか井戸・溝・土坑などがあり、これらは02-1工区西端の溝17より西側と、2B-7a区から2A-2c区にかけて走行する溝28より東側の、大きく2つの空間に分かれて分布している。

〔井戸6〕（図32、図版19-1）

検出状況 2B-4c区において検出した素掘りの井戸で、第3面の流路3を埋積した洪水堆積物内に掘削されていた。北端が攪乱によって壊されていたため本来の平面形は明らかにできないが、検出しえた限りではおにぎり形を呈し、南北長は1.2m以上、東西長は1.05mを測る。検出面から底面までの深さは1.35mで、側壁は底面から $70\sim75^{\circ}$ の角度で立ち上がり、断面形状はほぼ倒鉢形を呈する。埋土は大きく3層に細分されるが、いずれも黒褐色もしくはこれより若干淡い程度の黄灰色を基調とするシルトから細砂層で、中・下層には3層のプロックが混在していた。

出土遺物と時期 細片を中心とした古墳時代の土師器が、コンテナにして3分の2箱程度出土した。



図31 第2面 全体図

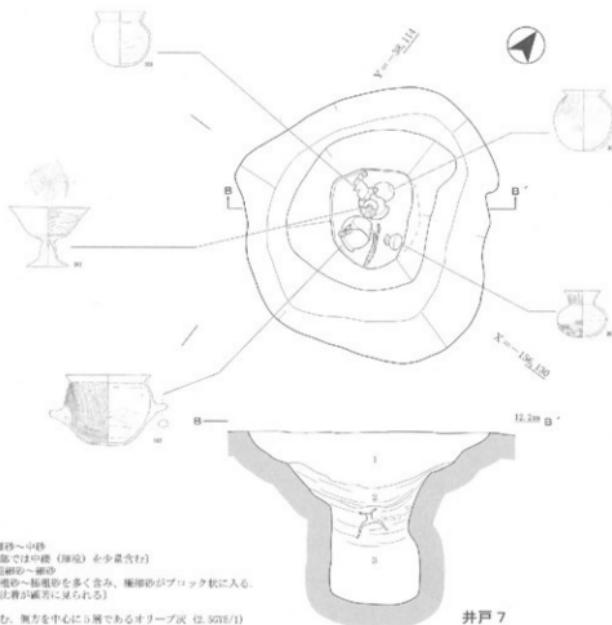
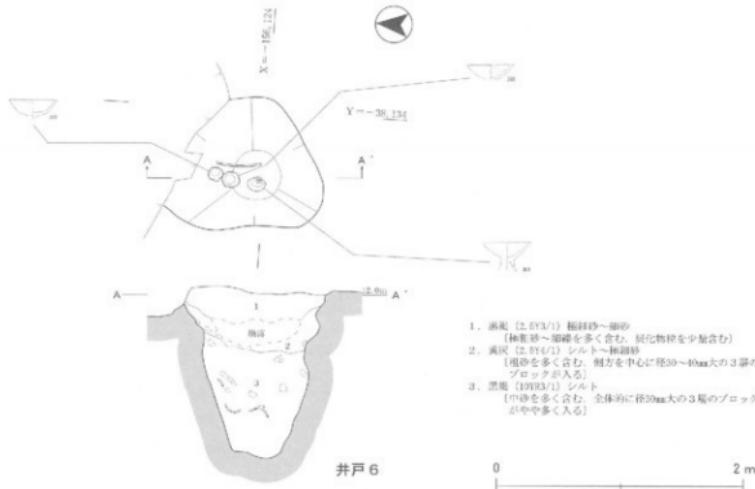


図32 井戸 6・7 平・断面図

このうち、器形が窺える資料としては、下層の中ほどから並ぶように出土した3点の輪形高坏坏部があり、その他に瓶の把手や体部片も存在している。これらの遺物は、5世紀前半に位置付けられる。

[井戸7] (図32、図版19-2)

検出状況 2B-2c・2d区において検出した素掘りの井戸である。平面形は径2.2m前後の不整円形、断面形は上部を検出面から35~40°の角度、下部をほぼ垂直に掘り下げた漏斗状を呈し、検出面から底面までの深さは1.4mを測る。埋土は大きく3層に分かれ、垂直の筒形部分を埋めた下層は粗砂を多く含んだ黒色シルト、中・上層は黒褐色の板細砂から中砂層で、上層ほど粗粒となっている。

出土遺物と時期 下層上部を中心に、直口壺・壺・高杯・把手付鉢など完形品を含む残存率の高い土器が出土したほか、古墳時代土師器・須恵器の細片や木片がコンテナにして3分の1箱程度出土した。これらの遺物は、5世紀中葉から後葉に位置付けられる。

[井戸8] (図33・34、図版20)

検出状況 2A-1j区において検出した素掘りの井戸である。平面形は南北に長い不整橢円形で、長径1.6m、短径約1.3mを測る。壁面が崩落したためか、断面形は側壁の中ほどが大きく内側に入り込んだフ拉斯コ状を呈し、検出面から底面までの深さは1.45mを測る。埋土も中位以下が複雑な様相を示すが、大きく見れば上層はシルト、中・下層は中疊(細粒)以下の砂疊層を主体としている。なお、井戸の下部は繩文時代に堆積したと考えられる砂疊を掘り込んでおり、調査時においてもかなりの湧水が認められた。

出土遺物と時期 埋土の各層から古墳時代の土器類と木製品が多量に出土した。遺物の取り上げに際しては、井戸のほぼ中央で検出面から0.7~1.1mの深さから出土した完形に近い須恵器壺を基準に、

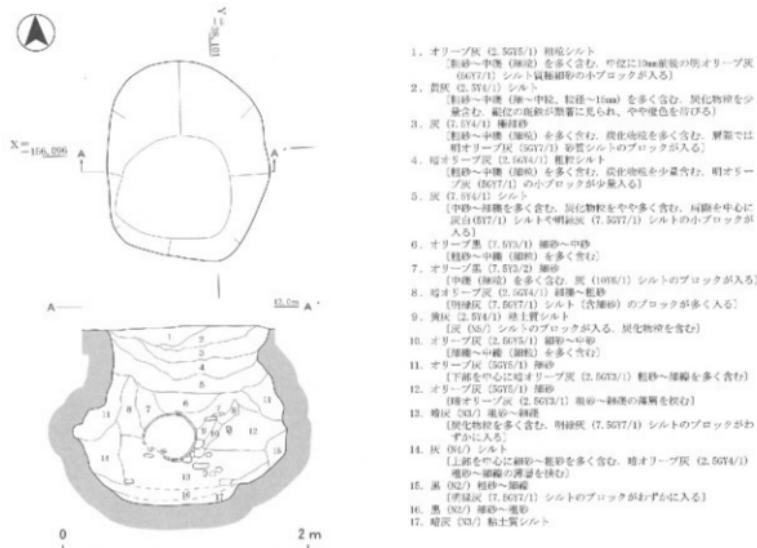


図33 井戸8 平・断面図

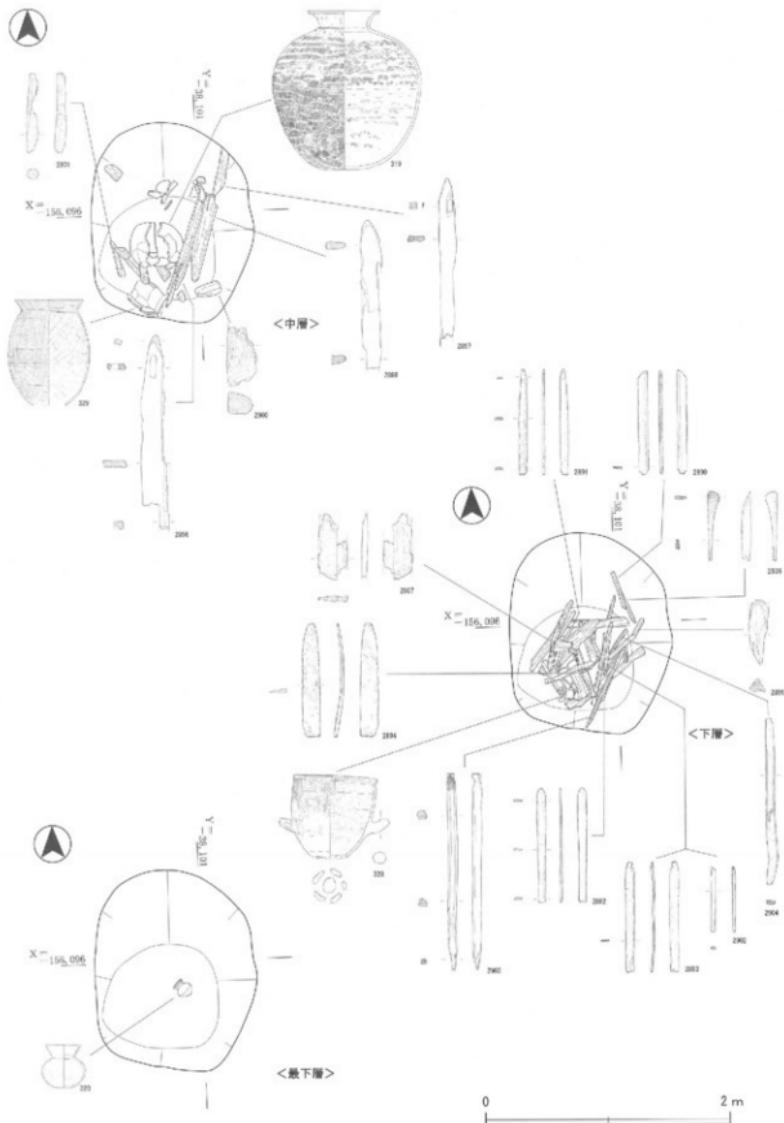


図34 井戸8 遺物出土状況図

この壺とほぼ同一レベルで出土した遺物を中層、これらを取り除いた木製品を中心とする遺物を下層、底面付近から出土した遺物を最下層に分けた。須恵器壺以外の中層遺物としては建築部材の可能性がある木製品と土師器長胴壺などがあり、下層からは刀形木製品などの祭祀具を含む多量の木製品とほぼ完形の壺など、最下層からは完形の直口壺がそれぞれ出土した。これらの遺物は、5世紀中葉に位置付けられる。

〔古墳1〕（図35、図版15-1・21）

検出状況 02-1工区の西端中央から03-1工区2トレンチにかけて検出した円形に巡る溝状遺構を古墳の周溝と捉え、その内側を含め古墳と認識した。検出面の標高は、周溝内側で11.95～12.1m、外側で11.9～12.1mとほぼ平坦で、本来周溝の内側に存在していたと想定される墳丘盛土は、削平されて造存していなかった。

北側と西側が調査地外となり、南側の一部も公園の砂場跡で失われていたことから、周溝を含めた本来の規模は把握しづらいが、墳丘は南北方向がやや長い垂な円形で、径は南北約15m、東西14.4mを測る。周溝はおそらく完周し、検出し得た限りでは溝内に陸橋状の掘り残しは認められなかった。幅は4.8～5.6mを測るが、東西部分は外へわずかに張り出し、約6.6mと幅広となっている。また、部分的に凹凸は認められるものの、断面形は傾斜の緩やかな浅い皿状を呈しており、検出面から溝底までの深さは0.2～0.3mと浅い。埋土は場所によって層数・層相を異にするが、いずれも褐色を基調としたシルトから中砂層で埋没していた。

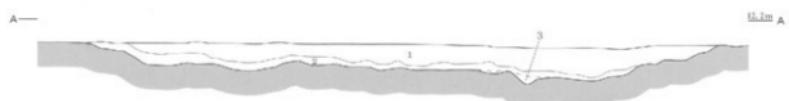
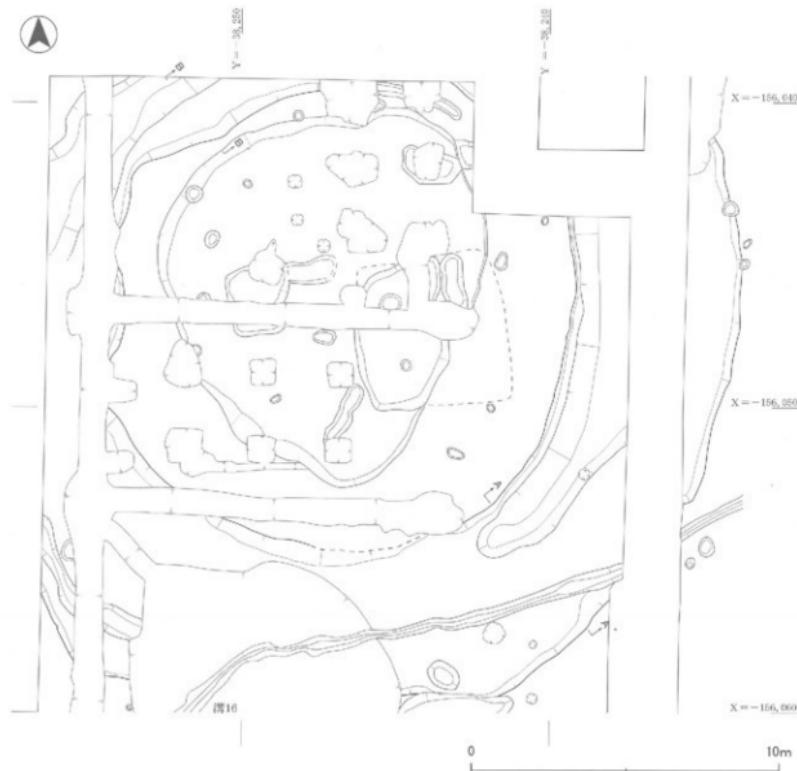
出土遺物と時期 周溝内からは、明らかに下層からの混入と考えられる土器も含め、須恵器・土師器や円筒埴輪片などコンテナに換算して1箱半ほどの遺物が出土した。出土状況は散発的で、特に葬送に伴う何らかの行為を指摘し得る特徴は見出せないが、東側周溝の溝底付近では5世紀後葉に位置付けられる須恵器が出土しており、古墳の築造時期も同時期に求めておきたい。なお、埋土の上層からは6世紀中葉から後葉の土器も出土しており、周溝の埋没には一定の時間幅が看取される。

〔古墳2〕（図36、図版15-1・22）

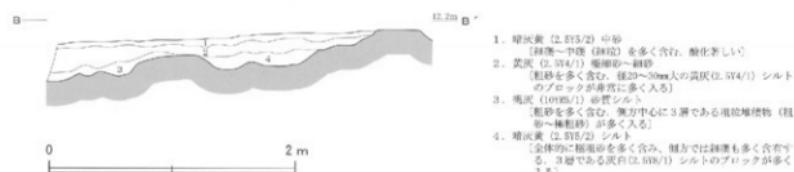
検出状況 3A-5f・5g区において検出した方墳で、古墳1の南側周溝の外肩に接するようにその南側に位置している。検出面の標高は、周溝内外とも12.0～12.5mとほぼ平坦で、やはり墳丘盛土は削平されて造存していなかった。

周溝は東側を除く逆「コ」字状に巡り、墳丘西辺はN14°E方向を向いている。墳丘の南北長は3.5～3.7m、より東へ延びた南側周溝東端までの東西長は約4.2mを測り、規模はかなり小さい。公園の砂場跡や地下埋設管による攪乱、先行する時期の土坑などが重なっていたことから、本来の周溝の規模は把握しづらいが、やや幅太となった南側周溝の東端を除き、溝幅は0.65～1.1mと細い。また、検出面から溝底までの深さも0.1～0.25mと浅く、溝の断面は皿形を呈している。埋土は多いところで3層に細分されるが、いずれも黒褐色や色調がやや淡い黄灰色の砂層で埋没していた。

出土遺物と時期 西側周溝の最も北寄りの溝底から、須恵器の坏身・有蓋高坏蓋・把手付鉢と土師器坏の計4個体の土器がまとめて出土した。坏身と坏蓋は完形、把手付鉢・土師器坏も口縁端部が部分的に欠損している程度で、把手を取り去られた把手付鉢が口縁部を南に向けて横倒しなっていた以外は正位で出土しており、意図的に置かれた可能性が高い。これらの遺物は5世紀後葉に位置付けられ、本古墳の築造も同時期と考えておきたい。なお、この他にも土師器・須恵器が75点ほど出土したが、いずれも細片である。



1. 黄灰 (2.8V4/1) 粗粘砂～細砂
【粗砂～中砂（颗粒）を多く含む。上部を中心に粘粒 (10.0V3/1) シルト（含粗砂）のブロックが多く入る】
2. 黄灰 (1.0V6/1) 砂質シルト
【粗砂を多く含む。中央部では底下部に3層である灰白 (2.8V8/2) シルトのブロックが多く入る】
3. 黄灰 (2.8V6/1) シルト（鷺井堆土）



1. 塩化灰 (2.8V5/2) 中砂
【粗砂～中砂（颗粒）を多く含む。酸化茶色い】
2. 黄灰 (2.8V4/1) 粗粘砂～細砂
【粗砂を多く含む。僅20~30mm大的黄灰 (2.8V4/1) シルトのブロックが非常に多く入る】
3. 黄灰 (1.0V5/1) 砂質シルト
【粗砂を多く含む。無分中に3層である堆積堆植物（粗砂～極粗砂）が多くの入る】
4. 雜灰 (2.8V5/2) シルト
【全層に粗粘砂を多く含み、側方では細砂も多く含む。3層である灰白 (2.8V8/2) シルトのブロックが多くの入る】

図35 古墳1 平・断面図

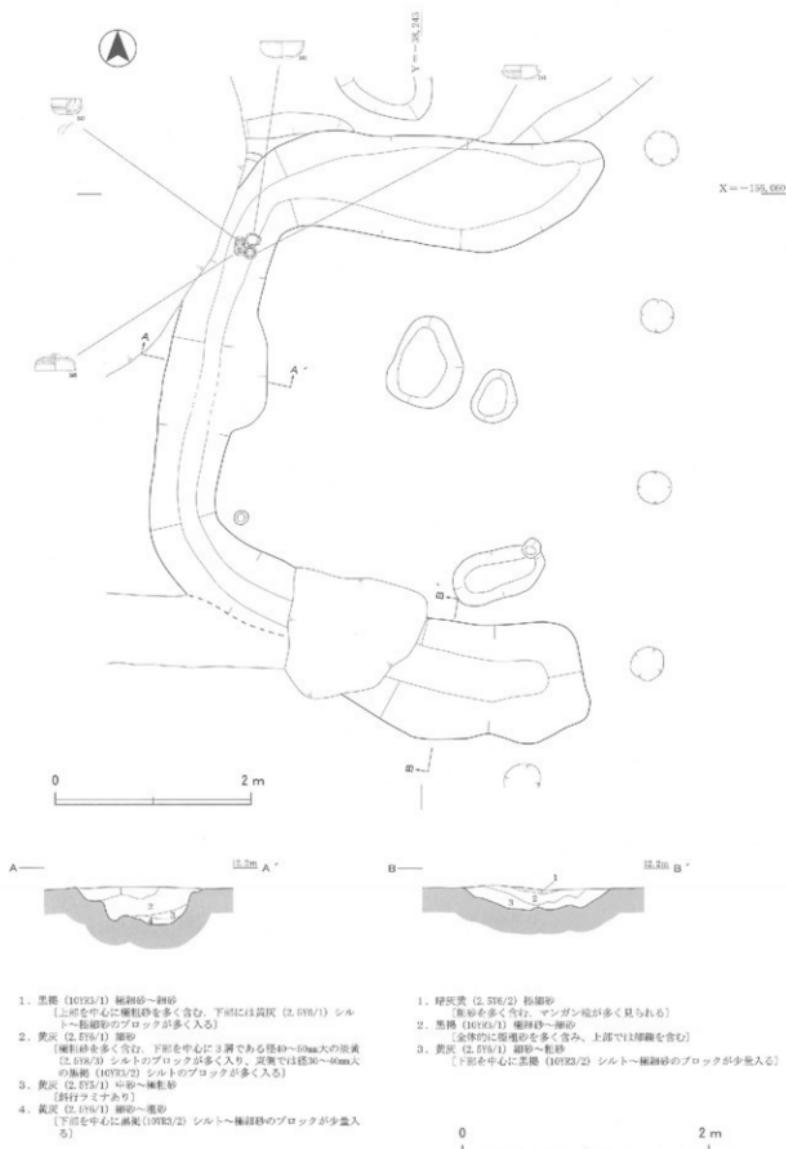


図36 古墳2 平・断面図

〔古墳3〕 (図37・38、図版23・24-1)

検出状況 02-2工区2トレンチの南東部から03-1工区1トレンチの北東部にかけて検出した古墳である。02-2工区の調査時には、東から南西方向へ蛇行しながら延びる古墳時代後期の溝状遺構と捉えていたが、03-1工区の調査において円弧を描くほぼ同一規模の溝が再び確認され、両成果を合成した形状が帆立貝形を呈したことから、改めて古墳と認識するに至った。ただし、調査年度を異にする2工区の境に位置し、加えて地中梁の搅乱が縦横に貫通していたため、遺構の遺存状況は著しく不良である。検出面における標高は、周溝内側の墳丘上で11.8~12.05m、周溝外側で11.75~12.05mとほぼ平坦で、墳丘の盛土は削平されて遺存していなかった。

本古墳を帆立貝式と捉えた場合、主丘となる円形は径19mを測り、中軸線をN42°W方向に延長させ各部を復元すると、括れ部の幅は約5m、張り出しの幅は最長で約7mで、墳丘全体の長さは最大で22.5mとなる。張り出しの南側から括れ部にかけての状況が判然としないため、周溝が全周していたか否かは不明であるが、溝の肩は墳丘側がやや傾斜がきつく、外側が緩やかに掘られている傾向が認められた。周溝の幅は2.4~3.5mであるが、張り出しの前面では広がり、おそらく5m前後の幅を有して



図37 古墳3 平面図

いたものと推定される。検出面から溝底までの深さは0.2~0.65mで、平均すると0.4m前後となる。周溝内の埋土はいずれも黒褐色や暗灰黄色・灰色といった暗色を基調としているが、北側の周溝が全体的にシルトで埋没しているのに対し、南側は細粒の砂層を主体としていた。

墳丘盛土がすでに失われていたことは前述したとおりであるが、円丘の中心からやや南へ寄った位置では、墓坑状の土坑が並ぶように2基確認された（土坑64・65）。本古墳に直接関連していた根拠は見当たらなかったが、合わせてここで報告しておきたい（図39、図版24-2）。

いずれの土坑もN29°~30°Eとほぼ同一の方向に主軸を置き、わずかな隙間を空けただけではなく接するように設けられていたことから、両者の間に何らかの関係性が存在していたと見なすことは許されよう。北端が地中梁により破壊されていたため全体規模は不明であるが、西側の土坑64は隅丸長方形を呈し、南北長は1.3m以上、東西長は0.85mを測る。検出面から坑底までの深さは0.2mで、断面逆台形の坑内は灰白色シルトのブロックを多く含んだ黄灰色の砂層で埋められていた。埋土内からは25点ほどの土器類細片が出土したのみであり、本土坑の詳細な時期は不明である。

一方、船形に近いやや歪な平面形状を呈した土坑65は、南北長2m以上、東西長1.5mと、64と比してかなり規模が大きい。断面形はほぼ逆台形であるが、中央部が溝状に凹み、検出面からこの溝底までの深さは0.3mを測る。埋土は黄灰色シルトから中砂を主体とするが、やはり灰白色シルトのブロック

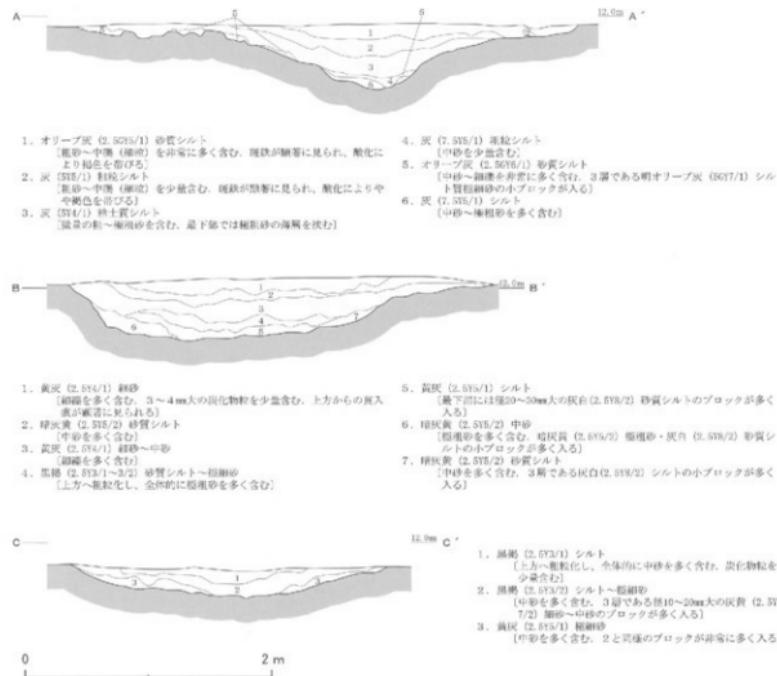
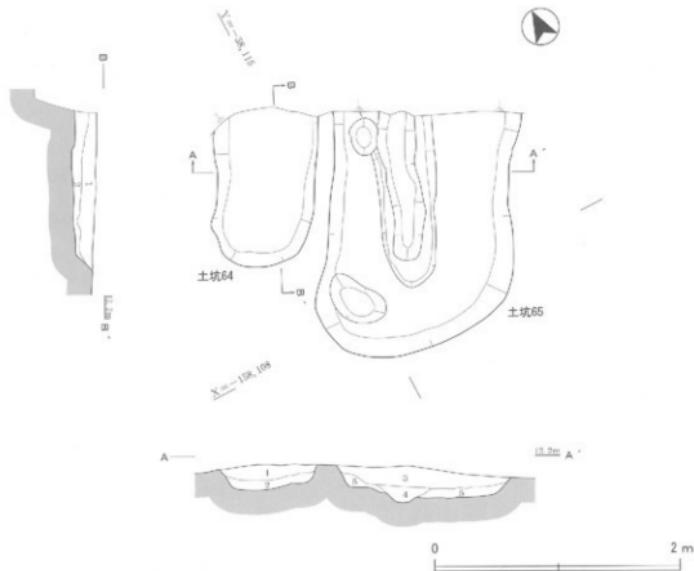


図38 古墳3 断面図



1. 黄灰 (2. SYW/1) 細緻砂
〔細孔跡が多く含む。軽微を中心にして3層である灰白 (2. SYW/2) シルトのブロックが非常に多く入る。〕
2. 黄灰 (2. SYW/1) 細緻砂と灰白 (2. SYW/2) シルトブロックの混合土
3. 黄灰 (2. SYW/1) 細緻砂
〔細孔跡～細緻砂が多く含む。下部を中心にして3層である灰30mmの灰白 (2. SYW/2) シルトのブロックが多く入る。〕
4. 黄灰 (2. SYW/1) シルト
〔軟質を中心に灰白 (2. SYW/2) シルトのブロックが多く入る。3より少しより木質を含む。〕
5. 黄灰 (2. SYW/1) 細緻砂～中砂
〔3層である灰白 (2. SYW/2) シルトのブロックが多く入る。〕

図39 土坑64・65 平・断面図

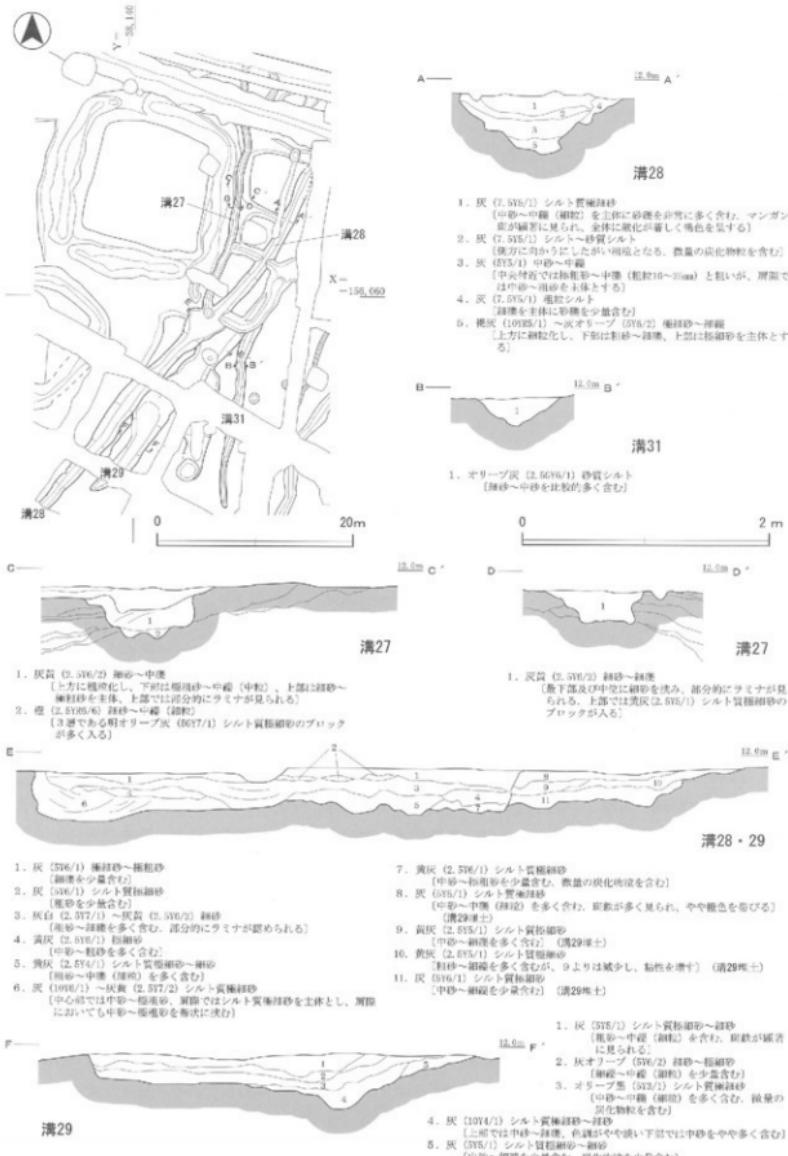
が多く混入していた。埋土内からは150点ほどの土器器の細片が出土しているが、本土坑に直接関わるような遺物は存在せず、土坑の詳細な時期は不明である。

出土遺物と時期 古墳3の周溝内からは、コンテナに換算して3箱ほどの土器類が出土した。溝40など先行する時期の遺構との重複もあって、量的には弥生時代末から古墳時代初頭の細片が目に付くが、北側周溝の溝底付近からは須恵器の甕や提瓶、張り出し前面の周溝埋土下層からは韓式系土器が出土しており、これらの遺物の年代から、本古墳の築造時期は6世紀前半と捉えておきたい。

(溝28) (図40、図版17-1)

検出状況 2B-7a区から2A-2d区にかけて、調査地内を南西から北東方向に抜ける溝状遺構である。検出長は88mに及び、北端では周溝墓27-29や溝29、南半では周溝墓31-33と重複してこれらの遺構を切っている。また、南端付近では溝内より古墳時代初頭の土器が多量に出土しており、本来はこの近くにも先行する時期の遺構が存在していたものと考えられる。さらに、周溝墓29の南側周溝付近からは溝27が分岐して北へ延びているが、両者の新旧関係については明らかにできなかった。

溝の幅は1.2～2.2m、検出面から溝底までの深さは0.2～0.5mを測り、溝底は非常に緩やかではあるが南から北へ傾斜している。溝の断面は椀状を呈するが、約4mと幅広になった溝27との分岐点付近では逆台形状となっている。埋土は細粒の砂層を主体として数層に細分されるが、いずれも多寡はあ



るもののが粗い砂粒や礫が含まれており、部分的にはそれらが主体となっている層も認められる。

出土遺物と時期 溝内からは、コンテナに換算して3箱分ほどの土器類が出土した。前述した重複関係を反映して量的には古墳時代初頭の土器が日立つものの、北半では壺身・壺蓋・甕などの須恵器も一定量出土している。時期的には6世紀の全般にわたっているが、初頭から前葉の遺物が主体を占めており、本溝の埋没も遅くともその時期には始まっていたものと推定される。

〔土坑58〕（図41）

検出状況 2A-2g区において検出した土坑である。地下埋設管の擾乱によって東半の上部が削られていたが、平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は推定で長径1m、短径0.7m、検出面から坑底までの深さは0.3m強を測る。断面形は椀形で、5層に細分された灰色を基調とする粗粒シルトから極細砂によって埋まっていた。

出土遺物と時期 出土量は多くはないが、下層から5世紀初頭に位置付けられる土師器高杯・小型盤が出土している。

〔土坑59〕（図41、図版25-3）

検出状況 2A-2g区において検出した上坑で、土坑58から南南西4mに位置する。弥生時代末から古墳時代初頭の溝40・土坑66と重複し、これを切っているため、坑内からは同時期の土器も比較的多く出土している。平面形は南北に長く延びたバナナ形を呈し、南北長は約3m、幅は北寄りの最も広い箇所で約1mを測る。断面形はV字形で、検出面から坑底までの深さは0.4~0.45mである。灰色を基調とした埋土は上下2層に分かれ、下層には砂層のブロックが多く混在していた。

出土遺物と時期 坑底から完形の壺蓋が2点出土した。5世紀後葉に位置付けられる。

〔土器埋納土坑3〕（図41）

検出状況 2A-3g区において検出した土坑で、地下埋設管の擾乱の精査を行っていた際にほぼ完形の須恵器壺身が出土したため、土器埋納土坑と捉えた。東側が失われていたため、全体の形状・規模は不明であるが、検出長は南北0.8m強、検出面からの深さは約0.5mを測る。灰色を基調とした埋土は5層に細分され、中層以下には灰もしくは明オリーブ灰色極細砂のブロックが混在していた。

出土遺物と時期 6世紀後葉に位置付けられる壺身のはか、坑内からは須恵器・土師器の細片が15点ほど出土した。

〔土器埋納土坑4〕（図41、図版25-2）

検出状況 2A-3h区において検出した土坑で、土器埋納土坑3から南西3mに位置する。北北東~南南西方向に長い楕円形土坑で、長径1.1m、短径0.9m、検出面から坑底までの深さ0.45mを測る。極細砂から細砂を主体とした埋土は2層に分かれ、下層にはブロック土が混在していた。

出土遺物と時期 北側の肩に張り付くように、6世紀後葉に位置付けられるほぼ完形の須恵器壺身が口縁部を上に向けて出土した。その他の遺物としては、須恵器の高杯脚部や土師器の細片がある。

〔土器埋納土坑5〕（図41、図版25-1）

検出状況 2B-2d区において検出。井戸7のすぐ横で確認された小穴で、北西~南東方向にやや長い不整楕円形を呈し、長径0.4m、短径0.35m、検出面から坑底までの深さ0.25mをそれぞれ測る。暗灰黄色を基調とした砂層からなる埋土は2層に細分され、下層の上面に載るように完形の須恵器壺身が口縁部を上に向けて出土した。

出土遺物と時期 6世紀前葉に位置付けられる須恵器壺身のはか、数片の土師器細片が出土した。



- 灰 (BY4/1) 磨耗砂
[中砂～細砂を多く含む、微細の炭化物粒を含む]
- 灰 (BY4/1) 砂質シート
[砂を多く含む]
- 灰 (BY4/1) 砂質シート
[ほどほどの砂～中砂 (粗粒) を多く含み、薄層には3層である明オーブー灰 (SGT7/1) の砂質シートのブロックが入る]
- 灰 (10W/1) 磨耗砂
[中砂～細砂を少し含む]
- 灰 (BY5/1) 砂質シート
[砂をやや多く含む]

- 灰 (5T4/1) 磨耗砂
[中砂～細砂を少々含む]
- 黄灰 (2, SY4/1) 砂質シート
[細砂の炭化物粒を含む]
- 灰 (5T4/1) 磨耗砂
[中砂～粗砂をやや多く含む、炭化物及び繊維の薄層を挟む。上部では灰 (7, SY6/1) 磨耗砂のブロックが入る]
- 灰 (10T5/1) シルト質磨耗砂～粗砂
[粗砂～中砂 (粗粒) を含む、微量の炭化物粒を含む、明オーブー灰 (SGT7/1) の砂質シートのブロックが入る]
- 灰 (BY4/1) 砂質シート
[微量の炭化物粒を含む、灰 (10W/1) シルト質磨耗砂のブロックが多く入る]

土器埋納
土坑3

- 黄灰 (2, BY4/1) シルト質磨耗砂～細砂
[粗砂～細砂を少々含む、微量の炭化物粒を含む]
- 灰 (SY4/1) シルト質磨耗砂
[細砂を含む、層状構造的に層がある砂質シート灰 (SGT7/1) 磨耗砂の小ブロックが入り、中層では灰 (BY4/1) 砂質シート (宮ヶ原～磨耗砂) のブロックが入る]

土器埋納
土坑4

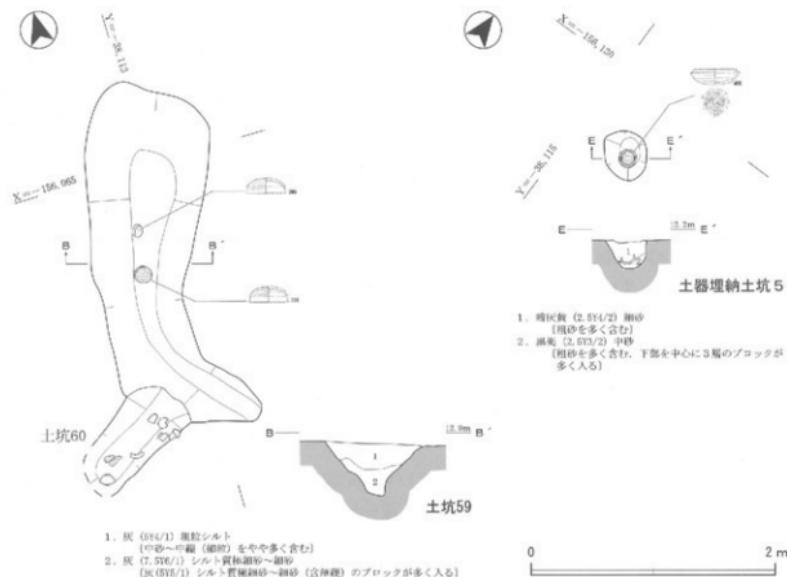


図41 土坑58・59 土器埋納土坑3～5 平・断面図

4. 弥生時代末から古墳時代初頭の遺構

今回の調査を実施するに当たって、検出遺構の主体を占めるであろうと想定されていた時期である。特に調査地の南半で東西120mにわたって行われた研究会1次調査では、弥生時代後期の方形周溝墓10基ならびに5世紀末から6世紀初頭の方墳5基が確認されたと報告されており、これまでに他の遺跡で行われてきた当該期の墳墓の調査成果を勘案すると、さらに多くの埋葬遺構が検出されることが予想された。ただし、研究会1次調査の成果に関しては、3点の検出遺構写真とともに概略的な報告がなされているのみであり、研究会8次調査の報告〔原田1995〕の中で概念図中に示された3基の古墳（八尾南4～6号墳）の位置以外、遺構の分布状況の詳細は明らかにされていなかった。

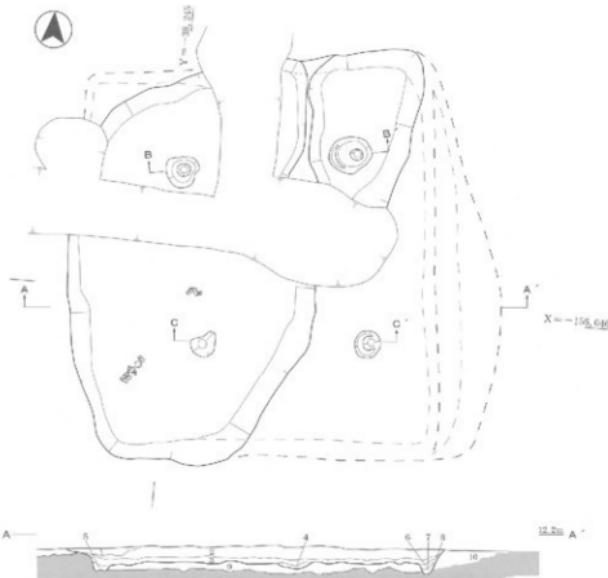
墓域全体の構成を分析するうえでは、墳墓以外の遺構も含めた分布状況や重複関係、規模などの情報が不可欠であり、当然のことながら研究会が調査を行った各遺構の正確な位置や大きさも重要となる。そこで、これらの遺構が検出時の状態のまま埋め戻し土の下に保存されている可能性を考え、新たに確認される遺構とともに改めて記録を残すことができるよう、慎重に機械掘削を行ったうえで再発掘を実施した。地盤改良剤の影響を排除するために強く削らざるを得なかつた箇所では、痕跡すらも失われてしまつたが、10基以上の墳墓の存在が確認でき、今回の調査で検出し得た墳墓の数は41基に及んだ。以下では、こうした再発掘分の墳墓についても報告していくが、規模に関わる数値はあくまでも参考程度に捉えていただきたい。また、これらの中には、前述したように5世紀末から6世紀初頭の古墳と見なされた遺構も含まれているが、ここでは合わせて紹介することとする。

なお、各遺構から出土した土器の時間的な位置付けについては、近畿自動車道天理吹田線建設に伴う発掘調査報告書『河内平野遺跡群の動態Ⅶ』の中で、河内平野南遺跡群の資料を基に若林邦彦氏によつて示された当該期土器の変遷案（以下、「近畿遺編年」と呼称）〔若林1999〕にしたがい、詳細な検討は第Ⅷ章第2節で別途行うこととした。

〔堅穴建物1〕（図42、図版26・27）

検出状況 調査以前に公園として利用されていたこともある、03-1工区2トレンチには大小多くの樹木が植えられており、その根による擾乱がかなり下位の地層まで及んでいた。古墳1の墳丘上についても、第1面の検出時から遺構面が薄汚れた状況を呈しており、特に中心に近い南北12m、東西10.5mの範囲は灰黄色や黒褐色の砂層が落ち込んだ状態にあった。第2面の調査の際には、断面観察用のアゼを残しつつこれらの砂層を除去して遺構確認を行ったが、数基の土坑やピットを検出したに留まり、最終的には自然地形の凹地（落ち込み1）と認識するに至った。ところが、3層を掘り下げていく過程で落ち込みの東端において新たに2基のピットが確認され、すでに検出済みであった2基を加えて方形に並んでいることが明らかとなった。そこで再度断面を詳細に検討したところ、堅穴建物と考えられる掘り込みの存在を認識し、4基のピットはその主柱穴であったことが判明した。

第2面調査における遺構の検出状況、ならびに主柱穴の配置と埋土の断面によって復元される堅穴建物は、N 8° W方向に長軸を置く西壁がやや狭まった台形を呈し、南北長は推定4.7～5m、東西長は約4.3mを測る。掘り方を含んだ堅穴の埋土上は、局所的なものを除けば大きく3層に分かれ、上・中層は黄灰もしくは灰黄色の極細砂から中砂、下層は粗砂を多く含んだ砂質シルトであった。下層には全体的に黄灰色シルトや暗灰黄色極細砂のブロックが多く含まれており、貼床であった可能性が高い。また、東側に張り出した掘り方と東壁の間には灰オリーブ色のシルトから極細砂層が見られ、壁体の裏込め上であった可能性がある。床面上の施設として、主柱穴以外に幅0.2m前後の壁溝が巡っていたこ



1. 埋没土 (2.5t/4/2) シルト～細砂岩
[粗砂を多く含む、上部では東柱跡やや多く含む、下部を中心には灰白 (2.5t/1) の質シルトのブロックが多く入る]
2. 黄灰 (2.5t/1) 質質シルト
[細砂を多く含み、上部を中心には細砂を含む、炭化物微を少量含む、質半を中心には灰白 (2.5t/2) シルトのブロックが多く入る、マンガニン斑状斑]
3. 灰青 (2.5t/2) 極細砂～中砂
[細砂を多く含む、炭化物微を少量化する]
4. 黄灰 (2.5t/1) 質質シルト
[細砂を多く含む、上部では細砂を多く入る、然然は認められない]
5. 灰青 (2.5t/2) 質質シルト
[粗砂を多く含む、隣接では黄灰 (2.5t/1) 極細砂のブロックが入る、粗面斑点である。真入痕が多くの箇所に形成]

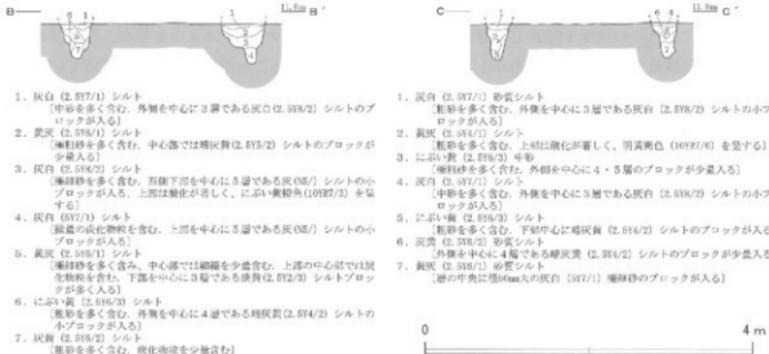


図42 積穴建物11 平・断面図

とが断面観察から把握し得たが、柱についての確認できなかった。

出土遺物と時期 土師器細片が20点ほど出土したのみであり、豊穴建物の機能もしくは廃絶の時期については不明である。

〔掘立柱建物11〕 (図43)

検出状況 1 A - 10 i・2 A - 1 i 区において3層の掘削途中に検出した建物である。本節の冒頭でも述べたように、この周辺では油分の浸透によって地層が著しく変色していたことから、本来は3層上面で確認すべき遺構を見落としてしまったものと考えられる。

柱穴 1～8で構成される桁行3間、梁間1間の東西棟の建物で、柱通りの良い南側の桁を代表すると、長軸は N71° W 方向に置かれている。桁行の長さは北側で 5.4 m、南側で 4.8 m と逆台形を呈し、梁間は柱穴 4・5 間で 3.5 m を測る。桁行の柱芯間隔は 1.55～1.7 m と比較的近似した値を示すが、柱穴 1・2 間のみ 2.15 m と長くなっている。各柱穴は検出長 0.2～0.35 m と小規模で、中砂から極粗砂を多く含んだ灰色シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 柱穴 5 の中から V 様式系甕の口縁部を含む 3 点の土器細片が出土したのみであり、建物の詳細な時期は不明である。

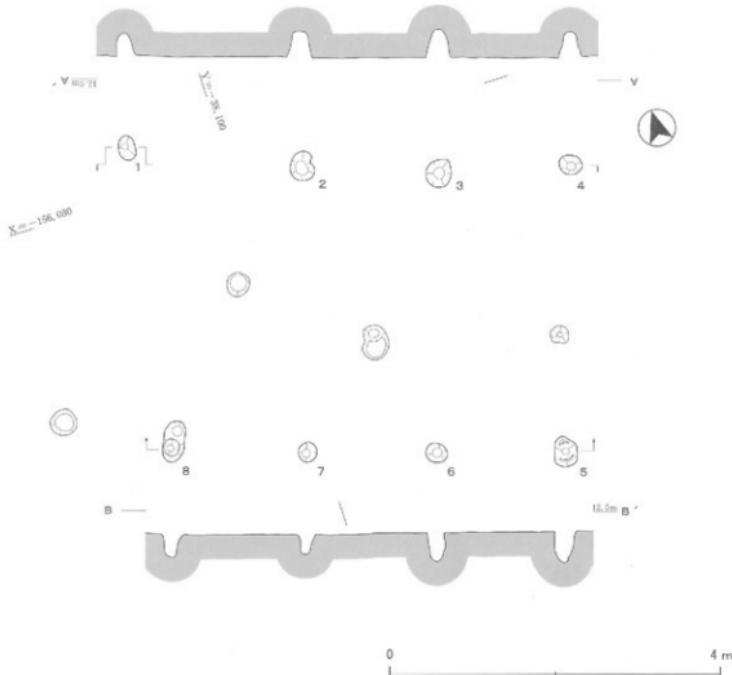


図43 掘立柱建物23 平・断面図

[井戸 5] (図44、図版28)

検出状況 2 A - 5 g - 6 g 区において検出した素掘りの井戸である。南端を除く大部分が公園の砂場跡と重複したために上部が 0.1 m 前後失われていたが、平面形はおそらく北東 - 南西方向にやや長いおにぎり形を呈し、長径は 2.9 m 以上、短径はおにぎりの底辺に近い部分で 2.55 m を測る。検出面から長径 0.6 m の楕円形を呈した底面までの深さは 1.65 m と比較的深く、側壁は底面から 0.5 m までは 70~80°、それより上は途中何箇所か角度を変えつつ 50~55° 前後で立ち上がりつており、遺存状況の良かった南西側ではさらにテラス状の緩やかな傾斜が続いている。埋土は中心部で 6 層に細分されるが、側面から流入したと考えられる浅黄色細砂を挟み、上層は黒を基調とした砂質シルトから細砂、中・下層はラミナも認められる淡い色調の灰もしくは黄灰色シルトに大別できる。

出土遺物と時期 埋土全体からコンテナ半箱程度の土器が出土した。下層上部と中層からは近畿遣編年様相 3 に位置付けられる小型壺、甕が出土しており、本井戸は弥生時代末にはすでに廃絶していたものと考えられる。なお、下層からは輕石が 1 点出土している。

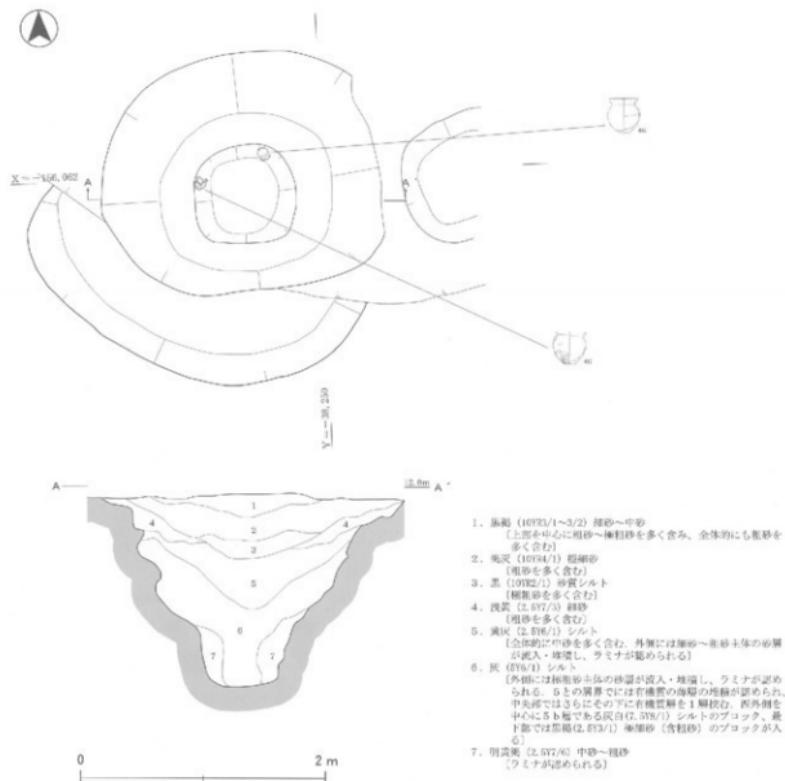


図44 井戸 5 平・断面図

〔周溝墓1〕 (図45、図版30-3)

検出状況 3 A - 1 d・2 d区において検出した周溝墓である。ただし、この地区は配達センター倉庫の北西角に当たっているため擾乱が特に著しく、わずかに残存した部分で北側から西側の周溝と想定される鉤括弧状の溝が検出され、東側の擾乱の底面において東側周溝の痕跡と考えられる溝が確認されたため、周溝墓と認識した。擾乱を免れ今回検出し得た部分の標高は、墳丘上で11.85～11.9m、周溝外で11.9mとはほぼ平坦で、墳丘盛上については遺存を確認できなかった。

北側周溝から西側周溝の曲がりを参考にすると、墳丘は南北軸をN 3° W方向に置く方形で、一辺の長さは5.8 m前後に復元できる。周溝が完周していたか否かは不明とせざるを得ないが、溝の肩は墳丘側がやや傾斜がきつく、外側は緩やかに掘られていた。幅は1.0～1.5 m、墳丘上から溝底までの深さは0.2 m前後を測り、上層は濃く、下層はやや淡い灰色の粗細砂から細砂で埋まっていた。

なお、北西コーナーから幅0.35～0.5 mほどの溝が北・西方向へ延びているが、本周溝墓との新旧関係は明らかにできなかった。

出土遺物と時期 西側周溝の坑底付近より、完形に近い粗いタタキ成形が施された甕が1点出土している。近畿道縦年様相3(新)に位置付けられる。

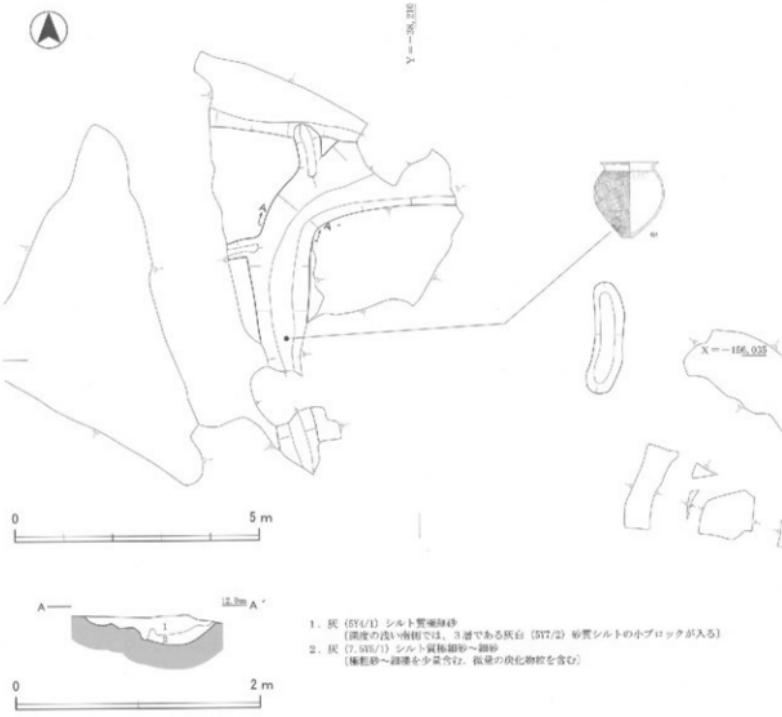


図45 周溝墓1 平・断面図

〔八尾南4号墳〕（図46）

検出状況 3A-2e区において検出した墳墓で、研究会1次調査で南側周溝と西側周溝の一部が検出されていた。周溝内からTK23型式の須恵器が出土したことから「八尾南4号墳」と呼称されており、本報告もこれにしたがっている。今回は研究会が調査を行った周溝を再発掘するとともに、西側周溝の延長および北・東側周溝を確認すべく精査を実施した。検出面の標高は、墳丘上で11.95～12.0m、西側周溝の外側で11.9mとわずかに前者が高まっていたが、墳丘盛土については確認できなかった。

墳丘の南寄りと東端に地中梁の擾乱が貫通していたため不明な点が多いが、まず南側の周溝については、溝底の深さが西側周溝より0.15mほど深くなっていることから、本墳の周溝というよりも後述する周溝墓3の北側周溝と捉えた方が妥当であり、本墳はそれを共有する形で利用していたと見なすべきであろう。次に西側周溝は、その溝の西端付近から分岐してN25°E方向に6mほど延びた後、そのまま北へ続く溝と東側へ折れ曲がる溝とに分かれていた。分岐手前の溝幅は3.1m、墳丘上から溝底までの深さは0.3mで、断面形は浅い皿状を呈していた。また、東へ折れる溝は幅1.8～2.2m、深さ0.25～0.3mで、3.5mほど延びたところで再び南側へ折れ始めており、北側周溝であった可能性が高い。ただし、東端が地中梁の擾乱と土坑状の落ち込みによって失われていたため、東側の周溝については存否も含めて詳細は不明である。以上の溝から連続される墳丘は、角の丸くなった歪な台形状を呈し、南北長は4.5m前後、台形の下底に当たる東西長は5.5m前後であったと推定される。なお、周溝の埋土は黒褐色や灰色を基調とするシルト層が主体で、いずれの層にも砂砾が多く含まれていた。

出土遺物と時期 北側周溝の埋土を中心に、弥生時代末の土器細片が50点ほど出土した。

〔周溝墓2〕（図46）

検出状況 北と東側を地中梁の擾乱で失っているため詳細は不明であるが、4号墳の西側周溝から続く溝が2.3mほどのところで東へ折れていたため、4号墳の北側周溝を共有して築かれた小規模な周溝墓と認識した。検出面の標高は、墳丘上で11.85～11.95m、西側周溝の外側で11.9～11.95mとはば平坦で、やはり墳丘盛土については確認できなかった。

墳丘は南北軸をN10°E方向に置いた長方形を呈し、南北長2.4m、東西長4.9m以上を測る。西側の周溝は幅1.35～2.6mで、墳丘上から溝底までの深さは0.15～0.2mを測る。溝の肩は墳丘側の傾斜をややきつくして掘られており、主として黄灰色の粗粒シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 4号墳との共有となる南側周溝以外からは遺物は出土しておらず、本周溝墓の築造時期については不明である。

〔周溝墓3〕（図47）

検出状況 3A-2f区を中心に行なった周溝墓である。墳丘は南北軸をN13°W方向に置いた方形を呈し、南北長7.9～8.3m、東西長8.4～8.8mを測る。周溝は擾乱によって検出できなかった南西部を除けば連続して巡っており、北側の周溝については前述したように本周溝墓に伴うものと見なすべきである。周溝の幅は0.9～1.9mを測り、深さについては上面が削平を受けているため不明とせざるを得ないが、南東コーナーは東側周溝もしくは南側周溝の中央部と比較すると0.15m前後浅いことから、陥穼状に掘り残されていた可能性がある。また、南側周溝の西端も中央部と比べ0.2m近く浅くなっていること、やはり陸橋状の掘り残しが存在していたのかもしれない。

出土遺物と時期 各周溝の溝底に部分的に認められた埋土の掘り残しから、わずかながらも土器の細片が出土したが、本周溝墓の築造時期を窺うことが可能な遺物は認められなかった。

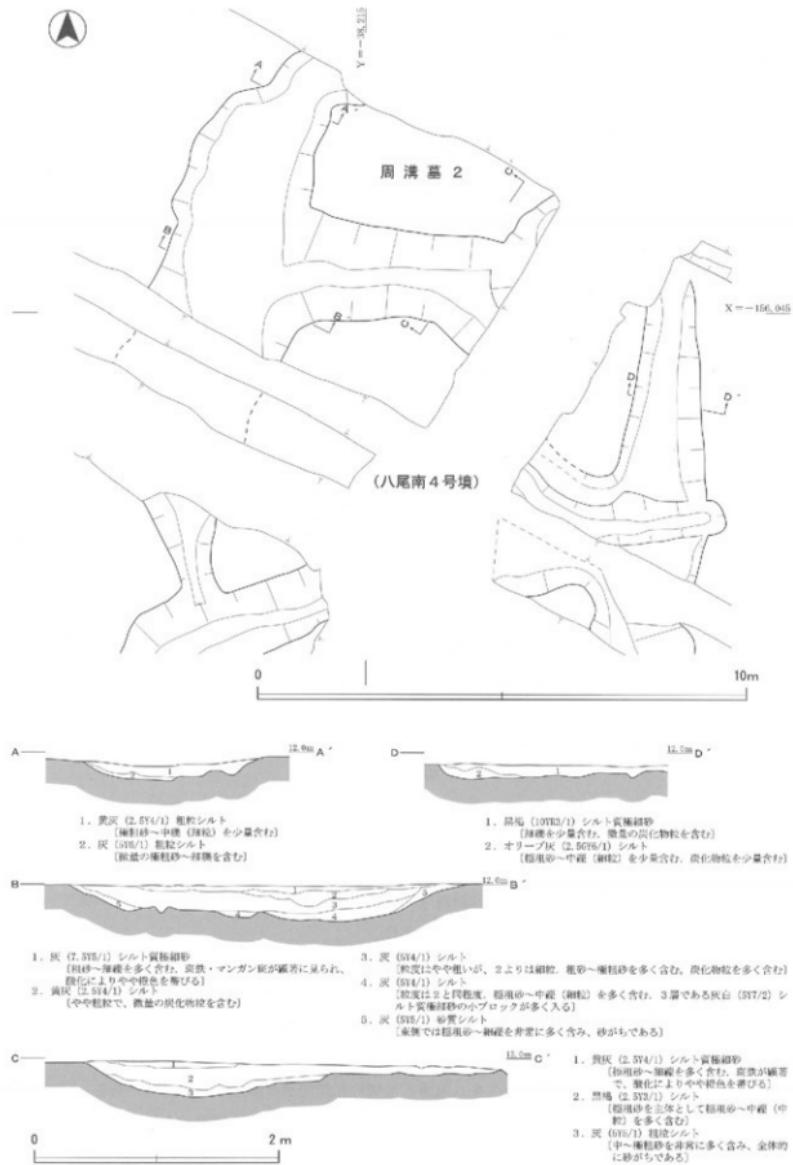


図46 周溝墓 2 平・断面図

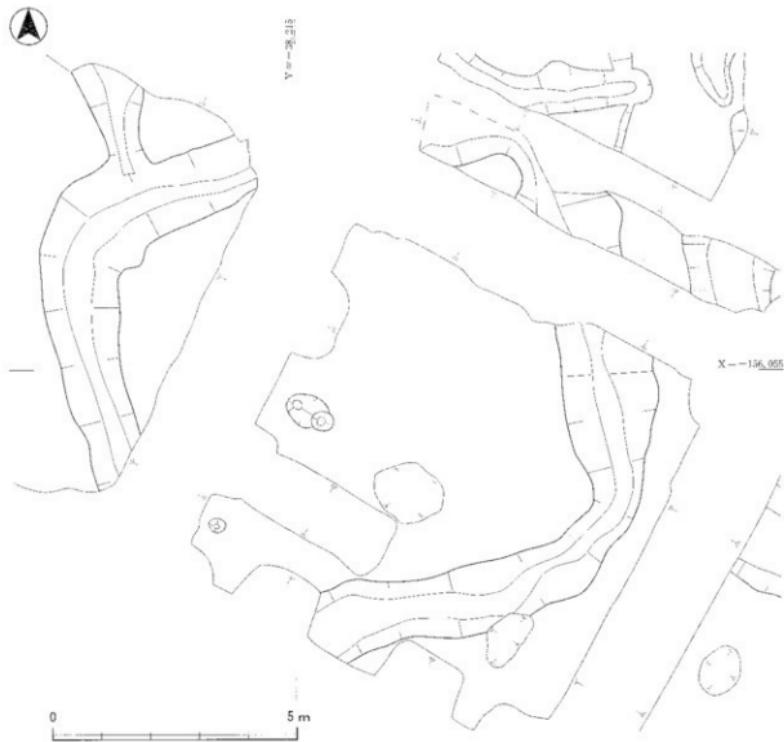


図47 周溝墓3 平面図

[周溝墓4] (図48)

検出状況 2A-10e・3A-1e区において新たに検出した周溝墓で、後述する八尾南5号墳の北側に周溝を一部共有する形で存在している。地中梁の擾乱に加え、第1面の溝1とも重複していたため遺存状況は著しく不良であるが、検出面の標高は、墳丘上および北・東・西側の各周溝の外側で11.7~11.9mとほぼ平坦で、墳丘の盛土は確認できなかった。

墳丘は南北長5.5~6.4m、東西長推定6.8m前後のやや東西に長い長方形を呈し、西側周溝を基準にすれば、墳丘の南北軸はN4°W方向を指す。周溝は墳丘側の傾斜をややきつくして掘られ、擾乱により各コーナーの様相が把握しづらいが、南西コーナーはわずかながらも確実に途切れていた。溝の幅は北・西側周溝が0.55~1.3m、東側周溝の南端が1.8mであるのに対し、南側周溝は2.3~3.0mと幅太となっており、墳丘プランの上からも八尾南5号墳の北側周溝と捉えた方が妥当である。墳丘上から溝底までの深さは0.2~0.25mで、下部はオリーブ灰色のシルトから極細砂、上部は黒褐色もしくは灰色の粗粒シルトからシルト質極細砂で埋没していた。

出土遺物と時期 周溝内からコンテナ半箱分ほどの土器が出土したが、細片が多く、本周溝墓の詳細

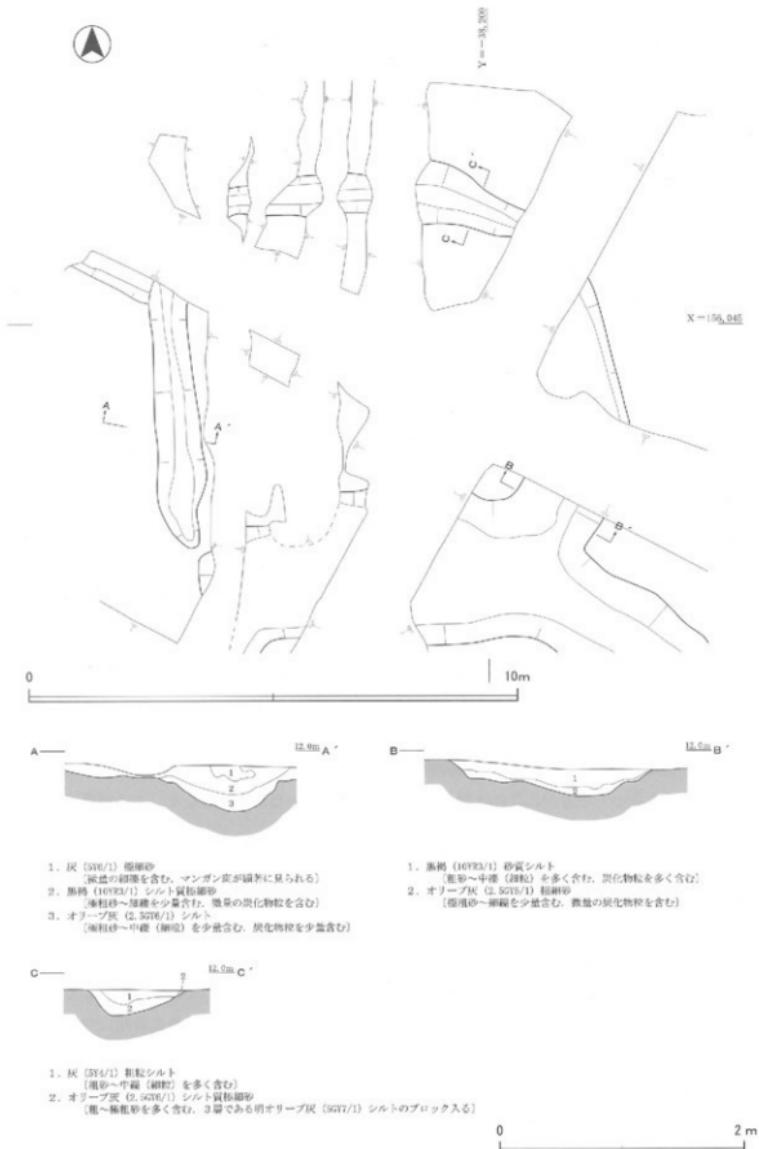


図48 周溝墓4 平・断面図

な築造時期については不明である。

〔八尾南5号墳〕（図49、図版30-1）

検出状況 2A-10f・3A-1f区において検出。研究会1次調査で南側周溝と東・西側周溝の一部が確認され、溝内よりTK23型式の須恵器が出土したことから「八尾南5号墳」と呼称されている墳墓で、北側に周溝墓4、東側に周溝墓6が本墳の周溝を共有する形で接している。前述の周溝墓4と同じく地中梁の搅乱と溝1が貫通し、さらに研究会調査の北側周溝も重なっていたことから、遺構の遺存状況は不良であるが、今回新たに検出した部分の標高は、墳丘上で11.75~11.9m、周溝外側で11.8~11.9mを測り、墳丘の方が若干低めとなっている。

北側周溝の中ほどから西側がやや南へ振っているために墳丘は五角形状を呈し、東側周溝はN23°W方向を向いている。周溝はやはり墳丘側の傾斜をややきつくして掘られ、擾乱で状況が不明となった南西コーナーを除けば連続して巡っていた。周溝の幅は北側が1.95~3.0m、東側が1.8~1.95m、西側が1.65~1.8mで、南側についても東・西側周溝とはほぼ同規模である。墳丘上から溝底までの深さは0.2~0.25mで、周溝内の埋土は下部が灰黄色細砂、上部がそれより暗色の黄灰色シルトから極細砂を主体としていた。

なお、北側周溝からは、TK23型式に比定される完形の須恵器壺蓋が内面を上に向けて出土し、そのまま横で滑石製錘車も確認された。ただし、いずれも最上層からの出土であり、溝底からは0.2m前後浮いていた。

出土遺物と時期 周溝内からは、近畿道編年様相3（新）に位置付けられる土器がコンテナ1箱ほど出土したほか、最上層からは残存率80%程度の須恵器壺蓋（TK23型式）がもう1点出土している。
〔周溝墓5〕（図50）

検出状況 2A-9f・10f区を中心に検出した周溝墓で、八尾南5号墳の北側に位置し、周溝墓6の北側周溝を共有する形で北に接して存在している。西側周溝が地中梁の搅乱によって検出できず、墳丘も長辺が4m余りと小規模であることから、検出当初は周溝墓との認識を抱いていなかったが、その後、周溝墓15や28など同程度の規模を有した周溝墓の存在が明らかとなつたため、周溝墓と捉えることとした。検出面の標高は、搅乱より北側の墳丘上で11.8~11.95m、周溝の外側で11.7~11.75mとかなり後者が低くなっているが、これは墳丘の盛土が遺存していたからではなく、この周溝自体が周溝墓17の周溝内においてさらに1段凹む形で確認されたためである。

周溝が搅乱を挟んだ西側で確認できなかつたことを勘案すれば、墳丘はN50°E方向に長軸を置いた長方形を呈していたと推定され、検出長は長辺4.15m、短辺2.6mをそれぞれ測る。検出し得た周溝の幅は1.05~1.85m、墳丘上から溝底までの深さは0.1~0.2mで、溝内は極粗砂から細粒の中疊を多く含んだ黒褐色もしくは灰色の砂質シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 周溝墓17の周溝との重複関係を確認することなく連続して埋土を除去してしまったため、厳密に本周溝墓に伴っていた遺物を抽出することは困難であり、詳細な築造時期については不明である。

〔周溝墓6〕（図50）

検出状況 2A-10f区において検出した周溝墓で、八尾南5号墳と周溝墓5の両者と周溝を共有する形で存在している。検出し得た部分の標高は、墳丘上で11.9~12.0m、北側周溝の外側で11.9mとほぼ平坦であるが、東側周溝の外側は、周溝から1.7m東で確認された土器埋設遺構1の検出状況が示す

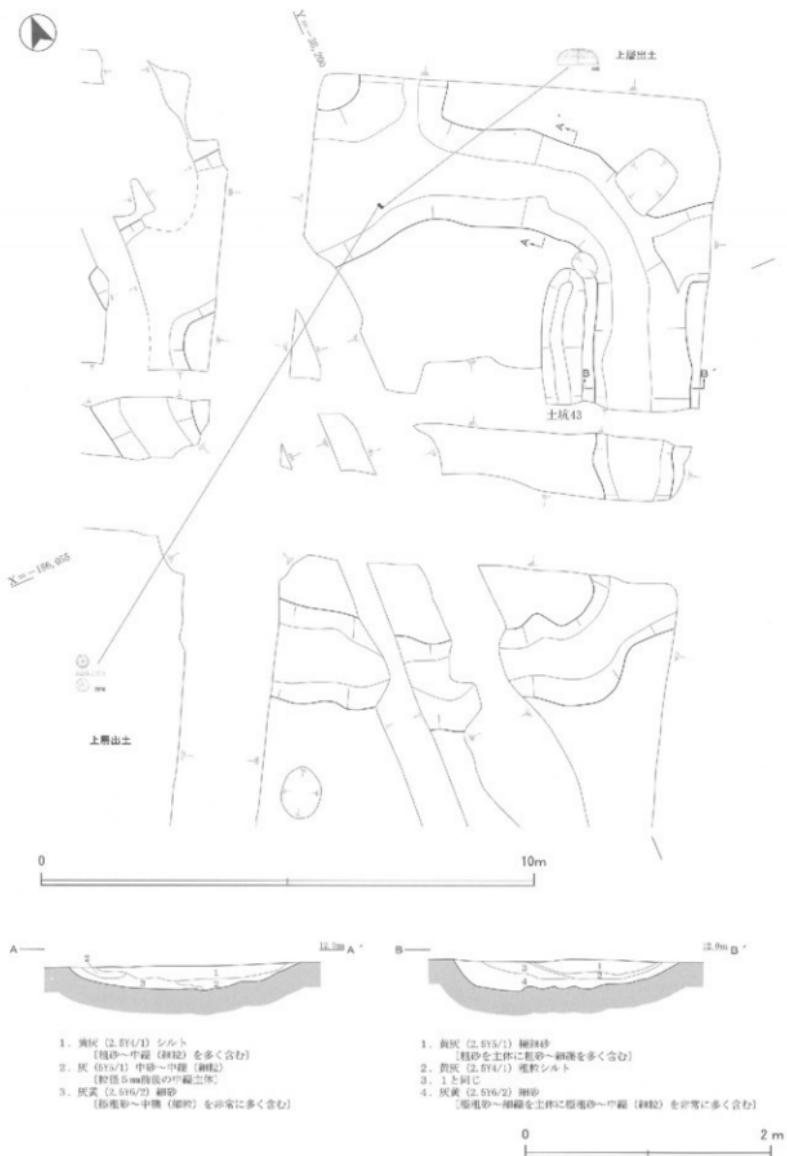


図49 (八尾南5号墳) 平・断面図

ように削平を被っており、11.75～11.85mとやや低くなっていた。

墳丘はN22°E方向に南北軸を置いた方形を呈していたと推定され、南北長は検出し得た限りで3.2m、東西長は3.3～3.95mを測る。周溝は幅1.2～1.9m、墳丘上から溝底までの深さ0.1～0.25mで、八尾南5号墳の東側周溝との接続箇所では、溝底のレベルが0.15mほど高くなっていた。周溝は墳丘側の傾斜をわずかにきつくして皿状に掘られ、溝内は下部が灰色シルト質極細砂、上部が粗砂から細砾を多く含んだ黄灰色極細砂によって埋没していた。

出土遺物と時期 周溝内からはコンテナ半箱程度の土器が出土しているが、粗いタタキ成形を施した壺の口縁部を図示し得たのみであり、本周溝墓の詳細な築造時期については不明である。

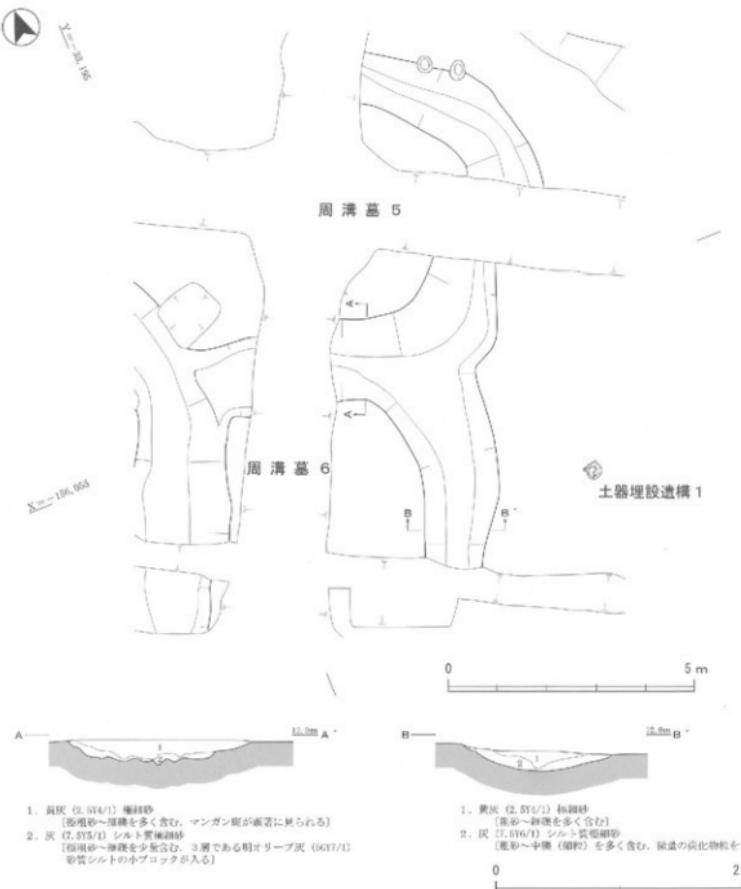


図50 周溝墓5・6 平・断面図

〔周溝墓7〕 (図51)

検出状況 研究会1次調査で検出された周溝墓で、今回の調査においても2A-9g・9h区においてその痕跡を確認した。地中梁の攪乱を挟んで南東側には八尾南6号墳が存在しているが、両遺構の重複状況については、攪乱によってすでに失われていたため不明である。

墳丘は一辺6.5mの方形を呈し、南北軸をN2°E方向に置いている。周溝は攪乱に当たっている北東・南東コーナー以外は連続して巡り、今回確認し得た限りでの数値は、幅0.8~1.5m、墳丘上から溝底までの深さは0.1~0.25mであった。

出土遺物と時期 今回新たに出土した遺物はなく、本周溝墓の詳細な築造時期は不明である。

〔八尾南6号墳〕 (図51)

検出状況 研究会1次調査で5世紀末(TK47型式)に位置付けられている墳墓で、今回の調査では2A-9g・9h区において鉤括弧状に巡る北・東側周溝の痕跡を確認した。

攪乱によって尖われている部分が多く詳細を把握しづらいが、墳丘はN40°E方向に南北軸を置いた方形を呈していたと考えられ、周溝の幅は1.2~2.2m、墳丘上から溝底までの深さは0.15~0.2mを測る。

出土遺物と時期 今回新たに出土した遺物はやはり存在せず、本墳の詳細な築造時期については不明である。

〔周溝墓8〕 (図52、図版16-1)

検出状況 3A-1h・2h・1i・2i区を中心に存在する周溝墓である。研究会1次調査において、西側周溝の北半と南側周溝の東半および北東コーナーが確認されていたが、今回の調査で周溝の残りがほぼ検出され、全体の規模を把握することが可能となった。今回新たに検出した部分の標高は、墳丘上で11.95~12.1m、周溝外側で12.0~12.1mとほぼ平坦で、墳丘の盛土についてはやはり確認でき

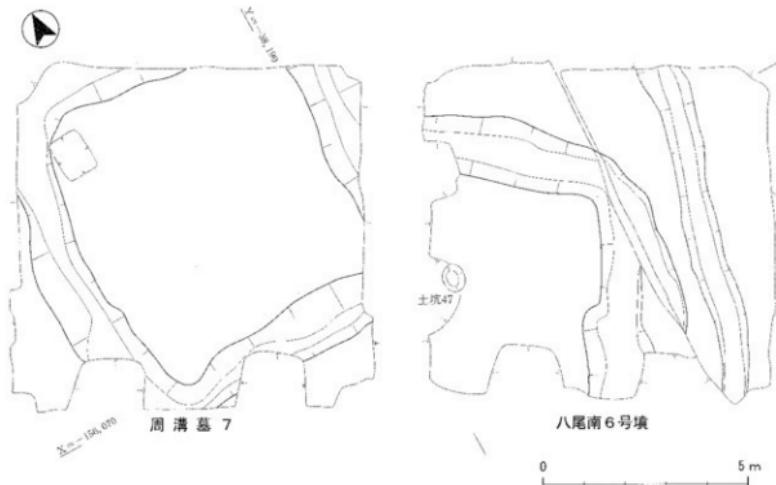


図51 周溝墓7(八尾南6号墳) 平面図

なかつた。

墳丘は南北長8.2m、東西長9.5~10.0mの長方形を呈し、南北軸をN20°W方向に置いている。周

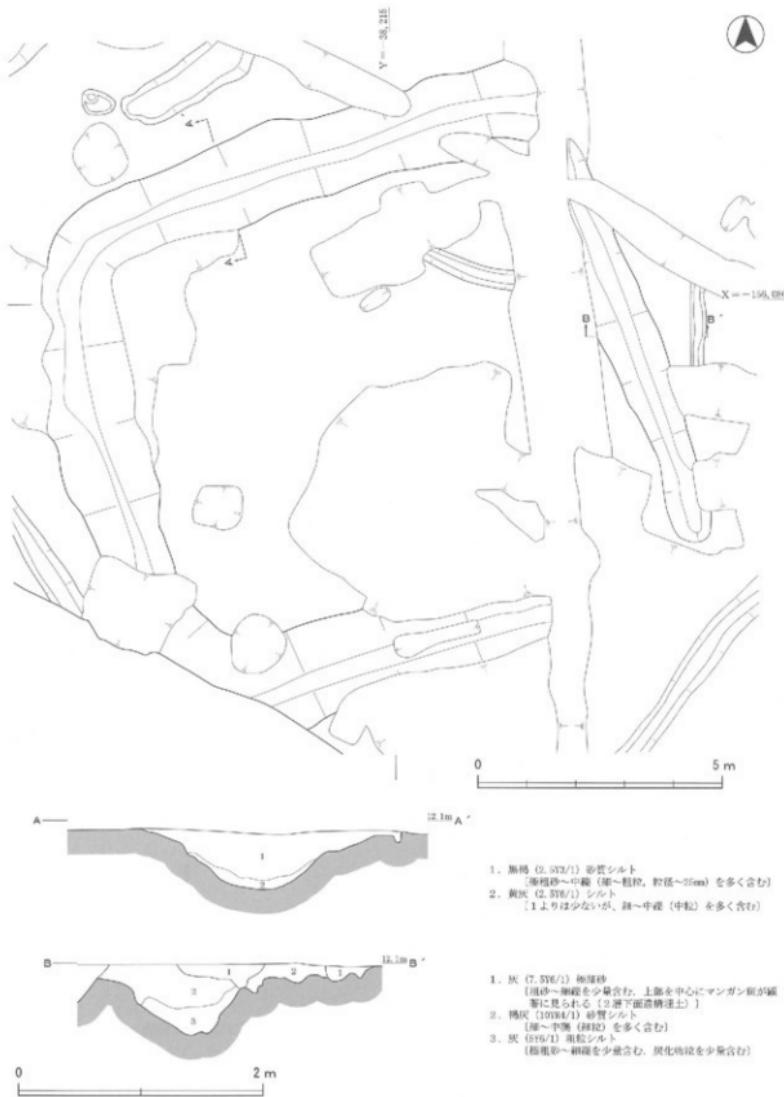


図52 周満墓8 平・断面図

溝は搅乱によって詳細不明となった南東コーナーを除けば連続して巡り、幅は1.35~1.95mと比較的広めであるが、東側周溝のみ0.75~1.15mとやや細くなっている。墳丘上から溝底までの深さは0.35~0.6mで、溝内は下部がやや色調が淡い黄灰もしくは灰色のシルト、上部が砂礫が多く含んだ黒褐色から褐灰色砂質シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 周溝内からは、コンテナ1箱分程度の土器が出土した。近畿道縦年の様相4(古)に位置付けられる。

[周溝墓10] (図53~55、図版29)

検出状況 02-1工区北東隅の2A-9c・9d・10c・10d区において、今回新たに検出した周溝墓である。北西部分が浄化槽によって破壊され、墳丘中央ならびに西端も搅乱や第1面溝1が重複していたため、遺構の遺存状況は決して良好ではないが、検出した部分の標高は、墳丘上で11.7~11.8m、東もしくは南側周溝の外側で11.55~11.7mをそれぞれ測る。対向する位置では0.2m近くの比高差が存在する箇所も認められたが、これは墳丘盛土が遺存していたためではなく、むしろ周溝の外側が周囲と比べて低くなっているからであり、おそらくは本周溝墓あるいはその外側に衛星的に分布する周溝墓11・13・14の築造時に、下げなどの土地改变を行った結果と考えられる。

墳丘は各辺のラインが直線的な整った方形を呈し、南北軸をN18°W方向に置いている。東西長は11mで、南北方向の検出長も10mであることから、墳丘の上端はほぼ正方形に近い形状を呈していたもの

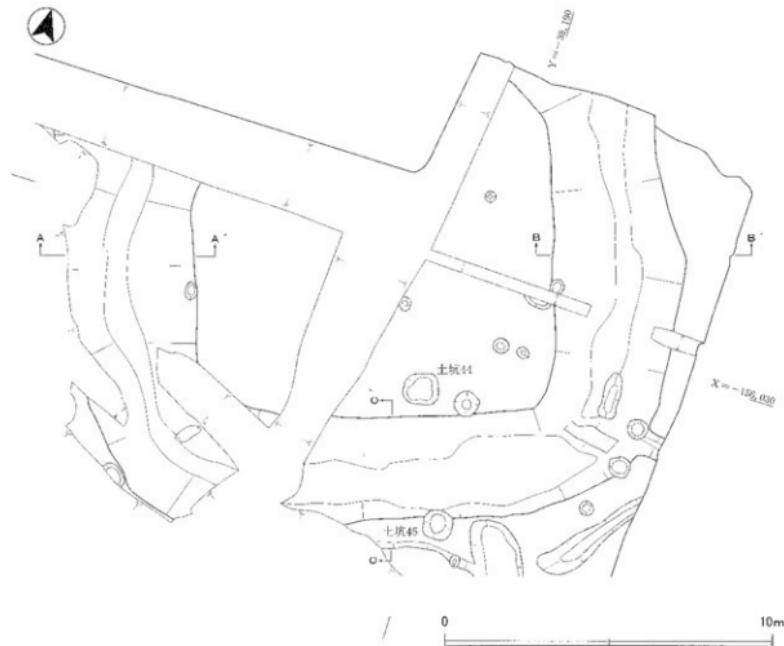


図53 周溝墓10 平面図

と推定される。周溝は未検出の北西コーナーを除き連続して巡っているが、南東コーナーは両側の溝底と比べて0.15m以上高くなってしまっており、陸橋状に掘り残されていた可能性が高い。周溝は3.0~4.1mと幅広で、東側周溝では墳丘側の肩部の傾斜をきつくして掘られ、南側では墳丘の肩からわずかに下がったところで部分的に幅3m足らずの平坦面が削り出されていた。墳丘上から溝底までの深さは0.4~0.85mで、全体的には各辺とも中央部がより深くなる傾向が認められた。周溝埋土は10層前後に細分され、灰色や黄灰色を基調とする粘土質シルトからシルト質細砂を主体としているが、各周溝とも中位のより暗色度の強いシルト層を挟んで上下で層相が大きく異なっており、出土遺物の取り上げも基本的

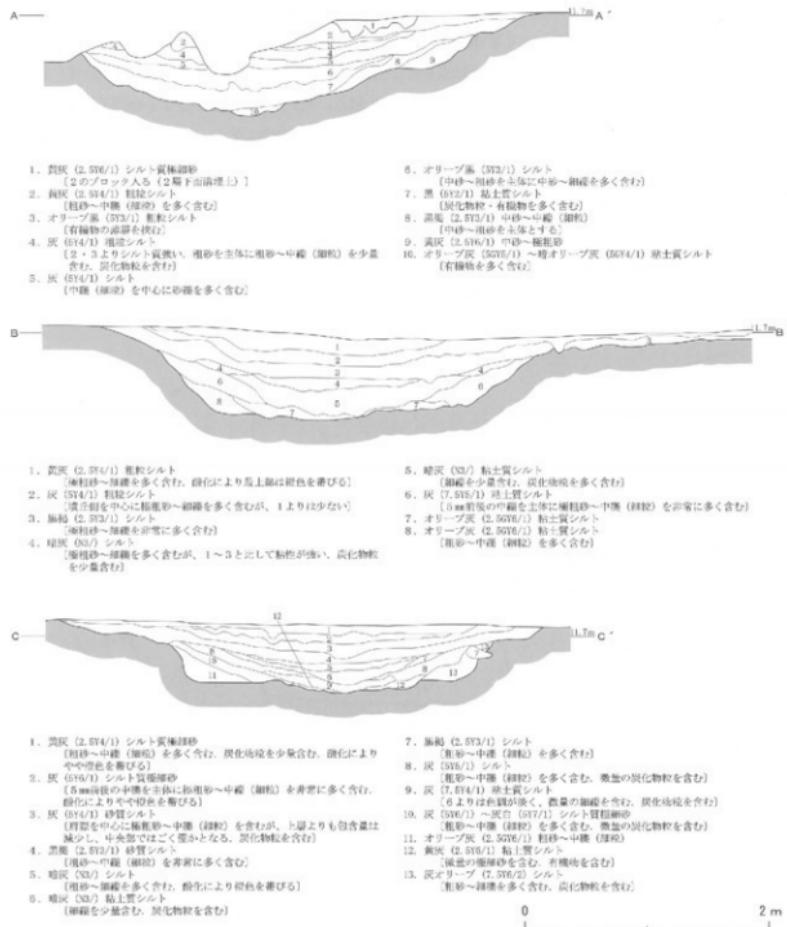


図54 周溝墓10 断面図

にこの差異に基づくようにした。

出土遺物と時期 周溝埋土の各層から比較的多くの土器が出土し、出土総量はコンテナに換算して約6箱分程度となった。このうち、東側周溝墓の北半や南東コーナーのすぐ西側では、数個体の壺・甕が溝底あるいは埋土下層より押し潰れたような状態で出土している。これらの遺物は、近畿道縦年の様相3（古）に位置付けられる。

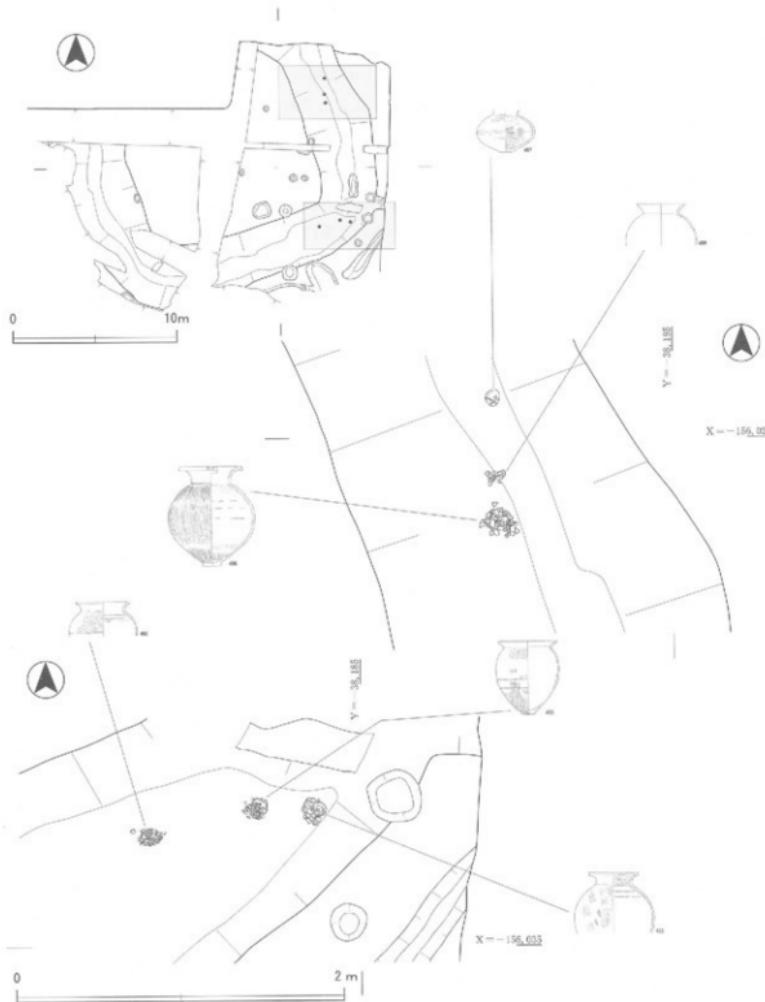


図55 周溝墓10 遺物出土状況図

〔周溝墓11〕（図56・57）

検出状況 2 A - 9 c・9 d 区を中心において検出した周溝墓である。周溝墓10の東側において群在する小規模な周溝墓の1つで、本周溝墓の東には周溝墓12が東側周溝を共有する形で接続している。検出面の標高は、墳丘上で11.65～11.7m、周溝の外側で11.6～11.7mとほぼ平坦で、墳丘盛土は認められなかった。

周溝は「コ」字形に巡り、南側周溝の西端は周溝墓10の東側周溝に接続している。墳丘は北側周溝の西端が大きく膨らんでいたため歪な方形を呈し、南北長は3.6～4.3m、東西長は3.6～3.85mを測り、南北軸をN 5° E 方向に置いている。溝の幅は、2.1mと幅広となった北側周溝西端を除けば0.6～1.05mと細めで、墳丘上から溝底までの深さは0.2～0.3mである。ただし、北東・南東の各コーナー部分は中央部と比べて浅くなっていたり、それぞれ0.15m、0.1mであった。埋土は灰色を基調とする上下2層のシルトで埋土しており、下層には3層である灰白色シルトの小ブロックが多く入っていた。

出土遺物と時期 北側周溝の埋土下層から残存率の高い無飾の二重口縁壺が出土したほか、各周溝の埋土からはコンテナ1箱分ほどの土器が出土している。二重口縁壺は、近畿道編年の様相3（新）に位置付けられるよう。

〔周溝墓12〕（図56）

検出状況 2 A - 8 d 区において検出した周溝墓である。北側に地下埋設管の攪乱が存在していたため、北側周溝の存否は不明であるが、前述のように周溝墓11の東側周溝に接続した溝が、南から東側にL字状に巡っていた。検出面の標高は、墳丘上および周溝の外側で11.6～11.65mで、墳丘盛土は認められずほぼ平坦であった。

墳丘は、南北長2.5m以上、東西長3.8mを測る。南側周溝が外側に張り出して丸みを帯びているのに対し、東側は直線的で、内肩のラインはほぼ座標の南北と一致している。幅0.4～0.65m、墳丘上から溝底までの深さ0.05～0.1mと小規模な溝で、灰色シルトによって埋没していた。

出土遺物と時期 南東コーナーの溝底よりわずかに浮いた位置で、近畿道編年の様相3（新）に位置付けられる甕が1個体出土したほか、埋土内からは同時期の土器細片が40点ほど出土した。

〔周溝墓14〕（図56・57）

検出状況 2 A - 8 d・9 d 区において検出した周溝墓で、周溝墓11とは0.3mも間を空けずにその南側に位置している。周溝は南北方向に向かって「コ」字形に巡り、南北側には落ち込み（落ち込み2）は認められたものの、周溝は存在していなかった。検出面の標高は、墳丘上および周溝の外側で11.65～11.7mと、ほぼ平坦で、墳丘盛土は認められなかった。

東側周溝と西側周溝の南端部を結んだラインを墳丘の肩部に相当させると、墳丘は南北長4.7m、東西長4.6mのほぼ方形を呈し、南北軸はN 37° E 方向を向いている。周溝は北側と西側が幅0.65～1.4m、墳丘上からの深さ0.15～0.25mであるのに対し、東側は1.9～2.0mと幅広で、深さも0.3～0.5mと一際深くなっていた。

周溝の埋土は、最も深かった箇所で3層に大別され、下層は灰色を基調とした粘土質シルト、中層は暗色度の強いオリーブ黒もしくは暗オリーブ灰色の粘土質シルト、上層はそれより若干色調が淡い灰色のシルトからシルト質極細砂がそれぞれ堆積していた。

出土遺物と時期 東側周溝を中心として、周溝埋土の各層からはコンテナ1箱分程度の土器が出土した。拡張した口縁部に櫛指波状紋と2個1組の円形浮紋、肩部に竹管紋と櫛指波状紋・直線紋を施し

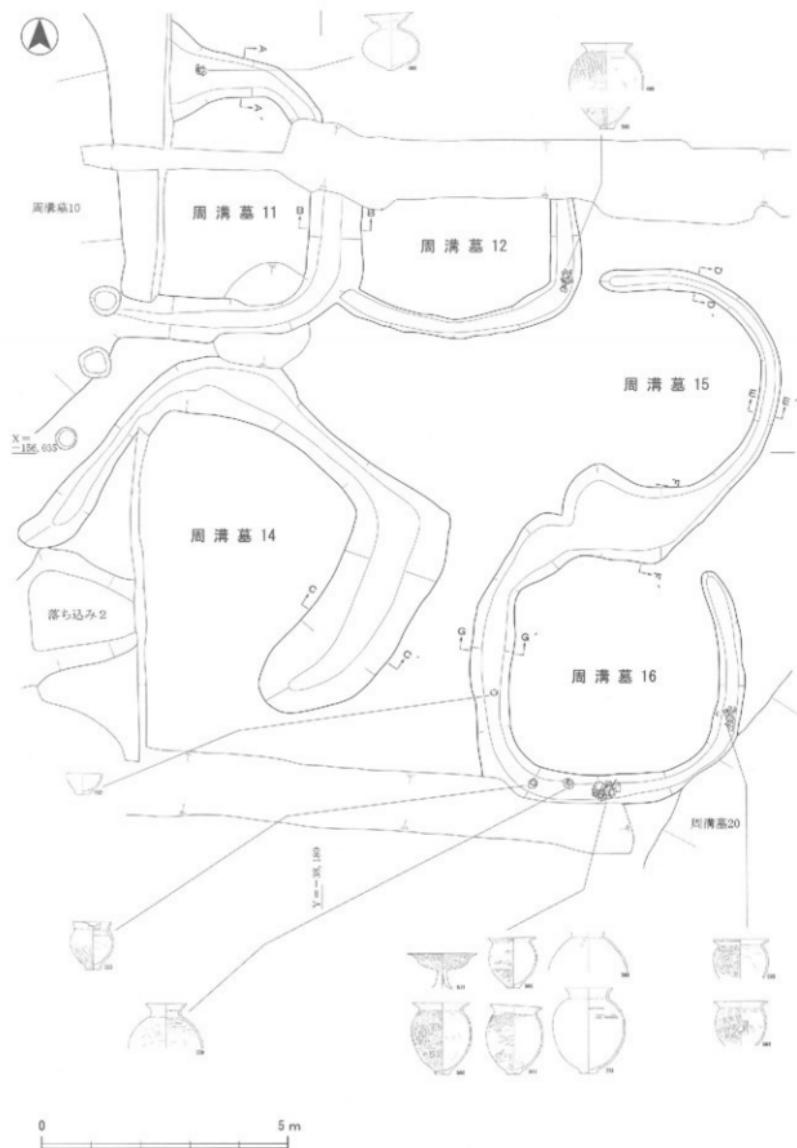


図56 周溝墓11・12・14~16 平面図

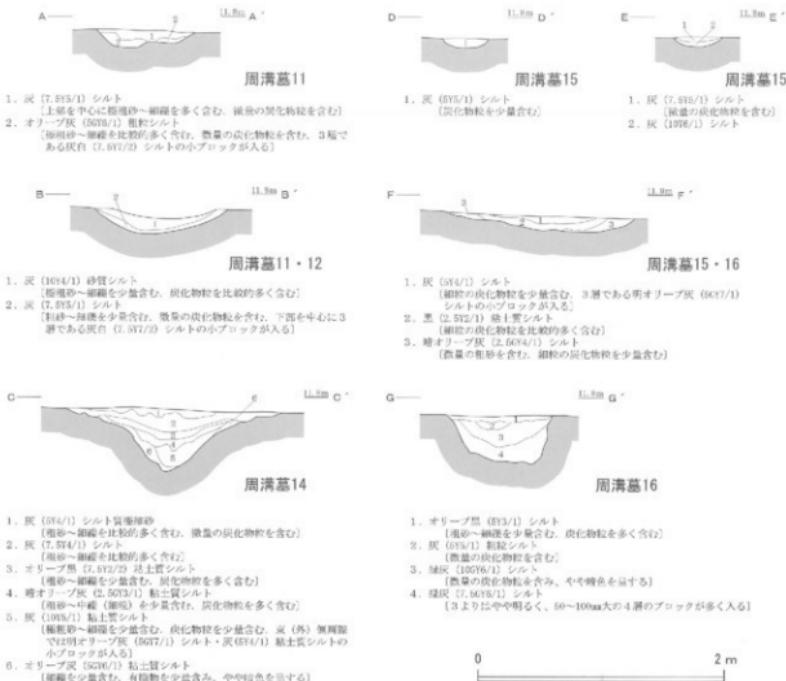


図57 周溝墓11・12・14～16 断面図

た南東側周溝埋土最下層出土の広口壺や中層から出土した有段器台など、各層にわたって加飾性豊かな土器が出土しているのが特徴である。これらの土器には一定の時期帯が存在するものと考えられるが、おむね近畿道編年の様相4の幅の中で捉えておきたい。

[周溝墓15] (図56・57)

検出状況 2 A - 8 d 区において検出した周溝墓で、南側に位置する周溝墓16とは、周溝を一部重複させて逆S字状に一続きで繋がっている。検出面の標高は、墳丘上で 11.55 ~ 11.65 m、周溝外側で 11.6 ~ 11.65 m とほぼ平坦であった。

周溝は、周溝墓12の南東コーナーから 0.4 m 離れたところを基点に 3 分の 2 周分円形に巡っており、直径は約 4 m を測る。溝幅は 0.35 ~ 0.45 m と細いが、周溝墓16の北側周溝と重なる南側は 1.55 ~ 1.75 m と幅広となっている。墳丘上から溝底までの深さは 0.1 m 前後と非常に浅く、灰色を基調としたシルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 器形を窺うことが可能な資料はほとんど存在しないが、周溝埋土からはコンテナ半箱程度の土器が出土した。このうち南側の周溝内から出土した広口壺は、直立気味の短い頭部から口縁部が小さく外反するもので、近畿道編年の様相3(新)に位置付けられる。

〔周溝墓16〕（図版56・57）

検出状況 2 A - 8 d・8 e 区において検出した周溝墓で、周溝墓15とは周溝の一部が重なりつつ、その南側に位置している。検出面の標高は、墳丘上で 11.65 ~ 11.7m、周溝の外側で 11.6 ~ 11.7m を測り、周溝盛土はやはり認められなかった。

墳丘は、南北軸を N 2° E 方向に置いたやや丸みのある方形を呈し、南北長は 4.25 ~ 4.5 m、東西長は 3.9 ~ 4.25 m をそれぞれ測る。周溝は北東コーナーが確實に途切れ、幅 0.8 m の陸橋部が造り出されていた。幅広となった北側の周溝墓15との重複部分を除けば、溝の幅は 0.45 ~ 0.85 m と細めで、特に東側周溝は 0.5 m 前後と一段と幅狭となっていた。ただし、墳丘上から溝底までの深さは 0.35 m と比較的深く、4 層のブロックを下部に多く含んだ緑灰色シルトを主体とする埋土によって埋まっていた。

出土遺物と時期 南側周溝の最下層から、器形を窺うことが可能な広口壺・壺・高杯が複数個体出土したほか、各周溝内からコンテナに換算して 3 箇分程度の土器が出土している。これらの土器群は近畿道臨年様相 3（新）に位置付けられ、高壺や甕の形態から周溝墓14より先行していた可能性が考えられる。なお、東側周溝の埋土下層から出土した甕の体部には、長径 2.1 cm の焼成後穿孔が認められた。

〔周溝墓9〕（図版16-1）

検出状況 2 A - 9 i・10 i 区において検出した周溝墓で、北東側には 1 m も間を置かずに周溝墓23が存在している。配達センター倉庫の南側に位置し、研究会 1 次調査トレンチ間の未調査区域であったが、土壤改良などの影響もあって擾乱が著しく、遺存状況は極めて不良であった。検出した部分の標高は、墳丘上および周溝の外側で 11.95 ~ 12.0 m を測り、墳丘盛土は当然のことながら存在していなかった。

研究会調査区の側溝と重複していたため、北東側に関しては周溝の存否も含めて状況を明らかにしがたいが、墳丘は長軸を N 44° E 方向に向けた歪な長方形を呈し、長辺の長さは 3.3 m 以上、短辺の長さは 3.0 m を測る。北東側に加えて南西側も擾乱によって大きく失われていたため、周溝のあり方も不明な点が多いが、幅 1.6 m、墳丘上から溝底までの深さ 0.15 m と一際規模が大きかった西側の周溝を除けば、他の周溝は幅 0.5 ~ 0.7 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m と小規模であった。

出土遺物と時期 周溝内からはコンテナ半箱程度の土器が出土しているが、粗いタタキ成形を施した甕の口縁部や底部が示されたのみであり、本周溝墓の詳細な築造時期については不明である。

〔周溝墓13〕（図版58・59、図版29-1・4）

検出状況 2 A - 9 d・9 e・10 d・10 e 区において検出した周溝墓で、周溝墓10のすぐ南側に位置している。東西方向に大きく地中梁の擾乱が貫通していたため、遺構の遺存状況は決して良好ではないが、検出面の標高は、墳丘上で 11.85 ~ 11.9 m、西側周溝の外側で 11.8 ~ 11.9 m を測り、ほぼ平坦であった。

墳丘は、南北軸を N 9° W 方向に置いたやや歪な方形を呈し、南北・東西方向の長さはいずれも 4.3 m 前後と推定される。北・東・南の三方の周溝が他の遺構と重複、もしくは周溝を共有していたため、溝の規模に関して十分な情報を得ることができなかつたが、西側周溝は 2.2 m の幅を有し、墳丘上から溝底までの深さは 0.2 ~ 0.25 m であった。なお、西側から南側を巡る周溝は、溝の中心から墳丘側がその外側より 0.1 m ほど深くなっているが、東側も墳丘に接した幅 1.4 ~ 1.6 m の部分が深く掘り込まれており、本来は一続きであった可能性が高い。周溝の埋土は、砂礫を多く含んだ灰もしくはオリーブ灰色の砂質シルトを主体としているが、溝底がより深くなっていた東側周溝には最下部に灰色シルト質極

細砂が認められ、西側周溝では外側の浅い掘り込みを複数に覆うように黄灰色シルト質極細砂が堆積していた。

出土遺物と時期 東側周溝からは、コンテナ4箱分に及ぶ上器が破碎のうえ投棄されたような状態で出土した。粗いタタキ成形が施された壺を主体としているが、広口壺・二重口縁壺・高杯・鉢・手炒形

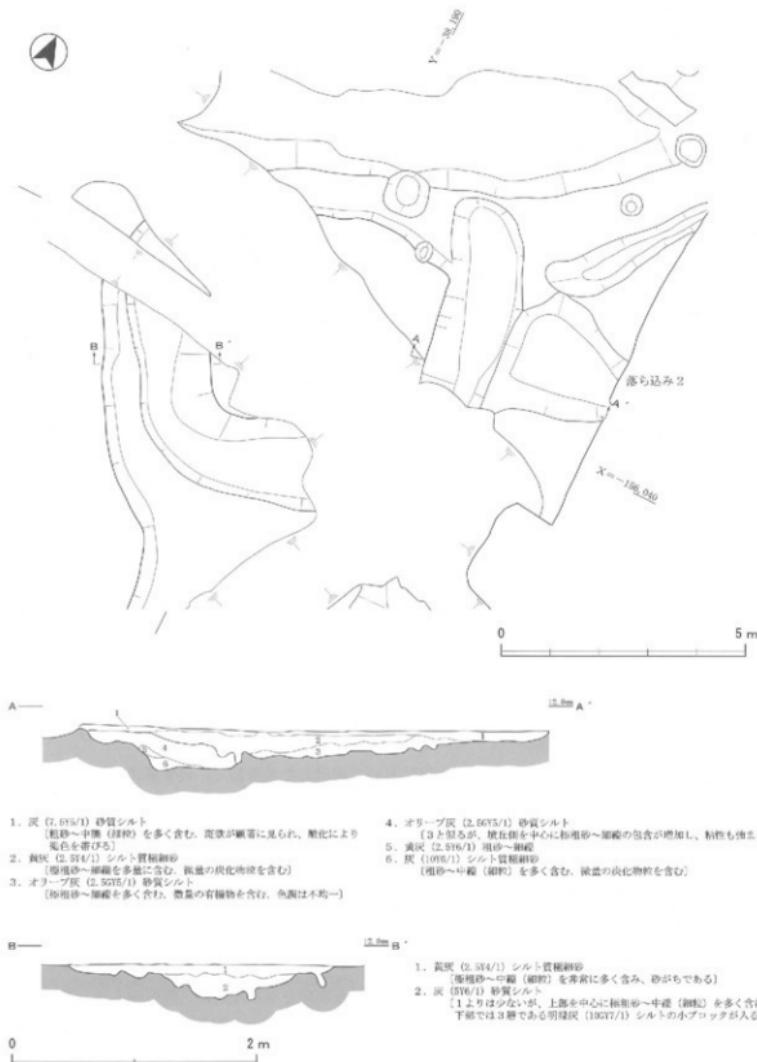


図58 周溝墓13 平・断面図

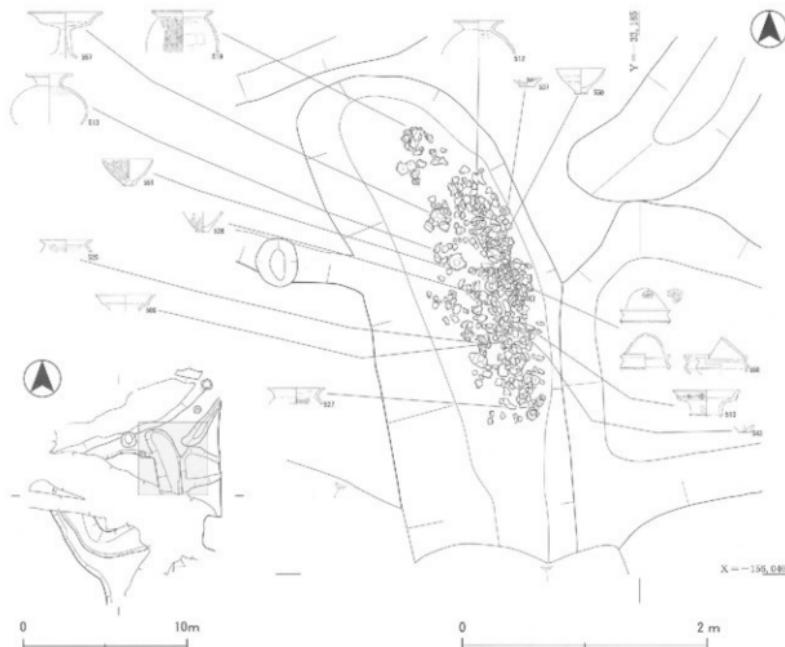


図59 周溝墓13 遺物出土状況図

土器といった器種も認められ、体部に焼成後穿孔が見られる広口壺も存在している。これらの土器群には時期幅が存在する可能性も考えられるが、ここではひとまず近畿道編年の様相3（新）の中で捉えておきたい。

〔周溝墓17〕（図60・61）

検出状況 2 A - 9 e - 9 f 区を中心に検出した周溝墓で、北西約 6 m には周溝墓13、南西約 1 m には周溝墓5、南約 3 m には周溝墓13、南東約 2 m には周溝墓21がそれぞれ分布している。そのため、各周溝墓の墳丘間は周溝が連続して繋がって全体的に低く、本周溝墓の場合、他と比べて溝底が浅いために、溝の外肩も判然としない状態となっている。墳丘上の標高は 11.8~11.9 m を測るが、墳丘盛土の遺存は認められなかった。

墳丘は N62° W 方向に長軸を置く不整長方形を呈し、長辺 5.5~5.7 m、短辺 3.7~4.0 m を測る。掘削された当時の周溝は、前述した理由や北東側が地中梁の擾乱や土坑（土坑46）と重複していたため、不明な点が多いが、南東の短辺側にわずかに確認できた掘り込みの痕跡から、2.5 m 以上の規模を有していたと考えられ、墳丘上から溝底までの深さは 0.1~0.25 m を測る。砂質シルトを主体とする埋土は、場所によって状況を異にしているが、いずれも粗砂以上の粗い砂礫が多く含まれていた。

出土遺物と時期 周溝内からは、細片を中心にコンテナ2箱程度の土器が出土した。底部を除けば、図示し得た資料は広口壺・加飾二重口縁壺・広口直口壺など壺類に限られたため、時期を特定すること

が難しいが、近畿道編年の様相3（新）に位置付けておきたい。

〔周溝墓18〕（図60・61、図版31-1）

検出状況 2 A - 5 d・6 d区を中心に検出した周溝墓で、東側に存在する周溝墓21と接し、周溝の北東部の一部が同周溝墓の西側周溝によって切られていた。検出面からの標高は、墳丘上11.8~11.95m、周溝外側で11.65~11.85mと後者がかなり低くなっているが、これも周溝墓21に接している側が低い数値を示しているからであり、西側では比高差は最大0.05mとほぼ平坦となっている。

北側が地中梁の擾乱、南側が研究会1次調査区の側溝と重なっていたため、墳丘の形状は今一歩明確ではないが、検出し得た部分から復元すると、北北東-南南西方向に長軸を向けたどんぐり形に近い不整規円形を呈していたものと推定され、長径5.8m前後、短径5.15mを測る。周溝は幅0.95~1.55m、墳丘上から溝底までの深さ0.1~0.3mで、断面は浅い皿状を呈し、下部は周溝掘削時に堆積したと考

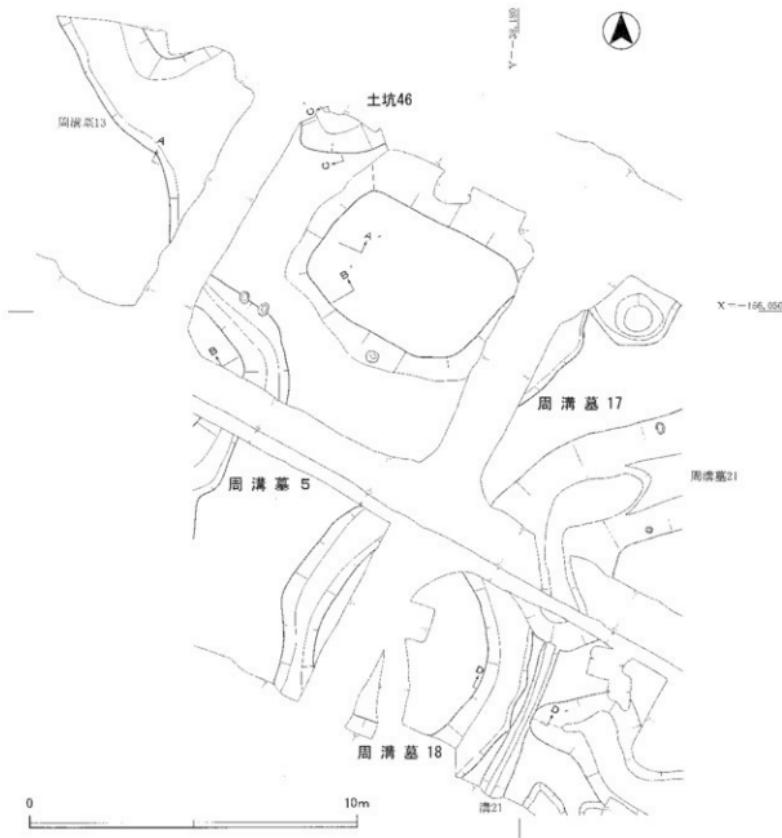


図60 周溝墓5・17・18 土坑46 平面図

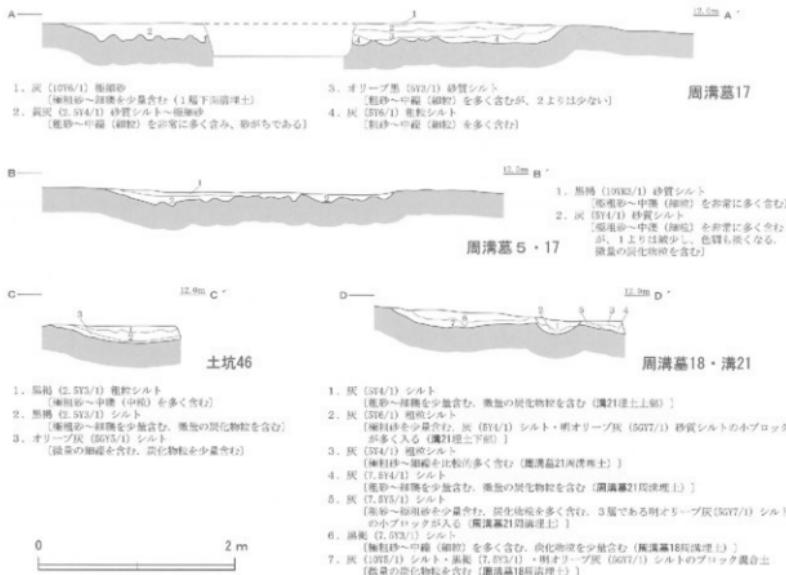


圖61 圖畫墓5、17、18 壓棺46 斷面圖

えられる灰・黒褐・明オリーブ灰色シルトのブロック混合土、上部は極粗砂から中疊を多く含んだ黒褐色シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 周溝内からは、コンテナ1箱程度の土器が出上した。図示し得た点数はやはり少ないが、東側周溝の埋土下層上面から出土した甕や西側周溝から出土した高壺など、器形全体を窺うことが可能な資料も存在している。これらの土器群は、近畿道編年の様相4（新）に位置付けられると考えられる。

(周溝墓19) (図62)

検出状況 2A-9f・9g区を中心に検出した周溝墓で、周溝の南西コーナーが周溝墓20の周溝の北東コーナーと、南東コーナー付近が周溝墓26周溝の北西コーナーとそれぞれ重複している。調査地の北端に位置していたため、北側の周溝が調査地外となっていたことに加えて、污水樹や污水管による攪乱が多く存在し、さらには溝27が墳丘の中心のやや北側を東南東から西北西に向けて貫通していたことから、構造の遺存状況は著しく不良であった。検出し得た部分の標高は、墳丘上で11.6~11.7m、周溝外側で11.55~11.65mである。

墳丘はN23°E方向に南北軸を置いた方形を呈し、東西長は約9mを測り、南北長もほぼ同規模であったと推定される。周溝はおそらく全周していたと考えられるが、西側周溝および南側周溝中央部の墳丘際が他よりも深く掘り込まれていたため、結果として南西コーナーは幅0.8mほどが陸橋状に高くなっていた。周溝の幅は、南側が2.65～2.95m、西側が3.7～4.15mと幅広であるが、外側の幅1.4～1.8mほどは傾斜も緩く浅めとなっており、視覚的には数値から受けるほどの隔絶性は感じられない。

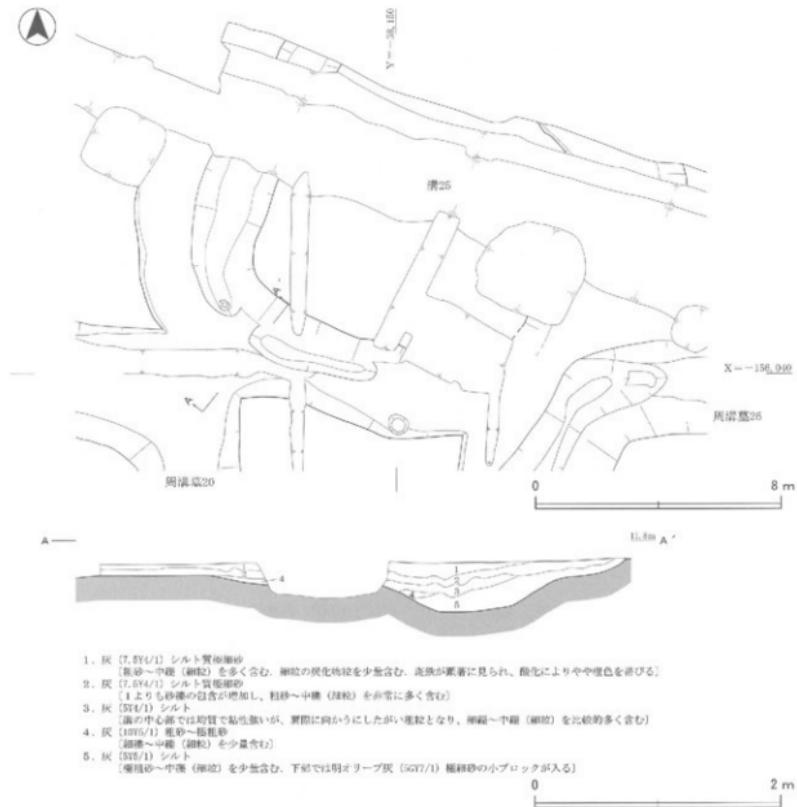


図62 周溝墓19 平・断面図

墳丘上から溝底までの深さは0.3~0.45mを測り、埋土は墳丘側の深い部分で5層前後に細分されたが、外から流入したと見られる粗粒の砂層が部分的に挟在していた以外は、いずれも灰色を基調としたシルトからシルト質細砂を主体としていた。

出土遺物と時期 検出状況を反映して南側周溝と西側周溝に限られるが、周溝内からはコンテナ1箱程度の土器が出土した。細片が多く、図示した点数は少ないが、高杯脚部の中には短脚のものも含まれており、近畿道編年の様相4の中で捉えることができよう。

〔周溝墓20〕 (図63・64、図版32)

検出状況 2A-7e区を中心に検出した周溝墓である。前述のように周溝の北東コーナーが周溝墓19と重複し、西側周溝が周溝墓16の南東コーナーと接するほか、墳丘の西端に当たる部分には、調査時に190溝と称した幅0.25~0.3m、深さ0.05m前後的小溝が南北に貫通していた。検出面の標高は、墳丘上で11.7~11.8m、周溝の外側で11.55~11.75mと前者が相対的に高くなっているが、他の周溝墓

や擾乱の影響が認められない西側においては、両者とも近似した数値を示しており、ほぼ平坦と見なしでも差し支えないであろう。墳丘盛土の遺存は確かめられず、埋葬施設等の痕跡も確認できなかった。

墳丘は東西長10.0m、西側の南北長9.4m、東側の同8.8mとやや東端が狭まった台形を呈し、西辺を基準にすれば、南北軸はN 8° E 方向を指す。南側が地中梁の擾乱と重なっていたため、周溝は南側の外肩と西側の南端が失われていたが、他の箇所では連続して巡り、溝幅は北側で3.6～4.1m、東側で3.1～4.2m、西側で3.05～5.0mと、西側周溝、特にその南半部が一際幅広となっていた。一方で、墳丘上から溝底までの深さは、北側および東側周溝が0.35～0.45mであるのに対し、西側は0.3～0.35mと相対的に浅くなっていた。また、明確に削り出されていたわけではないが、北東コーナーは0.15～0.25mと周囲よりも浅くなっている。陸橋と同様な機能を果たしていた可能性が考えられる。角度に差異はあるものの、各周溝とも墳丘側の傾斜をきつくして掘削しており、埋土の断面にも内側から流入したと推定される土砂が認められた。いずれの周溝にも、下部には黒色粘土質シルトが堆積し、その上を2～4層ほどの灰色を基調としたシルトから細砂が覆っていた。

出土遺物と時期 各周溝とも埋土全体から多くの土器が出土し、出土量はコンテナに換算して3箱分に及んだ。図示し得た資料としては、広口壺・二重口縁壺・高杯・有孔鉢の各器種が存在するが、最上層から須恵器坏身が出土していることからも明らかのように、これらの土器には一定の時期幅が存在していることが考えられる。その中で、北側周溝において黒色粘土質シルト層の下に堆積した最下層の黄

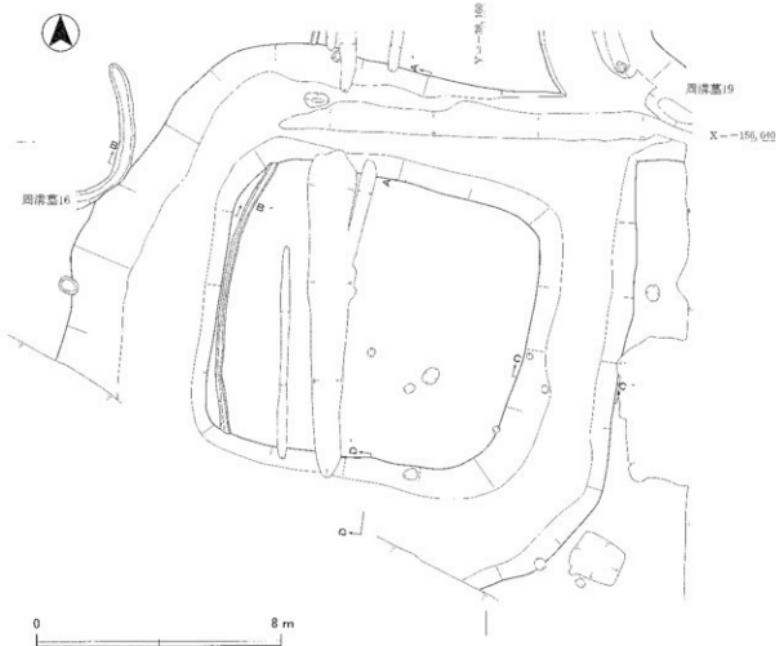


図63 周溝墓20 平面図

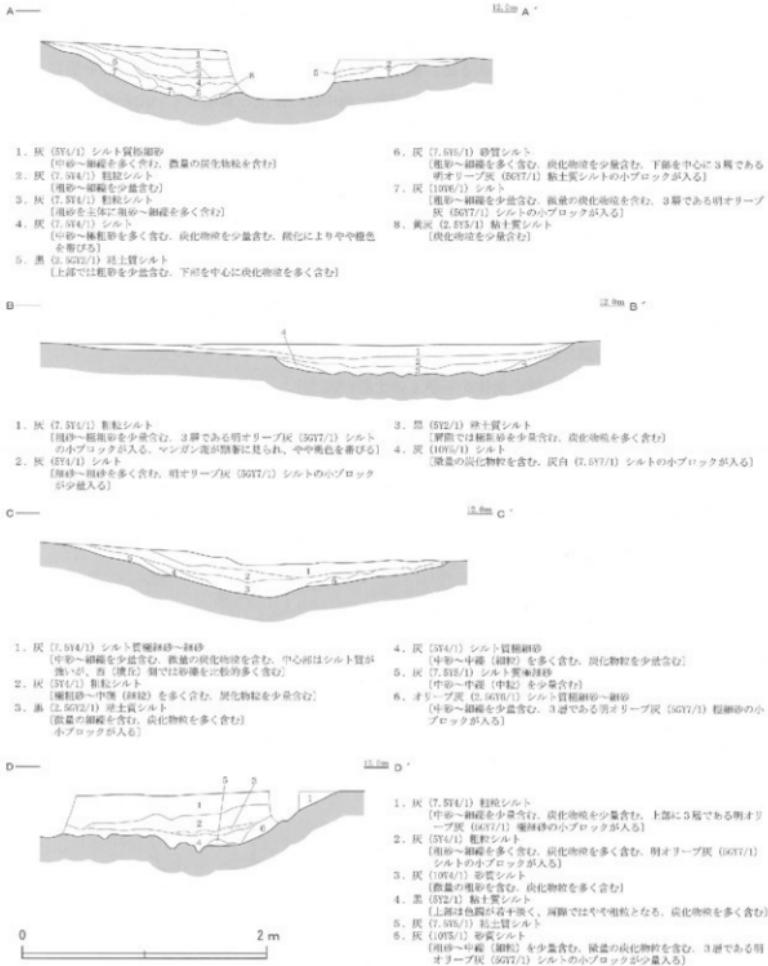


図64 周溝墓20 断面図

灰色粘土質シルト層からは、口縁端部と肩部を樹波波状文で加飾した広口壺が出土しており、この資料を重視すれば、近畿道編年の様相4（古）の段階には、周溝の埋没が始まっていたと想定される。

なお、南側周溝の最上層から出土した須恵器はTK43型式に比定され、周溝が埋没し終えるまでにはかなりの時間を要したことが窺われる。

〔周溝墓21〕（図65・66、図版16-2・31・32-1・2）

検出状況 2A-8f・8g区を中心に検出した周溝墓で、前述のように北側周溝の北半が周溝墓18

の東側周溝と重なり、東側の周溝は周溝墓22の西側周溝を共有していた。地中梁の擾乱が墳丘の中心部を射抜くように東西・南北に貫通していたことから、遺構の遺存状況は必ずしも良好とは言えないが、検出面の標高は、墳丘上で11.8~11.9m、他の周溝墓の影響を受けていない南側周溝の外側で11.75~11.8mと、わずかではあるが前者が高くなっていた。これは図66のB-B'ラインの断面が示すように、図65で周溝の外肩と表現したラインよりもさらに外側が浅く掘り込まれているためであり、同様な状況は北側周溝においても認められた。なお、墳丘上には盛土の遺存は認められなかったが、墳丘の東辺から2mほど中心に寄った位置で、後述する土坑状の遺構を確認した。

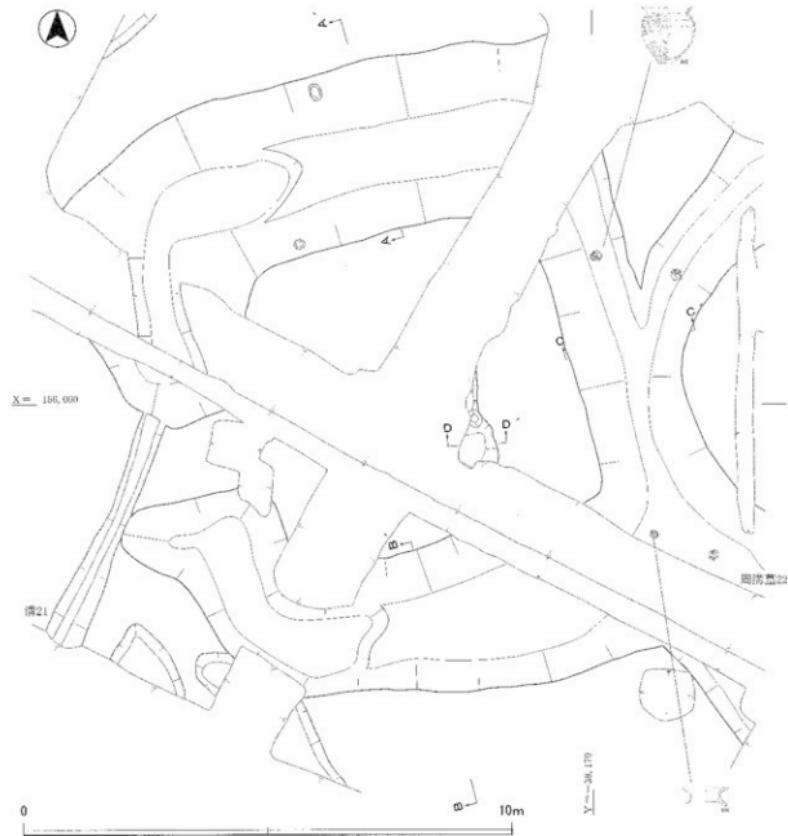


図65 周溝墓21 平面図

墳丘は、比較的整った方形を呈し、南北長6.4m、東西長6.6mを測る。短辺に当たる西辺の中央に幅1.5m、長さ3m余りの陸橋部が設けられ、それ以外には周溝が方形に巡っていた。周溝の幅は、北側で3.5~3.55m、東側で1.7~1.8m、南側で2.75~3.2m、西側で2.3~3.0mをそれぞれ測り、西側周溝のうち陸橋部の南側は、先端を西へ屈曲させてこの部分を強調させていた。同様のことは墳丘上から溝底までの深さにも窺え、東側周溝および北・南側周溝の中央やや西寄りまでの深さが0.35~0.45mであるのに対し、以西から陸橋部までは0.55~0.7mと一段と深く掘り込まれ、前述の屈曲部分では0.8m近くに達していた。以上のことから、この陸橋部が存在する西辺を本周溝墓の正面と捉えると、墳丘の主軸はN74°E方向となる。北側と南側周溝の断面形状についてはすでに述べたとおりであるが、いずれも最下部には、溝掘削時に堆積したと考えられる各地層のブロック混合土が見られ、その上を黒色を基調とする粘土質シルト、さらにその上を砂礫を多く含んだシルト層がそれぞれ覆っていた。なお、東接する周溝墓22との新旧関係に関しては、本周溝墓の周溝が後に埋没していることが、東側周

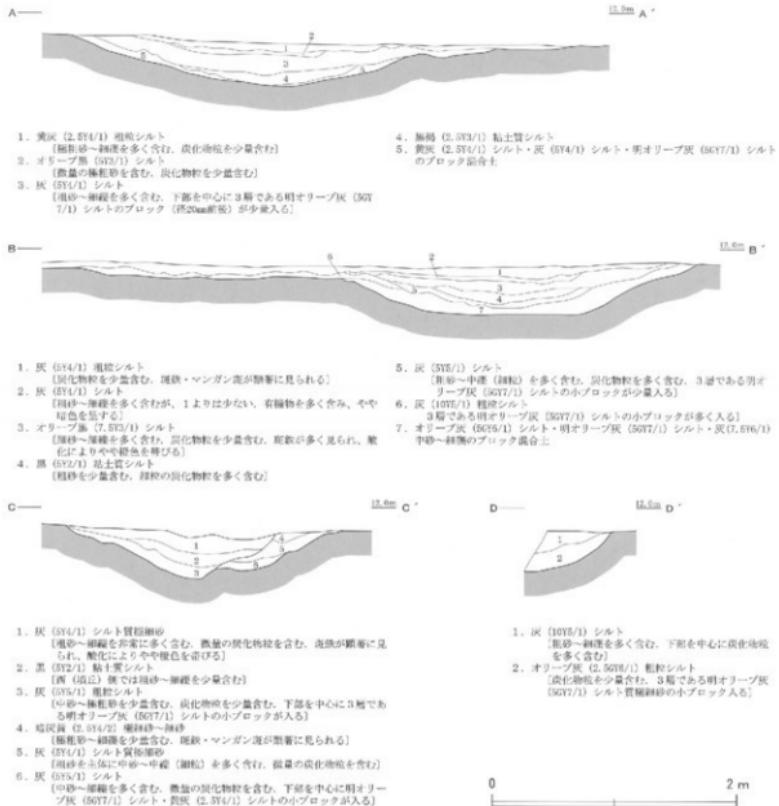


図46 周溝墓21 断面図

溝の断面の観察結果から明らかとなった。

さて、墳丘上で交差した地中梁の搅乱の北東角では、前述したように土坑状の遺構を検出した。炭化物粒を含んだ上下2層のシルト層を埋土とするもので、大部分が搅乱により破壊されていたため、本来の形状・規模は明らかにし得ないが、検出面から坑底までの深さは0.3m以上を有する。注目されるのは、今回唯一確認することができた東辺の向きから、この遺構が周溝墓の短辺にはほぼ平行して設けられていたと見なされる点であり、のことから、本周溝墓の埋葬施設の痕跡であった可能性も念頭に置いておく必要があろう。

出土遺物と時期 北・南側周溝を中心として、各周溝内からはコンテナに換算して4箱分の土器が出土した。溝底から0.3mほど浮いて西側周溝内から出土した近畿道編年様相7の壺が示すように、これらの土器には一定の時期幅が存在するが、最下層内およびその上面から出土した土器は同編年の様相4(古)に位置付けられると考えられ、本周溝墓の築造はこの時期までには行われていたと推定される。

〔周溝墓22〕 (図67、図版16-2・32)

検出状況 2A-7f・7g区を中心に検出した周溝墓で、前述のように西側周溝は周溝墓21の東側周溝と重複し、東側周溝の外肩から1.2m東には周溝墓30が存在している。南北端が地中梁の搅乱と重なっていたのに加え、墳丘上も搅乱や第1面溝11が貫通していたことから、遺存状況は不良であったが、検出面の標高は、墳丘上および東側周溝の外側で11.8~11.85mを測り、墳丘盛土の道存は確認できなかった。

周溝の外周の一部に直線的な部分は認められるものの、墳丘は東南東-西北西方向に長い橢円形を呈し、長径は7.5m、短径は推定6.3mを測る。周溝は東から南東側で2.0~2.95m、北西側で1.4~1.75mの幅を有しているが、南北両側は方形のコーナー部状に大きく張り出していたようであり、南側では4.5mと著しく幅広となっていた。墳丘上から溝底までの深さは0.3~0.4mで、溝内には最下部に溝掘削時に堆積したと考えられる砂礫や粘土質シルト層などのブロック混合土が見られ、その上を黒色粗粒シルト、さらにその上を粗砂から細砾主体の砂礫を多く含む灰もしくは黄灰色の砂質シルトからシルト質極細砂が覆っていた。

出土遺物と時期 東から南東側を中心として、周溝内からはコンテナに換算して5箱に及ぶ多量の土器が出土した。南東側を中心とする器形を窺うことが可能な残存率の高い個体が多く残され、広口壺や甕のほか、受部が二重口縁状に立ち上がる「淡路型器台」と称される淡路地域を中心に分布する器台も存在していた。さらに南西側では、完形に近い手焙形土器と上下に拡張した口縁端部を櫛波波状で加飾した垂下口縁広口壺が、墳丘上から転がり落ちたような状態で出土した。また、本周溝墓出土土器の特徴として、体部に焼成後穿孔を有する個体が多く認められる点が挙げられ、やはり南東側の溝底もしくはそれよりやや浮いた位置から計4点が出土した。

以上の土器群は、手焙形土器の鉢部口縁に受部を留めている点などから、近畿道編年の様相3(新)の中でもやや古い段階の資料と捉えられるが、溝底からわずかに浮いて出土した受部に条線を施した淡路型器台が、これまでの出土例に擬する限り若干時期が下る可能性がある〔池田2003〕。また、南東側の周溝内からは、下層の黒色シルト内から様相6(新)に比定される壺も出土していることから、こうした時期が下降する土器は、周溝墓築造後にも何らかの儀礼的な行為が一定期間行われ、その際に供獻もしくは廃棄されたか、あるいは周溝の埋没があまり進行しない間に他所から持ち込まれた可能性が考えられよう。

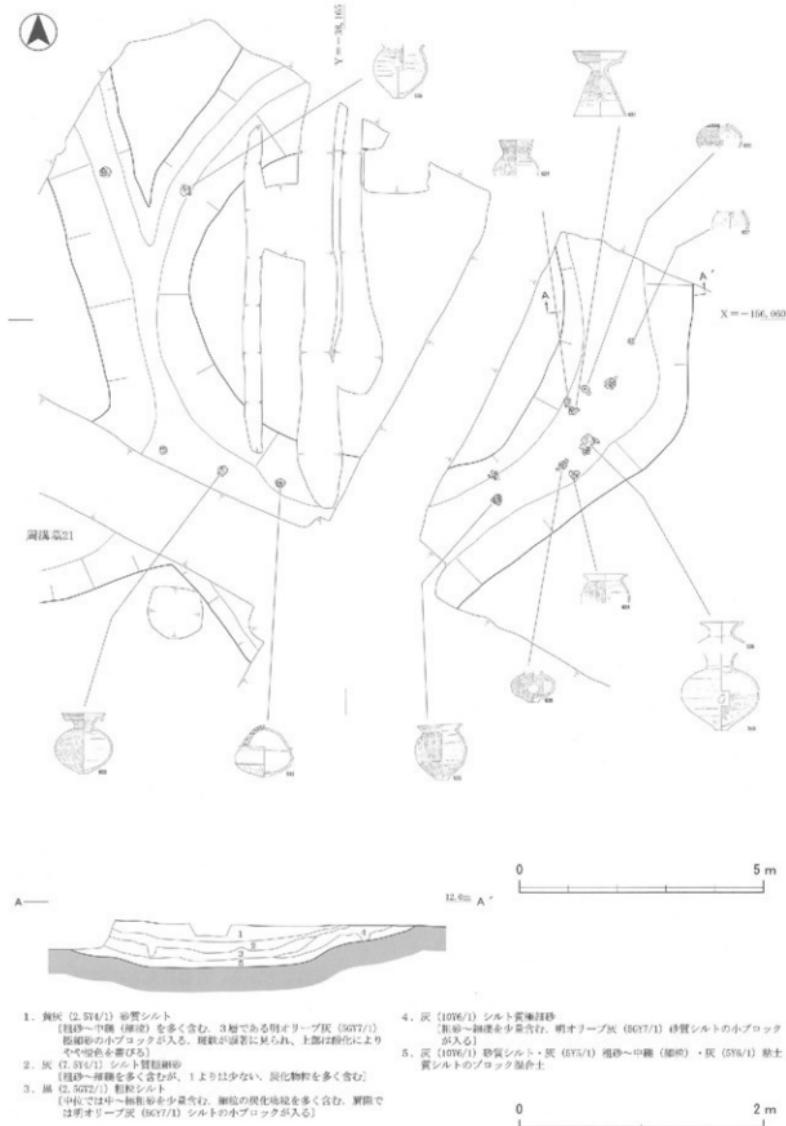


図67 周溝墓22 平・断面図

[周溝墓23] (図68)

検出状況 研究会1次調査で検出された周溝墓で、2A-8h・8i区において確認した。墳丘はN5°W方向に南北軸を置くやや胴張りの方形を呈し、南北長は5.8m、東西長は6.1mを測る。今回再発掘を行った周溝は、幅0.65~1.45mで、対向する北東・南西の両コーナーが地中梁の搅乱によって失われていたが、1次調査の概要報告に掲載されている写真では南西コーナーにおいて周溝が途切れていたことから、この部分に陸橋が存在していたものと考えられる。わずかに掘り残しが認められた箇所では、最下部に灰白色粗細砂のブロックが混在した灰色のシルトから粗細砂、その上には灰黄色のシルトから粗細砂が堆積していた。

出土遺物と時期 北・東側周溝を中心に150点ほどの土器が出土した。大半が細片であったが、山城地域で見られるような口縁部が短く受口状を呈し、体部に粗いタキ成形を施した壺とミニチュアの鉢

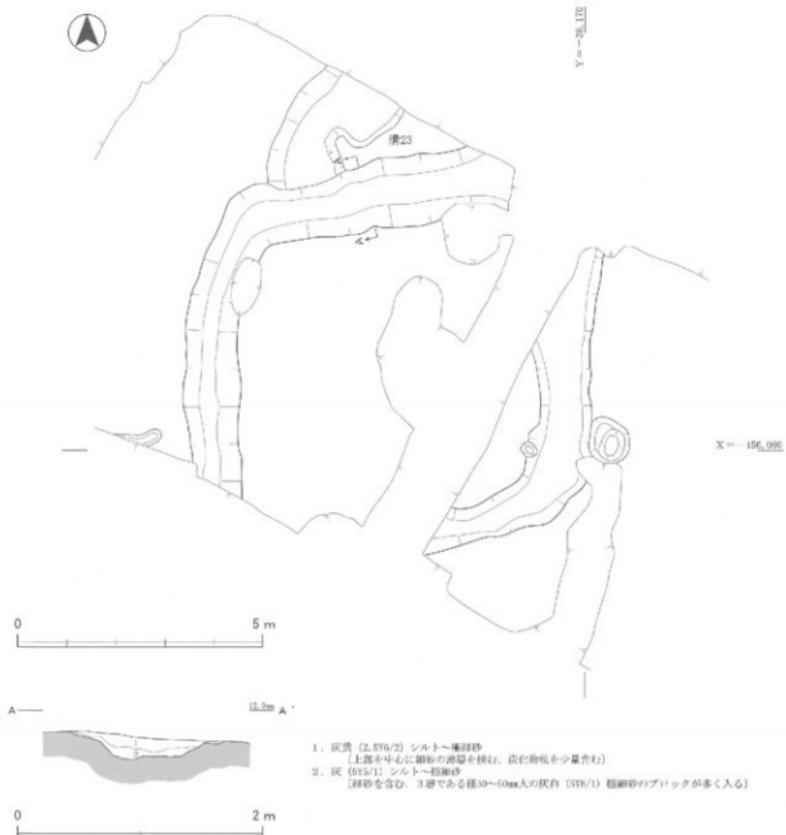


図68 周溝墓23 平・断面図

の2点を図示し得た。近畿道編年の様相4に位置付けておきたい。

[周溝墓24] (図69)

検出状況 2A-8i・9i区において確認した周溝墓で、やはり研究会1次調査で検出されていたものである。周溝墓23と隣り合うようにその南西0.8mに位置し、南東側には周溝の外周同士を接するようにして周溝墓25が築かれている。

墳丘はN28°W方向に南北軸を置く方形を呈し、南北長は5.5m、東西長は6.5m前後を測る。今回再発掘を行った周溝は、幅0.75~1.55m、深さ0.2~0.3mを測り、南側周溝は周溝墓25の北側周溝の溝底より0.1mほど深く掘り込まれていた。北東コーナーが地中梁の擾乱により失われていたものの、概要報告の写真ではこの部分で周溝が途切れていることから、陸橋が存在していたものと考えられる。研究会の調査区から外れた南西コーナー部分では、3層である灰白色シルトから極細砂のブロックが多

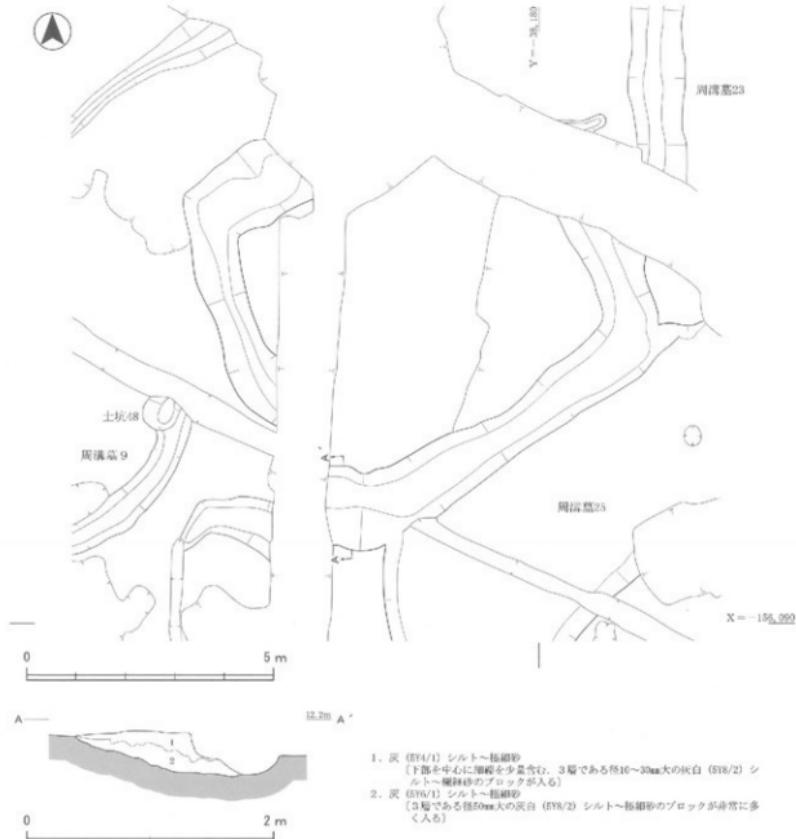


図69 周溝墓24 平・断面図

く混在した灰色を基調とするシルトから極細砂が上下2層に分かれて堆積していた。

出土遺物と時期 東側周溝で掘り残されていた埋土下層よりミニチュア品1点が得られた以外には、南西コーナーの周溝内から土器細片約40点が出土したのみであり、本周溝墓の詳細な築造時期について

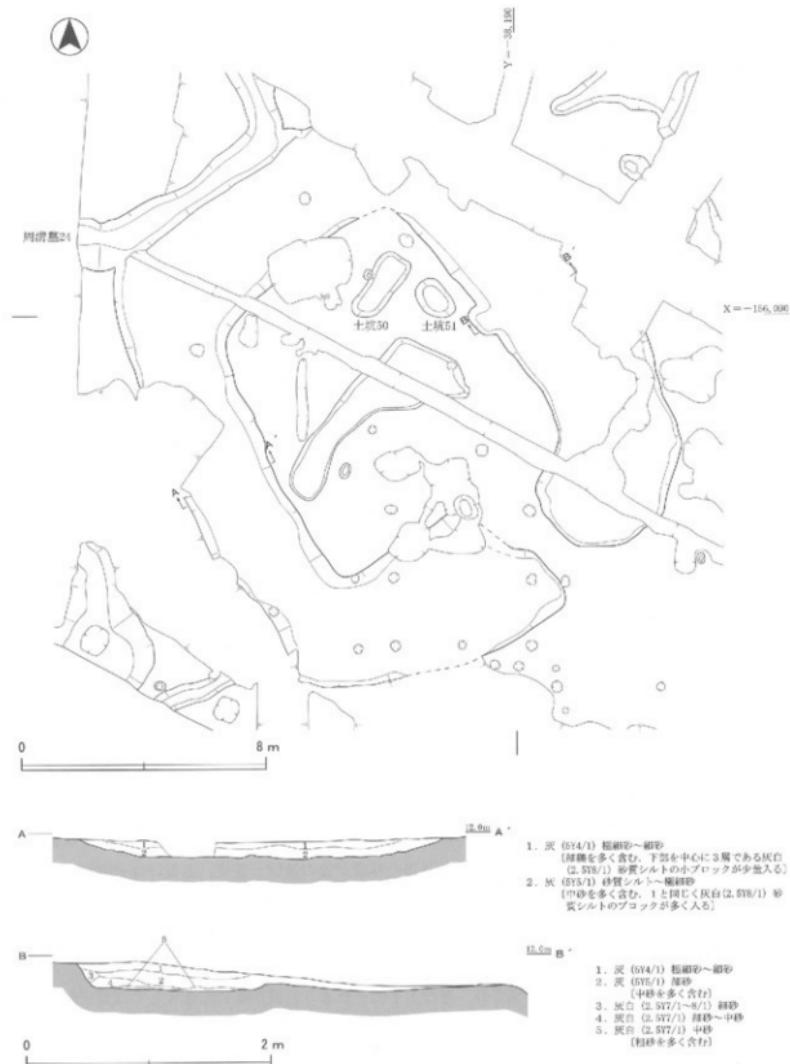


図70 周溝墓25 平・断面図

は不明である。

〔周溝墓25〕（図70）

検出状況 2 A - 8 i · 8 j 区を中心に検出した周溝墓で、北西側には前述のように周溝墓24が接するように存在している。研究会の1次調査において、北側および東側周溝と南西のコーナー部分が確認されており、今回はそれらの再発掘と残りの部分の検出を実施した。

墳丘はN32°W方向に長軸を置いたやや歪な台形を呈し、長辺は9.6m、短辺は北側で7.4m、南側で8.8mをそれぞれ測る。今回新たに検出した箇所についても擾乱の影響を強く被っており、遺存状況は決して良好ではないが、南辺の中央から1.5mほど東に寄ったところで周溝が途切れていたことから、この部分に幅約1mの陸橋が存在していたものと考えられる。周溝の幅2.6~3.7m、検出面から溝底までの深さ0.2m前後で、陸橋西側の周溝端部は幅1.6mと一際広くなっていた。東側周溝の墳丘側は57°と比較的急な角度で立ち上がっていたものの、溝の断面はおむね浅い皿状を呈し、肩際から流入したと考えられる灰白色の砂層を除けば、灰色を基調とした砂質シルトから細砂で埋没していた。

なお、墳丘上において、土坑50・51とした土坑や不定形な落ち込みを確認し得たが、本周溝墓との強い関連性を窺わせるような点は認められなかった。

出土遺物と時期 各周溝内よりコンテナ1箱分ほどの土器が出土したが、細片が多く、3点を図示し得たのみである。このうち、陸橋西の南側周溝最下層から出土した外反口縁の鉢には、内外面に横方向のヘラミガキ調整が加えられており、近畿道縦年の様相4（古）に位置付けられると考えられる。

〔周溝墓26〕（図71~73、図版34・35-1）

検出状況 2 A - 4 e · 4 f · 5 e · 5 f 区を中心に検出した周溝墓で、第3面で検出した弥生時代後期の流路3の上に築造されていた。北側周溝の外肩を溝25、東側周溝の外肩を溝27に切られているほか、北西コーナー部分で周溝墓19と重複し、さらに東側では周溝墓27~29とした3基の周溝墓、南西側では周溝墓30がそれぞれ接するように築かれていた。検出面の標高は、墳丘上で11.7~11.85m、周溝外側で11.55~11.8mを測り、墳丘上、特に流路と重なっていた南東部分が、東側の周溝墓27~29ともども高くなっていた。墳丘盛土の遺存は確かめられなかつたが、墳丘の中心からわずかに西に寄った位置では、埋葬施設の痕跡と考えられる長方形の土坑を確認することができた。

墳丘は北辺が外側に若干丸く張り出した台形状を呈し、西辺を基準にすれば、南北軸はN15°E方向を指す。墳丘の規模は南北長12.15m、東西長は北側で10.8m、南側で11.9mを測り、今回の調査で検出した周溝墓の中では最大であった。周溝は全周し、上部が10°前後の非常に緩やかな傾斜で掘削されているのに対し、途中からは30°前後の角度で深く掘り込まれていた。ただし、南東・南西両コーナーではこの深い掘り込みは見られず、両側からは0.2~0.5mほど高くなっている、陸橋のような機能を果たしていた可能性が考えられる。西側を除く三辺の外肩が他の造構と重複、あるいはその影響を受けているため、掘削時の規模を明らかにしがたいが、西側周溝の幅は4.4~5.1m、墳丘上から溝底までの深さは0.45~0.8mを測り、南側周溝の中央付近では深さ1mを超える箇所も存在した。各周溝とともに溝内の埋土は10層前後に細分可能であったが、いずれの周溝も溝底から0.05~0.1mほど上位に黒色の粘土質シルトからシルト質細砂が見られ、その上下にそれより色調が淡い灰色もしくは黄灰色基調の粘土質シルトから細砂が堆積していた。そこで出土遺物の取り上げに際しては、黒色土より上を上層、黒色土を下層、それより下を最下層として区別することとした。

墳丘上では、前述のように埋葬施設の可能性が高い土坑（墓坑1）を確認した。東西方向に長辺を置

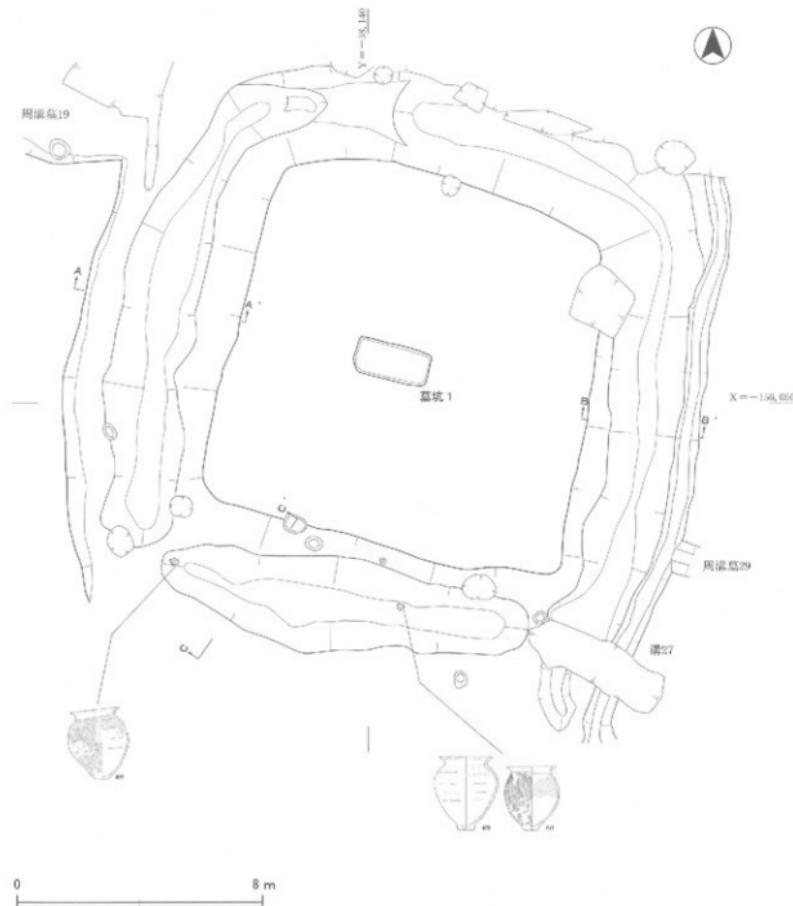


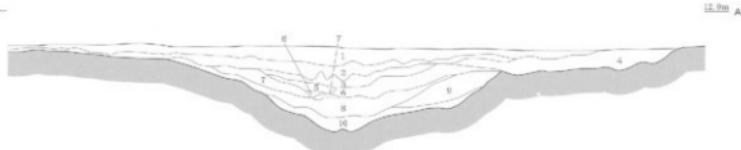
図71 周溝墓26 平面図

いた長方形の土坑で、長軸方向はN17°Wと周溝墓短辺の向きとはほぼ一致している。規模は長さ2.5m、幅1.15m、検出面から坑底までの深さ0.1mで、柵が設置されていたことを示しているのか、中央部には埋土の色調が異なる部分が認められ、その大きさは長さ2.1m、幅0.45mを測る。なお、土坑内からは、遺物の出土は認められなかった。

出土遺物と時期 規模の大きさを反映して、各周溝内からはコンテナに換算して7箱以上に及ぶ多量の土器が出土した。特に目に付くのが、北側および東側周溝を中心に埋土上層から出土した古墳時代前期から後期の土器類で、須恵器の中にはTK 209型式に比定される壺蓋・壺身も認められ、周溝の埋没が完了するまでにはかなりの時間を要していたことが判る。一方、埋土最下層からは、南側周溝の溝底

に残されていた3個体の壺のほか、筒状の器台や大型鉢も出土しており、近畿道編年の様相3（新）に位置付けられると考えられる。

A——



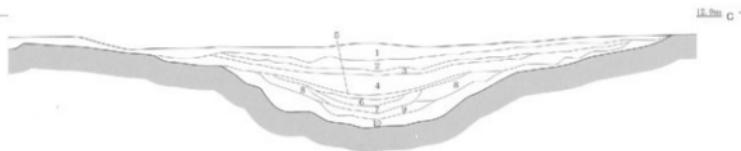
1. 灰 (5Y4/1) シルト質粘土層
〔底土側を中心とする下位（底土）を多く含む。微量元素の炭化物鉱を含む。〕
2. 黄灰 (2, 5Y4/1) シルト質粘土層
〔微量元素の鉄鉱とカドミウム鉄鉱 (SGT7/1) 粗粒の小ブロック入る。〕
3. 黄灰 (2, 5Y4/1) シルト質粘土層
〔中部～中位（底土）を多く含む。〕
4. 黄灰 (2, 5Y6/1) シルト～中砂（底土）シルト質粘土
〔微量元素の鉄鉱とカドミウム鉄鉱（底土）を非常に多く含む。3よりは褐色が大きい。第1底土の底土か？〕
5. 灰 (5Y4/1) 粗質シルト
〔底土物鉱を少含む。明オリーブ灰 (SGT7/1) 砂質シルトのブロックが多く入る。〕
6. 灰 (5Y4/1) 細砂～中砂（中位）
〔粗砂～細粒形が主流で、砂質シルトのブロックが多く入る。第2底土の底土か？〕
7. 灰 (5Y4/1) 砂質シルト
〔微量元素の炭化物鉱を含む。明オリーブ灰 (SGT7/1) シルトの小ブロックが多量入る。〕
8. 灰 (5Y2/1) 砂質シルト
〔微量元素の鉄鉱～細粒形を含む。炭化物鉱を多量に含む。中心部では粘土で粘性が非常に高いが、側方に向かうにしたがい粗粒となる。〕
9. 灰 (5Y6/1) ～灰 (5Y4/1) 粗砂～中砂（中位）
〔第2底土の底土か？〕
10. 灰 (5Y4/1) 粗質シルト
〔底土物鉱を多く含む。炭化物鉱を少含む。中心部の下部では明オリーブ灰 (SGT7/1) 粗粒形の小ブロックが多く入る。〕

B——



1. 黄灰 (2, 5Y6/2) 砂砂～細粒（底2層土）
〔底2層土〕
2. 灰 (5Y4/1) 粗粒砂～細砂
〔底砂～中砂（底土）を多く含む。炭化によりやや褐色を含む。〕
3. 灰 (2, 5Y6/1) 粗粒砂～細砂
〔底砂～中砂（底土）を多く含む。〕
4. 灰 (5Y4/1) シルト質粘土層
〔底砂～粗粒砂のブロック状になり。中位では明オリーブ灰 (SGT7/1) シルト質粘土のブロックが入る。〕
5. オリーブ灰 (5Y4/1) 粗粒シルト
〔底砂～中砂（底土）を含む。最上部を中心に細粒の炭化物鉱を多く含む。〕
6. オリーブ灰 (5Y4/1) シルト
〔底砂～粗粒砂を主体に粗砂～中砂（底土）を多く含む。〕
7. 黄灰 (2, 5Y3/1) 中砂～中砂（細粒）
〔底2層土の底土か？〕
8. 灰 (5Y2/1) シルト～中砂（中位）
〔中砂～中砂（中位）を多く含む。〕
9. 灰 (5Y2/1) 粗土質シルト～ホルト質粘土層
〔中心部では粘土で粘性が非常に強く、側方に向かうにしたがい粗粒となる。〕
10. 灰 (2, 5Y2/1) 中砂～中砂（底土）
〔シルト～粗粒が多く入る。第3底土の底土か？〕
11. 黄灰 (2, 5Y4/1) 粗土質シルト～シルト質粘土層
〔中心部では炭化物鉱を多く含んで粘性が非常に強く、側方に向かうにしたがい粗粒となる。〕

C——



1. 灰 (5Y4/1) シルト質粘土層
〔地表～中層（中位）を含み、特に例説第30との間に多量である。灰白 (7, 5Y7/2) 極細砂～細砂の小ブロックが多く入る。〕
2. 黄灰 (2, 5Y4/1) シルト質粘土層
〔地表～中層（中位）を多く含む。微量元素の炭化物鉱を含み、3より褐色が大きい。〕
3. 灰 (5Y4/1) 粗粒シルト
〔中砂～中砂（中位）を含む。微量元素の炭化物鉱を少含む。〕
4. 灰 (5Y4/1) シルト
〔中砂～中層（中位）を多く含む。〕
5. 灰 (2, 5Y2/1) 粗土質シルト～砂質シルト
〔中心部から側方に向かうにしたがい粗粒となり、細粒～中砂（中位）を少含む。微量元素を少含む。〕
6. 灰 (2, 5Y2/1) 粗土質シルト
〔側面～側面を多く含む。底砂の炭化物鉱を多く含む。〕
7. 灰 (2, 5Y2/1) 粗土質シルト～砂質シルト
〔中心部では粘土で粘性が非常に強いが、側方に向かって粗粒となり、粗砂～中砂（底土）を多く含む。〕
8. 灰 (5Y3/1) 砂質シルト
〔中砂～中砂（中位）を多く含む。砂縫は上方ほど多くなり、最上部では主張となる。微量元素の炭化物鉱を含む。〕
9. 灰 (5Y3/1) 砂質シルト
〔中砂～中砂（中位）を多く含む。微量元素の炭化物鉱を含む。〕
10. 灰 (5Y3/1) 砂質シルト
〔側面～側面を多く含む。底砂の炭化物鉱を少含む。底砂付近では明オリーブ (5Y2/1) 中砂～細粒を少含む。微量元素を少含む。底砂付近では明オリーブ (5Y2/1) 中砂～細粒のブロックが入る。〕

0 2 m

図72 周溝墓26 断面図

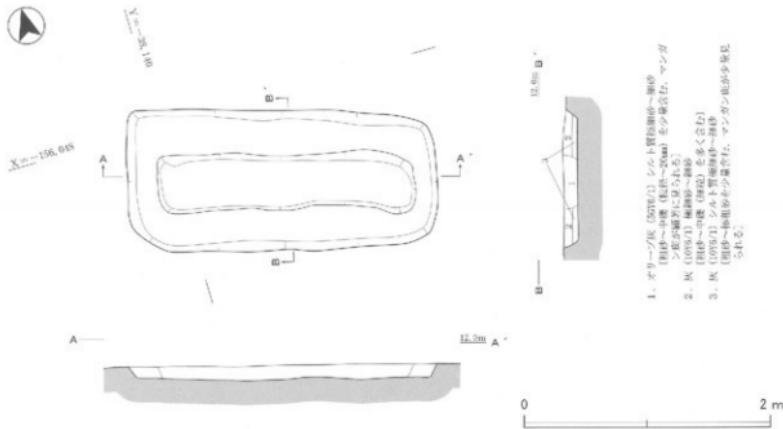


図73 周溝墓26 墓坑1 平・断面図

〔周溝墓27〕 (図74・75、図版36-1・2)

検出状況 2 A - 3 e・3 f 区において検出した周溝墓で、周溝墓26の東側で南北に並ぶ3基の周溝墓のうち最も北に位置する。周溝墓26との間と墳丘の東側を、溝27・28という南北に走行する2条の溝によって切られていたほか、墳丘上には第1面溝14が掘られ、さらに東端は地下埋設管の搅乱によって失われていた。また、南側の周溝は、南接する周溝墓28によって共有されていた。検出面の標高は、墳丘上で11.7~11.9mを測る。

東側周溝がその存否も含めて判然とせず、南側周溝も墳丘側の肩部が遺存していなかったため、本来の墳丘の形状・規模については不明な点が多いが、北辺がやや丸く外へ張り出した南北軸をN 9° E 方向に置く方形を呈し、南北・東西方向とも長さ5.5m以上を測る。周溝の幅は北側で1.1~1.55m、墳丘上から溝底までの深さは0.2~0.25mであった。溝の断面は浅い皿状を呈し、下部は3層である灰白色極細砂の小ブロックが混在したオリーブ灰色粗粒シルト、上部は灰色砂質シルトで埋没していた。

出土遺物と時期 北側周溝の東端において破碎されたような状態で多量の土器が出土したほか、各周溝からはコンテナ3箱分の土器が出土した。図示し得た資料は、体部外面に粗いタタキ成形が施された甕が主体であるが、当地域に通有なもののはかに、山城地域に特徴的な受口状口縁を有するものや、同地域で丹後・丹波系と分類されている資料に類似した口縁部を有するものも認められる。器形の大小を問わず全体的に体部の球胴化が進んでおり、近畿道轄年の様相4(古)に位置付けておきたい。

〔周溝墓28〕 (図74)

検出状況 2 A - 3 f 区において検出した。調査当初は周溝墓と捉えていなかったが、周溝墓27の南側周溝の遺構確認を行っていた際、外周の西端が北に回らずに南側に向かい、さらにその南端が再び東へ曲がることを確認し得たため、周溝墓と認識することとした。ただし、西側周溝が溝27と重なり、墳丘東端が溝28に切られているなど、遺構の遺存状況は27と同様に不良で、加えて墳丘上には長径2.5mの大きな搅乱が存在していた。検出面の標高は、墳丘上で11.85~11.9m、東側周溝の外側と考えられる溝28の東で11.8~11.85mと平坦で、墳丘盛土の遺存は確かめられなかった。

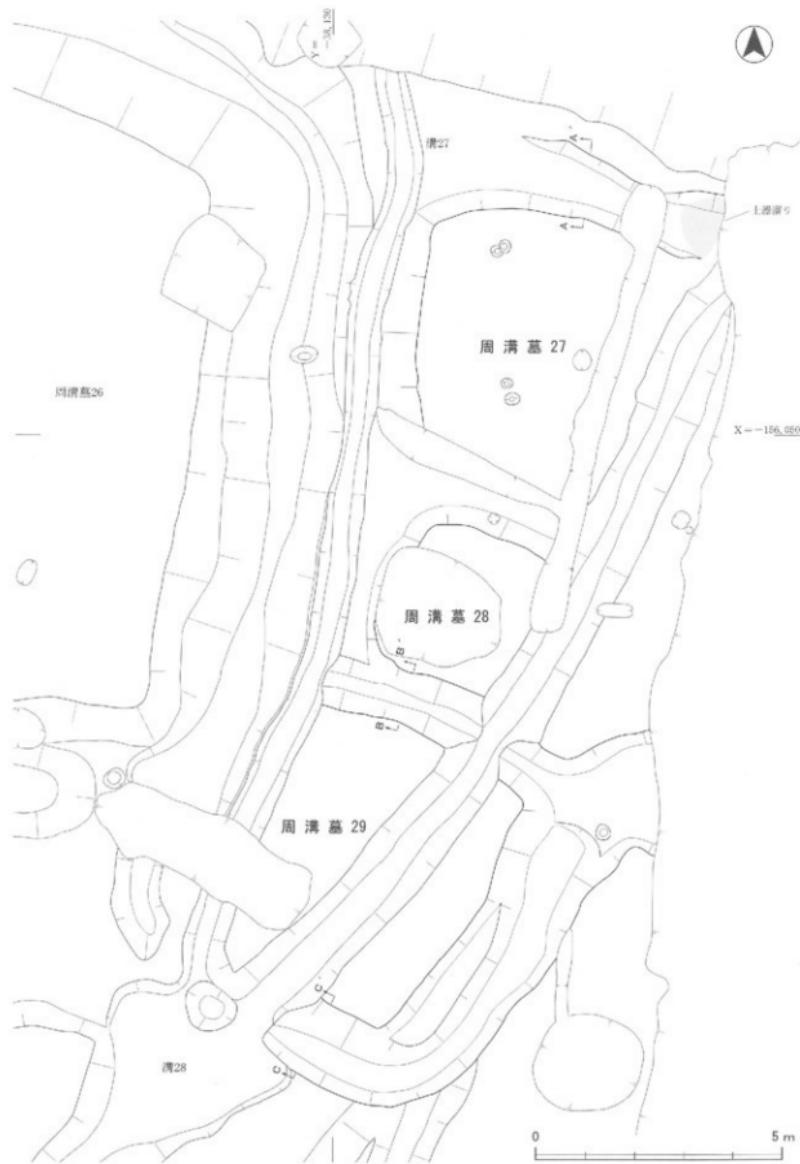


図74 周溝墓27～29 平面図

墳丘はやや丸みを帯びた方形を呈し、南北軸をN24° E方向に置いている。南北長は3.1mで、溝28が重なっている位置に東側周溝が存在していたと仮定すれば、東西の長さもほぼ同様であったと推定される。周溝は現状で逆「コ」字形に巡っているが、南側周溝の深さは墳丘上から0.4~0.45mと、北および西側周溝よりも0.2mほど深くなってしまい、むしろ後述する周溝墓29を築造する際に掘削し直された同周溝墓の北側周溝と捉えた方が妥当であろう。

出土遺物と時期 北側および西側周溝から土器細片が50点ほど出土した。図示し得たのも北側周溝から出土した壺部の1点のみであり、本周溝墓の詳細な築造時期は不明である。

[周溝墓29] (図74~76、図版35)

検出状況 周溝墓26東側に南北に並ぶ3基のうち最も南に築かれていた周溝墓で、2A~3f・3g・4f・4g区において検出した。攪乱や他の遺構との重複によって遺構の遺存状況が不良である点は同様であるが、溝28が墳丘の中央を貫け、南西コーナー部分の周溝下底を確認し得たため、周溝墓27・28と比較すれば、全体を把握することは容易であった。検出面の標高は、墳丘上で11.85~11.9m、東側周溝の外側においても同数値で、ほぼ平坦であった。

墳丘は南北軸をN27° E方向に置いたやや歪な方形を呈し、南北長は5.7m、東西長は6.2m前後を有していたものと考えられる。周溝の開続のあり方は明らかにしがたいが、南西コーナーで確認した周溝は溝27との間が0.7mほど途切れしており、この部分に陸橋が設けられていた可能性が考えられる。また、幅2.2~2.5mの溝状遺構が接続している北東コーナーも、北・東側周溝に比べて溝底が0.2m近く高くなってしまっており、やはり陸橋が存在していた可能性がある。溝の幅は、北側周溝で1.0~1.25m、東側から南側周溝で1.55~2.1mを測り、墳丘上から溝底までの深さは0.4~0.5mであった。溝の埋土は灰色を基調とした細粒の砂層を主体とするが、溝底には部分的に3層である灰白色極細砂の小ブロックを含んだオリーブ灰色シルトが堆積していた。

出土遺物と時期 東側から北側周溝を中心に、大小の壺を中心とした50個体を超える多量の土器が出土し、出土総量はコンテナに換算して8箱以上に及んだ。完形品を含む残存率の高い資料が多いことが

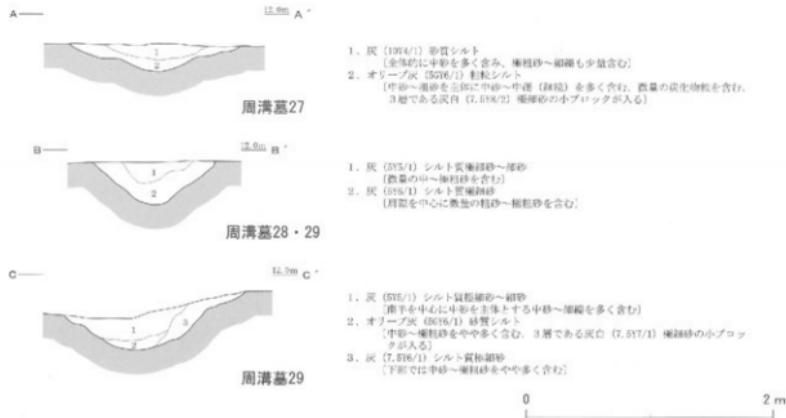
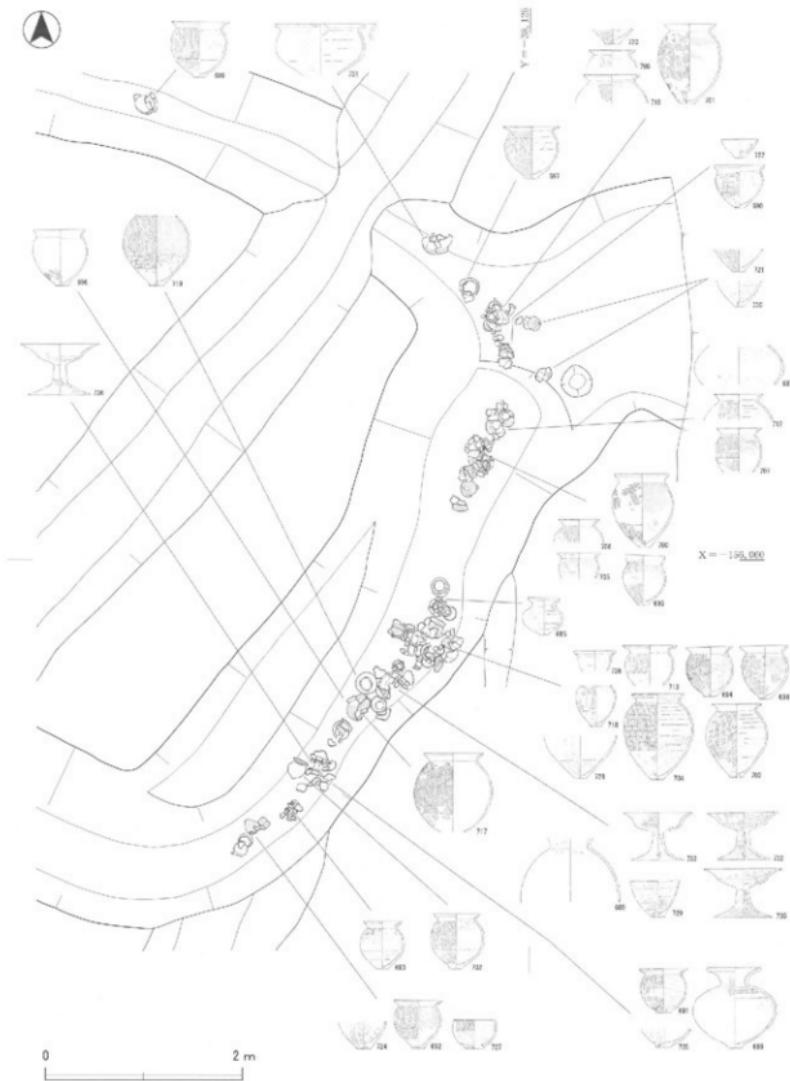


図75 周溝墓27~29 断面図



特徴で、溝28の溝底で確認された周溝下底より出土した体部下半に焼成後穿孔を持つ壺を除けば、いずれも溝底から0.2m以上浮いた位置から出土していることから、周溝の埋没が一定程度進行した段階で溝内に入れられたものである。高坏の中には、坏部の屈曲が下位に下がり、外面に横方向のヘラミガキ調整を施したものや脚部下半が直線的に開くものが存在しており、近畿道編年の様相4（古）に位置付けられるであろう。

〔周溝墓30〕（図77～79、図版33・38）

検出状況 周溝墓26南側周溝の南西コーナーに接するように築かれた周溝墓で、2A - 5g・6g区

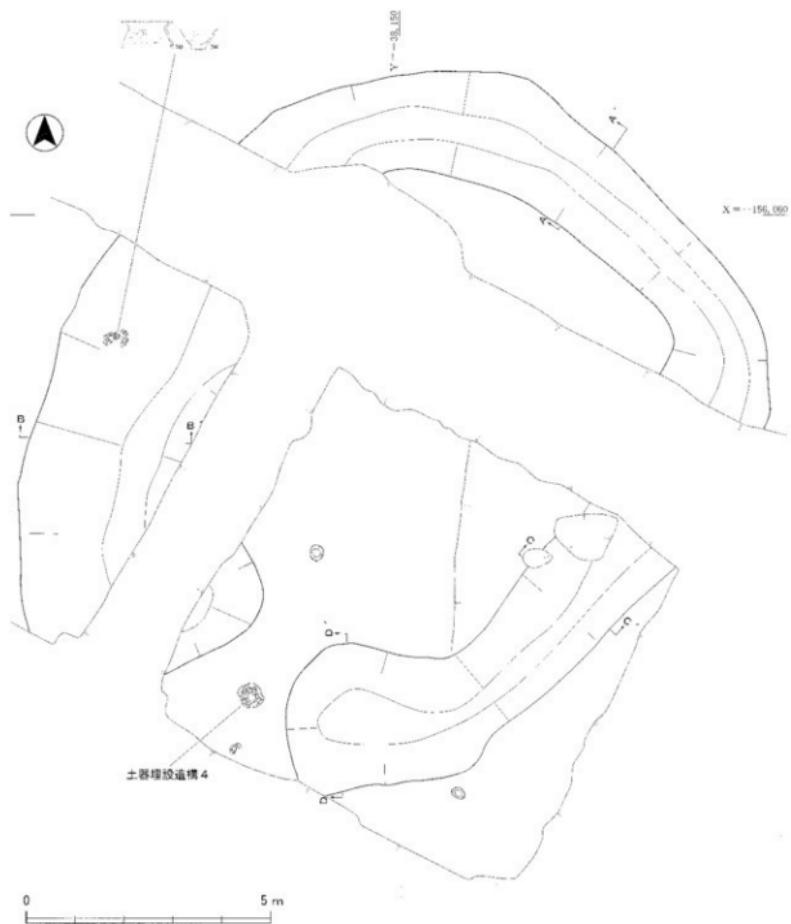


図77 周溝墓30 平面図

に位置している。地中梁の搅乱が東西・南北方向に2条ずつ貫通していたため、遺構の遺存は決して良好とは言いがたい状況であったが、他の遺構の重複による破壊をほとんど被っていないことから、全体の形状・規模を把握することはかろうじて可能であった。検出面の標高は、墳丘上で11.9~11.95m、他遺構の影響をほとんど受けていない東側周溝の南東で11.9m前後を測り、周溝の内外はほぼ平坦と言える状況にあった。

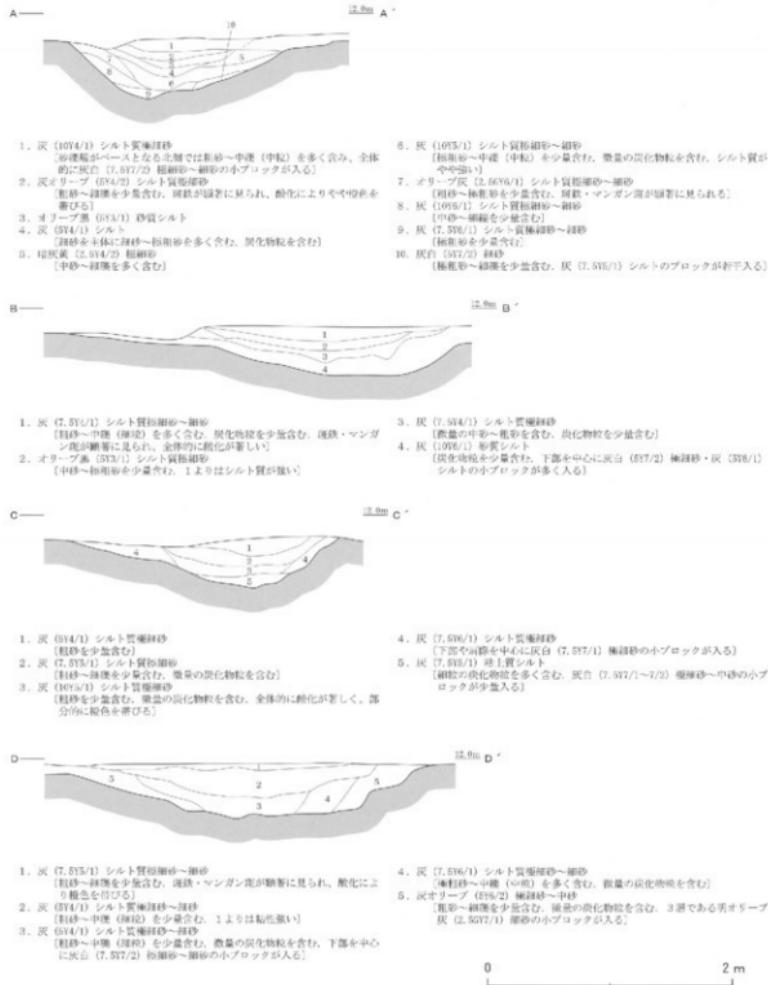


図78 周溝墓30 断面図

周溝が南西方向に開口し馬蹄形に巡っていたため、墳丘はN33°E方向に長軸を置いた前方後方形もしくは羽子板形を呈し、後方部に相当する墳丘の規模は、南北長9.5m、東西長は北側が7m前後、南側が6m前後を測る。陸橋の長さは約3m、前方部と後方部の括れに当たる墳丘付け根の幅は1.5mで、両側の周溝端部を外側に拡張させていたため、陸橋の先端は撥形に開き、4m前後の幅を有していた。周溝は墳丘側の傾斜をややきつくして掘られ、幅1.65~2.4m、陸橋東側の端部で3.1mを測るが、西側の周溝は一際広くなっている、陸橋西側の端部は幅4.2m前後を有していたものと推定される。墳丘上から溝底までの深さは0.45~0.65mで、部分的にオリーブ黒色の砂質シルトやシルト質極細砂を挟むものの、基本的には灰色を基調としたシルト質極細砂から細砂主体の埋土によって埋没していた。

陸橋上のほぼ中央では、複数個体の土器を組み合わせて埋設した遺構（土器埋設遺構4）が検出された。掘り方は、北北西-南南東方向にやや長い梢円形を呈し、長径0.6m、短径0.55m、検出面から坑底までの深さ0.15mをそれぞれ測る。埋設された土器は、器高30cmを超える壺を大きく2分割したうえで、やや斜め気味に正位に置いた口縁部から片側体部の破片にもう片側の体部から底部の破片を逆位に組み合わせ、間隙を別の2個体の壺の体部片で充填しており、計3個体の土器が用いられていた。壺の体部には焼成後の穿孔も認められることから、本遺構の性格としては上器柏墓と捉えるのが最も妥当である。

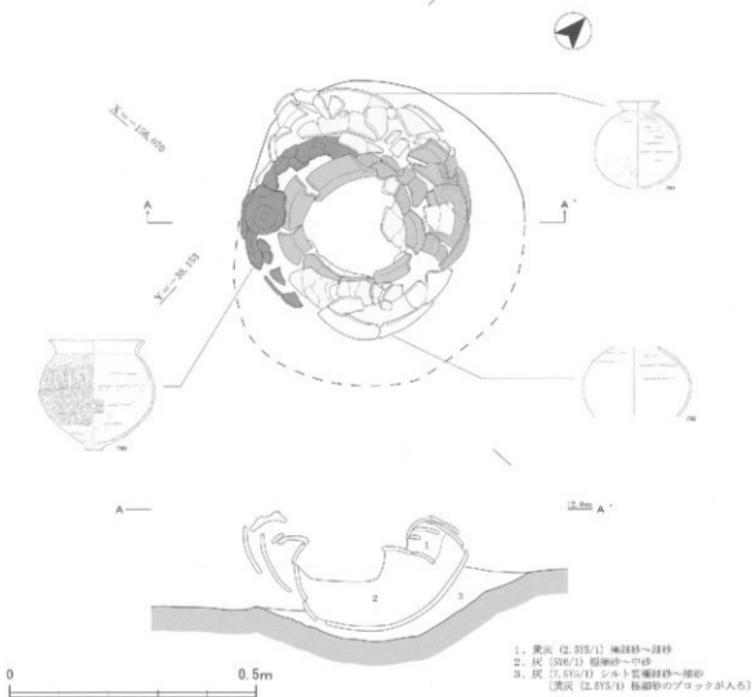


図79 土器埋設遺構4 平・断面図

あろうが、掘り方および埋設土器内の埋土からは、骨片など性格を特定するような内容物は確認できなかった。なお、出土した土器の上端は検出面から0.1m以上上位に位置しており、本遺構が盛土内に設けられていたとすれば、墳丘の盛土は少なくとも0.2m前後の厚さを有していたことになろう。

出土遺物と時期 北側から東側の周溝を中心に、コンテナ2箱半程度の土器が出土した。確実に本周溝墓に供獻された、あるいは葬送儀礼に使用されたと考えられる土器は存在せず、図示し得たものも含め残存率が低い破片資料が大半を占める。一方、土器埋設遺構4には、体部外面に粗いタタキ成形を施

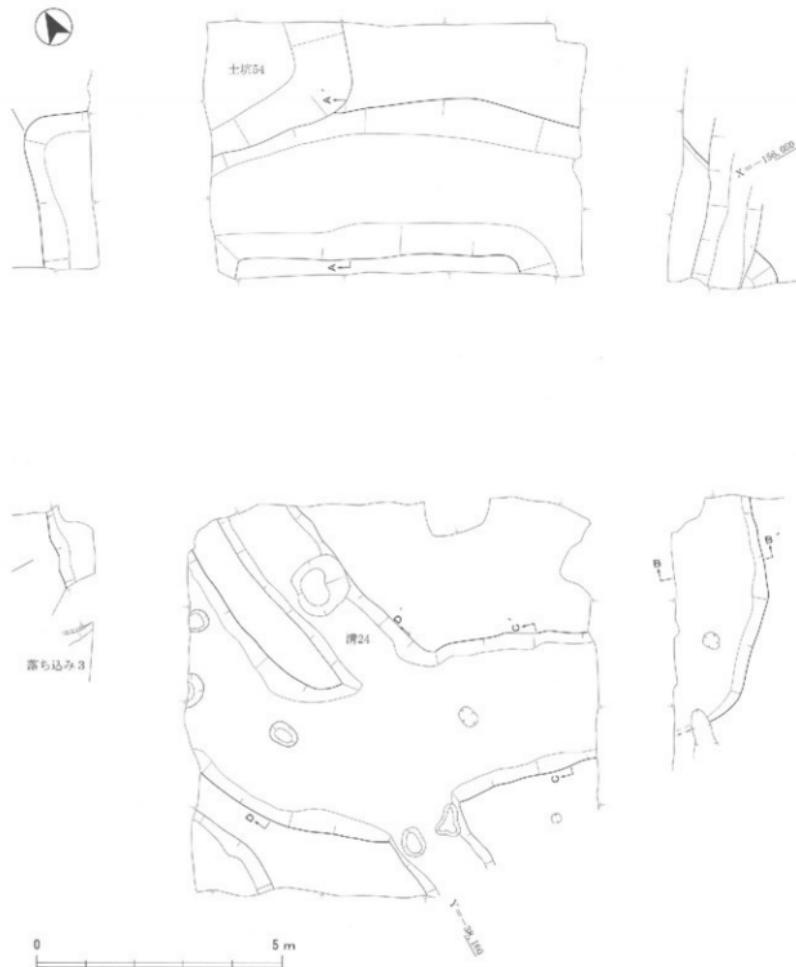


図80 周溝墓31 平面図

した超大型の壇とともに、丸底の広口壺も使用されており、近畿道編年の様相4（新）に位置付けられるものと考えられる。

〔周溝墓31〕（図80・81）

検出状況 02-2工区2トレンチの南端から03-1工区1トレンチにかけて存在していた周溝墓で、2A-6h・6i区を中心に位置している。すでに研究会1次調査で南側の3分の2ほどが検出されており、今回はその部分の再発掘と北側周溝を中心とする北端部分の確認を実施した。墳丘の大半がすでに調査済みであったため、墳丘盛土の存否に関しては直接確かめられなかつたが、今回新たに検出した遺構面の標高は、墳丘北端で11.85～12.0m、北側周溝の外側で11.85～11.95mを測り、周溝内外ともほぼ平坦と言える状況であった。

工区境に生じた空隙と地中梁による幅広の擾乱が墳丘の北端を東西に貫通し、加えて東・西側の周溝上を2条の擾乱が貫いていたため、遺構の遺存状況は必ずしも良好ではなかつたが、墳丘は南北に長い長方形を呈し、南北長は8m、東西長は推定で7m前後の規模を有していたものと推定される。周溝は2.6～3.2mと全般に幅広で、墳丘上から溝底までの深さは北側で0.35m前後であった。周溝埋土はいずれも上下2層に分かれ、灰色もしくは灰黄色を基調とした中砂までの砂層によって埋没していた。なお、墳丘西側から南側周溝の外側にかけては、幅1.5～1.6m、深さ0.1m前後の溝（溝24）が確認されたが、本周溝墓との新旧関係については明確に捉えられなかつた。

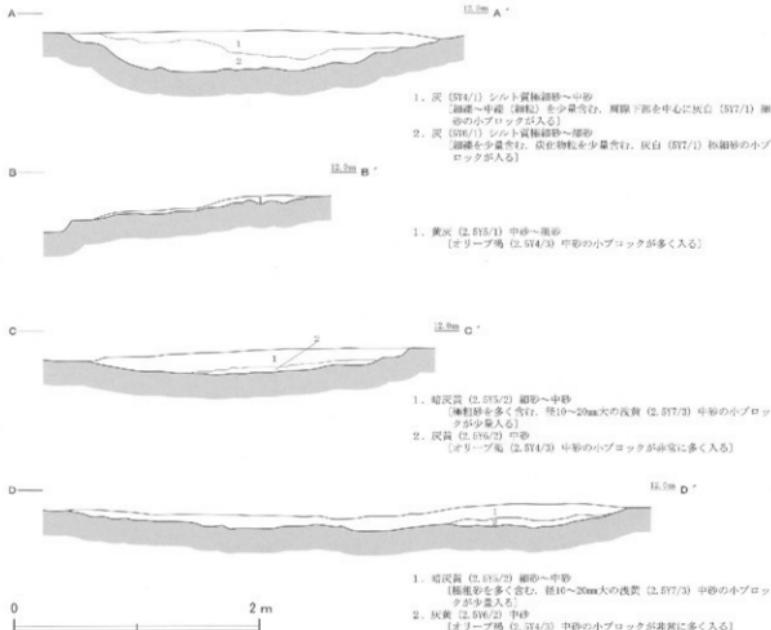


図81 周溝墓31 断面図

出土遺物と時期 北側周溝およびわずかに掘り残されていた西側周溝の埋土下層から、コンテナ2箱半程度の上器が出土した。北側周溝の最上部から出土したTK 217型式の須恵器壺蓋を除き、大半が破片であるが、埋土下層から出土した資料として、二重口縁壺・甕・高环・鉢・有孔鉢・ミニチュア土器を図示し得た。詳細な時期を特定し得る資料に恵まれていないが、おおむね近畿道編年の様相3（新）から4（古）にかけての土器群と捉えられよう。

〔周溝墓32〕 (図82)

検出状況 2A-5 i区を中心に検出した周溝墓で、周溝墓31の東側周溝から4.5m東に位置する。

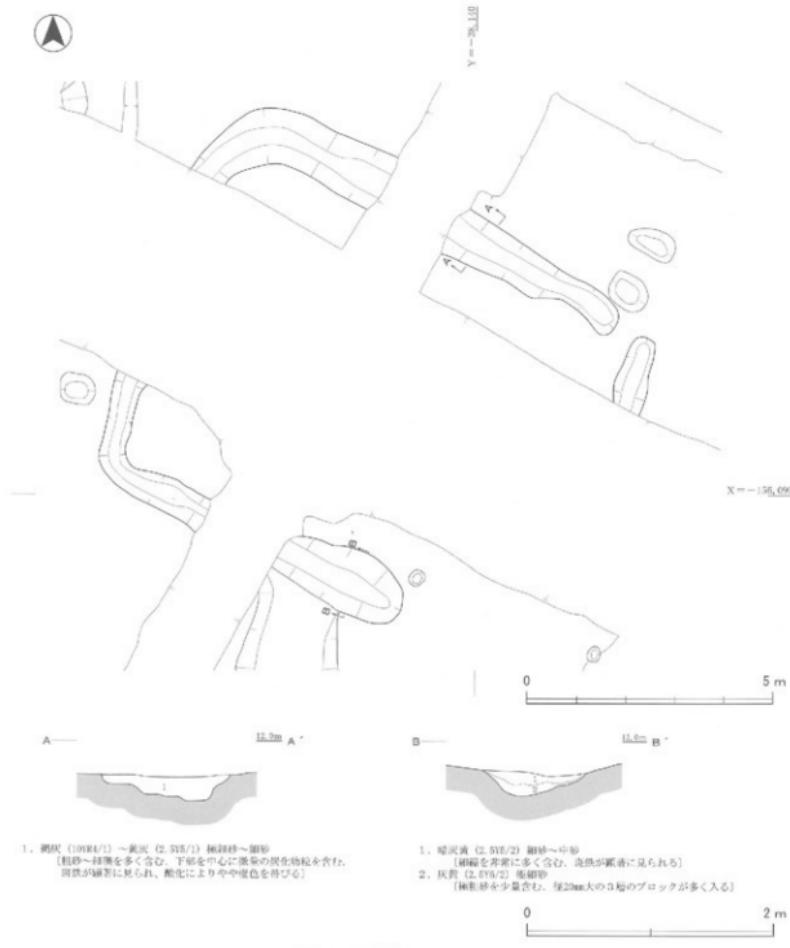


図82 周溝墓32 平・断面図

31と同様に調査年度が異なる2調査区にまたがって検出されたため、墳丘の中央を幅4m以上の擾乱が貫いているなど遺存状況は著しく不良であるが、検出面の標高は、擾乱の影響が少なかった墳丘の北端で11.85～11.9m、北側周溝の外側で11.9m弱とほとんど平坦であった。

墳丘はN28°E方向に南北軸を置く長方形を呈し、南北長は6.7m、東西長は8.8mを測る。周溝は東側周溝、特に調査会調査区内の南東コーナーの状況が今一歩判断としないが、北東コーナーでは一旦途切れしており、幅約0.5mのこの部分が陥橋であったことは確実である。周溝の幅は0.5～1.3mと細

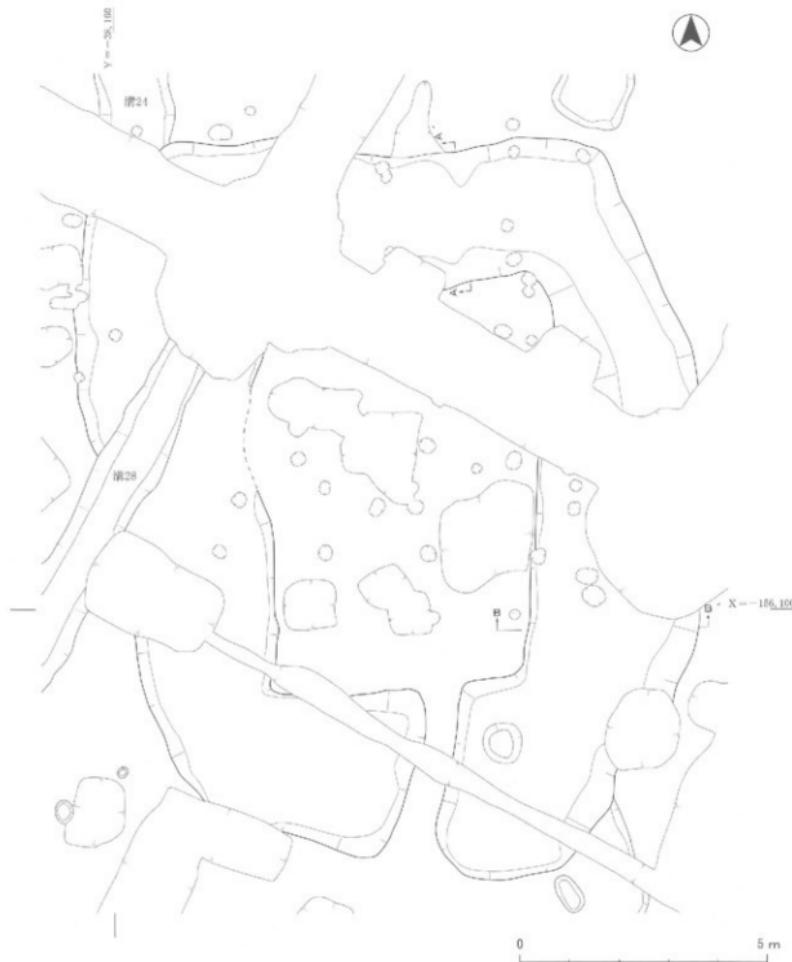


図83 周溝墓33 平面図

めで、墳丘上から溝底までの深さは0.05~0.3 mであった。周溝埋土は中砂までの砂層を主体とするが、酸化が著しく、上半を中心としてオレンジ色を呈していた。

出土遺物と時期 北側周溝を中心に約50点の土器が出土したが、大半が細片であったため、有段高坏の坏部を復元図示し得たのみである。濃いオレンジ色を呈した器面に横方向の細筋のヘラミガキ調整を施した精製品であり、近畿道編年の様相4（新）に位置付けられると考えられる。

[周溝墓33] (図83・84)

検出状況 研究会1次調査で南側周溝を除く大部分が確認されていた周溝墓で、周溝墓31南側の2 A - 6 j・2 B - 6 a区を中心に検出した。地中染の攪乱や調査会調査区の側溝、さらには第1面で確認された井戸・ピット群や第2面の溝28など、多数の遺構や攪乱が重複していたため遺存状況は不良であり、当然のことながら墳丘の盛土も認められなかった。

墳丘はN 1° E方向とほぼ南北に長軸を置いた長方形を呈し、長辺は8.2 m、短辺は北側で5.8 m前後、南側で5.2 mを測る。周溝は南辺の中央から0.5 mほど東に寄ったところで途切れており、この部分に幅0.6~0.8 mの陸橋が存在していたと考えられる。周溝の幅は2.15~3.7 m、検出面から溝底までの深さは0.1~0.3 m前後で、陸橋東側の周溝端部は幅4.1 mと一際幅広となっていた。周溝は灰黄色を基調とした砂質シルトから中砂で埋没していたが、東側周溝にはこの上を粗砂から細礫が多く含んだ黒褐色極細砂から細砂が覆っていた。

出土遺物と時期 大半が再発掘であったにも関わらず、周溝内からはコンテナ1箱程度の土器が出土した。図示し得た遺物はいずれも埋土下層から出土した資料で、口縁部を振幅の大きい櫛描波状文で飾った二重口縁壺や小型壺・甕・鉢・高坏脚部・台付鉢などがある。壺の中には、体部外縁のタタキ成形の溝筋は太めながらも、比較的器壁の薄い肩が張った体部から口縁部が直線的に外傾し、板ナデ調整によって頭部内面の屈曲部にシャープな稜線を作り出したものが含まれており、庄内型壺の影響が看取される。また、小型壺には、内面を中心に横方向の細筋のヘラミガキ調整が施され、外面にも粗雑ながらミガキが加えられている。これらの土器の存在から、本周溝墓出土の土器群は、近畿道編年の様相4（古）に位置付けられ、その時間幅の中でも後出の可能性が考えられる。

[周溝墓34] (図85)

検出状況 2 A - 2 g・2 h区において検出した周溝墓で、後述する溝40と重複してこれを切ってい

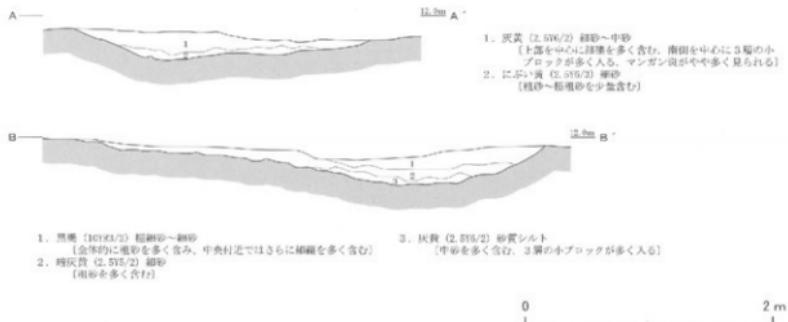


図84 周溝墓33 断面図

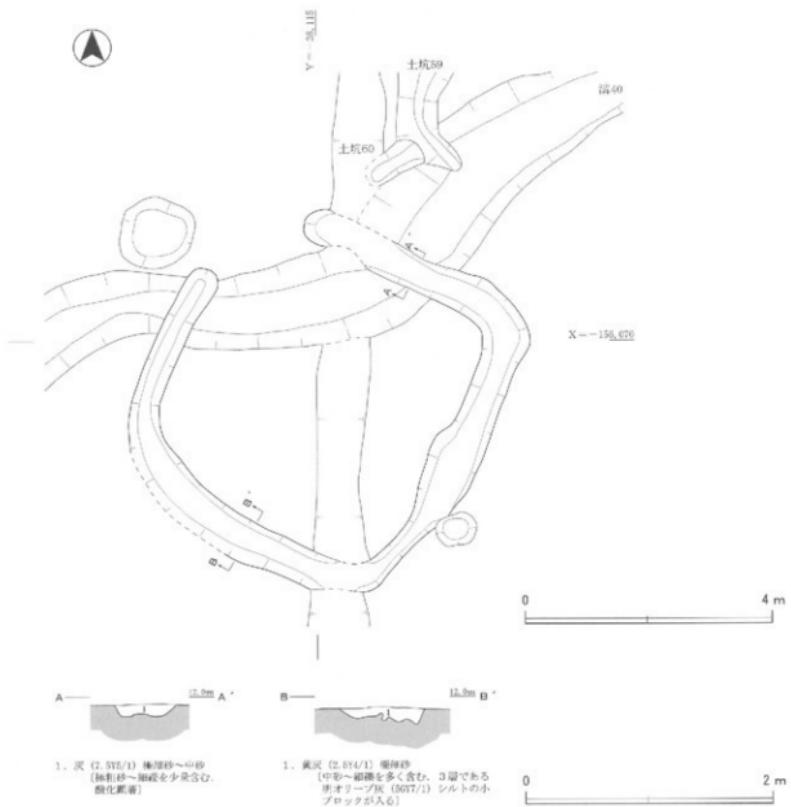


図85 周溝墓34 平・断面図

る。墳丘の盛土は存在せず、検出面の標高は、墳丘上で 11.85 ~ 11.9m、周溝の外側で 11.85 ~ 11.95 m とほぼ平坦と言える状況にあった。

墳丘は南北軸を N27° E 方向に置いた方形を呈し、南北長は 4.5 m、東西長は 4.4 m を測る。周溝は北西コーナーを除いて連続して巡っており、幅 1.6 m のこの部分に陸橋が設けられていたものと考えられる。溝は幅 0.3 ~ 0.85 m、墳丘上から溝底までの深さ 0.1 ~ 0.2 m と小規模で、大半が 3 層である明オリーブ灰色シルトの小ブロックを含んだ暗色の黄灰色極細砂で埋没していた。

出土遺物と時期 周溝内からは 60 点ほどの土器細片が出土したのみであり、図示可能な遺物も抽出できなかった。したがって、本周溝墓の時期に関して特定することは不可能であるが、溝 40 の埋没後に築かれていることから、庄内式期であることは確実である。

〔周溝墓 35〕 (図 86・87、図版 36-3)

検出状況 02-2 工区の東端において検出した周溝墓で、今回の調査で検出した周溝墓の中では最も

東となる1A-10g・10h区と2A-1g・1h区に位置する。検出面の標高は、墳丘上で11.8~11.95m、周溝の外側で11.8~12.0mを測り、墳丘盛土の遺存は確かめられなかった。

東側周溝が調査地外となつたため、全体の規模は明らかにしがたいが、墳丘は南北軸をN20°E方向に置く比較的整った方形を呈し、南北長は10.0m、東西方向も検出長で10.0mを有していた。周溝は検出し得た範囲では全周し、幅2.1~3.8m、墳丘上から溝底までの深さ0.2~0.35mをそれぞれ測るが、南西コーナーから南側周溝全体について、0.1m前後と極端に浅くなっていた。埋土は灰色を基調と

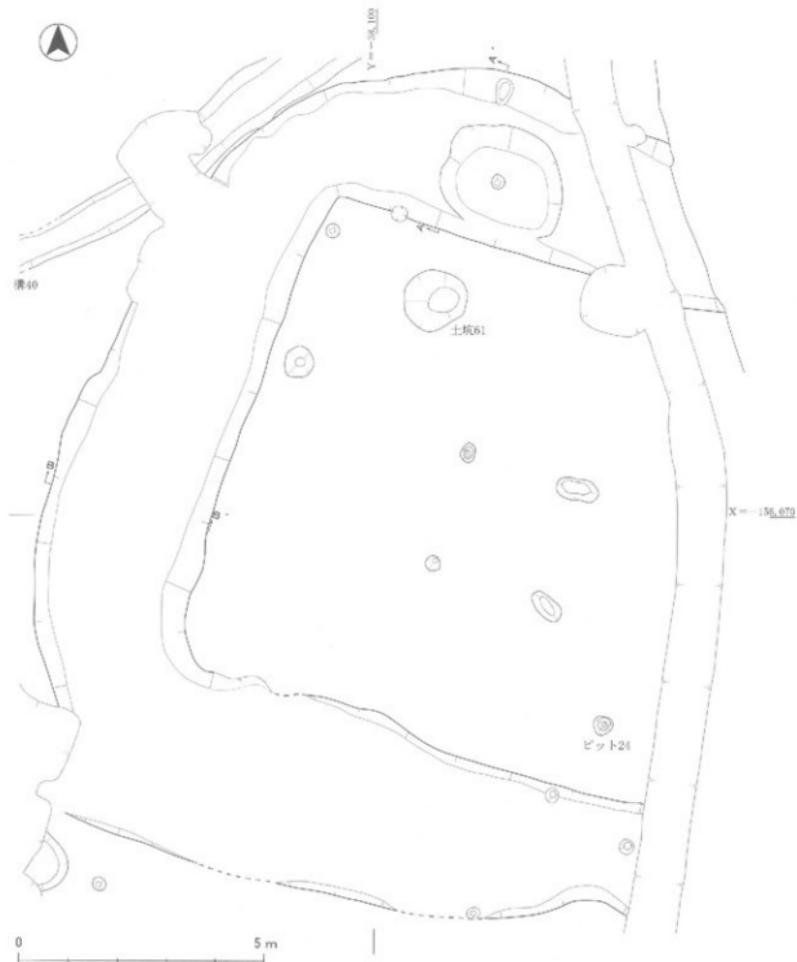


図86 周溝墓35 平面図

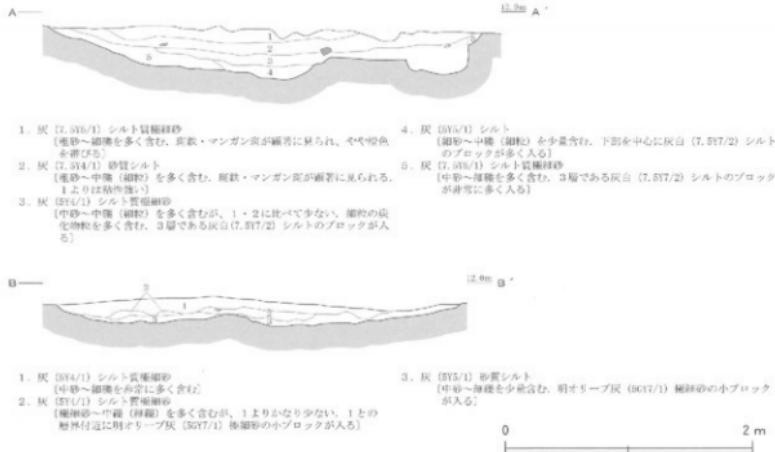


図87 周溝墓35 断面図

したシルトからシルト質極細砂を主体としているが、下部には3層である灰白色シルトもしくは明オリーブ灰色極細砂の小ブロックが多く含まれていた。

出土遺物と時期 岩溝の規模に反して出土遺物はさほど多くなく、コンテナ1箱程度の上器細片が出土したのみである。時期を特定し得る資料に恵まれていないが、上層出土遺物の中には施形高壺のものと考えられる低脚の脚部や台付鉢の台部が含まれており、近畿道縦年の様相3に位置付けられる可能性であろう。

〔土器埋設遺構1〕（図88、図版30-2・37-1）

検出状況 2A-9f区において検出した遺構で、周溝墓6の東側周溝と周溝墓18の西側周溝の間、18の外周から1.1m西に位置している。両周溝墓の周溝を確認中に、口部を失った壺の体部が3層中に埋め込まれたような状態で出土し、断ち割り調査で検出面以下の断面を観察したところ、土坑状の掘り方の存在が確認できたことから土器埋設遺構と認識した。土坑検出面の標高は11.75mで、埋設土器の上端はそれよりも0.15mほど高いことから、本来の掘削面は少なくとも0.2m以上は上位であったものと推定される。

土器を埋設していた土坑は、土器の最大径をわずかに上回る径0.3mの円形を呈し、検出面から坑底までの深さは0.1mを測る。坑内の埋土は灰色シルトで、平坦となった坑底から5cmほど浮いた位置に底部を丸く打ち欠いた壺の体部をほぼ正位に置き、数点の土器片を底に埋ままで安定を図っていた。

本遺構の性格については、土器の埋設状況や位置などから土器棺墓の蓋然性が高いと考えられるが、棺蓋は認められず、土器内に詰まっていた黄灰色シルト層内からも内容物を明らかにする資料は得られなかった。

出土遺物と時期 埋設されていた土器は、体部中央よりや上位に最大径を有する壺と考えられ、打ち欠かれていた底部はおそらく小さな平底であったと推定される。器面の剥離が著しく調整不明な部分が多いが、内面上半にはヘラケズリ調整の痕跡が認められる。口部を欠失しているため時期を特定し

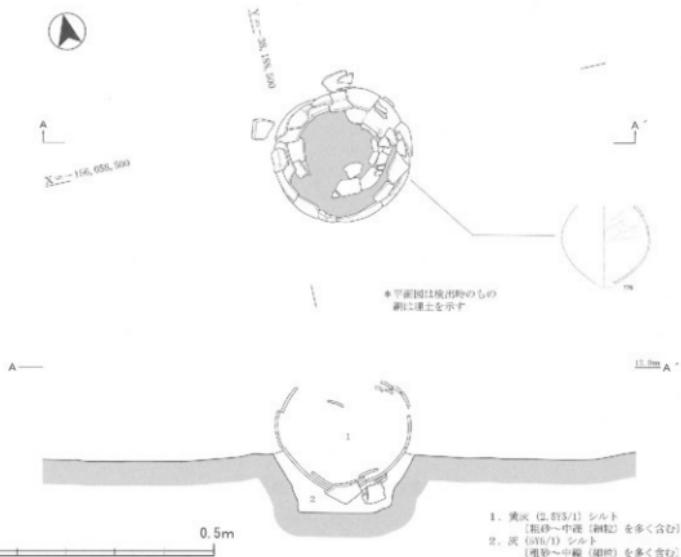


図88 土器埋設遺構1 平・断面図

づらいが、周溝墓18と同様に近畿道編年の様相4（新）と捉えておきたい。

[土器埋設遺構2]（図89、図版37-2）

検出状況 2A-7d区において検出した遺構で、周溝墓15の東側周溝と周溝墓20の北西コーナーの間、周溝墓15の外周から1.3m東に位置している。3層の上面で周溝墓間の遺構確認を実施している途中に、壺と考えられる土器が押し潰れたような状態で出土したため、精査を実施したところ、周囲とともに酸化が著しく把握しづらかったものの、灰色シルトを埋土とする土坑の存在が確認できたことから土器埋設遺構と認識した。土坑検出面の標高は11.6mで、土器の上端はそれよりも0.05mほど高いことから、本来の掘削面は少なくとも0.1m以上は上位であったものと推定される。

土器が埋設されていた土坑は、N14°E方向に長軸を置いたやや縱長の瓢形を呈し、南北方向の長さは0.95m、直交する東西方向は最長で0.45m、検出面から坑底までの深さは0.05mを測る。前述のように、埋設土器は坑底から数cm浮いた位置で潰れたような状態で検出され、底面付近には土器片が認められなかつたことから、縄紋時代の堀被葬のように、幾つかに分割した大形の土器片を用いて坑内に入れられた何らかの物質を覆っていたのではないかと推定される。その際、瓢の頂部に相当する位置より頸部片が出土したことから、土坑の位置によって土器の部位を置き分けていた可能性が考えられる。ただし、埋土である灰色シルト層には、炭化物や有機物粒が多く認められたものの、内容物の存否を含めその推定を検証し得る資料は得られなかった。

出土遺物と時期 前平により失われていた箇所もあって全形を復元するに至らなかったが、埋設には頸部に刻目突帯を巡らした平底の壺1個体が用いられていた。おそらく広口壺と考えられ、庄内式期の前半、近畿道編年の様相4に位置付けられる資料であろう。

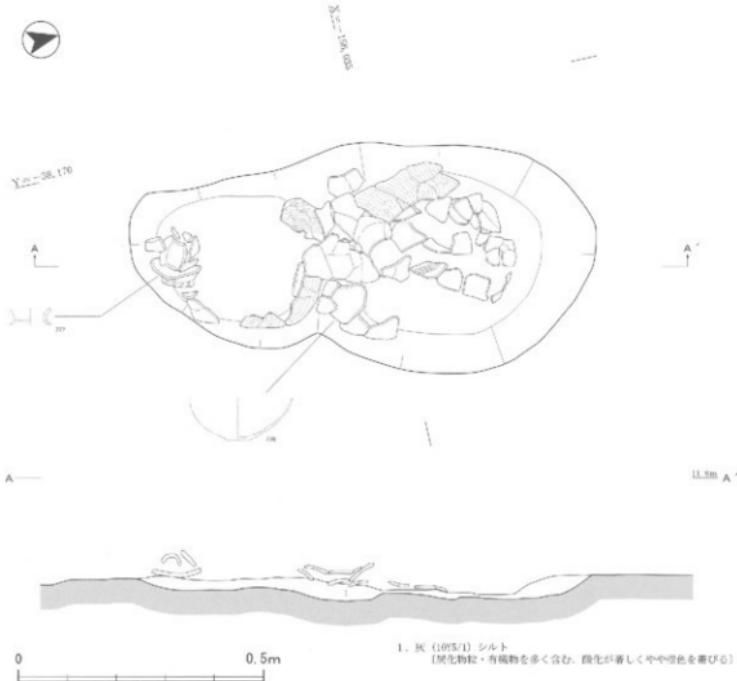


図89 土器埋設遺構2 平・断面図

〔土器埋設遺構3〕 (図90、図版37-3)

検出状況 2A-7h区において検出した遺構で、周溝墓31北西コーナーから1.7m北北西に位置している。周溝墓31西側周溝の輪郭およびその外側の遺構の存否について確認している途上に検出した。内面を上に向けて置かれていた壺体部の大形破片で、特に土坑の存在を確認できたわけではないが、出土状況や位置から土器埋設遺構の可能性が高いと判断した。土器下端の標高は11.9mで、土器の上端はそれよりも0.1m高いことから、土坑内に埋設されていたとすれば、本来の掘削面はかなり上位であったものと推定される。

出土遺物と時期 全周の3分の1程度を占める壺の体部下半である。内面にハケ調整が認められること以外情報に乏しく、時期については不明である。

〔溝22〕 (図91)

検出状況 2A-9j・10j区において検出した溝状遺構で、周溝墓9の1.7m南に位置する。周溝墓9の報告の際に述べたとおり、この付近は土壤改良などの影響もあって攪乱や削平が著しく、本遺構の両側でも本来の3層上面が遺存していた箇所はごくわずかであった。検出し得た長さは7.2m分で、幅0.8m、検出面から溝底までの深さは0.15mを測る。断面は浅い皿状を呈し、粗砂から細塵を多く含んだ灰色の砂質シルトで埋没していた。



図90 土器埋設構造3 平・断面図

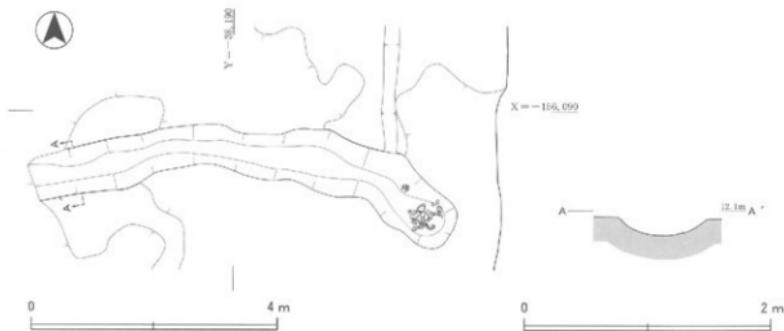


図91 溝22 平・断面図

出土遺物と時期 溝の東端部で破碎されたような土器細片による土器溜りが確認され、100点ほどの土器が出土した。図示可能な遺物はほとんど見られなかったが、粗いタキ成形を施した壺とともに、ヘラケズリによって丸底風に仕上げた壺や上げ底状の底部を有した鉢などが含まれており、近畿道編年（様相4（古））に位置付けられよう。

〔溝17〕（図92）

検出状況 02-1工区西端において検出した遺構で、次節で触れる3層中検出の流路1が埋没し切れずに残った痕跡と捉えられるものである。ただし、溝底の中央には、流路埋積物最上部の明オリーブ灰色もしくは灰白色の砂質シルトから細砂層を掘り込んだような幅2m前後の溝状の凹みが存在しており、人為的な加工を施していた可能性がある。検出長は53.5m、幅6.0～8.5mで、検出面から溝底までの深さは0.7～0.9mであった。最下部の溝状の凹みは黒褐色の粘土質シルト、それより上位は黄灰もしくは褐灰色を基調としたシルトから砂質シルトで埋没しており、水が流れているような形跡は確認できなかった。

出土遺物と時期 溝内からは、コンテナに換算して5箱分の土器・円筒埴輪片が出土した。明らかに混入品と考えられる細頸壺を除けば、埋土の下部からは弥生時代末から古墳時代前期の土器、上部からは古墳時代後期から奈良時代までの須恵器類や須恵質を含む円筒埴輪が出土しており、溝の埋没が完了するまでにはかなりの時間を要していたことが窺われる。

〔溝16〕（図92）

検出状況 03-1工区2トレンチの南西端から溝17の西岸に向かって北東方向に延びる溝で、溝17とは3A-4f区において70°の角度で接続していた。幅0.4～0.9m、検出面から溝底までの深さは0.15～0.35mの小規模な溝で、検出した延長26.5mの間では溝底の高さはほぼ同一であった。溝内の埋土は、中・下層の比較的暗色度が弱い黄灰色シルトと上層の黒褐色極細砂の3層に分かれ、下層には3層である灰白色シルトのブロックが多く含まれていた。

出土遺物と時期 03-1工区2トレンチにおいては、遺構の大部分が古墳1の崩溝底で確認されたことから、古墳1に先行して存在していたことは確実であるが、溝内からは40点の土器細片が出土したのみであり、詳細な時期は不明である。

〔溝33〕（図93）

検出状況 2A-2f・2g区において検出した遺構で、東北東～西北西方向に7.5m以上にわたって延びていたことから溝と認識した。東端は第1面土坑21によって失われているが、北側にはほとんど接するような状態で土坑57が存在していた。検出長7.6m、幅0.8～1.3m、検出面から溝底までの深さ0.2m前後をそれぞれ測り、浅い椀形を呈した溝内は灰色砂質シルトによって埋没していた。

出土遺物と時期 溝内、特に西側3分の2に当たる範囲からは、溝底より0.1～0.15mほど浮いた位置で比較的多くの土器が出土し、出土総量はコンテナ3箱ほどとなった。壺が主体であるが、肩部に刻目突帯を巡らし、上下に拡張した口縁端部を櫛描直線紋と棒状浮紋で飾った広口壺や大型の鉢なども含まれており、近畿道編年（様相3（新））に位置付けられると考えられる。

〔溝38〕（図92）

検出状況 古墳3の南側の括れ部に相当する箇所で検出した遺構で、2B-3a区に位置する。北・南端が第1面の土坑27・29によって失われていたため、全長は明らかにし得ないが、検出長1.15m、幅0.5～0.65m、検出面から溝底までの深さ0.1～0.15mをそれぞれ測る。埋土は黒褐色極細砂から細砂

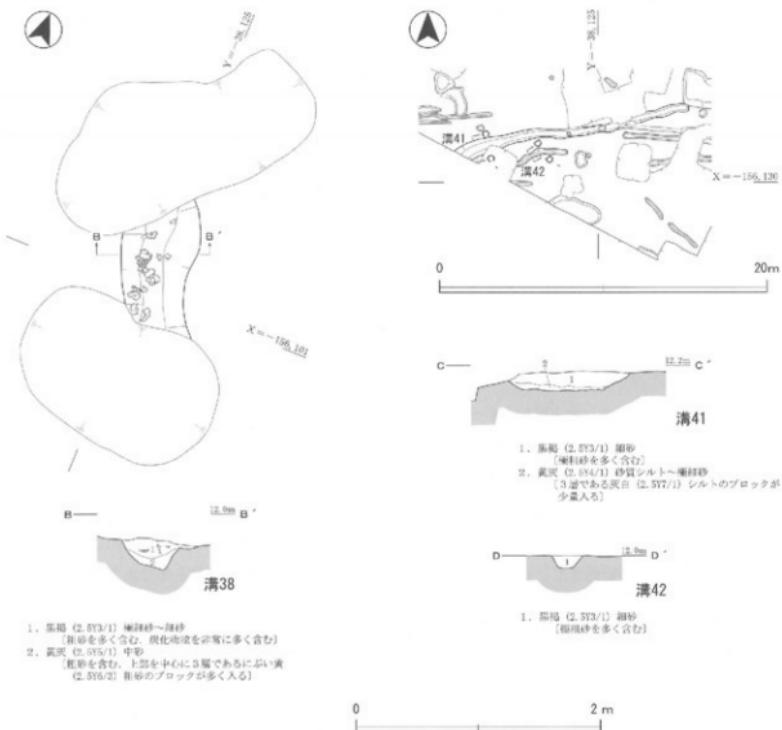
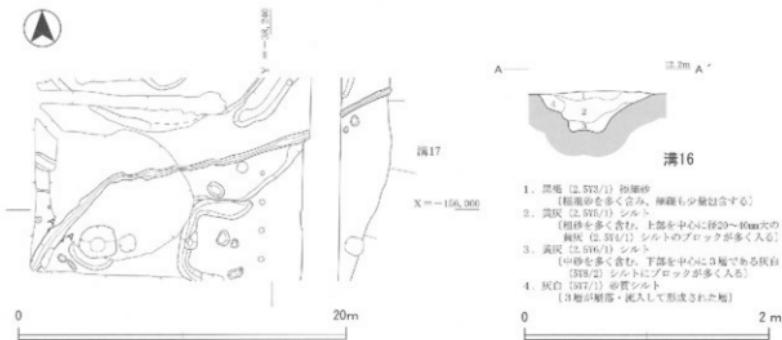


図92 溝16・38・41・42 平・断面図

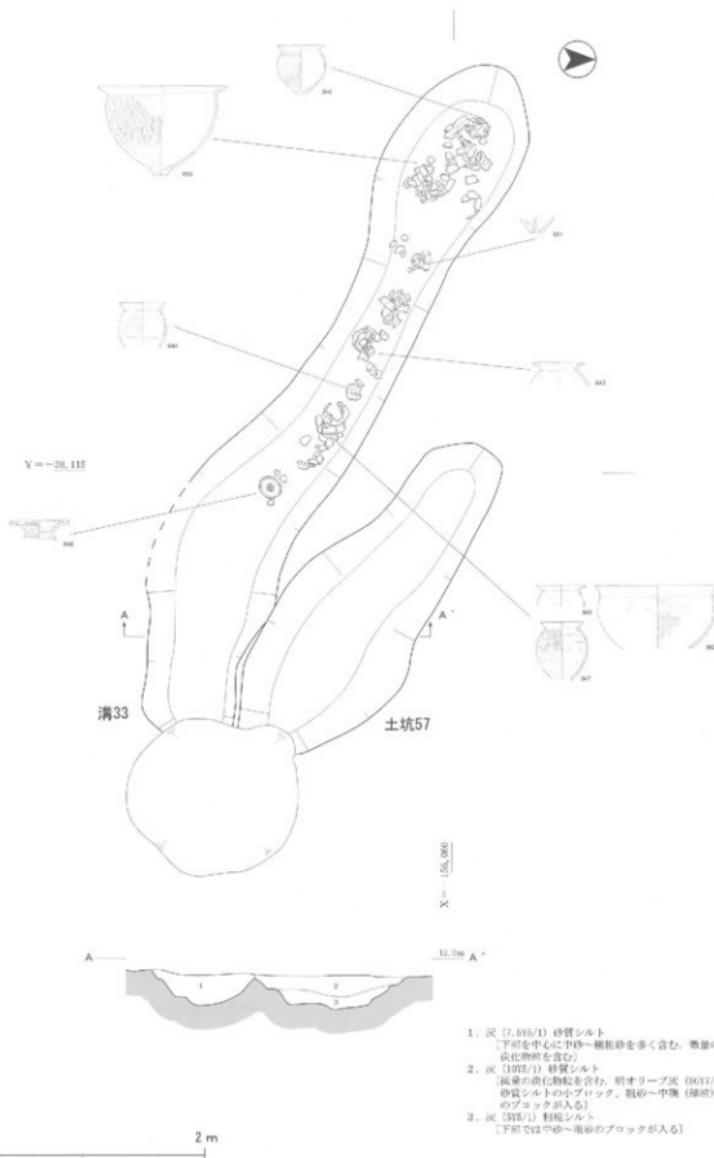


図93 溝33 土坑57 平・断面図

と黄灰色中砂の上下2層に分かれ、上層には炭化物粒が非常に多く含まれていた。

出土遺物と時期 溝底から0.1~0.2mほど浮いた埋土上層から、コンテナにして半箱程度の土器が出土した。図示し得た土器には小型壺・鉢があり、近畿道縦年の様相3(新)から4(古)に位置付けられると考えられる。

〔溝39〕(図94)

検出状況 2B-3b・3c区において検出した遺構である。南北に延びるバナナ形を呈し、北端は研究会調査区の側溝によって失われているものの、以北には続いていないことから、この側溝内で収束

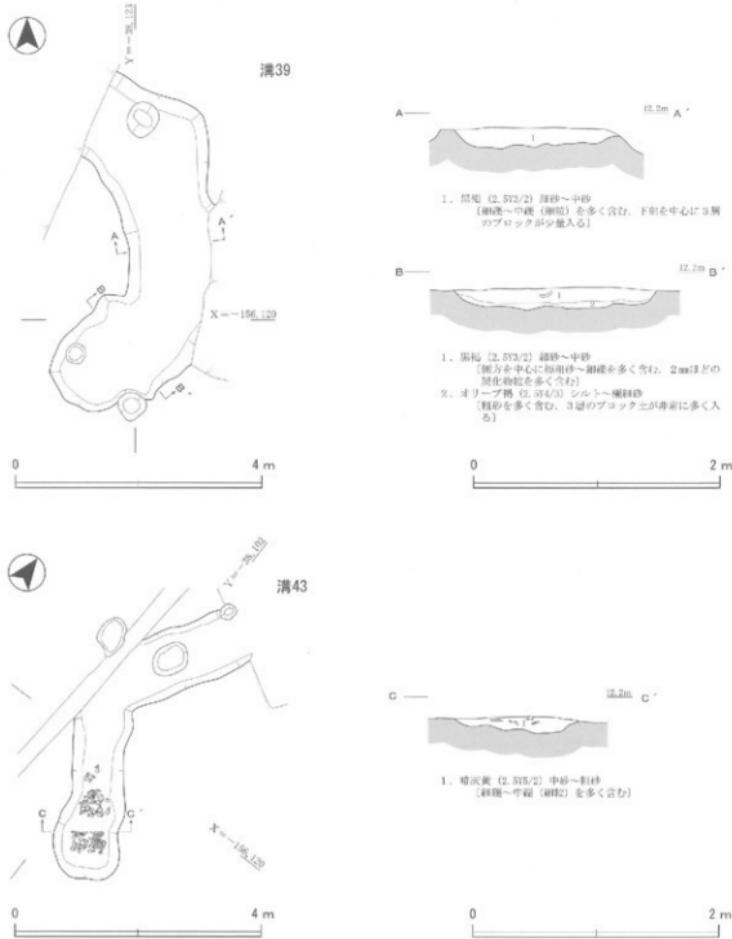


図94 溝39・43 平・断面図

していたものと考えられる。検出長は南北方向の直線距離で5.5m、幅は1.35~1.95m、検出面からの深さは0.1~0.2mを測り、浅い皿状を呈した幅広の溝内は、黒褐色細砂から中砂とオリーブ褐色シルトから極細砂の上下2層の埋土によって埋まっていた。

出土遺物と時期 深度が浅かったにも関わらず、溝内からはコンテナ1箱半ほどの比較的多くの土器が出土した。図示し得た遺物は壺と鉢の4点のみであったため時期を特定しがたいが、近畿道編年様相3（新）から4（古）に位置付けておきたい。

〔溝41・42〕（図92）

検出状況 2B-3c・4c区において検出した東北東-西南西方向に並行して延びる溝で、いずれの溝も西端については調査地外となってしまったため確認できなかった。

各溝の規模は、41が検出長14.5m、幅0.2~0.5m、検出面からの深さ0.05~0.2m、42が検出長3.4m、幅0.2~0.5m、検出面からの深さ0.05~0.1mで、いずれもも極粗砂を多く含んだ黒褐色細砂で埋没していたが、41ではさらにその下に3層の灰白色シルトブロックが少量混在した黄灰色砂質シルトから極細砂が堆積していた。

出土遺物と時期 溝41からは60点強、42からは15点ほどの土器が出土したが、いずれも細片であり、詳細な時期は不明である。

〔溝43〕（図94）

検出状況 03-1工区1トレンチ東端で検出した「く」字状の溝で、2B-1b・1c区に位置する。北端が攪乱によって失われていたために全体の規模は不明であるが、検出長5.4m、幅0.85~1.05m、検出面から溝底までの深さ0.1~0.2mをそれぞれ測る。断面形は浅い皿状で、細礫から細粒の中疊を多く含んだ暗灰黄色の中砂から粗砂で埋没していた。

出土遺物と時期 南半の埋土上部を中心にコンテナ2箱分の土器が出土した。細片が大半を占めるものの、壺・小型鉢といった器形全体を窺うことができる残存率の高い個体とともに、小型の壺や高杯も図示し得た。近畿道編年様相3（新）に相当する土器群と考えられる。

〔溝40〕（図95~101、図版39）

検出状況 03-1工区1トレンチ南端の2B-6b区から02-2工区1トレンチ東端の1A-10f区にかけて検出した溝で、調査地の南東部を南西から北東方向へ向かって蛇行しながら走行していた。前述したように周溝裏34と重複して切られているが、明らかに本遺構より先行する遺構は見当たらなかった。

北・南端がそれぞれ調査地外へ続いているために本来の規模は不明であるが、今回検出した総延長は94.5mで、土地の改変の影響がより少ない02-2工区内では、幅0.7~1.7m、検出面から溝底までの深さ0.2~0.5mの規模を有していた。深度については南側ほど深くなる傾向が看取されるが、検出面の標高の差異が反映された結果であり、溝底の高さにはほとんど大きな変化は認められない。灰もしくは灰オリーブ色の粗粒（砂質）シルトを埋土としていたが、土壤化の影響を受けていた3層最上部との識別が困難な箇所も多く存在し、サブトレンチによる断ち割りを併用しながら遺構確認を実施した。

出土遺物と時期 溝内からは夥しい量の土器が出土し、出土総量はコンテナに換算して50箱弱、今回図示して掲載した土器は200個体を優に超えている。残存率が比較的高く、器形全体を窺うことが可能な土器が多いのが特徴であるが、溝底より0.1mほど浮いた位置で出土したものから、検出面と同レベルあるいはそれより上位で出土したものまで、垂直的にはかなりの範が存在している。

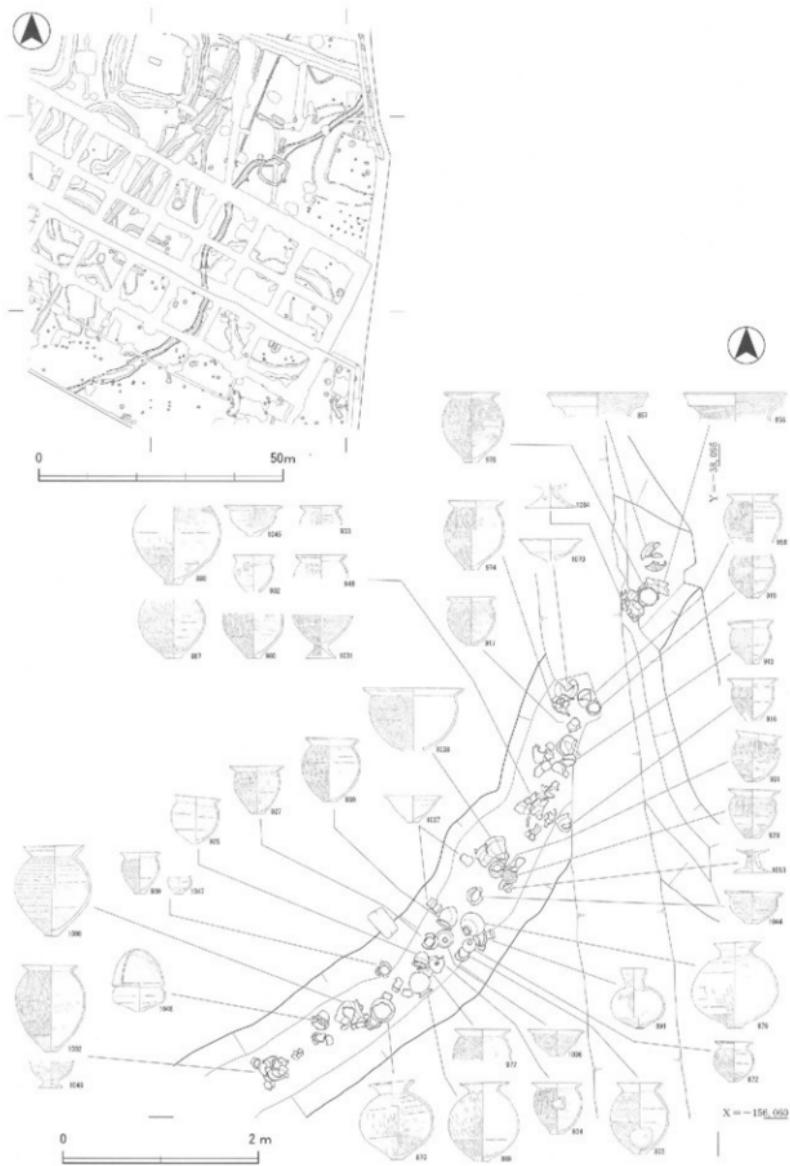
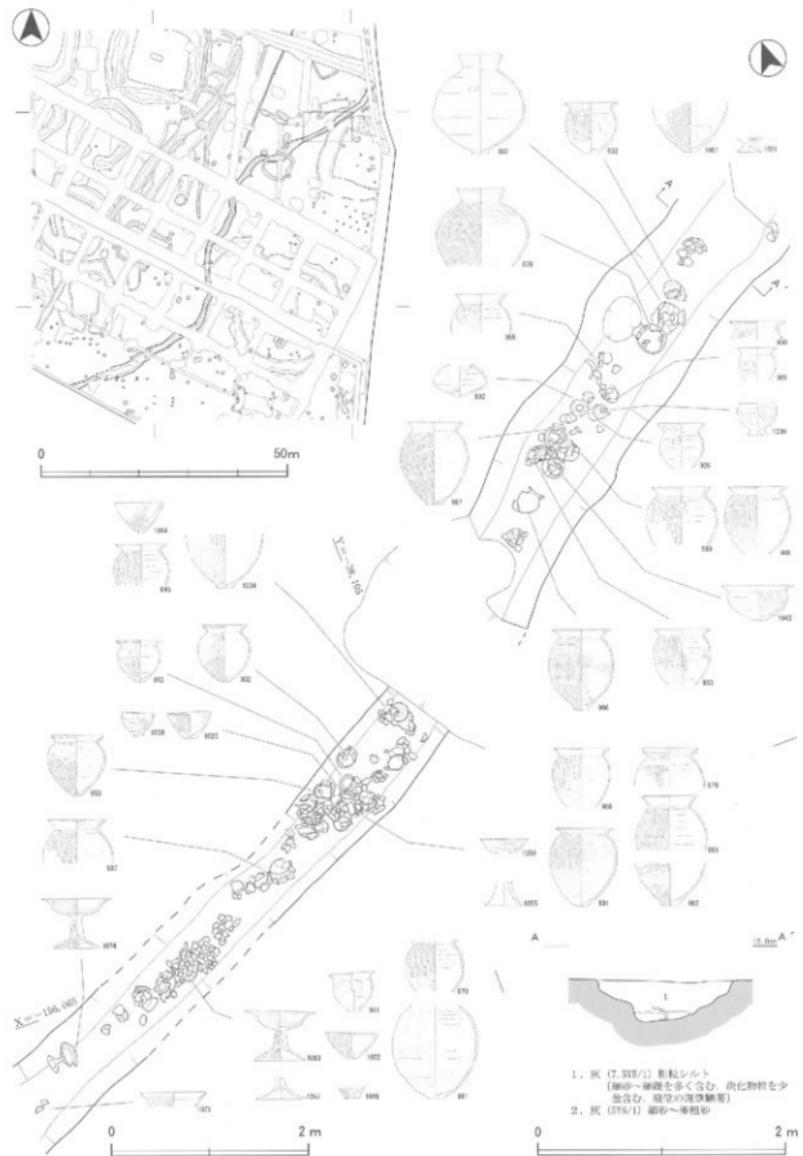


図95 溝40 遺物出土状況図（1）



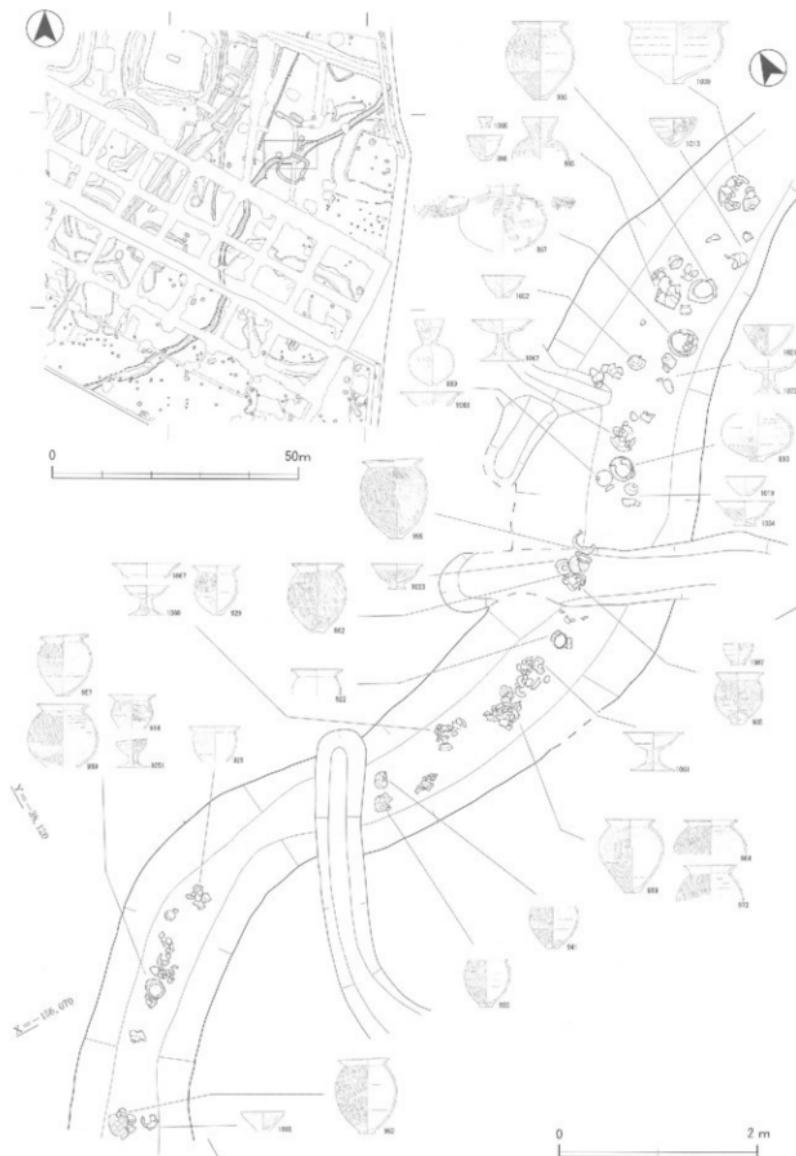


図97 溝40 遺物出土状況図（3）

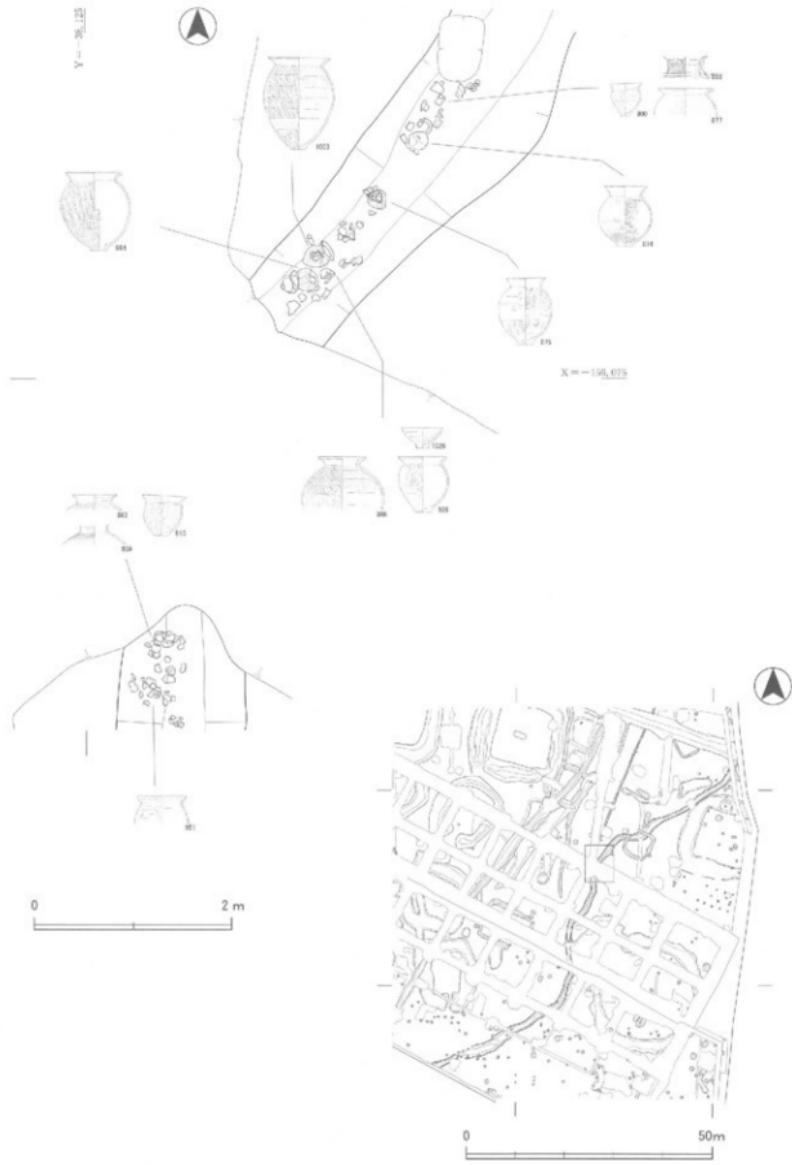


図98 满40 遺物出土状況図(4)

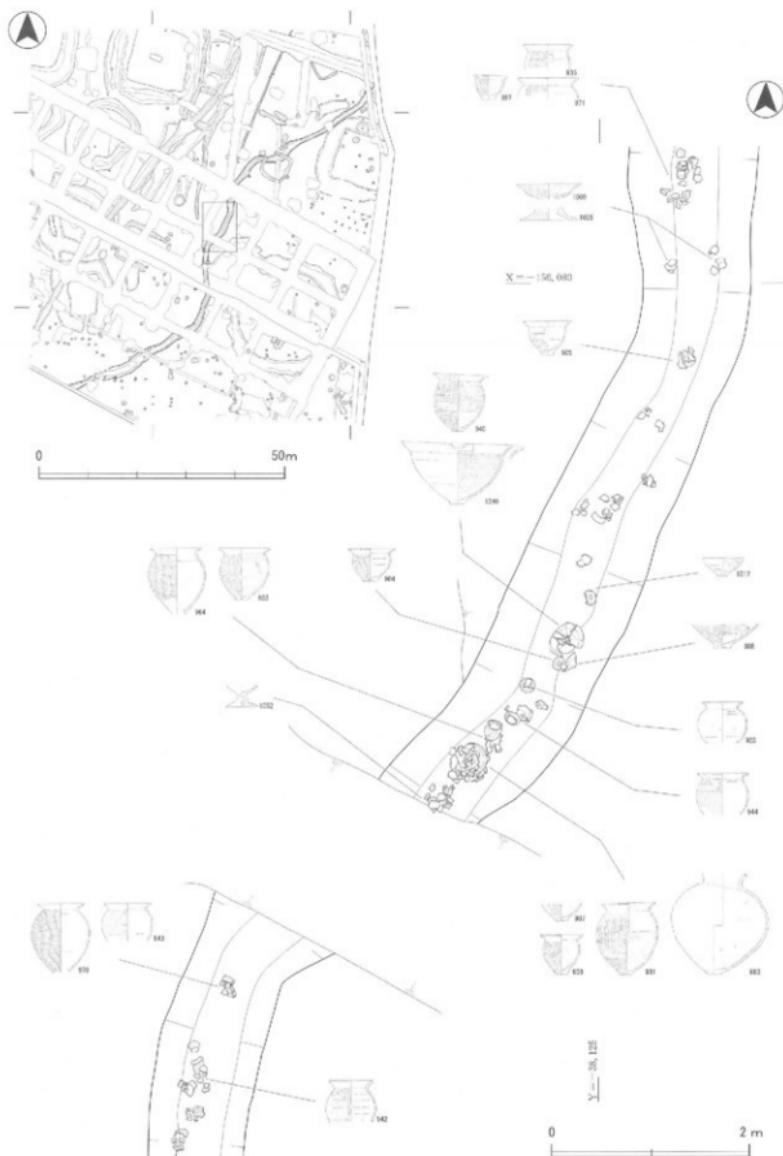


図99 溝40 遺物出土状況図（5）

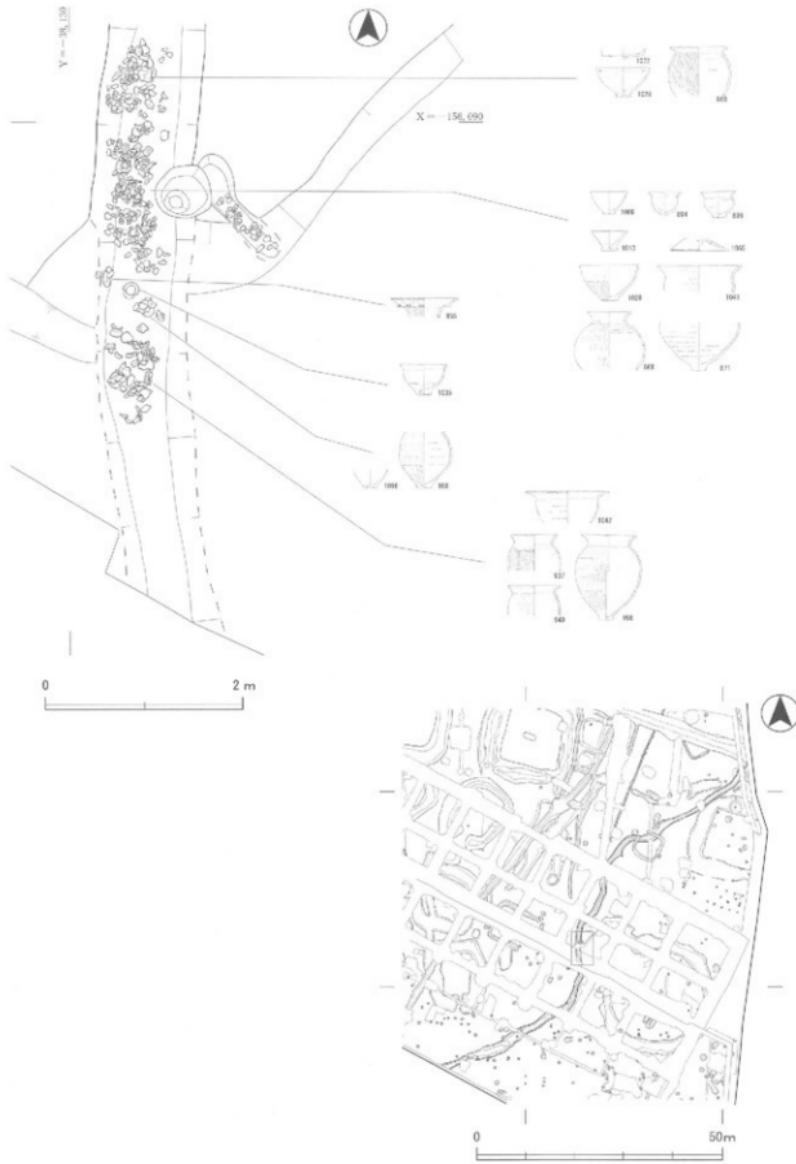


図100 满40 遺物出土状況図 (6)

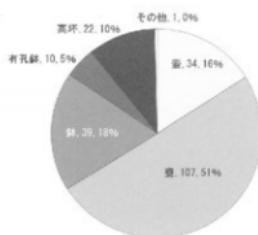
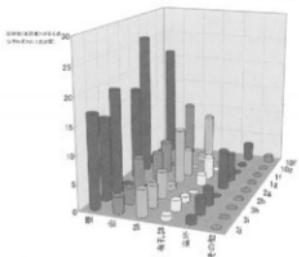


図101 溝40 遺物分布図

器種としては、器台を除くほぼすべてが備っており、全体および地区別の器種ごとの出土傾向は図101に示したとおりである。壺が50%前後と圧倒的に多く、有孔鉢を含む鉢類がこれに次ぎ、壺・高杯と続く。主体となる壺は、体部外面に粗いタキ成形、内面にハケもしくはナデ調整を施したものであるが、わずか1点ながら内面をヘラケズリ調整で仕上げたものも存在している。高杯には有稜・楕円のほかに有段高杯も認められ、さらに山城地域で丹後・丹波系〔吹田2006〕とされる横方向のヘラミガキ調整が施された椀状の杯部に二重口縁が付されたものも含まれている。また、全体の中で2割以上を占める鉢類は大きさ・形とも多彩で、有孔鉢の中には尖底に近いものも見られる。1点のみ出土した手焼形土器は、口縁部に受部、鉢部に突帯を有さないものである。

以上を通観すると、本遺構出土の土器群は近畿道編年の様相3（古）から4（古）に位置付けられ、出土状況を反映した一定の時期幅を有している。おそらくは周溝墓の築造が継続して行われている間、溝としての本来の役割を終えていたこの遺構の中に、葬送儀礼などに用いた土器を入れていたのではないかと推測される。体部に焼成後の穿孔を有する土器が5点ほど存在しているのも、その証左の1つと考えられる。

〔土坑39〕（図102）

検出状況 古墳1の墳丘上に存在した後述の落込み1内で検出した土坑で、3A-5e・6e区に位置する。北端が擾乱によって失われていたために本來の規模は不明であるが、検出長は南北方向で2.35m、東西方向で2.1m弱、検出面から坑底までの深さは0.05~0.15mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、3層のブロックを多く含んだ淡い黄灰色から灰白色の極細砂から細砂によって埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは遺物は出土しておらず、時期については不明である。

〔土坑40〕（図102）

検出状況 土坑39と同様に落込み1内で検出した土坑で、39から南東3mの3A-5e・5f区に位置している。北北東-南南西方向に溝状に及び、南端が擾乱によって失われていたために本來の規模は不明であるが、検出長は2.25m、幅0.45~0.6m、検出面から坑底までの深さ0.1~0.15mをそれぞれ測る。断面形は浅い皿状を呈し、下部に3層の小ブロックを多く含んだ極粗砂混じりの灰黄色砂質シルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 10点に満たない土器細片が出土したのみであり、時期については不明である。

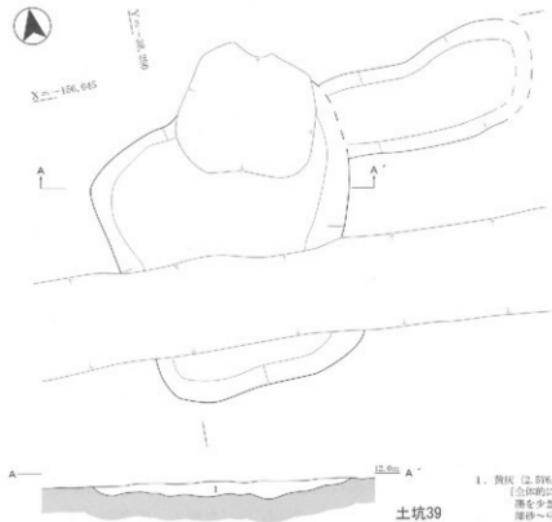
〔土坑41〕（図102）

検出状況 古墳1南側周溝の溝底で確認した遺構で、3A-5f区に位置する。北西-南東方向に長い楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.75m、検出面から坑底までの深さ0.1~0.2mをそれぞれ測る。断面形は中央部が少し凹んだ皿状で、灰黄色の中砂から粗砂とそれより色調が暗い黄灰色の細砂から中砂からなる上下2層の埋土によって埋没していた。

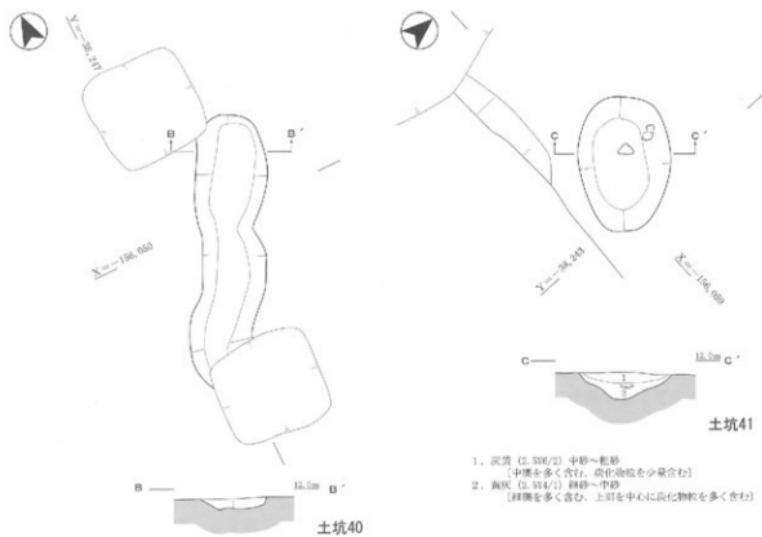
出土遺物と時期 粗いタキ成形を施した壺の体部片が5点出土したのみであり、時期については不明である。

〔土坑42〕（図103）

検出状況 古墳2の墳丘上で検出した遺構で、3A-5g区に位置する。東北東-西南西方向に長い不整椭円形を呈し、東端にはピット22が重複していた。規模は長径1m弱、短径0.5m、検出面から坑底までの深さ0.1~0.15mをそれぞれ測る。断面形はほぼ逆台形状で、上部に黒褐色極細砂のブロックを多く含んだ黄灰色の粗砂から極粗砂で埋まっていた。



1. 黄灰 (2. 5W6/1) ~灰白 (2. 5Y7/1) 粗粒砂~細砂
〔陶器に礫を多く含む。粗粒化した上部で石器
塊を少く含む。下部を中心に5層である灰白 (2. 5Y7/1)
層中に砂のブロックが多く入る〕



1. 泥炭 (2. 5W6/2) 中砂~粗砂
〔中砂を多く含む。炭化物塊を少く含む〕
2. 黄灰 (2. 5Y4/1) 粗砂~中砂
〔石器を多く含む。上部を中心に炭化物塊を多く含む〕

1. 泥炭 (2. 5W6/2) の質シルト
〔礫塊を多く含む。下部を中心に3層である灰白 (2. 5Y7/1) シルトの
小ブロックが多く入る〕

0 2 m

図102 土坑39~41 平・断面図

出土遺物と時期 土坑内からは中央がドーナツ状に窪んだ平底の底部と体部片が計10点出土したのみであり、時期については不明である。

〔土坑43〕（図49）

検出状況 八尾南5号墳の墳丘上東端で確認した溝状の土坑で、2A-10f区に位置する。南端が調査会調査区に続いていることから全体の形状・規模は明らかにし得ないが、墳丘の東辺と長軸を合わせて掘削されており、南北方向の検出長2.75m、幅0.7~0.85m、検出面から坑底までの深さ0.1mをそれぞれ測る。埋土は黄灰色極細砂の单層であった。

出土遺物と時期 土坑内からは20点ほどの土器が出土したが、図示し得たのは中央がドーナツ状に窪んだ平底の壺底部のみであり、詳細な時期については不明である。

〔土坑44〕（図53）

検出状況 周溝墓10の墳丘南端で確認した土坑で、2A-10d区に位置する。隅丸の台形状を呈し、南北長0.95m、下底に当たる部分の東西長1.05m、検出面から坑底までの深さ0.2mをそれぞれ測る。断面形は皿状で、灰色シルトと極粗砂から網粒の中疊を多く含んだ灰色極細砂の上下2層の埋土によって埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは40点ほどの土器が出土した。図に示した上下に小さく拡張した端部に飾り波状紋と円形浮紋を施した広口壺の口縁部のはか、突帯を巡らしその下に櫛状具による刺突を加えた肩部の破片も出土しており、近畿道編年の様相3（新）に位置付けられよう。

〔土坑45〕（図53）

検出状況 周溝墓13の北側周溝内で確認した土坑で、2A-9d区に位置する。南北方向にわずかに長いやや角張った不整円形を呈し、長径0.9m、短径0.85m、検出面から坑底までの深さ0.3mをそれぞれ測る。浅い椀状に掘り込まれ、埋土の下部は灰色を基調とするシルトを主体としていたが、上半は黄灰色シルト質極細砂と灰白色極細砂のブロック混合土によって埋められていた。

出土遺物と時期 土坑内からは3点の土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑46〕（図60・61）

検出状況 周溝墓17の北西コーナーの周溝内で確認した土坑で、2A-9e区に位置する。北側が地中梁の攪乱によって失われていたため南半を検出し得たのみであり、全体の形状・規模は不明である。検出面から坑底までの深さは0.2m弱で、下層はオリーブ灰色、中・上層は黒褐色のシルトで埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは外面に粗いタキ成形を施した壺底部や高坏脚部を含む25点ほどの土器が出土したが、破片が大半を占めることから、詳細な時期については不明である。

〔土坑47〕（図51、図版40-1）

検出状況 八尾南6号墳の墳丘上である2A-9h区において検出した造情である。同墳墓と周溝墓7との間を貫通する地中梁の攪乱壁面を清掃していたところ、底面よりやや浮いた位置よりまとまって土器が出土したことから、壁面上部の精査を行い土坑の存在を確認した。以上のような経緯から本来の形状・規模は明らかにし得ないが、おそらくは南北に長い楕円形の土坑であったと推定され、検出長は長径0.7m、短径0.5m、墳丘上から坑底までの深さは約0.4mを測る。

出土遺物と時期 坑底付近から3個体分の壺のほか、高坏や筒状の器台が出土した。近畿道編年の様

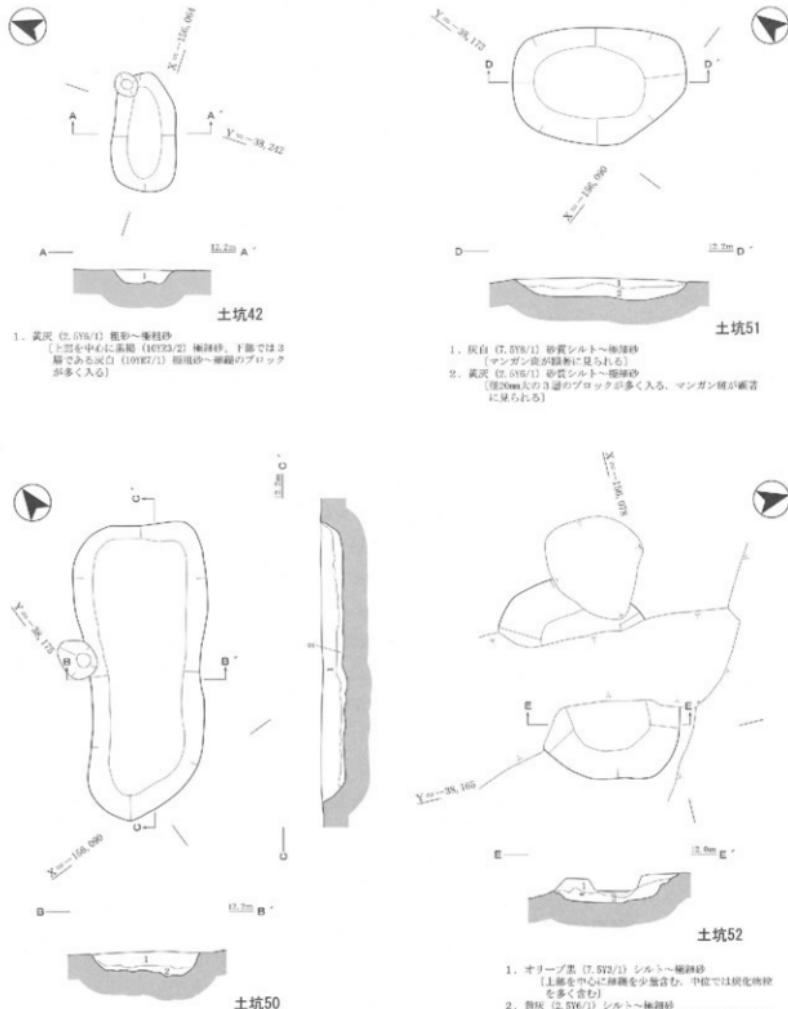
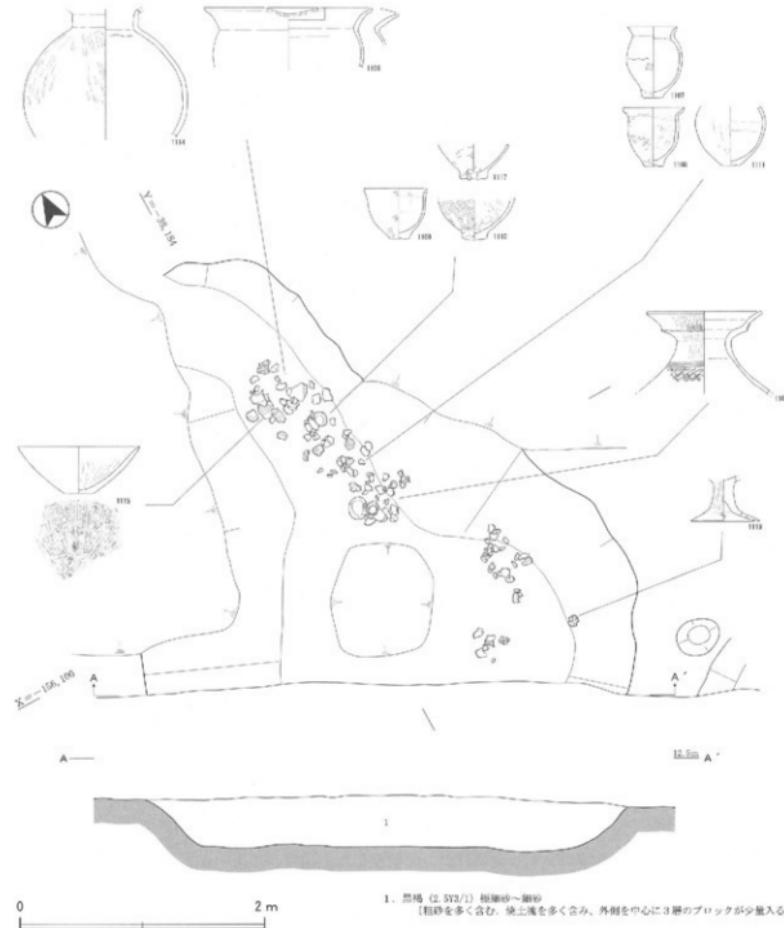


図103 土坑42・50～52 平・断面図

相3（新）に相当する土器群であろう。

〔土坑49〕（図104、図版40-2）

検出状況 02-1工区の南東隅から03-1工区1トレンチの南西隅にかけて検出した遺構で、2A-9j・2B-9a区に位置する。工区境と重なり、南側が調査地外へと続いていることから、全体の形状・規模は明らかにし得ないが、南北方向の検出長3.95m、東西長4.1mを測る大形の土坑で、検出面から坑底までの深さは0.2~0.4mであった。壁はほぼ平坦な底面から45°前後の角度で立ち上がり、土坑内は少量の3層のブロックとともに焼土塊を多く含んだ黒褐色の極細砂から細砂で埋まっていた。



出土遺物と時期 土坑内からは、坑底から0.2～0.3mほど浮いた位置でコンテナ4箱分に及ぶ多量の土器が出土した。図示し得た土器の中では竈類が比較的目立ち、すばまた頭部から体部への移行が緩やかで、口縁部を円形浮紋と刻目、肩部を櫛状具による直線紋・列点紋・波状紋で飾った二重口縁壺も出土している。近畿道編年の様相3（新）に位置付けられる土器群と捉えておきたい。

〔土坑50〕（図103）

検出状況 周溝墓25の墳丘上において検出した土坑で、2A-8i区に位置する。北東-南西方向に長い下向きの楕円形を呈し、南北方向の長さ2.4m、東西方向の長さ0.9～1.1m、検出面から坑底までの深さ0.15～0.2mをそれぞれ測る。皿状に掘り込まれた坑底には凹凸が目立ち、灰黄色砂質シルトと黄灰色シルトから極細砂からなる上下2層の埋土によって埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは60点ほどの土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑51〕（図103）

検出状況 土坑50と同様に周溝墓25の墳丘上において検出した土坑で、土坑50の東2mに位置する。北西-南東方向に長い不整楕円形を呈し、長径1.4m、短径0.95m、検出面から坑底までの深さ0.15m前後を測る。断面形は浅い皿状で、灰白色の砂質シルトから極細砂と3層のブロックを多く含んだ黄灰色の砂質シルトから極細砂からなる上下2層の埋土によって埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは80点ほどの土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑52〕（図103）

検出状況 2A-7h区において検出した土坑である。ほぼ中央を第1面の溝11が貫通し、西端にも擾乱が重なっていたために遺存状況は不良であるが、平面形は東北東-西南西方向に長い不整楕円形を呈し、長径1.8m強、短径推定1.2m、検出面から坑底までの深さ0.15m前後を測る。埋土は上下2層に分かれ、下層の色調の淡い黄灰色シルトから極細砂層内には3層のブロックが多く混在していた。

出土遺物と時期 土坑内からは3点の土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑55〕（図105）

検出状況 周溝墓32西側周溝の西0.3mで検出した土坑で、2A-7h区において検出した土坑である。ほぼ中央を第1面の溝11が貫通し、西端にも擾乱が重なっていたために遺存状況は不良であるが、平面形は東北東-西南西方向に長い不整楕円形を呈し、長径1.8m強、短径推定1.2m、検出面から坑底までの深さ0.15m前後を測る。北壁側に1段平坦面を有するものの、断面形はおおむね箱状で、灰黄色砂質シルトと黄灰色の細砂から中砂からなる上下2層の埋土によって埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは3点の土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑56〕（図105）

検出状況 周溝墓33の北東コーナー北側において検出した土坑で、2A-5i・6i区に位置する。南北方向に長い隅丸台形状を呈し、南北長1.9m弱、東西長1.45m、検出面から坑底までの深さ0.1m強を測る。断面形はやはり浅い皿状で、3層の小ブロックを多く含んだ灰黄色極細砂から細砂によって埋まっていた。

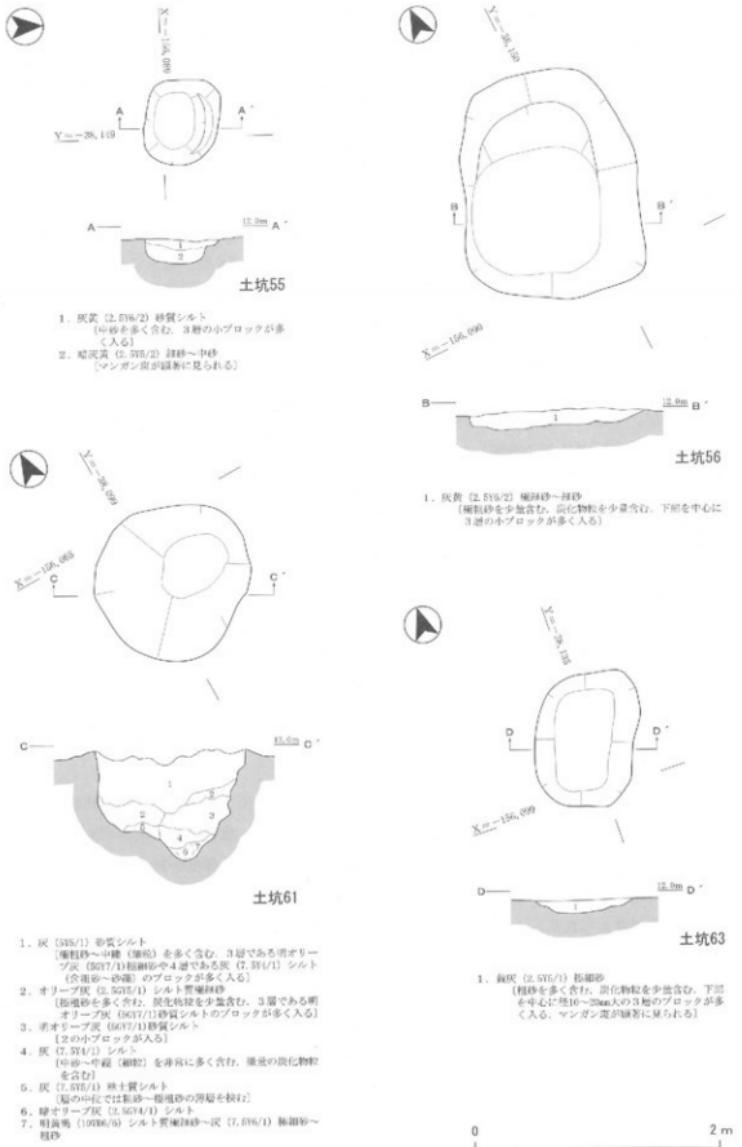


図105 土坑55・56・61・63 平・断面図

出土遺物と時期 土坑内からは30点を超える土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑57〕（図93）

検出状況 2 A - 2 g 区において、溝33の北側で確認した土坑である。溝33と同様に東端が第1面の土坑21によって失われているが、北西 - 南東方向に長い船底形を呈し、検出長 2.8 m、最大幅 1.2 m、検出面から坑底までの深さ 0.15 ~ 0.25 m を測る。断面形は皿状で、3 層である明オーリープ灰色砂質シルトの小ブロックを多く含んだ灰色砂質シルトとそれよりも若干細粒である灰色粗粒シルトの上下 2 層の埋土によって埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは 120 点を超える土器が出土したが、大半が細片であったため、壺と壺底部の各 1 点を図示し得たのみである。壺は平底の造りが甘くなっていることから、近畿道編年の様相 4（古）に位置付けられる可能性がある。

〔土坑61〕（図105）

検出状況 堀溝墓35の墳丘上で確認した土坑で、1 A - 10 g 区に位置する。平面形は東西方向にやや長い長径 1.3 m、短径 1.25 m の歪な円形を呈し、東側に片寄った坑底面最深部までの深さは検出面から 0.85 m を測る。埋土は中ほどに堆積した明オーリープ灰色砂質シルトを境に大きく分かれ、下部は暗色の粘土質シルトから砂質シルト、上部は 3 層や 4 層のブロックが多量に混在した灰もしくはオーリープ灰色の砂質シルトからシルト質極細砂で埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは 30 点を超える土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑62〕（図106、図版40-3）

検出状況 2 A - 4 h 区において検出した土坑で、北側には溝29から分岐して南に延びる溝30が接続していた。土坑自体は、北北東 - 南南西方向に長いやや角張った楕円形を呈し、長径 2.2 m、短径 1.9 m、検出面から坑底までの深さ 0.4 m をそれぞれ測る。断面皿状の土坑内は灰色のシルト質極細砂で埋没していたが、壺土の上面付近からは埋没最終段階の凹みに廃棄したかのように夥しい量の土器片が出土した。

出土遺物と時期 土坑内から出土した土器は、コンテナに換算して 7 箱分に及んだ。破碎されたような細片が主体であったが、接合可能な個体も多く、広口壺や直口壺、粗いタタキ成形を施した壺や高壺・外反口縁鉢・有孔鉢など 30 点の土器を図示することができた。壺には体部が長めで張りの弱いものが含まれ、鉢も体部の丸みが弱いことから、近畿道編年の様相 3（新）の中でも古く位置付けられる土器群である可能性が考えられる。

〔土坑63〕（図105）

検出状況 2 A - 4 j 区において検出した土坑である。北北東 - 南南西方向に長い不整隅丸長方形を呈し、長辺 1.1 m、短辺 0.8 m、検出面から坑底までの深さ 0.1 m を測る。断面形は浅い皿状で、3 層のブロックを多く含んだ粗砂混じりの黄灰色極細砂で埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは高壺の脚部片が 1 点出土したのみであり、詳細な時期は不明である。

〔土坑66〕（図107）

検出状況 2 B - 3 a 区において地中槧の擾乱底面で確認した土坑で、位置的には古墳 3 の南側堀溝と重なっている。おにぎり形に近い不整形を呈し、南北長 0.75 m、東西長 0.7 m、検出面から坑底まで

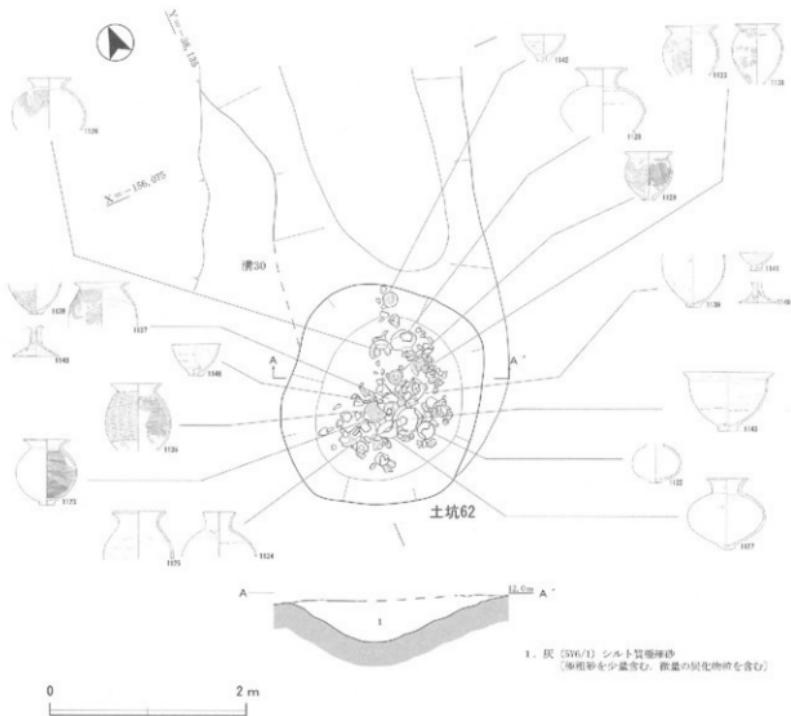


図106 土坑62 平・断面図

の深さ 0.5 m を測る。底面の中央が凹んでいるものの、断面形はほぼ逆台形状で、黄灰色粘土質シルトや浅黄色のシルトから細砂のブロックを多く含んだ暗灰黄色と、灰色のシルトから中砂によって埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは土器の細片が 1 点出土したのみであり、時期については不明である。

[土坑67] (図 107)

検出状況 2 B - 4 b 区において検出した土坑である。東端および南西端が搅乱によって失われていたため、本来の形状・規模は明らかにしがたいが、おそらくは東西方向に長い不整椭円形を呈していたものと推定され、東西方向の検出長は 1.5 m、短径に当たる南北方向は 1.0 m、検出面から坑底までの深さは 0.15~0.2 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、土坑内は黄灰色の細砂から中砂で埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは 20 点足らずの土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

[土坑69] (図 107)

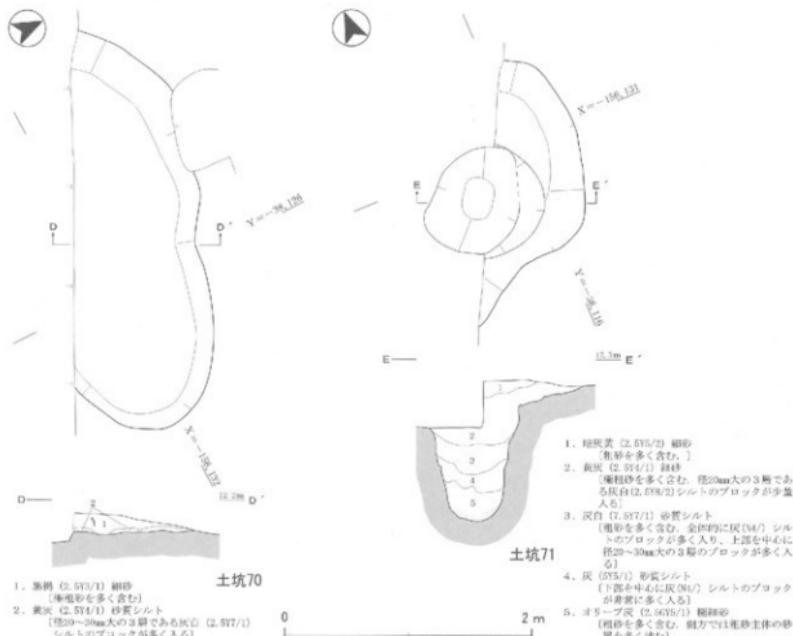
検出状況 2 B - 5 b 区において検出した土坑である。北東 - 南西方向にやや長い楕円形を呈し、長径 0.8 m、短径 0.7 m、検出面から坑底までの深さ 0.3 m を測る。浅く椀状に掘り込まれた土坑内は、



1. 砂質土 (2.5Y5/1) シルト～中砂
〔黄土 (2.5Y1/1) 粘土質シルト・浅黄 (2.5Y 7/3) シルト～細砂のブロックが多く入る。
泥炭類似〕
2. 黄土 (2.5Y5/1) シルト～中砂
〔上部側面は薄い (2.5Y1/1) 粘土質シルト・
浅黄 (2.5Y7/3) シルト～細砂のブロックが
多く入る。〕

1. 黄泥 (2.5Y6/1) 細砂～中砂
〔粗砂を多く含む。底10mmの大底泥揚
(10Y4/2) シルトと3層のブロック
が多く入る。〕
2. 黄泥 (2.5Y6/2) 粗砂
〔粗砂を多く含む。全体的に僅10mm大
の灰質層 (10Y4/2) ブロックが多
く入り、下部には3層のブロックが少
量入る。〕

1. 黄白 (2.5Y7/1) 粗砂～鉢砂
〔粗砂を多く含む。底10mmの大底泥揚
(10Y4/2) シルトと3層のブロック
が多く入る。〕
2. 黄泥 (2.5Y6/2) 粗砂
〔粗砂を多く含む。全体的に僅10mm大
の灰質層 (10Y4/2) ブロックが多
く入り、下部には3層のブロックが少
量入る。〕



1. 粘土 (2.5Y5/1) 粗砂
〔粗砂を多く含む。〕
2. 黄土 (2.5Y7/1) 粘土シルト
〔底10～20mmの大底泥揚である灰白 (2.5Y7/1)
シルトのブロックが多く入る。〕

1. 砂質土 (2.5Y5/2) 粗砂
〔粗砂を多く含む。〕
2. 黄泥 (2.5Y6/1) 粗砂
〔粗砂を多く含む。底20mmの大3層であ
る灰白 (2.5Y6/2) シルトのブロックが少
量入り。〕
3. 泥白 (2.5Y7/1) 必要質シルト
〔粗砂を多く含む。全体的に灰 (10Y4/1)
シルトのブロックが多く入り、上部を中心に
径20～30mmの大3層のブロックが少く入
る。〕
4. 泥 (2.5Y7/1) 粗砂シルト
〔下部を中心には灰 (10Y4/1) シルトのブロック
が非常に多く入り。〕
5. オリーブ灰 (2.5Y6/1) 極粗砂
〔粗砂を多く含む。側面では粗砂主体の砂
層を多く持つ。〕

図107 土坑66・67・69～71 平・断面図

灰黄褐色シルトと3層のブロックを多く含んだ灰白色の極細砂から細砂と暗灰黄色極細砂の上下2層の埋土によって埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑内からは遺物は出土しておらず、時期については不明である。

〔土坑70〕（図107）

検出状況 2B-3d区において検出した土坑で、溝41・42南側の調査地南端に位置する。南半が調査地外となってしまったため、本来の形状・規模は不明であるが、おそらく東西方向に長い長楕円形を呈していたものと考えられ、長径は推定で3.3m前後、直交する南北方向の長さは検出長で1.2m、検出面から坑底までの深さは最深部で0.2mを測る。黒褐色の細砂を埋土の主体としているが、底面の直上には黃灰色の砂質シルトが薄く堆積していた。

出土遺物と時期 土坑内からは120点を超える土器が出土し、その中から2点の高杯を図示し得た。坏部を欠損しているため時期を特定しがたいが、近畿道編年の様相3（新）に位置付けられよう。

〔土坑71〕（図107）

検出状況 2B-2d区において検出した土坑である。南北方向に貫通する地中梁の擾乱によって西半の上部が失われていたが、南北方向の径2.2mを測る大形の円形土坑で、上部の約0.2mを20°前後の角度で斜めに掘り下げた後、中央部分をさらに80°ほどの急角度で約1m掘り込んでおり、素掘りの井戸であった可能性も考えられる。埋土は暗灰黄・黃灰色細砂、灰白・灰色砂質シルト、オリーブ灰色極細砂の大きく3つに分けられ、中層には灰色シルトや3層のブロックが多く含まれていた。

出土遺物と時期 土坑内からは10点足らずの土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑72〕（図108）

検出状況 03-1工区1トレチの北東端で検出した土坑で、2B-1b区に位置する。瓢箪を逆さまに置いたような南北方向に長い不整形を呈し、南北長は1.45m、東西長は最も長い箇所で1.1mを測る。検出面から坑底までの深さは0.2~0.35mで、坑底の北東隅には径0.2m弱の浅い小穴が確認された。断面形は浅い皿状で、暗灰黄色と黃灰色のシルトから極細砂からなる上下2層の埋土によって埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは60点ほどの上器細片が出土したが、体部外面に粗いタタキ成形を施した甕の口縁部を図示し得たのみであり、詳細な時期については不明である。

〔土坑73〕（図108）

検出状況 2B-1b区において検出した土坑で、土坑72から7m南に位置する。北西から南東方向に長い楕円形を呈し、長径0.75m強、短径0.6mを測る。検出面から坑底までの深さは0.2mで、椀状に掘り込まれた土坑内は、暗灰黄色の極細砂から細砂と黃灰色極細砂の上下2層の埋土によって埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは20点足らずの土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

〔土坑75〕（図108）

検出状況 2B-1c・1d区において検出した土坑である。南西部が擾乱によって大きく失われていたため、本来の形状・規模は明らかにし得ないが、東北東-西南西方向に長い長楕円形を呈していたと推定され、長径は2.3m以上、短径1.7m弱、検出面から坑底までの深さ0.25mをそれぞれ測る大形

土坑である。断面形は皿状で、下部に堆積した暗灰黄色の細砂とシルトから極細砂を上層である黒褐色の細砂から中砂が覆っていた。

出土遺物と時期 土坑の中心部に近い南西部分を中心に、坑底からやや浮いた位置でコンテナ1箱半程度の土器が出土し、甕・高坏・鉢・手彫形土器を図示し得た。高坏には浅い皿状の坏部を有する楕形高坏も含まれており、近畿道縦年の様相3(新)に位置付けられようか。

(土坑76) (図108)

検出状況 2B-1e区において検出した土坑で、土坑75から10m南に位置する。東西方向に長い不

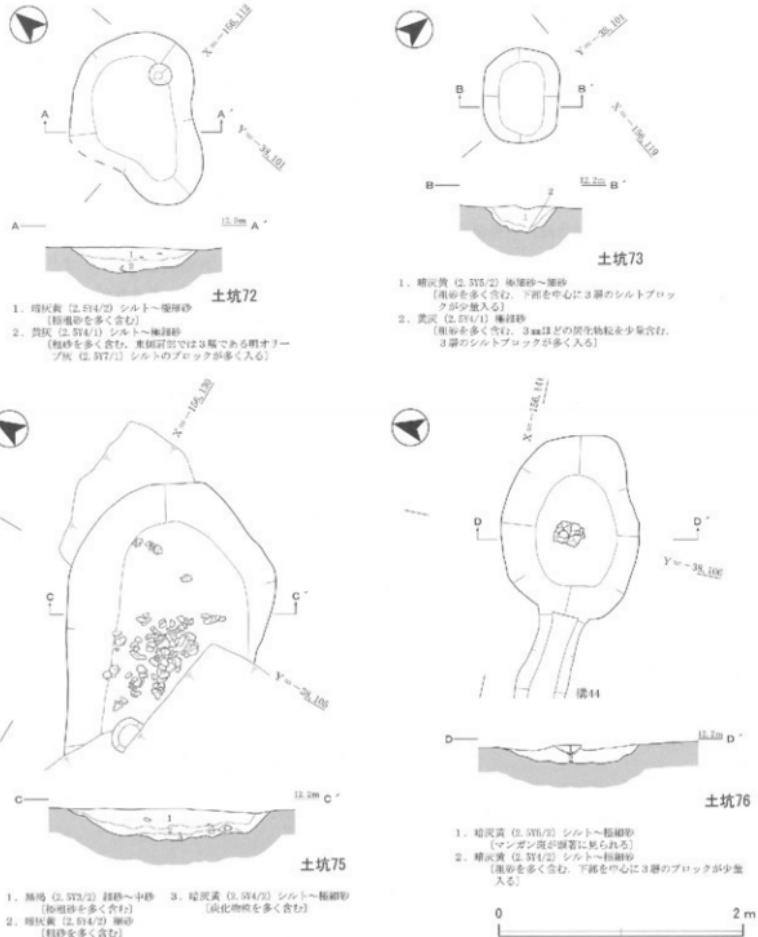


図108 土坑72・73・75・76 平・断面図

整橢円形を呈し、西側には幅0.3～0.4mの溝44が接続していた。土坑の規模は、長径1.5m、短径1.1m、検出面から坑底までの深さ0.1～0.2mで、断面形が皿状を呈した土坑内は暗灰黄色のシルトから極細砂で埋まっていた。

出土遺物と時期 土坑ほぼ中央の埋土上部からまとまって出土した焼体部片のほか、50点ほどの土器の出土が認められたが、図示可能な遺物は存在せず、時期については不明である。

〔土坑77〕（図109）

検出状況 2B-1e区において検出した。土坑76から3m東の調査地南東角に位置していたため、土坑の東から南側については確認することができなかった。平面形は北東から南西方向に長い橢円形を呈していたと想定され、検出長は長径が1.3m、短径が1.0mであった。検出面から坑底までは0.1m強と浅く、断面皿状の土坑内は粗砂を多く含んだ暗灰黄色のシルトから極細砂で埋没していた。

出土遺物と時期 土坑内からは40点近い土器が出土したが、いずれも極細片であることから、時期に

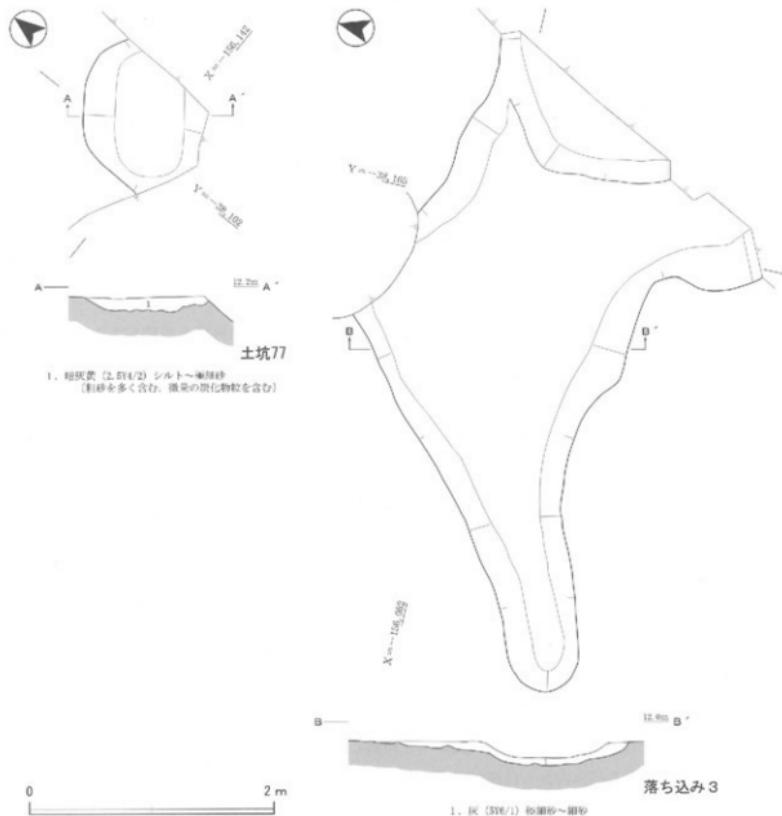


図109 土坑77 落ち込み3 平・断面図

については不明である。

〔落ち込み1〕（図110、図版21-1）

検出状況 3 A - 5 e・6 e区を中心に古墳1の墳丘上において検出した造構で、堅穴建物11の説明でも述べたように、第1面の検出時点で黒褐色の極細砂から細砂を埋土とする造構の存在が捉えられていた。平面形はおにぎりを逆さにしたような不整形を呈し、南北長12.2m、東西長10.5mを測る。底面全体で0.2mほどの高低差があり、検出面からの深さは墳際においても0.05~0.2mと幅が認められた。落ち込み内は、前述した黒褐色の極細砂から細砂とその下に堆積した黄灰色の砂質シルトから細砂からなる上下2層の埋土によって埋没していたが、北半ではさらにその下に灰白色砂質シルトが見られ、最上部にも灰黄色の細砂から中砂が覆っていた。

底面および墳際では、すでに報告した土坑39・40のほかに8基の小穴が存在し、北東部では壁面を挟んで2基の土坑（土坑37・38）が確認された。

土坑37は東側が調査地外となり、西側を本造構に切られているため、本来の形状・規模は明らかにしえないが、南北長0.9m、検出面から坑底までの深さ0.15mを測る。土坑内からは、壺を中心におよそ120点の土器細片が出土した。

一方、土坑38は東南東から西北西方向に長い隅丸五角形状の土坑で、長径2.0m、短径1.15m、落ち込み底面からの深さ0.1mをそれぞれ測る。遺物としては細片を主体とする土器50点余りが出土し、壺の口縁部1点を図示し得た。

出土遺物と時期 掌大以下の破片が主体であるが、落ち込み内からはコンテナ1箱半ほどの土器が出土した。図示した土器は壺を中心とするが、円形浮紋を貼付した二重口縁壺の口縁部も存在しており、近畿遺産年録3（古）から（新）に位置付けられる資料と考えられる。

〔落ち込み2〕（図58）

検出状況 2 A - 9 d区において検出した造構で、周溝墓13東側周溝の外肩と重複してこれを切っていた。水滴を横に向けたような形状を呈し、南北長は2.5m、東西方向の検出長は2.4m、検出面から底面までの深さは0.2mを測る。断面形は浅い皿状で、黄灰色シルト質極細砂とオーリーブ灰色砂質シルトの上下2層の埋土によって埋まっていた。

出土遺物と時期 落ち込み内からはコンテナ半箱程度の土器が出土し、底部2点を含む3点の土器を図示した。このうち、体部に縱・横方向の突帯を貼り付けた壺は、茨木市滝畠遺跡の報告書の中で角南暉一郎氏によって「被龍状突帯壺」と呼称された〔角南2000〕、東日本を中心に20数例の類例が知られている土器に該当する。

〔落ち込み3〕（図109）

検出状況 2 A - 7 i区において検出した造構で、間に地中梁の搅乱を挟んでいるため詳細は不明であるが、周溝墓31の西側周溝と重複し、そこから西南西方向へ延びていたようである。平面形は西端が著しく狭まつた角状を呈し、南北長は東端で2.7m、西端で0.6m、東西方向は検出長で5.0mをそれぞれ測る。落ち込み内は、灰色の極細砂から細砂で埋まっており、検出面から底面までの深さは西側で0.1m前後、東側で0.2~0.35mと周溝へ向かって傾斜していた。

出土遺物と時期 落ち込み内からは高杯の脚部を含む20点の土器細片が出土したのみであり、時期については不明である。

（岡本）

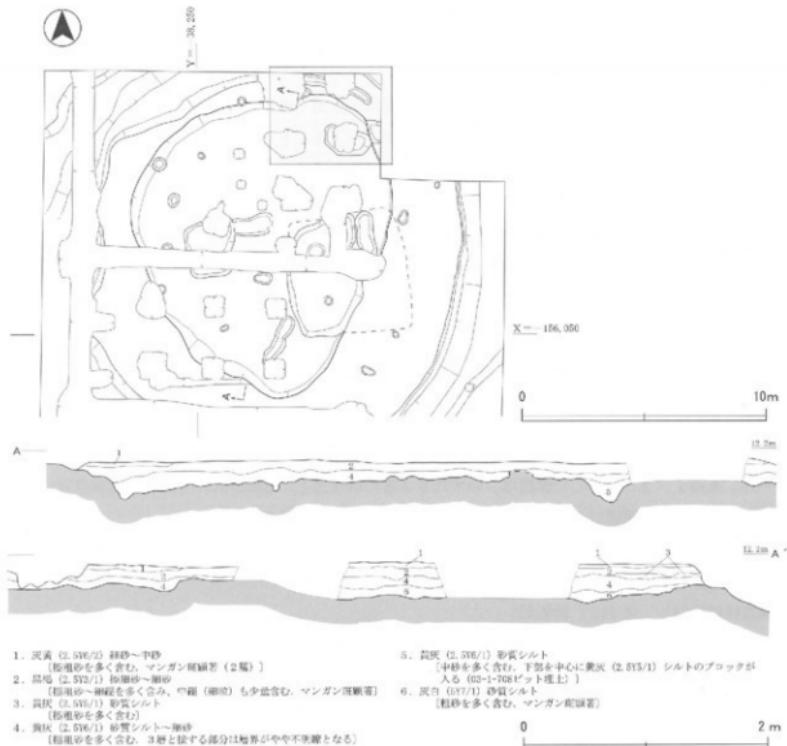


図110 落ち込み 1 平・断面図

第3節 3層中検出遺構

1. 検出遺構の概要

前節で報告した弥生時代末から古墳時代初頭の各遺構が上面で確認された3層は、第IV章第2節において述べたように、第3面の段階に02-2工区から03-1工区1トレンチのほぼ中央を南北に貫ける流路3と、02-1工区西端で検出した第2面溝17の前身である流路1という、弥生時代後期に相次いで形成された流路を埋積する洪水流によってもたらされた堆積物である。いずれの流路とも中心部は疊混じりの中砂から極粗砂層によって埋積されていたが、流路の外側では部分的に粗い砂層を挟みながらも側方へ向かって細粒化し、明オリーブ灰色もしくは淡い灰色を基調とした砂質シルトから細砂を主体としていた。層厚は流路3の東岸で0.95m、西岸で0.8m、流路1の東岸で0.5mをそれぞれ測り、調査地の両端では0.4m強であった。

この3層を掘削している途中に、土坑・小穴と流路が確認され、うち数基の小穴は掘立柱建物を構成する柱穴と捉えることができた（図111）。土坑・小穴の大半は本来第2面で検出されるべき遺構であったが、古墳1の周溝と重なっていた掘立柱建物34・35のように、他の遺構と重複して上部を削平され、下部は3層と同様の土砂が落ち込んでいたために見落としてしまったものと考えられる。

一方、流路1・2と呼称した流路は、いずれも3層の堆積途上に形成されたもので、遺構番号は付していないが、同様の流痕は3A-2工区から2d区にかけて確認された。

2. 遺構

〔掘立柱建物34〕（図112、図版42）

検出状況 3A-5f区において検出した建物で、前述のように古墳1の南側周溝および古墳2の北側周溝の下に位置していた。長軸をN51°E方向に置いた柱穴1～4で構成される桁行1間、梁間1間の東西棟建物で、桁行の柱芯間隔は2.45m・2.55m、梁間の柱芯間隔は2.05m・2.1mであった。各柱穴は黄灰色もしくは灰色のシルトと灰白色細砂で埋まったのち、最終的には黄灰色の粗砂から極粗砂で埋没しており、柱穴4ではこの砂層内から底部を欠いた甕が出土した。口縁部を上に向けて掘え置かれたような状態で見つかったことから、建物の廃絶に伴って何らかの儀礼が執り行われ、その際に埋納された可能性が考えられる。

出土遺物と時期 甕以外の遺物としては、柱穴1から1点、4から7点の土器細片が出土したのみである。柱穴4から出土した甕は器高15cm前後の小型品で、体部外面を粗いタタキ成形、内面を板ナデ調整で仕上げている。近畿道編年の様相3（新）に位置付けられると考えられる。

〔掘立柱建物35〕（図113）

検出状況 3A-4f・5f区において検出した建物で、掘立柱建物34とは約4mの間を置いて北東に位置する。計7基のピットが検出され、位置関係と埋土の状況から、柱穴1～4から構成される建物（35-1）と、柱穴5～7に搅乱により検出できなかった1基の柱穴を加えた建物（35-2）の2棟の掘立柱建物を復元することができる。

建物35-1は、N63°E方向に長軸を置く桁行1間、梁間1間の南北棟建物であるが、東側桁行の柱芯間隔が2.3mであるのに対して、西側は2.0mとなっており、平面形は結果として北側の梁が西へ狭まった台形を呈している。梁間の柱芯間隔は、北側が2.05m、南側が2.0mである。各柱穴はいずれも



図111 第3層中検出遺構分布図

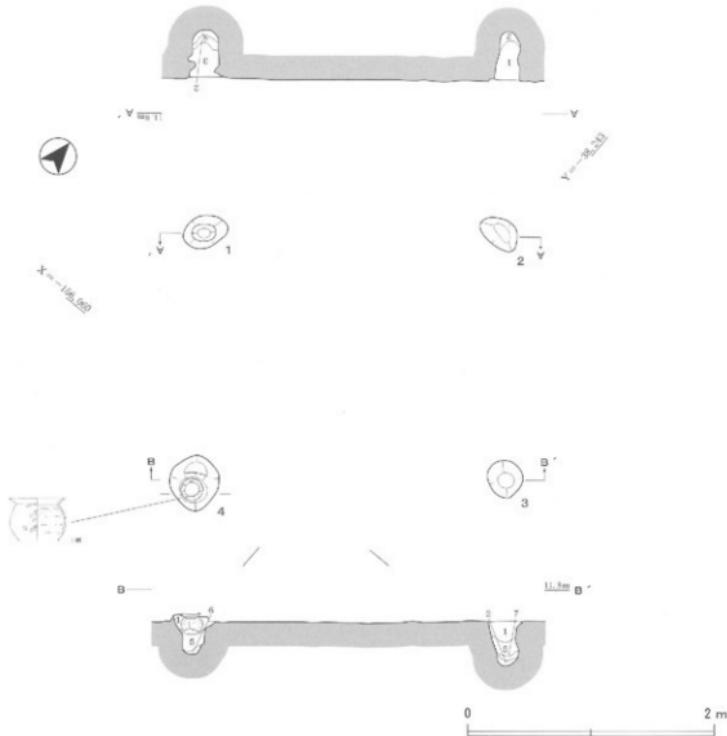


図112 挖立柱建物34 平・断面図

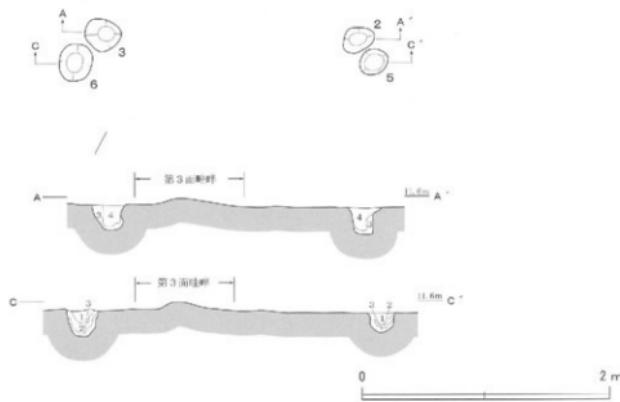
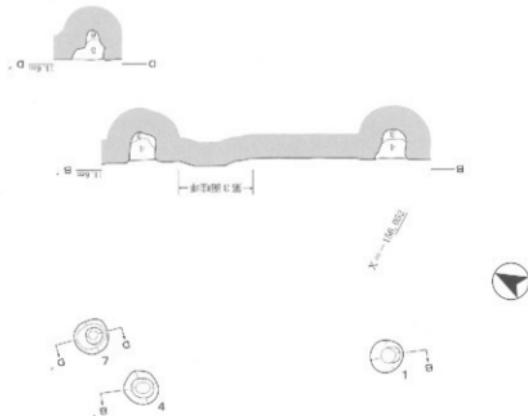
下部が黄灰色シルト、上部が黄灰色の粗砂から極粗砂で埋没していた。

一方の建物35-2は、N61°E方向に長軸を置く桁行1間、梁間1間の南北棟建物で、柱芯間隔は桁行が2.7m、梁間が2.45mをそれぞれ測る。柱穴の埋土は2~3層に分かれるが、建物34や35-1で見られた黄灰色の粗砂から極粗砂は認められず、柱穴5・6は灰白色細砂、柱穴7は粗砂を多く含んだ浅黄色シルトで最終的に埋没していた。柱穴上部の状況が不明であるため推測の域を出ないが、柱穴6・7の埋土上部の灰白色細砂が、建物34の柱穴3・4の中位に堆積する細砂層と同一であるとすれば、この建物が他の2棟に先行して建っていた可能性も考えられる。

出土遺物と時期 いずれの柱穴からも遺物は出土しておらず、時期については不明である。

〔掘立柱建物36〕 (図114)

検出状況 3A-2g・2h区において、第3面の水田調査を実施する際に検出した建物である。柱



1. 黄白 (2.5% / 1) 粗砂
〔繊維砂を多く含む〕
2. 黄白 (2.5% / 1) 砂質シルト
〔6層ある黄白 (2.5% / 1) シルトに近似、腐泥土か?〕
3. 黄灰 (2.5% / 1)
〔繊維砂を多く含む、8層ある黄灰 (2.5% / 2) シルト (含粗砂砂) の
小ブロックが少々入る〕
4. 黄灰 (2.5% / 1) 粗砂～粗砂
〔中央部では3層の下部である時灰黄 (2.5% / 2) シルトのブロックが
少々入る〕
5. 混凝 (2.5% / 3) シルト
〔上部は3層質であるが、以下は全体的に粗砂を多く含み、
〔側面は4層の粗砂を多く含む〕〕
6. 黄灰 (2.5% / 1) シルト
〔繊維砂を中心とする薄層を除む、側面及
び底面では検査した3層 (黄白 (2.5% / 1) シルト) のブ
ロックが入る〕

図113 挖立柱建物35 平・断面図

通りがやや悪く、西側は1基しか柱穴を検出することができなかつたが、本来は北西・南西隅に柱穴が存在していたとすれば、南北軸をN19°W方向に置く方形の掘立柱建物を復元することができる。その場合、柱穴1~3からなる東辺は、長さ3.6m、柱芯間隔で1.8mであるのに対し、推定される東西長は3.7mとわずかに長くなるが、他の柱穴と比較して一回り小さい柱穴4は、南側へ0.3m以上外れていることから、棟持柱であった可能性も考えられる。6基のうち4基の柱穴は、粗砂から細礫を多く含んだ灰色シルト質極細砂と明オリーブ灰色粗粒シルトからなる上下2層の埋土によって埋没していたが、柱穴3・5では明オリーブ灰色粗粒シルトは認められず、前者では灰色シルト質極細砂の上にオリーブ灰色細砂が薄く堆積していた。

出土遺物と時期 いずれの柱穴からも遺物は出土しておらず、時期については不明である。

〔ピット30~43・土坑78〕（図115）

検出状況 1A-10g区から2A-1g区において確認した小穴群と土坑である。本来は第2面で検出すべきであったが、ピット30~33以外は周溝墓35の西側周溝と重複していたために上部が失われ、加えて埋土の上部には3層である灰色もしくは灰白色極細砂が落ち込んでいたことから、遺構の存在を見落としてしまったものと考えられる。

検出された各ピットは長径0.2~0.3mの規模を有し、深さ0.1mに満たないピット32を除けば、検

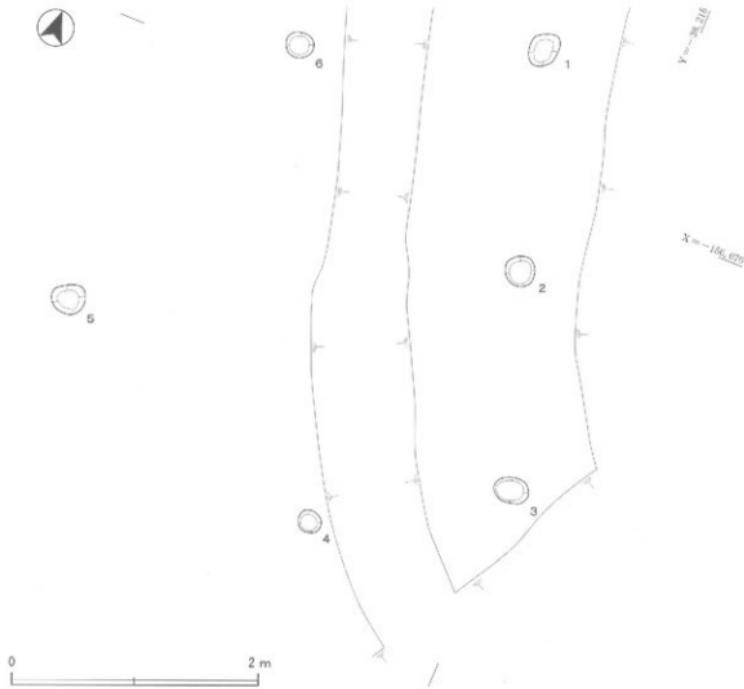


図114 掘立柱建物36 平面図

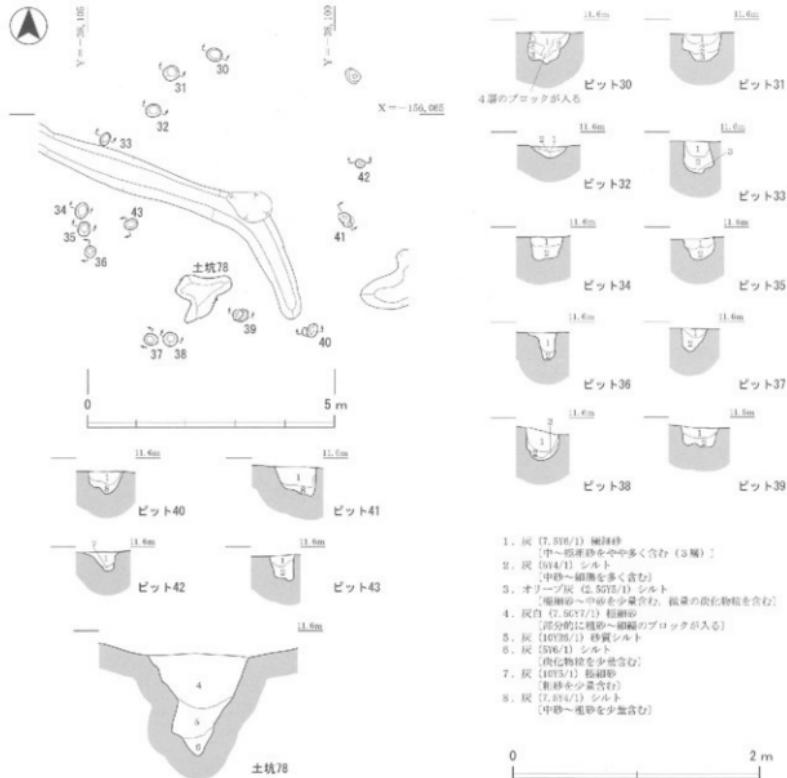


図115 ピット30～43 土坑78 平・断面図

出面から坑底までの深さは0.15～0.25mであった。いずれのピットも下部には灰色もしくはオリーブ灰色のシルトが堆積し、その上を前述の極細砂層が覆っていた。

一方、土坑78は方位記号に似た不整形土坑で、最も長い東西方向で長さ1.1mを測る。断面形は南東側に傾斜したV字に近い形状を呈し、検出面から坑底までの深さは0.4m強であった。この遺構も下部に灰色を基調としたシルトが堆積し、その上に灰白色極細砂が堆積していた。

出土遺物と時期 ピット30・35から各1点、36から2点の土器が出土したが、いずれも細片であることから、時期については不明である。

[流路1] (図116～120、図版41)

検出状況 02-1工区南西端の3A-3h・4h区から北西端の3A-3c区に向かって、調査地をほぼ南北に継続する流路である。地層観察ラインでの断面観察によって、第2面溝17の下位で存在が確かめられ、流路の規模と遺物包含状況の確認のために断面北側において5mの幅で試掘を実施したこと、完形品を含む土器が多量に出土したことから完掘することとした。

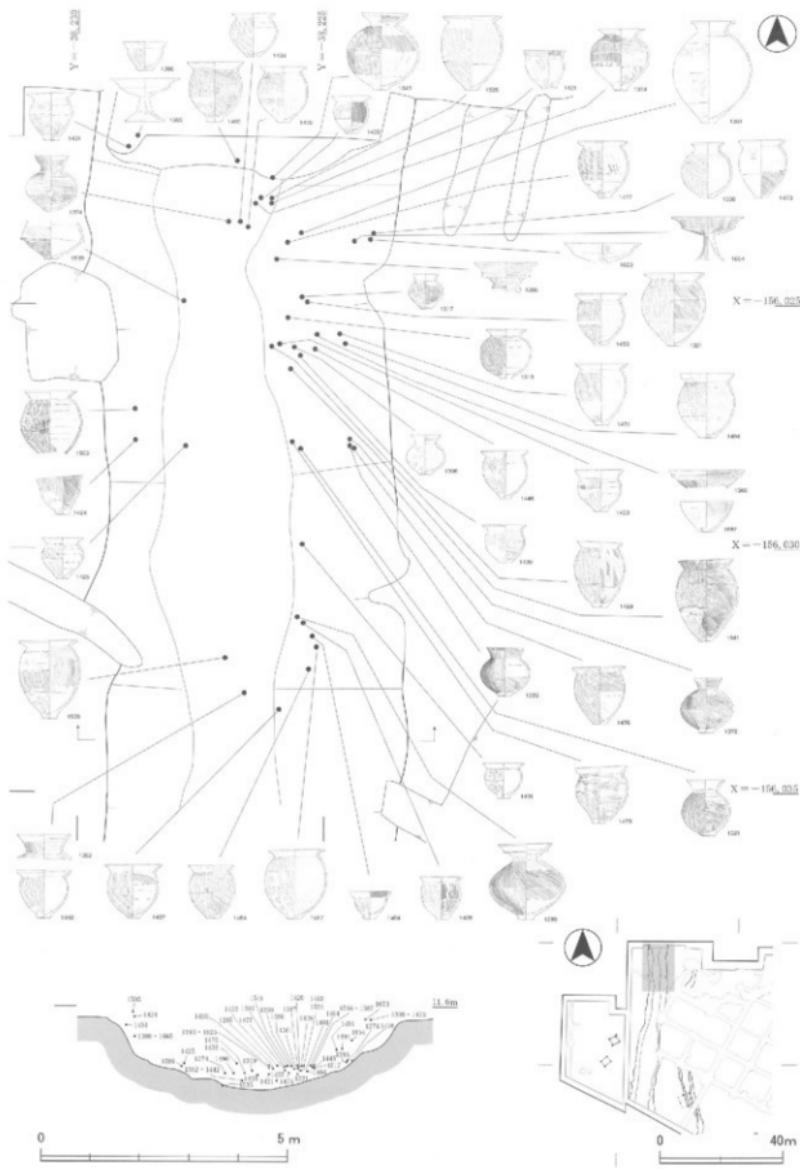


図116 流路1 遺物出土状況図（1）

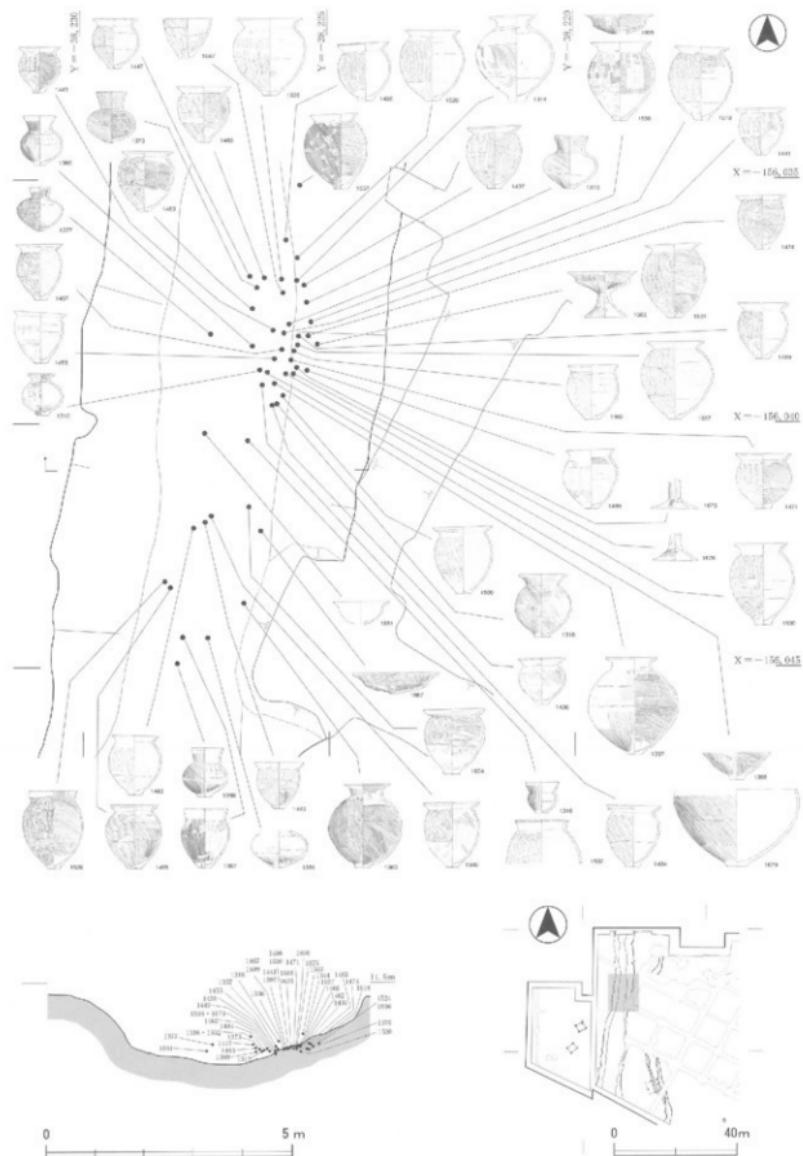


図117 流路1 遺物出土状況図(2)

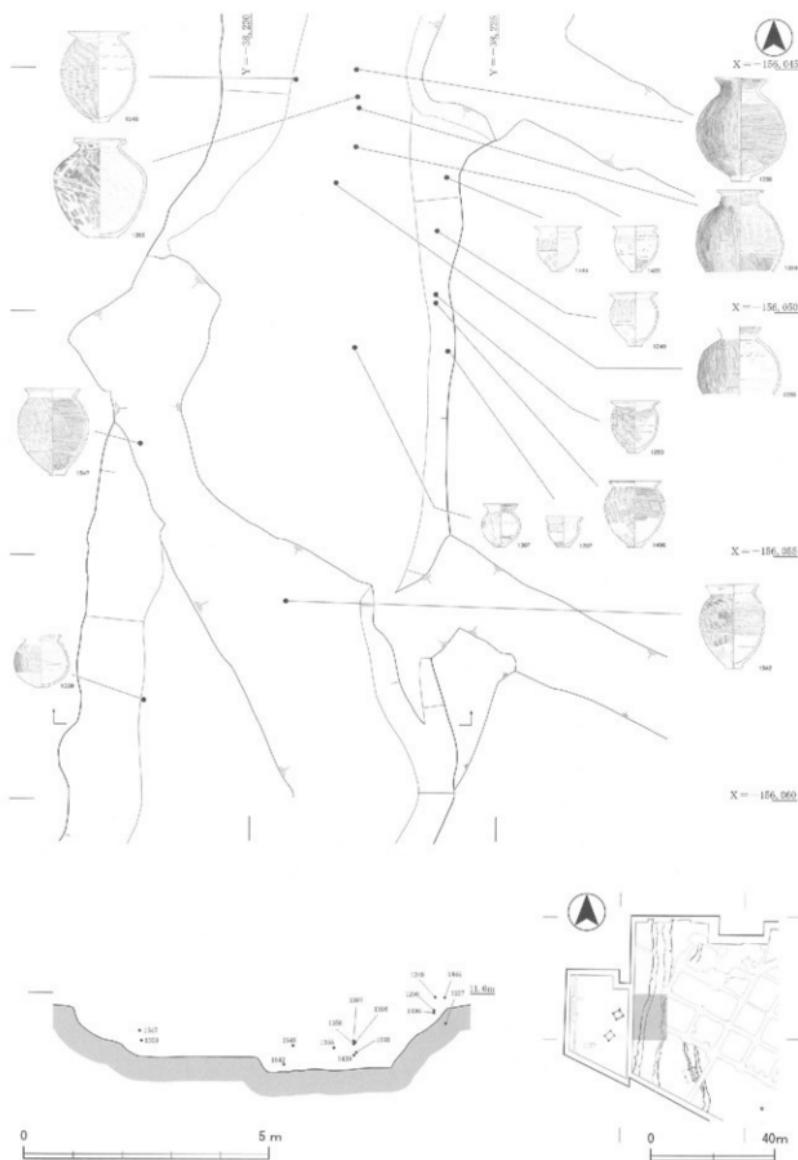


図118 流路1 遺物出土状況図(3)

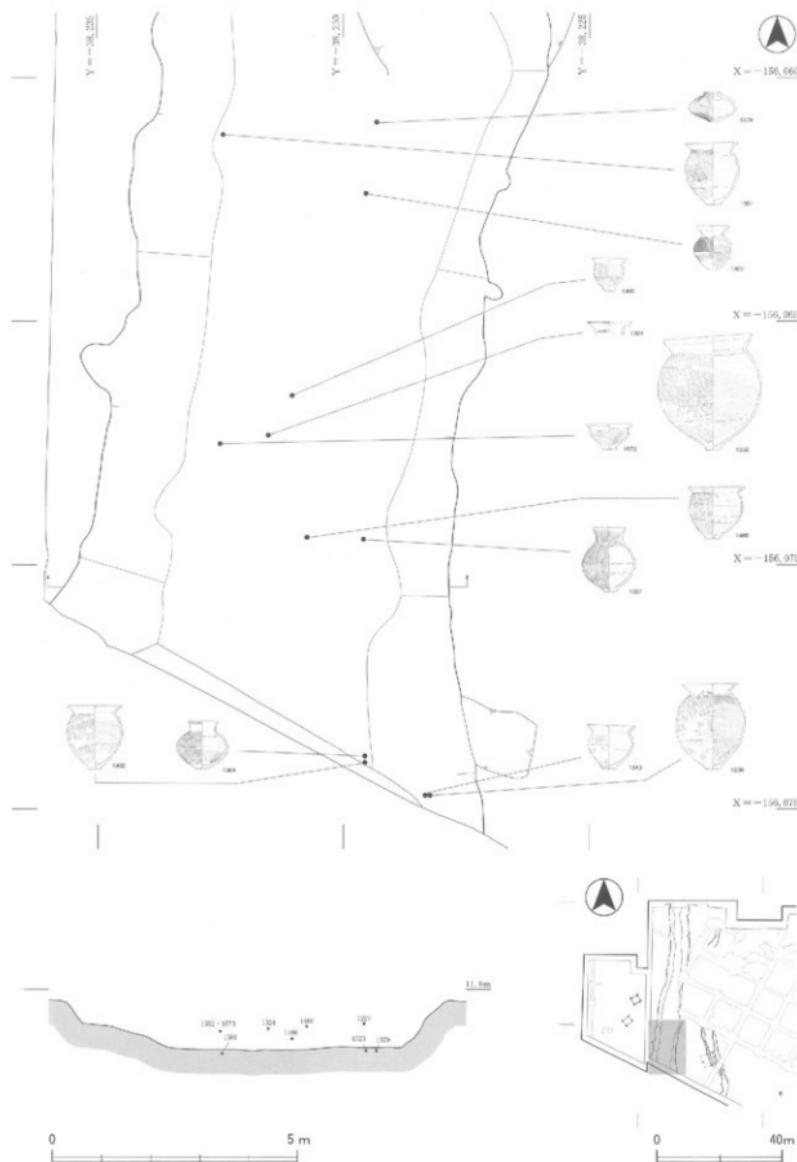


图119 流路1 遗物出土状况图(4)

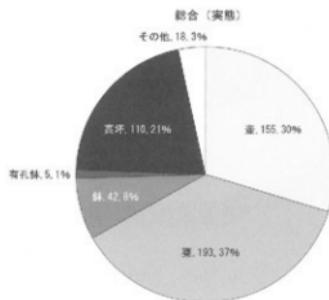
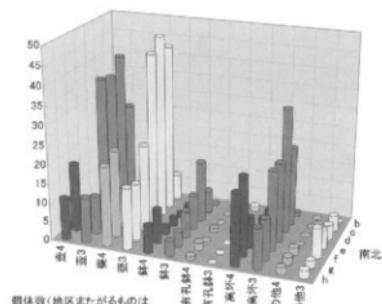
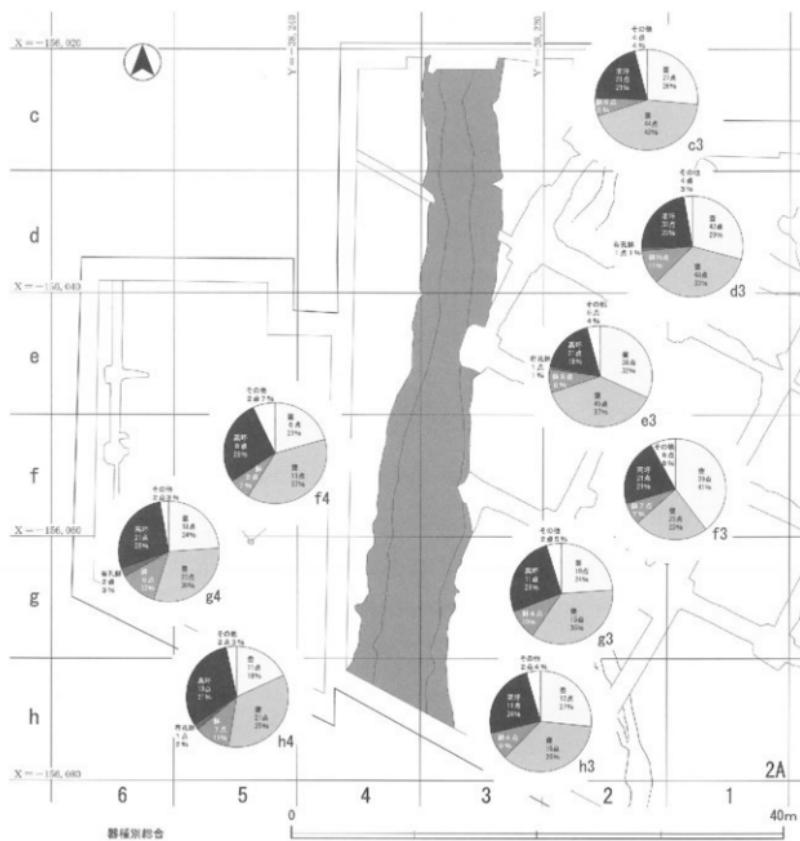


図120 流路1 遺物分布図

流路は座標北より 4° ほど東に振って流れ、今回の調査で検出し得た長さは55mであった。3層の掘削と合わせて検出を行ったために本来の規模は把握し得なかったが、幅は第3面の上面で 5 ~ 8 m を測り、流路の底面は、南端で標高10.4m、北端で 9.6 m と 10° をやや上回る角度で傾斜していた。流路の下半は粗粒の中疊までの砂礫層で埋没していたが、この層は流路の外側では第3面を被覆した明緑灰色粘土質シルト層を切って堆積しており、本流路が3層の堆積中に形成されたものであることを物語っている。また、流路の側壁に近いところでは、中砂までの細粒の砂層やシルトが所々認められ、砂礫層の上部にも砂質シルトから細砂が堆積していたことから、出土遺物に関しては上層と下層に大別し、さらには後者をシルト層と砂礫層に分けることとした。

流路内からは膨大な量の土器が出土し、その総量はコンテナに換算して 120 箱以上、今回取捨選択したうえで図示した土器は 489 点に及ぶ。完形品もしくは残存率の極めて高い個体が多く、また、水流による器面の磨耗がほとんど認められなかつたことから、流路が埋積される途上に投棄された可能性が高いと判断し、出土傾向から投棄行動を窺うために、残存率の高い個体については可能な限り 3 次元で出土位置を押さえることとした。そのようにして取り上げることができた土器は 147 点に上り、図 116 ~ 119 にその位置を示した。この図からは、土器の出土は流路の北半が中心で、上流である南側へ向かうほど漸次減少していること、流路の中軸線より東側からの出土が圧倒的に多いことが読み取れ、これらの出土位置が洪水流の影響を大きく受けていることと仮定すれば、大半の土器が流路の東岸から投げ込まれたものと判断できよう。また、器種別の割合を全体および地区割ごとに見た図 120 からは、地区ごとに変動はあるものの、第2面の溝40と比較して壺・高坏の占める割合が高く、代わりに有孔鉢を含む鉢類が著しく少ないことが指摘でき、その差異をもたらした要因の究明が課題となろう。

出土遺物と時期 下層、中でも砂礫層を中心に、器台を除いた各器種を通じて質・量ともに豊富な資料を得ることができた。高坏の形態から一定の時期幅が存在している可能性も考えられるが、口縁端部を擬凹線、あるいはこれに竹管円形浮紋を加えて飾った広口壺や、口縁部に竹管円形浮紋を付した二重口縁壺が少なからず認められ、壺についても体部が長めで、しっかりとした平底の底部を有する個体が多く存在するなど、第2面検出の各遺構から出土した土器よりは相対的に古い様相が看取される。したがって、本流路出土土器群の時期については、近畿道編年の様相3（古）と捉えておきたい。

なお、砂礫層内からは、吉備地域から搬入された可能性が高い短頸広口壺が伴出している。

[流路 2]

検出状況 2B - 4 a 区から 1 A - 9 g 区にかけて検出した流路である。第3面で検出した流路 3 の東岸から 2.5 m の地点を基点として北東方向へ走行し、3層である層厚 0.5 m 以上の砂質シルトからシルト質細砂層を切っていたことから、流路 3 の最上部に流入した洪水流が溢れ出た痕跡と考えられる。流路の幅は 0.4 ~ 1.5 m、確認した深さは 0.7 m 強で、下部は中砂から粗砂、上部は粗砂から細粒の中疊を主体とする砂礫層によって埋没していた。

出土遺物と時期 流路内からは 50 点余りの土器片が出土し、5 点の土器を図示した。うち 2 点の長頸壺は、外腹をヘラミガキ調整で仕上げているものの、口頭部が短くなつて外反し、頭部も太めとなつており、近畿道編年の様相3（古）に位置付けられる資料であろう。

(岡本)

第4節 第3面

1. 遺構面の概要

3層を除去して検出される遺構面で、4a層と呼称したオリーブ黒色や暗オリーブ灰色を基調とした粘土質シルトからシルト層からなる古土壤の上面である。面の直上を薄いシルトからシルト質細砂層が被覆し、その上に中砂までの比較的細粒の洪水堆積物が厚く堆積していたために、旧地表面がほぼ当時に近い状態で残され、地中染などの擾乱の影響もかなり減少したことも手伝って、遺構・遺物の遺存状況は良好であった。

この面では、調査地の西端で小区画水田や水路、谷状の凹地を挟んだ東側で堅穴建物10棟のほか、井戸・焼土面・薪木遺構・溝・流路を検出し、調査地東側の4分の3は居住域、西端は生産域（水田域）として土地利用が行われていたことが明らかとなった（図121、図版43-1・53-1・58-1・63-1）。このうち居住域は、中央やや東寄りを北流する流路（流路3）によって東西に二分されており、以下ではそれぞれを「西側居住域」・「東側居住域」と呼ぶこととする。また、堅穴建物の周辺を中心とした旧地表面上や流路・谷の岸には多量の土器が残されており、これらの土器群についても遺構と共に抜てき記録に留めた。なお、本面に伴う土器は、すべて弥生時代後期中葉に位置付けられる。

次に、本面の微地形について触れておきたい。遺構面の標高は、調査地の南東隅を最高所として11.0～12.0mを測るが、流路3を境に東西両側で傾斜方向が異なり、流路の東側は南東から北西、西側は南西から北東方向へ向かって緩やかに傾斜していた。この地形は基本的に弥生時代前期と考えられる下位の第4面の微地形を踏襲するものであるが、流路の西岸については、第4面の段階では調査地の南西隅を最高所として北東へ向かって傾斜していたのにに対し、本面ではその間に中央南側から土砂の供給があったためか中央部が舌状に高く、逆に西端部は土砂堆積があり進行せずに微低地と化しており、地形的に逆転が生じている。また、流路の東岸においては、標高の高い側を中心に土砂の堆積が進んだために比高差は第4面の0.5mから0.9mへと拡大し、等高線の間隔もかなり狭まっていた。

最後に、遺構の個別説明に移る前に断っておくべき点が1つある。旧地表面が厚い水成堆積物に保護されていたこともあって、今回の調査では、検出した10棟の堅穴建物のうち9棟の建物で周堤を確認することができた。ただし、調査当初から当該遺構を建物遺構と捉えていたわけではなく、02-1工区で断面観察および平面調査によって周堤の存在を認識した段階には、西端の水田域と関連する溜井状遺構の堤防の可能性を考えていた。その理由の1つとして、4棟のうち全体を把握し得た2棟の堅穴建物から外へ向かって滝が伸び、いずれも谷状の凹地に接続していたことが挙げられるが、周堤の盛土と堅穴内部に流入した土砂との識別が困難で、堅穴自体の掘り込みを確認し得なかったことが、誤認の最も大きな原因となった。結果的に建物遺構であるという認識を得ることができたのは、周堤盛土とその流入土、さらに旧地表土であった4a層を除去し、掘り方の輪郭を把握し得た第3b面調査の段階であった。したがって、以下に報告する堅穴建物のうち、02-1工区で検出を行った堅穴建物1・3および2・4の西半については、異なる面で検出した堅穴部と周堤を合成して図示してある。

2. 遺構

〔堅穴建物1〕（図122～127、図版43～45）

検出状況 2A-10e・10f区から3A-1e・1f区にかけて検出した堅穴建物で、西側居住域で

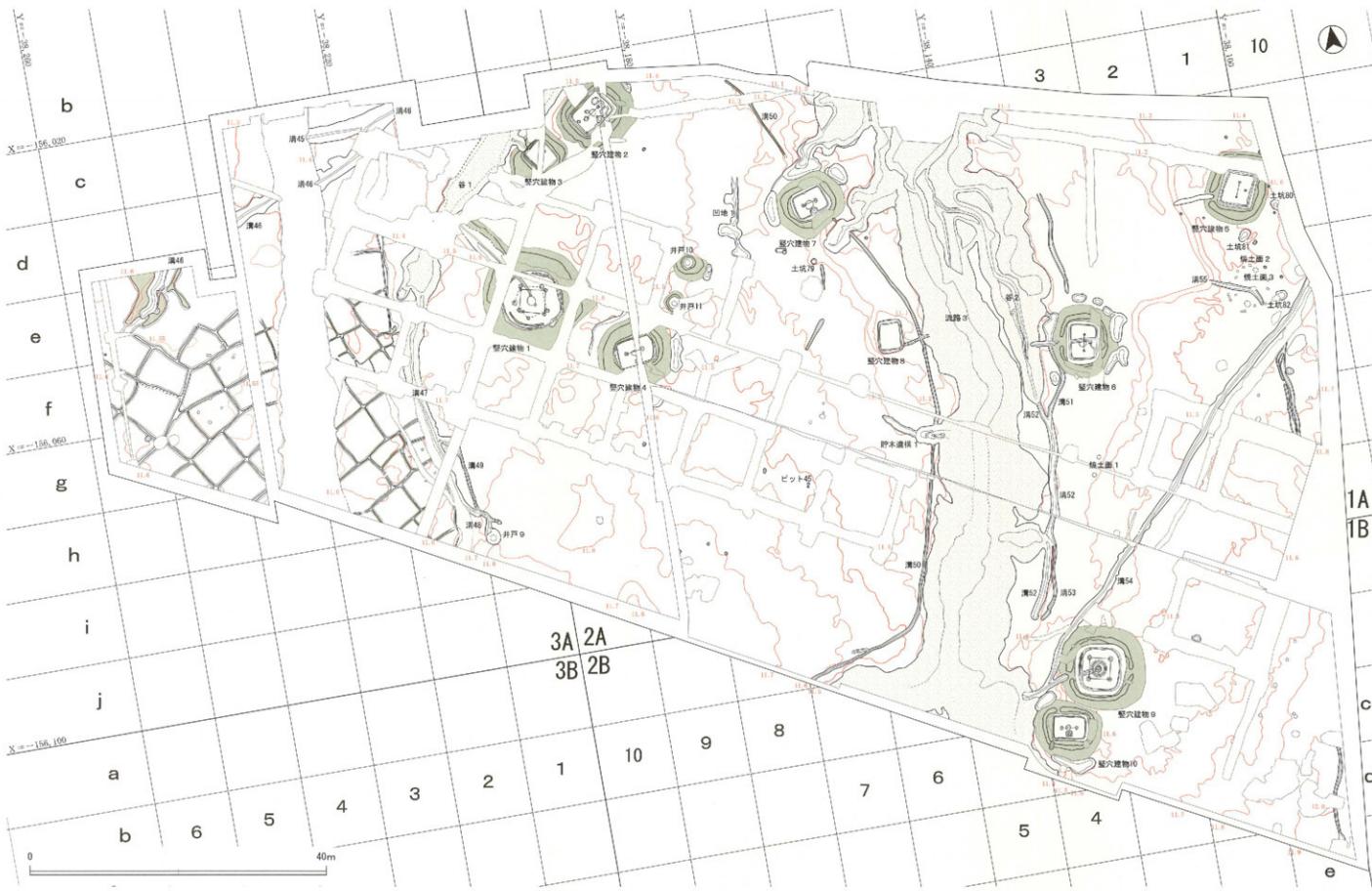


図121 第3面 全体図



図122 竪穴建物1 機能面 平・断面図

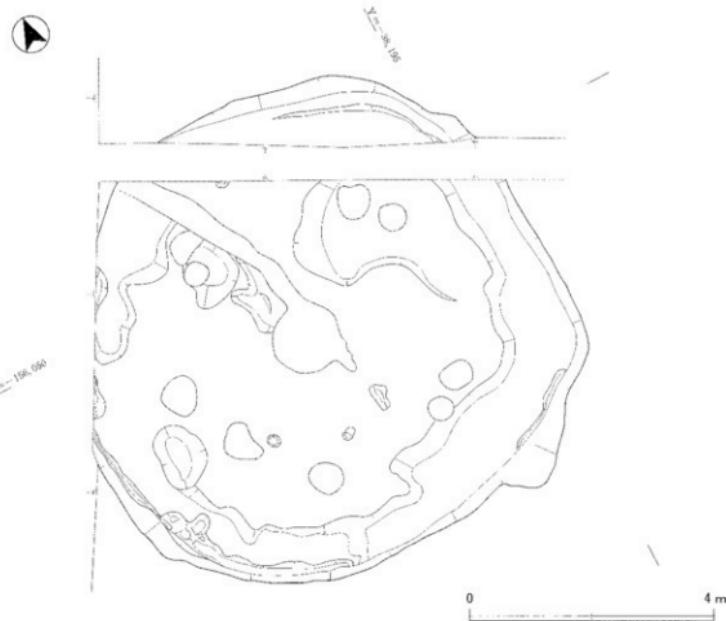


図123 整穴建物1 加工面 平面図

確認された建物の中では最も西寄りに位置している。地中梁の擾乱や研究会調査の側溝が縦横に貫通していたため、今回調査を実施した堅穴建物の中では遺存状況は必ずしも良好ではなかったが、堅穴とその周間に巡らされた周堤、建物内から外へ延びる排水溝を検出した。

堅穴は、東壁の一部が直線的となった南北7.8m、東西8.1mの不整円形を呈し、南東側には床面から0.15m前後高くなった幅1.7m、奥行き0.55mの三角形状の張り出しが付設されていた。掘り方は旧地表面である4層の上面から平均で0.6mほど掘り下げられ、さらに西側の一部を除く周壁際では0.1～0.25mの深さで溝状に掘り込まれていた。また、掘り方の底面では、深さ0.1～0.2m前後の土坑や小穴を数基確認したが、いずれも建物の最終機能時には埋められており、性格を特定することはできなかった。建物の床面は、溝状部分を中心とする凹地に明オリーブ灰色シルトや灰・黄灰色粘土質シルトなどによって貼床を施して構築され、床面から周堤上端までは0.7～0.8mの高さを有していた。

堅穴内の埋土は、建物全体を被覆していた3層とその下の黄灰色や灰色のシルト層に大きく分かれ、後者は層中に明緑灰色シルトなどのブロック土を多量に含んでいることから、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土であったと考えられる。この土砂は堅穴の中心に向かって層厚を減じつつ堆積し、周壁際で厚さ0.45m前後、中心からやや南東に寄ったところで0.1mを測るが、北側からの流入が特に著しかったためか、北壁際の中央部付近では厚さ0.25～0.4m前後の舌状の堆積が認められた。

堅穴の周囲には、旧地表面上に堅穴掘削時の排土を盛り上げて構築したと推定される幅2.5～3.3m

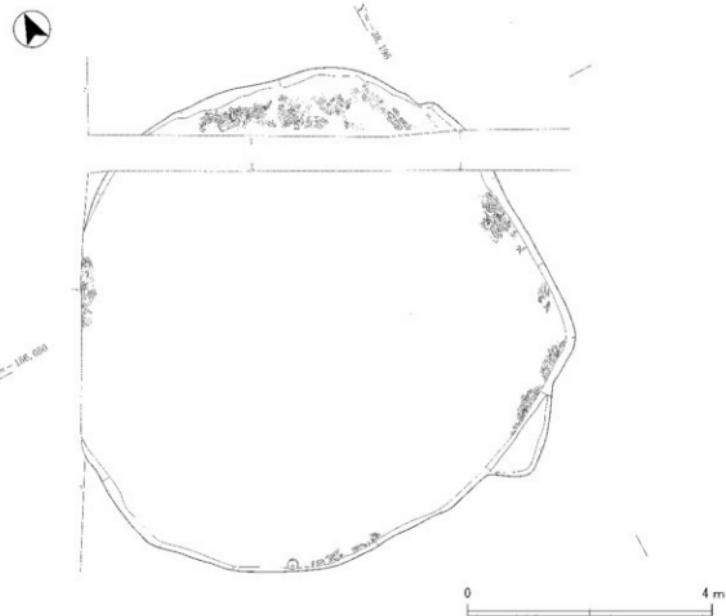


図124 積穴建物1 壁溝際有機物検出状況

の周堤が残存していた。搅乱によって南側が失われていたため、正確な形状は明らかにし得ないが、周堤外縁は東側が角状に突き出た丸みを帯びた五角形状を呈していたものと推定され、張り出し先端までの東西長は15.3m、直交する南北長は13m以上を有し、周堤外縁における面積は約160m²を測る。周堤の高さは、南側が0.1m前後、他の三方が0.15~0.2mを測るが、旧地表面が建物の南北で0.2m近くの比高差を有していたため、結果的には南側の周堤上端の方が0.1m程度高くなっている。南側、特に最高所となった南東部は、積穴内への流入土が他よりも少なかったことから、より構築当時の高さに近いと想定されるが、この高さに揃えて周堤を構築しようとすれば、他の箇所ではかなり厚く盛土を施さざるを得なかつたと考えられる。北壁際で積穴内への土砂の流入がより顕著であったのは、このような周堤の立体構造にも起因していたのであろう。

さて、積穴建物の床面上では、ほぼ中央に二段掘りの土坑（以下、積穴建物の床面中央に存在する土坑を「中央土坑」と呼称。）とこれに接続して北西方向へ延びる排水溝、主柱穴9基と小穴1基、壁溝を検出したほか、周壁際では炭化した小木片と植物纖維を確認した。遺存状況は良好とは言いがたかったが、東壁の一部では、周壁のやや上から壁溝上にかけて植物纖維が連続して検出されたことから、周壁にヨシの茎のようなものが貼られ、その一部が壁溝の上を覆っていた可能性が考えられる。また、北壁側で比較的広い範囲で認められた植物纖維は、このような貼り駆が剥落したものである可能性がある。

壁溝は南壁側で1.1mほど途切っていたものの、それ以外の周壁下ではすべて確認された。溝の幅は0.2~0.45m、床面からの深さは0.05~0.15mで、床面の面積は溝の内側で約42m²を測る。また、南西



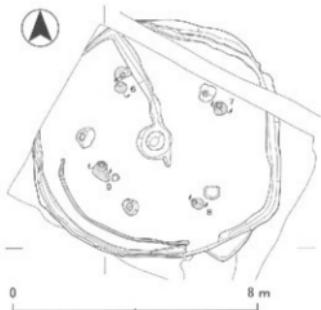
柱穴 3

- オリーブ灰 (2.605/1) シルト
〔炭化物塊多く含む。明オリーブ灰 (5077/1)
シルトのブロックが多く入る〕

2. 灰 (5077/1) 粘土質シルト

〔上部に細粒砂～細砂を少量含む。炭化物塊
を多く含む。明オリーブ灰・青灰 (506/1)
シルトのブロックが多く入る〕

- オリーブ灰 (2.605/1) シルト
〔炭化物塊多く含む。明オリーブ灰 (5077/1)
シルトのブロックが多く入る〕
- 灰 (5077/1) 粘土質シルト
〔上部に細粒砂～細砂を少量含む。炭化物塊
を多く含む。明オリーブ灰・青灰 (506/1)
シルトのブロックが多く入る〕



柱穴 8

- 明オリーブ灰 (5077/1) 相互シルト (3層)

2. 灰 (7.5076/1) シルト

3. 灰 (7.5076/1) 粘土質シルト

〔上部に細粒砂～細砂を少量含む。炭化物塊
を多く含む。明オリーブ灰シルトの
ブロックが入る〕

- 明オリーブ灰 (5077/1) 相互シルト (3層)
- 灰 (7.5076/1) シルト
- 灰 (7.5076/1) 粘土質シルト
〔上部に細粒砂～細砂を少量含む。炭化物塊
を多く含む。明オリーブ灰シルトの
ブロックが入る〕



柱穴 1

柱穴 2

- 灰 (7.5077/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物
塊を少額含む。深さ9～10mの大
きな明オリーブ灰シルト (5077/1)
のブロックが多く入る〕

- 灰 (7.5077/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物
塊を少額含む。明オリーブ灰 (5077/1)
シルトのブロックが多く入る〕

- 灰 (5077/1) 粘土質シルト
〔炭化物塊を多く含む。明オリーブ
灰シルトのブロックが多く入る〕

柱穴 4

- 灰 (7.5074/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物塊を多く
含む。明オリーブ灰 (5077/1) シ
ルトのブロックが多く入る〕
- オリーブ灰 (2.5077/1) 粘土質シルト
〔炭化物塊を多く含む。明セリーブ
灰シルトのブロックが多く入る〕
- 灰 (5077/1) 粘土質シルト
〔明オリーブ灰シルトのブロックが多く入る〕

- 灰 (7.5074/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物塊を多く
含む。明オリーブ灰 (5077/1) シ
ルトのブロックが多く入る〕
- オリーブ灰 (2.5077/1) 粘土質シルト
〔炭化物塊を多く含む。明セリーブ
灰シルトのブロックが多く入る〕
- 灰 (5077/1) 粘土質シルト
〔明オリーブ灰シルトのブロックが多く入る〕

- 灰 (5077/1) 粘土質シルト
〔明オリーブ灰シルトのブロックが多く入る〕

柱穴 5

- 褐灰 (1074/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物塊を
多く含む。明オリーブ灰 (5077/1) シ
ルトのブロックが多く入る〕
- オリーブ灰 (5077/1) ルート
〔上部を中心にして炭化物塊を多く含む。青
灰 (506/1) 粘土質シルトのブロックが
多く入る〕

柱穴 6

- 明オリーブ灰 (5077/1) シルト
〔中に有機物の薄層混在 (3層)〕
- 灰 (7.5074/1) シルト
〔炭化物塊を多く含む。明オリーブ灰 (5077/1) シ
ルトのブロックが多く入る〕
- 灰 (7.5074/1) シルト
〔炭化物塊を少額含む。明セリーブ灰シルト
のブロックが多く入る〕
- オリーブ灰 (2.5077/1) 粘土質シルト
〔炭化物塊を少額含む。明セリーブ灰シルト
のブロックが多く入る〕

- 明オリーブ灰 (5077/1) シルト
〔中に有機物の薄層混在 (3層)〕
- 灰 (7.5074/1) シルト
〔炭化物塊を多く含む。明セリーブ灰シルト
のブロックが多く入る〕
- 灰 (7.5074/1) シルト
〔炭化物塊を少額含む。明セリーブ灰シルト
のブロックが多く入る〕
- オリーブ灰 (2.5077/1) 粘土質シルト
〔炭化物塊を少額含む。明セリーブ灰シルト
のブロックが多く入る〕

- 明セリーブ灰 (5077/1) ルート

- 明セリーブ灰 (5077/1) ルート
〔上部を中心にして炭化物塊を多く含む。青
灰 (506/1) 粘土質シルトのブロックが
多く入る〕

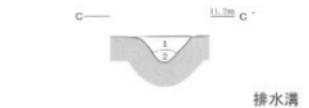
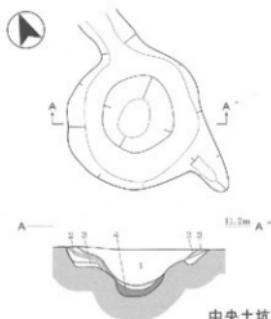
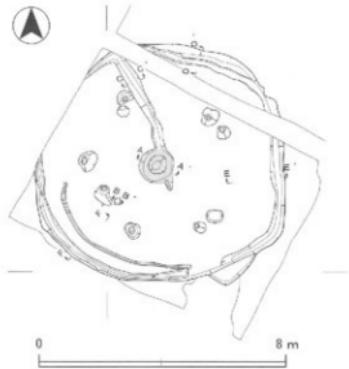
柱穴 7

- 明オリーブ灰 (5077/1) シルト
〔中に有機物の薄層混在 (3層)〕
- 灰 (7.5076/1) シルト
- 灰 (5077/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物塊を少額含
む。5m以降の明セリーブ灰 (5077/1)
シルトのブロックが多く入る〕
- 灰 (5077/1) シルト
〔炭化物塊を多く含む。明セリーブ灰シルト
のブロックが多く入る〕

柱穴 9

- 明セリーブ灰 (5077/1) シルト
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物塊を少額含
む。5m以降の明セリーブ灰 (5077/1)
シルトのブロックが多く入る〕

図125 穴室建物 1 主柱穴 断面図



排水溝

1. 池 (7.5t/1) 剥脱シート

〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を少量含む。径5～10mmの大別オーブ灰 (SG7/1) シートのブロックが多く入る〕

2. 穴 (7.5t/1) 粘土質シート

(下部に粗砂の凝集を伴む。炭化物粒を多く含む。明オリーブ灰シートのブロックが少しある)
11.2m



北側壁溝

1. 池 (7.5t/1) シート

〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を少し含む。径5mm前後の明オリーブ灰 (SG7/1) シートのブロックが多く入る〕

2. 池 (7.5t/1) 粘土質シートと明オリーブ灰 (SG7/1) シート・異灰

3. (7.5t/1) 粘土質シートのブロック混合土

(粗砂～細砂を少しある。炭化物粒を少し含む。各ブロックは径30mm～40mmとやや大きい。 (SG7/1))
11.2m



東側壁溝

1. 池 (7.5t/1) シート

〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を少し含む。径5mm前後の明オリーブ灰 (SG7/1) シートのブロックが多く入る〕

2. 池 (7.5t/1) 粘土質シートと異灰 (2.5t/1) 粘土質シートの混合土

(粗砂を主体として粗砂～細砂をやや多く含む。明オリーブ灰シートのブロックが混入入り、緑色を呈す))
11.2m

3. 池 (7.5t/1) 粘土質シートと明オリーブ灰 (SG7/1) シート・異灰

(粘土質シートのブロック部分)
(粗砂～細砂を少しある。炭化物粒を少し含む。(SG7/1))
11.2m



南側壁溝

1. 池 (7.5t/1) シート

〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を少し含む。径5mm前後の明オリーブ灰 (SG7/1) シートのブロックが多く入る〕

2. 池 (7.5t/1) 粘土質シートと明オリーブ灰 (SG7/1) シートのブロック混合土

3. 池 (2.5t/1) 粘土質シート

(明オリーブ灰シートのブロックが入る)
11.2m

4. 池 (8.5t/1) 粘土質シートと明オリーブ灰 (SG7/1) シート・異灰

(粘土質シートのブロックが入る)
(粗砂～細砂を少しある。炭化物粒を少し含む。(SG7/1))
11.2m



図126 穴穴建物1 土坑 断面図

1. 池 (7.5t/1) シート
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を多く含む。径10mmの大別オーブ灰シートのブロックが多く入る。〕
 2. 池 (7.5t/1) 粘土質シート
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を少し含む。径5mm前後の明オリーブ灰シートのブロックが多く入る〕
 3. オリーブ灰 (2.5t/1) 粘土質シート
〔炭化物粒がブロック状に入る〕
 4. 池 (2.5t/1) 痕膜
1. 池 (7.5t/1) シート
〔粗砂～細砂を多く含む。炭化物粒を多く含む。径10mmの大別オーブ灰シートのブロックが多く入る。〕

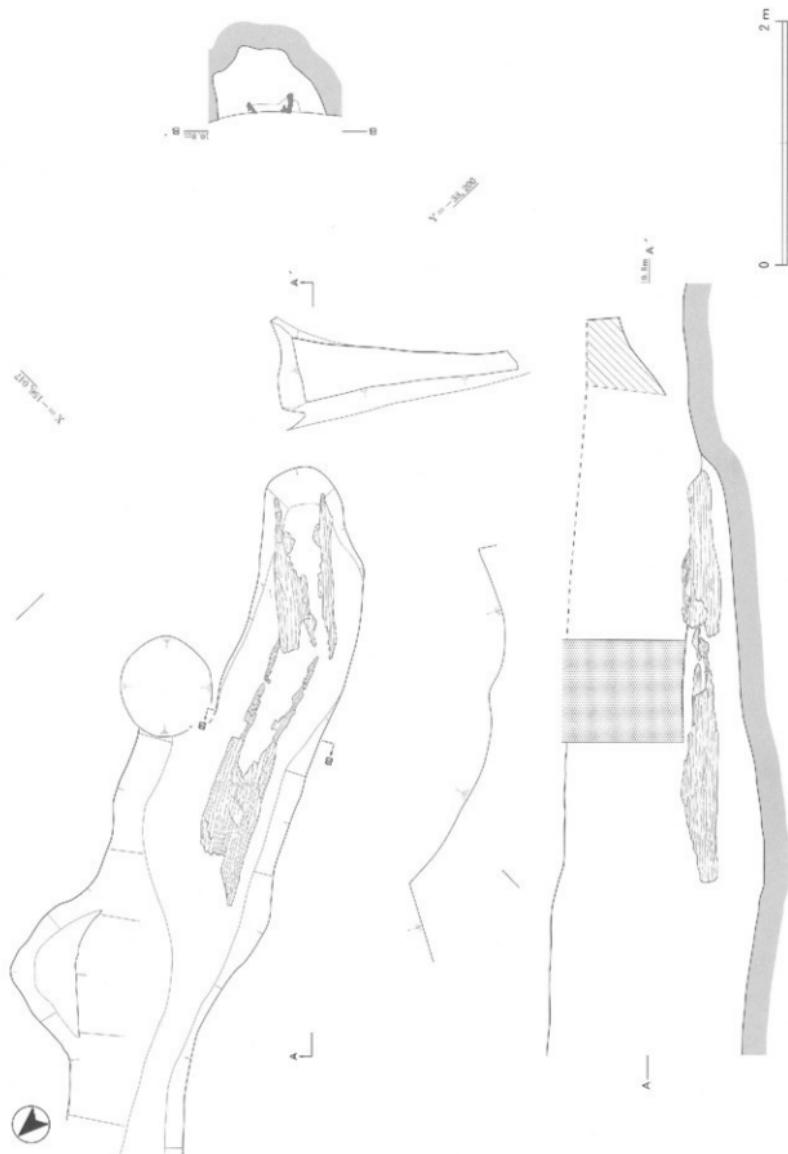


図127 穂穴建物1 排水溝 平・断・立面図

側では、この壁溝から 0.1 ~ 0.6 m 内側で幅 0.1 m 前後、深さ 0.05 ~ 0.1 m の小溝が巡っていた。確認し得たのは 5.7 m 分であるが、東端は外側の壁溝と同じ位置で途切れており、ある段階の壁溝であった可能性もある。なお、この壁溝の途切れはやや西へずれているものの、前述した三角形状の張り出しの位置とはほぼ合致しており、この張り出しが建物の入口に関連する遺構であった可能性を示している。

中央土坑を囲むように確認された 9 基の柱穴は、埋土の相違、具体的には柱穴内が暗色のシルトのみで埋まっているもの（柱穴 1 ~ 5）と、最上部に 3 層である明オリーブ灰・緑灰色シルトが入り込んでいるもの（柱穴 6 ~ 9）に大きく分かれる。前者の埋土を構成する各シルト層には、いずれも明オリーブ灰色シルトを主体とするブロックが多く含まれており、人為的に埋め戻されていた可能性が極めて高い。一方、柱穴内に 3 層が認められるということは、3 層の堆積時において柱穴が埋没し切れずに凹んでいたことを示すことから、この建物が当初 5 本主柱で建てられ、最終的に柱配置を 4 本主柱へ変更していたものと考えられる。5 本主柱の柱芯間隔は 2.5 ~ 3.25m、4 本主柱の柱芯間隔は柱穴 6 ~ 9 間が 2.7 m である以外は 3.3 m で、4 本を結んだ後者の平面形は、西辺がすぼまった歪んだ台形を呈する。各柱穴は長径 0.4 ~ 0.6 m と比較的大きいが、いずれの柱穴にも柱根が遺存しておらず、歪な平面形を呈するものが多いことから、主柱の抜き取りの際に穴の大きさが拡大されている可能性もある。なお、柱穴の深さは 0.3 ~ 0.75 m で、5 本主柱の方が相対的に深くなっていた。

前述したように、床面の中央では二段に掘り窪められた中央土坑（図 126 アミフセ部分）が存在していた。径 1.15 m の円形土坑で、この大きさで床面から 0.15 m 前後掘り下げ、さらに中心部分を 0.25 m ほど掘り込んでいた。坑底には厚さ 5 ~ 7 cm の炭化物層が堆積し、その上を覆う各層にも炭化物粒や炭化物の薄層が認められた。特に上から 2 層目の灰色粗粒シルト層内には、厚さ 5 mm 前後の炭化物層が何枚も挟まれており、遺構を確認した時点では、この炭化物層によって土坑の輪郭が縁取られていた。さらに、本来的には暗色の土であるにも関わらず、肩際の上部ではやや赤みを帯びており、あるいは熱を被っていた可能性も考えられる。

以上の屋内各施設に対し、建物外の間連遺構として排水溝がある。中央土坑の北側から谷 1 に向かって北西方向へ延びる溝で、谷 1 に繋がる 1.5 m ほどが擾乱によって失われていたものの、屋内分を合わせて延長 13.5 m を検出することができた。竪穴内においては幅 0.25 ~ 0.45 m、深さ 0.2 m 前後の小溝であるが、建物外では幅 1.7 ~ 2.2 m、深さ 1.1 m と規模を増し、断面形はしっかりした V 字形を呈していた。また、建物との間がちょうど地中梁の交差点に当たっていたため、詳細は不明であるが、溝の北東側には幅 1.0 ~ 1.45 m、高さ 0.1 ~ 0.2 m の堤が伴っており、おそらく北側の周堤から連続していたものと考えられる。一方、擾乱によって判然としなかった南西側についても、その南側の地表面と比べて標高がやや高くなっている、北東側ほどの規模ではないものの、西側の周堤から連続して堤状の高まりが構築されていた可能性が高いと考えられる。こうした高まりの盛土が崩落したのか、溝底から 0.35 m ほどは炭化物粒や明瞭灰シルトのブロックを多量に含んだ灰色シルトによって埋没しており、その上を 3 層である明瞭灰色から灰色のシルトや明オリーブ灰色粗粒シルトが覆っていた。

なお、建物内外の排水溝の接続に関しては、交差点の角にわずかに残った断面観察から、周壁にトンネルを穿ち、両者を貫通させていたことが判明した。さらに、本来であれば周堤の直下に当たる交差点内では、丸太（樹種：シャシャンボ）を半截し内側を削り貫いて作った長さ約 1.7 m、幅 0.25 m 前後の木樋が確認され、周堤の構築以前に念入りに水対策を施していたことが明らかとなつた。

出土遺物 竪穴建物の床面からは、排水溝西側の周壁際で口縁部を欠損した高杯、中心からやや西に

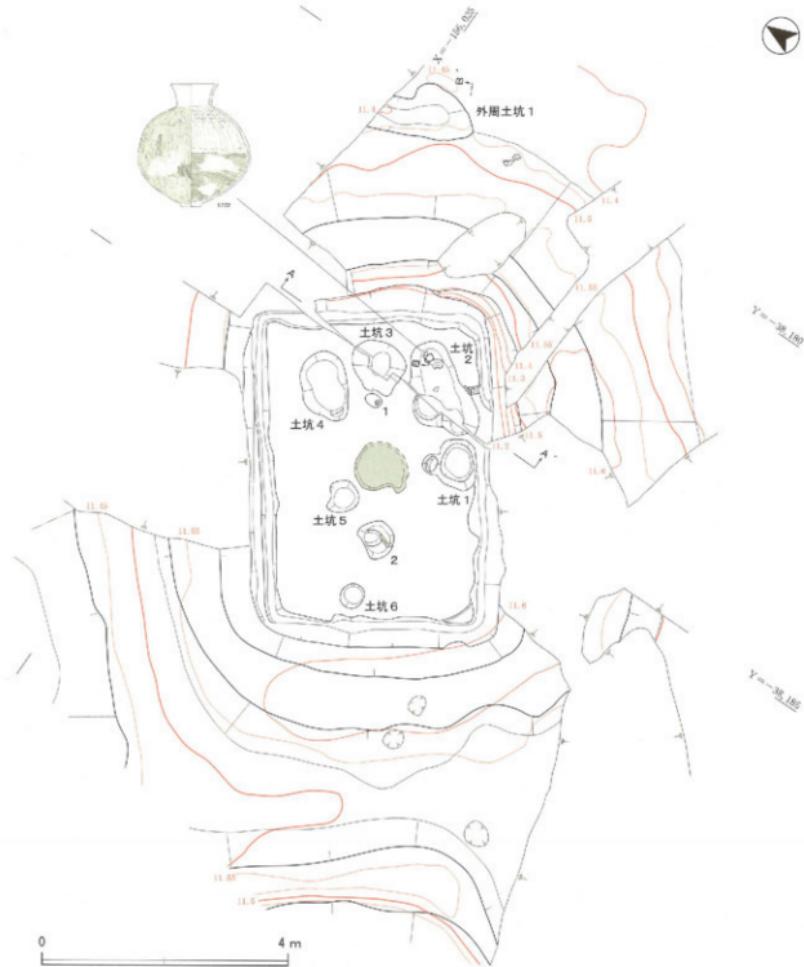
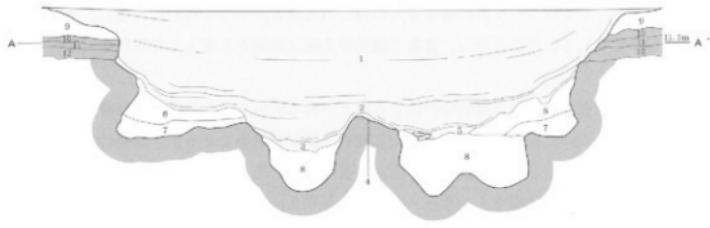


図128 壇穴建物2 平面図

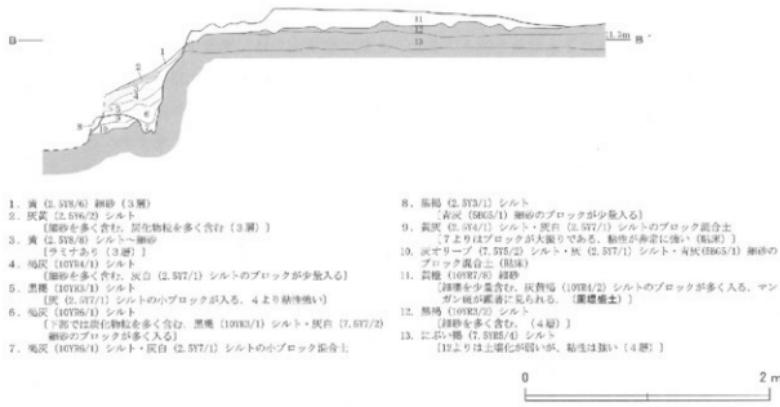
寄った南壁際で完形の壺が出土した。後者は口縁部を下に倒立した状態で出土しており、周堤上に置かれていたものが転落した可能性が考えられる。また、排水溝内からも、完形もしくはそれに近い筒状の器台や鉢が下層より出土している。

[壇穴建物2] (図128~132、図版46・47)

検出状況 2A-9c・9d区を中心に検出した壇穴建物で、壇穴建物1からは周堤の外縁間で14.7mの距離を置いて北東に位置し、また、南北側0.5mには後述する壇穴建物3が存在している。第2面



1. 明オーリーブ灰 (60YR7/1) → 明緑灰 (7.5GY7/1) シルト～砂質シルト (3層)
2. 緑灰 (7.5GY6/1) シルト・砂質シルト
〔1.2の緑灰に有機物を多く含んだオーリーブ灰 (60YR7/1) シルトを挟む〕
3. 灰 (5GY4/1) シルト
〔2と似るが、2より粘性が強い〕
4. 灰 (5GY4/1) シルト
5. 灰 (5GY4/1) シルト・緑灰 (7.5GY7/1) シルトのプロック層混土
6. 灰 (5GY4/1) シルト
〔緑灰の影響下で灰 (5GY4/1) を含む (灰～緑灰主体)、炭化物粒を多く含む。第3m以降までの緑灰 (7.5GY6/1) シルトのプロックが多く入る〕
7. 黄灰 (7.5GY6/1) シルト・灰 (5GY4/1) 粘土質シルト・灰 (10YR7/1) 粘土質シルトのプロック層混土
〔粘土～細砂を少量含む〕
8. 緑灰 (7.5GY6/1) シルト・灰 (5GY4/1) 粘土質シルト・灰 (10YR7/1) 粘土質シルトのプロック混合土
〔2と同様であるが、シルトが混じた粗粒のブロックが多く入る〕
9. 灰 (5GY4/1) シルト
〔粘土～細砂を少量含む、無機の炭化物粒を含む。径30mmまでのモザイクブロック (5GY7/1) シルトのプロックが多く入る。マンガン斑状着、(風化土)〕
10. 灰 (5GY4/1) シルト
〔粘土～細砂を少量含む、無機の炭化物粒を含む (4層)〕
11. 灰 (7.5GY5/1) シルト
〔粘土～細砂を多く含む、10より色調が強い (4層)〕
12. 灰 (7.5GY5/1) シルト
〔11と近似するが、砂層 (粘土～細砂) の包含がさらに増す (4層)〕



1. 灰 (5GY6/1) 細砂 (3層)
2. 黄灰 (7.5GY6/2) シルト
〔細砂を多く含む、炭化物粒を多く含む (3層)〕
3. 灰 (5GY6/8) 細砂
〔ナマアリ (3層)〕
4. 黄灰 (7.5GY6/1) シルト
〔細砂を多く含む〕
5. 黑褐 (10YR3/1) シルト
〔灰 (2.5GY7/1) シルトのプロックが少量入る〕
6. 黑褐 (10YR6/1) シルト
〔1部では炭化物粒を多く含む、黒褐 (10YR3/1) シルト・灰 (7.5GY7/2) 細砂のブリッジが多く入る〕
7. 黑灰 (10YR6/1) シルト・灰 (2.5GY7/1) シルトの小ブロック層混土
8. 黑褐 (2.5GY7/1) シルト
〔青灰 (5GY6/1) 細砂のブロックが少量入る〕
9. 黑灰 (2.5GY4/1) シルト・灰 (2.5GY7/1) シルトのブロック混合土
〔7よりモザイクブロックが多量である、粘性が非常に強い (粘土)〕
10. 沈没リード (7.5GY5/2) シルト・灰 (2.5GY7/1) シルト・青灰 (5GY6/1) 細砂のブリッジ層 (風化土)
11. 黑褐 (10YR7/5) 細砂
〔粘土～細砂を多く含む、(風化土)〕
12. 黑褐 (10YR4/2) シルト
〔細砂を多く含む、(4層)〕
13. にじみ層 (7.5GY5/4) シルト
〔12よりは土壌化が弱いが、粘性は強い、(4層)〕

図129 積穴建物2 断面図

周溝基10など上面の遺構との重複に加えて、調査地の北端で、かつ02-1工区と02-2工区2トレチの工区境に当たったため、遺構の遺存状況や調査条件は必ずしも良好ではなかったが、堅穴とその周囲に巡らされた周堤、北側の周堤外縁で土坑1基を検出した。

堅穴はN55°E方向に長軸を置いた長方形を呈し、長辺5.9 m、短辺4.4 mを測る。掘り方は旧地表面である4層上面から平均で0.8 mほど掘り下げられ、底面に灰オーリーブ色から灰色のシルトや灰青色細砂、黄灰色・灰白色シルトのブロック混合土によって2層にわたる貼床を施し、建物床面を構築していた。貼床の厚さは0.1~0.15 mで、床面から周堤上端までは0.9~1.0 mの高さを有していた。

堅穴内の埋土は、3層である緑灰色や黄色を基調とするシルトから細砂層と、周壁際を中心にその下に見られる褐灰色や黒褐色のシルト層に大きく分かれる。後者には黒褐・灰・灰白色シルトや灰白色細

砂などのブロックが多く含まれ、いずれの層も豊穴の外から内側に向かって斜めに堆積し、周壁際では0.35～0.4mの層厚を有していたことから、建物の機能停止後に周間から流入した周堤底土や周壁の崩落土と考えられる。

豊穴の周囲には、旧地表面上に豊穴掘削時の排土と考えられる灰色シルトや黄橙色細砂層を盛り上げて構築した周堤が残存していた。調査地外となった北側の一部が未検出であるが、周堤の外縁は長径約11m、短径約9mの楕円形を呈し、堤の規模は、南から西側が幅1.35～2.3m、高さ0.1m前後であるのに対し、北から東側については幅2.5～3m、高さ0.15～0.2mと、旧地表面の標高の低い側をより大きく造っていた。なお、周堤外縁までの面積は約70m²である。

豊穴建物の床面上では、中央土坑を含む7基の土坑や2基の主柱穴、壁溝を検出したほか、西壁の南半から南壁にかけて炭化物の広がりを確認した。炭化物には、長さ10～65cmほどの炭化材も含まれていたものの、主体はヨシの茎を束ねたような植物纖維で、南西コーナーでは明瞭に纖維の状態を観察することができた。床面に敷かれた敷物の可能性も考慮する必要があるが、西壁際で行った断面観察では、この纖維は周壁のかなり上位まで立ち上がっていたことから、豊穴建物1と同様に周壁より剥落した貼り壁の可能性が高いと考えられる。

壁溝は東壁の一部で途切れていた可能性があるものの、それ以外ではすべて検出された。周壁の下端から0.1～0.15mほど内側に位置していた西壁側を除けば、他は周壁直下に設けられており、幅0.15～0.3m、床面からの深さ0.1m前後を測る。また、北側の壁溝内では、溝底よりやや浮いた位置で溝に直交して渡された小枝材を3本分確認した。この材の性格については、良好な情報が得られた豊穴建物6・9の報告中で詳しく述べることとした。なお、壁溝内側における床面積は15.3m²である。

2基の主柱穴は、豊穴の長辺に平行して北・南壁溝の内層から1.3mの位置に置かれ、柱芯間隔2.2mを測る両柱穴の間には中央土坑が設けられていた。このうち、柱穴1の柱穴内には、長径0.3m、短径0.2mの掘り方よりわずかに細い直径17cmの主柱の基部（樹種：クヌギ節）が遺存していた。一方、やや不整な平面形を呈する柱穴2は、長・短径とも0.6mを超え、埋土の上層には3層である緑灰色シルト質極細砂が入り込んでいたことから、建物の機能を停止する際に柱を抜き取り、屋根材とともに持ち去ったものと推定される。両柱穴とも、床面から坑底までの深さは0.65mであった。

主柱穴間に設けられた中央土坑は、床面からの深さ0.1m程度の皿状の土坑で、平面は長径0.85m、短径0.75mの不整楕円形を呈する。埋土の中位には層厚5cm前後の炭化物層が挟在し、その下のオリーブ灰色砂質シルト層にも、熱を被った影響から赤色化した部分が認められたことから、炉であった可能性が高いと考えられる。

この中央土坑以外にも、床面上では前述のように6基の土坑が確認された。このうち、周壁から1.2mの距離がある土坑4を除き、その他の土坑はいずれも緑灰色シルトや灰色粘土質シルトのブロックが多く混在した土砂で埋まっており、建物の機能停止後に豊穴内に流入した土砂が土坑内にも及んでいたことが分かる。また、土坑1・6を除く4基の土坑内には、柱穴2と同様に3層が入り込んでいた。

東壁際のほぼ中央で検出した土坑1は、豊穴の長辺と平行して南北方向に長い長径0.85m、短径0.6mの楕円形土坑で、西側には長径0.35m、深さ0.1mほどの小穴が付随していた。床面から中央が凹んだ坑底までの深さは0.5m強で、断面倒鉢形の土坑内は下部が灰色シルト、上部が腐植物や炭化物粒を多く含んだ豊穴流入土によって埋没していた。

土坑2は、検出が2か年度となつたために正確な形状を把握し得なかつたが、長径1.7m、短径1.0



図130 穫穴建物2 壁溝部有機物検出状況

m、床面から坑底までの深さ0.6m弱の不整梢円形を呈する。土坑の下部は各シルトのブロックに粗砂のブロックが加わった土砂で埋没しており、建物の機能停止後、風化して崩落し始めた周堤盛土や周壁がまずこの土坑内に流れ込んだのであろう。なお、この層の上面からは、壺の大形破片やシカの頭骨の可能性がある獸骨片が出土した。

土坑3は、長径0.9m、短径0.8mの丸みを帯びたおにぎり形を呈し、床面から坑底までの深さは最深部で0.6m強を測る。土坑内の大半は土坑2と同じ土砂で埋没し、さらにその上を数層の竪穴流入土が覆っていたため、入り込んだ3層は層厚0.1m前後と薄かった。

土坑4は、長径1.15m、短径0.75m、床面から坑底までの深さ0.3mの梢円形土坑で、埋土下部に堆積した灰色シルトの上を竪穴流入土が薄く覆い、さらにその上に3層が0.1mほど入り込んでいた。

中央土坑の西側で検出した土坑5は、径0.55m前後、床面から坑底までの深さ0.2m足らずの小規模な不整円形土坑である。周壁から1.2m離れているためか、竪穴流入土の堆積は認められず、2層に分かれる灰色粗粒シルトの上を3層が薄く覆っていた。

南壁際の中央やや西寄りで検出した土坑6は、径0.4m前後、床面から坑底までの深さ0.3m弱の小規模な円形土坑である。深度が浅いためか、土坑内は竪穴流入土のみで埋没していた。

以上の各土坑の機能・性格を特定し得る直接的な証拠は得られなかつたが、土坑1に関しては、他の建物検出例から貯蔵穴であった可能性が高いと考えられる。それ以外、特に柱穴1の周囲に掘り込まれた土坑2~4については、建物の機能時に存在していたとすれば、位置や土坑の規模から極めて不都合

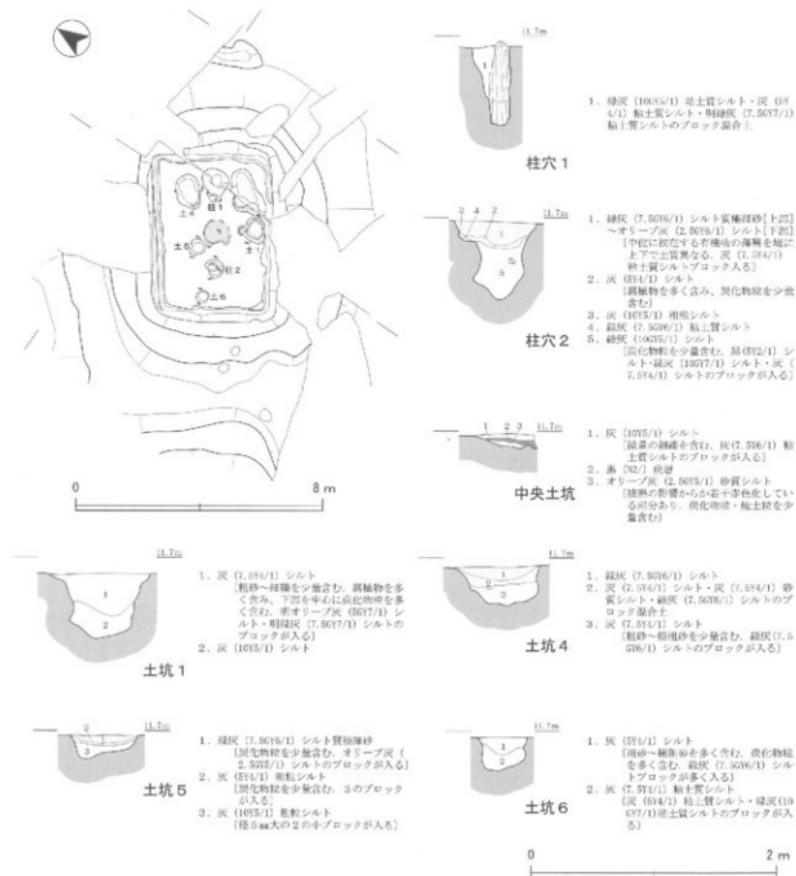


図131 穴室建物2 主柱穴 土坑 平・断面図

な存在であったことは想像に難くなく、むしろ、機能停止時に生活残滓などを廃棄する目的で掘られたものと捉えた方が妥当であろう。

堅穴内には、建物の上屋構造を推定する建築部材などはほとんど残されていなかったが、周堤の調査において上屋に関連する可能性がある遺構を検出した。それは、周堤の盛土を5cmほど掘り下げた段階に確認した径5cm前後、検出面から深さ1~8cmの小穴で、北東コーナーの空白部分を挟んでその両側に9基が存在していた。特に、北側の6基は周堤上端の外寄りに0.4mの等間隔で整然と並んでおり、これらの穴が人為的な遺構であることは間違いないであろう。このうち、a・cは穴の断面形が逆「レ」字状を呈し、hは完全に堅穴側へ斜めに向いていた。また、iは底面が尖っており、これらの穴に杭のようなものが挿し込まれていたことを物語っている。

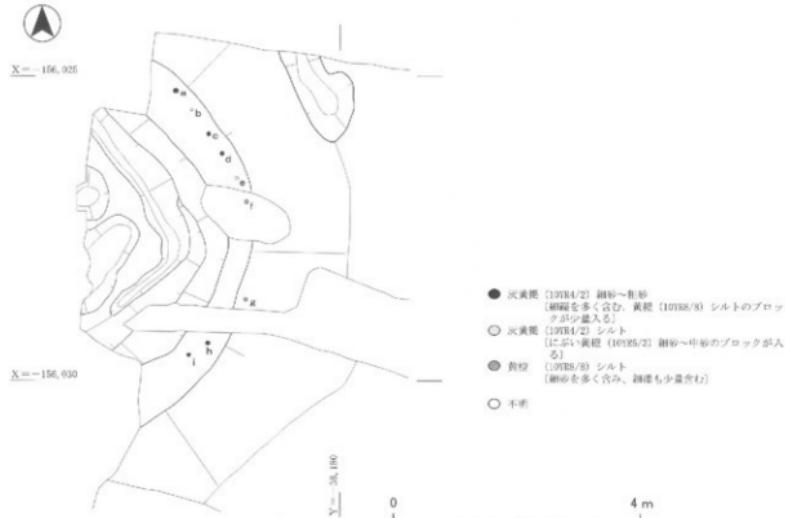


図132 堅穴建物2 周堤上ピット 平面図

この他、北壁側の周堤外縁では、3層があり込んだ深い溝状の土坑（外周土坑1）を検出した。西側が調査地外となってしまったため、今回確認し得た長さは1.6mに留まるが、幅は0.6～0.9m、検出面から坑底までの深さは0.05mを測る。雨落ち溝のような機能が推定され、本書では以後、周堤外縁を巡る同様な土坑・溝状遺構を「外周土坑」と呼称することとした。

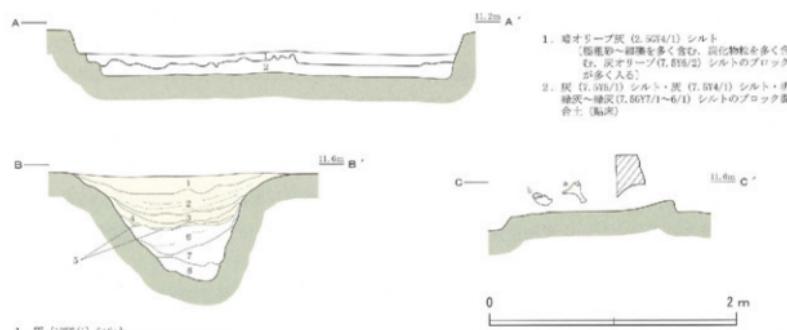
出土遺物 堅穴および土坑内から、各器種の土器や砂岩製の敲石状の礫、微細剥離痕のあるサヌカイト剥片が出土し、さらに堅穴内に入り込んだ3層内からはサヌカイト製の石錐が出土した。堅穴の床面付近から出土した土器は、筒状の器台以外は破片が多く、剥落した貼り壁の上に載るように出土していることから、建物の機能停止後に投棄されたものと考えられる。

〔堅穴建物3〕（図133、図版48）

検出状況 2A-10c・10d区を中心とし、周堤上ピットを中心に検出した堅穴建物で、前述したように堅穴建物2からは周堤の外縁間で0.5mの距離を置いて南西に位置する。北東部分が擾乱、南側が第2面周溝墓10の周溝によって大きく失われていたため、建物全体を検出することはできなかったが、堅穴とその周間に巡らされた周堤、建物内から外へ延びる排水溝を検出した。

堅穴は東辺長が4.0m、西辺長が3.6m、これらに直交する東西方向の長さが3.15mをそれぞれ測る台形を呈し、長軸はN34°W方向を指す。掘り方は旧地表面である4層の上面から0.6～0.7m掘り下げられ、底面に灰・明緑灰・緑灰色の各シルトや灰色粘土質シルトのブロック混合土によって厚さ0.1m前後の貼床を施し、建物床面を構築していた。床面から周堤上端までの高さは0.6～0.7mである。

規模が小さかったためか、堅穴内は床面全体が灰オリーブ色シルトのブロックや炭化物粒を多く含んだ層厚0.1～0.2mの暗オリーブ灰色シルトで覆われ、その上に3層である緑灰色砂質シルトや明オリーブ灰色シルトが入り込み、さらに周堤を含む建物全体を淡い灰色シルトが被覆していた。



1. 砂 (1907/1) シルト
〔鉄鉱・マンガン鉱が礫層に見られる〕
2. 明オーリープ灰 (5G7/1) シルト
〔上部は軟化によりやや褐色系を帯びる、有機物の薄層を挟む〕
3. 硬 (10G7/1) 砂質シルト
4. 砂 (7.5Y4/1) シルト
〔風化・溶食の跡を少叢含む、微量の鉄化物を含む〕
5. 軟 (10G7/1) シルト
6. 砂 (7.5Y4/1) シルト
〔鉄鉱・錆斑を多く含む、有機物の薄層を挟む、明オーリープ灰 (5G7/1) シルトのワックが多く入る〕
7. 砂 (7.5Y4/1) シルト・砂 (7.5Y4/1) シルト・硬 (7.5G4/1) シルトのワック混合土
8. 砂 (5M5/1) 砂土質シルト
〔砂 (5M4/1) シルトのワックが多く入る〕

図133 積穴建物3 平・断面図

堅穴の周囲には、旧地表面上に堅穴掘削時の堆土と考えられる黄灰色シルト層を盛り上げて構築した周堤が残存していた。北東と南から西側が検出できなかつたため、正確な全体形状・規模を明らかにすることはできないが、北側周堤の一部が排水溝によって途切れていますから、上向きの「C」字形を呈する。堤の高さは0.15～0.2mで、北から東側が幅1.1～1.95mであるのに対して、西側は2.75mとかなり幅広に造られており、東西方向の周堤外縁の距離は7.7mに達する。なお、周堤外縁までの面積は、おそらく45m²を有していたものと推定される。

堅穴建物の床面上では、柱穴状の円形土坑1基と北壁から西壁際で断続的ながら壁溝を検出した。土坑は東辺の中央、周壁から0.5m内側に位置し、径0.3m、床面から坑底までの深さ0.2mを測る。深度が浅いため主柱穴とは捉え難いが、上屋に関連する遺構であった可能性は考えられよう。壁溝はいずれも周壁下端から5cm前後内側に設けられ、幅0.15～0.2m弱、深さ0.05～0.1mを測る。なお、壁溝内側における床面積は9.8m²である。

前述した北側周堤の途切れた箇所では、堅穴内から谷1に向かって排水溝が北西方向に延びていた。ただし、上面は大きく凹んでいたものの、周堤は完全には開削されておらず、堅穴内とは周壁に穿たれた長径0.15m、長さ0.2mのトンネルによって繋がっていた。溝の規模は、周壁上部幅0.9m、その外側の旧地表面上で1.3m、溝底までの深さ0.85mをそれぞれ測り、溝底面の高さは、周堤付近から谷1までの2.5mの間に0.2m前後下がっていた。断面観察用のアゼを溝の走行方向に対して斜めに設定してしまったため、図133にはうまく表されていないが、断面形は側壁が70°前後で立ち上がる逆台形を呈し、溝内は下半が上部からの崩落・流入土と考えられるシルトブロックが多く含んだ灰色基調のシルト層、上半が3層によって埋没していた。なお、トンネル内には1片の土器片が詰められていた。

出土遺物 堅穴内からの出土遺物は少なく、埋土下部から出土した高坏坏部とサヌカイト剣片、上部である3層から出土した高坏を図示し得たのみである。特筆されるのは、排水溝内から高坏脚部とともに出土した長頸壺で、残存率50%程度の体部の器表面に躍動感溢れる「竜」の絵画が描かれていた。この他、周堤の外縁沿いには、長頸壺や短頸壺・鉢など残存率の高い土器が残されていた。

〔堅穴建物4〕（図134～138、図版49～51）

検出状況 2A-9f・9g区を中心に検出した堅穴建物で、堅穴建物1からは周堤の外縁間で3.5mの間を置いて南東に位置し、北側の堅穴建物2とは23mの距離を有している。北東と南西部分が地中梁の交差点によって失われ、堅穴建物2と同様に調査が2か年度にわたった影響で東半の埋土が著しく酸化するなど、調査条件は必ずしも良好ではなかったが、堅穴とその周囲に巡らされた周堤、周堤の外縁で3基の外周土坑を検出した。

堅穴はN80°E方向に長軸を置く両短辺が丸く張り出した小判形を呈し、長辺5.5m、短辺3.7m前後を測る。掘り方は旧地表面である4層上面から0.5～0.6m掘り下げられ、底面にオリーブ灰・緑灰・明緑灰色の各シルトブロック混合土や、灰色シルト・灰白色細砂のブロックを多く含んだ明オリーブ灰色シルトによって2層にわたる貼床を施し、建物床面を構築していた。ただし、02-1工区で行った西半の調査では、床面の認定に手間取ったために貼床の上層を削り込んでしまい、この貼床が存在しなかつた西壁際において、中央幅0.3m、高さ0.1m足らずの細長い半月状の段を削り出してしまった。貼床の厚さは0.1～0.2mで、床面から周堤上端までは0.6～0.65mの高さを有していた。

堅穴内の埋土は、数層に細分可能な灰色シルトと、その上を被覆した3層である灰白から明オリーブ灰色の粗粒シルトや黄橙色の極細砂から細砂に大きく分かれる。前者には明オリーブ灰色シルトや細砂



図134 竪穴建物4 平面図

のブロックや炭化物粒が多く含まれ、竪穴の中央部では厚さ0.05mに満たないのに対し、周壁際では0.3~0.4mの層厚を有していることから、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土と推定される。

竪穴の周囲には、旧地表面の上に竪穴掘削時の排土と考えられる黒褐色シルト質細砂や灰色シルトを盛り上げて構築した周堤が残存していた。北東および南から南北隅にかけての部分が検出できなかつたが、周堤の外縁は長径10.3m、短径約9.4mの楕円形を呈し、周堤外縁までの面積は約75m²を有する。堤の幅は2.05~2.6mと全体にわたって大きな差異は認められないものの、高さに関しては北側から西側が0.1m前後であるのに対し、東側は0.2~0.3mと高く、上端面も幅狭となっていた。

竪穴建物の床面上では、中央土坑とその両側に配された2基の主柱穴、土坑1基や壁溝を検出したほか、東壁から南壁の東半にかけて炭化物の広がりを確認した。炭化物はヨシの茎を束ねたような植物纖維で、周壁際に流入したシルト層の上に載るように床面から5cm程度浮いて検出された。他の建物と同

様に周壁に貼り壁が施され、それが剥落してずり落ちた可能性が考えられよう。

壁溝は、西壁から南壁西半を除く各周壁下において確認された。ただし、西半については、前述のように貼床の上部を若干削り込んでしまったことから、本来は存在していた可能性もある。北壁西半の壁溝の幅が東半より幅狭であるのも、その影響であろう。東半の壁溝で規模を示すと、幅0.25~0.35m、床面からの深さ0.05m前後で、周壁側の肩部には図137で示したように長さ0.1~0.25m、幅0.05mを測るオーリープ黒色シルトの落ち込みが列状に並んでいた。周壁際に立ち巡らされていた壁板の痕跡である可能性が考えられるが、その場合、貼り壁の可能性を示した植物纖維との関係が問題となろう。なお、壁溝および床面の精査中に、東壁際では内側に幅0.25m、深さ0.05mの溝がもう1条巡っていたことが判明した。この溝は、丸く張り出した周壁に対し北東・南東コーナーを結んで直線的に設けられており、西壁側で削り出した段の内側のラインとはほぼ平行している。おそらく建築当初の建物は、内側の周壁と段の間を床面とした長辺4.6mの長方形を呈し、その後、周壁を削り込むことで両短辺を丸く張り出させ、最終的に壁溝内床面積14.2m²の建物が構築されたと考えられる。

2基の主柱穴は、豎穴の長辺に平行して両短辺中央の周壁下端から1.25mの位置に置かれ、柱芯間隔は約1.5mを測る。いずれの柱穴とも長径0.5~0.6mの歪な楕円形を呈し、柱根の遺存も認められなかったことから、建物の機能を停止する際に主柱を抜き取り、屋根材とともに持ち去ったものと推定される。その際に何らかの儀礼的行為が執り行われていたことを物語っているのか、柱穴1の中には高杯が入れられていた。なお、柱穴2には、上部に3層が入り込んでいた。

主柱穴間の中心には、長径0.7m、短径0.6mの中央土坑が存在していた。床面からの深さが0.1m足らずの皿状の土坑で、坑内には真っ黒な炭化物層が入っていたことから、炉であった可能性が高い。

中央土坑から0.55m南側では、円形土坑を1基（土坑1）検出した。工区境のため東半の調査を行うことができなかつたが、坑内は炭化物粒やオーリープ灰色シルトの小ブロックを多く含んだ暗オーリープ灰色粘土質シルトで埋まっており、南北方向の径は0.45m、床面から一段落ちた坑底までの深さは0.3mを測る。

以上の屋内施設に対し、屋外の関連遺構としては、周堤の外縁で確認した3基の外周土坑を挙げることができる。このうち外周土坑1は、北側西半から西側の約11mにわたって検出した溝状を呈するもので、「外周溝」と呼称した方が適当かもしれない。幅1.45~2.4m、旧地表面からの深さ0.1~0.15mを測り、坑内には3層が落ち込んでいた。これに対応する東側の周堤外縁では、船底状を呈する外周土坑2を検出した。土坑の規模は、長さ5.2m、最大幅1.65m、旧地表面から最深部までの深さ0.35mで、坑内には3層が大きく入り込んでいたが、その下には黒褐色シルト質細砂、ならびにベースであるにぶい黄褐色細砂のブロック土に黒褐色シルトブロックが加わった土が上下に堆積していた。前者は建物の機能時に堆積した泥、後者は土坑を掘削時に形成された層であろう。この他、03-1工区1トレチの北西隅では、3層を埋土とする深さ0.2mの土坑状の落ち込みが検出され、位置関係から本建物に関連する外周土坑の可能性を考えた（外周土坑3）。大半が工区境の擾乱と重なってしまったため全体の形状・規模は不明であるが、図134で示した等高線からも明らかのように、擾乱を扶んで西側の02-1工区東端も周囲より若干凹んでおり、深度は非常に浅いものの土坑自体はこの部分まで続いている可能性が考えられる。

さて、検出を終えた周堤の表面には黄橙色を主体とする斑紋が見られ、これが垂木尻などの上屋構造に関連する遺構の痕跡であるのか、盛土内に含まれるブロック土であるのかが課題となった。そこで、

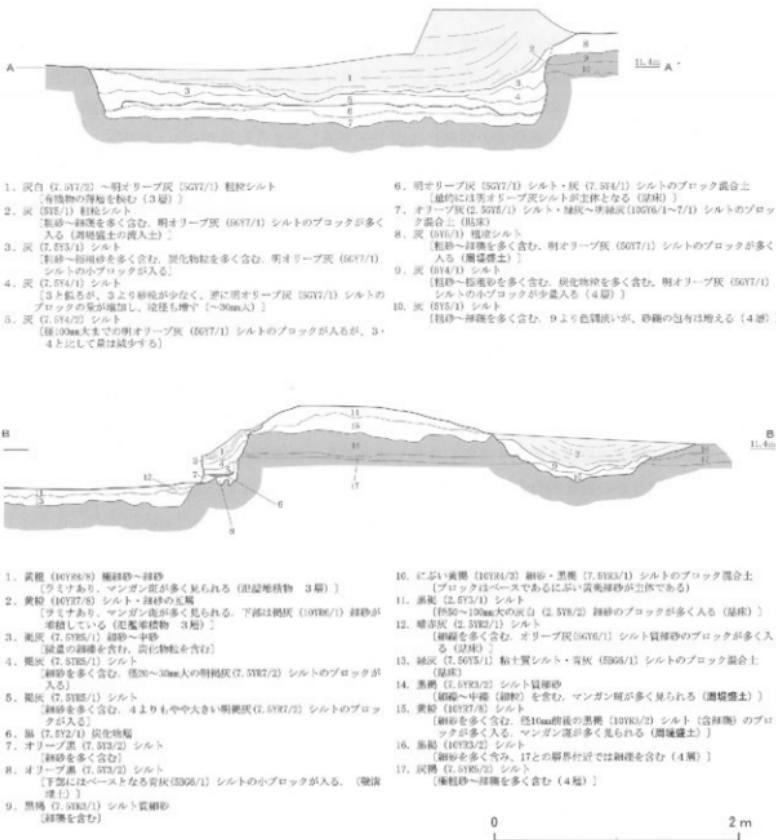


図135 積穴建物4 断面図

02-2工区の調査において積穴建物2と同様に東側の周堤盛土を少しづつ削っていったところ、周堤外側の斜面を中心に柱穴状あるいは杭穴状の小穴を多数確認することができた(図137・図版51)。

柱穴状の小穴のうち、a・bは盛土を15cmほど下げた段階で確認したもので、径0.15~0.2m、深さ0.05m前後を測り、前者は黒褐色シルト、後者はそれに黄橙色シルトのブロックが混在していた。掘乱によって判然とはしないものの、外周土坑2が途切れ、周堤外縁が尻尾状に張り出している箇所に位置的に対応していることから、入口施設に関連する構造の可能性も考えられる。このほか、39・40とした穴も径0.17mを測り、検出面からの深さ0.3m以上としっかりしていた。

杭穴状の小穴は、主に柱穴状小穴a・bより南側を中心で確認された。混在するブロック土の違いなどによって分けることが可能であるものの、埋土の主体は黄橙色シルト質細砂で、先端が尖ったものが多く認められたことから、これらの小穴の多くは杭状のものが入れられていた痕跡を見なすことが可能

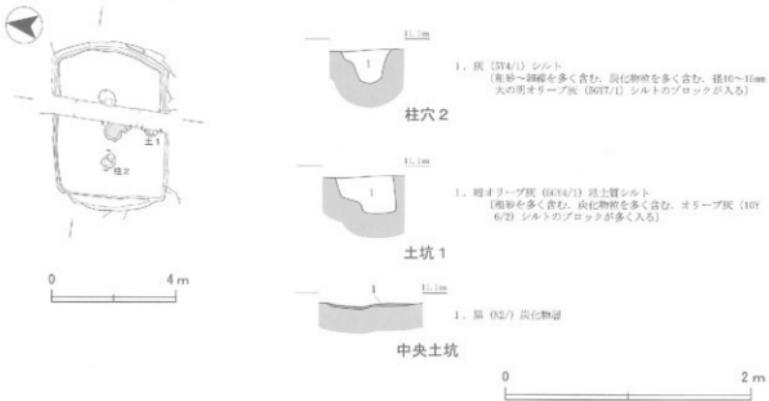


図136 積穴建物4 主柱穴 土坑 平・断面図

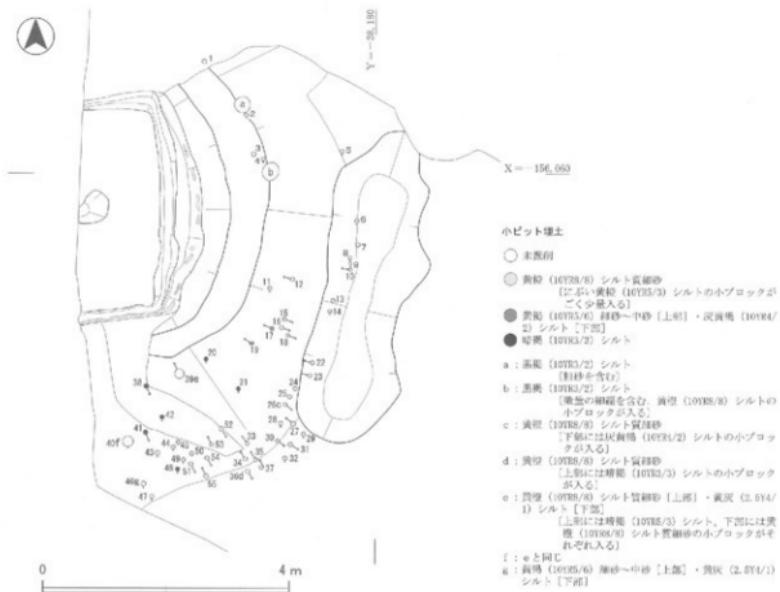


図137 積穴建物4 周堤上ビット 膜溝内板材痕跡 平面図

である。注目されるのは、直に打設されたもの18本に対して、上端が建物内あるいはその逆方向へ向くものが各12本存在することで、図137には矢印によってその向きを示した。検出面からの深度の平均は、垂直が7.2cm、内9.1cm、外9.9cmで、10cm以上の本数も垂直4本、内2本に対して、外5本と、建物外に上端を向けたものがよりしっかりと打設されていることが判る。上屋構造との関連を想定する

ならば、葺き下ろされた屋根を支える支持材のような役割が想定できよう。

出土遺物 本建物からは、柱穴1から出土した高壺以外にも比較的多くの土器が出土しており、図138にその位置を示した。興味深いのは、南壁際の床面から長頸壺の口頸部が3点も出土していることで、うち南東コーナーから出土した2点は口縁を下にした状態で立っていた。また、外周土坑2からも、南に寄った位置で数個体の土器がまとまって出土した。いずれも坑底から0.1m以上浮いた黒褐色シルト質細砂層の上で確認できたことから、建物の機能停止時に廃棄されたものと推定される。

【竪穴建物5】（図139～142、図版52）

検出状況 1A-10e・10f区と2A-1e・1f区で検出した竪穴建物で、今回調査を行った竪穴建物の中では最も東に位置する。竪穴とその周囲に巡らされた周堤を確認したが、周堤の北東部は調査地外となり、竪穴の北壁からその外側は、第2面の溝25によって大きく失われていた。

竪穴は南北長約5m、北辺長4.3m、南辺長4.5mを測る台形を呈し、東壁はN23°E方向を向いて

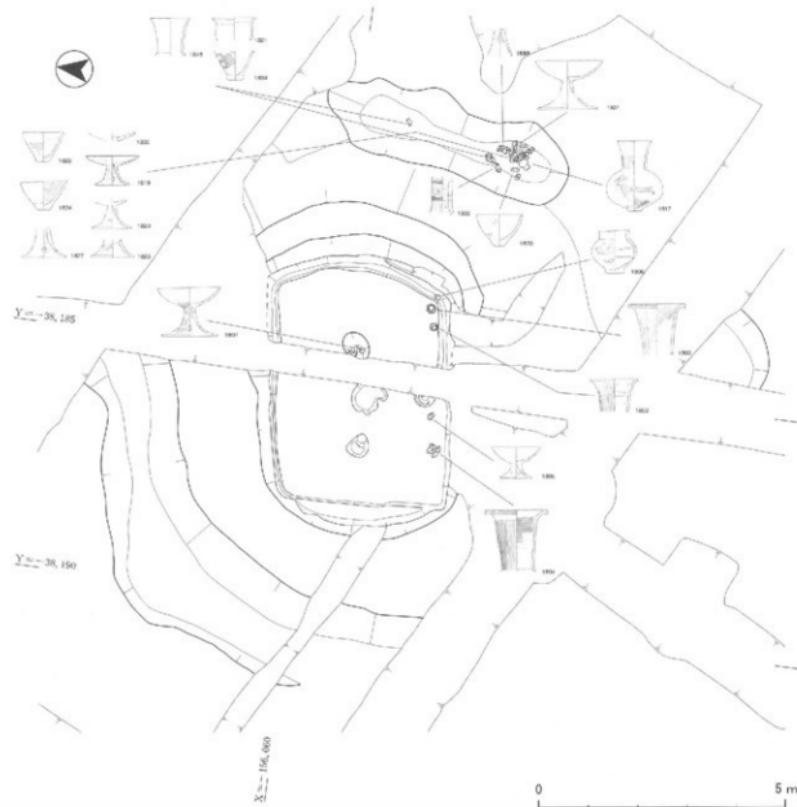


図138 竪穴建物4 遺物出土状況図

いる。掘り方は旧地表面である4層上面から平均で0.6m掘り下げられ、底面最下部にオリーブ黒色のシルトブロックを多く含む灰色細砂層、その上にベースである青灰色細砂のブロックを含むオリーブ黒色シルト層によって計3層にわたる貼床を施し、建物床面を構築していた。貼床の厚さは0.1~0.2m弱で、床面から周堤上端までは0.65~0.75mの高さを有していた。

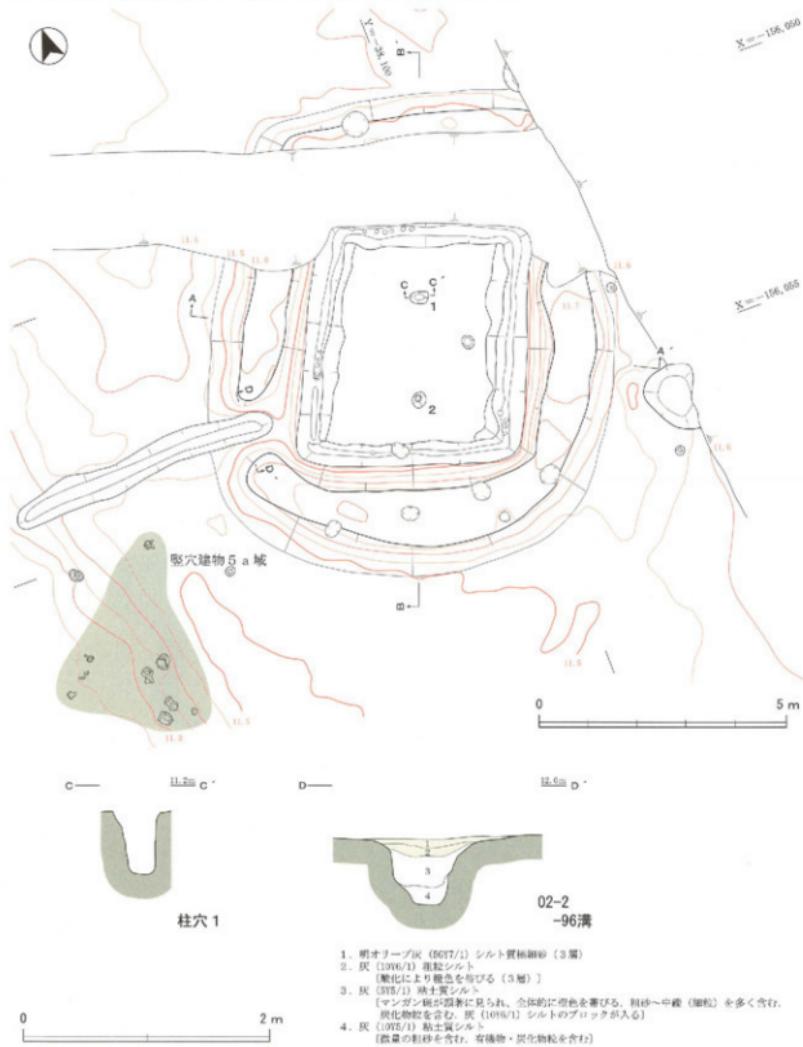


図139 堅穴建物5 平・断面図

1. K. (SWL) 種類
生態: 食虫性で多くの令、西側では幼虫の活動が生じることなく、部分の幼虫が寄生する。
特徴: フルーツリーフ (FLR) ブラット 対照実験

2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22.

3. 豊 (F) (FLR) ブラット 対照実験
生態: 上部に付いていたものと下部に付いていたものとで、生态的に異なっている。
特徴: 中央部で繁殖する。繁殖後は下部に移動する。
上部に付いていたものと下部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

4. 4. FLR (FLR) ~2.37% 中央部で繁殖する。繁殖後は下部に移動する。
上部に付いていたものと下部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

5. 5. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

6. 6. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

7. 7. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

8. 8. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

9. 9. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

10. 10. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

11. 11. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

12. 12. FLR (FLR) ブラット 対照実験
生態: 下部に付いていたものと上部に付いていたものとで、生态的に異なっている。

13. 試験 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む
14. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
15. オリジナル (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
16. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
17. オリジナル (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
18. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
19. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
20. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
21. 空瓶 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
22. 空瓶 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)

13. 試験 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む
14. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
15. オリジナル (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
16. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
17. オリジナル (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
18. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
19. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
20. 対照 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
21. 空瓶 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)
22. 空瓶 (FLR) ブラット
特徴: [種群] 種を多く含む (対照実験上)

11



- 原オリーブ [7, 575/3] 植物→植物可
[柱材が倒壊した部分に落込んだ砂層]
 - 脚原 [本家の脚材の部分]
 - 脚オリーブ [2, 564/4] 基土シルト
[セイシキスルト、アカヒダシルト、アカヒダシルト]

図140 竪穴建物5 断面図



図141 竪穴建物5 聖満際有機物検出状況

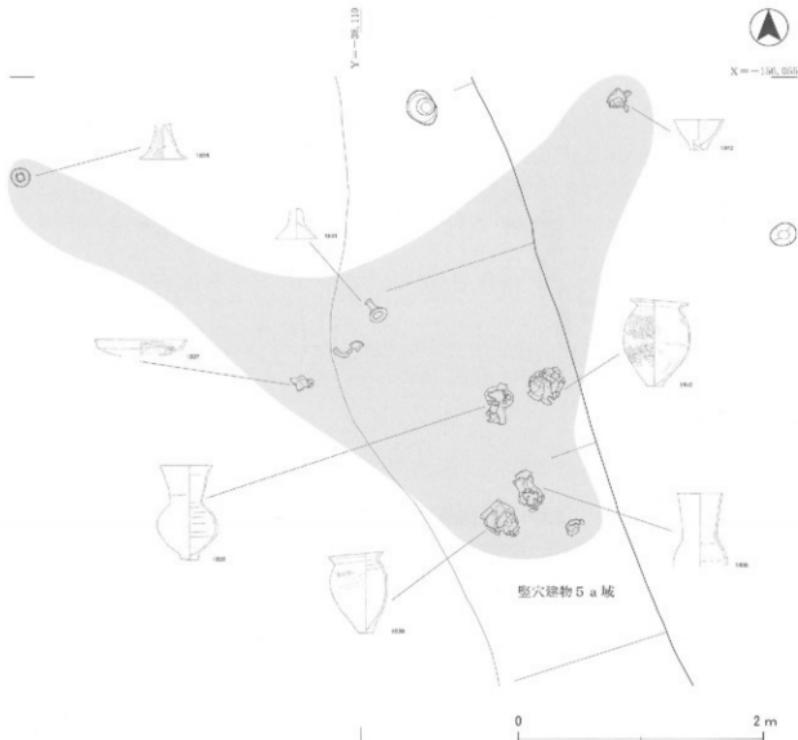
竪穴内の埋土は、床面全体を覆う黒褐色シルトの上にシルトブロックを多く含んだ暗色の粘土質シルトから砂質シルト層が堆積し、さらにその上を3層である緑灰色シルトから明オリーブ灰色砂質シルトが被覆していた。ブロック土混じりの土砂の中には、炭化物粒や焼土粒が多量に挟在する層も認められ、竪穴中央部では厚さ0.1m足らずであるのに対し、周壁際では0.3mほどの層厚を有していることから、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土と推定される。

竪穴の周囲には、旧地表面の上に竪穴掘削時の排土と考えられる暗褐色から褐色のシルト層を盛り上げて構築した周堤が残存していた。周堤の外縁は北側がやや直線的となった長径9.9m、短径8.15mの梢円形を呈し、周堤外縁までの面積は約70m²を有する。周堤の規模は、幅が南側で1.95~2.25m、西側で1.8~1.95mであるのに対し、東側は1.45~1.75mで、高さも南・西側が0.15~0.2mを測るのに対して東側が0.1~0.15mと、東側の方が相対的に小さくなっている。なお、竪穴に近い周堤の盛土の中には、炭化物や焼土のブロックが多く含まれていた。

竪穴建物の床面では、主柱穴2基と円形の浅い凹み、壁溝を検出したほか、東壁際の中央と西壁際の南半で炭化物の広がりを確認した。炭化物の大半はヨシの茎を束ねたような植物纖維と考えられるが、遺存状況は悪く、詳細な観察はできていない。東壁際では、この植物纖維の上に炭化材が載っていた。

壁溝は全周し、いずれも各周壁下において確認された。幅0.35~0.65mと幅太で、床面からの深さは0.05~0.2m弱である。溝内はベースである青灰色細砂の小ブロックを含んだオリーブ黒色シルトと黒褐色シルトで埋没し、溝底では部分的に杭穴状の落ち込みが認められた。なお、壁溝内の床面積は13.6m²を測る。

2基の主柱穴は、竪穴の長辺に平行して北・南壁溝の内肩から0.7~0.9m内側に置かれ、柱芯間隔は2.05mを測る。このうち、柱穴2は長径0.3m、短径0.25m、床面からの深さ0.55mを測る梢円形の柱穴で、掘り方内には直径14cmの主柱の基部（樹種：クヌギ節）が遺存していた。一方、柱根の遺存が



かれ、上層の粘土質シルト層内には、炭化物粒や灰色シルトのブロックが多く含まれていた。

出土遺物 窓穴内には遺物は一切残されていなかったが、建物から1.7～4mほど離れた微高地縁辺の地表面上から長頸壺や甕・高杯・有孔鉢といった数個体の土器が出土し、今回、「窓穴建物5a域」と呼称して出土状態を記録した。残存率が70%を超える土器も含まれており、出土位置から考えても、本建物に居住していた人間が残していくものと考えられる。

また、後に詳しく述べることとするが、次に報告する窓穴建物6との間にも、「東側居住城a～e域」とした土器のまとまりが5か所確認された。すべてが本建物に関連していたと断定することはできない

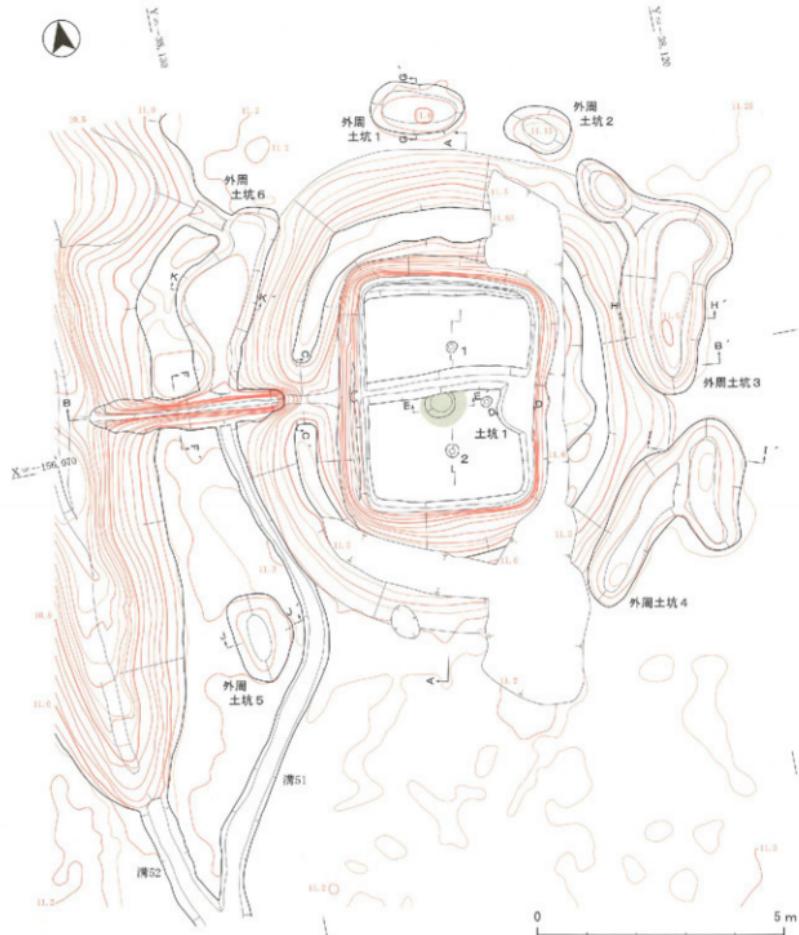


図143 窓穴建物 6 平面図

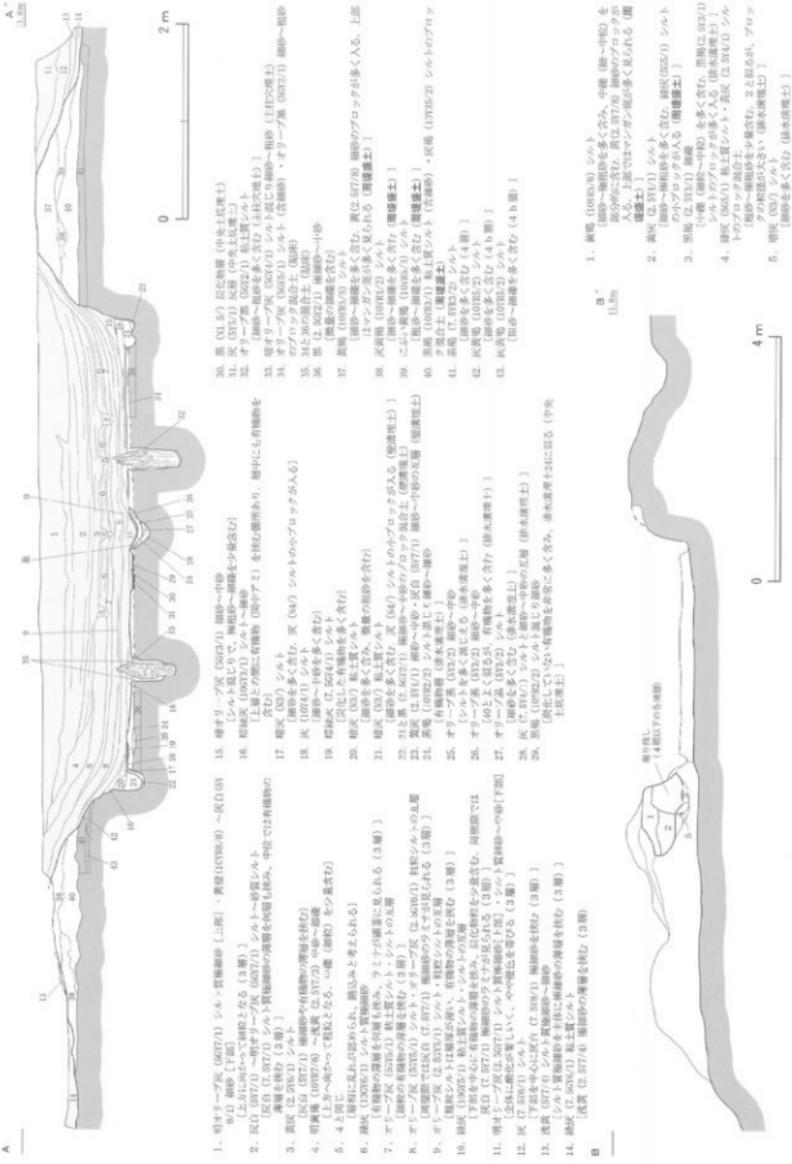


図144 窓穴建物 6 断面図

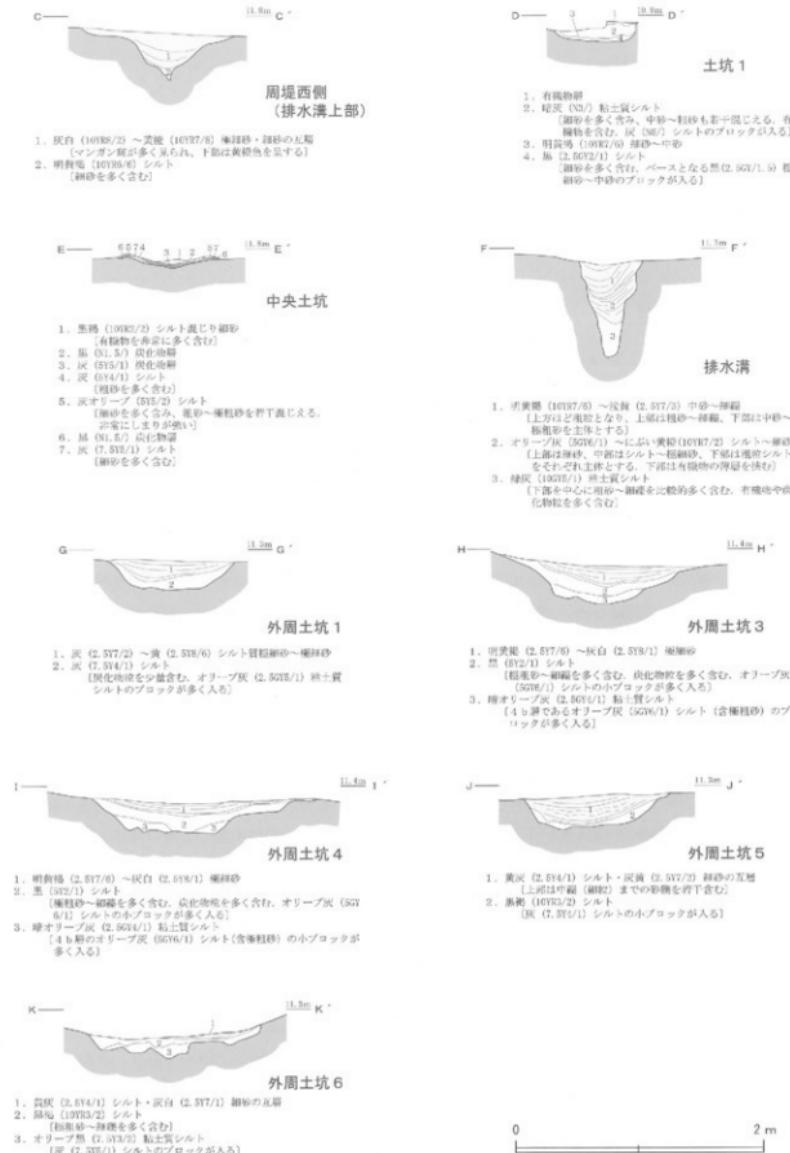


図145 積穴建物 6 主柱穴 土坑 断面図

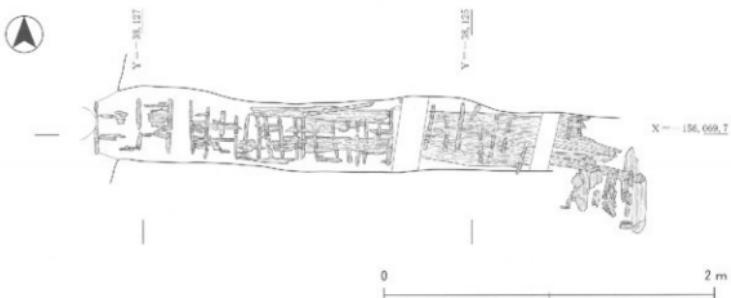


図146 壺穴建物6 排水溝 平面図

が、30個体以上の多量の土器が捨てられていたd・e域（図版89-2）などは、焼土面2・3との間に5m程度の距離しか空いていないことから、やはり壺穴建物5の居住者が残した可能性が極めて高いと考えられる。

【壺穴建物6】（図143～147、図版53～57）

検出状況 谷2に隣接する2A-3g・3h区を中心に検出した壺穴建物で、周堤外縁間の距離で19.5m北東に存在する壺穴建物5とともに、東側居住域の北半に位置している。地下埋設管の攪乱や研究会の側溝によって一部が失われていたが、遺構の遺存状況は比較的良好で、壺穴とその周囲に巡らされた周堤、壺穴内から谷2に向かって延びる排水溝、周堤の外縁に設けられた外周土坑を検出できた。

N10.5°E方向に長軸を置いた壺穴は、両短辺がやや丸張り出した隅丸長方形を呈し、長辺は上端で約6.2m、短辺は4m以上を測る。大阪府教育委員会の指示により保存措置を講じることとなつたため、床面以下はトレーナによる断ち割り調査を実施したのみであるが、掘り方は旧地表面である4層上面から0.5～0.55m掘り下げられ、底面にオリーブ灰色シルトとオリーブ黒色細砂から粗砂のブロック混合土、あるいはこれに黒色の細繊砂から中砂を加えた土によって貼床を施し、建物床面を構築していた。貼床の厚さは0.05～0.1mで、床面から周堤上端までは0.8～0.9mの高さを有していた。

壺穴内には3層が大きく入り込み、埋土の大半を占めているが、周壁際では暗オリーブ灰色・暗緑灰色をした細砂から中砂や暗灰色シルトなどが斜めに堆積し、その一部は床面と3層の間にも認められた。これらの層の境には炭化した植物繊維が挟在し、層中にも灰色シルトの小ブロックが混在していたことから、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土と推定される。

壺穴の周囲には、旧地表面の上に壺穴掘削時の排土と考えられる黄褐色あるいは灰褐色のシルト層や黒褐色粘土質シルト層を盛り上げて構築した周堤が残存していた。周堤の外縁は長径9.9m、短径8.8mの楕円形を呈し、周堤外縁までの面積は68m²を有する。周堤の規模は、幅が1.4～2.2m、高さが0.3～0.45mで、旧地表面の標高が低い北西側の堤が他よりも0.1m前後高くなっていた。なお、堤の下を排水溝が貫通する西側中央の上端面は、溝の影響で沈下したのか0.3m以上凹んでおり、また、外周土坑3と4の間は、外肩の傾斜が緩くて外縁がやや張り出し、内側の肩も凹んで上端面が狭まっていた。

壺穴建物の床面上では、中央土坑とその両側に配された2基の主柱穴、柱穴状の小穴と壺蓋土坑各1基、土坑を起点に床面を横断し屋外へ延びる排水溝、ならびに壺溝を検出したほか、東壁や南壁の壺溝内では炭化物の広がりを確認した。炭化物はいざれもヨシの茎を束ねたような植物繊維と推定され、東

側はあまり遺存状態が良好でなかったが、南側では周壁の下端付近に向きを逆えて斜めに貼り付けた状態をわずかながらも観察することができた。

壁溝は全周し、いずれも各周壁下において確認された。幅0.15～0.2 m、床面からの深さ0.1～0.15 m強を測り、溝内は主に暗灰色粘土質シルト層によって埋没していた。先後関係を明確にすることはできなかったが、北側には内側にもう1条溝が掘られており、西に寄った位置では、溝に直交して外側の

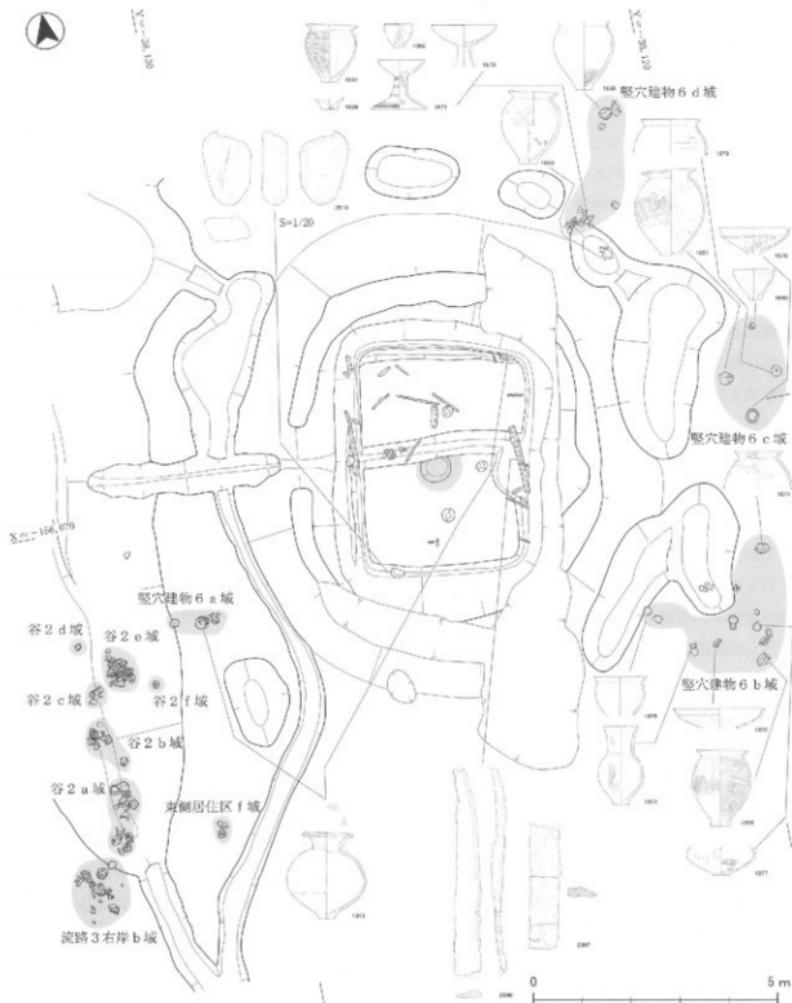


図147 穔穴建物6 遺物出土状況図

壁溝との間に掘り残しと内肩との間に渡された4本の小枝材を確認した。なお、この内側の壁溝に埋まれた床面積は14.1m²を測る。

2基の主柱穴は、竪穴の長辺に平行して両短辺中央の壁溝内肩から0.9m前後の位置に置かれ、柱芯間隔は2.15mを測る。いずれの柱穴にも主柱の基部が遺存し、竪穴の埋土である3層を除去している段階でその上端が床面から突き出していた。柱穴1の柱根は直径18cm、長さ68cm、柱穴2の柱根は直径15cm、長さ57cmで、樹種はいずれもクヌギ節である。これに対し、柱穴の掘り方は上端でも径0.25m足らずと小さく、底面に近い方はほとんど隙なく柱根が納まっていたことから、主柱を立ち上げる際には、柱径をやや上回る程度に掘った穴に柱材を押し入れ、上方から打ち込みを行って固定していた可能性を想定することができよう。また、今回の調査で柱根が確認された4基の主柱穴は、本建物を含めいずれも掘り方の様が小さかったことから、逆に掘り方の大きい柱穴については、主柱を抜き取る際に穴を拡張している可能性が高いと考えられよう。

この主柱穴の間には有機物を多量に含んだ黒褐色細砂層が径1m近くにわたって広がり、その下には径0.6mの中央土坑が存在していた。床面からの深さが0.05mほどの皿状の土坑で、南に寄った底面上には灰、その上には炭化物層が堆積していたことから、炉であった可能性が高いと考えられる。この両層を持ち帰り水洗した結果、マクワ・シロウリ型に該当する個体を中心とするメロン類の種子が60点以上確認された。なお、図143では有機物の広がりを示したアミフセが排水溝に切られているが、実際は土坑に接した排水溝の埋土最上部にも同様の有機物の堆積が確認できた。

中央土坑から0.6m東側の床面上では、径0.2m強、床面からの深さ0.1mを測る円形の小穴が確認された。性格については不明であるが、位置関係から次に述べる土坑1に付随するものか、あるいは、前述した周堤外縁の張り出しと上端内肩の凹みに対応していることから、梯子の据付穴といった入口施設に隣接した造構の可能性も考えられよう。

土坑1は東壁際の中央において検出した土坑で、半径約0.7mの半月状を呈する。床面からの深さは0.1mを上回る程度であるが、南北両端には壁溝が繋がり、さらにこの土坑の北側には排水溝も接続していることから、集水機能的な役割も果たしていたと考えられる。坑内からは腐植物とともにヒヨウタン類の種子が60点出土し、土坑の上には数点の建築部材が残されていた。この部材に関しては、出土遺物とともに最後に述べることとした。

本建物の関連施設の中で最も注目すべき造構として、排水溝を挙げることができる。前述のように土坑1を起点に床面を横断し、西壁の周壁をトンネル状に掘り抜いて西接する谷2へ合流する溝で、全長は約9m、幅は竪穴内で0.45~0.5m、屋外で0.55~0.7m、溝底までの深さは竪穴床面から0.15~0.2m、屋外で0.7~0.9mをそれぞれ測り、起点から谷2との接続箇所までの比高差は約0.4mを有する。溝の上部には竪穴の内外を問わず3層が入り込んでいたが、竪穴内においてはその下に堆積したオリーブ黒色の細砂から中砂層を除去したところで、溝に直交して渡された30本以上の小枝（樹種：クヌギ節）とその上へ敷き並べたように被せられたヨシ茎状の植物纖維を検出した。中央部が床面から10cm以上凹んだ状態で確認されたため、当初は溝底の敷物の可能性を想定したが、溝底との間にさらには2層の埋土が堆積していたことから、むしろ溝の蓋として設置され、後に上部を覆った土砂の加重によってたわんでしまったものと理解することとした。小枝は溝の壁に刺し込まれたような状態で見つかっており、おそらくは貼床を施工する際に同時に渡されたものであろう。したがって、本例と同様の小枝が確認された竪穴建物2や本建物の壁溝にも、本来は蓋が存在していた可能性が考えられる。

なお、西側周堤下のトンネルの長さは1.35mで、そこから谷2に至る約4mは開渠の状態で確認されたが、排水溝の中心に合わせて周堤部分を断ち割ったところ、実際にトンネルとして掘り抜かれていたのは周壁際の0.7mほどで、その外側は一旦地表面から開削した後に周堤盛土を盛っていたことが明らかとなった。堅穴建物1で確認された木樋のように、盛上の沈下・崩落を防ぐためには溝の天井を保護する何らかの手立てが不可欠と推定されるが、今回の調査ではその証左を得ることはできなかった。

以上の屋内施設に対し、周堤の外縁では6基の外周土坑を検出した。長径1.3～1.9mほどの梢円形状のものと2基以上の土坑が接続したような比較的規模の大きなものに大別されるが、いずれの土坑にも埋土の上部に3層が入り込み、その下には炭化物粒や灰もしくはオリーブ灰色シルトの小ブロックを多く含んだ黒または黒褐色を基調とした泥が堆積していた。なお、西側周堤の外縁においては、排水溝を挟んで北側に外周土坑6、南側に外周土坑5との間を抜けて北流する溝51が存在しており、いずれも排水溝に接続していた。

出土遺物 堅穴内から出土した土器は少なく、壁溝や排水溝内から出土した数点を図示し得たのみである。このうち、北東隅の壁溝際から出土した広口壺（1847）は、8m以上離れた外周土坑5の北側で出土した土器と接合しており、図147で示した外周土坑内やその周辺（堅穴建物6a～d域）、あるいは谷2の中から出土した多量の土器についても、本建物に居住していた人間が残していった可能性が高いと推定される。

一方、堅穴内には、床面上や土坑1周辺、あるいは排水溝の出口付近で建築部材と推定される20点以上の木質遺物が残されていた。東西両周壁の中央付近で対向するように出土した1m以上の板材の樹種はいずれも主柱と同じクヌギ節であるが、床面上や排水溝、土坑1から出土した材にはアカガシ亜属やサカキ・ツブライ・コナラ節など数種類の樹種が含まれていた。

なお、南西隅に近い壁溝内からは、表面に敲打痕や磨り痕を遺した長さ30cm、厚さ10cmを測る砂岩製の台石が出土した。出土した位置や出土状況から、周堤の上に置かれていたものが転落したものと考えられるが、壁溝を塞ぐように嵌まり込んでいたことから、あるいは建物の機能を停止する際にそうした目的で意図的に入れられた可能性も考えられよう。

〔堅穴建物7〕（図148～154、図版58～61）

検出状況 西側居住域の中では最も東側に位置する堅穴建物で、流路3を臨む2A～6c・7e区を中心に検出した。居住域内における他の堅穴建物とは、堅穴建物2からは南東方向へ周堤外縁間で21.5m、同4からは北東へ21mの距離を有している。第2面で検出した周溝墓20の周溝によって一部が失われていたが、遺構の遺存状況は比較的良好で、堅穴とその周間に巡らされた周堤、周堤の外縁に設けられた外周土坑を検出することができた。

堅穴は長軸をN73°E方向に置いた隅丸長方形を呈し、長辺は上端で5.1m、短辺は4mを測る。保存措置を講じることになったため、堅穴建物6と同様に床面以下はトレンチによる断ち割り調査を実施したのみであるが、掘り方は旧地表面である4層上面から0.45～0.5m掘り下げられ、底面に灰色シルトや明オリーブ灰色シルト質細砂の小ブロックを含んだ暗オリーブ灰色シルトによって貼床を施し、建物床面を構築していた。貼床の厚さは0.05～0.1m弱で、床面から周堤上端までの高さは0.6～0.75mであった。

堅穴内には3層が大きく入り込み、床面の中央部は最下層の灰白色シルトによって直接被覆されていたが、周壁際ではオリーブ灰色シルトが上下2層にわたって堆積し、さらにその上を明オリーブ灰色細

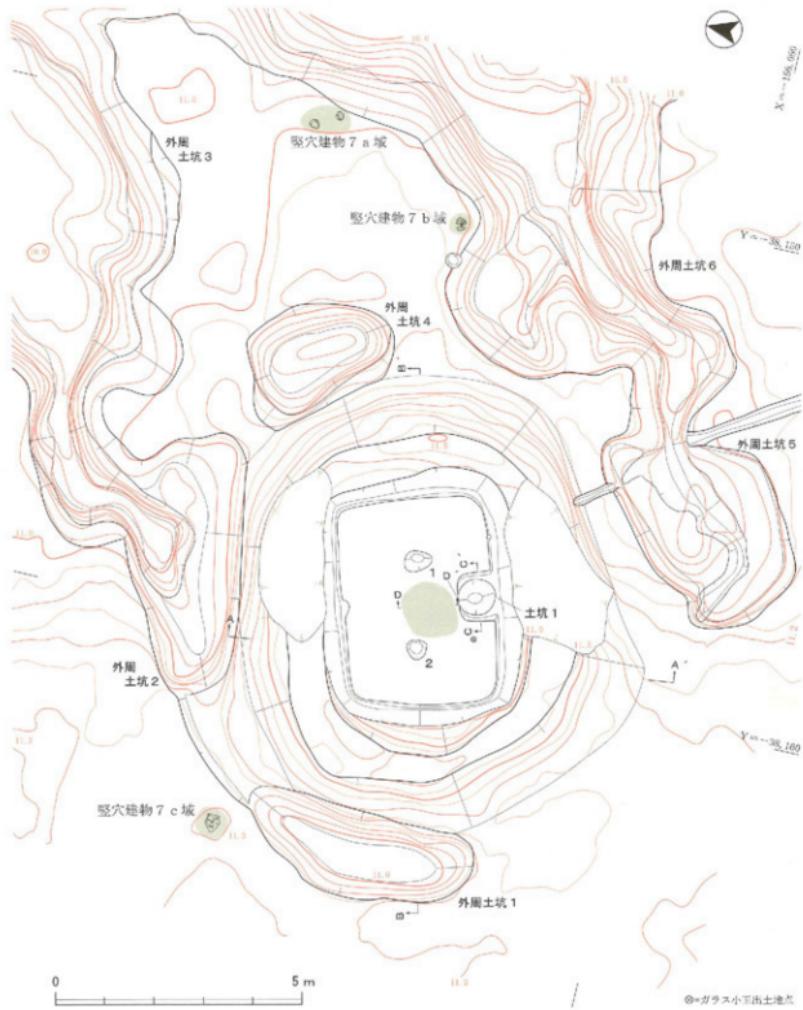


図148 竖穴建物7 平面図

砂の薄層を挟んだ黄灰色の粘土質シルト層が覆っていた。オリーブ灰色シルトの上部には炭化したヨシの茎束のような植物繊維が多く見られ、中には周壁に貼り付くように縦方向のものも認められたことから、この建物にも貼り壁が施されていた可能性が高い。また、三角形状に堆積した黄灰色粘土質シルトには、炭化物粒や灰白色シルトの小ブロックが多く含まれており、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土と考えられる。

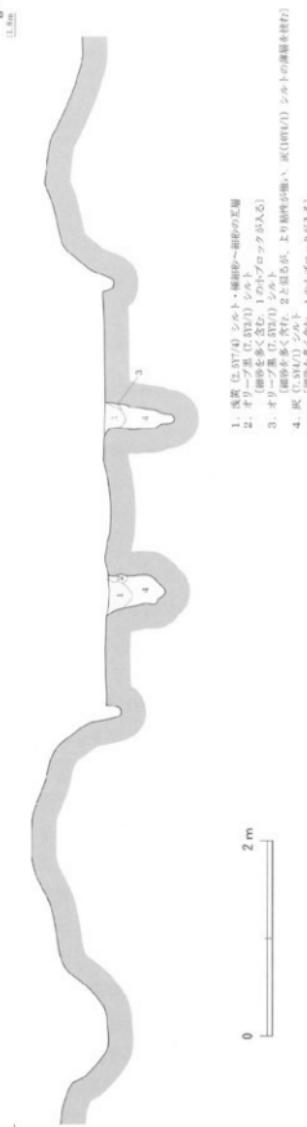
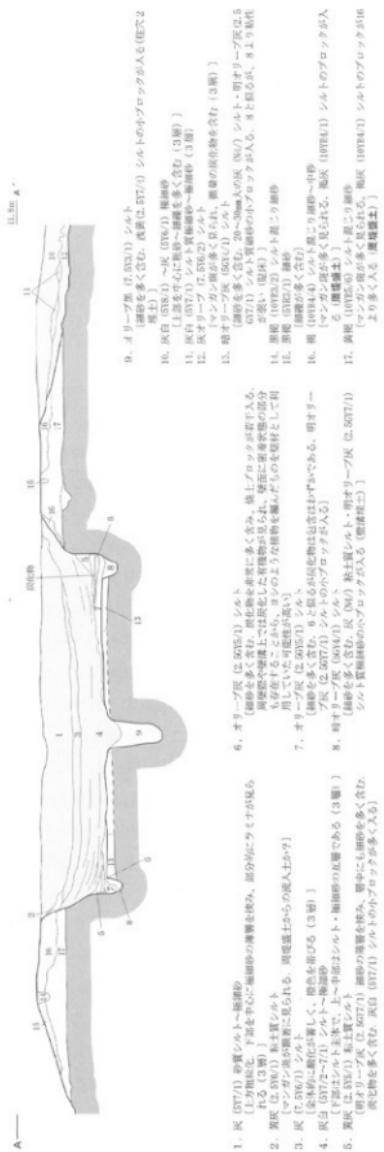


図149 穴穴建物7 断面図

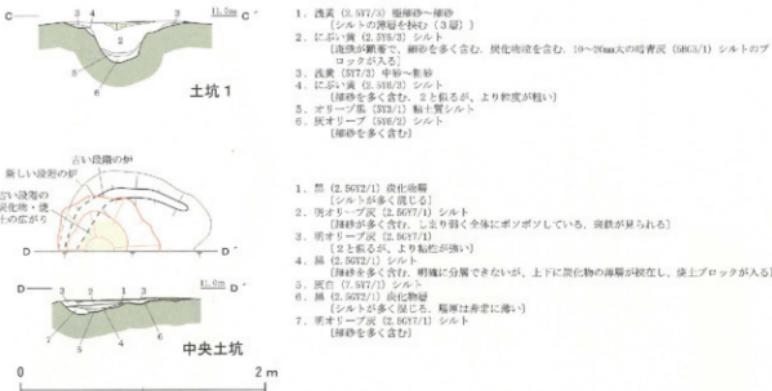


図150 竪穴建物7 土坑 断面図

竪穴の周囲には、旧地表面の上に竪穴掘削時の排土と考えられる褐色あるいは黄褐色の細砂から中砂を盛り上げて構築した周堤が残存していた。周堤の外縁は、長径9.4m、短径7.5mの南西側がやや張り出した垂な梢円形を呈し、周堤外縁までの面積は60m²を有する。周堤の規模は、幅が1.65~2.5m、高さが0.25~0.4mで、やはり旧地表面の標高が低い東側の堤が他よりも0.1m前後高くなっていた。

竪穴建物の床面上では、中央土坑とその両側に配された2基の主柱穴、壁際土坑、壁溝を検出した。

壁溝は壁際土坑が設置された南壁中央を除く各周壁下において確認され、幅0.15~0.2m、床面からの深さ0.1~0.15mを測る。溝内は灰色粘土質シルトや明オーリーブ灰色シルト質極細砂の小ブロックを多く含んだ暗オーリーブ灰色シルト層によって埋没していたが、その上面は炭化した有機物によって覆われていた。周壁から剥がれ落ちた貼り壁の一部である可能性が高いが、遺存状態はあまり良好でなく、詳細を明らかにすることはできなかった。なお、この壁溝に囲まれた床面積は12.5m²を測る。

2基の主柱穴は、竪穴の長辺に平行して東・西壁溝の内側から0.9~1.05m内側に置かれ、柱芯間隔は1.85mを測る。柱穴1は平面形が不整梢円形を呈し、長径0.55m、短径0.4m、床面から坑底までの深さ0.7m、不整円形の柱穴2は径0.4m、深さ0.6mをそれぞれ測り、いずれにも柱根は遺存していなかった。柱穴の上部には3層が0.2m以上落ち込み、掘り方の規模もやや大きいことから、建物の機能を停止する際に柱を抜き取り、屋根材とともに持ち去ったものと推定される。

2基の主柱穴と後述する土坑1に囲まれた範囲には炭化物層が径1m以上にわたって広がり、その下には新旧2基の中央土坑が存在していた。土坑の規模は古い段階が径0.8m、新しい段階が約1mで、後者の東側はわずかに帯状に高くなっていた。床面からの深さは古い段階でも0.1m強と浅いものの、埋土中には焼土ブロックも含まれていることから、炉であった可能性が高いと考えられる。なお、竪穴建物6と同様に埋土の一部を持ち帰って水洗したところ、炭化したイネの胚乳13点が確認された。

南北壁際の中央では、土坑1とした壁際土坑を検出した。隅丸長方形に浅く掘り下げた中をさらに円形に掘り込んだもので、東西両側の周壁下端では壁溝がこれに接続している。土坑の規模は、上部の方形部分が東西1m、南北0.8m、円形部分が径0.7mで、床面から坑底までの深さは0.35mを測る。土坑内の大半は、炭化物粒や暗青灰色シルト層を含んだにぶい黄色シルト層で埋没していたが、坑底

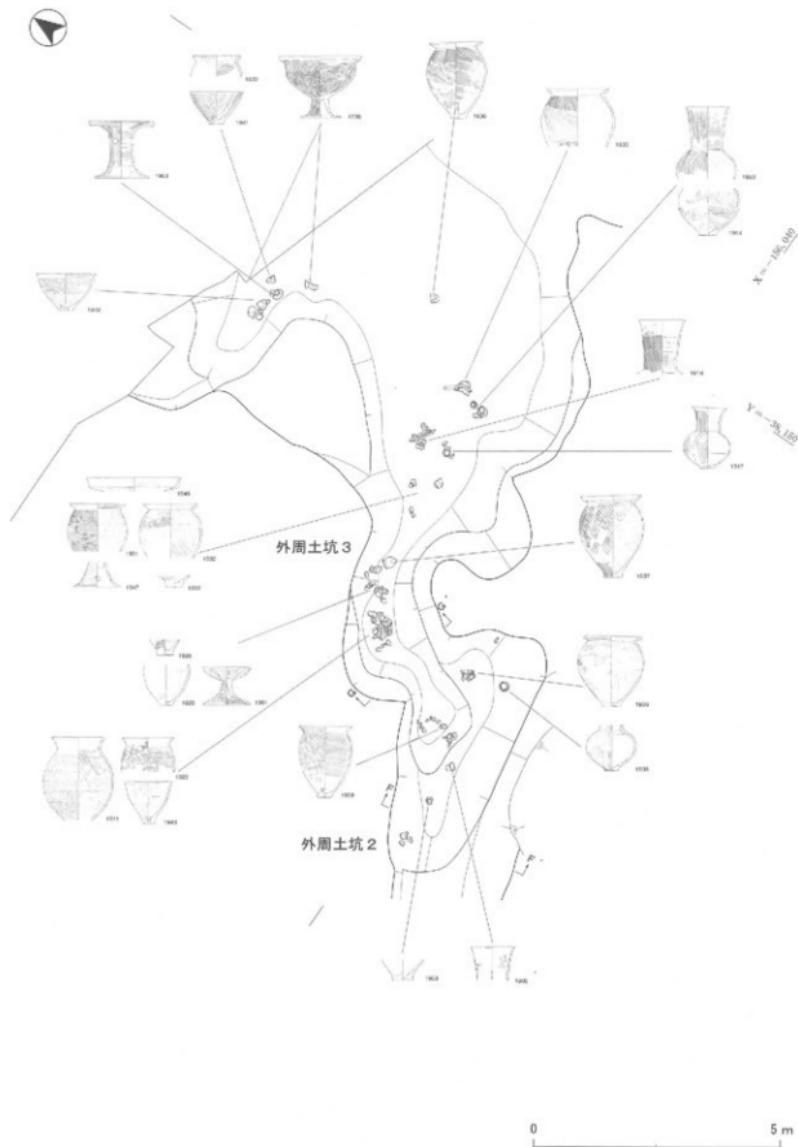


図151 竪穴建物7 外周土坑2・3 遺物出土状況図

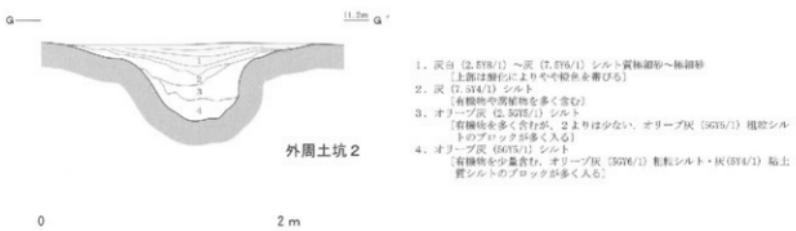
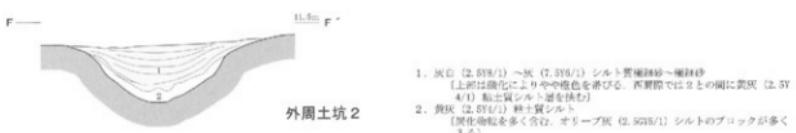
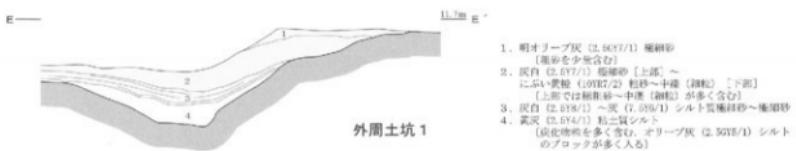


図152 穴室建物7 外周土坑1～3 平・断面図

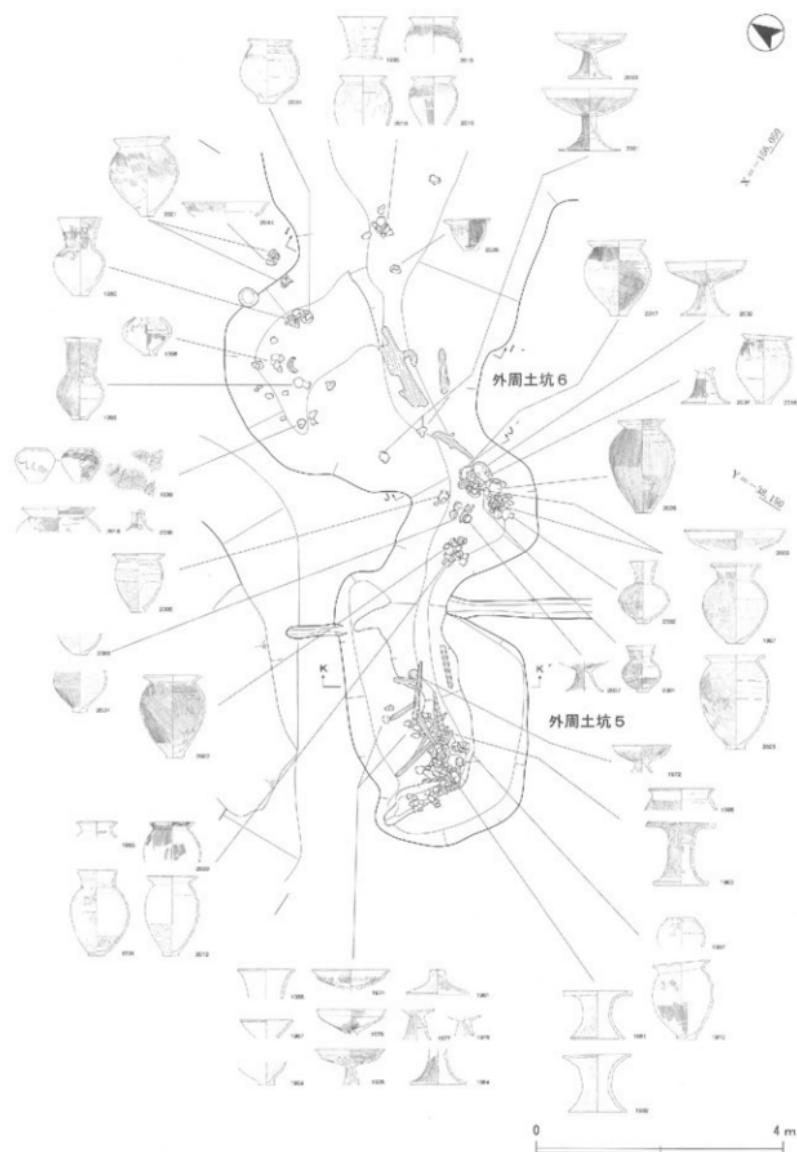


図153 竪穴建物7 外周土坑5・6 遺物出土状況図

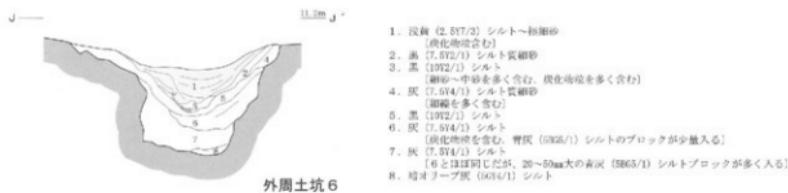


図154 穴室建物 7 外周土坑 4～6 平・断面図

付近では灰オリーブ色シルト層ならびにオリーブ黒色粘土質シルト層が堆積していた。

以上の屋内施設に対し、周堤の外縁では6基の外周土坑を検出した。これまで述べてきた各建物の外周土坑は、単独あるいは2基程度が接続した状態で周堤の外縁に沿うように巡らされていたのに対し、本建物については、単独に存在した外周土坑4を除き、外周土坑1～3と5・6が建物の南北両側で列状に接続し、その東端はそれぞれ流路3と繋がっていた。各土坑の埋土の上部には3層が入り込んでいたが、その下には炭化物粒や粘土質シルトから細砂の小ブロックが多く含んだ黒または暗青灰・灰色を基調とした泥が堆積しており、いずれの土坑にも泥土の上部および上面付近に多量の土器や木材が発見されていた。

なお、建物の南西側には外周土坑は存在せず、前述したように周堤の外縁が大きく張り出しており、この部分に入口に関連する施設が存在していた可能性が考えられよう。

出土遺物 すでに述べたとおり、外周土坑内とその周辺（豎穴建物7a～c域）からは今回図示しただけでも160点を超える多量の土器が出土し、さらに外周土坑3からは折損した綠泥片岩製の磨製石庖丁も出土している。一方、豎穴内にはほとんど土器は残されていなかつたが、土坑1西側の床面上から径・長さとも4mmに満たないガラス小玉が出土したことが特筆されよう。

〔豎穴建物8〕（図155・156、図版62）

検出状況 豊穴建物7の周堤外縁から南南東方向へ15mのところで検出した豎穴建物で、2A-5g・6g区に位置する。遺構面（旧地表面）を検出中、比較的広い範囲で3層が落ち込んでいたため、サブトレレンチを設定して下層の状況を確認したところ、豎穴とその南東隅付近から東へ延びる溝状遺構の存在が明らかとなつた。ただし、豎穴の外周には他の建物のように周堤は存在せず、南から西側はむしろ0.15～0.3m弱ほど凹んでいた。

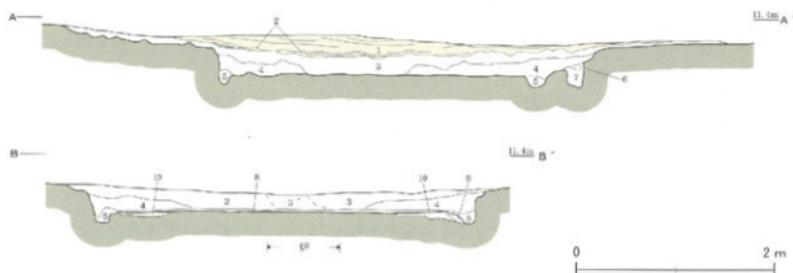
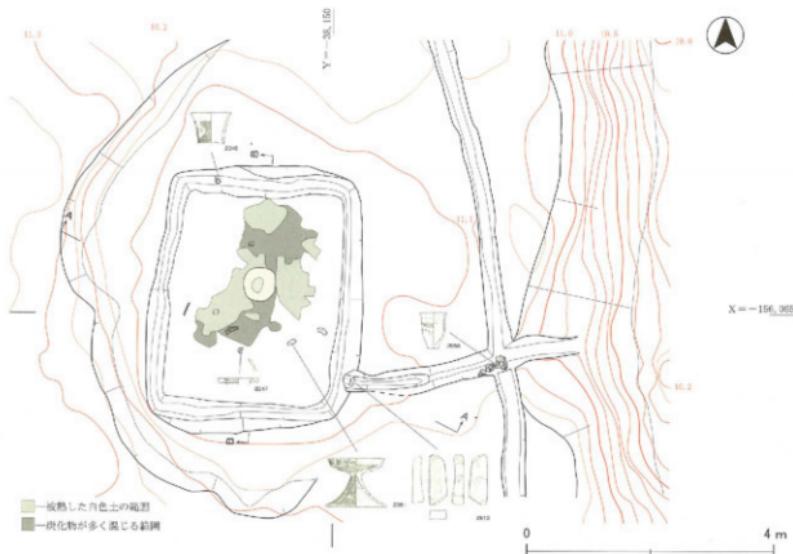
豎穴は長軸をN6°E方向に置いた長方形を呈し、長辺は上端で4.3m、短辺は3.5mを測る。遺構保存のため、床面以下はやはりトレレンチによる断ち割り調査を実施したのみであるが、掘り方は旧地表面である4層上面から0.5mほど掘り下げられ、底面に暗緑灰色シルトや細砂の小ブロックが多く含んだ綠灰色シルトによって厚さ0.05m前後の貼床を施し、建物床面を構築していた。

豎穴の埋土を3層が最終的に被覆しているのは他の建物と同様であるが、埋土の主体は厚0.3～0.4mを測る上下2層の暗オリーブ灰色シルトで、層内には炭化物粒や綠灰色粘土質シルト・黒色シルトの小ブロックが非常に多く混在し、上層には粗砂も多く含まれていた。豎穴周囲からの流入土といふよりも人为的に埋め戻された土砂の可能性が高く、建物の機能停止時に本来は存在していた周堤の盛土を切り崩して埋め立てた可能性も考えられよう。

豎穴建物の床面上では、主柱穴は存在しなかったものの、各周壁下で壁溝が検出されたほか、床面の中心よりわずかに北へ寄った位置で径0.5mほどの被熱面が確認され、その周囲でも被熱の影響を受けたブロックや鉱物の塊のような黄色ブロックが入った不定形の浅い凹みが数基認められた。

壁溝は幅0.2～0.5m、床面からの深さ0.1m前後の規模を有し、溝内は綠灰色粘土質シルトの小ブロックが多く含んだ暗オリーブ灰色シルト層によって埋没していた。なお、この壁溝に囲まれた建物の床面積は9.3m²を測る。

床面の中央で確認された被熱面は、南北方向にわずかに長い梢円形を呈するもので、強い被熱の影響によって全体が暗赤褐色、中心部は橙色となっていた。床面上の位置や被熱状況から、地床炉であった可能性が高い。また、炉の周囲には炭化物を多量に含んだ明黄褐色のシルトから細砂が堆積し、所々で



1. 泥炭 (S18/2) ~ 混凝 (S17/2) 砂礫砂~中砂
2. 泥炭 (S18/1) ~ 灰 (S17/1) シルト・粗礫砂の互層
3. 粘オリーブ灰 (S17/4/1) シルト
【粗砂と互に含み、炭化物・炭化物粒を非常に多く含む。10mm以上の粗粒 (7.5G19/1) 黏土質シルト・黑 (7.5G19/1) シルトの小ブロックが非常に多く入る】
- 3' 灰 (S17/4/1) シルト
【粗砂へ粗礫を少々含む。下部では炭化物粒を多く含む。10mm前後の粗粒灰 (7.5G17/1) 黏土質シルト・オリーブ灰 (7.5V13/1) シルトの小ブロックが非常に多く入る。熟土の上に当たる。黒色している】
4. 粘オリーブ灰 (S17/4/1) シルト
【3と似るが、砂粒が少なく、シルトブロックの径が大きくなる】
5. 粘オリーブ灰 (S17/4/1) シルト
【3と似るが、細砂 (7.5G18/1) 黏土質シルトのブロックが特に多く入る (硬泥堆土)】
6. 硬泥 (10G17/1) 黏土質シルト
【有機物を少々含む (硬泥土上部)】
7. 硬泥 (10G17/1) 黏土質シルト・泥炭 (2.5V16/1) 黏土質シルトのブロック混合土
【粗砂・粗礫砂を多く含む。有機物を含む (硬泥土)】
8. 明黄泥 (2.5V17/6) シルト・細砂
【被熱により非常に硬い。炭化物を多く含む】
9. 糜灰 (2.5V17/1) シルト
【粗度が非常に低く、細砂を多く含む (泥炭)】
10. 糜灰 (2.5V17/1) シルト
【細砂を多く含む。30mm前後の粗粒灰 (7.5G13/1) シルトのブロックが多くの入る (泥炭)】

図155 積穴建物8 平・断面図

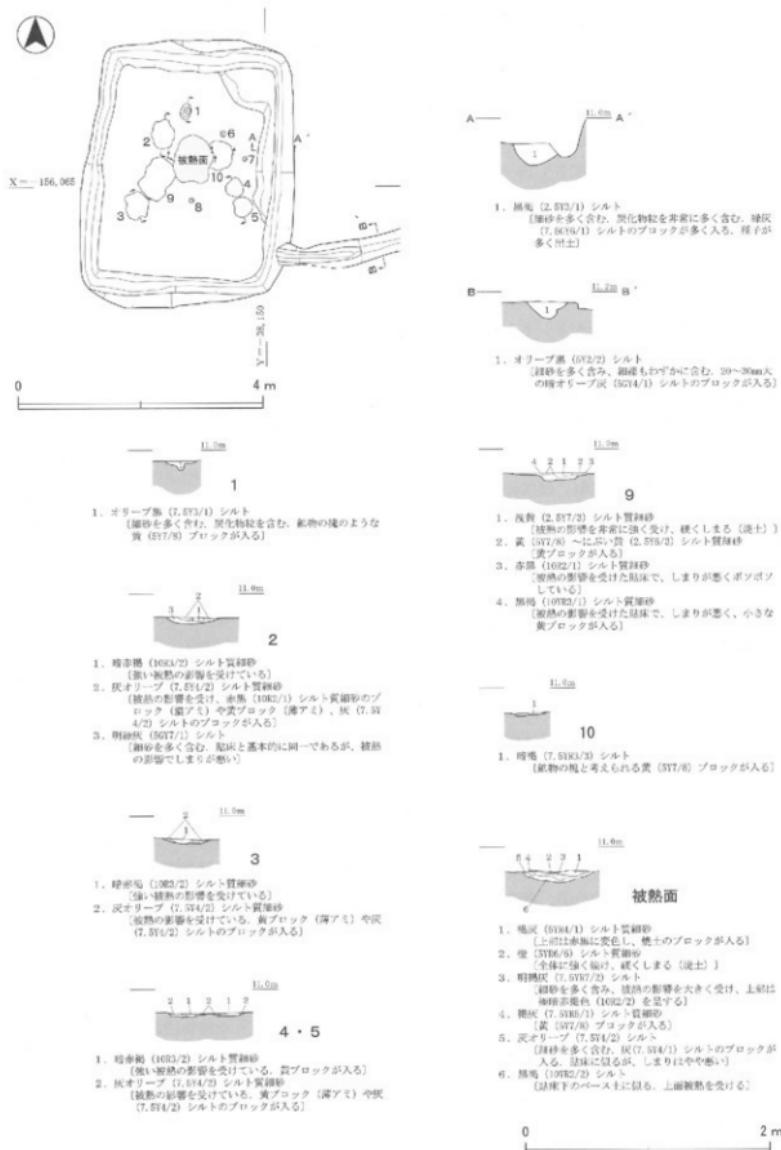


図156 積穴建物8 土坑 平・断面図

は被熱を受けた白色土も認められた。これらを含む床面直上の堆積土砂を水洗したところ、コナラ属やカヤツリグサ科・エゴマ・シソ属の果実、ブドウ属・ブドウ科やマメ類・エノキグサの種子、イネの胚乳といった植物遺体が数多く抽出された。食用可能なものが多く、廃棄された生活残滓と推定される。

屋外の施設としては、堅穴の東端壁南端付近から東へ延びる屋外排水溝を挙げることができる。検出長は3.85mで、堅穴から2.6mの位置で溝50と重複し、東端は流路3に繋がっていた。溝の規模は幅0.4m、検出面から溝底までの深さ0.15~0.35mであるが、溝底の標高は流路へ向かって傾斜するのではなく、むしろ堅穴際の方が0.2mほど深くなっている。溝の性格として果たして排水機能が備わっていたのか否か、今後この点の検討が必要となろう。溝の大部分は暗オリーブ灰色シルトのブロックが入ったオリーブ黒色シルトによって埋没していたが、堅穴際の一段深くなった部分は、これとは異なる緑灰色シルトと緑灰色・黄灰色粘土質シルトのブロック混合土という上下2層の埋土によって埋まっており、建物の機能時にはこの箇所がトンネル状を呈していた可能性も考えられる。なお、ここからは、溝底からやや浮いた位置で凝灰岩製の砥石が出土した。

出土遺物 砥石のほか、堅穴の内外や排水溝内から各器種の土器が出土し、堅穴西側の凹みからは今回の調査で唯一の鉄製品である鉄鑿が出土した。土器の大半は破片であるが、溝50との交差点付近の溝上部から出土した小型甕のみは完形品であった。

〔堅穴建物9〕（図157~164、図版63~75）

検出状況 後に報告する堅穴建物10とともに03-1工区1トレチの東半で確認された堅穴建物で、流路3東岸の2B-3b・4b区を中心とした検査である。東側居住域の南西に位置するものの、建物10以外では最も近い堅穴建物6との間でも30m以上空いており、あるいは別の居住単位として把握したほうが妥当かもしれない。地中梁の交差点や研究会1次調査時の鰐溝によって一部が失われていたが、遺構の遺存状況は良好で、堅穴とその周囲に造られた周堤、堅穴内から流路3に向かって延びる排水溝を検出することができた。

堅穴は一辺7mのやや胴が張った隅丸方形を呈し、南北軸をN15°E方向に置いている。掘り方は旧地表面である4層上面から0.7m前後掘り下げられ、底面に明紫灰色極細砂から細砂、明オリーブ灰色シルトの小ブロックが多く含んだ灰色シルトによって貼床を施し、建物床面を構築していた。貼床の厚さは0.05m前後と薄いが、周壁際は堅穴建物1で見られたように浅く溝状に掘り窪められており、貼床の厚みも0.1mに達していた。床面から周堤上端までの高さは約0.9mである。

堅穴内には砂層を主体とする3層が大きく入り込み、床面の中央部は最下層の暗オリーブ灰色シルトによって直接被覆されていたが、周壁際では暗褐色や暗灰・黒・黄灰色などの暗色を呈したシルト層が数層にわたって三日月状に堆積していた。各層には粗い砂粒や有機物、オリーブ灰色極細砂や灰あるいは黄灰色シルトの小ブロックが多く含まれており、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土と考えられる。また、層内には有機物の薄層が部分的に挟在していたが、この崩落土を除去したところ、東壁の周壁下半では斜方向に貼り付けられたヨシの茎束のような植物纖維が検出され、他の周壁際でも剥がれ落ちた貼り壁が壁溝の上に載っていた。茎束は網代のように完全に編まれた状態ではなかったが、黒色粘土を抉みつつ数枚を異なる方向に貼り付けており、剥落した貼り壁の一部では部分的に編まれている状態も認められた。

堅穴の周囲には、旧地表面の上に堅穴掘削時の排土と考えられる褐灰あるいは灰・灰オリーブ色のシルト層を盛り上げて構築した周堤が残存していた。周堤の外縁は、堅穴の平面形よりもさらに丸みが加

わった方形状を呈し、南北長 11.25 m、東西長 11.85 m、周堤外縁までの面積は 112 m²を測る。周堤の規模は、幅が 1.5 ~ 2.9 m、高さが 0.25 ~ 0.4 m で、豊穴建物 10 に接した南西部分の堤が他よりもやや幅狭で、わずかに低くなっていた。

豊穴建物の床面上では、4 基の主柱穴と豊溝、中央土坑とそこから屋外へ延びる排水溝を検出したほか、長径 0.35 ~ 0.65 m ほどの灰白色シルトの塊を 3 か所で確認した。また、遺構として明確に検出しえたわけではないが、床面全体にわたって茶褐色を呈した薄い有機物層の広がりが認められ、植物質の敷物が敷かれていた可能性が考えられる。

豊溝はすべての周壁下において確認され、西壁側の北半では 2 条存在していた。溝幅は 0.2 ~ 0.6 m、床面からの深さは 0.1 ~ 0.25 m で、周壁や貼床が崩落・流入したと考えられるシルトブロックや有機物を多く含んだ黒・オリーブ黒あるいは黄灰色といったシルト層を埋土としていた。

特筆されるのは、豊穴建物 2 や 6 の壁溝で部分的に認められた溝の蓋受けと考えられる造作が良好な状態で検出されたことで、壁溝全体にわたって 100 本に及ぶ横木が溝に直交して渡されていた。これら

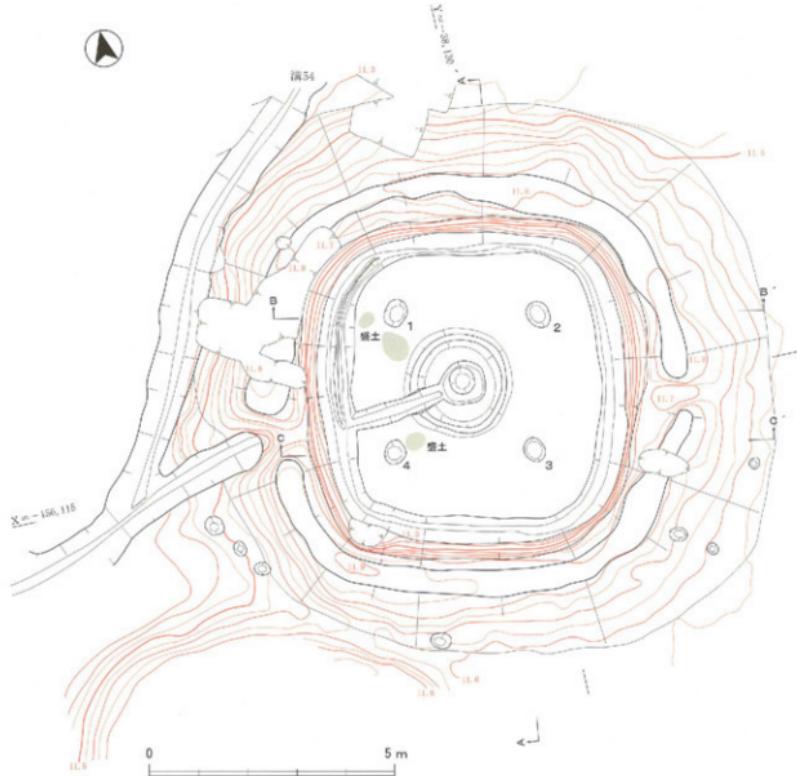


図157 豊穴建物 9 機能面 平面図

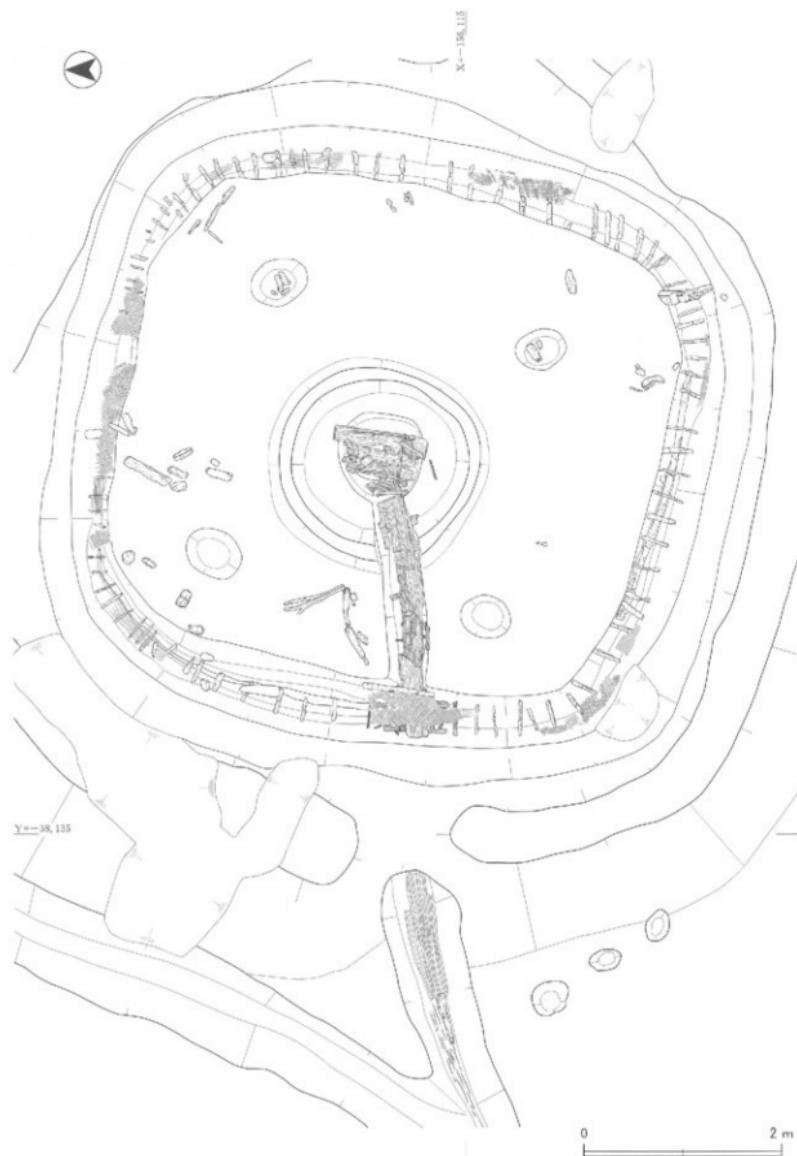


図158 竪穴建物9 平面図

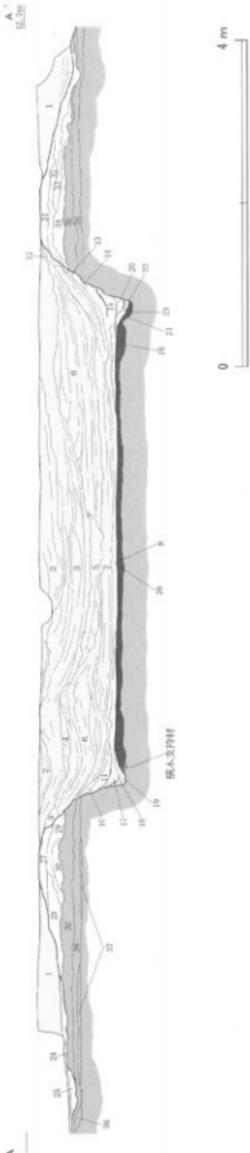


図159 穴開き9 断面図

1. 水戸 (は.8/8/1～8/8/1) 砂質シルト～軽砂
〔下部を中心とした1/2で砂質が最も多く、中部付近で重砂偏重 (は.8/7/1) 中部付近で重砂偏重 (は.8/7/1) シルトとのロックが多く入る〕
2. 水戸 (は.8/8/1) 砂質シルト～軽砂
〔底層は砂質が最も多く、底層を中心とした2/3が砂質、二部層中心に重砂偏重 (は.8/7/1) シルトとのロックが多く入る〕
3. 水戸 (は.8/8/1) 軽砂～重砂
〔中部では層中に砂質下部に有機物を含む砂層 (は.8/7/1) 中部には有機物を多く含む〕
4. 水戸 (は.8/8/1) 軽砂～重砂
〔有機物を多く含む〕
5. 水戸 (は.8/8/1) 軽砂～重砂
〔層厚へと層厚を含む〕
6. 水戸 (は.8/8/1) 軽砂～重砂
〔有機物を多く含む〕
7. オーバードラフト (は.8/7/1) 砂質シルト～軽砂
〔シルト～軽砂のシルト～砂質シルトの間に薄層〕。下部には根の所
8. 埋土 (は.8/7/1) 砂質シルト
〔有機物を多く含む〕
9. 地盤 (は.8/7/1) シルト
10. 水戸 (は.8/8/1) 軽砂～重砂を多く含む
〔中部～底部に有機物を多く含む〕
11. 水戸 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔中部～底部に有機物を多く含む〕
12. 水戸 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔有機物を多く含む (同前面からの剥落・流入上)〕
13. 水戸 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔有機物を多く含む (同前面からの剥落・流入上)〕
14. 水戸 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔有機物を多く含む (同前面からの剥落・流入上)〕
15. 黒、黄 (は.8/8/1) 軽砂
〔層厚へと層厚を含む〕
16. 黒、黄 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔有機物を多く含む〕
17. 黒、黄 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔有機物を多く含む〕
18. 黒、黄 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
19. 黒、黄 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
20. 黒、黄 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
21. 黒 (は.8/8/1) シルト
22. 黒、黄 (は.8/8/1) 砂質シルト
〔層厚へと層厚を含む〕
23. 黒 (は.8/8/1) シルト
24. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
25. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く含む〕
26. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックを多く含む〕
27. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックを多く含む〕
28. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックを多く含む〕
29. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックを多く含む〕
30. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックを多く含む〕
31. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
32. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔層厚へと層厚を含む〕
33. 黒 (は.8/8/1) シルト
34. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
35. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く入る (埋没成因上)〕
36. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックを多く含む〕
37. 黒 (は.8/8/1) シルト
〔シルトのロックが少く含む (同表面の剥落による)〕

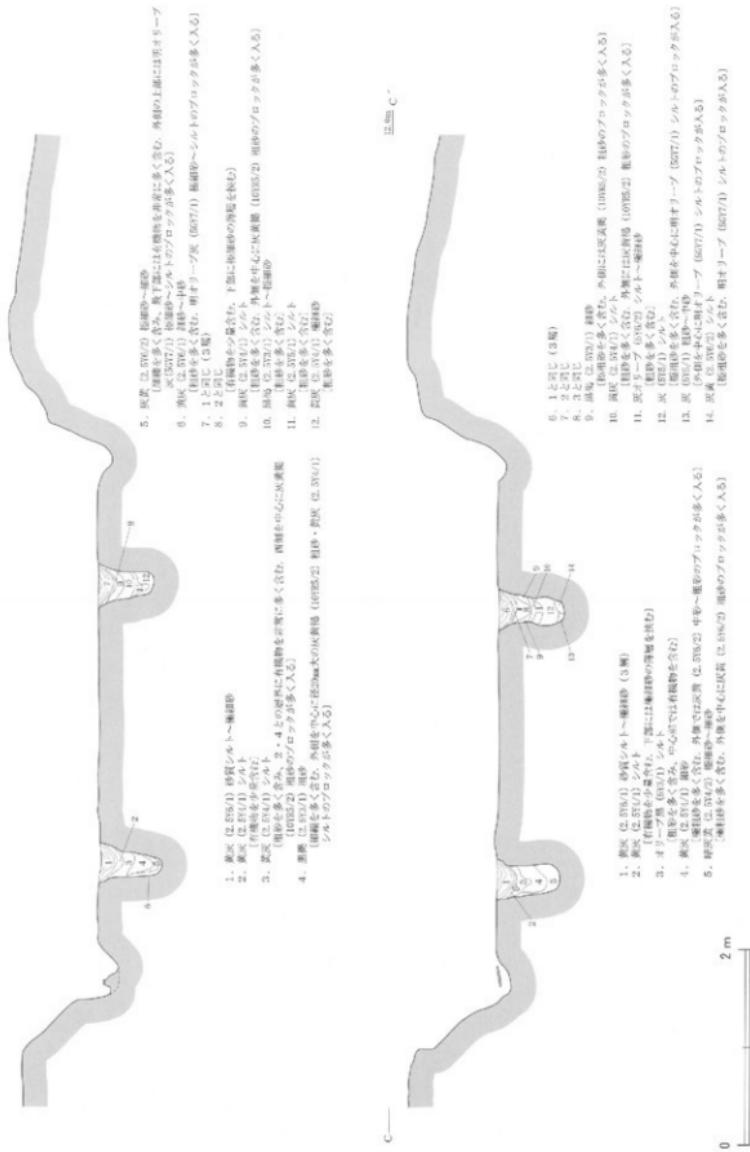


図160 積穴建物9 断・立面図

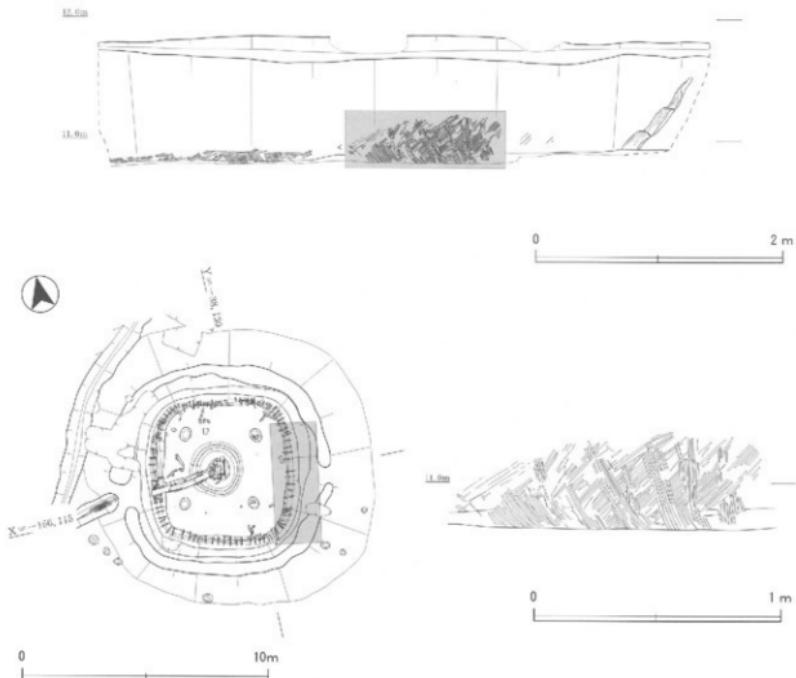


図161 窪穴建物9 東側壁面材検出状況 平・立面図

の横木には、ミカン割りや半截した材、あるいは板・角状に分割した材が用いられており、小枝を使用していた窪穴建物2・6と比べると一段と手間が掛けられている。横木の設置に当たっては、一端を周壁面に刺し込み、もう一端の上に貼床を施すことで固定を図っており、加えて南壁側では横木をより安定させるために長さ約2.4mの板材が溝の内肩に沿って埋め込まれていた。横木の多くは堆積土砂の加重によって中央付近で折れるか、周壁から脱落していたが、遺存状態が良好な箇所では、横木の上に植物の茎束や樹皮が溝に平行して被せられ、その上に周壁に貼られた茎束が連続して垂れ下がっている様子を観察することができた。また、北および南壁溝では、内肩よりやや内側に入った貼床下より数本の横木が確認され、2条の溝が検出された西壁側北半の状況を勘案すれば、本建物には最低でも新旧2時期の壁溝が存在していたものと推定される。このうち、新段階の壁溝に囲まれた床面積は25m²である。なお、横木には主としてクヌギ節が用いられているが、北壁溝ではアカガシ亜属やシイ属も使用されていることが、木沢直子氏による樹種同定の結果明らかとなつた。詳細は第VII章第6節に掲載した同氏の報告を参照されたい。

主柱は窪穴の四隅を結んだ対角線上に配置された長径0.5m前後、床面からの深さ0.55~0.65mを測る4基の柱穴から構成され、柱芯を結ぶと一辺2.8mの方形となる。ただし、柱穴1・4は近接する2

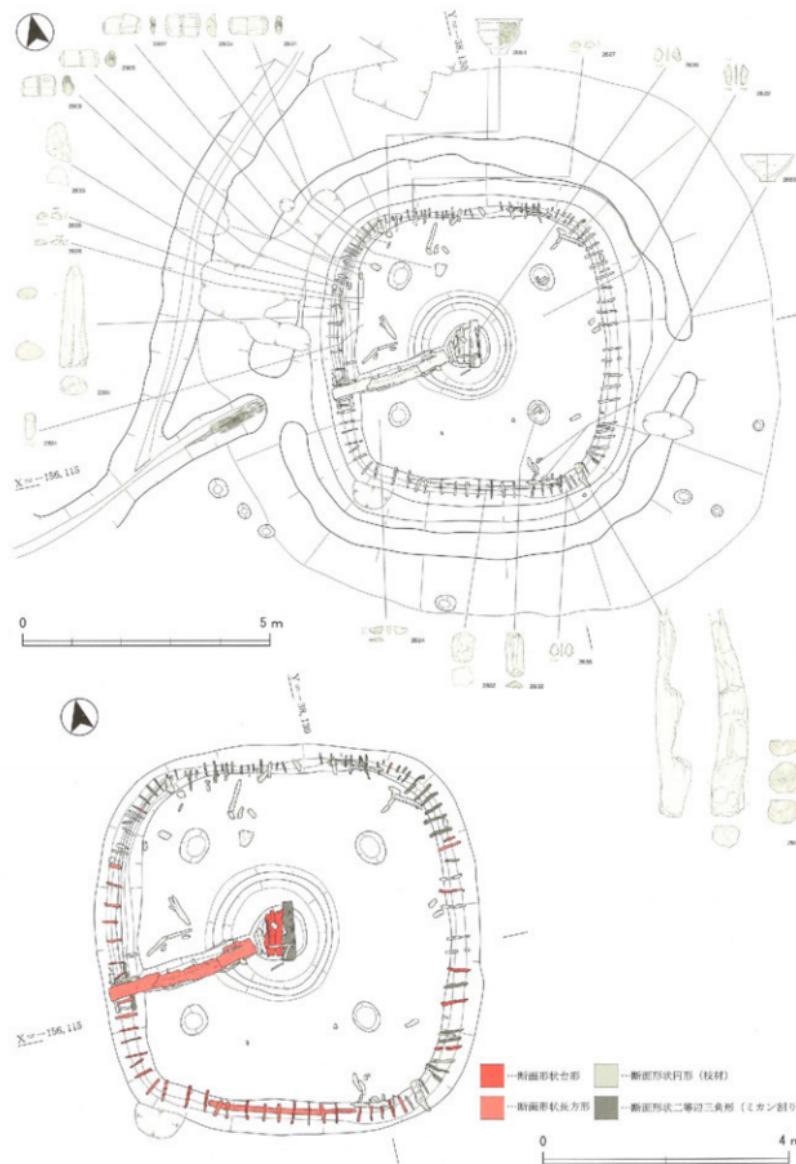


図162 壁穴建物9 遺物出土状況・壁溝架構材検出状況図

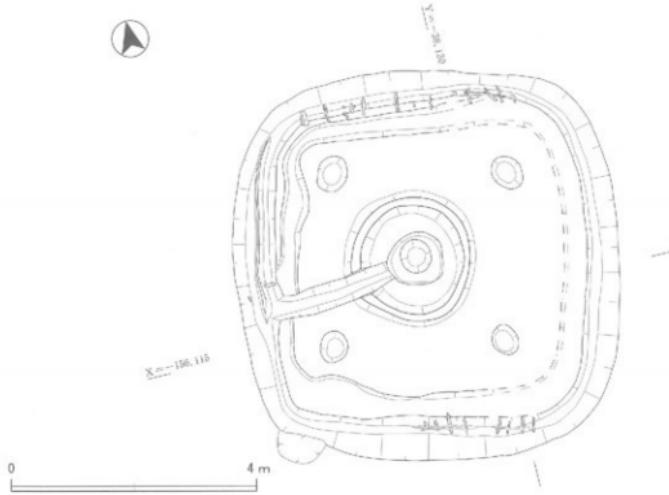


図163 竪穴建物9 加工面 平面図

辺の周壁ならびにコーナーとの距離がすべて1m未満であるのに対し、東側の柱穴2・3は広めとなつておらず、特に柱穴3はそれぞれの間と1m以上離されている。いずれの柱穴からも柱根は確認されず、埋土の最上部には3層である黄灰色の砂質シルトから極細砂層が0.15m以上落ち込んでいた。

主柱穴に開まれた中心には中央土坑が設けられ、そこから西南西方向の屋外へ向かって排水溝が延びていた。排水溝との接続箇所を除いた土坑の周囲には、幅0.2~0.25m、高さ0.05mと低平ながらも堤が逆C字状に巡らされ、堤の外縁までの大きさは径2.2m強に及ぶ。土坑は堤の上端間で径1.7~1.8mの最上段から径0.9m前後、0.5m前後という具合に都合3段にわたりて掘り込まれ、堤の上端から坑底までの深さは0.5mを測る。土坑の上部にはやはり3層が0.2m以上にわたって入り込んでいたが、これらを除くと丁度2段目の段に載るように箱状の構造物が確認された。この構造物は19×90・26×67cmを測る板材2枚を東西に並べ、その上に厚さ1.5cm程度の柵目取り材に相欠仕口を設けて組み合わせた方形の枠を置いたもので、いずれもクヌギ節の木材が使用されていた。ただし、北側の枠材は残存せず、西側の材も遺存状態が不良であったために、相欠も南東隅部で南側が上、東側が下方向に欠かれていることを確認するに留まった。2枚の底板のうち西側の板材が中央部を中心として大きくたわんで崩れていることを踏まえれば、北ないしは北西方向から最下部に堆積しているような土砂が流入し、その際に崩壊したものと推定される。なお、3層と底板との間には黒あるいは黒褐色の堆積物が存在していたが、灰層や炭化物層ではなく、微細なラミナが見られる有機物層、もしくは有機物を多く含んだ粘土質シルト層であった。建物の機能が放棄された後に冠水した際、周壁の貼り壁や床面の敷物などが洗われて流入・堆積したものであろうか。また、東側から南側の枠材の外側に存在する黒色シルト層には有機物や粗砂が多量に含まれており、枠を固定するために充填された土砂の可能性が考えられる。

排水溝はこの中央土坑の西側を発して屋外へ延び、最終的に流路3に接続する溝状遺構で、総延長は約11mを測る。竪穴内ではS85°W方向に走行し、幅0.35~0.4m、深さ0.25mのU字状を呈する。溝

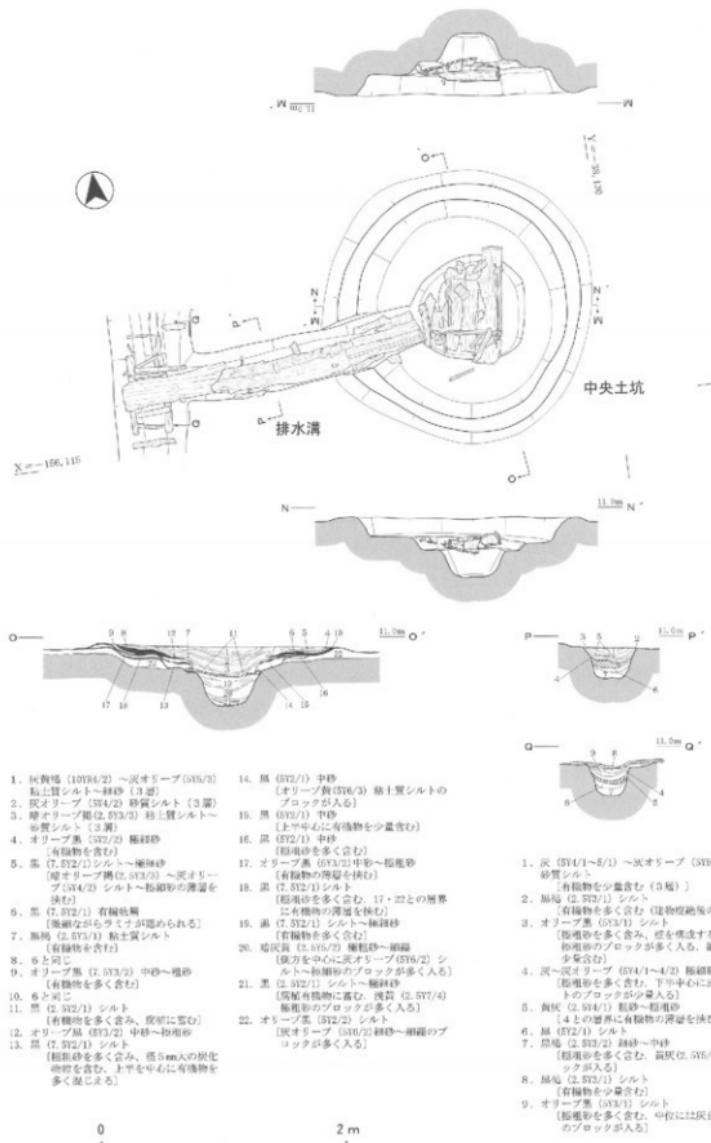


図164 竪穴建物9 中央土坑・排水溝 平・断・立面図

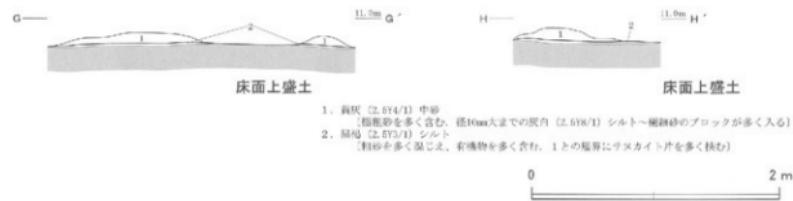
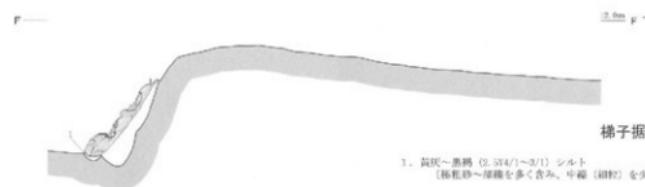
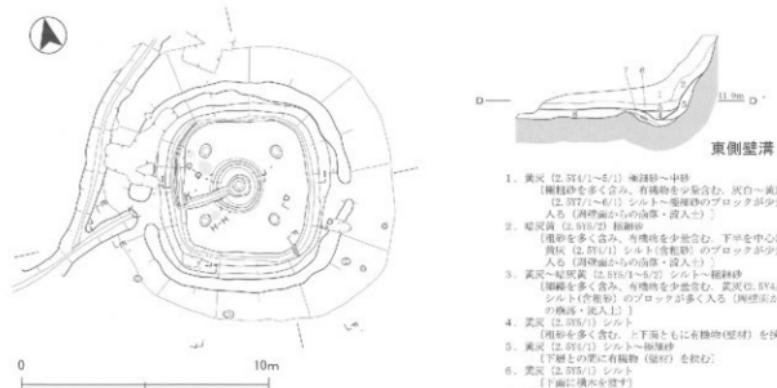


図165 穴穴建物9 各施設 断面図

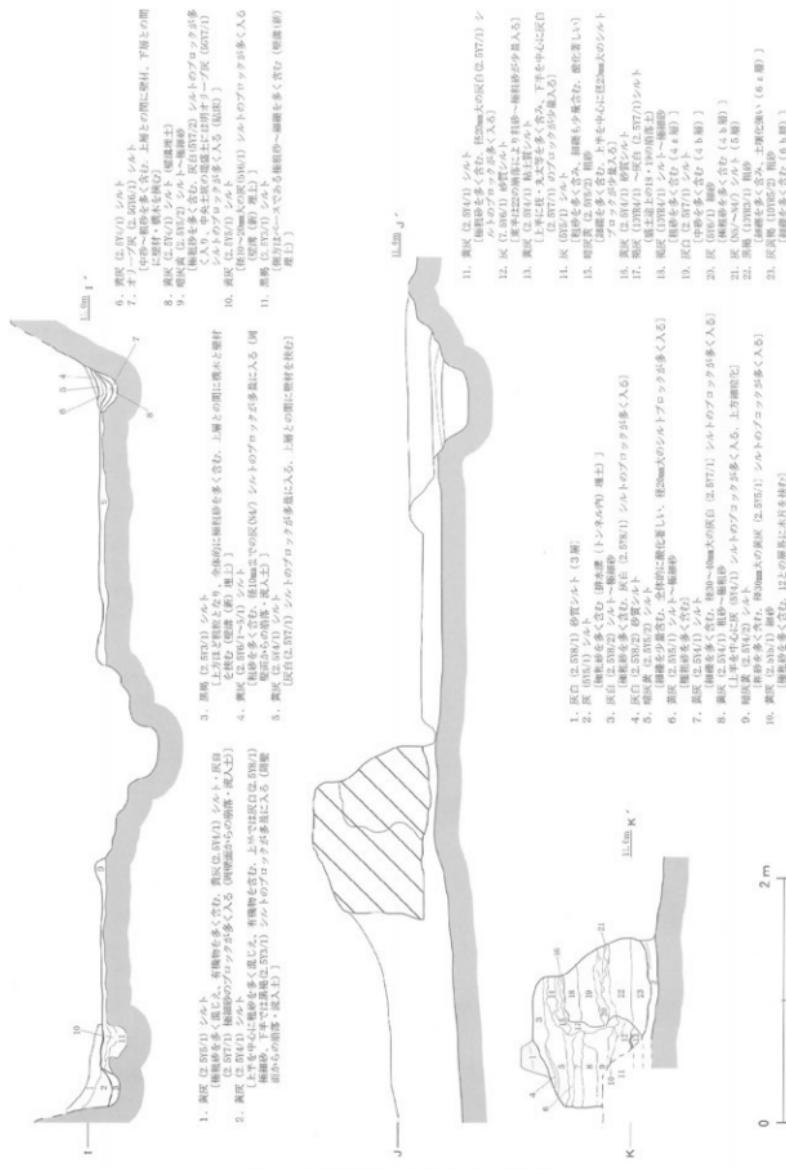


図166 積穴建物9 各施設 断・立面図

底は方形の木枠が据え置かれた土坑2段目のレベルとほぼ合致しており、この溝が文字通り水に関連する施設であったと捉え得るのであれば、土坑上部に溜まった水の上澄みを一定量排水するために設けられたものと推定される。検出時には溝内に落ち込んでしまっていたが、上部には壁溝と同様に横木が渡され、その上に蓋として幅20~30cmのクスギ節の板材2枚が一部を重複させて載せられていた。なお、横木は最低でも4本確認されたが、方形木枠四側の土坑との接続箇所にも腐朽が著しく詳細不明ながら幅7cm程度の板材が存在しており、あるいは2枚の蓋材は本米重ならず木枠の直近まで被せられ、その端をこの板が支えていた可能性も想定される。

一方、トンネルで潜る周堤下で12°ほど南へ方向を振った溝は、周堤から出外れたところで上端幅0.7m、検出面から溝底までの深さ0.95mを測り、断面形は中位以下の幅が0.3mと急激にすばまると漏斗状を呈していた。トンネルの穿ち方は豊穴建物6とほぼ同様で、周堤下の長さ1.4mのうち実際にトンネルとして掘り抜かれていたのは周壁際の0.75mほどで、そこから外側は一旦地表面から開削した後に周堤盛土を施していた。ただし、豊穴建物6では盛土の沈下を防止する手立てを把握し得なかったのに對し、本遺構では径10cm前後の棒状の材を挿し込んだ上に多量の枝やヨシ類の茎束を敷き詰めているのが確認され、暗渠内の通水に対する工法の一端が明らかとなった。

さて、本建物の調査で付け加えておかなければならぬ重要な所見として、豊穴の南東隅で検出した梯子が挙げられる。周壁際で三日月状に堆積した流入土の中に遺存していたもので、壁溝に接するようにその内側の床面に掘り込んだ小穴に基部を埋め込み、およそ50度の角度で周壁面に立て掛けるように設置されていた。腐朽により上部が失われているため確実ではないが、径13cmほどの丸太を割り貫いて作った3段の梯子で、樹種としてはコナラ節が採用されていた。なお、梯子が確認された豊穴の南東隅は、他の場所と比較して流入土の堆積範囲が広く、量も著しかったことから、梯子を上がった周堤上に土砂を用いた入口に関わる何らかの施設が存在し、最終的にそれらを意図的に崩して建物を放棄した可能性も考えられよう。

出土遺物 図162に示したように豊穴内には比較的多くの遺物が残されていたが、土器類は少なく、図示した2点の鉢以外は残存率の低い破片であった。このうち片口鉢と考えられる資料には、赤色顔料の付着が認められた。

一方、土器以外の遺物は豊富で、前述した3か所の灰白色シルトの塊のうち2か所が位置していた柱穴1の周囲では5点の木錘、近接した西側の壁溝内からは堅杵もしくは槌の未製品といった木質遺物が出土した。また、石製品・石器も日立ち、軽石2点や煤が付着した砂岩製の扁平礫が壁溝内やその脇から出土したほか、サヌカイト製の打製石鏃・スクレイバーやその未製品、剥片10点以上が床面直上や壁溝内から発見された。なお、同様の石器類は周堤の盛土上部からも15点以上出土しており、建物の機能が継続している間に盛土の積み直しが行われていた可能性も想定される。

〔豊穴建物10〕（図167～171、図版76～78）

検出状況 豊穴建物9の南西に位置する豊穴建物で、流路3東岸の2B-4c区を中心に検出した。豊穴建物9とは周堤外縁が最も近接したところで0.15m余りとほぼ接した状態になり、東側居住域の景観を復元していくうえで、この2棟の建物が同時に存在したか否かが重要な課題と言えよう。攪乱や第2面で検出した井戸6によって一部が失われていたが、遺構の遺存状況は比較的良好で、豊穴とその周囲に巡らされた周堤、周堤の外縁に設けられた外周土坑を検出することができた。

豊穴は長軸をN80°W方向に置いた長方形を呈し、長辺は上端で5.1m、短辺は3.9mを測る。掘り



図167 窪穴建物10 平面図

方は旧地表面である4層上面から0.45m前後掘り下げられ、底面に灰色シルトのブロック土によって貼床を施し、建物床面を構築していた。貼床の厚さは0.05m前後と薄く、床面から周堤上端までの高さは0.65m強であった。

窪穴内には他の建物と同様に3層が大きく入り込み、床面の中央部はオリーブ灰色の砂質シルトから極細砂シルトによって直接被覆されていたが、窪穴内に埋め尽くした3層に関しては、窪穴建物9が砂層を主体としていたのに対し、本建物では砂質シルトから極細砂といった比較的細粒の堆積物が主体となっていた。周壁際には数層のシルト層による三日月状の堆積が認められたが、いずれの層にも灰もししくは明オリーブ灰色シルトや灰白色細砂などのブロック土が多く含まれており、建物の機能停止後に周囲から流入した周堤盛土や周壁の崩落土と考えられる。ただし、崩落土内には植物纖維などの有機物は含まれておらず、他の建物で見られたような貼り壁の痕跡は確認できなかった。

窪穴の周囲には、旧地表面の上に窪穴掘削時の排土と考えられる灰黄あるいは黄褐色を基調としたシ

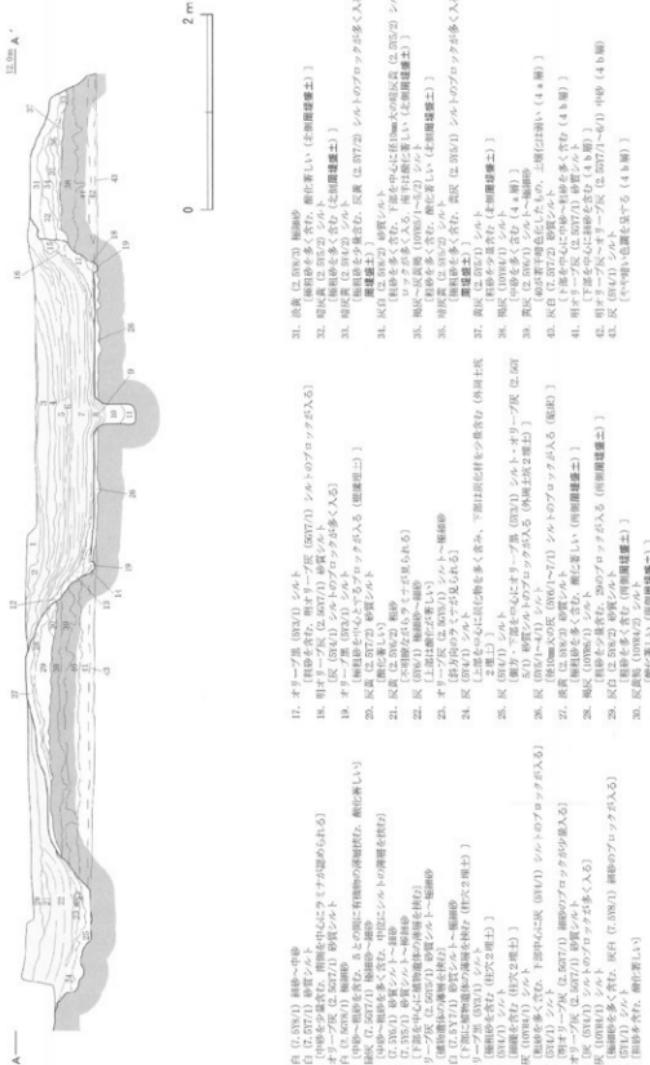
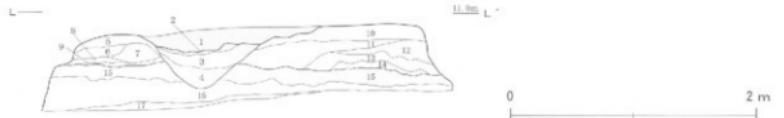


図168 穴穴建物10 断面図



1. 砂質 (2.078/1) 多質シルト (3層)
2. 塵灰 (1.078/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 1の買入が認められる
3. 滅灰 (1.078/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 2の買入が認められる
4. 灰 (NS5/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む、上部は褐色化により淡黄色 (2.518/1) を呈する〕
5. 塵灰質 (2.078/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 1の買入が認められる (堅穴建物10北側周堤底土)
6. 砂質 (2.078/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 (堅穴建物10北側周堤底土)
7. 灰 (2.076/2) 塵灰
〔柱鉄砂を多く含む〕 (堅穴建物10北側周堤底土)
8. 塵灰質 (1.076/3) シルト～粗砂
〔柱鉄砂を多く含む〕 (堅穴建物10北側周堤底土)
9. 滅灰 (1.075/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 灰 (1.075/2) シルトのブロックが多く入る (堅穴建物10北側周堤底土)
10. 滅灰 (1.075/1) シルト～粘土
〔柱鉄砂を多く含む、黒灰色 (1.075/1)・灰黄質 (1.075/2) シルトのブロック
多く含む〕 (堅穴建物9南側周堤底土)
11. 滅灰 (1.075/1) シルト～粗砂
〔柱鉄砂を多く含む〕 (堅穴建物9南側周堤底土)
12. 灰灰 (2.518/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 (堅穴建物9南側周堤底土)
13. 灰灰質 (1.075/2) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 滅灰 (2.518/2) シルトのブロックが多く入る (堅穴
建物9南側周堤底土)
14. 塵灰質 (1.075/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 (堅穴建物9南側周堤底土)
15. 粘土 (1.074/1) シルト
〔柱鉄砂を多く含む〕 4a (4b)
16. 灰灰 (2.517/1) シルト
〔中砂を多く含み、当施設近では灰 (516/1) 中砂～極粗砂を多く含む (4 b
層)〕
17. 灰 (516/2) シルト (4 b層)

図169 堪穴建物9～10周間周堤 断面図

ルトから極細砂層を盛り上げて構築した周堤が残存していた。周堤の外縁は、堪穴建物9が接する北東側が直線的となった歪な梢円形を呈し、長径9.0m、短径7.95m、周堤外縁までの面積は約59m²を有する。周堤の規模は幅1.7～2.65m、高さ0.2～0.4mを測るが、北東隅部分は幅0.9mと著しく狭まっていた。

堪穴建物の床面上では、中央土坑とその両側に配された2基の主柱穴、壁際土坑ならびに壁溝を検出した。

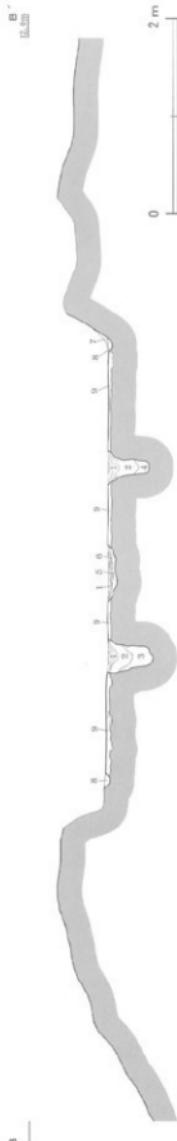
壁溝は各周堤下において確認され、幅0.1～0.2m、床面からの深さ0.05～0.1mを測る。溝内は極粗砂のブロックを含むオーリーブ黒色シルト層によって埋没していたが、貼り壁など壁体構造を窺うことができる情報は得られなかった。なお、この壁溝に囲まれた床面積は12.6m²を測る。

2基の主柱穴は、堪穴の長辺に平行して東・西壁溝の内肩から1m内側に置かれ、柱芯間隔は1.95mを測る。柱穴1は長径0.4mの不整梢円形、柱穴2は径0.35mの不整円形を呈し、床面から坑底までの深さは1が0.45m、2が0.3m強で、いずれも柱根は遺存せず、3層である灰白色の砂質シルトから極細砂が0.1m前後落ち込んでいた。

2基の主柱穴に挟まれたほぼ中央には、長径0.6m、短径0.55mと南北方向にわずかに長い不整円形を呈した中央土坑が存在していた。坑底までの深さが0.1m足らずの浅い土坑であるが、壁の一部が被熱によって黃褐色に変色し、底には炭化物層が堆積していたことから、炉であった可能性が高い。

この中央土坑と南壁の中間では、土坑1とした壁際土坑を検出した。長方形に浅く掘り下げた中をさらに梢円形に掘り込んだもので、規模は上段の方形部分が東西0.6m、南北0.55m、円形部分が長径0.45m、短径0.35mで、床面から坑底までの深さは0.35mを測る。土坑の上部は深さ0.2mまで3層があり込んでいたが、上段には敷かれていたように植物繊維が遺存し、その一部が円形部分の中ほどに落ち込んでいた。植物繊維は上下2枚が確認でき、このうち上部は遺存状態が悪く詳細は把握し得なかつたが、下部は網代状となっていたことから、土坑の蓋であった可能性が高いと考えられる。

この他、堪穴内の施設として付け加えておくべき所見として、南東隅に近い東壁で確認した掘り込みが挙げられる。床面から0.1mの高さに段ができるように周壁面を逆レ字状に掘り込んだもので、平面は幅0.3mの梢円形を呈し、掘り込みの深さは0.1mを測る。遺構の性格を推定するデータはこれ以上



1. 残土 (B71) 砂質シルト～粘土質砂
 2. ティーパー（T7）砂質シルト～粘土質砂
 3. 土（B71）砂質シルト～粘土質砂
 4. 土（B71）砂質シルト
 5. 黄泥（B71）砂質シルト
 6. 黄泥（B71）砂質シルト～粘土質砂
 7. 黄泥（B71）砂質シルト～粘土質砂
 8. オーバーレイ（B71）砂質シルト
 9. 土（B71）砂質シルト～粘土質砂
- [下部には灰白（B71）砂質シルトの薄層が入る（中井上地底上）]
- [細胞砂を含む（往穴2号土下部）]

図170 壁穴建物10 各施設 断面図



外周土坑1

1. 砂質（B71）砂質シルト～粘土質砂
 2. オーバーレイ（B71）砂質シルト
 3. 土（B71）砂質シルト～粘土質砂
 4. 土（B71）砂質シルト
 5. 黄泥（B71）砂質シルト
 6. 黄泥（B71）砂質シルト
- [往穴2号土下部中心にリード管（B71）砂質シルトの薄層が入る]



[上部では細胞砂が少く含まれる]



1. 乱成（B71）砂質シルト～粘土質砂
 2. 土（B71）砂質シルト
 3. オーバーレイ（B71）砂質シルト
 4. 土（B71）砂質シルト
 5. 黄泥（B71）砂質シルト
 6. 黄泥（B71）砂質シルト
- [上部では細胞砂が少く含まれる]

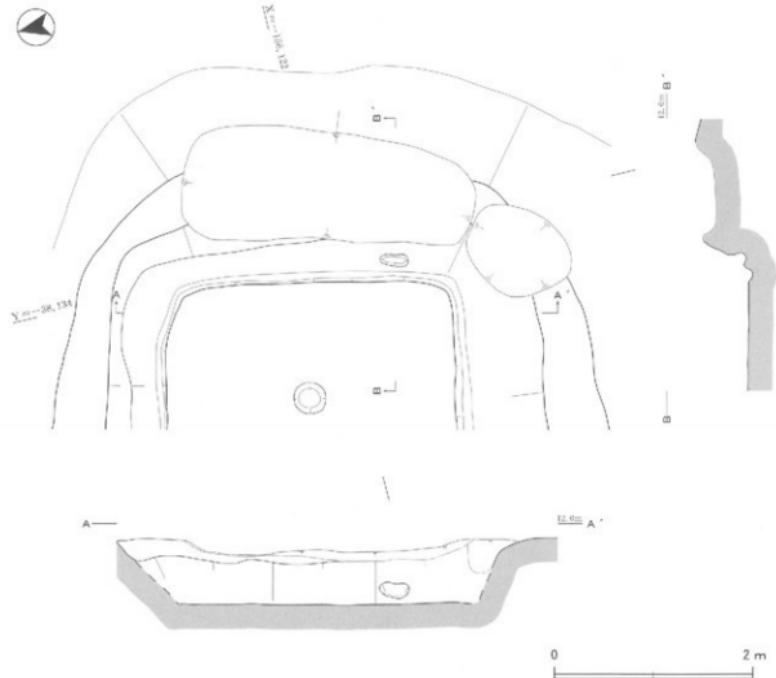


図171 窪穴建物10 窪面ステップ 平・断・立面図

得られなかったが、建物周辺の地表面から周堤上端までの高さは掘り込みが存在する南東隅辺りが0.2mと最も低いことから、昇降の際の足掛かりといった窓穴内への出入りに関わる施設であった可能性も考えられよう。

さて、以上の屋内施設に対し、周堤の外縁では2基の外周土坑を検出した。このうち北西部で検出した外周土坑1は、長さ3.25m、最大幅1.6mの船底形を呈し、坑底までの深さは0.7mを測る。埋土はシルトブロックを多量に含んだオリーブ灰色砂質シルトや灰色シルト層を主体とし、この上を3層が覆っていた。一方、南側の周堤外縁に掘削されていた外周土坑2は、バナナの形に似た溝状の土坑で、長さ6.4m、坑底までの深さ0.3~0.4mを測る。土坑の上部には周堤を被覆した3層が大きく入り込んでいたが、その下には炭化物やオリーブ黒色シルト・オリーブ灰色砂質シルトのブロックを多く含んだ灰色シルトが2層に分かれて堆積していた。

出土遺物 窓穴内に数点の土器が残されていたほか、外周土坑2の上部シルト層上面および層内から壺や鉢など複数個体の土器が出土した。また、建物南西側の流路3の肩際にも、破片が中心ながら長頸壺や甕・高环・器台といった各器種の土器が棄てられており、本建物に関わる遺構として「窓穴建物10周辺-a域」と呼称した。

(岡本)

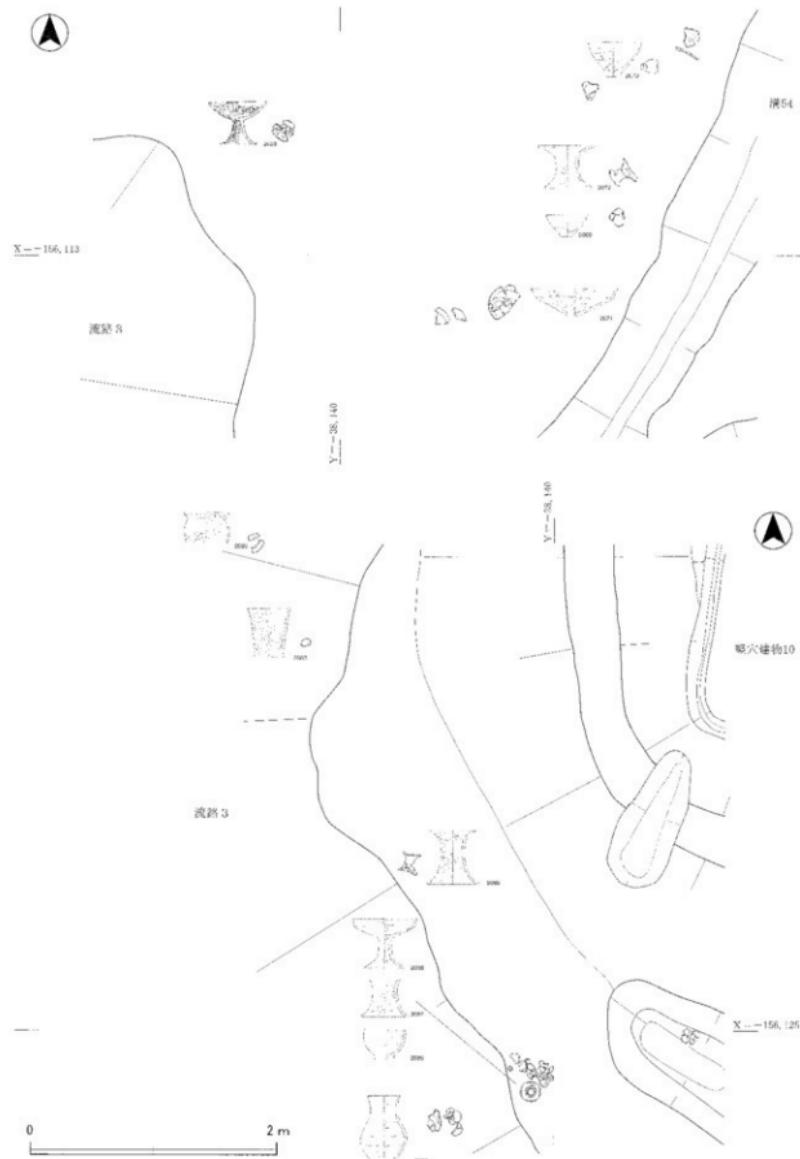


图172 竪穴建物9周辺-a域・竪穴建物10周辺-a域 遺物出土状況図

〔井戸9〕（図173・図版81-2・3）

検出状況 第3面の居住域南西端に位置する3A-1-i区で検出した素掘りの井戸である。掘り方の平面形はやや南北に長い梢円形を示し、長径2.1m、短径1.8m、検出面から底面までの深さ1.3mを測る。断面形状は摺鉢状を呈しており、もっとも深いところでは、直径0.3mほどの不整な円形の窪みを有していた。側壁は崩落により、部分的にオーバーハングしている。

埋土は大きく上・中・下の3つに分けられ、層厚0.4m前後で側壁の崩落土であるブロック土及び有機物に富む黒褐色シルトの下層（7）、その上部に堆積する中層（6）、やや粗粒の堆積物を主とする上層（1～3・5）に分けられる。

下層は、底面付近を中心として不整形な緑灰色極細砂のブロック土が堆積しており、その上部を中心として黒褐色の有機質に富むシルト層が堆積している。このブロック土は、4層直下に堆積している4b層以下の水成層を起源としていることから、壁面の崩落後、放棄された井戸としてオープンな状態で埋積したと考えられる。

中層は下部を中心に有機物の薄層と灰黄褐色の砂質シルト層が互層をなしている。上部へ行くに従い、粒径が粗くなる傾向にあるが、全体としては細粒の堆積物によって形成された層である。

なお、本遺構は北側で溝48と接続する。溝48は居住域の西側に展開する水田に接する落ちに相当するため、本遺構と溝48が同時に機能していたのであれば、耕作に伴う灌漑用の施設であった可能性がある。

出土遺物 井戸内からは遺物が認められなかった。

しかしながらその周辺域では、図示したように、土器が旧地表面に貼り付いた状態で出土した。遺物は大きく2箇所に集中しており、そのうち南半部では、まとまった数量を確認している。地点としては、居住域の西端、水田域への傾斜変換点に該当しており、水田域との比高差は約0.1mを測る。完形の遺物は認められないが、いずれかの部位を欠きながらではあるが、良好に遺存する土器が多い。全体的に壺が目立つ構成となっており、型式的に類似した土器が多い点は特徴的である。

土器に大きな型式差が認められないことや、出土地点が特定箇所に集中していることからも、短期間の間に投棄された様相を強く示しているものと考えることができる。

〔井戸10〕（図174・図版79・80-1・2）

検出状況 2A-8-f区で検出した素掘りの井戸である。西側居住域のほぼ中央部に位置し、後述する井戸11と対をなす。標高11.5～11.4m前後の地点に立地する。

本井戸は、周囲に盛土を巡らせ堤状の構造を探る点が特徴的で、盛土の高さは約0.1mを測る。盛土はほぼ単一層から成り、もっとも広い箇所で1.8m前後の幅で台形状に盛り上げられている。擾乱によつて北側の盛土を欠くため、全体の形状は明らかでないが、盛土の裾幅を勘案すると、井戸全体の規模は直径約4.6mとなる。

なお、ほぼ同じ形状で北側にも盛土が展開していたと仮定した場合、概算ではあるが、盛土には多く見積もって約1.1m³の土が用いられていたと考えられる。井戸を掘削した際に出る土の総量は、旧地表面（4層）を掘削面として直径0.9m、深さ1.9mの円柱として考えた場合、1.2m³となり、ほぼ合致する数値を示している。このことからも、先に述べた堅穴建物の周堤同様、掘削に伴つて発生した残土を用いて堤状の構造物を井戸の周囲に巡らしていたことが想定できる。地表面を流れる雨水等の流入を防ぐ機能を持たせていた可能性がある。

掘り方の平面形は、やや東西に長い梢円形を呈し、長径2.0m、短径1.8mを測る。堤上面から底面

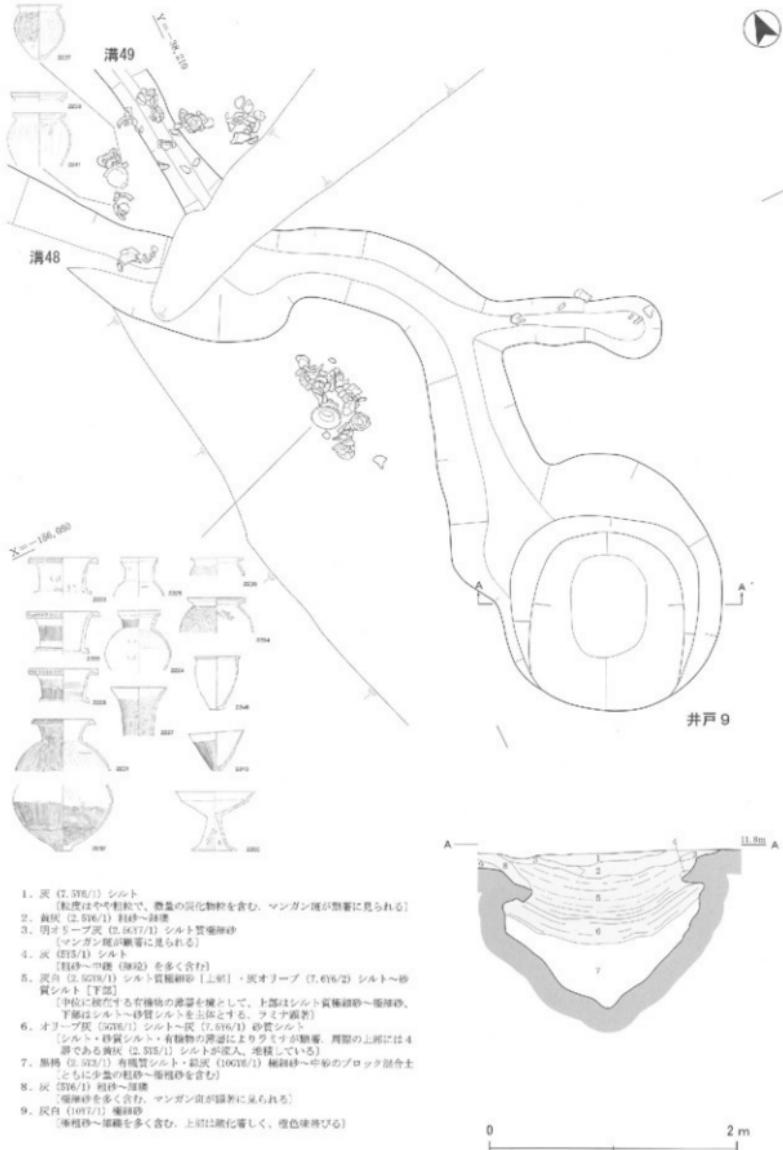
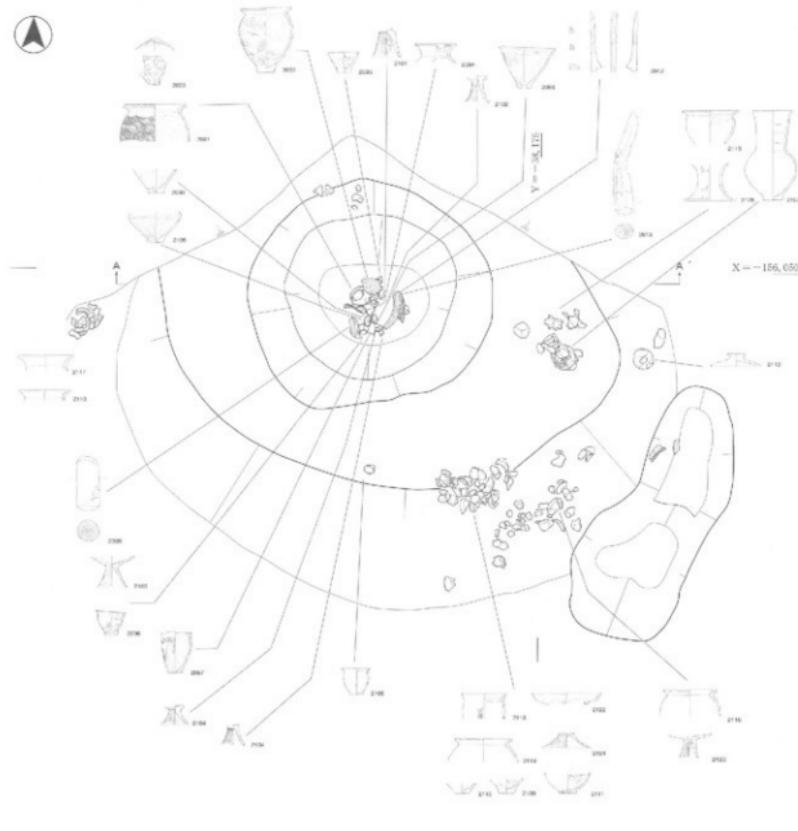


図173 井戸9 满48・49 平・断面図



1. 汎貢 (7.138/3) シルト～粗細砂
（上部はマジンガニ層が頂部に見られ、下部はシルト
質が無い、有機物の薄層を挟む）
2. 精糞灰 (634/1) シルト
（炭化物質を含む、細緻～粗粒のブロックが入る）
3. オリーブ層 (7.137/1) 純粋砂～砂
（シルトを多く含じえる、有機物の薄層を挟む）
4. 水 (7.134/1) シルト
（シルトを多く含む）
5. 灰貢 (2.136/2) 中砂
（細緻を多く含む、シルトの小ブロックが入る）
6. 表層 (398/1) シルト
（細緻を多く含む）
7. 灰貢層 (1.031/2) 中砂
（シルトを多く含む、30～50mm大の黄（338/6）
細緻なブロックが入る（硬質土））
8. 黑泥 (1073/2) シルト
（中層（細緻）が多く含む（4 a層））

図174 井戸10 平・断面図

までの深さは2.0mを測り、最下部は旧石器時代の遺物包含層である12層まで到達していた。当時の湧水層がどの層に相当するのかは明確ではないが、井戸としては十分な深さを備えたものと言える。

掘り方の断面形状は、円柱状を呈しており、側壁は上半部を中心に部分的に乱れた様相を呈している。埋土の観察からいずれも平面が崩落して形成されたものと推定でき、本来はほぼ円柱に近い形状を採っていたと考えられる。

埋土は大きく上・中・下の3層に分けられ、上層は細粒を中心とする3層(1)、中(2)・下層(3)は3層堆積以前の堆積層である。下層には遺物が多く含まれ、有機物による薄層が挟在する。このことから、井戸の放棄時に遺物が投棄され、徐々に埋積していく状況が想定できる。

なお、本井戸の南西側には、深さ0.05~0.1mの浅い落ち込み状の土坑が連結している。深度も浅く、明瞭な掘り方を持たないため、人為のものとすべきか判断に迷うが、東側堤盛土の上端幅が、その他の地点と比較して幅広であることに対応しているようである。

本井戸は井戸11とともに周囲に堤状の高まりを持つ点で、特筆すべき遺構である。検出地点からは、西側居住城の建物のはば中央部に位置しており、共用の井戸であった可能性が想定できる。

出土遺物 遺物は、井戸内及び堤の上面に貼り付くようにして多数の土器、少量の木器が出土した。

井戸内からは、最下部から土器が出土した。図172に図示した遺物は、底面近くに貼り付いて出土したものである。甕・鉢を中心とした組成に、少量の蓋や高坏が伴うが、完形となるものは3点と少ない。このほか、用途不明の木製品が3点出土しており、いずれも欠損したものであることから、不要となつたものを一括して投棄した可能性が高い。

一方、堤上に貼り付くようにして出土した遺物は、南東側、東側、西側の大きく3箇所に分かれて分布しており、そのうちの2箇所が東側に位置する。ちなみに、この2箇所の遺物の出土地点は、堤盛土の上端幅がもっとも広い箇所の両脇に位置している。既に述べた隣接土坑との位置関係から、本来この地点になんらかの機能が与えられていた可能性もある。

なお、土器は完形になるものが多く、いずれも土圧により、押し潰されたような様子を呈していたことから、一括して投棄された状況を考えることができる。

井戸内から出土した土器のうち、2090は蓋の内面に線刻によって絵画が描かれている。弧状の表現を連続して用いる点は、堅穴建物3出土の竈に類似するもののようにも思えるが、類例をみない意匠であり、今後の資料の増加による検討が必要である。それとともに、井戸の底面近くに投棄された状態で出土したことは注目に値する。

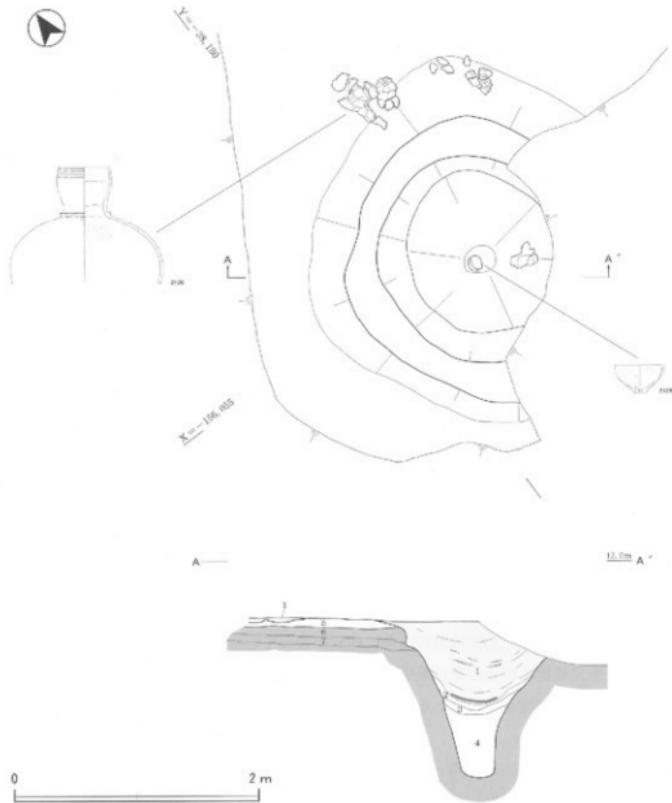
[井戸11] (図175・図版79-1・2、80-2・3、81-1)

検出状況 2A-8~9f区で検出した素掘りの井戸である。先述の井戸10と同様、周間に盛土が巡らされている。北端の一部を除き、大半を搅乱によって失っており、盛土の崩壊を含めた全体の形状は窓い知れないが、掘り方の平面形は正円に近い。盛土の厚みは井戸10と同様、0.1m前後である。平面検出時には、明らかな傾斜の変換が認められる点をもって盛土の裾と認識したが、その崩壊幅を検証すべく、断面を井戸の外側にも延長して観察したところ、想定した幅を超えて盛土が施されていたことが確認できた。井戸構築に伴う盛土後の土壤化が進行したために、周辺の4a層と同化した結果、誤認したものと考えられる。なお、明らかな傾斜変換をもって裾と認定とした場合、その形状は、1辺2.7mの隅円方形に復元することができる。

掘り方の断面形状は緩やかなV字状を呈し、約70°の角度で掘り込まれている。底面の平面形状は直

径0.2mと小さく、井戸10とは様相を異にする。盛土上端から底面までの深さは1.3mを測る。

井戸10と同様に井戸を第3面（4層上面）から掘り込んだものとして掘削土量の復元を行うと、約0.42m³の残土が排出される計算となる。次に、現状で捉え得た盛土の範囲は、南側の搅乱部を均等に復元した場合、約0.41m³となり、残土の量とほぼ合致する数値を示す。先に述べたように、盛土の範囲は



1. 黄（2.573/00）シルト～粗礫砂
〔下部の方がシルト質が強い。炭化物や有機物の特徴を含む〕
2. 黄泥（2.573/1）シルト
〔漂移～中礁（礁隙）を多く含む〕
3. 黄泥（2.574/1）シルト
〔漂移～礁を多く含む。礁質（577/3）礁群のブロックが入る〕
4. オリーブ（2.574/2）シルト
〔漂移～礁（礁隙）を多く含む。炭化物粒を含む。50mm大的灰オーリーブ（7.576/2）シルトのブロックが入る〕
5. 黑泥（3184/1）シルト～粗礫砂
〔山縁（礁隙）を多く含む。赤黄泥（10187/0）シルトのブロックが入る。マンガン斑が點々に見られる（褐色土）〕
6. 黑泥（3182/1）シルト～粗礫砂
〔礁縫を含む（4×層）〕
7. 黑泥（3182/1）シルト
〔礁縫～中礁（礁隙）を多く含む（4×層）〕

図175 井戸11 平・断面図

圓化範囲より若干広がることが推定できるため、実際には0.41m²以上の土が盛土に使われている計算となるが、このことからも、掘削に伴って発生した残土を用いて堤状の構造物を井戸の周囲に巡らしていたことが想定できる。井戸10同様、地表面を流れる雨水等の流入を防ぐ機能を有していた可能性がある。

埋土は大きく3層である上層（1）と、3層堆積以前の下層（2～4）とに分けられる。いずれも細粒の堆積物を主体としており、その他の井戸と大差ない埋積の仕方をしている。

出土遺物 出土遺物は井戸10と比較して少なく、ほぼ完形の有孔鉢1点が下層の上部で出土したほかは、生駒山西麓産の胎土を用いる細頸壺の破片が北側の盛土上に貼り付いた状態で1点出土しているに過ぎない。なお、盛土上面の土器と、井戸内の土器との間に接合関係は認められなかった。ただし、当井戸より出土した破片が竪穴建物7・外周上坑5出土遺物と接合したものがあり（1961）、注目できる。これらの土器は、第3面に伴うその他の土器と比べて型式的にやや古相を示すが、検出状況から井戸10との関連が密接と考えられる点や生駒山西麓産の胎土を用いている点を勘案すると、概ねその他の土器と大差ない時期に帰属し、河内V-2～3様式〔寺沢・森岡編・著1989〕のものと考えができる。

〔貯木構造1〕（図176・177・図版79-1・2・80-2・3・81-1）

検出状況 2A-5h区で検出した大形の土坑である。西側居住域の中央部に位置しており、後述する流路3に接続している。西側にはさらに緩やかで浅い落ち込みが接続する状況を確認した。

土坑の平面形は、一端を開口する長楕円形を呈する。上端での最大幅は、約2.4m、長軸の長さは約3.8mをはかり、検出面からの深度は約1.6mを測る。東側は流路3に向かって開口している。調査の制約上、流路と本遺構との底面の比高差は確認し得なかつたが、本遺構の底面付近の流路埋土の様相から、流路の底面はさらに下位に存在し、本遺構とは段を成していたことが想定できる。

掘り方の断面形は、2段に落ち込む形状を成す。土坑の長軸方向の断面形状は、最下部で浅く掘り込まれており、流路3に接する東側は、一度立ち上がった後に流路3の底面へ向けて落ちていく様子を示していた。したがって、流路と接してはいるものの、本遺構は独立したひとつの落ち込みとして機能していたことがわかる。すなわち、流路3によって形成された窪みを利用して水を溜め、用材の加工を容易にするため、あるいは、用材の保存を目的とした施設である可能性がある。

埋土は大きく上（1）・中（2・4）・下（3）の3層に分けられる。

下層は全体的に淘汰が良いが、5cm大のシルトブロックを多く含んでおり、4層以下のベース土を起源としている可能性が高く、木製品も多く含むことから、機能時に埋没したものと考えられる。また、中層は竪穴建物等、その他の遺構でも、3層直下に普遍的に認められる暗灰色の堆積物であり、植物遺体で構成される薄層を多く挟在させている。後述する出土遺物の大半は、本層準の下位に位置することから、下層が堆積した後に、土器を投棄し、徐々に埋没が進行した状況を示しているものと考えられる。

出土遺物 土器・木製品が豊富に出土した。出土地点は土坑のほぼ全域に及ぶが、図示したように土坑の底面から西側の掘り方にかけて集中していた。土器組成としては、器台・鉢が比較的多く、壺がほとんど認められない点が目を引き、傾向としては既述した竪穴建物7の外周土坑の組成に近似している。帰属時期は、V-2～3様式に位置づけられる。

特徴的であるのは図177に示すように、底面近くで木製品が多く認められることであり、本遺構の性格を示唆している。木製品は、クスギの枝材を多く含むほか、直径20cm以上の中径材の外面を面取りした未製品が出土した。製品としては有頭棒が出土している。

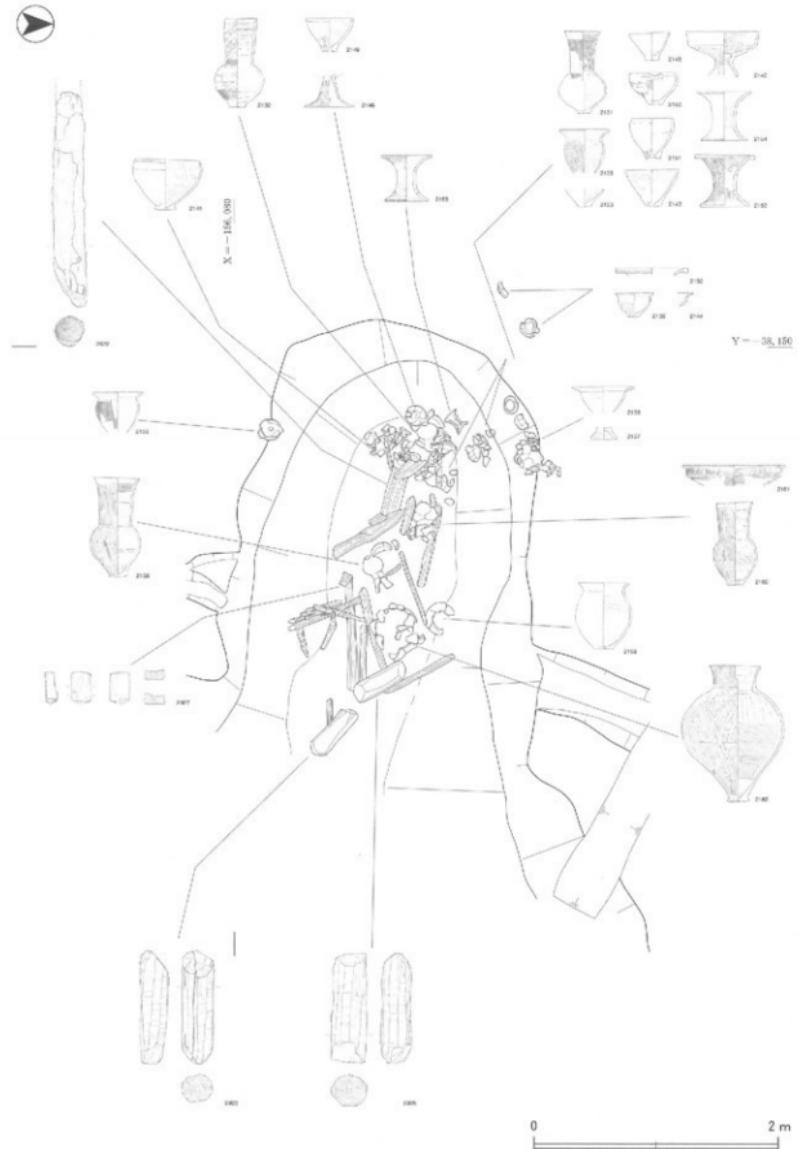
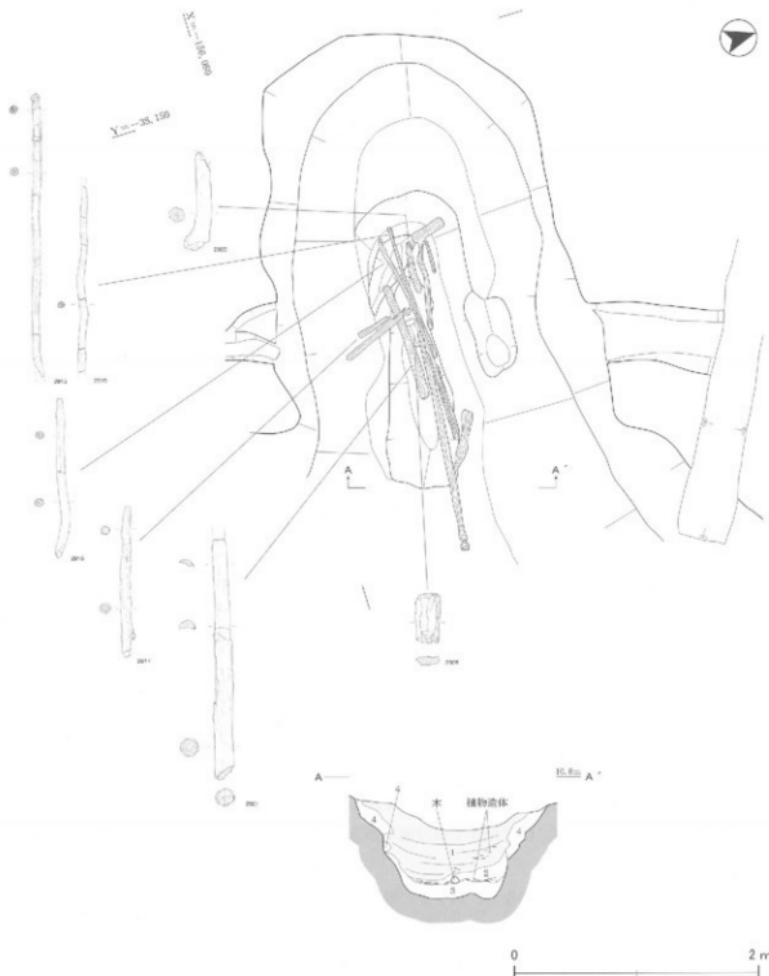


图176 贯木道構 1 上・中層 遺物出土状況図



1. 磯灰炭 (7.5GK/1) 植物の一部
【シルトの隙間に植物遺体を挟む】
2. 磯灰 (0.5m) 砂土質シルト
【植物が多く含み、下部では植物遺体群が現れる】
3. 灰 (0.4m) 粘土質シルト
【10mm以上の礫が混入 (7.5GK/1) シルト・モオリーブ灰 (7.5GK/1) 細砂のブロックが非常に多く入る】
4. 磯灰 (0.2m) シルト
【礁砂へ中砂を多く含む、10mmまでの礁灰 (7.5GK/1) シルトのブロックが入る】

図177 貯木造構1 下層 遺物出土状況・断面図

〔土坑79〕（図178・図版106-3）

検出状況 2A-6f区で検出した土坑で、竪穴建物7の南側に位置している。第3面検出時にはプランを明確に把握できず、わずかな3層の落ちを手がかりにアゼを設定し、ベース面である第3b面でプランを確認することができた。平面形状は直径約0.7mの正円を呈し、第3面での検出面から底面までの深度は0.6mを測る。掘り方の断面形状は、約70°の角度で掘り込まれる擂鉢形を呈しており、部分的に緩やかな段を設ける。

埋土は4層に区分できるが、3層である最上層（1）を除き、質・色調ともに4層と近似した様相を示す。第3面上での検出を困難にさせた要因の一つであるが、4層以下のベース土であるシルトブロックを多く含むという点で、中層（3）と上層（2）は明瞭に区分できる。遺物の包含が中層以下にはば限定されることも、このことを傍証するものと考えられる。

加えて、他遺構と比較して3層の堆積が土坑内にほとんど認められないことは、本遺構の特徴である。すなわち、集落の機能が廃絶された段階では、多くの遺構とは異なり、大半が埋積していた可能性が高い。他の土坑より遺物の出土量が多いことも、このことの証左として見て大過ないであろう。

出土遺物 遺物は下層の上面及び掘り方に貼り付いた状態でまとまって出土した。すべて土器で、ほぼ完形の壺（2204）と高杯（2208）を除いて、それぞれいずれかの部位を欠損する。図化可能なものはすべて図示したため、鉢・器台を除く器種がそろっていることがわかる。なお、2208の高杯は、北陸地域に起源を求める事のできる他地域系の土器である。

〔土坑80〕（図178）

検出状況 1A-10f区で検出した大振りの土坑で、竪穴建物5の東側に位置している。東側が側溝にかかったため一部を欠く。残存箇所からわかる平面形は、やや不整な椭円形を呈しており、長軸の長さ約1.4m、短軸の長さ約1.1m、検出面から底面までの深度は、約0.4mをそれぞれ測る。掘り方の断面は40°前後の緩やかな角度で浅く掘りこまれており、中位でやや鋭角に屈曲して段をなしている。

埋土は3層である上層（1）と、3層直下に堆積する有機質に富んだ黒褐色土である中層（2）、4層以下のベース土ブロックを多く含む下層（3）の3つに分けられる。中層までの堆積が少なく、3層が多く堆積することからも、集落機能の廃絶時前後まで、オープンな状態で存在していた可能性が高く、上述の土坑79とは埋没の過程が異なることを示している。

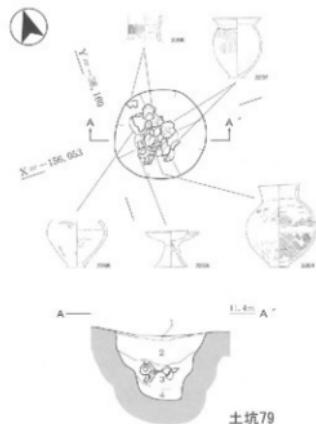
土坑の機能は不明であるが、位置関係や埋没環境が近似することから、竪穴建物5に関連する遺構である可能性が高い。

出土遺物 出土遺物は極めて少なく、わずかに壺と思しき体部片を2片確認したに過ぎない。したがって船属時期の限定は困難であるが、埋土の様相からは竪穴建物の外周土坑とほぼ近似した様子が看取できることから、間接的ではあるが、河内V-2~3様式に位置づけることができよう。

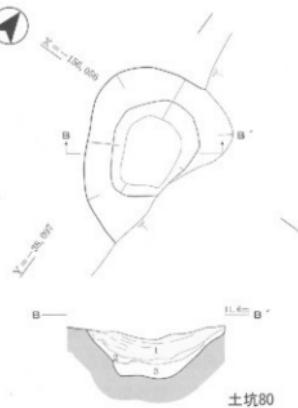
〔土坑81〕（図178）

検出状況 2A-1f~g区で検出したやや大振りの土坑で、竪穴建物5の南側に位置している。平面形はやや不整な長椭円を呈し、長軸長約1.9m、短軸長約1.2m、検出面から底面までの深さは、もっとも深い箇所で約0.6mをそれぞれ測る。掘り方の断面は、約60°の角度で掘り込まれており、坑底は長軸長約1.2m、短軸長約0.6mを測る不整な長椭円形の平坦面を有する。

埋土は3層である上層（1・2）と、3層直下に堆積する灰色粘土質シルトの有機質に富んだ下層（3）に大別できる。土坑80の埋没環境同様、集落機能の廃絶時前後まで、オープンな状態で存在していた可



1. 灰 (2.5YR 7/0) 植物灰～細砂
2. 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト
【細砂を多く含む、炭化物を含む】
3. 黒褐色 (10YR 2/1) シルト
【細砂を多く含む、炭化物を含む。10mm大以下
のオリーブ灰 (5GY 7/1) シルトのブロックが入
る】
4. 黑褐色 (10YR 2/1) シルト
【3と混在が、無機の含有が増える】



1. 明オリーブ灰 (5GY 7/1) シルト～灰白 (2.5Y 6/1) 植物灰
【有機物の跡を含む砂利層と、西側の内壁には4a層である灰 (3Y 4/1)
シルト (含む黒～褐色部) の侵入が見られる】
2. 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト
【植物～粗砂を多く含む、有機物を多く含む】
3. 黄オリーブ灰 (5GY 7/1) シルト～オリーブ灰 (5GY 6/1) シルトのブロ
ック層
【3の層のブロックも粗砂～細砂を多く含む】

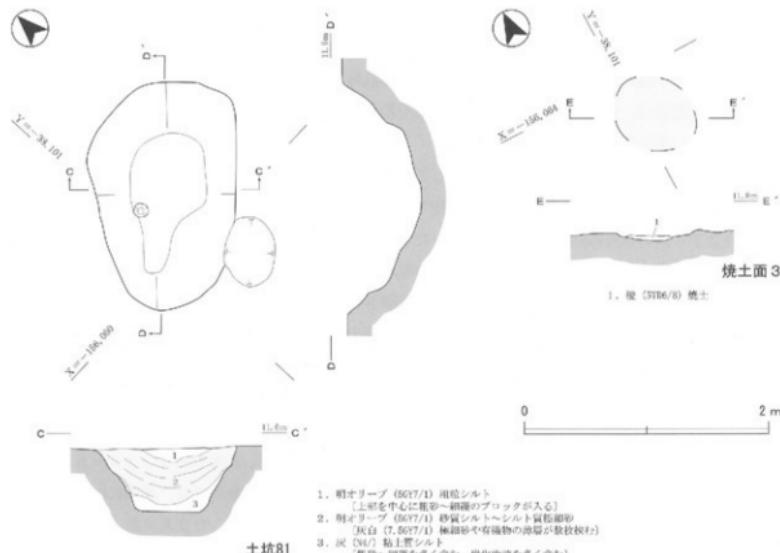


図178 土坑79～81 烧土面3 平・断面図

能性が高い。上述の土坑80と極めて近しい関係にあることが想定できる。

出土遺物 遺物は出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。

〔焼土面3〕（図178）

検出状況 2 A - 1 g 区で検出した焼土面で、堅穴建物5の南側に位置する。焼上の拡がる範囲は、南北方向に長軸を持つ指円形を呈し、長軸長約0.7m、短軸長約0.6m、検出面から底面にかけての深度0.05mを測る。検出時の状況としては、かろうじて焼土の分布範囲を確認し得たのみであった。

断面形状は、緩やかに窪む浅い落ち込み状を呈し、周辺の4層上面は凹凸が激しく、乱れている。土壤化が進行していたため、明瞭な弁別はなし得なかったが、周辺の乱れは盛土であった可能性もある。

埋土は橙色を呈する焼土の一層である。なお、実際の焼土は0.4m前後の幅でしか存在していないため、被熱面はそれぞれ0.1m前後の幅をもって周囲を巡っていたと考えられる。

なお、図示してはいないが、本遺構から1m北西の位置では、同様の焼土を埋土に持つ焼土面2を検出した。本遺構同様、堅穴建物5の近隣に位置しており、堅穴建物5が中央土坑を伴わない建物であることを考え併せると、屋外炉の在り方として、極めて興味深い事例を得ることができた。

出土遺物 遺物は出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。

〔小区画水田〕（図121・図版83・84）

検出状況 02-1工区の南西部及び、03-1工区2調査区で検出した水田畦畔である。3 A - 2 d ~ 2 i 区を居住域との境界として以西に展開する。なお、居住域と水田域の比高差は約0.1mを測る。

検出した範囲での全体の地形は、南東端を頂点として北西方向に緩やかな傾斜を持っている。水田の造成に当たっては、その傾斜に即して幹線となる畦畔を4~5mの間隔で配し、その中を支線畦畔で区切るという方法を探っている。

但し、03-1工区2調査区の南西部では南西から北東方向へと傾斜が大きく変換しているほか、等高線の配置上、やや乱れが認められる南東隅では、幹線畦畔の配置もそれに呼応して変化している。

区画の平面形状は、傾斜変換点で不整な五角形や四角形を呈するが、基本的には4~5mの長方形を呈しており、一筆約24m程度を測る。

居住域との境には、溝47・48・谷1が存在している。擾乱が多く、不明瞭な点も多いが、3 A - 2 f 区では、幅の広い高まり（図121アミ部）を持ち、居住城側に開口している畦畔が認められることから、東側に存在する溝47からの取水を目的としていたと推定できる。その他の地点では、これに類する水口を確認できていないが、同様にこれらの溝からの取水を行っていたことが想定できる。なお、検出状況からは、調査地の南側にさらに畦畔が続くことが予測されるが、灌漑用水路と考えられる溝47は本調査地で井戸9と接続して終わっているため、なんらかの別の用水施設があったことが推定できる。

断面観察によれば、畦畔はすべて盛土によっており、畦畔の配置を見ても地形の改変は最小限に抑えられていたことが窺われる。

〔溝45・46〕（図179）

検出状況 03-1工区2調査区北端及び、02-1工区北西隅で検出した溝である。3 A - 5・6 e 区から2・3・4 d e 区にかけて位置している。水田域に隣接する西側の地点では、周囲に0.05m程度の緩やかな高まりを周囲に巡らしている。小区画水田との関係が明確に判明した3 A - 5・6 e 地点では、これらの高まりが途切れる箇所と畦畔の区画が開放される箇所が合致しているほか、該当箇所には、排水を誘導するようにわずかな凹みが伸びるなど、排水をより円滑に行う造作が認められる。

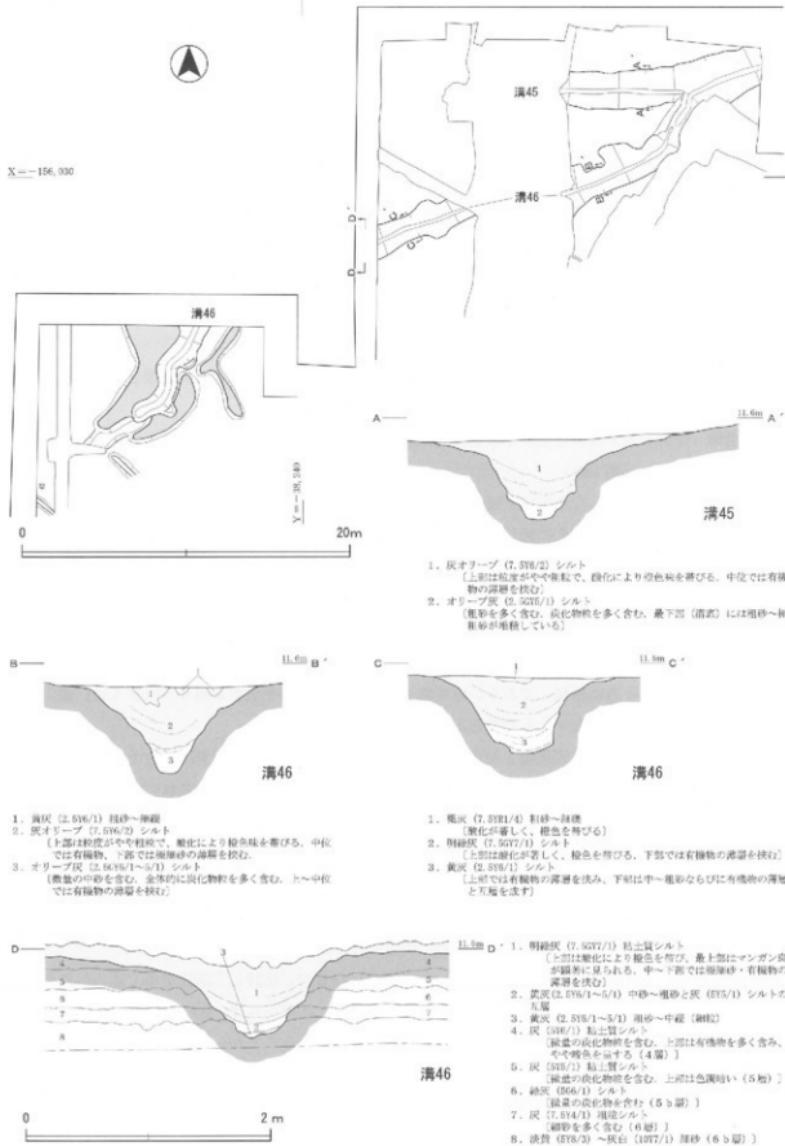


図179 溝45・46 平・断面図

溝の規模は、幅約1.5～3.0m、旧地表面からの深さ約0.7mを測る。掘り方の形狀は、部分的に異なるものの溝の始点に近いほど浅く緩やかな傾斜を示し、遠ざかるほど深く鋭い傾斜を呈している。

溝の埋土は大きく2層に分けられ、溝底から0.1～0.2mほどの層厚を持つオリーブ灰から黄灰色シルトを中心とする下層と、その上部に堆積する3層である上層から構成される。こうした点は、居住域に帰属する諸遺構の最下部埋土が、有機質に富み黒褐色を呈するのとは異なるが、一定の間隔を経て埋没している点は様相を同じくしている。直上を堆積する3層の様相がほぼ一定であることからも、ほぼ時を同じくして同様の埋没過程を経たものと推測できる。なお、02-1工区では、上面の遺構による擾乱や、地形の微起伏によって水田と当溝との関係が上手く把握できなかった。

ところで、溝46の北側に位置する溝45は、3A-2c区で溝46と接続している。残念ながら接続地点は地中染による攪乱によって不明瞭となっているが、溝底の水準値から溝46は、溝45との接続地点を最も低い箇所として溝45へと向かって下がっていく様相を呈している。溝45の延長は今回の調査地では検出しえなかっただため、3A-3c区で北側へ屈折して延びることが予測できる。

以上のように、本遺構は今回の調査地南西側に拡がる水田の排水を目的として掘削されたものと考えることができる。

出土遺物 3A-5e区から甕が1点出土した。河内V-2～3様式に帰属するものと考えられる。

〔溝47～49・谷1〕（図180）

検出状況 溝47は既述した水田域と居住域を画する溝である。02-1工区のはば中央部で、やや西側に膨らんで弧を描きながら南北に延びており、3A-2f区では、深さを増して谷1へと至る。谷1以北は、より強い弧を描いて北東方向へ延び、調査地外へと延びている。

溝48は井戸9と接続する小溝で、南西方向から大きな窪み状の落ちとして延びてくる溝47に接合している。溝47とほぼ同じ造構として捉えられる。

溝49は溝47の東側で併走する小溝で、溝47から分岐し、北側で再度溝47に接続する。

それぞれの溝の掘り方は近似しており、いずれも緩やかなU字形を呈する幅0.3～0.4m、検出面からの深さ約0.1mを測る小振りなものである。

谷1は、既述したように竪穴建物1や3などの排水溝と接続している。調査の都合上、中位まで掘削したところで、掘削を断念することとなつたが、約0.7m掘削した箇所で認められた3層は、まだ粗粒の堆積物を多く含んでいた。このことから、本来の谷底はより深い箇所にあったことが想定できる。また、上述した溝46とほぼ併走することから、竪穴建物等の排水を受けつつ、最終的には水田の排水溝である溝46と接続していた可能性が高い。

本遺構の特筆すべき点として、3A-2h区では溝49と溝47の接続地点と、溝48と溝47の接続地点の2箇所を主として、土器が旧地表面に貼り付いて出土したことが挙げられる。

これらの土器は、その他の旧地表面に貼りついて出土したものと比較して細片が多く認められる点が特徴的であり、その傾向は溝内に位置するものほど強い。出土状況からは、図示したように一定程度散在しながらも、比較的集中して投棄されたような状況を示していることから、ほぼ近似した時期に投棄されたものと見て相違ないと考えられる。

出土遺物 上述したように旧地表面及び溝内に貼りつくようにして土器が出土した。

完形に復元できるものは少ないものの、出土地点が明らかで、そのうち図示に耐えうるものは、11点が認められた。土器の構成は、壺・甕・鉢・有孔鉢・高杯・蓋と各器種が揃う。

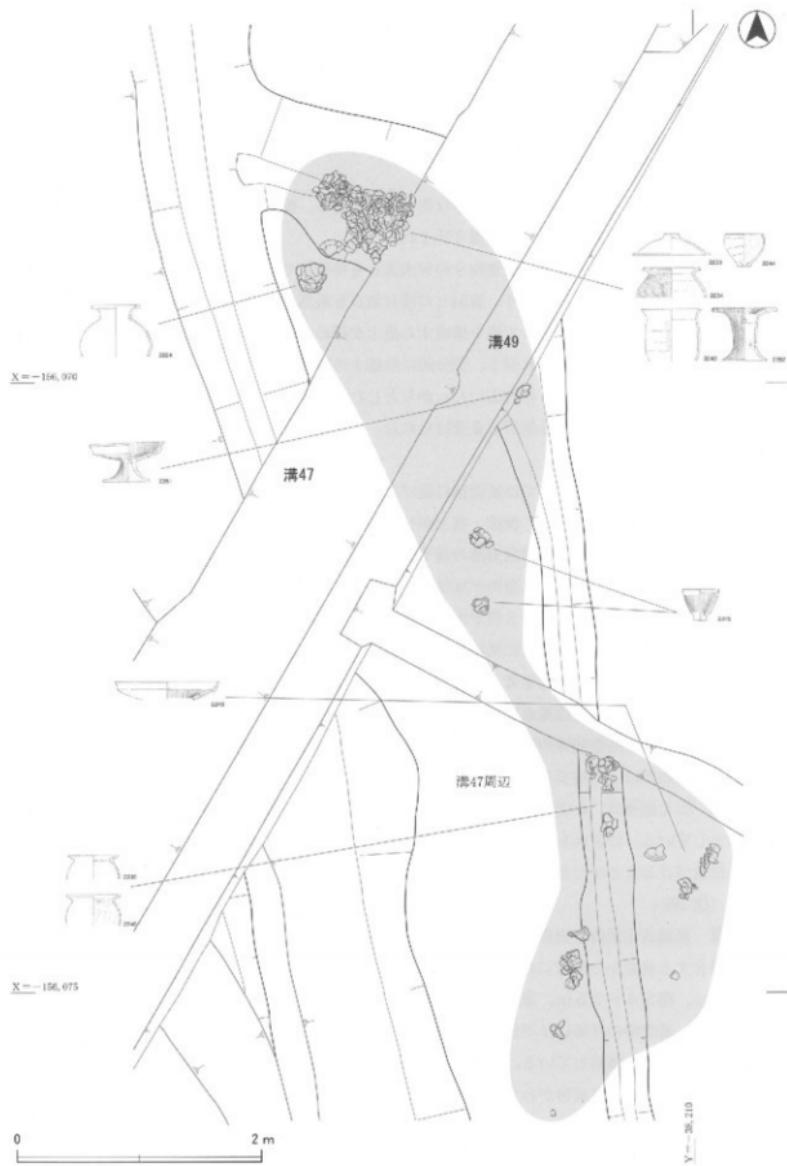


図180 溝49周辺遺物 平面図

土器の帰属時期は有稜高環や器台の様相から、その他の3面直上検出土器と同様に河内V-2~3様式に求めることができよう。

〔溝54〕（図181）

検出状況 東側居住区に位置する直線的な溝で、調査地南西隅で流路3と接続した後、北東方向へ延びて工区外へと続いている。周辺の微地形は、南東から北西方向に緩やかに傾斜しており、本溝はこうした微地形を無視して延びている。

溝の規模は幅約0.6m、検出面からの深さは約0.8mを測る。掘り方の形状は、75~80°を測る鋭角を示す。溝底は約0.25m前後の幅で鋭く掘り込まれる。

流路3との接続部は、そのまま堅穴建物9の排水溝とも接続している。なお、堅穴建物の排水溝のレベルは流路3に向けて落ち込んでおり、溝54との接合地点を最高水準点として両側に下がっている。

溝の両側には、ほぼ全城にわたって堤を構成する盛土が認められた。旧地表面からの平均的な高さは約0.15m、幅は約1.8mをそれぞれ測る。部分的には盛土の厚さ・幅が異なる地点も認められるが、全体的な傾向としては西側の方が、幅の広いしっかりとした盛土が施される傾向にある。また、03-1工区部分では、盛土が一部途切れる箇所も見受けられた。上部の水成層の削平を受けて途切れた可能性もあるが、詳細は不明である。

なお、この盛土は、地点によっては断面図に掲げたように、旧地表面と盛土、盛土と盛土の間に、それぞれ3層が挟在する箇所があり、浚渫・盛土が行われたことが窺える。これらの3層は、シルトを中心とする細粒の堆積物で、第3面帰属遺構の最下部に存在する3層と起源を同じくする可能性が高い。

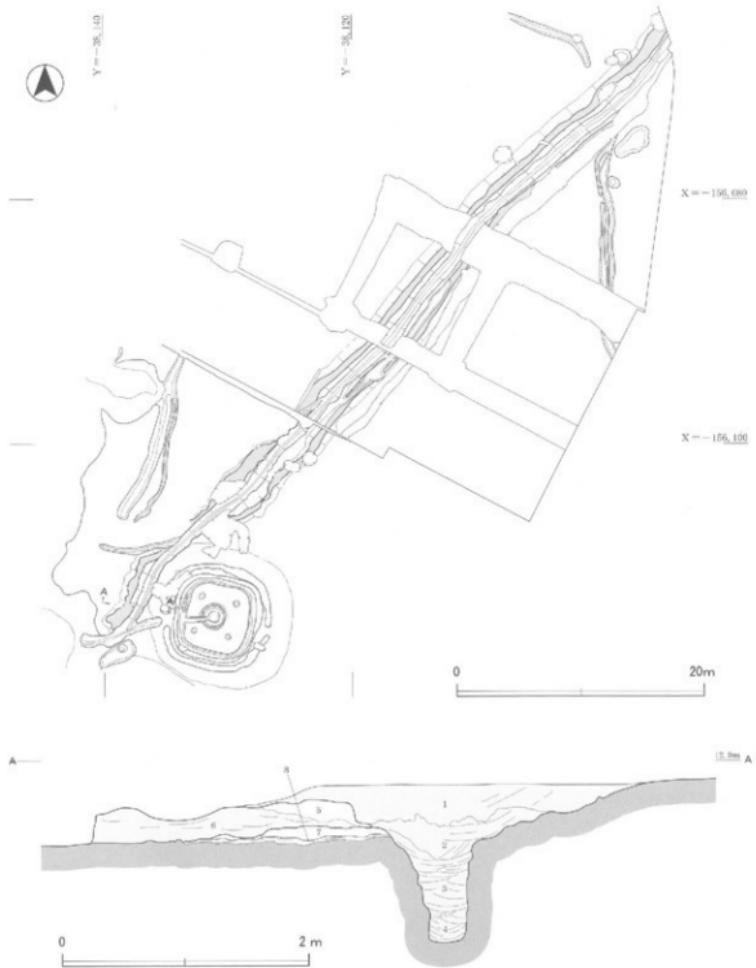
一方、溝底には中砂以上の粗い堆積物が堆積しており、これに対比し得る堆積物は3層の中でも比較的の上位に存在することから、本溝は3層が堆積し始めた後も一定期間機能し続けていた可能性が高い。微地形を無視して北東方向へ直線的に延びる点、水成層である3層が堆積するなどの状況下にあってもなお、浚渫・盛土を行っている点を考えると、北東側に展開が予測される水田の灌漑用水路であった可能性が高いが、流路3との接続地点に取水用の堰等の施設が認められず、その意味では、水路としての用をなしていない。水路機能時の流路3の深度がそれほど深さを有していないためか、あるいは施設が消失したためかは、不明である。

出土遺物 出土遺物は、わずかではあるものの溝内から土器が出土したほか、盛土内から土器片・石器片が出土している。いずれも細片であり、時期比定の決め手には欠くが、帰属時期は概ね弥生時代後期~中葉に位置づけることができよう。

〔谷2〕（図182）

検出状況 東側居住区の中央部、堅穴建物6の西側に位置する谷状の自然地形である。2A-4h区で溝52と接合する地点から急激に傾斜して深くなり、2A-4f区で流路3に合流している。谷の総延長は約32.5m、幅5.0~7.5m、深さ約1.2mを測る。断面形状は図示したように約30°前後の緩やかな傾斜を有し、調査時の昇降には不便を感じることはない程度の落ち込みであった。なお、堅穴建物6の排水溝は、本遺構と接続している。埋土は流路3同様、自然地形らしく最下部に有機質に富むオリーブ黒色シルト等の細粒の堆積物がわずかに堆積するほかは、その直上からは3層のみで構成されていた。

出土遺物 出土遺物の大半は、図193に掲げたとおり、2A-4h区の堅穴建物6西側の溝状の落ち込み部に含まれる。その他の地点では、遺物量は減少し、当該地点の遺物出土状況の特異さを特徴付けている。この地点は、細かく見た場合、a~f域の6つに細分が可能である。



1. 泥白 (E37/1) 砂質シルト
〔礁砂を含む。全体的に中砂を多く含む。上部の東側方面を中心に対称するラミナが認められる。〕
2. 明礫灰 (1007/1) 砂質シルト
〔礁砂を中心の中砂～粗粒砂を含む。東半をを中心に斜行するラミナが礁砂に認められる。上方～細粒化し、上から中位では厚20～30mmの大の灰 (N4/1) シルト (含粗砂) のゴセックがある。〕
3. 泥 (E37/1) 砂質シルト
〔礁砂を含む。上部では有機物を多く含む。〕
4. 泥灰 (E37/1) 中砂
〔上部は礁砂、下部は中砂を主体とする。泥灰 (N4/1) シルトのブロックが多く入る。〕
5. 泥白 (E37/1) 低細砂～粗砂
〔礁砂を含む。上部を中心にして (N4/1) シルト (含粗砂) のブロックが多く入る。(礁田産 (N4/1) 鹿土)〕
6. 泥 (SM7/1) 砂質シルト～粗砂
〔中砂を含む。礁砂がへ積乱化し、東側では斜行を示す。全体に水平方向のラミナが顕著に見られ、西側では粗粒砂の薄層を多く挟む。東半を中心にして礁砂が混入。〕
7. 泥 (N4/1) シルト
〔礁砂を含む。西半を中心に礁灰 (N3/1) シルトが多く入り、中～東半には礁砂の塊状が卓越する。(西側産 (N4/1) 鹿土)〕
8. 明礫灰 (7.507/1) 砂質シルト
〔4 m 層である礁灰 (N3/1) シルトの小ブロックがわずかに散在する (3番底下部)。〕

図181 溝54 平・断面図

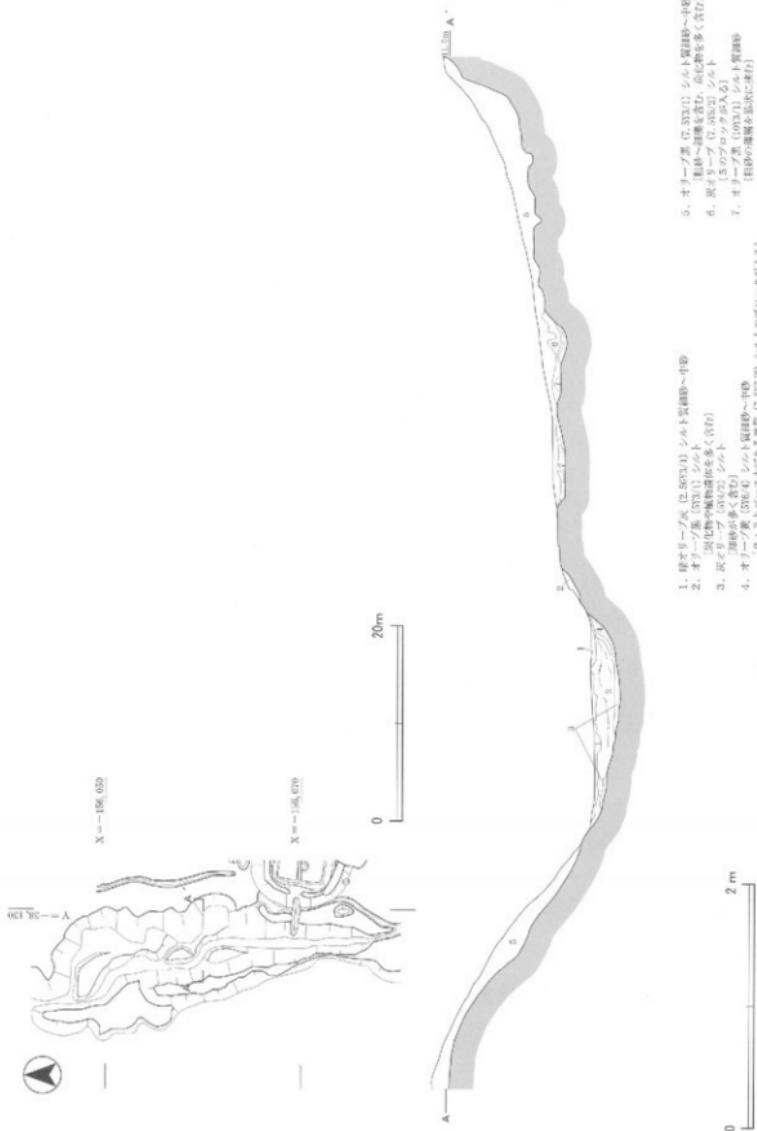


図182 谷2 平・断面図

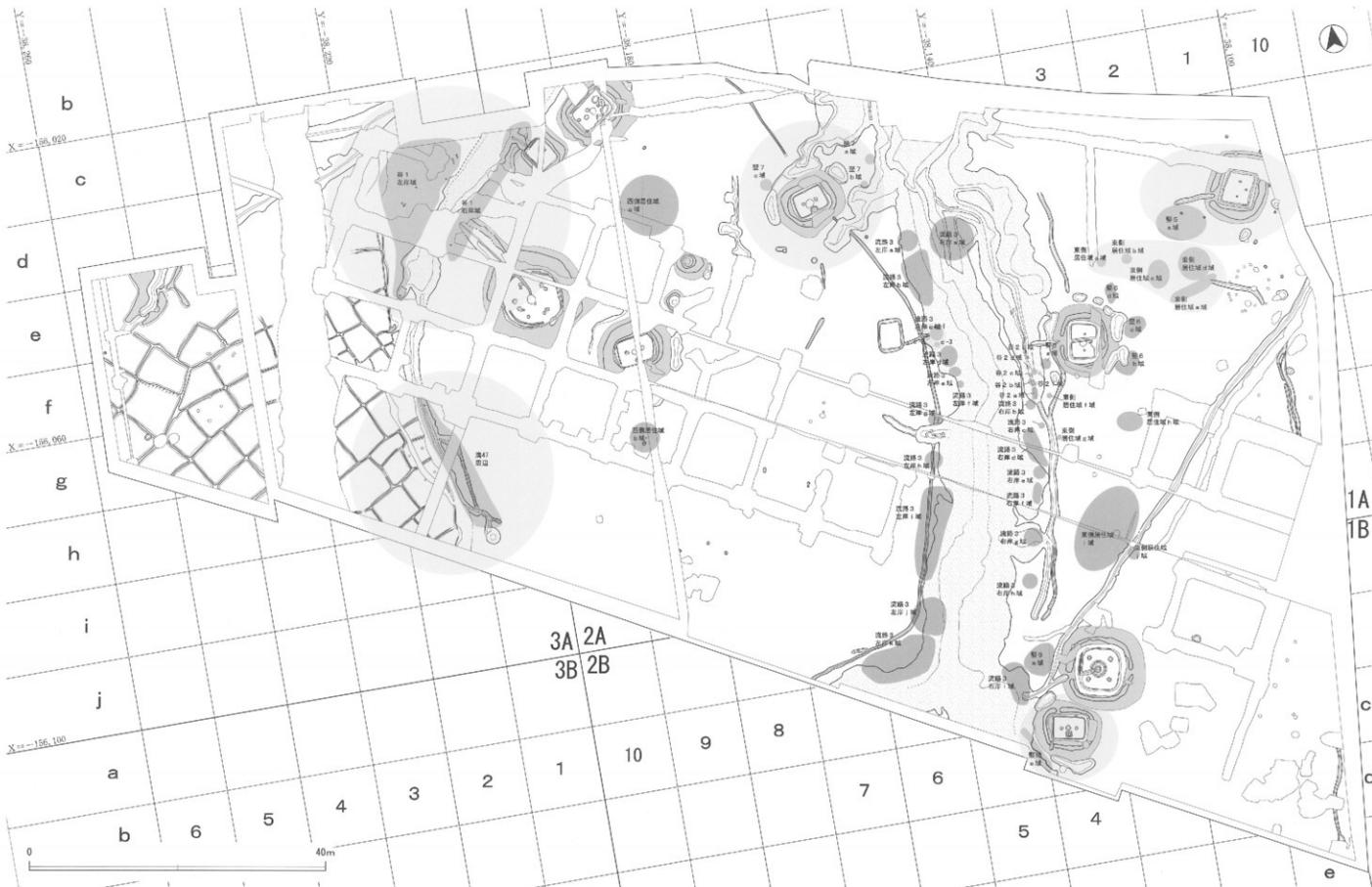


図183 第3面 遺物出土エリア図

この排水溝の近くでは、遺物が多く出土し、中には弧表現を多用する絵画土器（2454）も認められた。これらの土器は完形のものが多く、正位での出土が目立ったことから、投棄されたというよりは、その場所に「置かれた」印象が強い。絵画土器の使用の場を考究するうえで、重要な資料といえる。

〔旧地表面直上土器〕（図183）

本遺構面の特徴として、厚い洪水砂によって埋没したため旧地表面が極めて良好な状態で残存していることが挙げられる。

検出し得た集落については、各遺構の示す状況から、何らかの理由によって居住域を放棄したことが予測され、居住域の放棄時の様相を良く留めている。これを表すように、旧地表面の直上では、散発的あるいは集中して完形に近い土器が貼り付くようにして出土した。これらの土器が集落の廃絶に伴う廃棄行為を契機としているのか、あるいは集落が機能していた時点の段階的な廃棄の結果を表しているのかについては判然としないが、土器の廃棄行為を考えるうえで、重要な資料であるとの認識の下、一定のまとまりを有するものについては、調査時の所見に基づいて領域を設定し、これを遺構として扱った。以下、遺構に直接関係せず旧地表面に貼り付いた土器を中心に記述を進めていく。

〔谷1左岸域・右岸域・西側居住域〕（図184・185）

西側居住域の北西部に位置する谷1の付近で、土器が旧地表面に貼り付いて出土した。大きくは右岸と左岸の2域に分けられるが、地点毎のまとまりから右岸は2地点、左岸は3地点に細分が可能である。

図184に掲げたのは左岸側の2地点の遺物出土状況である。谷1の肩際に位置する地点では5個体前後に復元できそうな土器が認められたが、接合遺物に乏しく、実測可能なものは1点のみであった。

上述区域の西側では4個体前後の土器が認められたが、図示可能なものは少なく、高壺、長頸壺を1点ずつ図示し得たに過ぎない。ともに器表面の摩滅が著しく、長期にわたって酸化状態にあったものと考えられるほか、他地点よりも網片化が著しい点が特徴的である。

図185に掲げたのは右岸側の1地点及び西側居住域a域の遺物出土状況である。

谷1の右岸側については、堅穴建物3の排水溝付近と堅穴建物1の排水溝西側に散在している。どちらかといえばそれぞれの堅穴建物に付随していくものと考えたほうが良いかも知れない。

西側居住域a域は、堅穴建物4の南側、2A-9h区で検出した。1箇所にまとまっていたが、接合・復元を行ったところ、4個体の土器が認められた。

出土土器が少量であるため詳細は不明だが、概ね弥生時代後期中葉に位置づけられ、その他の遺構出土土器とはほぼ変わらない。

〔流路3左岸域〕（図186～192）

居住域を東西に分ける流路3の左岸側からは、流路の肩際にから、多くの土器が貼りついて出土した。

これらの土器の出土地点は、大きくは2A-5f区の北側と堅穴建物8の排水溝以南の中央部北側、貯木遺構1から2A-6j区付近までの中央部南側、南側の大きく4区域程度に大別できる。

その中のさらに細かな単位については先に述べたとおり、調査時の所見をもとに細分し、その結果a～k域の11区域に細分できた。これに加えて、中央部北側に位置するc域については1～3の3地点に細分し得た。なお、全体的な傾向として、南北に二分して考えた際、北側に位置する一群は流路の下部に位置する傾向にあるといえる。

図186に掲げたのは北端に位置するa域の遺物出土状況である。流路の肩際にいうよりは、むしろ下端近くから出土している。

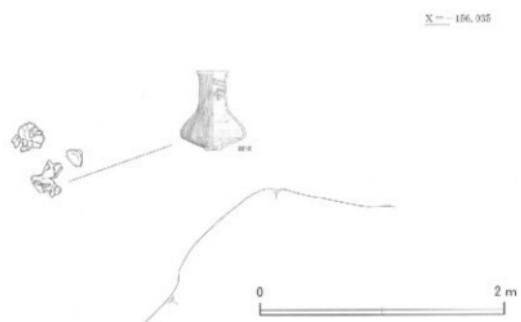
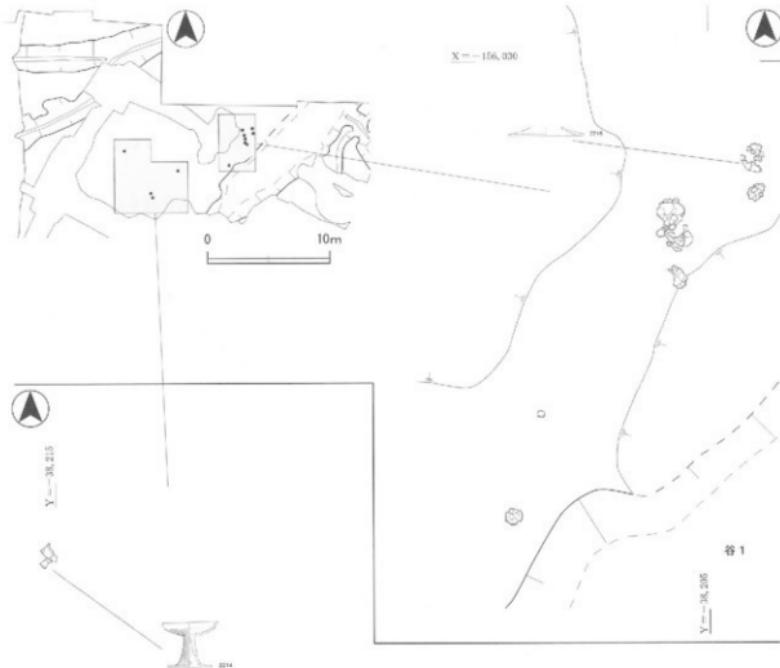


図184 谷1左岸 遺物出土状況図



図185 谷1右岸・西側居住域b域 遺物出土状況図



図186 流路3左岸a域 遺物出土状況図

出土した土器は図化可能なもので4点と少ないが、完形の土器が多い点は特徴的である。長頸壺を作りかけて無頸壺としているもの（2263）があるなど、特殊なものも認められる。

図187に掲げたのは、2A-5f・g区に位置するb域の遺物出土状況である。

b域は5m前後のやや広範な空間であり、土器の出土状況はやや散逸的である。図示可能なものは19点を数える。完形のものもわずかに認められるが、破片資料が多い。出土した土器は長頸壺・壺・高壺のほか、ミニチュア土器がある。基本的に大形のものは認められない。このほかに全長2m前後の大型の板材も同一地点から出土している。加工痕等は認められなかったため図示はしていない。

図188に掲げたのは2A-5g・h区に位置するc～f域の遺物出土状況である。南北に10m前後の領域の中に大きく4つの出土地点が存在しており、そのうちの北側に当たるc域は垂直的な位置関係からさらに3地点に細分できる。

c域から出土した土器は、長頸壺・壺・鉢・有孔鉢・高壺と、器台を除くほぼ全器種が揃っており、主に中型のものから小型のものが出土している。1～3の3地点に細分が可能であるが、すべて流路の肩際に貼り付くようにして出土したことから、大差ない時間幅の中で投棄され、埋没したものと推定できる。出土土器は肩部が強く張る壺が多く認められるほか、有段高壺状を呈する土器や幅の広い平底の土器などが認められるのが特徴と言える。

d域から出土した土器は、21点を図示し得た。器種は壺・壺・鉢・高壺・器台と、ほぼ全器種が揃う。すべて流路の下端付近から出土しており、c域同様、短期の間に一括して投棄された状況が想定できる。

出土土器は、大型のものが多いという点やそのほかの地点では数量的に少ない広口壺が集中している点が特徴的である。加えてこれらの広口壺の中には生駒山西麓の胎土を用い、竹管文を施すものが集中している点も特徴の一つと言えるであろう。さらに体部に2条の弧線を施す長頸壺（2315）も認められた。また、搬入土器として近江系の鉢（2323）も出土している。

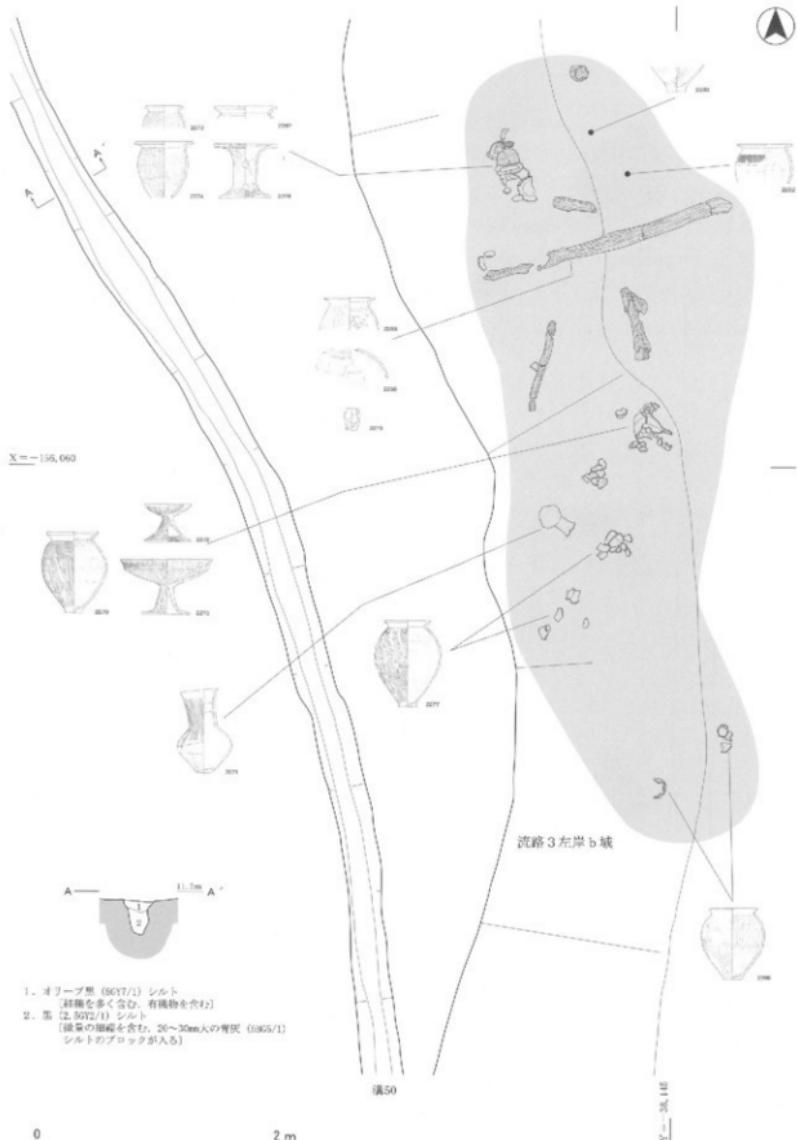


図187 流路3左岸 b域 遺物出土状況図

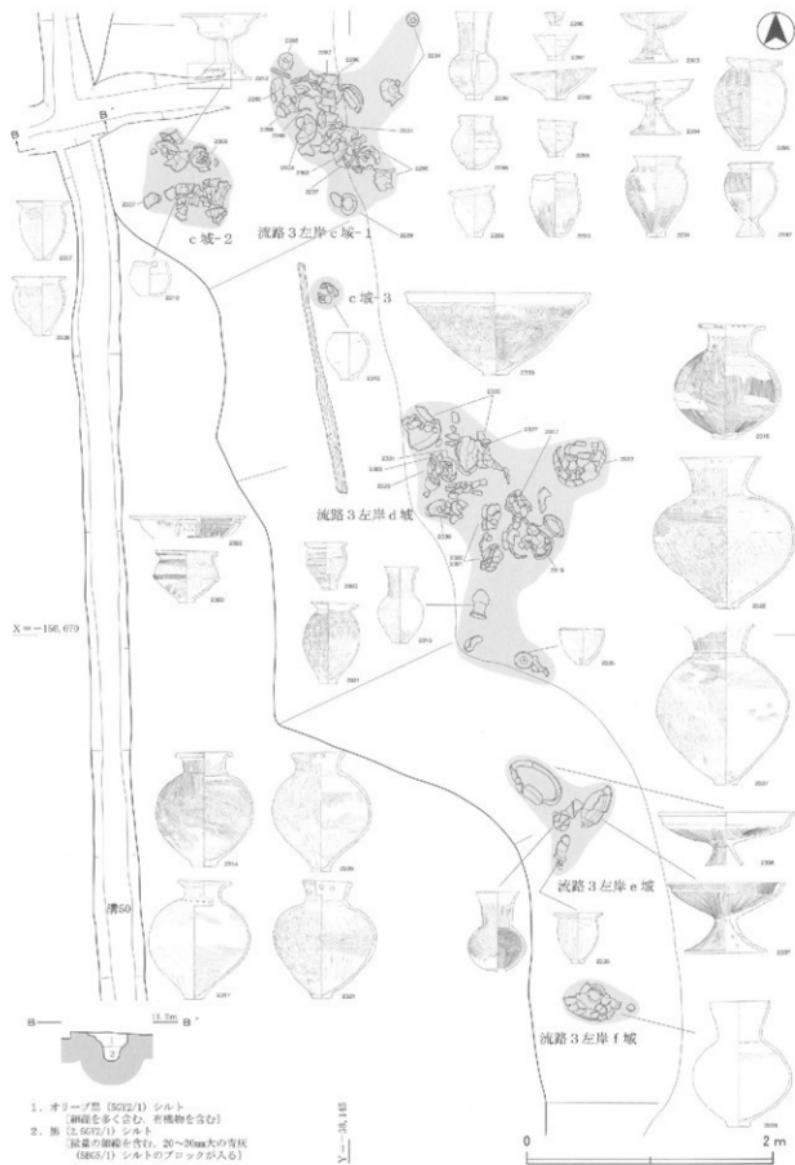


図188 流路3左岸c～f域 遺物出土状況図

図189 流路3左岸g. h域 遺物出土状況図

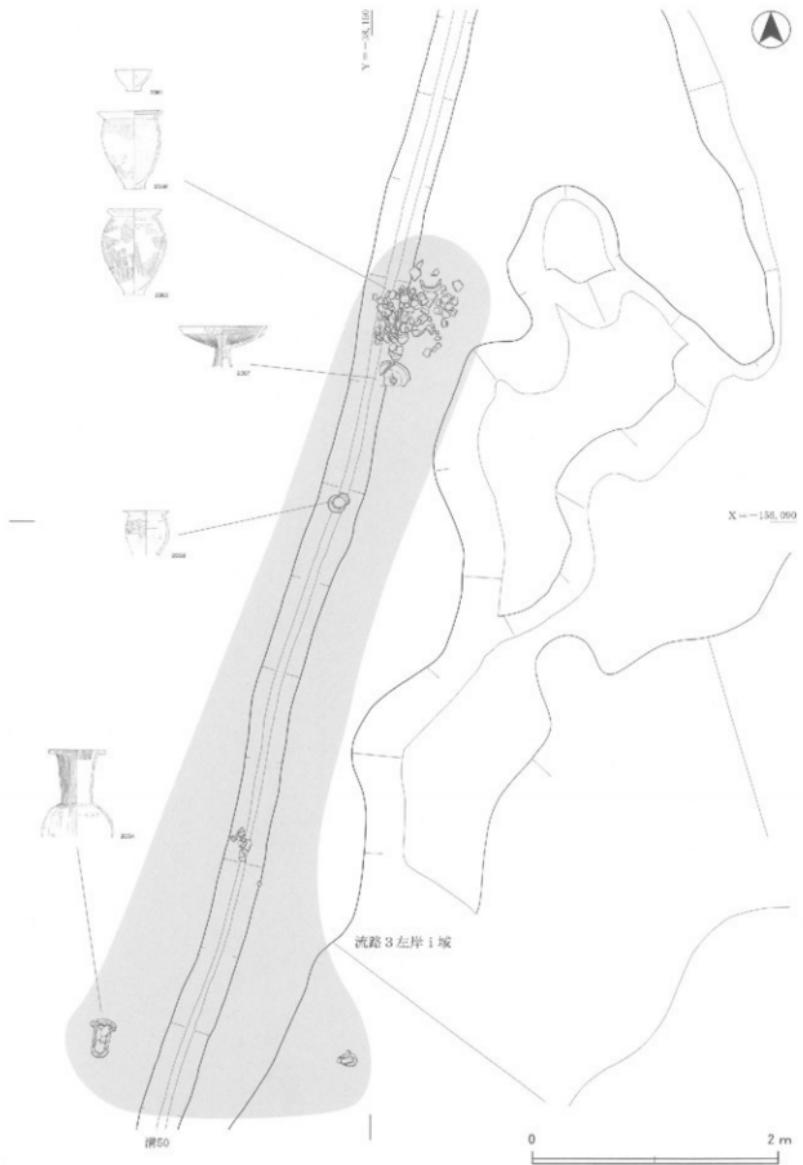


図190 流路3左岸 i 域 遺物出土状況図

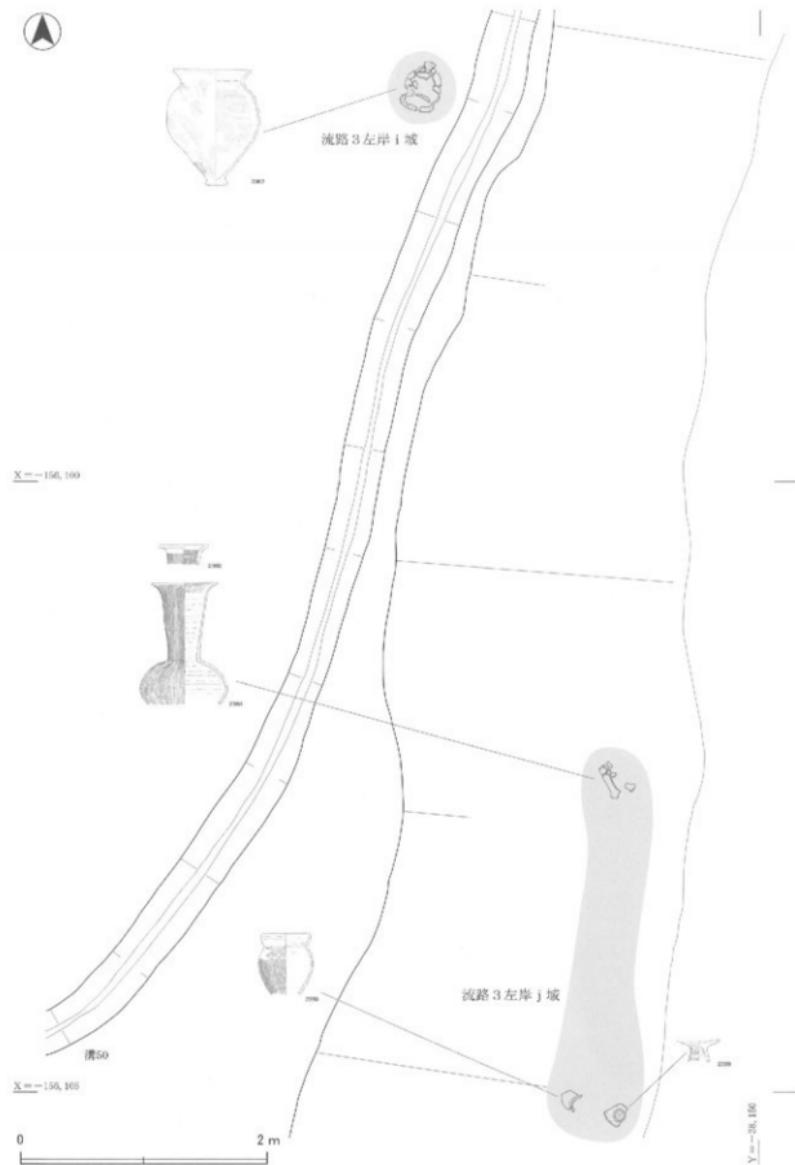


図191 流路3左岸i・j域 遺物出土状況図

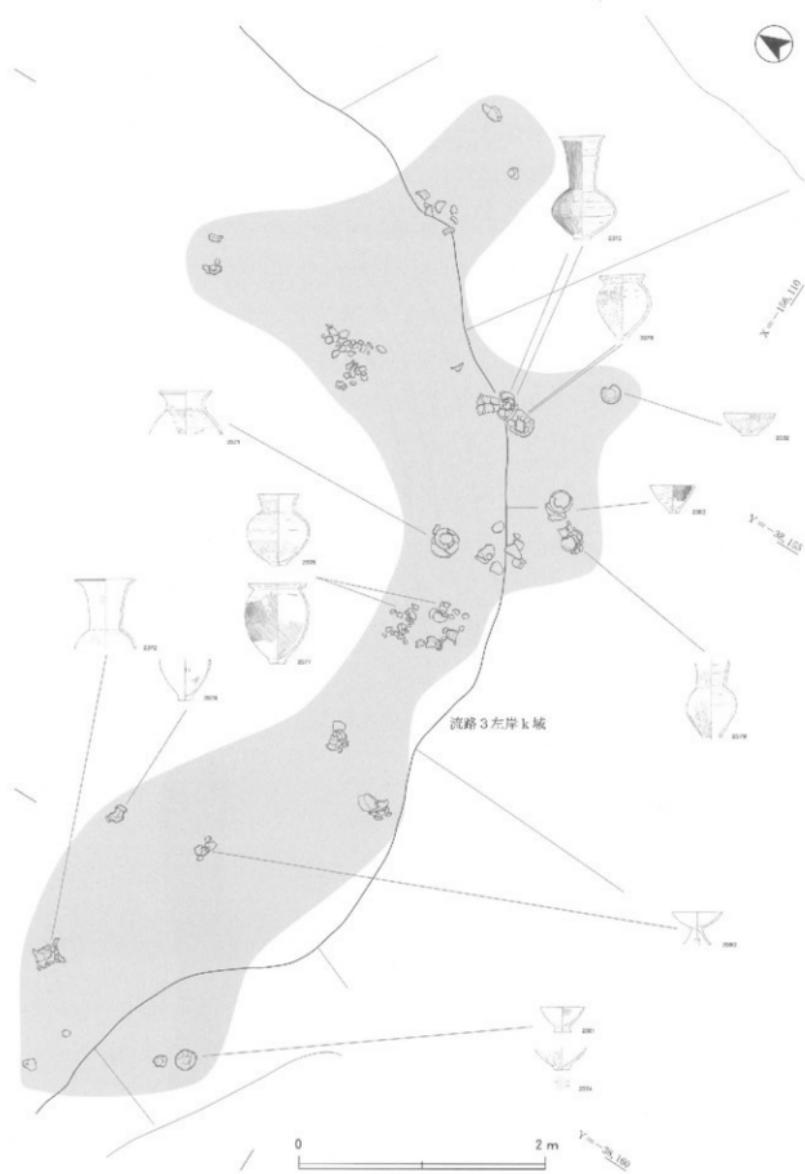


図192 流路3左岸k域 遺物出土状況図

e 域は d 域よりも若干上位の箇所に位置する。出土遺物は壺・甕・高杯が認められ、中でも超大型の有縫高杯が特徴的である。大型のものが認められるという点では d 域と性格が近く、一連のものと考えても良いのかも知れない。

f 域で図示可能なものは、現地にて確認した 1 点の壺のみである。流路の肩部中位に位置しており、e 域とはほぼ近似した位置関係にある。

図 189 には 2 A - 5 h・i 区に位置する g・h 域の遺物出土状況を図示した。上述した f 域までと異なり、流路 3 の肩部からほとんど平坦地上に上がった溝 50 の周辺より出土している点が特徴的であり、地表面にさらされていたことを反映しているためか、完形になるものが少ない。但し、それぞれの地点にはまとまりが認められることから、短期間のうちにまとめて投棄された状況が想定できる。

土器は壺・甕・鉢・有孔鉢・高杯があり、出土地点が明確で、かつ図示可能であった土器の点数は g 域で 6 点、h 域で 8 点であった。特に 2344 の高杯は大振りの脚部である。

図 190・191 には 2 A - 5・6 i・j 区に位置する i 域と 2 B - 6 a 区に位置する j 域の遺物出土状況を図示した。g・h 域と同様、溝 50 周辺の平坦地に散在し、図 188 の上方に位置する密集域から 4 点の土器が出土していることをのぞけば、遺物の密集度合いは減少傾向にある。また、完形ないしは半完形の土器が集中せずに、1 点ずつ散発的に出土していることも、本域の特徴とみてよいであろう。

i 域は主に溝 50 周辺に密集するように土器が出土している。i 域は北半部（図 190）と南半部（図 191）に細分でき、北半部は溝 50 周辺から、南半部は流路 3 の肩際に貼りつくようにして出土している。出土した土器は図示可能なもので 10 点が認められる。j 域からは特徴的な土器として、2364 の長頸壺のように頸部が著しく発達し人型化したものが出土している。

また、これら溝 50 周辺から出土した土器について触れておく必要があるものに、溝 50 内から出土した土器が挙げられる。これらの土器群は一見溝内から出土したかのような出土状況を示すが、実際の検出状況としては、3 層の直下、すなわち溝 50 の埋没が一定進行した状態でわずかな凹みが残存していた状態で投棄されたことが想定できる。溝 50 が集落機能時からすでに埋没し始めたかどうかという点については明言し得ないが、少なくとも 3 面直上から出土する土器群が 3 層の直下から出土しており、複数の地点で同様の堆積環境のもとに埋没が進行していることからも、土器の出土状況そのものに、大きな時間差が認められるとは考えにくい。

図 192 には 2 B - 6・7 a 区に位置する k 域の出土状況を掲げた。本域の特徴は密集地点を有さずには半径 4 m 前後の範囲内に散発的に土器が認められるということである。出土した土器は図示し得るもので 13 点を数え、それぞれ密接な関係は認められなかった。2373 と 2379 に認められるように近似した地点においても同一形式内で異なる型式を示す例が認められることから、投棄に時期差が存在する可能性もあるが、検出状況からはほぼ同一時期に投棄されたものと判断することができる。

図 193 には 2 A - 4 h 区に位置する流路 3 右岸 b 域及び谷 2 周辺域の遺物出土状況図を掲げた。

主に谷 2 から出土した遺物が大半となるが、図示し得た土器は 43 点に及び、そのうちの北半部からは、2454 のように肩部に絵画文を線刻した土器が出土しているほか、長頸壺の口縁部が「く」字状に内傾する特殊な形を示す 2448、口縁部直下に渦巻スタンプ文を全周させた後、乱雑な波状文を巡らす 2452 など、その他の地点では認められない土器が多く認められる。中でも 2454 の絵画土器は、土圧によって押し潰されてはいたものの、検出状況から（図版 91-3）正位で据え置かれていたものと見られ、絵画土器を用いる祭祀が行われた可能性がある。

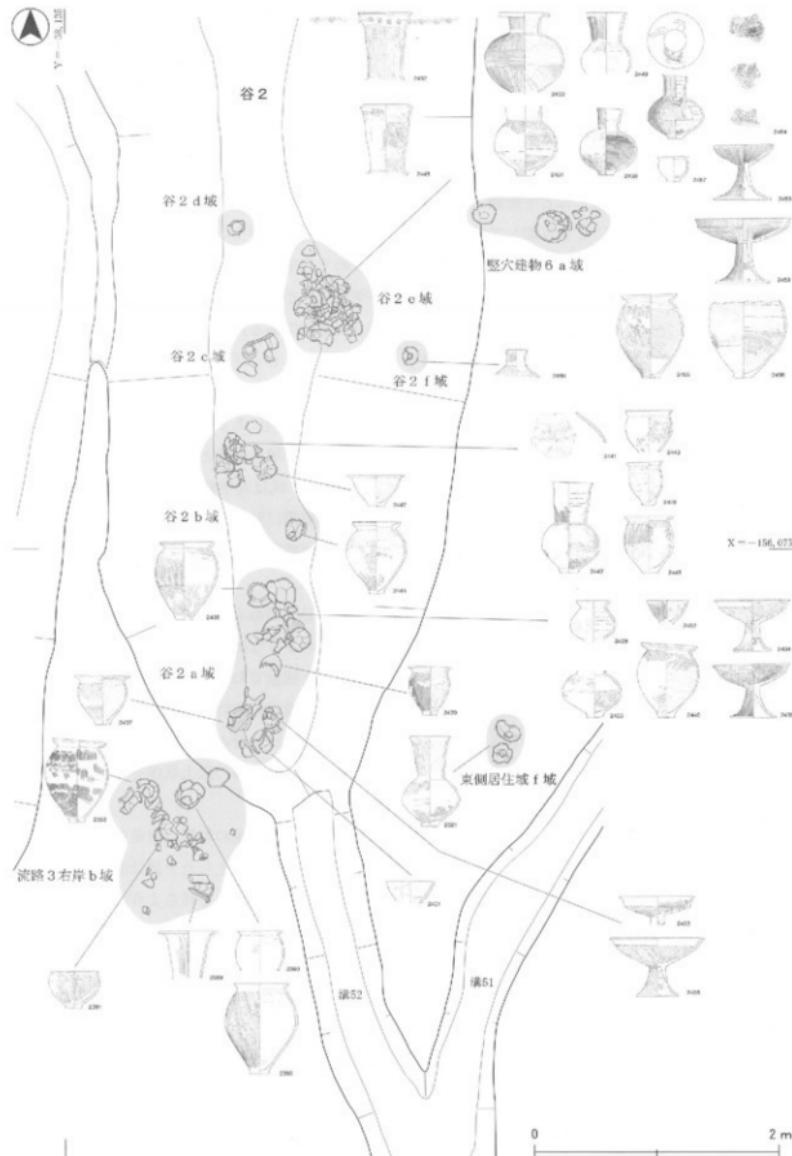


図193 谷2・流路3右岸b域・壁穴建物6a域・東側居住域f域 遺物出土状況図

▲

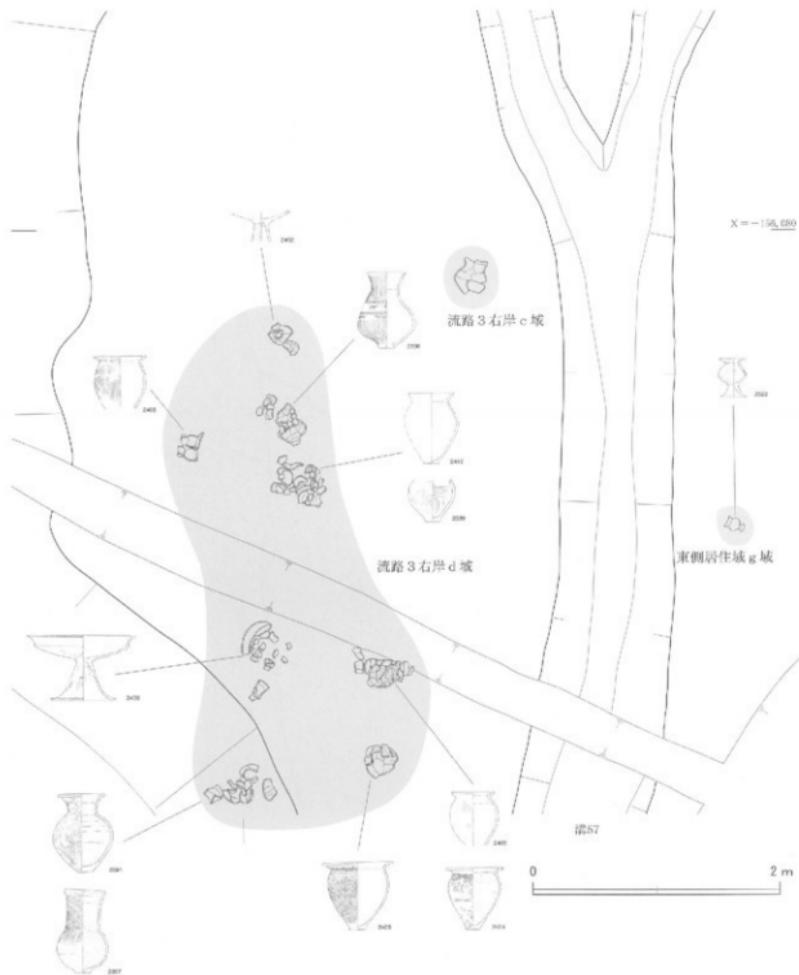


図194 流路3右岸c・d域 遺物出土状況図

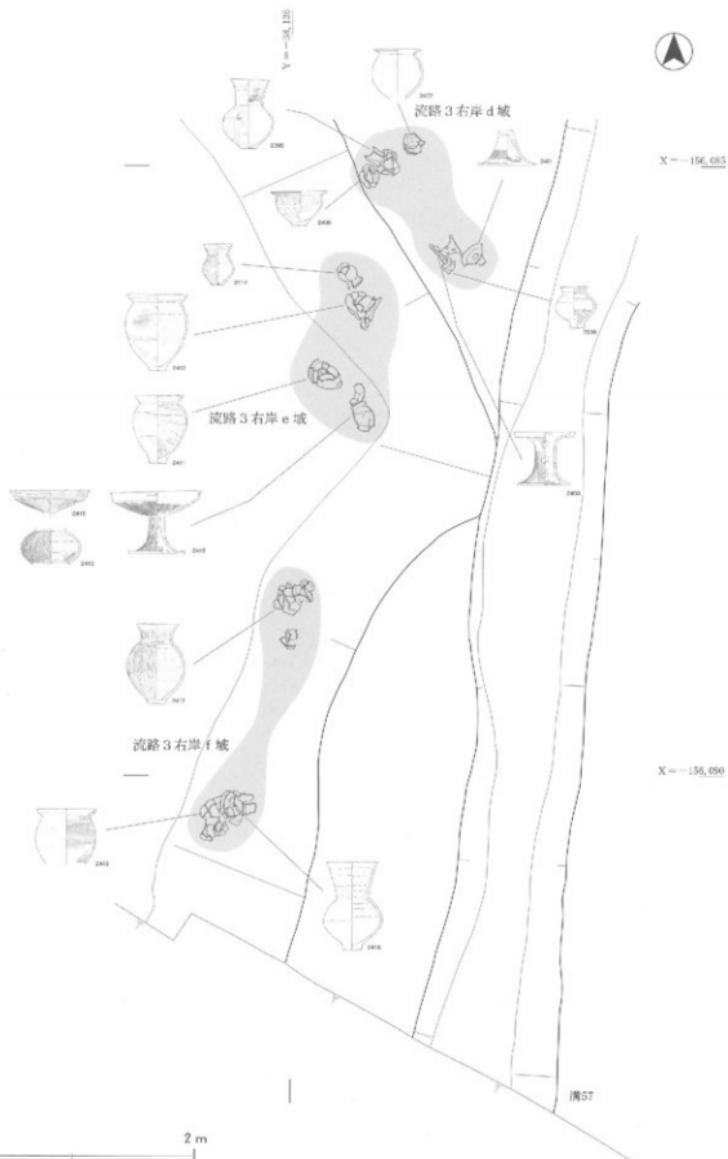


圖195 流路3右岸e・f域 遺物出土狀況図



図196 流路3右岸g・h域 遺物出土状況図

図197 東側居住域b・c域 遺物出土状況図

図194には2A-4i区に位置する流路3右岸c・d域の遺物出土状況図を掲げた。図示可能で出土位置が明確な遺物は17点を数える。出土状況は左岸と比較するとやや散発的である。

図195には2A-4-i区の流路3右岸e-f域の遺物出土状況を掲げた。図示可能で出土位置が明確な遺物は9点を数え、器種も壺・壺・鉢・高杯・器台と各器種が認められる。上述したc-d域とは異なり、流路の肩部付近から出土している。出土状況からは時間差が存在する可能性は少なく、ほぼ近似した時間差の中で投棄された可能性が想定できる。

図196には2B-4a、2A-4j区に位置する流路3右岸g・h域の遺物出土状況図を掲げた。g域は流路3のえぐられた溝み内を示し、h域はその上面にある溝周辺域からの出土遺物を示している。溝内からの遺物の出土も認められた。

図示可能で出土位置が明確な遺物は12点を数え、器種も壺・甕・鉢・高杯・器台と各器種が認められる。出土地点は大きく2箇所にまとまり、出土状況からは大きな時間差がないように考えられる。

図198には2A-1・2g区に位置する東側居住域d・e域の遺物出土状況図を掲げた。東側に展開する微高地の下端に相当する。密集する出土状況を示すことから、大きな時間差はないと考えられる。

(正圖)



図198 東側居住域d・e域 遺物出土状況図

第5節 第3 b面

1. 遺構面の概要

4 a層とした土壤化層を除去して検出される遺構面である。本面は第3面のベース面であるため、詳述はしないが、微地形は、南東隅を最高位として、基本的に既述した第3面を踏襲して東側居住域では南東から北西へ、西側では南側中央を最高点として局状に傾斜を有している。

本面で検出した遺構は、主に掘立柱建物やピットであるが、その間を縫う様に存在する小規模な幅狭の溝も検出した。これらの遺構埋土は、基本的に黒褐色を呈するシルト～極細砂を基調とする。

これら的小溝は掘立柱建物の周間に位置するもの（溝59～63・66・67）、居住域を画するように弧を描いて延びるもの（溝50・56・57）の2者がある。それぞれの溝について、詳細な性格は明らかにしがたいが、その配置から、前者は建物に関連するもの、後者は西側居住域の領域を画するものと想定できる。なお、溝50は、第3面で検出し得た遺構であるが、埋土の様相も上述したその他の溝と大差ない。埋没にいたる堆積物の多寡によって検出面が異なる可能性を想定し、図199にも掲げている。

この溝50は竪穴建物7との平面的な位置関係から、居住域の形成の早い段階に掘削されていた可能性が高く、居住域の形成と展開を考えるうえで重要な要素である。

一部の掘立柱建物の柱穴埋土最上部には3層の落ち込みが認められたため、第3面で検出し得たものも数棟存在する。それらについては、確実に認定できた検出面が本面であったことを考慮し、検出面とは異なるがここに掲げた。なお、図199に示したように、掘立柱建物のうち柱穴埋土最上部に3層が流入しているものについては、建物全体に網をかけて表現している。3層直下は基本的に集落廃絶直後の景観を示すと解釈できるため、掘立柱建物と竪穴建物の関係を考えるうえで重要な要素である。

それぞれの遺構からは土器がほとんど認められず、帰属時期については決め手を欠く。4層の土壤化に一定の時間幅があることは、既に前項でも述べたとおりであり、わずかではあるが層中に砂層が挟在することや竪穴建物7と第3 b面検出遺構が重複関係にあることなどからも追認できる。

したがって、第3面遺構を含め本面で検出した遺構が、すべて同時に存在していた可能性は低い。

しかしながら、わずかに出土した遺物からは土器様式を違えるほどの時間差は認められないうえ、遺構埋土にもさほどの違いは認められない。以上のことから、弥生時代後期中葉の範疇で若干の時間差を持ちながら、各遺構が存在していたと想定される。

2. 遺構

〔平地建物1〕（図200・図版94-1）

検出状況 2 A-10 j区で検出した周溝である。西側居住域の中央部南端、掘立柱建物2の南東に位置する。南半が工区外に位置するため全容は窺い知れないが、平面形が隅円方形のプランを呈することから、溝の内外について入念に精査を行ったが、関連する遺構は認められなかった。

溝の軸はN45°Eに置かれており、幅は約0.4m、東側ではやや幅広になり、約0.65mを測る。検出面から溝底までの深さは約0.15mを測る。北東隅では、プランが内側に向かってやや崩れている。

断定はし得ないが、隅円方形のプランを呈し、幅の狭い溝を巡らす無主柱の建物事例が群馬県渋川市所在の中筋遺跡等で検出されていることから、同種の建物である可能性を想定し、無主柱の建物として考えるに至った【渋川市教育委員会1988】。

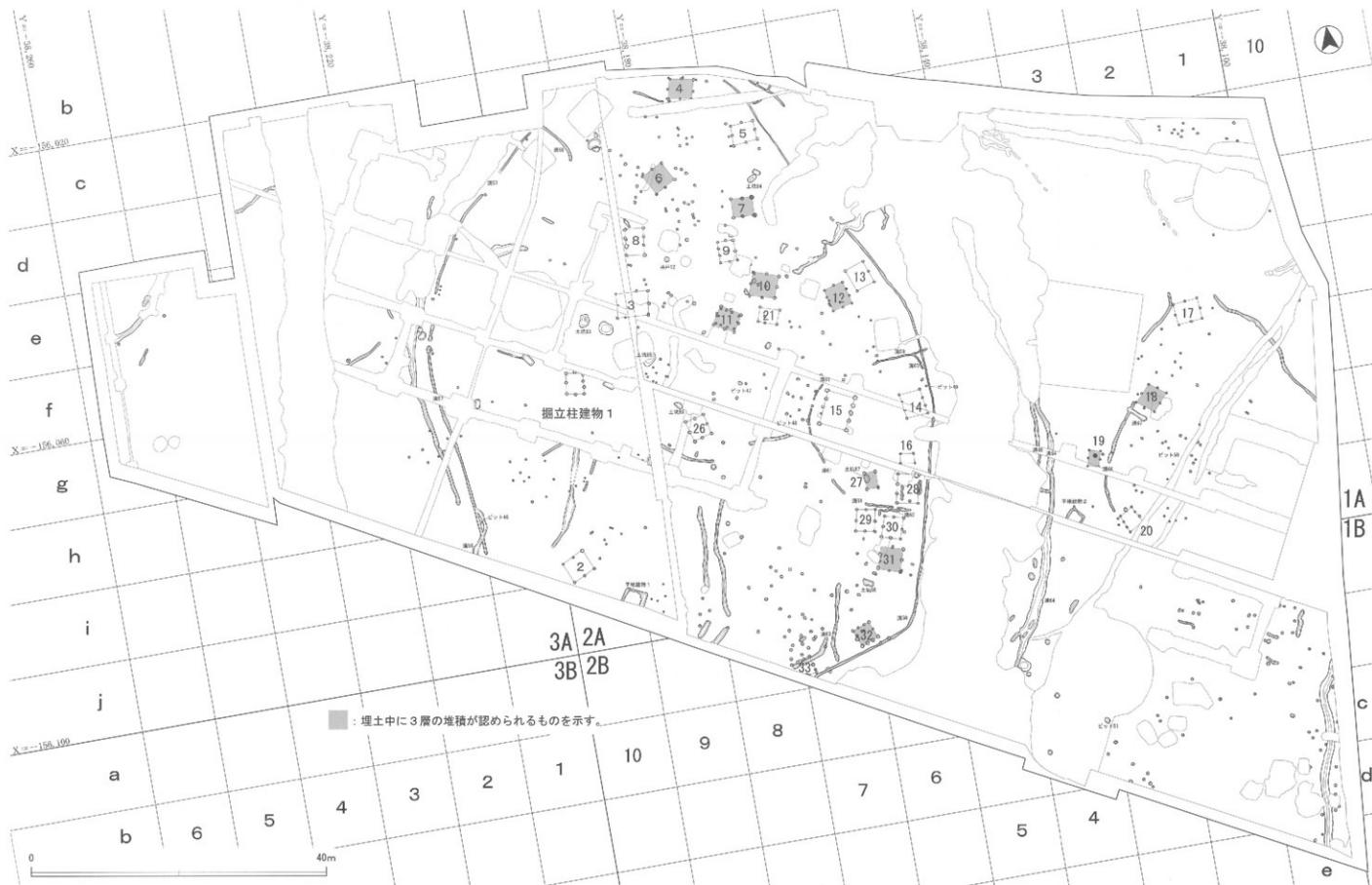


図199 第3 b面 全体図

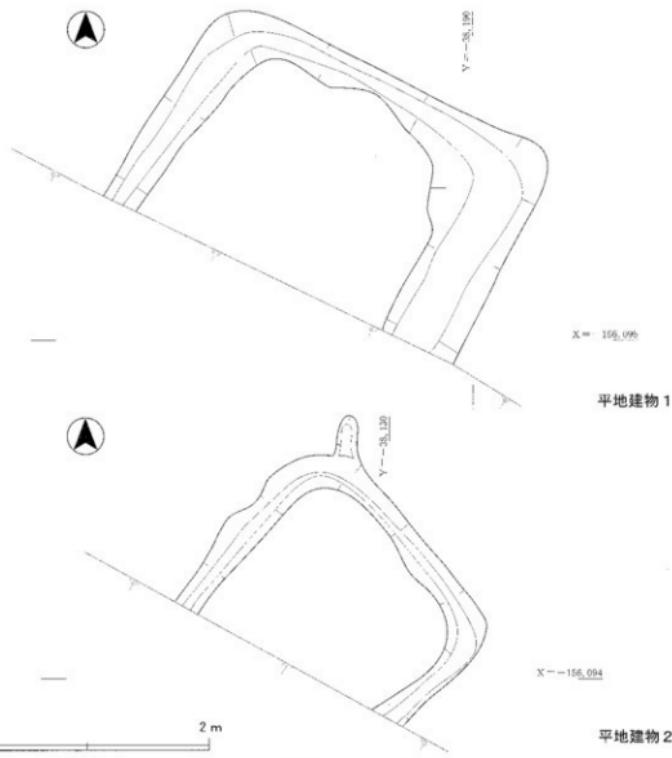


図200 平地建物 1・2 平面図

出土遺物 溝内より細片1片が出土した。

(平地建物 2) (図200)

検出状況 2A-3・4j区で検出した周溝である。東側居住城の中央部西側、堅穴建物6と9の中間地点に位置し、獨立柱建物19・20と等しい距離関係にある。上述した平地建物1と同様、溝の内外について入念に精査を行ったが、関連する遺構は認められなかった。

溝の軸は、北西-南東方向を軸とした場合、N40°Wに置かれている。溝の幅は先の平地建物1と比較して狭く、約0.2~0.3mを測る。検出面から溝底までの深さは約0.15mを測る。また、北側コーナーには、長さ約0.35m、深さ0.1mの浅い溝が付帯する。性格については不明である。

南半は03-1工区との工区境に相当し、その延長が認められなかつたため、調査に伴う側溝内で収斂していたと考えられる。

その場合、最大に見積もって北東-南西方向の辺の距離は、約2.0m、北西-南東方向の辺の距離は約2.2mに復元可能である。このことから、本遺構の平面プランは、辺約2mの正方形に近いものが想定でき、中筋遺跡の建物とはほぼ同じ平面形状を示す可能性が高い。

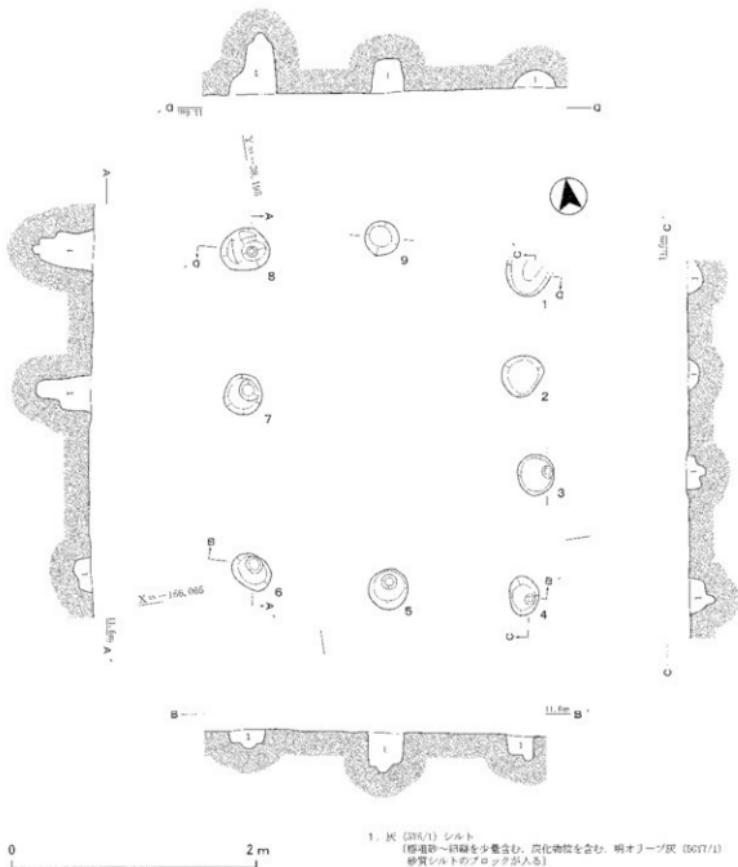


図201 挖立柱建物1 平・断面図

[掘立柱建物1] (図201)

検出状況 2A-10g区において検出した南北棟の掘立柱建物である。北東隅に位置する柱穴1の一部を搅乱で欠くが、他の柱穴は良好に遺存していた。柱穴1~9で構成される桁行2・3間、梁間2間の南北棟の建物で、長軸をN 9° W方向に置く。桁行の長さは西側で2.5m、東側で2.7m、梁間の長さは2.3mを測る。桁行の柱芯間隔は、西側の柱穴7・8間が1.1m、6・7間が1.4m、東側が0.8~1.0mを測る。桁は、南側の柱芯間隔を広めに取っており、その傾向は柱穴6・7間で顕著である。

本建物の特筆すべき点として、東西で桁行の柱間を違える点が挙げられるが、桁行の柱間が非対称となる建物は、このほかに掘立柱建物9・13・21・31と4棟認められる。入口を意識した柱配置である可能性が想定できる。

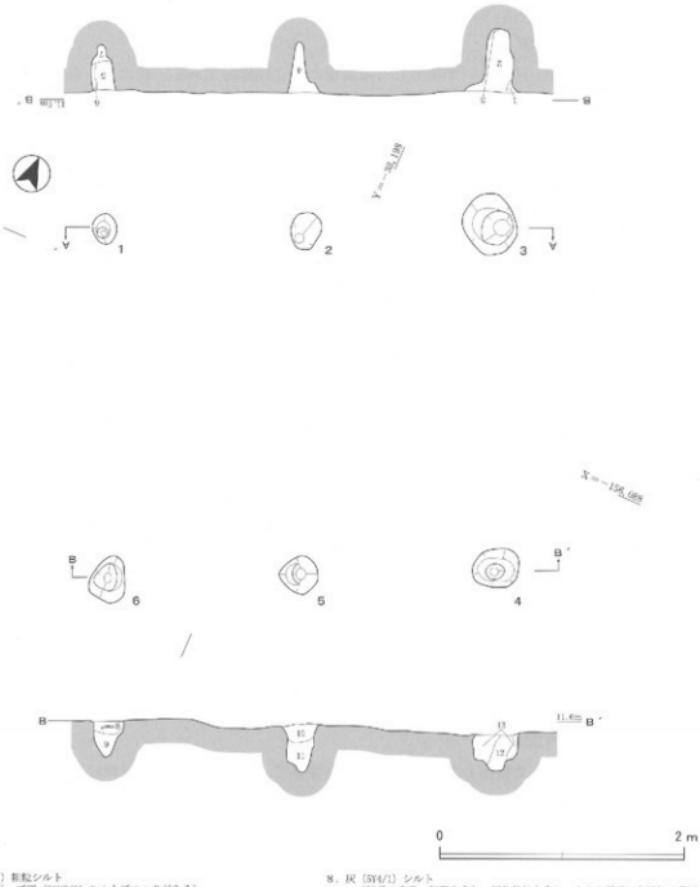


図202 振立柱建物2 平・断面図

各柱穴は径0.3~0.4mとやや小さめである。掘り方の深度は、北西隅の柱穴7・8が0.5m前後を測るのみであり、全体としては、浅い傾向にある。

柱穴埋土は均質であり、すべて極粗砂から細礫を少量含む灰色シルトを基調とし、4 b・5層のベー

ス土がブロックとして混入していた。

〔掘立柱建物2〕（図202）

検出状況 2A-10i区において検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴1～6で構成される桁行2間、梁間1間の建物で、長軸をN66°E方向に置く。桁行の長さは3.25m、梁間の長さは2.8mを測り、柱芯間隔は桁行が1.55～1.6m、梁間が2.8～2.85mを測る。

各柱穴は、検出長0.2～0.5mと規模にはらつきが認められるが、東側の柱穴3・4が大振りであるほかは、全体的に小振りである。掘り方の深度は0.3～0.5mを測り、坑底のレベルは西側が浅く、東側が深い傾向にある。それぞれの柱穴埋土は概ね近似している。

〔掘立柱建物3〕（図203）

検出状況 2A-9f区で検出した東西棟の掘立柱建物である。02-1・02-2工区に跨って検出されたため、調査に伴う側溝や地中梁等の搅乱に破壊され、その全容は不明である。

残存する柱穴からは、柱穴1～9で構成される桁行2間、梁間2間の建物で長軸をN8°W方向に置くものが考えられるが、搅乱相当箇所に柱穴があったと推定すると、桁行3間、梁間2間の柱配置に復元が可能である。その場合、建物の規模は桁行の長さ4.35m、梁間の長さ3.3mを測り、柱芯間隔は桁行1.1～1.6m、梁間1.6～1.7mを測ると想定できる。

各柱穴は、検出長0.25～0.35mを測り、いずれもほぼ同規模のものである。各柱穴の坑底の標高は、北側の桁行付近で11.4m前後、東側の梁間は11.4～10.8m前後と最大で0.6m程度の違いがある。

柱の配置は、全体的にやや不整で、南側の桁が西側に寄っている傾向にある。

柱穴5・6はいずれが主たる柱穴となるか不明であったが、平面・断面それぞれの規模から推測すると柱穴6を主と見ても良いと考えられる。

柱穴埋土は柱穴2を除きそれぞれ單一層からなり、埋土は黒色ないしはや青色がかった黒色シルトである。柱穴2の最下層を除き、埋土の大半部分には灰白色シルトのブロック土が混入している。このブロック土がどの層準を起源としているかについては不明である。

〔掘立柱建物4〕（図204）

検出状況 2A-8cで検出した東西棟の掘立柱建物で、長軸はN78°W方向に置く。残存する柱穴から、柱穴1～6で構成される桁行2間、梁間1間の建物と考えられるが、梁間の中間地点には検出長0.05～0.1mの小穴がそれぞれ1基検出されている。

各柱穴は、検出長0.2～0.25mとほぼ近似値に収まる。各柱穴の坑底の標高は、10.4～10.6mを測り、概ね西側の柱穴が掘込みが浅い傾向にある。もっとも深い掘り方は、北側桁行の柱穴2である。

本建物の柱穴は南西隅の柱穴6を除き、柱穴に柱が残存していた。柱は全体的に細く、個体によっては方形に近い断面形状を示していた点は、特筆すべき点であろう。

柱穴埋土は、埋没の仕方によって2者に大別が可能である。柱ないし柱痕跡の側方に、にぶい黄褐色のシルトを有する点でいずれも近似した様相を示しているが、南東隅に位置する柱穴4では最上部に3層が堆積していた。ただし、この柱穴においても埋土の状態は近似していることから、図面上の地層4の堆積量が少なかったためと考えられる。柱痕跡の側方には、裏込め用と考えられる埋土が認められ、それら2層準の上部に、灰褐色のシルト層が堆積している。埋没過程は近しい関係にあることから、本来3層が混入しても問題ないと考えられる。こうした点から、3層堆積に至るまでに、オープンな状態で柱穴が存在していた可能性が高い。

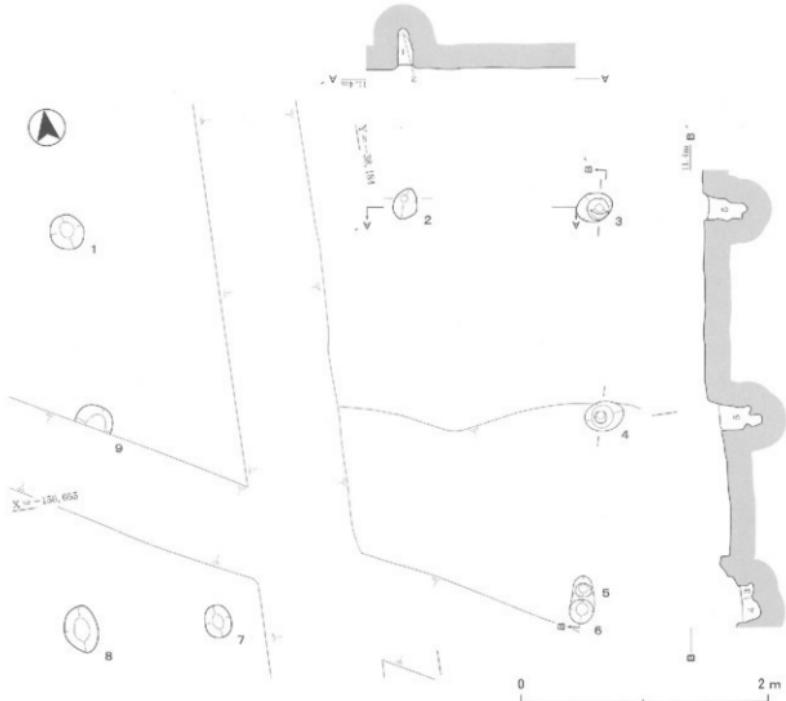


図203 挖立柱建物3 平・断面図

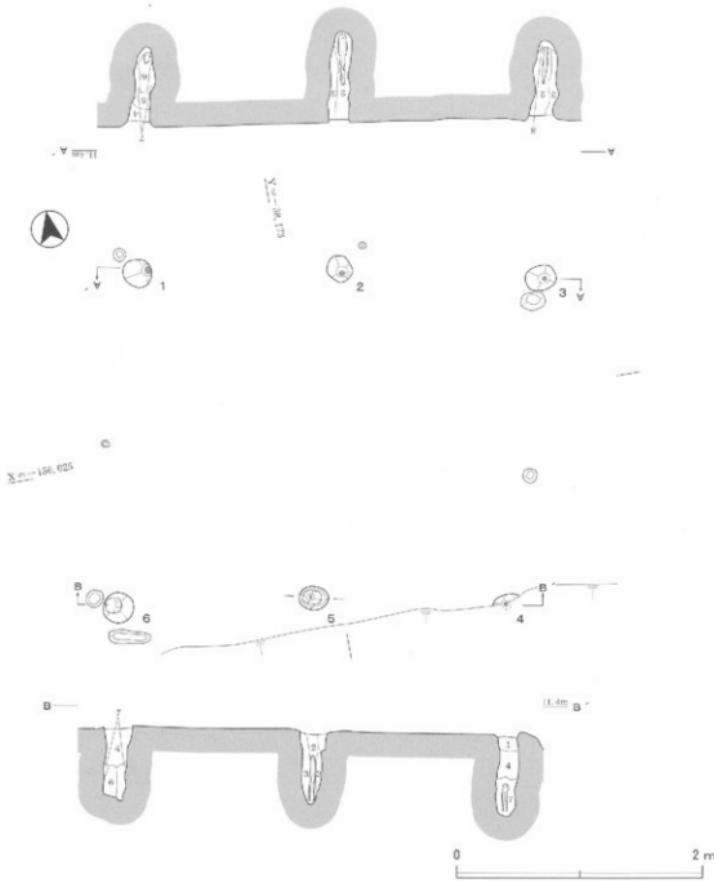
出土遺物 上述したように柱穴6を除く柱穴から柱根が出土した。

〔掘立柱建物5〕(図205)

検出状況 2A-7d区において検出した東西棟の掘立柱建物で、長軸をN87°E方向に従き、柱穴1~8で構成される桁行2間、梁間2間の柱配置を探る。建物の規模は、北側の桁行で長さ3.0m、南側で3.2m、東側の梁間の長さ2.6m、西側2.75mを測り、不整な台形状を呈する。柱芯間隔は桁行で1.5~1.65m、梁間で1.15~1.45mを測る。

各柱穴は、検出長0.2~0.3mといずれも小規模である。それぞれの坑底の標高は、浅い落ち込み状を示す柱穴6を除けば、10.55~10.7mと幅を有するが、概ね10.65m付近で高さが揃えられている。例外的に柱穴3が10.55mと深い値を示すが、柱の沈みこみによって変形を受けた可能性もある。

柱穴の埋土は、黒色ないしはやや青色がかった灰色のシルトである。南側の桁を除き、柱痕が明瞭に残り、上部が灰オリーブを基調とするシルトで埋没するなど、基本的には同じ埋没過程を経たことがわ



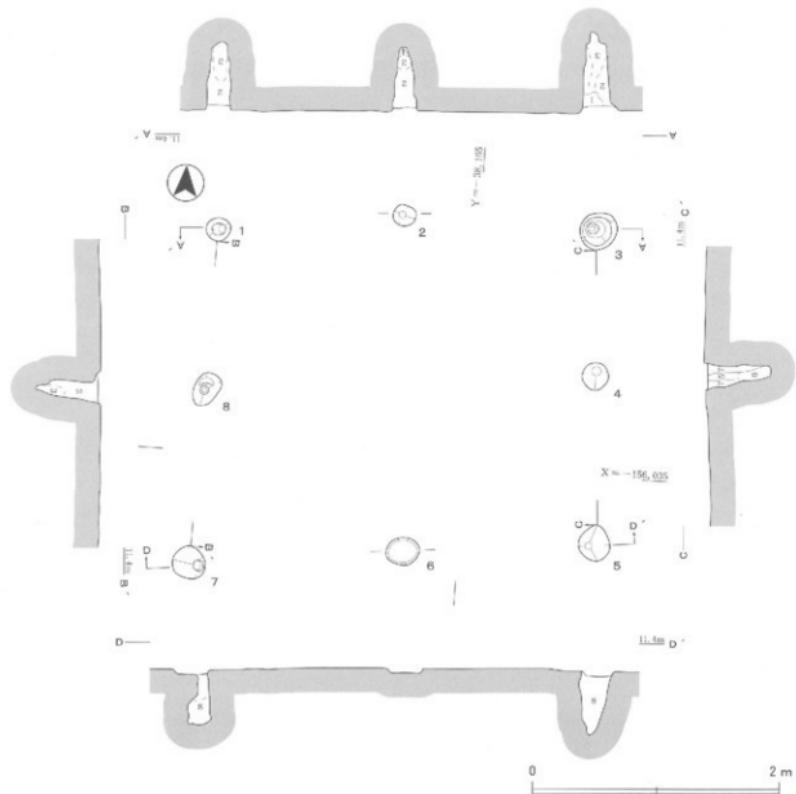
1. 浅基柱 (10Y8E/4) 塵砂～砂
[花崗岩植物 (3層)]
2. 低い筒形 (10Y5E/4) シルト
[柱の上部に低い筒形 (7. 5M7/3) 細砂のブロックが入る]
3. 低い筒形 (10Y5E/4) ブロック
[1と同様であるが、炭化物を多く含む]
4. 土塊 (7. 5M4E/2) シルト
[細砂を多く含み、微量の粗砂を含む。炭化物を含む。黄土 (10Y8E/6)
細砂のブロックが入る]
5. 鋼筋 (2. 8M5/3) シルト
[細砂を多く含む]
6. 稲草 (3M7) シルト
[微量の炭化物を含む。非常に歯状が強い]
7. 稲草 (3M6) シルト
[柱下の小ブロックが入る]
8. 土 (3M4) シルト質細砂～砂
[細砂のブロックが入る]

図204 挖立柱建物4 平・断面図

かる。一方、南側桁行の柱穴は、ベース土ブロックが多く混入し、全般的に単一の埋土で埋没している。土壤条件によるためか、あるいは建物放棄時の解体工程が反映されたのか判然としないが、南側の桁とそれ以外の柱において、埋没の様相が異なっており、この点は注意を要する。

〔掘立柱建物6〕 (図206)

検出状況 2 A - 8 d - e 区で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱通りの良い北側の桁を代表さ

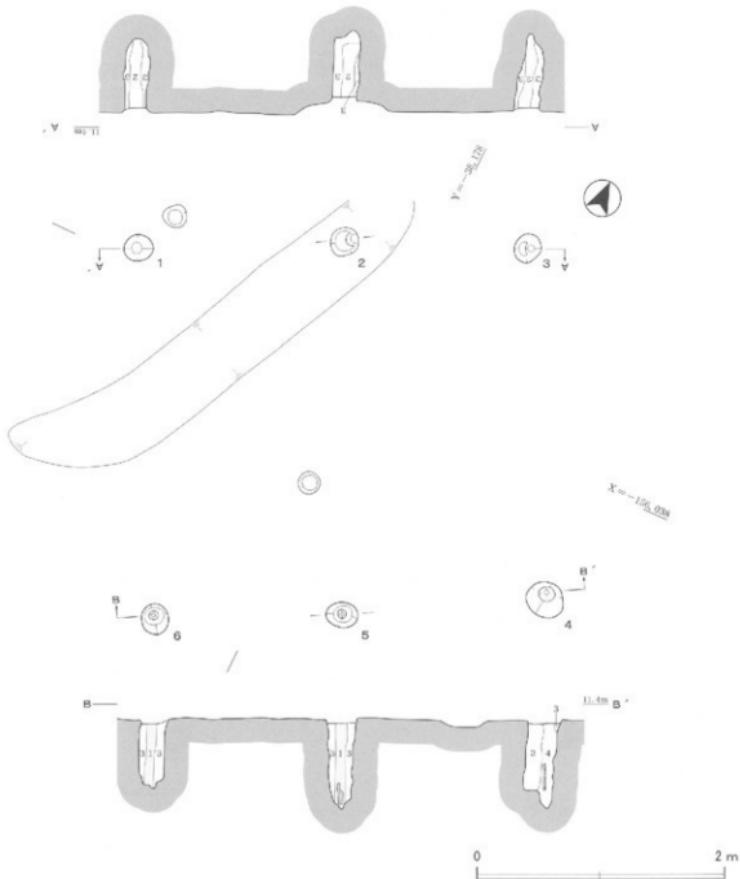


1. 灰オリーブ (3.576/1) シルト質細砂
〔細砂の層底を柱穴に挟む〕
2. 灰オリーブ (7.576/2) シルト
〔細砂を多く含む。オリーブ灰 (2.5676/1) 細砂のブロックが多く入る〕
3. 硅酸灰 (7.5676/1) シルト
〔2の下部に存在するが、層界は不明瞭〕
4. 硅灰 (7.3676/1) 硅藻砂～粗砂
〔粗砂 (7.3676/1) シルトのブロックが入る〕
5. 硅酸灰 (7.5676/1) シルト
〔細砂の層底を柱穴に挟み、全体的にも細砂を多く含む。炭化物灰を多く含む。オリーブ灰 (2.5676/1) 硅藻砂のブロックが入る〕
6. 硅酸灰 (7.5676/1) シルト
〔6の下部に存在するが、層界は不明瞭〕
7. オリーブ灰 (7.5676/1) シルト
〔細砂を多く含む。灰 (7.5676/1) シルトの小ブロックが入るが、他の的には比較的小ない〕
8. 灰 (1674/1) シルト
〔細砂を多く含む。炭化物灰を含む。柱穴までの灰 (7.5676/1) シルトのブロックが多く見られる〕

図205 捩立柱建物5 平・断面図

せると、長軸を N69° E 方向に置き、柱穴 1 ~ 6 から構成される桁行 2 間、梁間 1 間の柱配置を探る。建物の規模は、桁行 3.2m、梁間の東側が 2.85m、西側が 3.0m を測り、台形を呈する。柱芯間隔は 1.45 ~ 1.8 m を測る。各柱穴は検出長 0.2 ~ 0.3 m を測り、やや不整な楕円形を呈する。それぞれの坑底の標高は、10.55 ~ 10.7 m を測る。北側桁と南側桁では、坑底の標高差が約 0.1 m 認められ、南側の方がより深く掘り込まれている。それぞれの柱穴には柱痕が明瞭に残存しており、柱痕は直径 0.05 ~ 0.1 m と細く、実際に残存していた柱も直径 0.1 m 以内の小さなものであった。

柱穴埋土は、黒色ないしは褐灰色を呈するシルト、あるいは 3 層である黄色シルト質細砂である。埋



1. 黄 (2. ST7/8) シルト質細砂「上部」～灰 (2. ST4/1) シルト「下部」
〔下方ほど細粒化し、粘性が強まる。上部には炭化物質が多く含まれ、下部は細砂を多く含む〕
2. 黒褐色 (0.9E2/2) シルト
〔粘土を多く含み、微量の粗砂を含む。上部には淡黄褐色 (0.9E8/4) 粗砂の
ブロックが入る〕

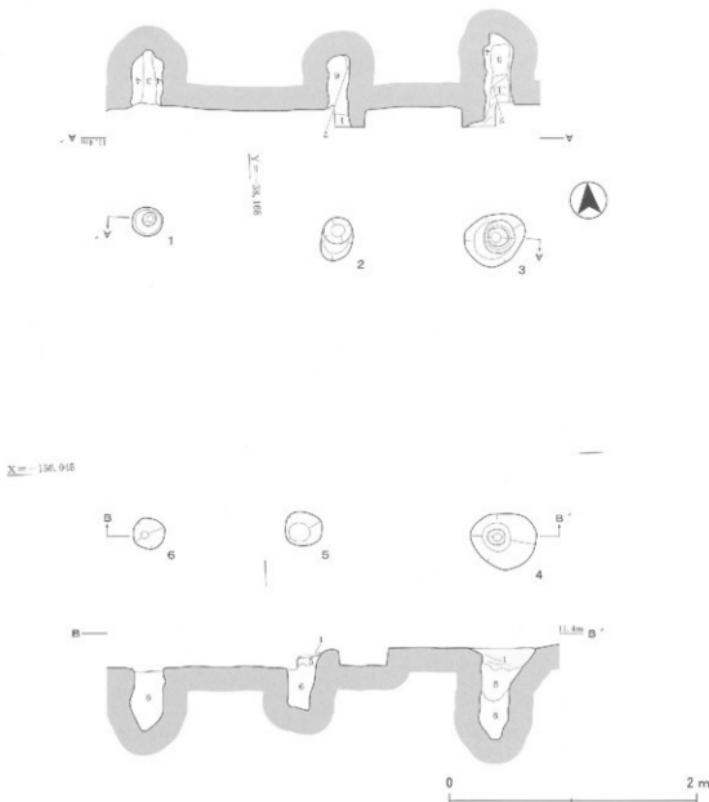
図206 挖立柱建物 6 平・断面図

没過程は基本的に同じと考えられ、そのうち柱穴 5・6 は柱痕跡に 3 層が流入する。柱穴 5 は、最下部に腐食した柱が認められたことから、埋没直前段階に柱が何らかの形で存在した状況が推定できる。

出土遺物 遺物は柱のほかは出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。

[挖立柱建物 7] (図 207)

検出状況 2 A - 7 e 区で検出した東西棟の挖立柱建物である。柱通りの良い北側の桁を代表させる」と、長軸を N85° W 方向に置いており、柱穴 1 ~ 6 から構成される桁行 2 間、梁間 1 間の柱配置を探る。



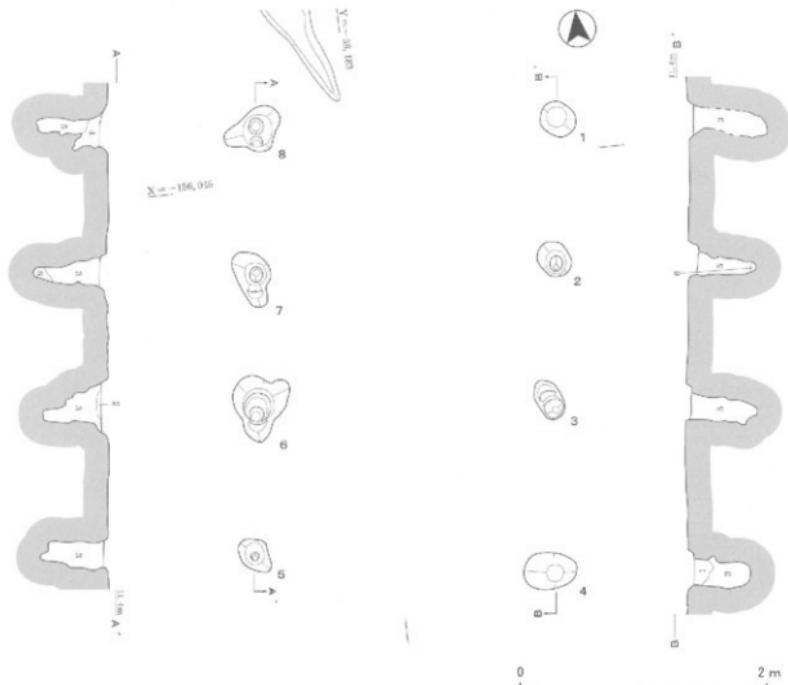
1. 黄褐色 (10GT/8) 細砂 [上部] に近い黄褐色 (10GT/2) シルト・粗細砂の互層 [中間] ～泥質灰 (10GT/1) 粗細砂
[柱穴] ～泥質灰 (10GT/1) 粗細砂
[柱穴] ～泥質灰 (3層)
2. 灰 (10N/1) シルト
[手触灰 (10GT/1) シルトの薄層を柱状に挟む]
3. 粗細灰 (10G3/1) シルト
[炭化物塊を多く含む、最大径10mmの青灰 (5BG5/1) シルトのブロックが少數入る]
4. 粗細灰 (5G4/1) シルト
[細砂を多く含む、径30~50mmの青灰 (5BG5/1) 粗細砂～シルト質粗砂のブロックが多く含む]

5. 黒褐色 (2.5V3/1) シルト
[細砂を多く含む、上部には1のブロックが入る]
6. 粗細灰 (5G4/1) シルト
[細砂を多く含む、炭化物塊を含む、10~30mmの青灰 (5BG5/1) シルト・粗細砂～細砂のブロックが多く入る、4と似るが、より粗粒が強い]
7. 灰オーラーブ灰 (2.5G3/1) シルト
[細砂を多く含む]

図207 掘立柱建物 7 平・断面図

建物の規模は、北側の桁行で2.8m、南側で2.9m、東側の梁間で2.5m、西側で2.6mを測り、不整な長方形を呈する。各柱穴は検出長で0.25~0.55mとばらつきがみられ、やや不整な円形を呈する。それぞれの坑底の標高は、10.55~10.8mを測る。南北方向に対応する柱穴はそれぞれ平面規模・深さが近似しており、東側の梁を構成する柱穴3・4がもっとも大きく、深く掘り込まれている。

柱穴埋土は黒褐色ないしは暗緑灰色のシルトを基調とし、攪乱の及んでいない柱穴2・3・4・5では最上部に3層である黄橙色の細砂層が堆積している。先述した掘立柱建物6とは異なる断面を示して



1. 黒 [10732/2] シルト
〔縫隙へ細砂を多く含む。灰50mmほどの灰黒 (2. ST7/2) 細砂のブロックが入る〕
2. 黒 [10732/1] シルト
〔縫隙を多く含む〕
3. オリーブ黒 (3/3/1) シルト
〔全体的に細砂を多く含み、部分的に縫隙を多く含む。灰黄 (2. ST7/2) シルトのブロックが多く入る〕
4. 油オリーブ (4/4/2) シルト
〔1550mmほどどの灰黒 (2. ST7/2) 細砂のブロックが多く入る〕
5. オリーブ黒 (5/3/1) シルト
〔縫隙を多く含む。灰化赤鉄を含む。灰黄 (2. ST7/2) 細砂・青灰 (4/6/1) シルトの小ブロックが入る〕
6. オリーブ灰 (2. ST7/2) シルト
〔細砂を多く含む〕

図208 掘立柱建物8 平・断面図

いるが、3層が柱穴内に堆積する状況にあったことは明らかである。

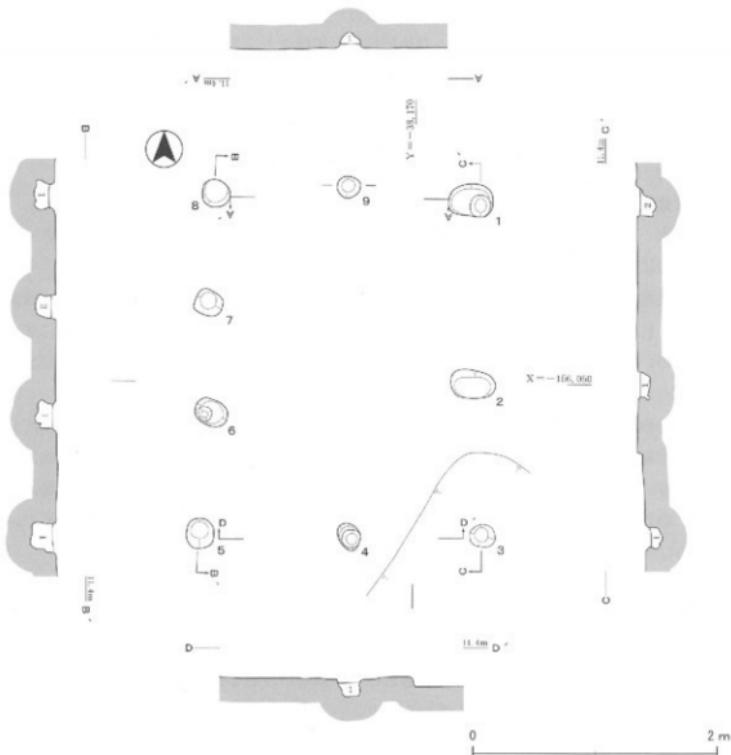
出土遺物 遺物は出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。

[掘立柱建物8] (図206)

検出状況 2 A - 9 e 区において検出した南北棟の掘立柱建物である。西側の桁で代表させると、長軸を N 7° E に置き、桁行3間、梁間1間の柱配置を探る。

建物の規模は、西側の桁行で3.55m、東側で3.75m、梁間は南北ともに2.45mを測り、平面形状は不整な台形を呈する。各柱穴の平面形状は、検出面付近で受口状に浅く拡がるものが多く、複数の円が連結したような形状をとっており、この傾向は西側桁により顕著である。このため、各柱穴の規模も検出面上では0.2~0.55mとばらつきが認められるが、実際の柱穴そのものは0.15~0.3mを測る。

掘り方の形状は多様であるが、柱根に相当する箇所が一様に細く深い。それぞれの坑底の標高は10.65~10.8mを測るが、北東隅の柱穴1が10.65mと突出して深いのに対し、その他の柱穴は、中央



1. 埋伏 (N.I.) シルト
〔砂砾を多く含む。発盤の炭化物を含む。最大100mmまでの青灰(5396/1)
シルト質物のブロックが非常に多く入り、40~50mm次の青灰(5396/1)
シルト質のブロックが少量入る。〕

2. 無機 (2.537/1) シルト
〔炭化物を多く含む。20~30mm大の明オリーブ灰(2.537/1) 砂砾のブ
ロックが多く入る。〕

図209 挖立柱建物9 平・断面図

部が10.75m、南側が10.8m前後とはほぼ一定している。

柱穴埋土は、黒色ないし灰オリーブ色のシルトを基調とし、部分的に細礫を含んでいる。層中には、ベース土と考えられるブロック土が多く混入する。

出土遺物 遺物は出土しておらず、建物の詳細な帰属時期は不明である。

[挖立柱建物9] (図209)

検出状況 2A-7・8-e・f区に跨って位置する南北棟の挖立柱建物で、東側の桁で代表させると、ほぼ真北に軸を置き、西側の桁行では3°程東側に振っている。東西で柱配置を違える建物の一つで、西側桁行で3間、東側で2間、梁間2間の柱配置を探る。

建物の規模は、西側の桁行で2.8m、東側の桁行で2.7mを測り、梁間は北側が2.15m、南側が2.3mを測る。柱芯間隔は、西側桁で0.9~0.95mを測り、東側桁は柱穴2・3間で1.2m、柱穴1・2間で1.5mと、やや南側に寄っている。また、梁間は1.05~1.25mを測る。梁間は柱の通りが悪く、わ

すかに外側に膨らむように配置されており、建物の平面形状は不整な六角形を呈する。各柱穴は検出長で0.2~0.35mとばらつき、やや不整な長楕円形を示す柱穴1・2を除けば、概ね近似している。それぞれの坑底の深さは全体的に浅く、標高10.95~11.05mとほぼ一定の深さに掘削されている。

柱穴の埋土は、暗灰色ないしは黒褐色のシルト層を基調とする単一層で、ベース土と考えられるブロックのほか、炭化物粒を含んでいる。

出土遺物 遺物は出土しておらず、建物の詳細な帰属時期は不明である。

〔掘立柱建物10〕（図210）

検出状況 2A-7f区に位置する東西棟の掘立柱建物で、柱通りの良い北側桁で代表させると長軸をN73°Wに置き、桁行2間、梁間2間の柱配置を探る。

建物の規模は、北側の桁行で3.45m、東側の桁行で3.5mを測り、梁間は東側が3.0m、西側が3.25mを測る。柱芯間隔は、桁行で1.65~1.8mを測り、梁間で1.5~1.75mを測る。全体的に柱の通りは良いものの、南東隅の柱穴5が若干北側に寄っているために、建物の平面形はやや不整な台形を呈している。

各柱穴は検出長で0.2~0.35mとばらつきが認められるが、やや不整な長楕円形を示す柱穴5を除けば、概ね近似している。それぞれの坑底の深さの標高は東西南北で異なっており、西側が10.6~10.75m、東側が10.9~10.95mを測り、西側の坑底が概ね20cm程度深く掘り込まれている。同様に、南北方向では、南側が10.7~10.9m、北側が10.75~10.95mと南側の方が5cm程度深く掘削されている。柱穴1からは柱根が出土している。

柱穴埋土は、黒色から灰色のシルト、あるいは3層である浅黄橙色の極細砂から細砂である。前者には明オリーブ灰色や青灰色のベース土ブロックが多く混入している。それぞれの柱穴の埋没過程は基本的に同じと考えられ、そのうち柱穴1・4・6は柱痕跡に3層が流入する。柱穴1については、最下部に腐食した柱が認められたことから、埋没直前に柱が何らかの形で存在していた状況が推定できる。

出土遺物 遺物は柱のほかは出土していない。

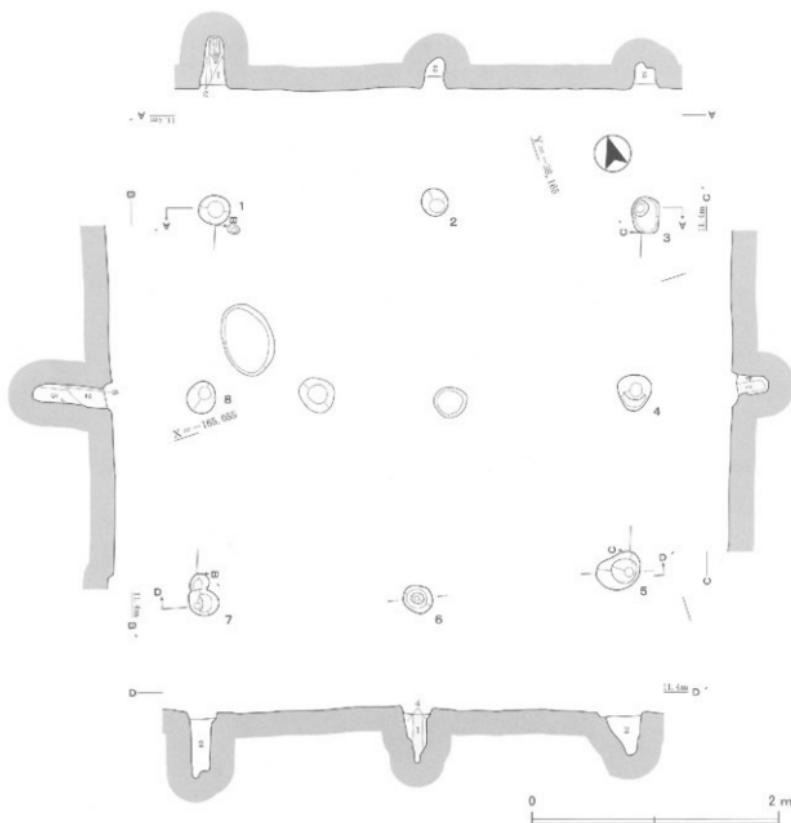
〔掘立柱建物11〕（図211）

検出状況 2A-8f・g区に位置し、柱通りの良い北側桁で代表させると、長軸をN30°Wに置く東西棟の掘立柱建物である。

柱配置はほかの建物とは異なり、内外に分かれて柱が配置されており、外側が桁行2間、梁間2間、内側が桁行3間、梁間2間の柱配置を探る。建替えが行われた可能性もあるが、後述するように1~8までの主柱穴が比較的大振りで深いのに対し、内側を構成する主柱穴9~18が概して小振りで浅めに掘削されていることから、内側の柱穴に東柱等の機能が割り当てられる可能性が高く、これら18基の柱穴をもって建物が構成されていたと考えるに至った。

建物の規模は、外側柱配置の北側の桁行で3.05m、南側の桁行で2.95mを測り、梁間は西側が2.7m、東側が2.6mを測る。内側柱配置の北側桁行は2.55m、南側桁行では2.55m、梁間の西側が2.0m、東側が1.9mを測る。柱芯間隔は、外側柱配置の桁で1.45~1.6mを測り、梁は1.25~1.4mを測る。同様に、内側柱配置の桁で0.65~0.95mを測り、梁で0.85~1.05mを測る。

建物の平面形状は、外側柱配置の場合、柱穴4が若干外側に膨らむため東側の梁間が若干柱通りが悪くなるものの概ね整った長方形を呈しているのに対し、内側柱配置は、全体的に外側に膨らむ配置をなしているため、不整な方形を呈している。

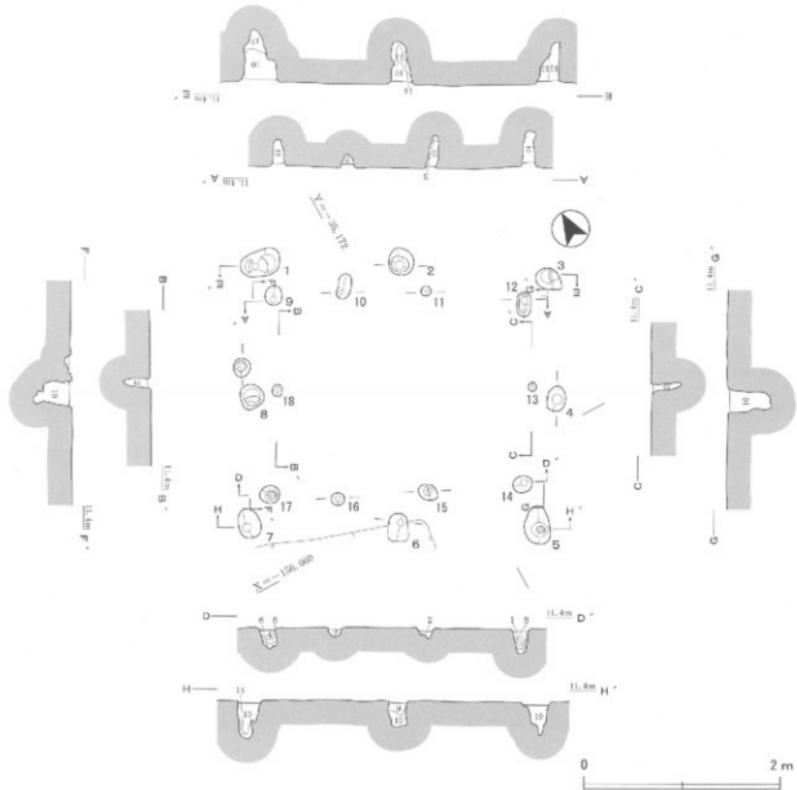


1. 硫黄砂 (0.9B8/1) 植物砂～細砂
〔底盤のラミナが認められる。下部には土漠 (54/1) シルトのブロックが入る。」
泥炭層 (3層) 〕
2. オリーブ灰 (0.73/1) シルト
〔樹木が多く含む。炭化物質を多く含む。19m前後の薄葉 (2.0T7/3) シルト
と、5m前後のシルト (含泥砂) のブロックが多くの入る。」
3. 泥 (7.4T1/1) シルト
〔樹木が多く含む。20mmの大青炭 (5B5/1) シルト (含泥砂) のブロックが
多く入るが、1に比べて少ない。」
4. 泥 (5.4/1) シルト
〔1.0mの大青炭 (2.0T7/3) 細砂・青炭 (5B5/1) シルト (含泥砂) のブロック
が多くの入る。」
5. 硫オリーブ灰 (2.5G7/1) シルト
〔炭化物質を多く含む。明オリーブ灰 (5G7/1) シルト (含泥砂) のブロック
が多くの入る。」
6. 泥 (0.6/1) シルト
〔細砂を多く含む。」

図210 埋立柱建物10 平・断面図

各柱穴は検出長で0.1~0.35mとばらつきが大きいが、外側柱配置の柱穴1~8は0.2~0.4m、内側柱配置の柱穴9~18は0.1~0.25mをそれぞれ測り、外側柱配置の方が0.1m前後大きい値を示す。また、坑底の深さの標高は、10.75~11.15mを測るが、外側柱配置が10.75~11.0m、内側柱配置が10.95~11.2mと0.2m前後の比高差が認められる。加えて、内外ともに南側杭がやや浅く掘削されるという傾向も併せて看取される。

柱穴の埋土は、暗黒色ないしは青灰色のシルト層を基調とし、ベース土と考えられるブロックのほか、炭化物質を含んでいる。また、柱穴14の上部には明黄褐色の中砂～粗砂からなる3層が堆積しており、



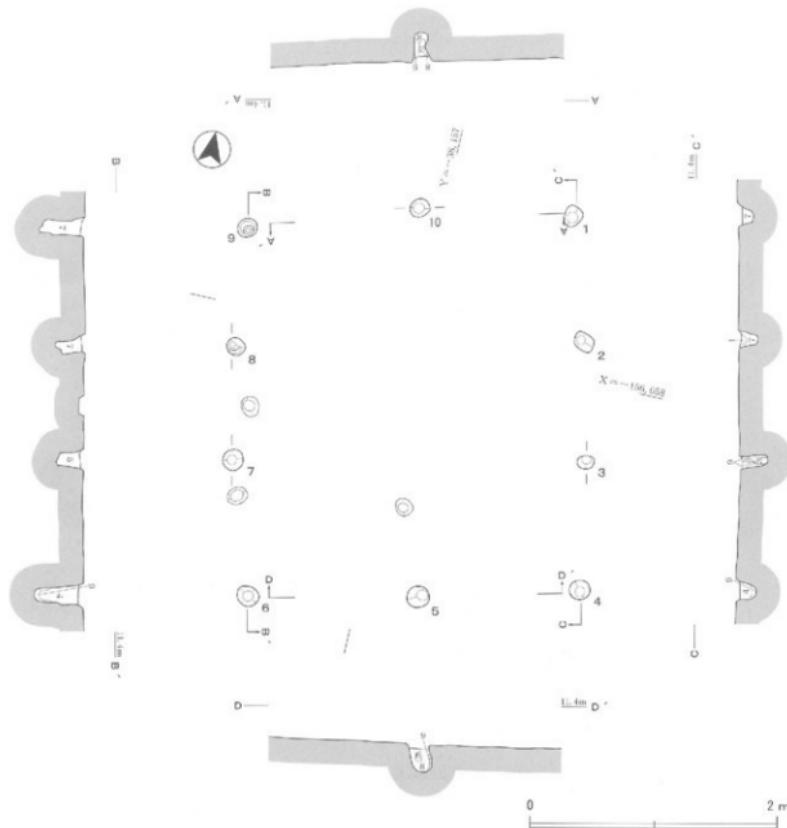
1. 売賣窓 (1037/1) 中段～底段
〔シルト～礫砂を横状に挟み、模倣のラミナが見られる。〔3層〕〕
2. 緩青灰 (BB62/1) シルト
〔細砂を多く含む。炭化物粒を含む。明ナリーブ灰 (2,667/1) 細砂と10mm以上の骨格 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕
3. 青灰 (BB66/1) シルト
〔青灰 (BB62/1) 同じ。〕
4. 青灰 (BB62/1) シルト
〔含む物など1と共に、中に柱材と考えられる炭化物の塊りあり〕
5. 青 (BB66/1) シルト
〔大骨灰 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕
6. 緩青灰 (BB62/1) シルト
〔細砂を多く含む。10mmの大骨灰 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕
7. 青灰 (BB66/1) シルト
〔細砂を多く含む。炭化物粒を含む。青灰 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕
8. 緩青灰 (BB66/1) シルト
〔細砂を多く含む。10mmの大骨灰 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕
9. 青灰 (BB66/1) シルト
〔細砂を多く含む。炭化物粒も含む。暗青灰 (BB66/1) ・青灰 (BB66/1) シルトのプロックが少量入る〕
10. 缓青灰 (BB63/1) シルト [上部] ～緩青灰 (BB63/1) ・青灰 (BB66/1) シルトのプロック混合土 [下部]
〔細砂を多く含む。炭化物粒を含む。上部には20mm大の明オーリーブ灰 (2,507/1) シルトのプロックが入る〕
11. 青灰 (BB62/1) シルト
〔細砂を多く含む。10mmの大骨灰 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕
12. 青灰 (BB62/1) シルト
〔細砂を多く含む。10mmの大骨灰 (BB66/1) シルトのプロックがわざかに入る〕
13. 缓青灰 (BB62/1) シルト
〔細砂を多く含む。微量の鉄錆を含む。青灰 (BB66/1) シルトのプロックがわざかに入る〕
14. 青灰 (BB66/1) シルト
〔細砂を多く含む。〕
15. 青灰 (BB62/1) シルト
〔10～30mmの大骨灰 (BB66/1) シルトのプロックが入る〕

図211 挖立柱建物11 平・断面図

遺構面の埋没直前にはオープンな状態にあったことを示している。

[挖立柱建物12] (図212)

検出状況 2 A - 6 f - g 区に位置する南北棟の挖立柱建物で、柱通りの良い東側桁で代表させると



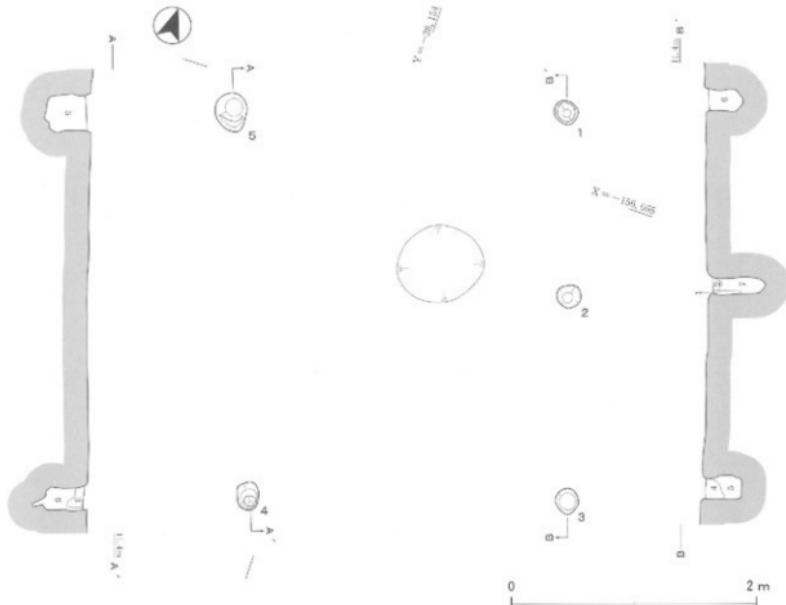
1. 明黄柱 (2.5Y6/8) 柱頭～中段
〔灰 (3H1) シルトの小ブロックが入る〕
2. 青黒 (B6G2/1) シルト
〔細胞が多く含む、炭化物結晶を多く含む、灰 (2.5G9/8) 柱頭のブロックが入る〕
3. 墨尾 (2.5V3/1) シルト
〔墨の沈着部若、柱頭～中段が既存する柱材の断面に嵌も込んでいる〕
4. オリーブ型 (5G72/1) シルト
〔細胞が多く含む、炭化物結晶を含む、10mm大の耐水オリーブ灰 (2.5G77/1) シルトのブロックが少しある〕
5. オリーブ型 (5G72/1) シルト
〔墨の沈着部若、柱頭～中段が既存する柱材の断面に嵌も込んでいる〕
6. 基脚 (2.5T3/1) シルト
〔明黄柱 (2.5T9/8) 柱頭～中段のブロックが入る、炭化した柱材が既存〕
7. 灰 (2.5T4/1) シルト
〔細胞が多く含む、炭化物結晶を含む、10～20mm大の青灰 (5G6/1) シルトのブロックが入る〕
8. オリーブ型 (5G72/1) シルト
〔細胞を多く含む、炭化物結晶を含む、青灰 (5G6/1) シルトのブロックが少しある〕
9. 灰 (3H1) シルト
〔2と似るが、炭化物結晶を多く含み、明黄柱 (2.5T6/8) 柱頭～中段のブロックが入る〕

図212 捩立柱建物12 平・断面図

長軸をN13°Wに置き、桁行3間、梁間2間の柱配置を探る。

建物の規模は、桁行で3.0mを測り、梁間の北側が2.65m、南側が2.7mを測る。柱芯間隔は、桁行で0.95～1.15mを測り、梁間で1.25～1.4mを測る。全体的に柱の通りは悪く若干外側に膨らむが、柱芯間隔が近似値を示すため、建物の平面形はやや不整な長方形を呈している。

各柱穴は検出長で0.15～0.2mと一定している。それぞれの坑底の深さの標高は西側桁の隅柱に相当



1. 種種灰 (1064/1) シルト
[柱穴 6 の明帶灰 (3667/1) シルトのブロックが入る]
2. オリーブ黒 (3671/1) シルト
[腐化物粒を多く含む]
3. オリーブ黒 (3671/1) シルト
[柱穴～中央の薄層を柱状に挟む、腐化物粒を含む、10～20mm大の明オリー
ブ (2,667/1) シルトのブロックが多く入る]
4. オリーブ黒 (3671/1) シルト
[腐化物粒を多く含む、10mm以下の明青灰 (3667/1) シルトの小ブロックが
少量入る]

5. 種種灰 (1064/1) シルト
[柱穴 6 の明帶灰 (3667/1) シルトのブロックが入る]
6. オリーブ黒 (3671/1) シルト
[柱穴の薄層を含む、0～50mm大の明青灰 (3667/1) シルト、10mm大の明オ
リーブ黒 (3671/1) シルトのブロックが入る]
7. オリーブ黒 (3671/1) シルト
[柱穴の薄層を含む、0～50mm大の明青灰 (3667/1) シルトのブロックが多く入る、糞分の影響
が顕著]

図213 掘立柱建物13 平・断面図

する柱穴 6・9 が 10.75～10.8m と突出して深いのを除き、10.85 m 前後に掘削されている。

柱穴埋土は、黒色から灰色を基調とするシルトで構成されているが、柱穴 2 の上部には 3 層である明黄褐色の細砂～中砂が流入する。

[掘立柱建物13] (図 213)

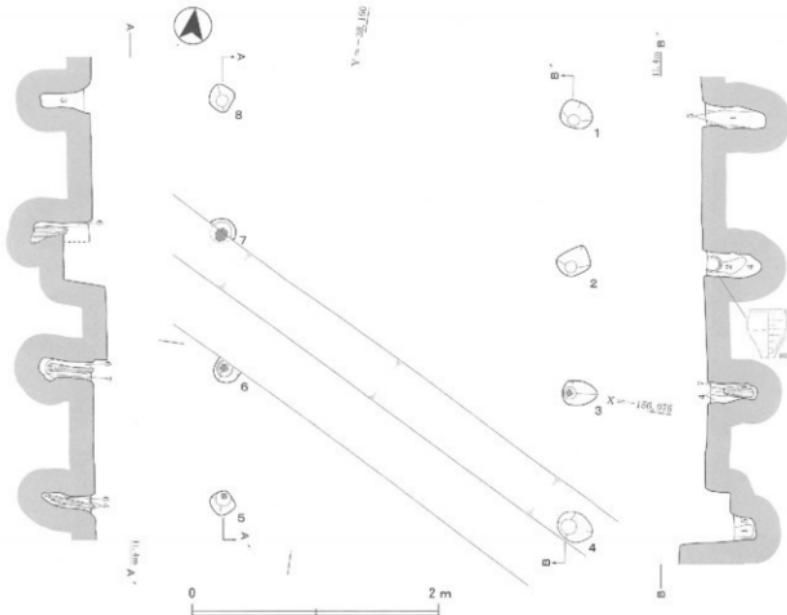
検出状況 2 A - 6 f 区に位置する南北棟の掘立柱建物で、西側桁で代表させると長軸を N21° W に置く。桁行の柱配備を違える建物の一つで、桁行は西側 1 間、東側 2 間、梁間は 1 間である。

建物の規模は、西側桁行で 3.25m、東側で 3.2 m を測り、梁間は北側が 2.7 m、南側が 2.6 m を測る。柱芯間隔は、東側の桁柱穴 1・2 間で 1.5 m、2・3 間で 1.7 m を測る。柱の通りは良いが、柱芯間隔が異なるため、建物の平面形はやや不整な台形を呈している。

各柱穴は検出長で 0.2～0.3 m とばらつきが認められるが、柱穴 5 がやや大振りであるのを除けば、概ね 0.2 m 前後の円形に統一されている。

それぞれの坑底の深さの標高は 10.7～10.9m を測る。

柱穴埋土は、オリーブ黒色から暗緑灰色を基調とするシルトを基調とする。



1. 青黒 (B592/1) シルト
[400mmを多く含む、貝化石塊を多く含む、5との境は鉛分の沈着が顕著]
2. 青灰 (B695/1) シルト
[5との境との間に鉛分の沈着があるに顕著]
3. 青黒 (B595/2) シルト
[貝化石塊を多く含む、10mm大までの青灰 (B595/1) シルトのブロックが多く入る、鉛分の沈着観察]
4. オリーブ黒 (B73/2) シルト
5. 青黒 (B595/2) シルト
[20mm~30mm大の青灰 (B595/1) シルトのブロックが多く入る]
6. 青黒 (B595/2) シルト
[10mm~20mm大の青灰 (B595/1) シルトのブロックが多く入る、鉛分の沈着観察]
7. 緑赤 (102/1) シルト
[10mm~30mm大の青灰 (B595/1) シルトのブロックが多く入る]

図214 振立柱建物14 平・断面図

〔振立柱建物14〕 (図212)

検出状況 2A-5・6h区に位置する南北棟の振立柱建物で、柱通りの良い西側桁で代表させると長軸をN9°Wに置き、桁行3間、梁間は1間の柱配置を探る。

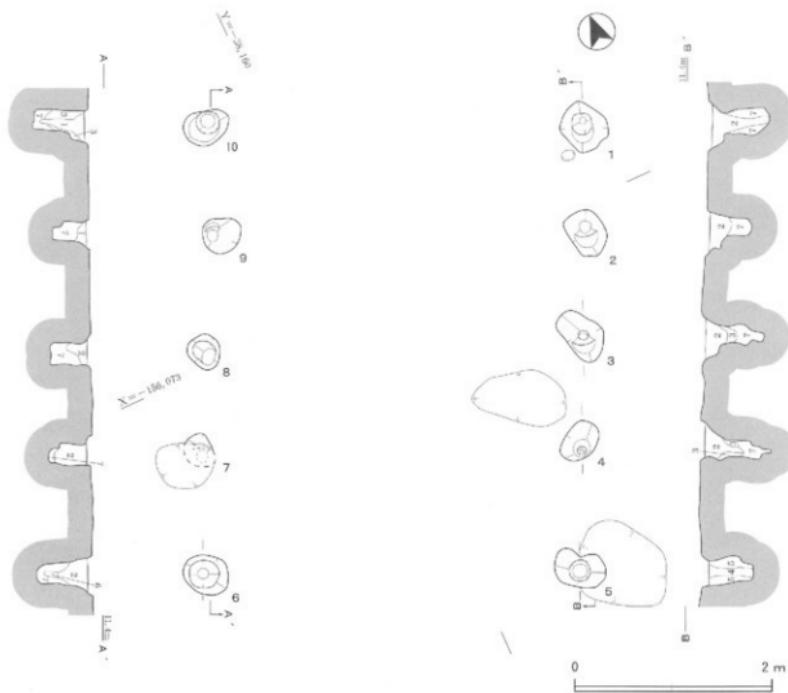
建物の規模は、西側桁行で3.25m、東側で3.35mを測り、梁間は2.85mを測る。柱芯間隔は、柱穴1・2間が1.2mと若干広くとられているものの、そのほかは1.1m前後に揃えられている。柱の通りは良いが、柱穴1・2間の柱芯間隔が広いため、建物の平面形は台形を呈している。

各柱穴は検出長で0.15~0.3mと、ややばらつきが認められるが、西側桁の柱穴5~8は0.2m前後の円形を、東側桁の柱穴1~4は、短軸0.2m、長軸0.25~0.3m前後の長楕円形を示し、概して建物の外側に広げられる。

それぞれの坑底の深さの標高は10.55~10.65mを測り、北側がより深く掘削されていた。

柱穴埋土は、オリーブ黒色から青黒色を基調とするシルトである。

出土遺物 遺物は、柱穴2の上部から正位に据えられて甕が出土した。V-2様式のものと考えられ、弥生時代後期中葉に帰属するものであろう。



1. 黒褐 (10YR2/2) シルト

【細砂を多く含む、特に上部では細緻・中粒を多く含む。10mm大の礫灰 (10G6/1)、細砂のブロックが入る。強分の化粧断面】

2. 青灰 (5D6/1) シルト

【細砂を多く含む、炭化物灰を多く含む。10mm大の明オーリーブ灰 (2.6G7/1) シルトのブロックが入る。強分の化粧断面】

3. 塗覆灰 (8G6/3/1) シルト

【細砂を多く含む、30mm大の礫灰 (10G6/1) 細砂のブロックが入る】

4. 青灰 (5D6/2/1) シルト

【細砂を多く含む、炭化物灰を含む。10~20mm大の明オーリーブ灰 (2.6G7/1) シルトのブロックが多く入る】

5. オリーブ灰 (2.6G6/1) シルト

【細砂を多く含む、微細の炭化物灰を含む。30~50mm大の暗青灰 (8G6/3/1)、青黒 (5P6/2/1) シルトのブロックが多く入る。強分の化粧断面】

6. 暗黒 (10G2/1) シルト

【細砂を多く含む、炭化物灰を含む。10mm大までの礫灰 (10G6/1) シルトのブロックが入る】

7. 暗青灰 (5G6/3/1) シルト

【10~30mm大の礫灰 (10G6/1) 細砂のブロックが多く入る。3に似るが、本層の方が基盤が強い】

図215 掘立柱建物15 平・断面図

また、柱穴3・5・6・7の各柱穴から柱根が出土している。これらの柱根は、樹種同定の結果、柱穴3の柱根がクスギ節、柱穴6がクリ、柱穴5・7がコナラ節であることが判明している。

〔掘立柱建物15〕 (図215)

検出状況 2A-6・7-h区に位置する南北棟の掘立柱建物で、今回の調査でもっとも大きな建物である。柱通りの良い東側桁で代表させると長軸をN24°Eに置き、桁行4間、梁間1間の柱配置を探る。なお、本建物の西側には、建物に沿うようにして細く浅い溝61が並走している。建物との有機的な関係を有する可能性もあるが、詳細は不明である。

建物の規模は、桁行で4.65mを測り、梁間で3.8mを測る。柱芯間隔は1.1~1.25mとややばらつきが認められる。柱穴9がやや内側にずれ込むのはかは、概して柱の通りは良い。建物の平面形は長方形を呈している。

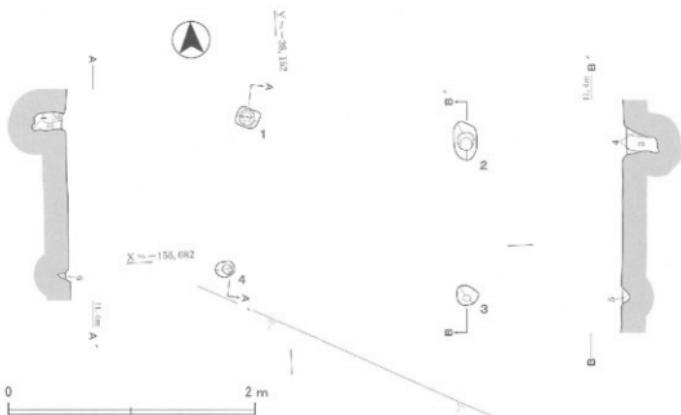


図216 挖立柱建物16 平・断面図

各柱穴は検出長で0.3~0.55mとややばらつきが認められるが、全体的に大振りな不整梢円形を示している。掘形の形状は、東西の桁で若干異なっており、西側が整った円柱状を呈するのに対し、東側は上部が外側に開く、すり鉢状を呈している。それぞれの坑底の深さの標高は10.55~10.9mを測り、東側の方が0.2m前後深く掘削されている。

柱穴埋土は、黒色ないしは灰色を基調とするシルトである。

出土遺物 柱穴2よりサヌカイト製の石鎚未製品(2814・2815)が出土している。

[掘立柱建物16] (図216)

検出状況 2A-6 i区に位置する東西棟の掘立柱建物で、柱通りの良い北側桁で代表させると長軸をN82°Wに置き、桁行1間、梁間1間の柱配置を探る。建物の南側は工区境に該当しており、後述する柱穴の規模からもさらに南側に建物の延長が存在した可能性もあるが、詳細は不明である。

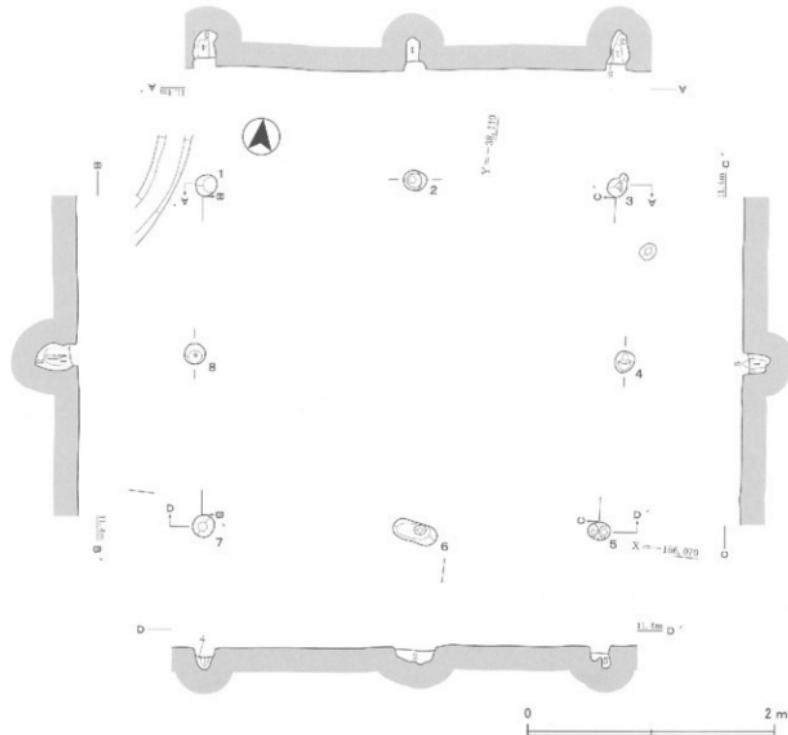
建物の規模は、北側桁で1.8m、南側桁で1.95mを測り、梁間で1.25mを測る。建物の平面形はやや不整な台形を呈している。

各柱穴は、柱穴2がやや大振りであるほかは全体的に小さく、検出長で0.1~0.2mと一定している。それぞれの坑底の深さの標高は、北側の柱穴1・2が10.85~10.9m、南側の柱穴が11.1mと、両者の間には20cm前後の比高差がある。加えて掘形の断面形状も南側の柱穴は、杭状の痕跡程度にとどまっている。このことからも上述したように柱穴3・4が隅柱ではない可能性が存在する。

柱穴埋土は、青黒色から暗青灰色を基調とするシルトと上部に堆積する暗灰黄色のシルト層から構成されている。

[掘立柱建物17] (図217)

検出状況 2A-1 g・2 g・2 h区に跨って位置する東西棟の掘立柱建物で、柱通りの良い南側桁



1. 灰 (374/1) 粘土質シルト
〔粘液～礫相砂を多く含む。4 b 番でかる灰 (109/1) シルトの小ブロックが入る〕
2. 灰 (374/1) 粘土質シルト
〔1とはほぼ同じであるが、灰 (109/1) シルトのブロックがより多く入る〕
3. 磷オーバーブ (2, 363/1) シルト
〔灰砂～礁砂を少含む〕
4. 灰 (367/1) シルト
〔粘液～礁砂を少く含み砂がちである〕
5. 灰 (7, 359/1) 粘土質シルト
〔1と似るが、1より色黒く、含む砂も細かになり量もやや少ない。1と同様に灰 (109/1) シルトの小ブロックが入る〕

図217 捜立柱建物17 平・断面図

で代表させると長軸をN84° Eに置き、桁行2間、梁間2間の柱配置を探る。

建物の規模は、桁行2.8m、梁間の北側が3.35m、南側が3.25mを測る。柱芯間隔は、北側桁で1.65m、南側の柱穴5・6間で1.5m、柱穴6・7間で1.75mを測る。梁間は1.4~1.45mとほぼ一定している。桁の柱の通りは良いが、梁はやや外側に膨らんでいるため、建物の平面形はやや不整な長方形を呈している。

各柱穴は横長の柱穴6を除き、検出長で0.15~0.2mとほぼ一定しており、不整な円形に統一されている。

それぞれの坑底の深さの標高は10.9~11.1mを測り、柱穴4を含む南側桁が11.05~11.1mと浅い。

柱穴埋土は、灰色から暗オリーブ灰色を基調とするシルトである。

出土遺物 遺物は柱穴8から柱根が出土した。

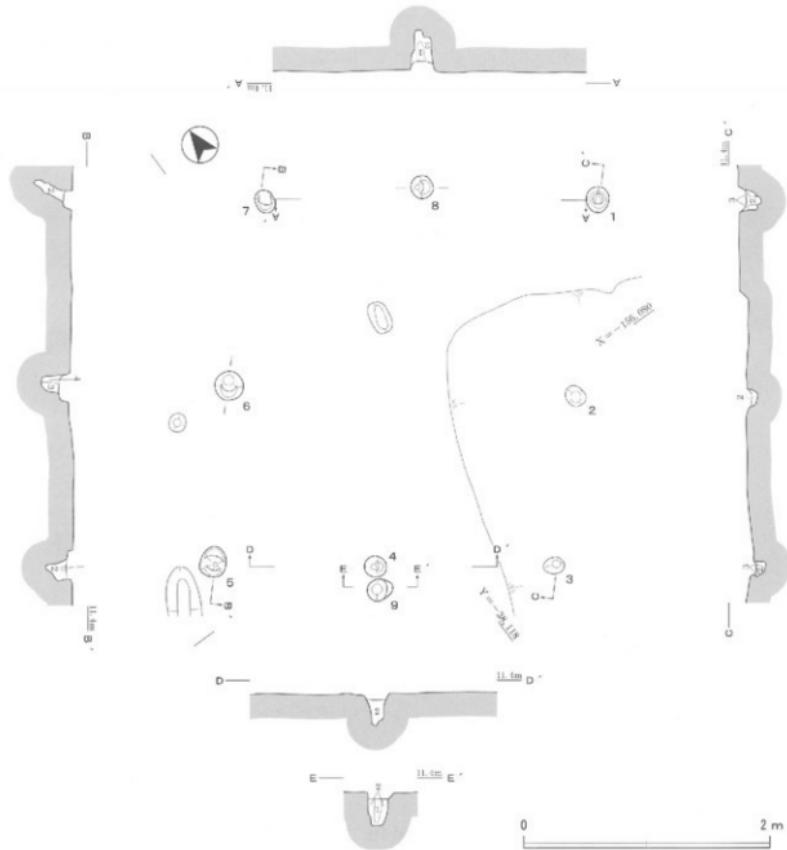


図218 挖立柱建物18 平・断面図

[掘立柱建物18] (図 218)

検出状況 2 A - 2 h - i 区に位置する南北棟の掘立柱建物で、柱通りの良い東側桁で代表させると長軸を N43° E に置き、桁行 2 間、梁間 2 間の柱配置を探る。なお、柱穴 4 の南側には柱穴 9 が隣接する。建替が施された可能性があるが、ここでは柱通りの良い柱穴 4 を建物の規模を示す目安として扱う。

建物の規模は、桁行 3.0 m、梁間の北側が 2.7 m、南側が 2.75 m を測る。柱芯間隔は、西側桁で 1.5 m、南側で 1.4 ~ 1.6 m を測る。梁間は西側の柱穴 4・5・7・8 間で 1.2 m、東側の 3・4・1・8 間で 1.5 m を測る。柱通りは悪く、建物の平面形は平行四辺形状を呈する上に、若干外側に彫み、不整

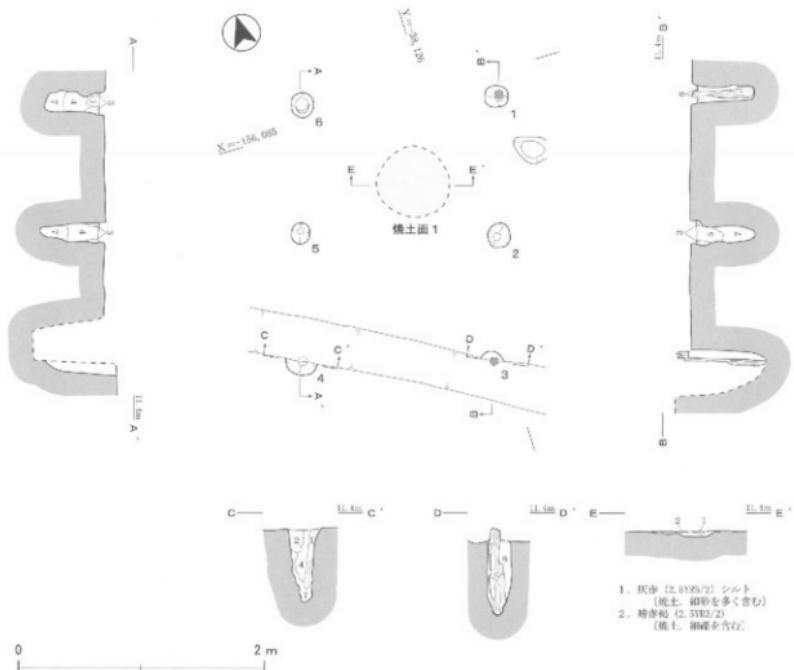


図219 掘立柱建物19 平・断面図

形を呈する。

各柱穴は横長の柱穴6を除き、検出長で0.15~0.25mとほぼ一定しており、不整な円形に統一されている。それぞれの坑底の深さの標高は柱穴7・8が10.95m前後とやや深く、柱穴4・5・6・9が11.0~11.05m、柱穴1・2・3が11.1~11.15mを測る。

柱穴埋土は、灰色の粘土質のシルトを基調とし、柱穴8・9の上部柱痕跡に浅黄色の3層が流入する。
〔掘立柱建物19〕（図219）

検出状況 2A-3-i区に位置する南北棟の掘立柱建物で、柱通りの良い東側桁で代表させると長軸をN19°Eに置き、桁行2間、梁間1間の柱配置を採る。

建物の規模は西側桁で2.1m、東側で2.2mを測り、梁間の北側が1.6m、南側が1.55mを測る。柱芯間隔は1.0~1.15mを測る。柱通りは良いが、柱穴1・2間が1.15mと若干広くなっているため、建物の平面形は不整な方形を呈する。

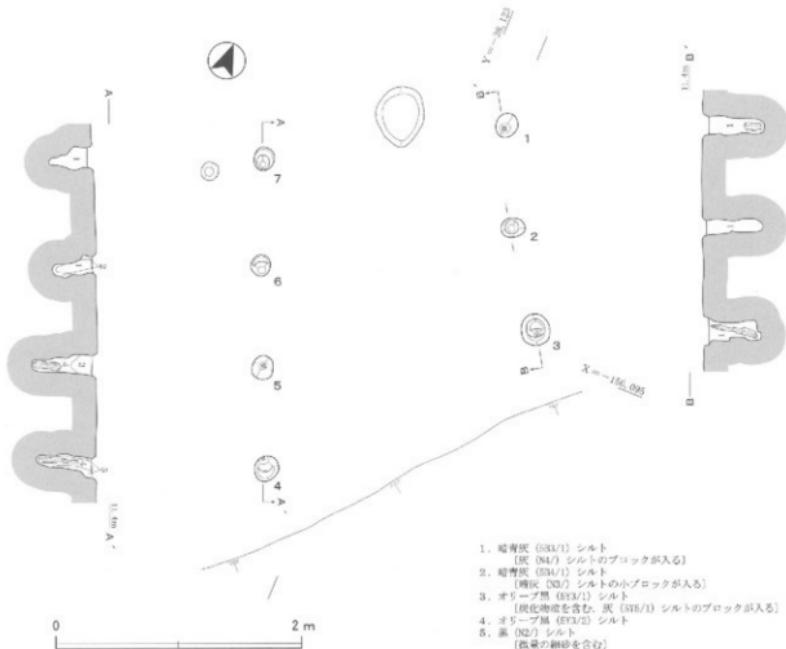


図220 振立柱建物20 平・断面図

各柱穴は検出長で0.15~0.25mとほぼ一定しており、不整な円形に統一されている。それぞれの坑底の深さの標高は柱穴3が10.55mとやや深いが、そのほかは10.65~10.7mと一定している。

柱穴埋土は、灰色の粘土質のシルトを基調とし、柱穴4・6の上部に灰白色シルトの3層が流入する。本建物の特筆すべき点として、中央やや北寄りに位置する焼土面1の存在がある。前述したように3層が流入していることもあり、本建物の存在自体は第3面で認識し得ており、その際に建物内に焼土面の存在を確認した。この焼土面は、直径0.6mのやや不整な円形を呈し、0.05m程の落ち込み内に赤褐色系の焼上が充填されていた。

建物との相対的な位置関係から、建物に付随する施設として捉えているが、その場合は建物の形式として平地式建物が想定される。

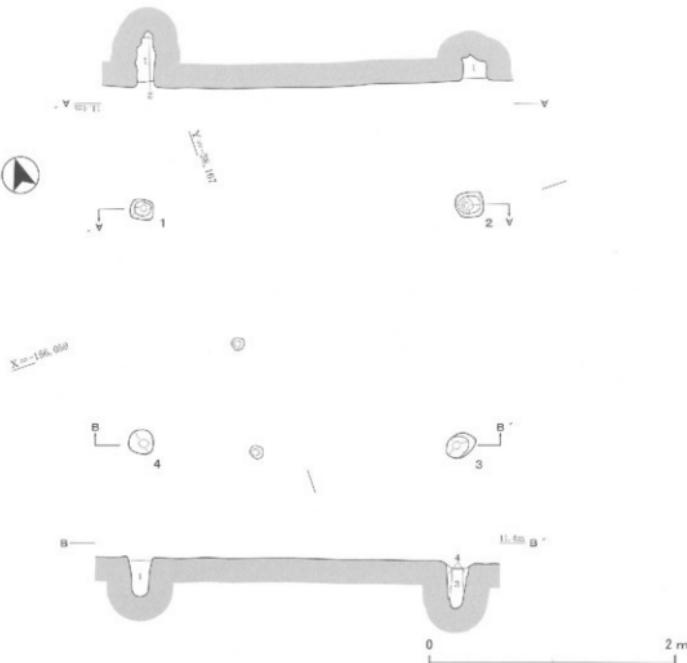
出土遺物 遺物は柱穴1・3から柱根が出土した。

〔振立柱建物20〕(図220)

検出状況 2A-3j区に位置する南北棟の振立柱建物で、南東隅を搅乱によって欠く。柱通りの良い西側桁で代表させると長軸をN22°Wに置き、桁行3間、梁間1間の柱配置を探ると推定できる。

建物の規模は桁行2.4mを測り、梁間2.0mを測る。柱芯間隔は0.75~0.9mを測る。西側桁の柱通りは良いが、東側桁の柱通りが悪く、建物の平面形は不整な台形を呈すると予測できる。

各柱穴は検出長で0.15~0.25mとほぼ一定しており、不整な円形に統一されている。それぞれの坑底



1. 黄灰 (2. SV1/1) シルト
[細砂を多く含み、塊砂～粗礫も少許含む。50mm大の灰 (2. 5V6/1) 細砂の
ブロックが入る]
2. 灰 (7. 5V6/1) シルト
[炭化物粒を含む]
3. 黒塵 (2. SV3/1) シルト
[細砂を多く含む。炭化物粒を非常に多く含む。下部には細灰 (1065/1) 細
砂のブロックが入る]
4. 黄灰 (2. SV4/1) シルト
[細砂を多く含む。40~50mm大の鉛灰 (1065/1) 細砂のブロックが多く入る]

図221 掘立柱建物21 平・断面図

の深さの標高は、柱穴6・7が10.9~10.95mとやや浅い値を示すが、そのほかの柱穴は10.75~10.8mを測り、概ね一定している。

柱穴埋土上は、暗青灰色ないしは黒色のシルトを基調としている。

出土遺物 遺物は柱穴1・3・4・5から柱根が出土した。柱の樹種は柱穴1・3にアカガシ亜属を用い、4・5にクヌギ節を用いていることが判明している。

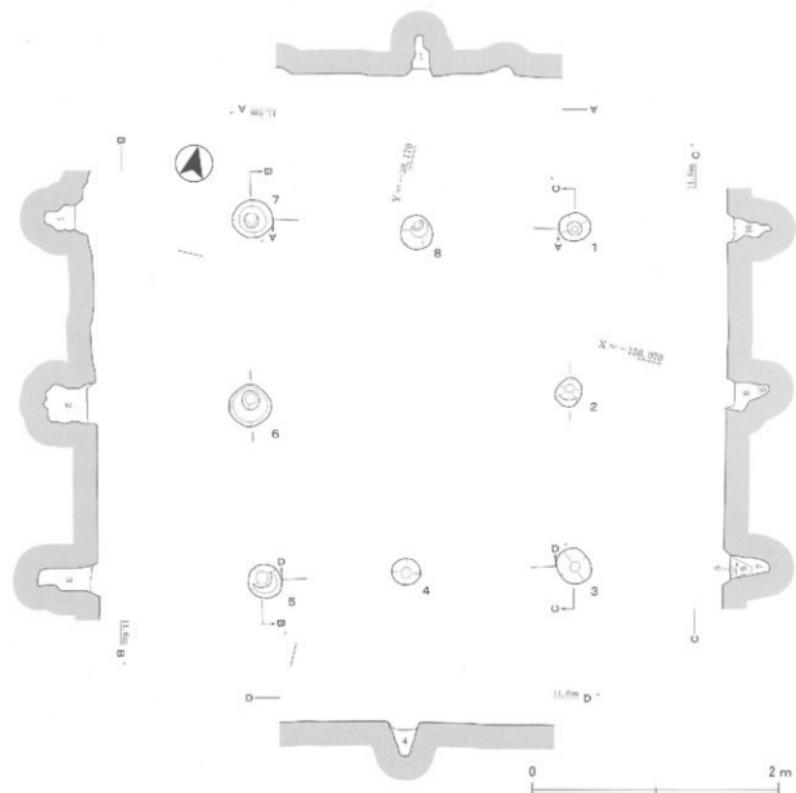
〔掘立柱建物21〕(図221)

検出状況 2A-7f-g区に位置する東西棟の掘立柱建物で、長軸をN73°Wに置き、桁行1間、梁間1間の柱配置を採る。

建物の規模は桁行2.55~2.6mを測り、梁間1.9~2.0mを測る。建物の平面形は長方形を呈する。

各柱穴は検出長で0.15~0.2mとはば一定しており、不整な円形ないしは隅円方形を示す。坑底の深さの標高は柱穴1・3が10.8m・10.85m、柱穴2・4が11.0m、10.95mと対角線上に位置する柱穴で深さを揃えて掘削されている。

柱穴埋土上は柱穴4の柱痕を除き、黄灰色のシルトを基調としている。



1. 黒窓 (10782/1) シルト
〔灰窓 (10782/2) シルト～細砂のブロックが入る〕
2. 湖底 (2. 575/1) シルト
〔下部に灰 (10781/1) シルトのブロックが入る〕
3. 灰 (10782/1) シルト
〔シートのブロックが入る、中に炭化物の塊あり〕
4. 湖底 (2. 575/2) シルト
〔灰質 (2. 575/2) シルト～細砂の小ブロックが入る、植物遺体が少量認められる〕
5. 湖底 (2. 575/1) シルト
〔灰質 (2. 575/2) シルト～細砂の小ブロックが入る〕
6. 黒窓 (2. 575/1) シルト
7. 灰 (10781/1) シルト
〔細砂が多く含む〕
8. 灰窓 (10783/1) シルト
〔灰窓 (10783/2) シルト～細砂と灰 (2. 575/1) シルトの小ブロックが入る〕
9. オリーブ層 (10781/1) シルト
10. オリーブ層 (10782/1) シルト
〔灰窓 (10783/2) シルト～細砂の小ブロックが入る〕

図222 掘立柱建物26 平・断面図

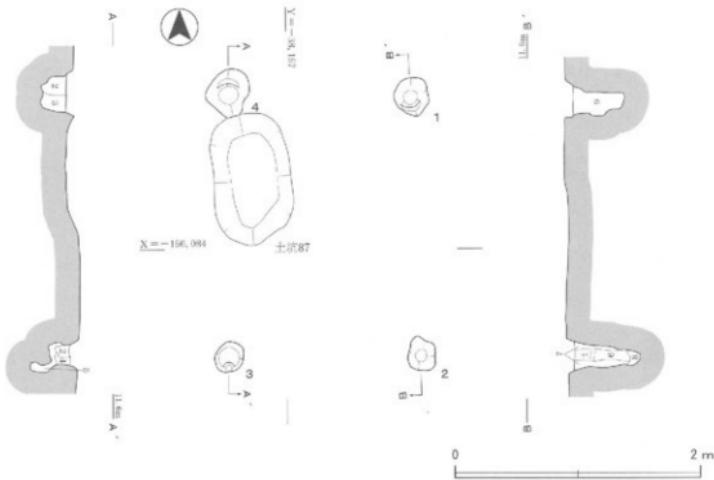
[掘立柱建物26] (図 222)

検出状況 2 A - 8 - 9 h 区に位置する南北棟の掘立柱建物で、柱通りの良い東側桁で代表させると長軸を N13° W に置き、桁行 2 間、梁間 2 間の柱配置を採る。

建物の規模は、桁の西側で 2.95m、東側で 2.75m を測り、梁間の北側が 2.6 m、南側が 2.5 m を測る。柱芯間隔は、桁では柱穴 1 - 2 間で 1.3 m を測るほかは 1.45 m を測り、梁では 1.15 - 1.35 m を測る。

桁行の柱通りがやや悪いため、建物の平面形は不整な長方形を呈する。

各柱穴は検出長で 0.2 ~ 0.3 m とややばらつきが認められるが、0.2 m 前後的小振りな一群と、0.3



1. 沢オリーブ (5Y6/2) シルト～細砂
〔タミオが認められる。下部では沢 (5Y4/1) シルトの薄層が挟む〕
2. 沢 (5Y1/1) シルト。
〔沢 (7, 3Y8/1) シルトと沢黄 (2, BY6/2) シルト～細砂のプロックが入る〕
3. 沢 (5Y6/1) シルト。
4. 沢 (5Y4/1) シルト。
5. オリーブ系 (7, 3Y3/1) シルト
〔沢 (10Y1/1) シルト～細砂の小プロックが入る〕
6. 沢 (5Y4/1) シルト
7. オリーブ系 (7, 3Y4/1) シルト
〔沢 (5Y5/1) シルトの小プロックが入る〕
8. 沢 (5Y4/1) シルト
9. オリーブ系 (5Y3/1) シルト
〔全体中に沢 (7, 3Y6/1) シルトのプロックが入り、上部には沢オリーブ (7, 3Y4/2) シルト～細砂のプロックが入る〕

図223 挖立柱建物27 平・断面図

m前後のやや大振りな一群とに分けることができ、それぞれ不整な円形に掘削されている。それぞれの坑底の深さの標高は柱穴4が11.1mとやや浅く、柱穴5が10.7mと深いのをのぞけば、10.95~11.0mと深さを揃えて掘削されている。柱穴埋土は、灰色ないしは黒褐色のシルトを基調としている。

出土遺物 遺物は柱穴2より土器の絆片が出土したが、詳細な帰属時期は不明である。

(挖立柱建物27) (図 223)

検出状況 2 A - 6 i 区に位置する南北棟の挖立柱建物で、西側桁で代表させると長軸を N 2° W に置き、桁行1間、梁間1間の柱配置を探る。

なお、柱穴4に隣接して土坑87が存在するが、建物との関係は不明である。

建物の規模は、桁の西側が2.2m、東側が2.1m、梁間の北側が1.45m、南側が1.55mを測る。建物の平面形は長方形を呈している。

各柱穴は検出長で0.2~0.4mを測り、平面形は不整な円形である。北側の柱穴1・4は掘形上面がやや乱されており、結果として南側の柱穴よりも若干大振りになっている。坑底の深さの標高は柱穴1が10.8m、柱穴2が10.65m、柱穴3が11.1m、柱穴4が11.0mを測り、東側が深く、西側が浅い傾向が認められ、掘形の形状もそれに応じて近似した形態を示している。

柱穴埋土は、灰色からオリーブ黒色を基調とするシルトで構成されており、柱穴2の柱痕最上部には3層である灰オリーブ色シルト～細砂が堆積していた。

(挖立柱建物28) (図 224)

検出状況 2 A - 6 i 区に位置する南北棟の挖立柱建物で、柱通りの良い西側桁で代表させると長軸

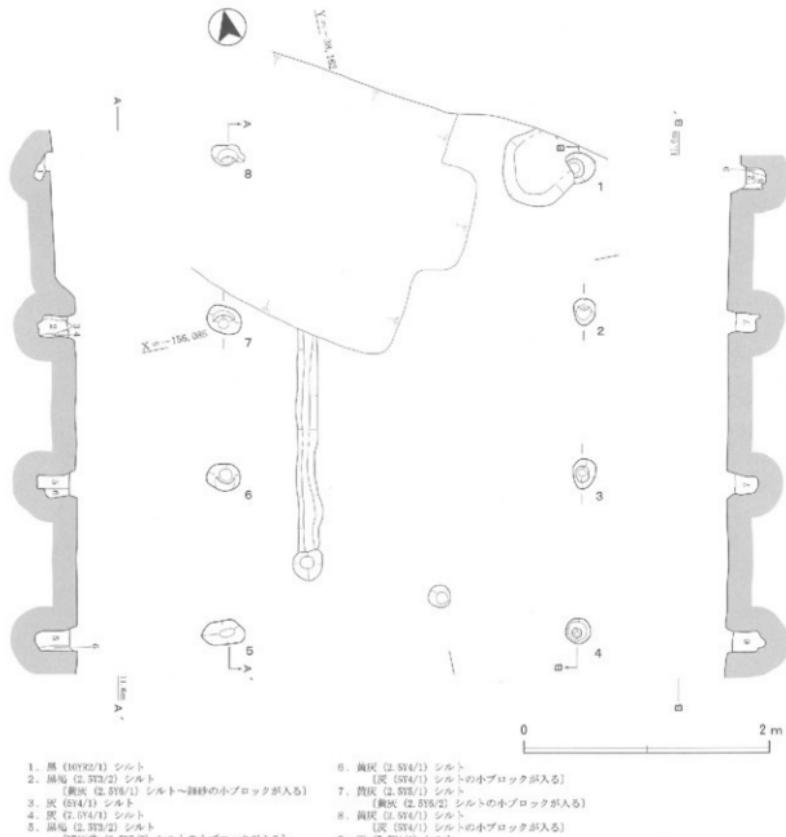


図224 掘立柱建物28 平・断面図

をN12° Eに置き、桁行3間、梁間は1間の柱配置を探る。

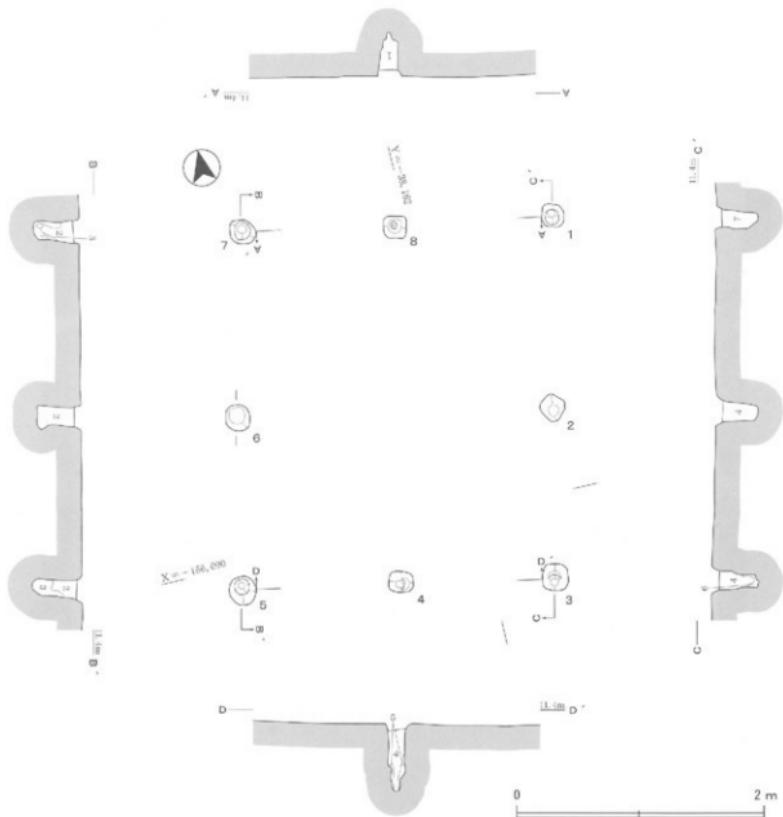
建物の規模は、西側桁行で3.85m、東側で3.8mを測り、梁間の北側が2.8m、南側が2.85mを測る。柱芯間隔は1.15~1.35mとややばらつきが認められる。東側の柱穴2・3がやや外側に膨らんで配置されているため、建物の平面形はやや不整な長方形を呈している。

各柱穴は検出長で0.15~0.35mを測り、東側桁の各柱穴が不整な円形を呈するのに対し、西側桁の各柱穴は、建物の長軸に直交する長楕円形を呈している。坑底の深さの標高は10.9~10.95mを測り、一定している。

柱穴埋土は、黒色ないしは灰色、黄灰色を基調とするシルトである。

(掘立柱建物29) (図225)

検出状況 2 A - 6 i・j 区に位置する南北棟の掘立柱建物で、柱通りの良い東側桁で代表させると



1. 黒褐色 (2. 3V2/1) シルト
〔既次の有機物を少量含む〕
2. 黄褐色 (2. 3V4/1) シルト
〔既次の有機物を少量含む。30mm大の灰鉄錠 (109錠/2) シルト～礫砂のブロックが入る〕
3. 灰 (7. EY4/1) シルト
4. 基岩 (0H3E/1) シルト
〔既次の有機物を少量含む。錫灰 (139錠/1) シルト～礫砂の小ブロックが入る〕
5. 灰 (7. EY6/1) シルト
〔30mm大の黒褐色 (2. 3V3/1) シルトのブロックが入る〕
6. 灰 (7. EY5/1) シルト
7. 黑褐色 (2. 3V2/1) シルト
〔既次の有機物を少量含む。灰 (7. EY4/1) シルト～礫砂のブロックが入る〕

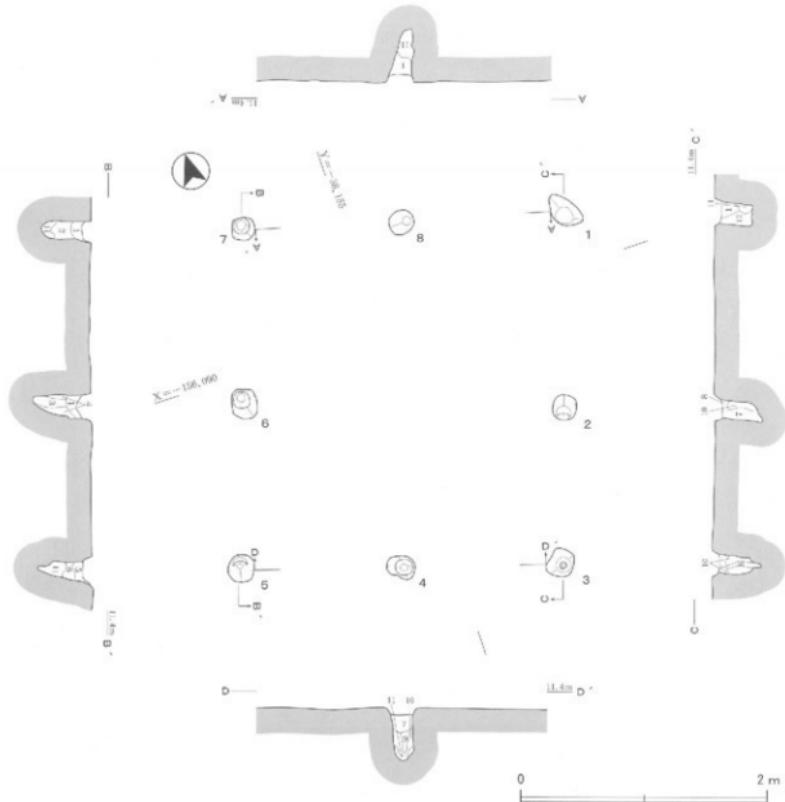
図225 挖立柱建物29 平・断面図

長軸を N12° E に置き、桁行 2 間、梁間は 2 間の柱配置を探る。

建物の規模は、西側桁行で 2.95m、東側で 3.05m を測り、梁間 2.5 m を測る。柱芯間隔は桁側で 1.4 ~ 1.65m、梁側で 1.2 ~ 1.3 m を測る。柱穴 1 ~ 2 間の柱芯間隔がやや広いため、結果として建物の平面形はやや不整な長方形を呈している。

各柱穴は検出長で 0.15 ~ 0.25m を測り、隅円方形を呈する。坑底の深さの標高は柱穴 4 が 10.75 m とやや深いほかは、10.9 ~ 10.95 m を測り、概ね一定している。

柱穴埋土は、黒褐色ないしは黄褐色を基調とするシルトである。



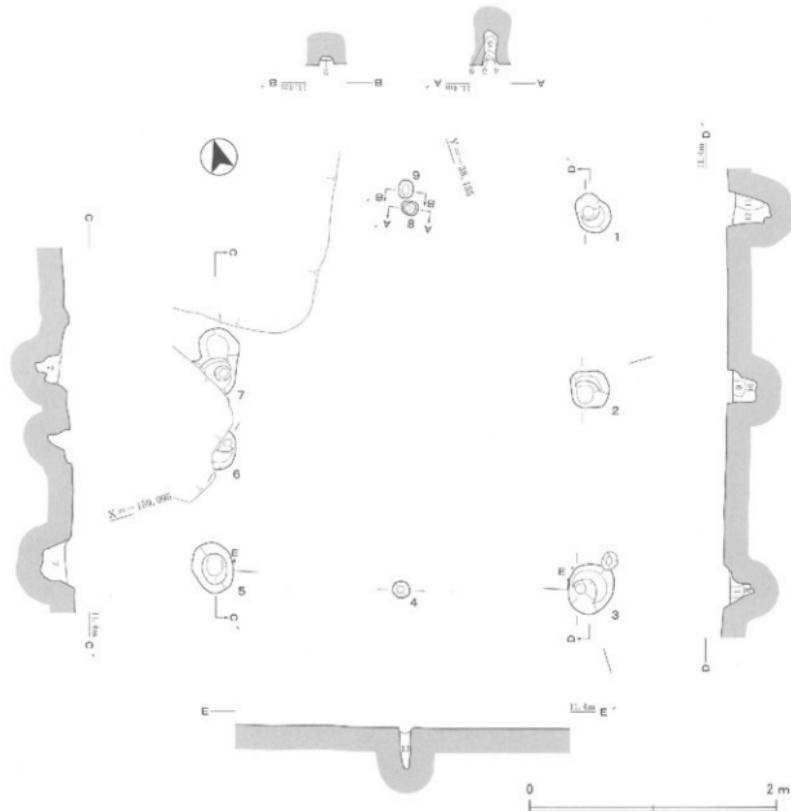
1. 基礎 (10YR3/2) シルト
〔地底の有機物を少含む。20mm大的灰質層 (10YR5/2) シルト～細砂のブロックが入る〕
2. 灰 (7.5Y4/1) シルト
3. 灰 (7.5Y4/1) シルト
〔地底の有機物を少含む。基礎 (2.5Y3/2) シルトのブロックが入る〕
4. 1と3のブロックの合上
5. 黒泥 (2.5Y3/1) シルト
6. 黑泥 (2.5Y3/1) シルト
〔細砂を多く含む。植物遺体を少量含む〕
7. 黑泥 (10YR0/2) シルト
〔地底の有機物を少含む。灰質層 (10YR5/2) シルト～細砂の小ブロックが入る〕
8. 黑泥 (10YR3/2) シルト
〔地底の有機物を少含む〕
9. 灰 (7.5Y4/1) シルト
10. 灰 (7.5Y4/1) シルト
〔地底の有機物を少含む。シルトのブロックが入る〕
11. 基礎 (2.5Y3/1) シルト
12. 黑泥 (2.5Y3/1) シルト
〔20mm大的灰 (7.5Y4/1) シルトのブロックが入る〕
13. 黑泥 (2.5Y3/1) シルト
〔20mm大的灰質層 (10YR5/2) シルト～細砂のブロックが入る〕

図226 挖立柱建物30 平・断面図

〔掘立柱建物30〕 (図 226)

検出状況 2 A - 6 i - j 区に位置する南北棟の掘立柱建物で、東側桁で代表させると長軸を N18° E に置き、桁行 2 間、梁間 2 間の柱配置を探る。

建物の規模は、西側桁で 2.8 m、東側で 2.9 m を測り、梁で 2.6 m を測る。柱芯間隔は西側桁で 1.4 m、東側で 1.25~1.65 m を測り、梁間で 1.25~1.35 m を測る。柱穴 1・2 間の柱芯間隔がやや広く、結果として建物の平面形は不整な長方形を呈している。各柱穴は検出長で 0.2~0.25 m を測り、歪な形状



1. 灰オリーブ (366/2) シルト～細砂
〔有機堆積物 (3層)〕
2. 黒褐色 (1092/2) シルト
〔粘土質の有機物を少含む〕
3. 黑褐色 (2. 373/2) シルト
4. 黒褐色 (2. 374/2) シルト
5. 黑褐色 (2. 375/1) シルト
6. 灰 (2. 374/1) シルト
7. 灰 (1092/1) シルト
〔植物遺物を少量含む、全体的に黄灰 (2. 374/1) シルトの小ブロックが入る〕
8. 灰 (2. 374/1) シルト
9. 黄灰 (1072/1) シルト
〔透視図で最も大きな灰 (2. 374/1) シルトのブロックが入る〕
10. 黑 (1072/1) シルト
〔透視図の有機物を少含む〕
11. 灰 (7. 574/1) シルト
〔透視図の有機物を少含む〕
12. 灰 (1072/1) シルト
〔透視図の有機物を少含む〕
13. 黄灰 (1072/1) シルト
〔細砂を多く含む、植物遺体を少含む〕
9. 下部では黒 (1092/1) シルトのブロックが入る〕

図227 振立柱建物31 平・断面図

を示す柱穴1以外は隅円方形を呈する。坑底の標高は柱穴1が10.95 mとやや浅いほかは、10.8~10.85 mを測り、概ね一定している。柱穴埋土は、黒褐色ないしは黄灰色を基調とするシルトである。
〔振立柱建物31〕 (図227)

検出状況 2 A - 6 j 区に位置する南北棟の振立柱建物で、西北隅の柱穴を擾乱によって欠いている。東側行で代表させると長軸をN18° Eに置き、桁行2間、梁間2間の柱配置に復元できる。

なお、調査時には図示しているように柱穴5の北側に柱穴6を検出したため、東西方向で柱穴配置を

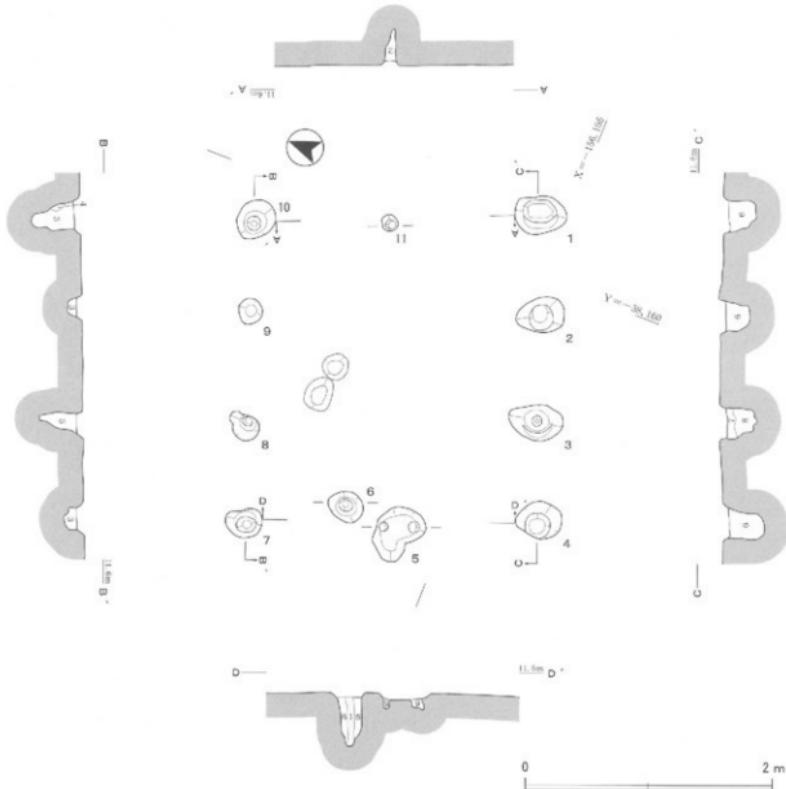
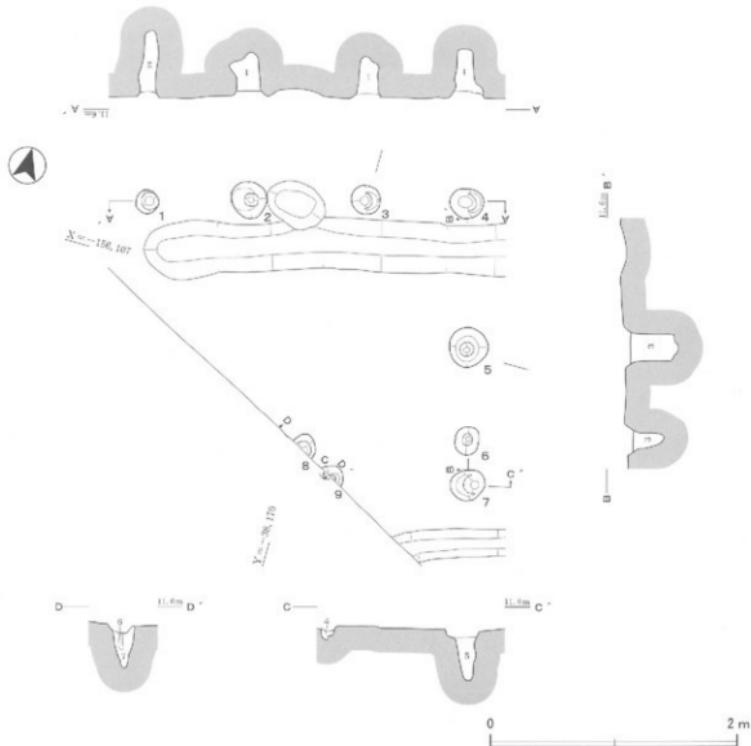


図228 据立柱建物32 平・断面図

達する建物の可能性も考えていたが、柱穴の位置関係や規模等を検討した結果、建物を構成するものではないと考えるに至った。また同様に、柱穴8の北側に隣接する柱穴9についても、建物を構成する柱穴ではないと考えた。

建物の規模は、東側桁で3.1m、南側梁で3.0mを測る。柱芯間隔は桁側で1.5~1.6m、梁側で1.45~1.55mを測る。上述したように西北隅の柱穴を搅乱によって欠くため、詳細は不明であるが、建物の平面形はやや南北方向に長い長方形と考えることができる。

柱穴の規模は柱穴4・8とそれ以外の柱穴で大きく異なっており、柱穴4・8で0.1~0.15m、それ



1. 濃灰 (1014/1) シルト
〔柱底埋土を少含む。径30cm大的柱底灰 (2.015/2) シルトへ細砂のブロックが入る〕
2. 黒褐色 (2.016/1) シルト
〔柱底を多く含む。植生遺体を少量含む。灰 (7.014/1) シルトへ細砂の小ブロックが入る〕
3. 硫灰質 (2.014/2) シルト
〔柱底埋土を少含む。径30cm大的柱底灰 (10106/1) シルトへサ形のブロックが入る。〕
4. にぶい灰 (2.016/3) シルト
〔柱底埋土の灰 (2.016/3) シルトへ細砂のブロックが入る〕
5. 硫灰 (2.014/3) シルト
〔植生遺体を少含む。灰 (10106/1) シルトへサ形の小ブロックが入る〕
6. 黒褐色 (2.014/2) シルト
〔黄褐色 (2.013/3) シルトへ中筋のブロックが入る〕
7. 黑褐色 (2.013/1) シルト
〔細砂を多く含む〕

図229 掘立柱建物33 平・断面図

以外で0.25~0.4mを測る。坑底の標高は10.85~11.0mとややばらつきが認められるが、それぞれに対する柱穴で近似する掘削深度を示している。掘削断面の形状は、柱穴4・8が杭痕跡のみのような鋭角的な形状を示すのに対し、それ以外の柱穴は、やや鋭角的なすり鉢状、あるいは逆台形を示している。

柱穴埋土は、黒褐色ないしは灰色シルトで、柱穴3の柱痕には灰オリーブ色の3層が流入している。

〔掘立柱建物32〕（図228）

検出状況 2 A - 6・7 a 区に位置する東西棟の掘立柱建物で、西側桁で代表させると長軸をN69°Eに置き、桁行3間、梁間2間の柱配置を探る。

なお、西側梁の中央に位置する柱穴は、柱穴5と6の二者が認められた。平面的な位置関係および掘削断面の形状を考えると柱穴5の方が相応しいが、柱穴6は明瞭な柱痕跡が認められたことと、規模が

大きいことから柱穴 6 を建物構成柱穴として考えるに至った。

建物の規模は、北側桁で2.45m、南側で2.6 mを測り、東側梁で2.3 m、西側で2.35mを測る。柱芯間隔は北側桁で0.75~0.9 m、南側で0.85~0.9 mを測り、東側梁で1.1~1.2 m、西側梁で0.8~1.55mを測る。桁側の柱通りは良いが、梁側の柱穴 6・11 が建物内側に大きく入り込むように配置されることから結果として建物の平面形はやや不整な長方形を呈している。

各柱穴は明らかに規模の異なる柱穴11を除くと検出長で0.2~0.45mを測る。南側梁の各柱穴は南北方向に長い長楕円形を示すが、そのほかは不整な円形を示している。坑底の標高は柱穴 7・9 が11.3mと突出して浅いが、そのほかの柱穴は、11.0~11.2mと概ね掘削深度を揃えている。

柱穴埋土は、黒褐色ないしは黄灰色のシルトで、柱穴 6 の柱頭には灰オリーブ色の3層が流入する。

〔掘立柱建物33〕（図229）

検出状況 2 A - 7・8 a 区に位置する東西棟の掘立柱建物で、南西隅がT区外に及んでしまったため、建物の全容は把握し得なかった。ただし、柱穴 1 および柱穴 7 の延長には対応する柱穴が認められなかったこともあり、これらを隅柱と認定すると、長軸をN75° E に置き、桁行2間および3間、梁間2間の柱配置を探る建物に復元できる。

また、南側桁の柱穴については、柱穴 8 と 9 の二者を検出した。それぞれ半分が工区外に及んだため、詳細は明らかでないが、規模から想定すると柱穴 8 を建物構成柱穴と認めるべきと判断するに至った。その場合、柱穴 6 が南東隅の隅柱に相当する可能性も出てくるが、規模および平面的な配置から柱穴 7 を建物構成柱穴として考えておく。

建物の規模は、桁で2.55m、梁で2.3 mを測る。柱芯間隔は西側桁で0.8~0.95m、東側梁で1.1~1.25mを測る。北側桁および東側梁の柱通りは良いが、柱穴 8 が内側に入り込むため、建物の平面形は不整な長方形を呈している。

各柱穴は検出長で0.2~0.3 mを測り、円形を呈する。坑底の標高は柱穴 1 が10.95 mとやや深いほかは、11.0~11.15 mを測り、概ね一定している。

柱穴埋土は、黒褐色ないしは黄灰色を基調とするシルトである。

〔井戸12〕（図230）

検出状況 居住域の南西端に位置する 2 A - 8 e 区で検出した素掘りの井戸である。検出し得た遺構面は 4 a 層を完全に除去した第 3 b 面であったが、地中梁内に位置しているため、専属遺構面が異なっていた可能性もある。

掘り方の平面形は北西~南東方向に長い楕円形を示し、長径1.8 m、短径1.2 m、検出面から底面までの深さは1.8 mをそれぞれ測る。掘り方の断面形状はU字形を呈している。側壁は崩落により、部分的にオーバーハングしている。

埋土は大きく上・中・下の3つに分けられ、層厚0.4 m前後で、側壁崩落によるブロック土で構成される下層（7）、層厚0.3 m前後で放棄後の流入土で構成されると考えられる中層（4~6）、層厚1.1 m前後で土器を多く含み、人為によるブロック土で構成されると考えられる上層（1~3）に分けられる。

なお、井戸内を充填する堆積物で注意すべき点として、第3面で検出したその他の井戸とは異なり、氾濫堆積物である3層を含んでいない点が挙げられる。

出土遺物 井戸内から土器が出土した。前述したように大半は上層からの出土で、かつ完形に近い形

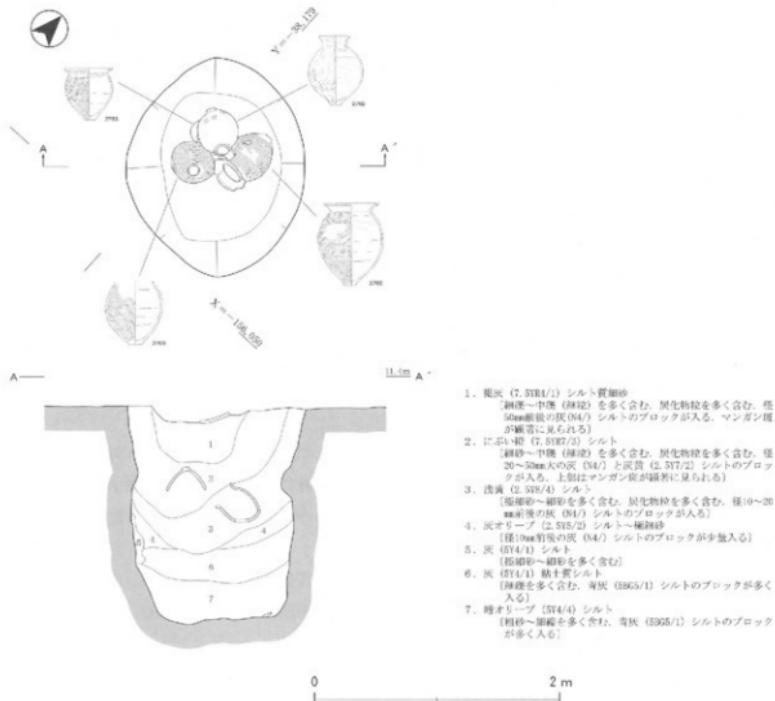


図230 井戸12 平・断面図

状を保つものが多いのが特徴であり、埋め戻しに際して投棄したかのような様相を呈していた。

出土した土器は図示したように多くが甕であり、短頸甕が1点認められた。甕の分割成形が顕著に認められることや頸部の繊りが悪くなっていることなど、比較的新相を示す要素が強い点は注目に値する。

一方、短頸甕は、球形化が著しい体部や縮小した底部など、新相を示す要素も多分に含んではいるものの、形式としては、V-3様式前後に出現して以後消長を遂げる一群に比定されている。

以上のことに加えて、本井戸の帰属時期としては、第3面の各遺構がV-2~3様式に帰属することから、集落廃絶後、3層の堆積が始まるまでの短い期間に廃絶が行われたものか、あるいは3層の堆積が一定収まつたころに掘削、埋め戻しという一連の行動が行われたかのいずれかと考えることができる。

[溝64] (図231)

検出状況 東側居住域の中央部西側、流路3に隣接し、2B-5b~2A-4h区にかけて検出した。第3面で全容を把握し得た可能性もあるが、中層(2)が4層とほぼ同化することを確認しており、第3面帰属遺構とは分けて考える必要がある。

溝の規模は、幅0.05~0.15m、長さ約37m、深さ約0.1mを測り、北側は次第に細くなって、第3面検出遺構である谷2に接続している。溝の埋土は3層に大別でき、下層(3)灰色シルト、中層(2)

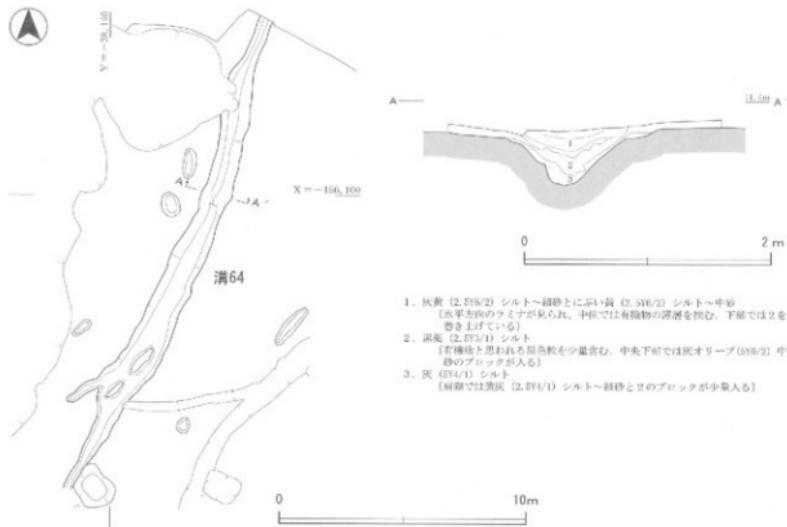


図231 溝64 平・断面図

黒褐色シルト、上層（1）灰黄色のシルト～中砂である。放棄流路として、一定期間存在した後、3層によって完全に埋没した過程を復元できる。

〔土坑84〕（図232）

検出状況 2 A - 7 e 区で検出した短軸 0.7 m、長軸1.25mを測る長楕円形の土坑である。坑底は凹凸が激しく、すり鉢状を呈する。土坑埋土は、凹凸を埋める灰色シルトの下層と土坑全体を充填する黒褐色シルトの上層の2層に大別される。遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

〔土坑85〕（図232）

検出状況 2 A - 9 g 区で検出した長楕円形の土坑で、西側半分を攪乱によって欠く。長径 2.0 m を測り、検出面からの深度は 0.3 m を測る。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

〔土坑86〕（図232）

検出状況 2 A - 9 g 区で検出した長楕円形の土坑である。検出面からの深度は 0.15m を測る。少量の炭化物と細片化した土器が多数出土した。土坑の性格は不明である。

図示可能な遺物は 2 点があり、いずれも細片であるため、詳細な時期は不明である。

〔土坑88〕（図232）

検出状況 2 A - 9 g 区で検出した長楕円形の土坑である。長径 1.35m、短径 0.65m を測り、検出面からの深度は 0.2 m を測る。

土坑の下部には、焼土が認められたほか、細片化した土器が多数出土した。土坑の性格は不明である。

図示可能な遺物は 1 点がある。細片であるため、詳細な時期は不明である。

(正岡)

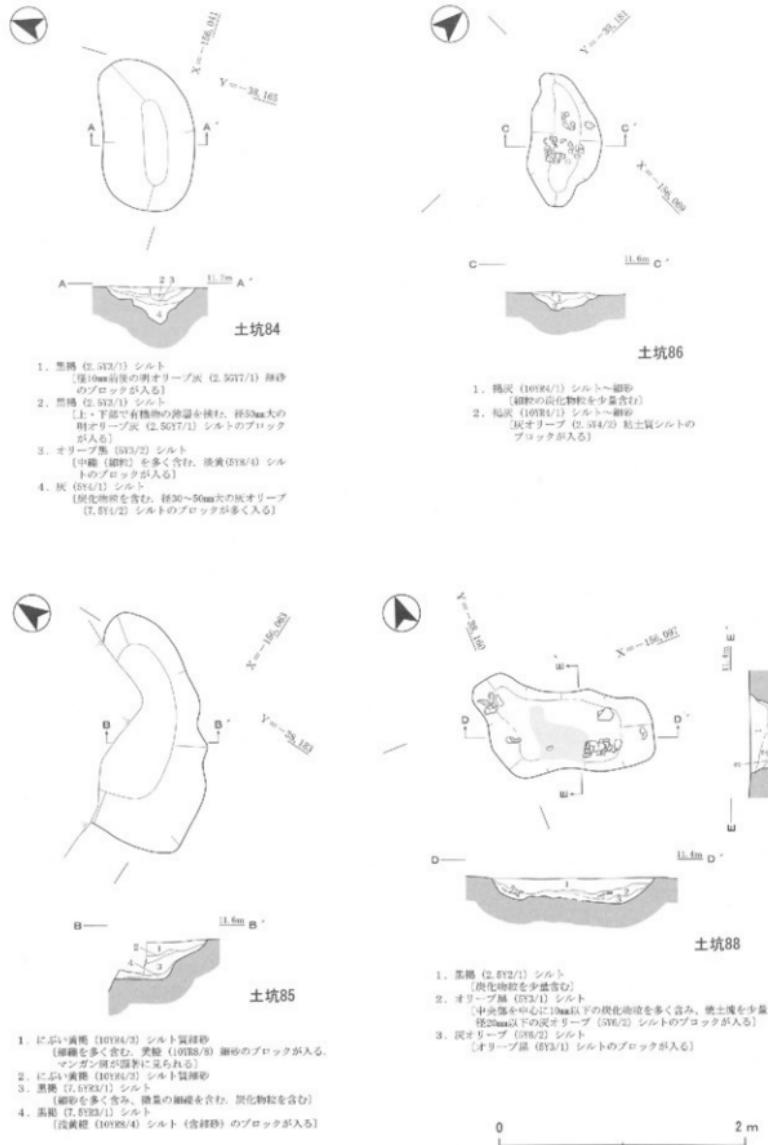


図232 土坑84~86・88 平・断面図

第6節 第4面

1. 遺構面の概要

4 a層の母材である4 b層を除去して検出された遺構面である。4 b層は粘土質シルトから極細砂であり、部分的に最下部に中砂から粗砂を含む。

旧地表面の遺存状態は良好であった。微高地では本面を構成する5 a層の母材である5 b層が極細砂から細砂を含むやや粗粒のものであるため、やや暗色味を帯びた明黄褐色の極細砂から細砂を含むシルトであった。一方、水田面に代表される低地部では、5 b層が暗褐色のシルトであった。

第4面で検出した遺構には、小区画水田・溝・土坑があり、中でも小区画水田は、後述するように帰属時期・規模とともに類例が希少であり、極めて良好な資料となり得る。

次に本遺構面の微地形について述べておきたい。基本的には、下位の遺構面である第5面の地形を踏襲しており、全体のおおまかな地形は、南西・南東隅に最高位点をもち、02-2工区の中央部北側に最も低い地点を有する、緩やかな谷状地形を示している。南端部中央から南東部にかけての微高地は、後述する第6面で検出された縄文時代後期から晩期にかけての東西方向の流路によって形成されている。

一方、工区西半の北側では等高線の乱れが顕著である。基本的には南西→北東方向に緩やかに傾斜する緩傾斜面を示すが、2 A-10 g・h地区周辺では緩やかな谷状地形を示しており、地形の乱れが一層顕著なものとなっている。この谷状地形は、後述する第5面で検出された谷状地形を踏襲している。

なお、調査範囲内で最も標高が低い地点は第3面検出の流路3に沿っている。後の削平の影響を受けた可能性もあるが、残存していた水田面も同様に緩やかな傾斜を有することから、本来の地形として中央部へ向かって低く傾斜する地形が想定できる。等高線に表現できる最高点は、南西隅の11.55 mであり、最も低い箇所は02-2工区中央部の10.95 mである。東半の微高地縁辺と水田面の比高差は0.1~0.2 mである。

本遺構面の帰属時期は、後述するように前後の地層の年代観と部分的に認められた出土遺物から、概ね弥生時代前期末葉から中期初頭に求めることができる。

2. 遺構

〔小区画水田〕（図233・図版107~110-1）

検出状況 03-1工区2調査区を除く各工区で広範囲に展開する水田畦畔を検出した。畦畔はいずれも高さ0.05m前後の極めて低いものであり、幅も0.3~0.45m程度と細い。畦畔を含む水田面を覆っていた4 b層そのものはシルトであり、かつ部分的に色調が混濁していた。加えて02-2工区の西側では、削平の影響により、南側からの畦畔の延長は確認し得なかった。

水利は、南東部に存在する地形の高まりと、水田面を囲む畦畔沿いに設けられた溝70や03-1工区西端から02-2工区西端にかけて南北方向に延びる溝69によって導水されていたとみられ、溝69は両側に高まりを有し、その高まりは水田畦畔と連結している。

畦畔は前項において述べた微地形に即した形で整然と展開する。溝69を境にして東西で傾斜が変わることに呼応して水田畦畔の向きも異なっており、西側は幹線となる畦畔を東西方向に配し、その間を南北方向の支線畦畔で区切っている。一方東側は、幹線となる畦畔を南北方向に配し、その間を微地形に合わせて支線となる畦畔で区切っている。

また、微地形に乱れが認められる地点では、水田畦畔は認められず、当該期の水田造成が地形に左右されていたことを窺わせる。その一方で、溝69に認められるように、微地形を無視した直線的な水路の掘削、垣籠形の整然と並ぶ水田区画など、水田造成にあたっては最低限の労力で有効に土地利用を行っていた状況が認められた。それぞれの排水は、溝69東側では東西の傾斜が下がった先に排水溝あったことが想定できるものの、第3面において検出した流路3の存在によって現在は不明となっている。

また、南東隅の微高地では、水田畦畔の痕跡が部分的に認められた（図233網フセ部分）。これは、周辺の旧地表面がやや褐色味を帯びた色調を示していた中で、暗色味を帯びた線状の痕跡が認められたことによって認識し得たものである。畦畔そのものは認められなかつたが、これらの痕跡は北側に展開する畦畔と近似した平面形状を示すことから、ほぼ同時期の水田畦畔が微高地であるために削平を受けたものと考えられる。工区東半で検出した水田は、地形の傾斜に沿って2~3mごとに幹線畦畔を配し、それを支線畦畔で区切る短冊形の小区画を作り出していた。微高地縁辺の直下には平行して畦畔を巡らしており、その間を水路として利用していたものと考えられる。

地形によるためか、調査地東側では一筆当たりの占有面積は8~22m²と細かく割り振られており、中央部では最大120m²と大きい。また、溝69の西側では6~8m²と細かく割り振られている。

出土遺物 ほぼ全域が生産域に該当することを反映してか、出土遺物は極めて少ない。土器は、からうじて古土壤上面に貼り付くようにして出土した小破片が認められるのみで、部位も壺ないしは壺の底部片であるため、詳細な帰属時期は不明である。

ただし、出土した土器は、胎土の様相などから弥生時代前中期から中期初頭に帰属する可能性がある。また、上部に位置する4層が弥生時代後期に形成される地層である一方で、下位層準の6a層は縄文時代晩期に形成されたと見られる土壌化層である。さらに、検出した水田畦畔の区画と同様の水田造成方法は、東大阪市池島・福万寺遺跡〔大文セ2002〕、京都市左京区京都大学構内遺跡〔京都大学埋蔵文化財センター1995・2000〕などで検出されている弥生時代前期～中期初頭の水田区画と類似している。

これらのことから、本遺構面の帰属時期は弥生時代前期～中期初頭であると推定できる。また、2B-3b区では、第4面直上より石庖丁（2861）が出土した（図版110-2）。 (正岡)

第7節 第4b～6面

1. 基本層序と遺構面の認識

初年度の調査である02-1工区では、発達が顕著な2枚の古土壤の存在を基準として、第4面以下の各遺構面について調査を実施している。本節ではこれらの層序と遺構面の概要について記述を行う。

6層 古土壤である6a層とその母材となった6b層に区分され、5b層を除去して検出される6a層の上面を第5面、6b層の上面を第5b面として調査を実施した。各面で検出した遺物の時期や上下の地層の年代から縄文時代晩期から弥生時代前期に形成された地層と想定できる。

6a層は有機物に富んだ灰もしくはオリーブ灰色の粘土質シルト～シルトで、有機物を多く含み、微量の炭化物を含んでいる。6b層は地点によって堆積が厚く、色調・炭化物の多寡によって3層に細分されるシルトである。

7層 古土壤である7a層とその母材となった7b層に区分され、6b層を除去して検出される7a層の上面を第6面として調査を実施した。検出した遺物の時期や上下の地層の年代から縄文時代後期か



図233 第4面 全体図

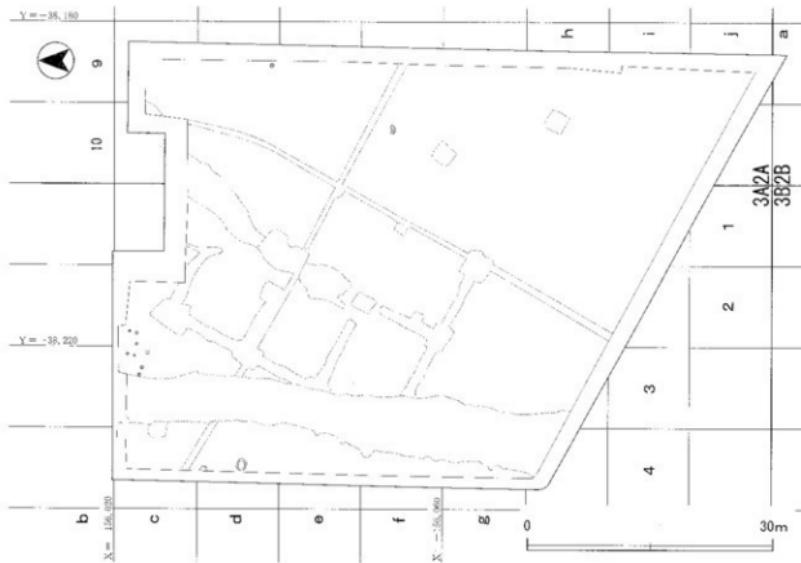


図234 第4 b面 全体図

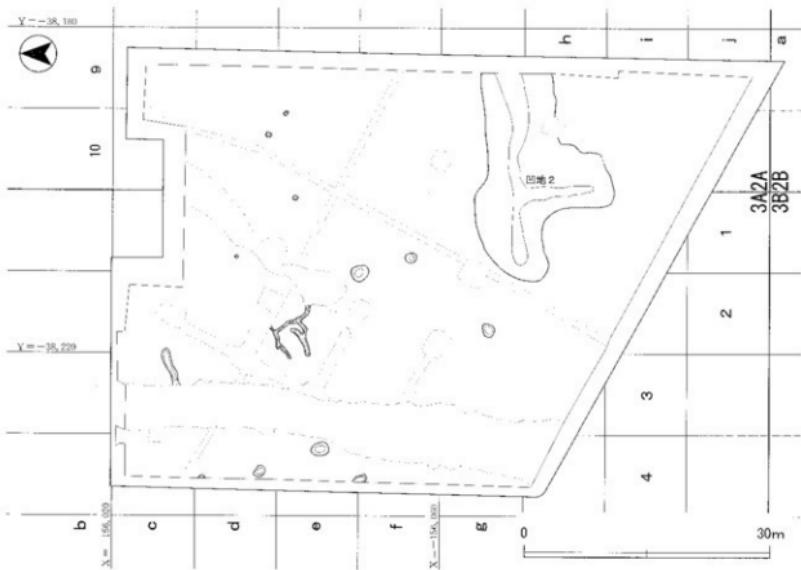


図235 第5面 全体図

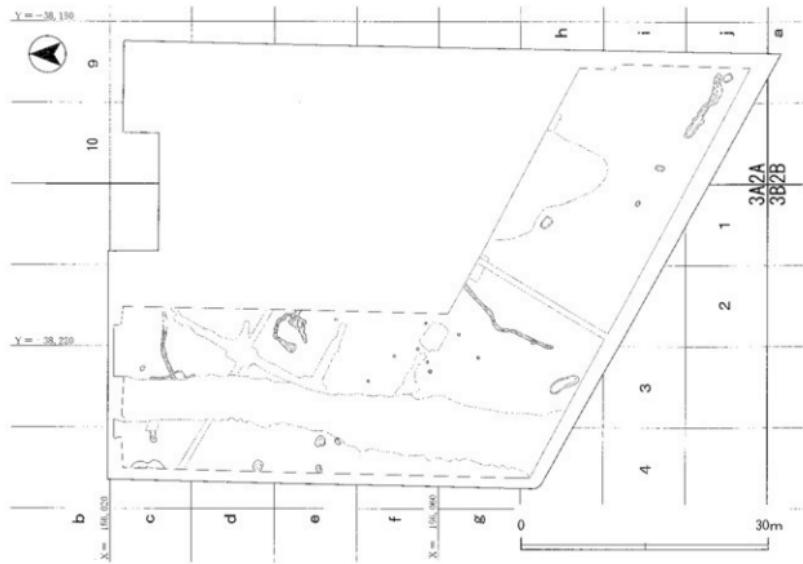


図236 第5 b面 全体図

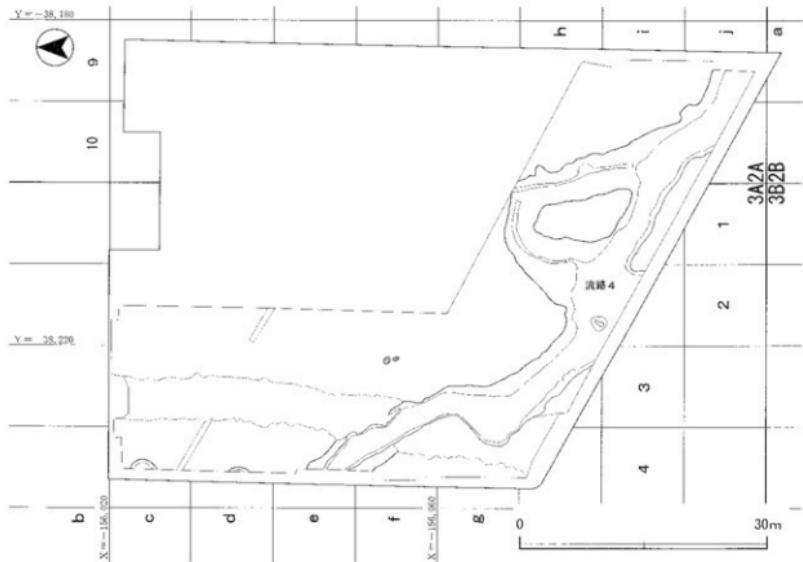


図237 第6面 全体図

ら晩期後半にかけて形成された地層と想定できる。

7 a 層は灰から暗オリーブ灰色の粘土質シルトからシルトで、微量の炭化物を含む。上面には乾痕が顕著に認められる。7 b 層は地點によって堆積が厚く、色調・炭化物の多寡によって細分される。

2. 遺構面の概要

〔第4 b面〕(図234) 第4面を構成する古土壤である5 a 層の粘質シルトから極細砂を除去し、ベース面で遺構の有無を確認した。大部分が水田域であったことを反映してか、遺構密度は希薄である。わずかに工区の北西隅において少數のピットを確認したが、性格は不明である。

〔第5面〕(図235) 6 a 層とした灰色を呈する古土壤の上面である。緑灰ないし青灰色シルトである5 b 層を除去した段階で検出した。本遺構面の微地形は第4面と同様、南西-北東方向に傾斜しており、工区南東・南西隅の標高が約11.2m、北西隅が11.0m、北東隅が10.85mをそれぞれ測る。検出した遺構には、土坑・溝のほか、後述する第6面の流路が縮小した谷地形状の凹地2がある。いずれも埋土は本面を覆う5 b 層である。土坑は、長径2.1m、短径1.5m前後のやや大振りなものと直径0.4m前後のやや小振りなもの2者がある。

本遺構面の各遺構からは遺物が出土しておらず、旧地表面上でも認められなかった。6 層中から出土した遺物には小片が多く、明確には時期を比定し難い。ただし、これらの遺物の中には、縄文時代晩期末の長原式に比定しうる二条突堤の漆鉢が認められている。このことから、本遺構面の帰属時期は縄文時代晩期末から弥生時代前期に求めることができよう。

〔第5 b面〕(図236) 上述した第5面の下面である6 a 層下面のベース面である。本遺構面より下位の遺構面については、大阪府教育委員会の指示により、豊穴建物が存在する東よりの一角を保存区域として残すため、図示したとおり南・西側の一部に関してのみ調査を行った。

検出遺構には土坑・溝・ピットがあり、門地2の周囲で2条の溝を検出したほか、数基のピットを新たに確認した。いずれもはっきりしたものではなく、6 a 層が中を充填していた。

〔第6面〕(図237) 7 層とした灰色を呈する古土壤の上面である。緑灰ないしは青灰色シルトの6 b 層を除去して検出した。本面の微地形は上述したように工区が限定されるため、詳細は不明だが、調査範囲の標高が10.7~10.9mを測ることから、緩やかに傾斜する土地が広がっていたと想定できる。

本面で検出し得た遺構には、南東隅から西側に走る流路4がある。この流路は幅3.5~6.0mを測る大規模なもので、前節において述べたように本遺構面よりも上位の遺構面へ大きな影響を及ぼしている。

7 層中から出土した遺物は、図化に耐えない小片のみであったものの、縄文時代後期から晩期に相当する可能性があり、本面も同時期の一時期に形成された地表面であると考えられる。

(正岡)

第8節 下層確認調査

1. 下層確認調査の概要

本遺跡は長原遺跡と並び、旧石器時代の遺物包含層が存在する遺跡として注目を集めてきた。八尾南遺跡では、発掘調査の嚆矢となった駅舎周辺に集中しており、その南限は今回の工区の500m程北側に位置する1987年の大阪府教育委員会調査の「旧石器出土第3地点」であった。

そこで、初年度の調査(02-1工区)では、前節までに述べた各遺構面のほかに、旧石器時代の遺物

包含層の本工区における有無を確認すべく、東西33.5m、南北1.5m（西端3mは南北3m）のトレチを設け、下位の層準について調査を行った。また、02-2工区では、検出遺構のうち当該層準が露出した箇所について、これを利用して断面図を作成し、遺物の有無について調査を実施した。なお、調査方法については、トレチと直交する幅0.5mのサブトレチを4箇所に設け、断面観察によって地層の堆積状況を把握したうえで地層単位に掘削していく方法を探った。縄文時代の堆積層と考えられた8a～9b層の掘削はこれまでと同様、スコップを用い、旧石器時代相当層と予測された10層以下の掘削は捻り鎌（手ガリ）、鎌刀を用いて慎重に掘削を進めた。8a層～10層にかけて遺物は認められなかつた。なお、掘削深度の下限については、旧石器時代の遺構・遺物の存在を確認することにあつたため、AT火山灰と考えられる火山灰をブロック状に含む11層の存在を目安に掘削・精査を行っている。

2. 基本層序と遺物（図238）

8層 古土壤である8a層とその母材である8b層に区分され、7b層を除去して検出される8a層の上面を第7面として調査を実施した。上下の地層の年代から縄文時代に形成された地層と想定できる。

8a層は黒ないしは灰色のシルトで、腐食した有機物と炭化物を多く含む。なお、谷状地形の肩際では、複数に細分でき後述する谷状地形が徐々に埋積していく様子が見て取れる。8b層は地点によって堆積が厚く、色調・炭化物の多寡によって細分される。

第7面は標高10.65mを測り、トレチ東側に位置する谷状地形では、標高9.5mになども底が検出できなかった。この谷状地形は10層以下の旧石器時代相当層においても確認できたことから、旧石器時代に存在した開析谷が縄文時代を通じて徐々に埋積されたものであることが明らかとなった。

9層 古土壤である9a層とその母材である9b層に区分され、8b層を除去して検出される9a層の上面を第8面として調査を実施した。上下の地層の年代から縄文時代に形成された地層と想定できる。

9a層は暗オリーブ灰ないしはオリーブ灰色のシルトで、西側では粗粒の堆積物を層中に含み、東へ向かうにしたがって、細粒となる傾向が認められた。9b層は緑灰色のシルトである。

第8面は標高10.6mを測り、西から東の谷状地形へ向かって緩やかに傾斜していた。

10層 10層は灰～明緑灰色のシルト質極細砂で、極めて緻まりが良い。乾痕が顕著に認められた。

11層 11層は層厚0.2～0.25mを測る明緑灰色の粘土で、極めて緻まりが良い。上面には乾痕が顕著に認められ、上半は濃緑色を呈していた。長期にわたって安定した地表面であったことが窺われる。

12層 12層は灰白～明青灰色の砂質シルトで上方細粒化している。極めて緻まりが良い。

上述した11層掘削中に表面が風化したサヌカイト剥片を02-1工区で3点、02-2工区で4点検出したため、02-1工区では、周辺を精査し徐々に掘削を進めた。部分的には12層中から出土したものもあるが、12層には乾痕が顕著に認められたことや12層中出土石器に付着した土が11層であったことから、本来的には11層に帰属する可能性が高い。

石器の垂直的な分布は02-1工区では標高9.9～10.05m、02-2工区では9.75～10.05mを測る。

石器の接合関係は認められなかつたが、出土した剥片のうち、1点は石核であった。全部で7点出土した石器のうち、圓化に耐えうる剥片は4点認められた。

このように、包含層ではあるが、旧石器時代の遺物が確認された。遺物量が希薄であったため、全面的な調査は実施しなかつたが、旧石器時代の遺物包含層が遺跡の南限である大和川堤防沿いの本工区まで延びていたことを確認し得たという点は、大きな成果と言えよう。

（正岡）

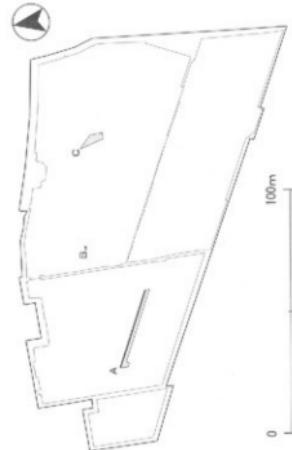


図238 下層確認調査 基本層序模式図

下層確認調查 A 地自 橫面注記

| 番号 | 色 | 周 | 粒 | 度 | 特
徴 |
|----|---------|----------------|----------------|---|-------------------------------------|
| 1 | 灰 | 10Y4/1~15Y | 稍土質シルト | | 有機物多く含み、帶状の化粧物を含む。気性低い(6層) |
| 2 | 灰オーブン灰 | 5Gv5/1 | シルト(粗粒) | | 少量の炭化物を含む。粘性土あり(5~6層) |
| 3 | 褐灰 | 7Gv5/1 | シルト(粗粒) | | 少量の褐色~褐色砂粒、粘性若者あり(6~7層) |
| 4 | 灰 | 7Sv5/1 | シルト | | 炭化物多く含む。粘性土なし(6~7層) |
| 5 | 灰~褐赤マリア | 10Y4/4~25Gv4/1 | シルト(粗粒) | | 炭化物多く含む。粘性土あり(7層) |
| 6 | 灰 | 10Y5/1 | 粘土質シルト | | 少量の炭化物を含む。粘性土あり(7層) |
| 7 | オリゾン灰 | 5Gv5/1 | 粘土質シルト | | 炭化物多く含む。粘性土を含む(7層) |
| 8 | 灰試 | 7Gv5/1 | 薄質シルト | | 腐葉物多く含む。半分解を呈する(7層) |
| 9 | オリゾン灰 | 25Gv5/1 | シルト(粗粒細砂) | | 腐葉物多く含む。半分解を呈する(7~8層) |
| 10 | 灰灰 | 7Sv5/1 | 薄質シルト~薄泥 | | 実半分以上に堆積する(7~8層) |
| 11 | 明灰~深灰 | 7Sv5/7~7/6~1 | 薄質シルト | | 未~向うに向て堆積が見える。粘性土(7~8層) |
| 12 | 緑灰 | 10Gv6/1 | 薄質シルト | | 9~10と比較してシルト質過く。粘性土もあり(7~8層) |
| 13 | 褐灰 | 10Gv5/1 | シルト | | 少量の褐色土。粘性土を含む。粘性比較的強い(7~8層) |
| 14 | 灰 | SV4/1 | シルト | | 砂~粘土混じる多く含む。無機物多く含む。粘性高い(7~8層) |
| 15 | オリゾン灰 | 25Gv5/1 | 中砂~粗砂の中細砂(5mm) | | 初期~中期は中砂~粗砂を示す(7~8層) |
| 16 | 灰灰~灰 | 23Gv8/1~1~N6 | 細砂~中砂 | | 延び土を生じし、間に中砂~粗砂を挟む(7~8層) |
| 17 | 灰 | 2Y4/1 | シルト | | 少量の細砂~中砂を含み、無機物を含む。粘性比較的強い(8層) |
| 18 | 灰 | SV4/1 | 粘土質シルト | | 粘性土を含む(8層) |
| 19 | 灰褐色 | 23Y3/1 | シルト(粗粒) | | 少量の褐色~褐色砂粒を含む。無機物含む。粘性比較的強い(8層) |
| 20 | 灰 | 7S3/1 | シルト(粗粒) | | 無機物多く含む。無機物多く含む。粘性低い(8層) |
| 21 | 黑 | 5Y2/1 | シルト | | 無機物多く含む。無機物多く含む。粘性弱い(8層) |
| 22 | 灰灰 | 5Y4/1 | シルト(粗粒) | | 無機物多く含む。無機物多く含む(8層) |
| 23 | 灰灰 | 7S3/1 | 細砂 | | 無機物多く含む。無機物多く含む(8層) |
| 24 | オリ・ツグ | 25Gv3/1 | シルト | | シルト多く含む。無機物多く含む(8層) |
| 25 | 緑灰 | 10Gv6/1 | 粗土質シルト | | 粘性比較的強い(8層) |
| 26 | 褐モリ~ツグ | 25Gv4/1 | シルト | | 初期~中期を多く含む。常に向かうに長い砂質減少。粘性比較的強い(9層) |
| 27 | オリゾン灰 | 25Gv5/1 | シルト | | 豊富な無機物を含む。粘性比較的強い。稍強度(9層) |
| 28 | 褐灰 | 5Gv6/1 | シルト(粗粒細砂) | | 初期灰土があり(9層) |
| 29 | 灰~明灰~灰 | SV6/1~7.5Gv7/2 | シルト(粗粒細砂) | | 初期灰土がある。上部は無機物豊富。粘性弱い(10層) |
| 30 | 明灰灰 | 7Sv7/2 | | | 向く層多く。上部は無機物豊富で無機物豊富(11層) |
| 31 | 灰灰~土質灰 | NR~c33/3~3/1 | 粗粒シルト | | 向く層多く。中に無機物多く含む無機物豊富(12層) |

下層硫鈣組杏口地帶 斷面注記

| 番号 | 魚 | 鱗 | 種度 | 特徴 | 級 |
|----|-------|----------|------------|---------------------|---|
| 1 | オリーブ仄 | 25GYS/1 | 鰓蓋シルト | 底栖成い、消化物含む(5幕) | |
| 2 | 緑仄 | 10GY6/1 | 鰓蓋シルト | 「5幕」 | |
| 3 | 墨黒 | 10YRS/2 | シント | 消化物含む(6幕) | |
| 4 | 暗青仄 | 5H4/1 | シント | 「6幕」 | |
| 5 | 黒仄 | 5GZ/1 | シント異椎頭絶へ細粒 | (7幕) | |
| 6 | 緑仄 | 5GZ/1 | シント異椎頭絶へ細粒 | 中筋を含む、「7.5幕」 | |
| 7 | 暗緑リバ仄 | 2.6GY3/1 | シント異椎頭絶へ細粒 | 6.4幕シルヌ含め、中筋を含む(8幕) | |
| 8 | 黒 | 5GY7/1 | シント異椎頭絶へ細粒 | 7.0幕シルヌ含め(9幕) | |
| 9 | 黒仄 | 10G6/1 | シント | 消化物含む(10幕) | |
| 10 | 明紺仄 | 5P7/1 | シント異椎頭絶へ細粒 | 火山灰を多く含む(11幕) | |
| 11 | 古仄 | 10NGS/1 | シント | 黒素濃度高(12幕) | |

(財) 大阪府文化財センター発掘調査報告書 第172集

八 尾 南 遺 跡

第1分冊（遺構編）

－大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発行年月日／2008年3月10日発行

編集・発行／財團法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／三星商事印刷株式会社

京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300

